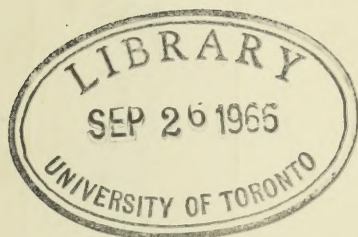
日本戲曲全集
第二十卷

化政度江戸仇討狂言集

東京
春陽堂版

巻頭に載せた「繪本合法衢」の五幕目道具屋の場へ出る五世松本幸四郎の立場の太平次初演の折の錦繪で筆者は初代歌川豊國です。

日本戯曲全集　第貳拾卷　目次

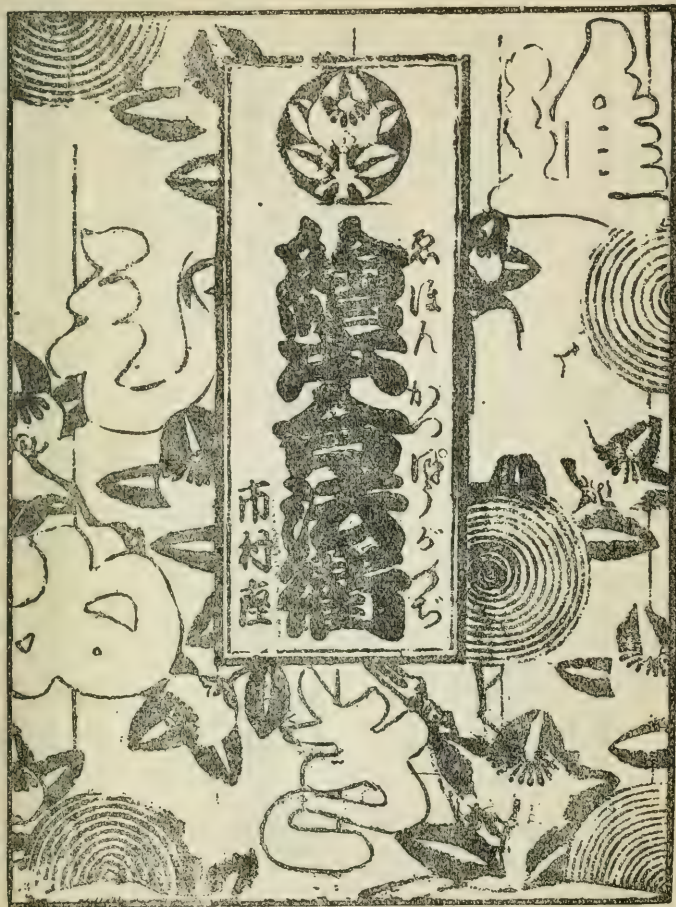
化政度江戸仇討狂言集

浪花の古蹟北國に輪廻もおなじ
仇討を御伽ばなしも左枝の殿の
狩場は廣き國境立場の太平次
うんざりお松が慾と悋氣の辻褄を
袷帆子色模樣おかめ與兵衞が比翼の
袖に飾り粽も下げ帶も時に相生
高橋が妻の皐月に取あへず
古事ながら狂言榮

繪本合法衢

全部十册

初演の繪本表紙

繪本合法衢

序幕

多賀家水門口の場
多賀明神鳥居先の場

役名――高橋彌左衛門。奴、八内。三度飛脚、與五七。守山軍藏。草履取り、團平。駕籠舁き甚八。坂本權平。彦根嘉仲太。黒川兵内。篠原傳五。水茶屋、萬六。松田幸兵衛。妾、お須磨。乳人、樅。妾、お弓。關口多九郎。下部、音平。道具屋娘、お龜。道具屋、與兵衛。佐五右衛門、娘、お米。問屋人足、孫七實ハ與五郎。左枝大學之助。

本舞臺、三間の間、正面に誂らへの水門を取り附け左右に石垣、その上に練り塀、見越しの松を見せたる道具。下の方に誂らへの用水桶、この上に手桶積み重ねあり、幕の內より坂本權平、篠原傳五、忍びの形にて、提灯、拍子木を持ちたる夜廻りの者二人を絞め殺してゐる。時の鐘、蛙の聲にて幕明く。

ト兩人こなしあつて

傳五　流石は下郎。もろい死にざま。

權平　上首尾々々々。萬事は謀し合せし通り。この水門口が兼ねての拔け道。

傳五　此奴らをおッ片附けりやア、誰れも氣のつく事ぢやアない。

權平　隨分ともに、あたりへ心を

傳五　合點だ。

ト思ひ入れあつて、呼子を出して吹くと、バッタリと音して、正面の水門より、關口多九郎、浪人者の形、頰冠りにて、香爐の箱を咥へ、拔刀にて出て來る。兩人思ひ入れ。

兩人　關口どの。

多九　コリヤ。

ト思ひ入れ。此うち、向うより守山軍藏、忍び頭巾の形、龕燈を持ち出て來り、舞臺を見て

軍藏　關口多九郎。兼ねての一儀は

多九　氣遣ひあるな。まんまと手に入る靈龜の香爐。

軍藏　出來た〳〵。我れ〳〵心を盡すも、左枝大學之助さまの計らひ、此たび京都管領より、諸國の大名家々の、貲改めこれある由。當多賀家の家に、傳はるところの管家の一軸、まつたこの香爐を捲きあげて置けば、多賀家の滅亡まのあたり。さある時は、一門たる大學之助どのを家督となすべき一つの手段。

権平　まつたその上に、先達て、多賀の館より伊勢兩宮へ御寄附の金子五千兩、松田幸兵衞持參なす道すから、雲津の宿にて奪ひ取らせしも、大學どのゝ計らひ。それゆゑにこそ、松田幸兵衞はお咎めの身の上。

傳五　これとても、將軍の仰せをもどき、御寄附の金子間に合はぬは、越度の第一。

多九　成る程。何から何まで、殘る方なき御計略。それにつけても先達て、本家多賀の館へ有りつかれし笹山官兵衞、諸事は大學之助どのと內通ある由、拙者へも密かの知らせ。この上はちつとも早くこの香爐を

傳五　先づ、今出川に持ち行き、笹山氏へ手渡しなし、矢張り官兵衞どのより、大學之助どのまで差出せば、我れ我れが出精の屆くといふもの。また貴殿も、これを功に大學さまへ目見得いたさるゝがよからう。

多九　それこそ早速望むところ。命懸けのこの役目、仕負せた上からは、一かどに有り附かにやアならぬ。

権平　兎角、それこれ共に、大學さまの代となれば

軍藏　云はずと知れた活計歡樂。

多九　何はともあれ、ちつとも早く、笹山氏へ持ち行き、密かに密談。ソレ。

ト行かうとして、向うを見て

ヤヽ、アレ、あの灯影は、慥かにこれへ來ると見えるワ。

ト皆々囁き、小隱れする。矢張り時の鐘・蛙の聲にて向うより、中間、箱提灯を持ち、乳人柵、抱へ帶の形にて、出て來る。後より、菖蒲革の侍ひ附いて出で來り、直ぐに舞臺へ來て、以前の死骸を見て、驚ろき

中間　ヤヽ、モシ、人が殺されて居ります。御油斷なされますな。

しが　ヤヽ。

トこなしあつて、落ちてある提灯を取り上げ見る。

こりやコレ、御本家の合印。すりや、この者も、御家來に相違はない。何は兎もあれ、合點のゆかぬこの體裁。正しくこのあたりに曲者が

初演の繪本番附

トあと云ひさして思ひ入れ。此うち權平、傳五、多九郎、軍藏、頬冠りにて顏を隱し、權平、傳五は中間が持ちたる提灯を切り落す。これにて柵、身構へする。供の者「ワッ」と云つて逃げて入る。權平、傳五、これを追ひかけて下座へ入る。此うち多九郎、軍藏、柵へ切りかける。ちよつと立廻りあつて、多九郎、隙を窺ひ、香爐を持つて、一散に向うへ走り入る。柵、心得ぬといふこなしにて、跡を追ひかけ行かうとする。軍藏、柵を引きとめるはずみに、柵、タヂ／＼と後へ寄つて、思はず用水桶へこけかゝる。此うち、軍藏花道へ來て、小柄を拔いて、手裏劍に打つ。途端に、重ねたる手桶に立つて、柵が前へバッタリと落ちる。直ぐに小柄を拔き取り

後日の證據。

ト月影にかざし見る思ひ入れ。軍藏は一散に向うへ入る。この仕組みよろしく、チヨン／＼と道具廻る。

本舞臺。三間の間、上の方、多賀大社と書いたる額を懸けたる石の大鳥居、石の玉垣、石燈籠、所々に取り附け、下の方に、葭簀張りの水茶屋。長床几二三脚直し、臺に一つ竃、茶釜、茶碗、棚、手桶、柄杓、その外一式取揃へあり、爰に萬六、やつし形、亭主の拵らへにて、茶を酌んでゐる。大拍子、馬士唄にて道具とまる。

ト思ひ／＼の旅人、その他の仕出し、大勢出て來て東西へ入る。

ト四ツ手駕籠を擔ぎ出てくる。この駕籠の中に、お龜振り袖、旅の形にて乘つて居る。後より與兵衛、半合羽一本差し、町人旅の形にて三度笠を持ち、脚絆、草鞋の形にて出て來る。後より與五七、三度飛脚の形にて、股引、脚絆、草鞋の形にて、三度笠を持ち、莨をのみながら出て來る。皆々直ぐに舞臺へ來て、駕籠舁き捨ぜりふにて駕籠を下ろす。

萬六　サア／＼、おかけなされませ。お茶をお上がりなされませ。

與五　サア／＼、爰は多賀の鳥居前でござります。せめてこれから鳥居の中までは、お歩きなさるがいゝ。

與兵　それ／＼。其やうに駕籠にばかり乘つてゐては、結句氣が詰まつてなるものではない。ちつと步いて見るとまた氣が晴れてよいぞや。

駕屋　サア〳〵、ちつとおひろひなされませ。
ト云ひながら草履を直す。駕籠の中よりお龜出る。
かめ　そんならこの鳥居が、多賀さまかいなア。
與五　左やう〳〵。この鳥居から多賀さま。爰でゆつくり茶でも上がつて、それからお參りなせれませ。
與兵　それがよい〳〵。サア〳〵、お龜、爰へおぢや〳〵。
かめ　アイ〳〵。
ト與兵衛の側へ腰をかける。萬六、茶、莨盆を運びながら
萬六　サア、お莨盆を上げませう。時に、あなた方は今朝どこからお出でなされました。
與兵　今朝醒ヶ井を遲う立つて來ましたが、女子連れといふものは、どうしても埓の明かぬもの。御亭主、もう何時でござらうな。
萬六　ハイ、もう九ツ半過ぎでもござりませうが、醒ヶ井からなれば、遲くもござりませぬ。して、あなた方は
與兵　イヤ、わしは京都から來ましたが、久しい願ひで、どうぞ伊勢へ參宮して、歸りは美濃路へかゝつて、谷汲の觀音へ參詣し、それから段々この近江路へかゝつて、八景をも見物して、京都へ歸る心でござります。
萬六　それはよいお樂しみでござります。シタガ、お女中連れのお道中は、とんとはかのゆかぬもので
かめ　そんなら、爰はもう、近江の內でござんすかいな。
萬六　近江の段ぢやアござりませぬ。
かめ　モシ〳〵、そんならちつと聞きましたい事がござんす。アノ、清水村といふ村がござんすかいな。
萬六　清水村かえ。ござりますとも〳〵。その清水村といふは、この高宮の宿を出離れて、一里塚から半道ほど參りますと、四十九院村といふがござります。その村と下野村といふ間が、清水村と申しますが、なんぞお知り人でもござりますかえ。
與兵　イヤ、別して近附きといふでもなけれど、その清水村で、庄屋役をも勤めらるゝさうなが、佐五右衛門といふ人はござらぬかな。
萬六　成る程、佐五右衛門といふ人がござります。以前は大庄屋の佐五右衛門といつては、誰れ知らぬ者もござらなんだが、いつの頃よりか、段々に微祿いたされて、今では眞に水飲み百姓でござりますのサ。
トこれを聞いて、お龜、與兵衛顏見合せ、思ひ入れあつて

かめ　そんなら父さん

　ト云はうとするを與兵衛消して

與兵　ハテ、人の行く末といふものは、知れぬものぢやてな。

　ト餘所事に云ふ。此うち、與五七煙管をしまひ

與五　サア／＼、これからわしはお龜さんを連れて、ソロソロ先へ參ります。與兵衛さんは後から、ゆる／＼とお出でなされませ。サア、お龜さん、お出でなさい。

　ト手を取つて行かうとするを、お龜、振り離して

かめ　イエ／＼。わたしや、お前と一緒に行く事は否ぢやわいな。

與五　ハテ、わしが惡い事は申しませぬ。また、主とも離れて歩いてもよいぢやアないかえ。サア、お出でなさいお出でなさい、

かあ　エ、モウ、わたしに構うて下さんすな。わたしや、與兵衛さんの側を離れて、行く事は否でござんすわいな。ほんに、アタすかん。云ふまいと思へども、晝も一日附け廻し、夜は泊ると毎夜毎夜、人の所へ

與五　エヘン／＼。

　ト咳にて紛らす。

かめ　アタ否らしい、モウ／＼、わたしには構うて下さんすな。

與五　モシ、お龜さん。わしもあの京都から頼まれて、爰まで案内して來ましたが、今、與兵衛さんの聞いて居る前で、をかしな事を云ひなさるが、それぢやアわしも立ちませぬ。なんでもこの明りを立てにやアなりませぬ。……とサア、云へば物事に角が立つて惡うござります。さう云はずと、モシ、お龜さん、機嫌直して、サア、平に、お出でなさい／＼、

　ト無理に手を取り連れ行かうとする。與兵衛隔てゝ

與兵　コレサ／＼、與五七どの。それほど否と云ふものを先へやらいでもの事。今また聞けば、毎夜毎夜、泊り泊りで、このお龜へ、誰れやらが這ひ廻つて、主のある者を無理口說き。

　ト與五七へ思ひ入れあつて

サア、こなさんに限つて、其やうな事はあるまいが、長い道中には、泊り／＼で、得て其やうな事もあるぢやげな。それもこれも、わしが附いて居てさへ、其やうな事ぢやもの。まして手離してやつたら、どのやうな事があらうも知れぬ。……サア、一緒に行きませうわいの。

ト與五七これを聞き、腹の立ちたる思ひ入れ。

與五　エヽ、なんの事だ、措かつしやいな。なんだか味に嫌味、辛味をぶち込んで、人を上げたり下ろしたり。いいワ。もうそんな事を云ひ立てられちやア、此方も氣障だ。モウこれまで三度が顏で、雲助、馬士にもビクとも云はせずに來たが、もう否だ。この上は、おれが居ないでもよからうよ。これからは、また其方が手を下げて頼んでも、此方が否だ。なんのこつた。かざツぴいた。お龜さんの、お嬢さんのと、奉れば附け上がり、毎晩々々、夜這ひに來たも凄まじい。サア、駕籠の手合ひも、おらアもう構はないから、存分駕籠賃を引ッたくつて歸るがよい。おれもこれで、さば／＼とした。

ト駕籠舁き兩人に强請れといふ思ひ入れ。

駕甲　それ／＼、わしらもお前の顏だけて、爰までも廉く來ましたが、そんなら爰から歸りませうよ。

駕乙　モシ、旦那、駄賃をお貰ひ申しませう。

與兵　成る程、駕籠の者が歸らうと云ふなら、駕籠は明けてもやらうが、京都から頼んで來た、三度の與五七どのは、爰から歸つても濟むか。

與五　雇はれて來ても、氣に喰はねえから歸るのだワ。

與兵　賃錢は殘らず、取つて置いても

與五　此方が否だ。

駕乙　モシ、とうぞ駄賃を早く下さいましな。

ト與兵衞、少し急いたるこなしにて

與兵　今、勘定してやるわえ。もう斯うなつては、三度も何もいらぬ。人も頼まぬ。

ト云ひながら、懷中より二朱銀を一分出して紙に包み、

ソレ、醒ケ井から高宮まで、四里足らず。一貫二百といふ極めなれど、酒手なしに、ソレ、取つて置きやれ。

ト駕籠舁き取つて見て

駕甲　モシ、こりやア、たつた一分かえ。棒組、呆れたものだな。

與兵　オヽサ。一貫二百の所へ、一分やるから、云ひ分はあるまいが。

駕甲　モシ、旦那、よくお積りなすつて御覽じまし。米の飯を食ふ野郎が二人、汗水になつて、四里足らずでも、二貫や一貫取つて商賣になるものぢやアござりませぬ。さう恍けずとも、極めの通り、拂つておくれなされませ。

與兵　一貫二百と極めたによつて、酒手無しに一分やらう

と云つたが、そして、いくら寄越せと云ふのだ。
駕甲　知れた事サ。四貫八百だ。
與兵　どうしたと。
駕乙　なんでも極めの通り、引ッたくれ〱。
與五　ハア。こりやア三度の與五七の肩を持つて、わいらは足弱づれを、附け込んで強請るのだな。
四人　強請るとは、なんの事だ〱。
與兵　四里足らずの所を、四貫八百と極める馬鹿者があるものか。一貫二百を四貫八百だと云ふから、物ねだりだと云つたが、誤まりか。
兩人　何がどうしたと。
かめ　ハテ、與兵衛さん、ようござんすわいな。ちつとの事なら、よいやうにしてやらしやんせいな。
與兵　なにサ、打ッちやつて置きやれ。癖になるワ。
與五　癖になるも凄まじい。今までおれが庇で、道中をして來たぢやアないか。いゝかと思つて
兩人　サア、駄賃を、拂つてもらはう〱。
與五　思ひ入れ、引ッたくれ〱。
與兵　引ッたくれとは何事だ。もう料簡がならぬわい。
兩人　こいつは面白い。相手になるべい。サア、どうともしろ〱、

ト與五七、駕籠舁き、與兵衛へ體を摺りつける。與兵衛、口惜しき思ひ入れ。これをお龜留めて居る。萬六も立ちかゝり、捨ぜりふにて留めて居る。此うち大拍子になり、向うより八内、旅奴の形、脚絆、草鞋、三尺帶の形にて出て來る。後より孫七、脚絆、草鞋、小揚げの形にて、八内が割掛けの荷を肩へ掛け出で來り、この體を見て、八内より先へ駈けぬけ、舞臺へ來て、與五七を取つて投げ、駕籠舁き兩人を散々に打ちのめす。お龜、嬉しき思ひ入れ。與兵衛も氣味よきこなし

孫七　うぬら、この往還で旅人衆を、なんだと思つて手籠めにするのだ。この上にも四の五と吐かすと、叩き殺すぞ。
兩人　アヽ、こりやア間違ひだ〱。料簡さつしやい〱
與五　アヽ、痛い〱。なんでおれを爰へ投げやアがつた。これぢやア、濟まないぞ〱。
孫七　コレサ〱。誰れがこなたを投げるものだ。ツイ今のどさくさの時に、分ける張合ひで、こなたがそこへ躓いたものよ。そして、見れば、貴様はいつも、この海道で見る顏だが、オヽ、それ〱、三度の衆だの。

八内　オヽ、それ〳〵。誰れだと思つたら、三度の與五七だの。
與五　オヽ、お前は守山軍藏さまの御家來、八内さまかえ。そして僅かな荷を持たせて、どこへござりました。
八内　イヤ、おれも旦那の急用で、今朝長濱まで行つたが、歸り道でこの男が、どうぞ僅かな酒手で、これを持つて行きませうといふから、おれも施し心で、爰まで持たせて來たが、なんだかをかしなこの場の樣子。コレ、小揚げどの、こなたも中へ入つた不肖だから、この男も立つやうに、しらをつけてやるがよい。
孫七　畏まりました。あなたもお待ち遠でござりませうが、ちつとのうち。
八内　イヤ〳〵、おれは爰まで來りやア、べん〳〵とこの裁きを見ちやア居られない。旦那も殿のお供で、この多賀へござると聞いたによつて、先へ行つて待つてゐにやアしくじる道理だ。ドレ、荷物を此方へ寄越しやれ。駄賃は遣つて置いたよ。ドレ、行くべいか。
ト獨り言を云つて鳥居の内へ入る。
與五　なんの事だ。あの八内にやア、狐でも附いたやうだ。それはさうと、中へ入つた小揚げ、おぬしも懸り合ひだ。どう方を附けようと思ふのだ。
孫七　ハヽヽ。なんのわたしが懸り合ひな事があるものでござります。畢竟通りかゝつて見たところが、どうか旅の人の難儀な樣子と見受けたによつて、駕籠の手合ひと、こなさんが一つになつて、兎やかく云ふやうだから、マア、いはゞ仲裁人といふやうなものだが、わしも口を出した不肖だ。此まゝでも置かれまい。時に旅のお方、これはマア、どういふ事の起りでござりますな。
與兵　イヤモウ、最前より段々深切なされ方、忝なう存じまする。元はといへば、今朝醒ケ井より高宮まで、此方では一貫二百と極めた駕籠賃ゆゑ、それも爰で歸らうといふゆゑ、酒手ぐるみと一分やつたところが、四貫八百ぢやと、餘りな事を申しますゆゑ
孫七　ようござります。解りました。して、このお飛脚どのはえ。
與兵　サア、あの人も京都より、頼んでは參つたが、ちと譯あつて、此方も彼方も否になりまして、是非なく爰から別れる積りなれど、それを根に持つたやら、なんのかのと云うて
孫七　サヽ、ようござります、それも樣子が知れました。

して、主の方に勘定の懸り合ひはござりませぬか。

與兵 そりやモウ、京都にて、皆拂うて來ましてござります。

孫七 成る程。そんならこなさんの方に、何も云ひ分は無い筈だ。又、大金を取つて京都から、雇はれて來たお飛脚が、先々まで送り屆けもせず、爰で別れるさへあるに、まして足弱を連れてござるを見込んで、今のやうに駕籠の者と一緒になつて、こづき廻しても事が濟むか。

與五 エ、。

ト悄りする。

孫七 又、駕籠の手合ひも、一貫二百と極めたところへ、一分道らつしやるのを、有り難いとは思はないで、なんだ、四貫八百寄越せと云つたのか。

兩人 サア。

ト氣味の惡きこなし。

孫七 いよ〳〵、四里足らずの道を四貫八百取れば、おれもこれから二人を連れて、問屋場へかゝつて仕樣がある。どうしても、四貫八百だと云ひ張るのか。

ト與五七、氣味惡きこなし。

與五 なにサ〳〵、それも今、わしが云ひ聞かせてゐるところでござります。一貫二百の所へ一分下さればよい旦那サ。それだによつて、足許の明るいうち、ナ、ソレ、矢ッ張り一分取つて、早く爰まで、ナ、ソレ、行くがよいぢやアないか。

トいろ〳〵こなし。駕籠舁き思ひ入れあつて、以前の一分を取つて

駕甲 左やうサ。酒手なしの一分下さるとは、有り難うござります。

駕乙 ハイ〳〵、左やうなら、お貰ひ申しますでござります。

與兵 そんならそれで、云ひ分は無いのか。

兩人 どう致しまして。

萬六 サア、それでよし〳〵。イヤ、わしも見世の先で、ひよつとどんな事でも出來ようかと、大きに案じましたが、これで落ちつきました。なんとこれから、わしも一緒に、あのいつもの田樂で、わつさりとやりませうか。

與五 それがよい〳〵。なんだかをかしな心持ちになつて來た。サア〳〵、駕籠の手合ひも歩ばつしやい。歩ばつしやい。

駕甲 それ〳〵。こんな所は、早く切り上げるがよい。

駕乙　サア、ござりませ。
與五　サア、來やれ。
ト大拍子になり、萬六先に、與五七、駕籠舁き兩人、孫七を見て、氣味惡さうに、おづ／＼足早に鳥居の内へ入る。お龜思ひ入れあつて
かめ　ほんに、どなたかは存じませぬが、段々有り難う存じまする。ほんに、モウ、どうなる事かと、今に閊へが下からぬわいな。
與兵　さうであらう／＼。よい所へ主がござつて、思はずわしも心持ちを直しました。
孫七　なにサ、此やうな事はいくらもござります。時に、あなた方は、只今仰しやつたは、慥か京都の御出生のやうに承りましたが、左やうでござりますか。
與兵　イヤ／＼、京生れではござらねども、當時は京都にて、道具商賣を、致す者でござりまする。
孫七　京の御出生でなく、當時は京都で、道具商賣をなされまするを聞いては、ちとどうやら
ト思ひ入れあつて
して、あなた樣の御生國は、どちらでござりまする。
與兵　サア、生國は、矢張りこの近江でござりまするが、仔細あつて、幼少より、京都へ養子に參つたゆゑ、只今は京都に住居は致すが、生れ故郷といふものは、懷かしいものでござりまするて。
トこれにて孫七、思ひ入れあつて
孫七　そのお話しにつきまして、近頃粗相な申しやうではござりまするが、もしや、あなたの御幼少の時のお名は孫三郎さまとは仰しやりませぬか。
與兵　成る程、その孫三郎でござりまするが、どういふ事で、幼名を
孫七　存じませいでなんと致しませう。私しめは、あなたの御惣領、瀨左衞門さまに御奉公いたし、御懇になりました與五郎と申す者でござりまするが、瀨左衞門さまには、聊かの事にて、勘氣を蒙むり、只今にては誠にその日稼ぎ、小揚げに雇はれ、又は駕籠にも雇はれ、やうやう煙を立て、命を繫ぎまするうち、日頃兄御樣のお話しに、承りましたあなたの事、京都にも、道具商賣なされまする、與兵衞さまとばかり存じましたゆゑ、町所も知れたなら、早速お尋ね申さうと、思ひ詰めて居りました。念が屆いて、今日不思議にお目にかゝりました。此やうな有り難い事はござりませぬ。もうこの上は他く

までも、私しがお供いたしませう程に、必らずお案じなされますな。

與兵 ハテサテ、それは不思議な事。して、今の住居は。

孫七 イヤモウ、お恥かしい住居で、お目にはかけられませぬが、これより少し離れて、淸水村と申す所でござりまする。

ト お龜こなしあつて

かめ そんならお前は、その淸水村に、お出でなさんすお方かいなア。

孫七 左やうでござりまする。……モシ、與兵衞さま、あの娘御様はな。

與兵 サア、これも京都の道具屋へ、養女に來た、お龜といふ者ぢやわいの。

孫七 成る程、かねて御養子合せのお話しでござりました。すりや、あなたがお龜さまと申しまするか。

ト 孫七こなし。

かめ ほんに、初めてお目にかゝりましたが、不思議に斯う落ち合ひまするも、どう知る人に逢ふも知れぬものぢやわいな。

孫七 左やうでござりまする。此やうにお目にかゝりました上からは、ちつと外に、私しも、お聞き申したい事がござりまするが、して、あなたは何れに御逗留なされて

ト 問ひかける所へ、萬六走り出て來り

萬六 コレ〳〵、小揚げの人。ちつとばかりの荷だが、鳥本まで持つて行つてもらはねばならぬ。ちよつと來て下さい〳〵。

ト 引ッ張る。

孫七 モシ、わたしはちつと爰に、お話しがあつて

萬六 ハテ、ちよつくり持つて行つて下さいな。

孫七 ハテ、そりや困つたものだ。モシ、あなた方、お聞きの通りでござります。何を申すも、商賣づく。左やうなら、これでお別れ申しませう。

與兵 そんなら又、緣あらば逢ひませう。與五郎どのとやら

孫七 隨分ともに、御道中

萬六 ハテ、歩ばつしやいな。

ト 大拍子になり、無理に孫七を引ッ張り、鳥居の内へ入る。與兵衞、お龜、捨ぜりふにて莨のんでゐる。誂らへの三味線入り大拍子になり、向うより左枝大學之助、深編笠、袴羽織、大小の形にて出て來る。後より

妾お弓、同お須磨、着流しの形にて、日傘をさして出てくる。後より乳人柵、この後より守山軍藏、大小、袴ばかりの形。彦根嘉仲太、黒川兵内、袴、大小の形にて出て來る。後より團平、奴、草履取りにて出てくる中間一人、茶辨當を擔ぎ、陸尺二人、忍び駕籠を擔ぎ出て來て、皆々花道にとまる。

軍藏　殿へ申し上げます。最早、多賀の鳥居間近く、參りましてござりまする。

しが　今日はいつにない殿樣のお思ひ附き、あなた方にもちつとはお氣が晴れましてござりませうな。

ゆみ　思ひもよらぬ今日の仰せ。お須磨さまよりお文を下されましたが、ほんに誠とは思はなんだわいな。

須磨　それぢやというて、御性急な殿樣ゆゑ、お支度が間に合はいでは、わたしまで御不興受けるゆゑ、大抵心使ひな事ぢやなかつたわいな。

嘉仲　成る程、殿の日頃の御氣質に事かはり、女中方をお連れなされて、忍びながらの御遊興とは、又一つの景物でござるわえ。

兵内　左やう。殊に、片身恨みのないやうにと、お二人ながら召し連れらるゝとは、如何にも和らかな御趣向でござるて。

團平　お忍びとは申しながら、往來の者ども、粗相があつては相濟みませぬ。下郎めお先へ參つて、村役人どもへ申しつけませうか。

大學　イヤ／＼、待て／＼。それには及ばぬ。今日は妾を召し連れ、忍びの遊興。少しの粗相は見遁がしても苦しうない。

ト此うちに向うを見て

なんと、皆の者、あれを見い。所に見馴れぬ風俗。夜目遠目とは申しながら、甚だ美しく見ゆる。サア／＼、あれへ參つて一服せうか。

軍藏　イカサマ

一同　よろしうござりませう。

大學　サア、參れ。

ト また鳴り物になり、皆々舞臺へ來て、床几へ腰をかける。與兵衛、お龜、ウロ／＼してゐる。團平立ちかかり

團平　茶屋の亭主は居らぬか。亭主々々。

與兵　イヤ、只今、ツイそこへ參りましたさうにござりまする。

軍藏　床几を借りうけ、お毛氈を
兵内　畏まりました。
ト毛氈を出し、床几へかけ、大學之助、腰をかける。
嘉仲太、銀の茶碗、茶臺にて、茶辨當より茶を汲み、
大學之助へ持ちゆく。大學之助、お龜を見て
大學　軍藏。
軍藏　ハツ。
大學　なんと美なる者ではないか。
軍藏　左やうでござりまする。
ト此うち與兵衞、お龜囁き合ひ
與兵　サア〳〵、そろ〳〵とお參り申さうか。
かめ　それがよいわいな。
ト行かうとする。大學之助、思ひ入れあつて
大學　ソレ、留めい、
軍藏　ハツ。……コレ〳〵旅人、殿よりお聲がかゝつた。
待て〳〵。
與兵　へ、イ。
ト氣味の惡きこなしにて、下の方に扣へる。
大學　コリヤ〳〵、町人。何も氣遣ひな事ではない。見れ
ば、褄はづれと申し、賤からぬ姿ぢやが、其方達は、供

をも連れず、いづくより參つた。
與兵　へイ〳〵、私しは京都近在の者でござりまする。
大學　京都ぢやと申すか。道理こそ、あてやかなる女子と
見た。して、わいら二人は、女夫づれと申すやうな事か、
又は兄妹づれと申すやうな事か。
與兵　ハイ。
トつかへ、いろ〳〵こなしあつて
兄妹でござりまする。
大學　ナニ、兄妹と申すか。……それは重疊。軍藏、ちよ
つと參れ。
軍藏　ハツ。
ト大學之助の側へ來る。大學之助、軍藏に囁く。軍藏
呑みこんで
畏まつてござりまする。
大學　荒氣に申すな。
軍藏　ハツ。
ト與兵衞の側へ來て
さて、お旅人、外の事でもない。手短かに云へば有り難
い事だ。その連れて來たお娘が、殿のお目にとまつたと
いふものだ。そこで、近頃さしつけがましい事だが、妾

に上げんかと仰せらるゝ。金銀は望みほど遣はすとある、有り難い御意だが、なんと、その娘を上げる心はござらぬか。

ト與兵衞これを聞いて恟りして、お龜と顔見合せ、思ひ入れあつて

與兵　それはハヤ、有り難うはござりまするが、國許に親どもござりますれば、先づ、一旦歸りました上、親どもへその趣き、申しては見ませうが、なか〳〵堅ましい親どもでござりますれば、てかけ、妾などにはどうも

大學　てかけ、妾が否とあらば、身が妻に致さう。

兩人　エ、。

ト驚ろく。

大學　とても、身が領分へ足を踏み込んだ女は、目にとまるが最後、其まゝには歸さぬ。親どもが不得心なら、此方から申し遣はさうか。

兩人　サア。

關平　返事次第で、浮み上がるといふものだワ。

嘉仲　その上、親仁の一人や二人、お飼ひ殺しにもなさるるワ。

兵内　そしてお金は、いくらでも望み次第。

軍藏　キリ〳〵返事を、申し上げるがよいわサ。

與兵　イエ〳〵、そのお金に望みは毛頭ござりませぬ。もう斯うなりましたからは、なんと隱しやうはござりませぬ。有やうは、この女には、云ひ號けがござりまする。

大學　ヤア、今となつてその身を遁がれんと、武士を欺むく僞はり虛言。して、その云ひ號けの男は何者だ。

兩人　サア。

大學　眞直に申せ。何れの領分の者にもせよ、此方より申し達して、早く手に入れて見せるワ。サア、これにも返答があるか。どうだ。

ト與兵衞、ワナ〳〵つかへる。お龜、いろ〳〵こなしあつて

かめ　イエ〳〵、そりや御無理といふものでござります。どのやうに仰しやつたとて、肝心の私しが否でござります。それといふも、二世と連れ添ふ可愛い男がござりまする。アイ、しかも云ひ號けも疾に濟んで、每夜々々添ひ臥し致しまする。男のあるもの、無理に兎やかう仰しやるは、そりやお武家樣にも似合ひませぬ。そりや間男も同じ事。その上に、わたしやお屋敷方は嫌ひでござりまする。モウ〳〵、必らずお留めなされて下さりますな

サア、與兵衛さん、ござんせいな。
ト與兵衛を連れて、行かうとする。大學之助、ツカツカと來て、お龜を捕へ
大學 ヤア、女郎と思ひ容赦なせば、開いたまゝの雜言。この上は、否と云はうが、應と云はうが、身が手づから引ッ立てる。サア、來い。
ト引ッ立てうとする。
與兵 モシ〱。マア〱、お待ちなされて下さりませ。
ト取りつくを振り放して
大學 エヽ、面倒な。屋敷へ引ッ立てろ。
嘉仲 ハッ。
ト兩人、與兵衛を引ッ立てる。大學之助、お龜を引ッ立て
大學 サア、この上は、人手は頼まぬ。大學之助が自身に連れて行く。女め、うせう。
ト無理に引ッ立て、花道へかゝる 大拍子になり、向うより高橋瀨左衞門、繼ぎ上下、大小、一文字の菅笠後より會平、奴の形にて、持ち草履を持ち、出て來る大學之助と行き合ひ、この體を見て
瀨左 大學之助さま。
大學 瀨左衞門か。
瀨左 先づ〱、あれへ。
ト舞臺へ押し戻す。與兵衛、瀨左衞門を見て
與兵 ヤア、あなたは
ト云はうとするを、瀨左衞門思ひ入れあつて
瀨左 イヤサ、存ぜぬ。ナ。……ソレ、當國の御分地、左枝大學之助さまと存ぜぬゆゑ、往來にて無禮いたした者か。粗忽ら奴め。身が參りかゝつたが、其方どもの仕合せ。殿へお詫びは致してくれうワ。
大學 イヤ〱、瀨左衞門。無禮緩怠でないぞ。
瀨左 して、彼れが越度はな。
大學 餘の儀でも無い。只今この女、大學之助が氣に入つたゆゑ、身にくれいと申すに、彼れこれ申すのみならず、某が事を、密夫なりと恥ぢしめたる一言。密夫ならば、どこまでも密夫になつて、身が召し連れようと申すのぢや。
瀨左 成る程。殿へ對し、女が申し過しは、重々憎き奴なれども、取るに足らざる女の事。當國の御分地なればとて、殿を見知らうやうもござらず。兎角、殿の氣隨に任せ、壁に馬を乘りかけたる無理所望。ましてや、連れ添

ふ夫あれば、承知いたさぬも、尤もの儀と存じまする。
大學　イヤサ、瀨左衞門。他國の者へ道理を附け、當分地たる身が誤まり、申し立つるか。
瀨左　こりや、殿のお詞とも存ぜぬ。身不肖なれども、御本家の補佐仕る高橋瀨左衞門。いかみましたる政事は仕らぬ。嘆かはしきは、他國の女を理所望あつて、不義密夫の汚名を蒙むられましても、多賀家のお名は罷り出ませぬか。
大學　ヤ。
瀨左　こりや、下世話に申す法外と申すもの。ハヽヽヽ取るに足らざるこの場の始末。こりや全く御酒の上のたはれ言。町人にも、さぞ心遣ひであらう。
曾平　よい折から、瀨左衞門さまのお詞一つで相濟んだは、その身の仕合せ。
瀨左　サ、、勝手次第に、この場を早く、何れへなりと參るがよからう。
大學　でも、みす／＼
ト思ひ入れ。瀨左衞門隔て、
瀨左　イヤ、この上ともに、思し召しの儀がござらば、御自身の御差配はお扣へ下され、その役々へ仰せつけらるるが、殿の御行跡。ちとお愼しみが肝要かと存じまする。
大學　エヽ、いま／＼しい。……惡い所へ高橋が來て、遊興の妨げ。もう爰には居られぬ。サア、皆、多賀の別當方へ。
瀨左　お供召されい。
女皆　畏まりました。
大學　とはいへ
ト刀へ手をかける。瀨左衞門これを見る。大學之助ちやつと隱す。
瀨左　然らば大學之助さま。
大學　瀨左衞門。重ねて逢はう。
ト大拍子になり、大學之助こなしあつて、鳥居の中へ入る。後より皆々附き添ひ入る。瀨左衞門、與兵衞、お龜、曾平殘る。あと合ひ方。與兵衞あとを見送り
與兵　兄者人、久々にてお目にかゝり、御堅固の體、喜ばしう存じまする。
かめ　エヽ、そんならあなたが、常からお前のお噂ある兄上、瀨左衞門さまかいなう。
瀨左　すりや、あの者が、其方の養子合せとやら、承つ

た道具屋の娘、お龜と申すのか。

かめ　左やうでござりまする。もと私しは、此お國にて、庄屋役仕りました、佐五右衞門が惣領。譯ござりまして、藁の上から京都へ養子。孫三郎さまも、只今では、親御のお名をお繼ぎなされ、與兵衞さまと申しまする。御縁は切れてあるとはいへど、この上ともに、ハイ〳〵お目かけられて下さりませいな。

瀬左　成る程。以前庄屋役いたしたる、佐五右衞門が娘といふ事は、ほのかに承つたが、まだ外に妹があるぢやないか。

かめ　左やうでござりまする。お米といふ妹があるとばかり、私しも音信不通ゆゑ。ついに逢うた事もござんせぬわいな。

與兵　お顏は知らぬはわしとても、中兄の彌十郎さま、お國詰めゆゑお顏も知らず。それに引きかへ、今のマア、大學さまは、よう京都の家來筋、太平次に似てゞはないか。

かめ　ほんに、さう云ひなさんすりや、意地の惡さうな顏附きが、大學さまとやらと、此方の太平次と、よう似てあるわいな。して、お前は、彌十郎さまを御存じなく、どうして又、瀬左衞門さまを

曾平　そりやその筈の儀でござります。いつぞや旦那上京の砌り、大佛前に御逗留。その折、下郎が道具屋のお宅を尋ね、御兄弟の御對面。ア、よいお次手でござります。どうぞ御次男、彌十郎さまにも

瀬左　ア、イヤ〳〵。當所にうか〳〵、逗留いたすは不孝の至り。親御といふは母御ばかり、年寄り一人殘し置いては、世間の手前、近々、お上の御用にて京都へ行く筈その節、彌十郎を遣はす程に、ゆる〳〵と對面しやるがよい。

かめ　成る程。わたしも、よい次手とはいふものゝ、物堅い父さんの事、妹に逢ひたうても、今の母さんはお年若。連れ子もあり。こりや、わたしも、お米に逢はずに歸りませうわいな。

與兵　イカサマ。それも増しかえ。ひよつと逢うても、別るゝ時が惡いもの。ナウ、曾平どの。

曾平　左やうでござりまする。えて、お別れが惡いものでござりまする。イヤ、それは格別。孫三郎さまの、只今の御商賣は道具屋。……モシ、お旦那、この程紛失いたしたる、彼の一品の

瀬左　成る程。こりやよい所へ心附いた。與兵衞、其方に
賴みたいは、コレ、
ト紙入れの間より繪の香爐の繪面を出し
お家の重器、靈龜の香爐。おてまへ事は、今の世渡り道
具商賣。これに似寄りの香爐出でなば、詮議してはくり
やるまいか。
ト渡す。與兵衞取つて、よく〳〵見て
與兵　すりや、この通りの香爐が
瀬左　多賀のお家の重器といひ、殊に弟彌十郎が預かり
なるが、この程紛失。荒立てゝはと、事穏便に詮議最
中。
與兵　畏まりました。彌十郎さまのお預かりの品といひ、
寶の香爐とあるからは、手馴れた業の道具見世。似寄り
の品と見ましたならば
瀬左　必らずともに詮議を賴む。コレ、行くへ知れねばお
家の大事。
與兵　キッと詮議を仕りませう。
瀬左　ア、弟は持つべきもの。
かめ　兄上樣
瀬左　嫁女、
曾平　隨分御無事で
與兵　其うちお目に
ト行かうとして、穿いたる中ぬきの鼻緒切れる。瀬左
衞門が持つたる扇の要拔け、バラ〳〵となる。各々思
ひ入れあつて
こりやどうぢや。今がた下ろした草履の鼻緒。
かめ　爪づきもせず、切れたといふも
瀬左　行く末祝ふこの扇、要の拔けたも
かめ　ア、心がかゝりな。
與兵　草履と
瀬左　扇の
ト兩人顏見合せ、思ひ入れあつて、與兵衞、腰の扇を
取り
與兵　見苦しけれど
ト差出す。瀬左衞門取つて
瀬左　ア、心利いたる
トこなしあつて
家來、草履を。
曾平　はッ。
ト與兵衞へ直す。

瀬左　行きやるか。
與兵　ハイ。
ト唄になり、與兵衞、脊へ草履を穿き、お龜を連れ、思ひ入れあつて、向うへ入る。瀬左衞門見送り
瀬左　ア、物の知らせか。
曾平　エ。
ト顏見合せ
瀬左　ア、、役にも立たぬ
トあざ笑ふ。大拍子になり、向うより松田幸兵衞、深編笠、羽織、袴、大小にて、草履取り一人附き出で來り、直ぐに舞臺へ來て
幸兵　それにお居やるは、瀬左衞門どのではござらぬか。
瀬左　さうお云やるは
幸兵　松田幸兵衞めでござる。
ト編笠を取る。長髮の體。
瀬左　御閉門の幸兵衞どの、未だ金子の手がゝりとてもござらぬかな。
幸兵　左やうでござる。いつぞや伊勢兩宮へ、御寄附の金子五千兩、雲津の驛にて、盜賊の爲に奪ひ取られ、役目を受けし拙者が越度。然れども、もし斯樣な事もあらんかと、一兩々々、向う梅の極印ござれば、これを證據に詮議と存じ、當社へ日毎の神詣で、瀬左衞門どの、この盜賊に、其許、なんと思し召さるゝな。
瀬左　されば、誠の盜賊が致したとも存じられぬ。これには正しく
幸兵　サ、世の諺にいふ如く、盜人を捕へて見れば
曾平　もしや、御家門
瀬左　ア、コレ、音高し。密かに〳〵。
ト思ひ入れ。大拍子になり、軍藏出で來り
軍藏　瀬左衞門どの、まだこれにござるか。見ますれば、御本家多賀の御家中幸兵衞どの。御用金紛失に附き、御遠慮と承つたが、ハテサテ、氣の毒千萬な儀でござる。
幸兵　御挨拶忝なう存じまする。
曾平　イザ、お旦那。幸兵衞さまと御同道なされ、御口談は神職方にて。
瀬左　然らば、松田氏。
幸兵　瀬左衞門どの、御同道仕らう。
瀬左　軍藏どの。其うち御意得ませう。
曾平　ドリヤ、お供いたさうか。

ト大拍子になり、瀬左衞門、幸兵衞、倉平、鳥居の內へ入る。軍藏殘り、あたりを窺ひ、小石を取つて左右へ投げる。チヤツパ入りの神樂になり、下の物蔭より關口多九郎、香爐を持ち、窺ひ出る。鳥居の中より大學之助、嘉仲太、兵內、團平、附き出て來る　軍藏見て

軍藏　關口多九郎。

大學　すりや、あの者が

多九　御同心仕つたる、多賀俊行の家中、笹山官兵衞が身寄りの拙者。卽ち御前へ、官兵衞方より內意の御狀、持參いたすが何より證據。イザ、御披見下さりませう。

ト一通を出す。大學之助開き見て

大學　汝それにて讀みあげい。

ト多九郎へ渡す。

多九　ハツ。……「兼ねてお頼みの靈龜の香爐、盜み取らせ猶又、當家の一軸も、油斷なくお手に入れ申すべく候ふ」……宛名は憚りござりまする。

大學　して、笹山官兵衞は、當時都に、

團平　殿の御用で上京なし、旅宿は慥かに今出川。

多九　首尾よく奪ひしこの香爐。御前のお目鏡淨玻璃の、鏡山より奪ひしまゝ。似せか、眞か、お目利きあつて。

大學　その品これへ。

ト前へ持ち行くを、蓋を明け、よく／＼見て

出來した。眞の靈龜の香爐。近々管領、內見の時に至つて紛失なさば、俊行どの、越度となり、家の寶を失ふ高橋、重き罪科にあふは必定。その香爐は、暫らく其方に預け置かん。

多九　しかと拙者が、預かり奉つてござりまする。

ト香爐を受取る。この時、倉平出かゝり、立ち聞きゐる。大學之助、懷より一通を出し

大學　認め置いたるこの書翰は、笹山方へ遣はす密書。京都の旅宿へ、暮れまでに屆けよ。心得たるか。

多九　笹山どのへ、しかとお屆け申しませう。取分け拙者は先達て、兩宮寄附の五千兩、道にて密かに盜み取らせ大學さまの大望の入用。卽ちその金子のうち、コレ。

ト懷より財布を出し

御物入りは多賀家のこの金。これにて諸事まじくなふはなんと忠心者でござりませう。何は兎もあれ、大切なるその香爐。

ト受取つて懷中する。

曾平　さてこそ香爐は大學さまの
　ト つか〳〵と出る。
兵内　ヤ。わりやア慥かに
蕊仲　高橋の下部だな。
大學　後の災ひ。者ども、計らへ。
兩人　ハ、ツ。
曾平　その香爐を
　ト 多九郎を引きつける。立廻り。懐中より以前の密書を落す。兵内、曾平へ組附くうち、多九郎香爐を持ち向うへ一散に入る。曾平、立廻り中に密書を拾ひ
證據の一通。
兵内　それを
　ト かゝるを突きのけ
曾平　イデ、追ッかけて。
　ト、ゴン〳〵になり、密書を持ち向うへ入る。兵内も曾平が跡を追ひかけ入る。大學之助、跡を見送り
大學　心憎きは今の下部。軍藏參つて首にせい。
軍藏　ハッ。
　ト 行かうとすると、乳人 柵、ツカ〳〵と出て
しが　軍藏どの。待つた。

軍藏　柵どの。なんで身共を
しが　お止め申すはこの一品。これ御存じでござりまするか。
　ト 小柄を見せる。軍藏、思ひ入れあつて
軍藏　そりや御前より拜領せし、御紋散らしのその小柄。
しが　この程御本家多賀のお館、裏門通りの水門にて、怪しき者が打つたる小柄。正しく香爐紛失も、あなたはお覺えでござりませう。
軍藏　ヤ。
　ト ぎつくりする。
しが　小柄は御前の御所持といひ、拜領ありしは軍藏どの
こりや其許の正しく仕業。……サア、荒立てては御前のお名の出る道理。存じた者は柵一人。モシ、御前樣。
　ト 小柄を差出し
何卒お心改められ
　ト 云ふを、大學之助、物云はずに、小柄を取つて刀へ差し、扱討ちに柵を切り下げる。
こりや、我が君樣、お手討に。
大學　大事を知つたる乳人柵。不便ながらも
しが　エ、、あなたは如何なる

大學　ト立ち寄るを切り倒し、止めを刺し
軍藏　家來、乘り物。
　ハツ。……お乘り物。
　ト神樂になり、軍藏、血刀を拭ふ。下座より侍ひ、乘り物を吊らせ、お弓、お須磨附き出て來り、この體を見て
ゆみ　ヤヽ、柵さんのその死骸。
須磨　こりや何者がむごたらしく
兩人　モシ、御前さま。
大學　その柵は予が手討ち。
兩人　エヽ。
大學　不便をくはへるわいらでも、心に違へばいつ何時、予が手を下ろしてこの通り。心を附けて奉公いたせ。
　ト白刃を納める。
ゆみ　エヽ、恐ろしい御前樣。
須磨　いとしほなげに柵さん。
團平　ハテ、役にも立たぬ女中方。口出しあつてお相伴なされぬ用心。して、この死骸は。
大學　駕籠にて邸へ。
團平　ハツ。

　ト柵の死骸を乘り物へ入れる。
嘉仲　然らば拙者は、死骸の見送り。
大學　わいらも共々野邊送り、手討ちの女が供いたせ。ハヽヽヽヽ。
女二　エヽ、お情ない。
軍藏　立たつしやい。
　ト三重になり、乘り物を先へ立て、女達に侍ひ附き、嘉仲太附き添ひ向うへ入る。
大學　軍藏はその密書、官兵衞方へ寸時も早く。
軍藏　畏まつてござります。
大學　團平、參れ。
團平　ネイ。
　ト大拍子になり、大學之助、團平を連れ、下座へ入る
　軍藏殘る。引違へて八内出て來り
八内　お旦那、急な御用と仰しやるゆゑ、先刻より待ちましたが、して私しへの御用はな。
軍藏　御用といふは御前より、京都へ火急の早飛脚。この狀箱を今出川、笹山どのまで、合點か。
　ト狀箱を渡す。
八内　心得た。とは云ふものゝ、御樣出立仕る、よろし

く路銀を。

軍藏　そこに如才はあるものか。ソリヤ、僅かの道でも急の御用。路用の金子。

ト内がへより十兩出す。

八内　こりや、小判で十兩　エ、、有り難う存じまする。

軍藏　必らず日限、違へまいぞ。

八内　早速お屆け申しませう。

軍藏　ドリヤ、御前へ參らうか。

ト大拍子になり、軍藏入る。

八内　サア／＼。よい仕事が出來たわえ。この近江より都まで、二十里には足る足らず、路銀は十兩。ア、、流石大學さまは、むづかしやでもお大名だぞ。

ト十兩を數へ居る。矢張り大拍子にて、後へ與五七、一升德利を持ち、出かゝりゐて

與五　コレ、そこにゐるは八内どのか。よい所にゐた。いま裏門で駕籠の奴等に飮まさうとて、酒を取つたが、皆どこへか失せ居つた。サア、一杯きめねえか。

八内　そいつは有り難い。サア／＼、始めたり／＼。

與五　幸ひ爰に茶碗もある。ドリヤ、かツ喰はうか。

トかすめたる神樂になり、兩人床几にかけ、茶碗を取つて酒盛りになる。

八内　コレ、與五七どの、どうだ、歸り仕事でも出來たか。

與五　イヤ／＼、まだよい仕事も見えぬが、なんぼ仕事がよくつても、先刻のやうな夫婦者を連れては、泊りの度毎に夜ツぴての睦言。氣が惡くつて寢られるものぢやアない。

ト飮んで獻す。

八内　さうであらう／＼。して、貴樣は京へ歸るのか。

與五　仕事が見えにやア、今からでも立つ積りだ。

八内　そいつはちつと相談があるわえ。おらア旦那の用で京都の今出川まで行くが、コレ、物は相談、貴樣、この狀を屆けてくれまいか。さうすればおれは助かつて、其うち、鏡の廓へ居續けと出かけるワ。

與五　ハテ、審つた事を云ふが……レコはあるか／＼。

ト仕方して見せる。

八内　有る段か。コリヤ、この位なものだワ。

ト首に懸けたる木綿財布より十兩出して見せる。

與五　イヤア。よい工面だな。

八内　なんと、一兩だが、この狀を屆けてはくれまいか。

初演の繪本番附

與五　屆けて一兩ならば、屆けてやらう。して、先は今出川では

八内　コリヤ〳〵、この狀箱に書いてある。笹山官兵衞といふ多賀の御家中だ。コレ、一兩は現金だワ。

　ト一兩出してやる。

與五　こいつは有り難い。マア〳〵、その狀箱が肝心の代物だ。ドレ、受取らう。

八内　サア〳〵、渡した〳〵。

　ト與五七、狀箱を取つて自分の刀の柄へ括りつけ、一兩取つて懷中して

與五　歸り仕事の出來た祝ひに、おれが奢りだ。サア、もう一杯きめさつしやい。

八内　イヤ〳〵、大きに下された。アヽ、フラ〳〵として來た。コレ〳〵、必らず怠けずに屆けてもらはう。急な用だよ。笹山官兵衞さまだよ。

與五　よし〳〵、承知々々。

八内　さて、今夜はこの金で、鏡山で居續けだワ。

與五　エヽ、有り難いな。

八内　コレ、必らず頼むよ。

與五　ハテ、呑み込んだよ。

八内　ドリヤ、これぎりの飯もりと洒落れようか。

　ト大拍子になり、醉うたるこなしにて、金を見せびらかしながら下座へ入る。與五七殘る。

與五　ハテ、あいつは好い仕事を請合ひ居つた。

　ト立たうとして醉ひたる思ひ入れ

　ハテ、こればかりの酒に廻されたワ。ちつと氣を鎮めて行かうか。幸ひ爰の床几を借りて、ドリヤ、一寢入りして行かうか。

　ト床几へ横に寢る。馬士唄になり。向うよりお米、木綿振り袖、娘の形にて、小風呂敷に包みし辨當箱を下げ出で來り、花道にて

よね　このマア與五郎さんは、なぜに今日は晝飯に歸らんせぬか。さぞひもじからうと、お辨當を持つて來たが、マア、どこに居さんす事やら。早う逢うて、渡したいものぢやがな。

　ト舞臺へ來る。馬士唄になり、下座より旅人二人出て來る。後より、孫七、割掛けの荷物を擔ぎ出て來り

孫七　モシ、旦那、お約束の鳥居前でござりますが、もそつと先まで持たせて下さりませぬか。

旅人　イヤ〳〵、もう爰までゝようござる。それ〳〵、駄

賃が百よ。極めの外に、コレ〳〵、廿四は酒手遣りませう。

ト錢を渡す。

孫七　ハイ〳〵、これは有り難うござります。お前樣、お酒手には及びませぬ。左やうなら、錢だけ持つて參りませうわいの。

旅人　ハテ、爰でようござるよ。さて〳〵、正直な男でござる。オヽ、大儀でござつた。

ト旅人、捨ぜりふにて、荷を受取り、向うへ入る。お米見て

よれ　ヤ、孫七さんかえ。

孫七　オヽ、お米か。何しに來たのぢや。

よれ　サイナア。今朝から駄賃取りに出さんして、晝飯にも戻らんせぬから、父さんも案じてナ、わしが辨當持つて行かうと云はしやんすから、イエ〳〵わたしが持つて參りますると、立場々々を尋ねて來やんした。さぞお前も、ひもじうござんせうぞえ。

孫七　なんの〳〵。今日はよい仕事があつての、晝飯食ふ間もなかつたが、善い旦那のお供して、饂飩を大分振舞はれ、ひもじくもない事よ。

ト二人床几へかける。三味線入り大拍子。

よれ　わたしも今日は、死なしやんした母さんの命日ゆゑ、お墓參りに行くところ、今の母さんが連れ子の里松を連れて、お寺參りに行きたいというてナ、三人連れで墓參りして來やしやんしたわいな。

孫七　イヤモウ、年若ぢやが、あのおわたどのは、ようマア親仁どのゝ氣づまを取つて、わしや其方にも和らかな素直な生れ、とんと、てまへの姉御のやうぢやわいの。

よれ　サア、そのお噂で思ひ出さるゝは、わたしが幼い時別れた姉さん、京の町の道具屋へ養子に行きなさんしたが、久しう便り音信なう、婿といふのも、武家方からの養子と聞く。

孫七　アヽ、コレ〳〵、そんなら何か。京の町の道具屋へ養子に行つた、わが身の姉御は、お龜とはいはぬか。

よれ　アイ、さうぢやわいな。

孫七　道理こそ。……コレ〳〵、その姉御に、逢うたわいの逢うたわいの。

よれ　そりやどこでえ。

孫七　先刻に爰で逢うた、若い女夫の谷汲參り。京の樂と云うたゆゑ、問ひかけて見りや、その若い旦那どのは、

與兵衞といふ道具屋。そのお方がわしの主人、高橋瀨左衞門さまの三人目の弟御、孫三郎さまぢやわいの。

よれ　エヽ。そんなら姉樣のお連合ひといふは、お前の御主人瀨左衞門さまの弟御、孫三郎さまといふのかえ。

孫七　オイナウ、あなたも藁の上から町家へ御養子、音信不通の事なれど、瀨左衞門さまはお逢ひなされた樣子。中兄の彌十郎さまは、今にお逢ひなされぬとは、武家方といふものは、ハテ、物堅いものぢやなう。

よれ　そりやモウ、殿達には有うちなれど、氣強いは姉樣この國へござんしたなら、せめて立ちながらも、便り音信をなさんせぬは、あんまり心強いわいな。

孫七　ハテ、それにも譯があらうわいの。その時分はキツとした庄屋どの。今では淸水村に引ツ越して、平百姓の舅どの。先が知れいで、訪ねて來ぬのであらうわいの。

よれ　其やうな事でもあらうかいな。只氣がかりは、お前は瀨左衞門さまの御勘當、いつマア御詫びが叶ふやら。

孫七　ハテ、女といふものは、何の役にも立たぬ事をクヨクヨと。コレ、そんな事氣に病んで煩らやるな。ヤ、ヤ。

それを案じて居りますわいな。

トお米が側へ寄つて、袖口より手を入れ、背中を撫でる。この時、下の方の與五七、目を覺まし、この體を見て、床几の上にてけなりさうに思ひ入れ。

よれ　イエ〳〵、わたしや煩らふ事ぢやござんせぬが。お前は朝から早うに、草鞋はゞきで徒歩荷物、辛度からうと案じられ、これが一倍苦になるわいな。

孫七　これはしたり。役にも立たぬ事を苦に病んで、コレコレ、必らずまた煩らうてくれるなよ。

よれ　アイ、嬉しうござんす。孫七さん、必らず見捨てゝ下さんすなえ。

孫七　なんの見捨てう。コレ、お米。

よれ　孫七さん、嬉しうござんす。

ト寄り添ふ。與五七これを見て、床几より轉げ落ちる。兩人恟りする。與五七、顏をしかめて

與五　アイタ〳〵。アイタ〳〵、なぜ轉ばしり。これぢやア、濟まないぞ〳〵。

孫七　これはしたり。濟まんというて、何をわしらが、いつこなたにマア

ト與五七を見て

ヤ、わりやア先刻の飛脚ぢやアないか。

與五　オヽ、わりやアおれをよう投げたな。その上に又爰、

で、あの娘とのいちやつきを見たばかりに、床几から落ちたによつて、膝頭を打ちこはしたワ。わいらがしたも同然ぢや。濟まぬぞ／＼。

ト孫七が胸づくしを取る。

孫七　イヤ、この男めは無法な奴ぢや。又しても／＼、見ッともない。放さぬか。

ト取つて投げる。

與五　アイタ／＼。うぬまた投げたな。もう料簡が

ト狀箱の附いたるまゝ刀を拔かうとする。孫七その手を押へる。お米、オロ／＼してゐる。

孫七　エヽ、大それた刃物三昧、放さぬかえ。

與五　イヤ／＼。合點せぬぞ／＼。

孫七　ヤア、危ないわえ。

ト刃物をもぎ取るはずみに、與五七、少し手に疵つく。

與五七、血を見て

與五　ヤア、切つたぞ／＼。コレ、この男めが、切つたワ切つたワ。

ト立騒ぐ。孫七、お米、捨ぜりふにてうろたへる。萬六と、駕籠舁き兩人出て來り

三人　誰れが切つた／＼。

萬六　ヤア、わりやア先刻の小揚げに、飛脚の男。また喧嘩を始めたのか。

駕甲　切つたといふが、疵はどこだ／＼。

駕乙　コレ／＼。どこにも疵が見えぬぞよ／＼。

與五　イヤ／＼、切つた／＼。コレ／＼、しかも疵は大疵だ。

孫七　その疵はどこにある。

兩人　エヽ、そりや猫の引ッ掻いたのか。

與五　措かつしやい、切り疵だ。只は濟まぬぞ／＼。

萬六　それ／＼、僅かでも切り疵だ。こりや只も濟まされまい。膏藥代が物はあるわえ。

よね　モシ／＼、お前さん。金で事が濟みますなら、どうぞよいやうに、計らうて下さりませいな。

孫七　コレサ、お米、打ッちやつて置きやいの。

よね　ハテ、さうぢやござんせぬわいな。

萬六　コレ／＼、疵人々々。こなたは金で扱はゞ、濟ませる氣か。わしも見世の邪魔になるから、仲人に入つて、藥代を取つてやらうが、濟ませる氣か／＼。

與五　成る程、金で扱はば、隨分濟ませてやらうワ。

萬六　それは忝ない。コレ／＼、若い人、金で濟まさう

といふが、なんと相談に掛かつて見ようか。
孫七　ハテ、構はつしやるな。ナニ、あればかりの疵に。
よね　これはしたり。少しの事で濟む事なら、あなたを頼むがようござんすわいな。
萬六　さうでござる。高が僅かの疵でござれば、マア、わしがばんたうして進ぜう。
よね　何分よろしう、お頼み申しますわいな。
萬六　呑み込みました／＼。シタガ、爰で相談も出來まいマア、社内まで來ては下されぬか。
孫七　イヤモウ、どこまでも行きまするて。
與五　コレ／＼、逃がしはせぬぞ／＼、
萬六　ハテ、わしが附いて居ますわいの。サア／＼、二人ながら、社内まで、來て下され／＼。
孫七　ハテ、馬鹿な目に逢ふ事ぢやわいの。
三人　サア、來さつしやい／＼。
ト大拍子になり、捨ぜりふにて皆々下座へ入る。お米殘つて
よね　常より短氣な與五郎どの、怪我とはいへど人さんに疵附けた事なれば、僅かな金で濟む事ならば。とは云ふものゝ、父さんへ云はれはせず、その日暮らしでありながら、どうして餘計の
ト屈託の思ひ入れ。大拍子になり、八内、醉うたる體にて出て來り、お米を見て
八内　したり。ハテ、うつゝなる姐えだわえ。今夜はなんでも、鏡の廓で、大洒落と思つたが、この子を見ては、また萬更でもないわえ。コレ／＼、お娘、どうぢや。この奴に氣はないか。コレ、斯う見えても、おれは金持ちだぞよ／＼。
トしなだれ寄る。お米ツンとして此方へ來る。
コレサ／＼、奴はこれでも、俄分限ぢや／＼。
トしなだれかゝる。
よね　エ、おきなさんせ。わたしや其やうな、浮氣な者ぢやござんせぬわいな。
八内　これはしたり、浮氣か何か知らないが、奴はする氣ぢや。コレ／＼、俄分限ぢや／＼。
ト財布を見せびらかす。この時、萬六、スタ／＼出て來り
萬六　コレ／＼、姐え、ちよつと、爰へ來たり／＼。
よね　ハイ、どうぞ濟まして下さりませえ。
萬六　サヽ、承知サ。あの疵人にも、段々掛け合つたとこ

ろ、どうやら斯うやら、一兩で得心させたのもこなたゆゑ。大儀ながら、内へ行て、一兩工面して、ござれござれ。

よね　エヽ、そんなら一兩出しますれば、何事なう濟みまするかえ。

萬六　濟むとも〳〵。ちつと工面もむづかしからうが、何分一兩持つて行かねば、病人めが與五郎を離さぬワ。どうぞ早く、一兩工面してござれ、事によると、あの男は牢へ入らにやならぬ。ハテ、氣の毒な事だ。

ト云ひ捨てゝ入る。

よね　ア、モシ〳〵、そんなら一兩上げれば、濟みますかえ。アノ、一兩

ト思ひ入れ。

一兩というてからが、今のこの身で工面の仕樣も。父さんには云はれまいし。後添ひのおわたさんに話して見たとて、微かな世渡り。と云うて、捨てゝは置かれず。アア、コレ、どうぞ一兩の金の工面が

トあちこちする。八内聞いて居て、財布より一兩出しお米に見せびらかし

八内　コレ〳〵、姐え〳〵。一兩有るの〳〵。

ト思ひ入れ。お米見て

よね　モシ、奴さん、そりや、眞の金でござんすかえ。

八内　眞の嘘のと、二つあらうか。コレ〳〵、一兩ばかりぢやない。まだ爰に、金があるの〳〵。

ト財布を見せて

おぬしは、この金が、欲しいかい〳〵。

よね　アイ、どうぞ一兩、欲しうござんすわいな。

八内　アヽ、一兩ばかりか。コレ、これ程ある金が、欲しうはないか。

よね　イエ〳〵。わたしや、一兩あればようござんすわいな。

八内　ハテ、心やすい願ひぢやの。ソレ〳〵、一兩。

よね　ハイ、有り難うござりまする。

ト一兩の金を取り。行かうとする。八内、うろたへ

八内　オツと、さうはならぬワ。コレ、姐え、てまへもいい蟲の生れだの。なんぼ小綺麗な生れだといつて、見ず知らずの娘に、一兩といふ金を、ナニ、只遣るものか。コレ、魚心あれば水心、奴が自由になつたなら、成る程一兩やらうが、お祭りの濟まぬうちは、滅多には遣れぬの。

よね　モシ、奴さん、わたしや急に、この一兩が入用でございます。どうぞお離しなされて下さりませいな。
八内　これはしたり。そりやア、手前勝手といふものだ。其方も入用であらうが、此方も命と釣替への金だワ。一兩と云ふ金を、どうして、只やられるものか。遣らう程にノ、あの掛け茶屋まで來てくりやれ。
よね　イエ〱、わたしや左樣な事は存じませぬわいな。
八内　存じませぬなら、一兩を返してもらはう。
よね　こりや、わたしがお借り申しますわいな。
八内　ても、この娘は、押しの强は女だ。一兩欲しくば、あそこへちよつと
よね　エ丶、存じませぬわいな。
八内　存ぜぬならば、一兩返せ。
よね　イエ〱、こりやわたしが
八内　ハテ、厚かましい女だ。コレ、あんまり焦らすな。小腹が立つワ。云ふ事は諾きもせず、握つた金を離さぬとは、コレ、てまへ、盜人だぞよ。
よね　サア、さう仰しやつても、どうもこの金は
八内　離さぬと、盜人だぞ。
よね　どうも離されませぬわいな。

八内　離さねば盜人だ。サア、返せ〱。
よね　どうも離されぬわいな。
八内　ア丶此奴、こりや優しい面をして盜みをするな。うぬは女の護摩の灰だな。盜人め、離さぬか。
よね　御免なされませ〱。
ト逃ぐるを八内追ひ步く。この時、下座より瀨左衞門何心なく出て來る。お米逃げ步き、瀨左衞門の後へ隱れる。
八内　ア丶、モシ〱、その女を、お渡しなされませ〱。
よね　アモシ、御免なされませ〱。
瀨左　コリヤ〱、下部、年端もゆかぬ女を捕へ、そりや何事ぢや。
八内　ヘイ〱、その女は盜人でござります。
瀨左　なんぢや、この娘が盜人ぢや。
八内　左樣でござります。
瀨左　ハテ、見掛けによらぬ、あの娘が盜人ぢやとは。……ア丶、こりや、其方、間違ひであらう。人違ひであらうワ。
八内　イエ〱、間違ひはござりませぬ。その娘が盜みを致しました。

瀬左　オヽ、して、何を盗み致した。

八内　ヘイ〳〵、金でござります。私しの金を一兩、その娘が盗みました。證據と申すは、それ〳〵、その女めが一兩の金を握つて居ります。

瀬左　すりや、この娘が、一兩の金を盗んだと申すか。……コリヤ、女、いよ〳〵われは、あの金を盗み致したか。

よれ　ハイ。

　ト恥かしさうに顔を隠し、いろ〳〵と思ひ入れ、この時、大學之助、團平を連れ、出かゝつて窺ふ、

瀬左　ハテサテ、人は見掛けによらぬ。コリヤ女、其方は何れの者ぢや。

よれ　ハイ。私しは清水村の、百姓の娘でござりまする。

瀬左　オヽ、清水村の百姓の娘か。その清水村は身が支配地。して、親の名は何と申す。

よれ　ハイ、その儀はどうも

　ト恥かしき思ひ入れ。

八内　モシ〳〵、旦那様、別してあなたのお構ひなされた儀ではござりませぬ。お退きなされませ。持つてゐる金さへ取返せばよろしうござります。サア、その一兩を、離さぬか〳〵。

　トお米を引きつけて、持ちたる金を取らうとする。離さぬゆゑ、八内、拳にてしたゝかにぶつ。瀬左衛門見かねて、お米を圍つて

瀬左　これはしたり。女子供を捕へて、餘り手荒う致さぬがよい。コリヤ女、其方もあの者の金を盗みながら、なぜ戻さぬぞ。但し戻さぬには譯ある事か。

　トお米、恥かしきこなし。

八内　イエ〳〵、譯も何もござりませぬ。御覧じませ。私しは斯様にまだ外に金を持つて居りまする。決して僞りなぞを申す奴ではござりませぬ。

　ト首に懸けてある財布を見せて

所詮、甘口では返しますまい。女め、ウヌ。

　ト割り木を取つて立ちかゝる。瀬左衛門、八内を引きつけ

瀬左　コリヤ下部、わりやあの者をなんと致す。

八内　ハテ、打ち挫いても金を取戻します。旦那様、お止めなされますな〳〵。

瀬左　イヤ〳〵、左様には致させぬ。

八内　こりや、なんで致されませぬ。

瀬左　ハテ、あの女は身が支配地の百姓の娘、善悪糺すは
この瀬左衛門の役目。汝等如きが指圖は受けぬ。して、
われは何れの小者ぢや。

八内　へイ、私しは

瀬左　何れの家來ぢや。

八内　へイ、私しは、左枝の御家中、守山軍藏が下部でご
ざります。

瀬左　すりや、御分地の御家中の小者。身が支配地の女を
捕へ、いらざる差配。指でも差すと許さぬぞ。

八内　へイ。

トうづくまる。

大學　イヽヤ、小者は身が家中。その女めは淸水村の土民
多賀の領地の百姓は、盜みをしても大事ないか。

トよき所へ出る。合ひ方。瀬左衛門見て

瀬左　こりや、大學之助さま。

大學　瀬左衛門。其方が支配の百姓の娘、予が陪臣の所持
の金、多少に限らず盜み致すを、其方は其まゝに致し置
くか。イヤサ、多賀の領地の者どもは、盜み致すを役人
どもは打捨て置くか。左様あつては天下の掟、國の政事
が相濟むか。瀬左衛門、返答はどうだ。

瀬左　御尤ものお尋ね。拙者が支配の土民の娘、只今キッ
と吟味いたすでござりませう。

大學　さうなうては。大金、少金の分ちはないぞ。殊に、
十五を越えたる娘、私しの政道は致させぬぞ。

瀬左　畏まり奉りました。

トお米に向ひ

コリヤ女、其方が聞く通り、太守のお聽きに達せしから
は、其まゝには致されぬ。只合點が參らぬは、あれなる
小者は、まだ〳〵外に金子の貯へ。其方與に盜み致さば、
金子は殘らず取るべきに、其うち僅か一兩を、盜み致し
て離さぬとは。コリヤ女、その金は何の爲に盜み取つ
た。

トお米こなしあつて

よね　ハイ、男の爲に盜みましたわいな。

瀬左　なんぢや、男の爲に。僅か一兩盜む心があるならば、
財布の金は何ゆゑに又、殘らず盜まぬのぢや。

よね　イエ〳〵、只今急に、難儀いたすは一兩の金。これ
さへござりますれば、男の難儀を救へまするゆゑ、つい
した事に一兩取りましてござりまする。殘りの金は要り
ませぬ。一兩さへござりますれば、男の難儀を救はれま

する。どうぞこの金は私しに下さりませ。殿様、この金
はどうぞ私しに
瀬左　くれいと申すか。
よれ　アイ。
瀬左　ハテサテ、優しい心。コレ、女、身が金子遣はさう
程に、その金は彼の者へ返して遣はせ。左様なうては、
コリヤ、この場が濟まぬぞ。
よれ　ハイ／＼。左様ではござりませうが、いとしい男へ
遣はしませうと、私しが念づけましたこの一兩、それば
つかりは、どうぞ私しへ下さりませいな。
瀬左　ハテ、正直な女心に
ト大學之助を見て思ひ入れ。
アイヤ、聞分けのなき憎き女め、その金もとへ戻し居ら
ぬか。
トこの時下座より孫七、與五七、爭ひながら出て來り
與五　コリヤ／＼、逃がしはせぬぞ。一兩取らにや、濟ま
さぬ／＼。
孫七　ハテ、その一兩を工面して來ますよ。
與五　イヤ／＼、さう云つて逃げるのか。さうはさせぬさ
うはさせぬ。

ト爭ひ出る。八內見て
八內　ヤア、與五七か。貴様はまだ立たぬのか。急な用だ
ワ。
與五　イヽヤ、聞かつしやい。珍事ちうよう、おれはナ、
この男に
團平　コリヤ／＼、大學之助さまのお目通り、立ちはだか
つて、下に居らぬか／＼。
與五　ハイ／＼／＼。
トうづくまる。お米、孫七を見て
よれ　ヤア、こなさんは孫七どの。
孫七　オヽ、お米ではないか。
ト瀬左衛門を見て
ヤ、あなたは古主高橋さま
ト云はうとする。瀬左衛門、思ひ入れ。
アイヤ、以前は武家のお屋敷に、御奉公した身なれども
旦那のお氣に違ひしゆゑ。勘當受けて今の身は、往來の
旅人の肩休め、その日暮らしの旅小揚げ。フトした事の
口論から、疵が附いたと逆ねだり。扱ひ金も一兩と、値
はなつたれど有りやうは、その一兩に差支へ
よれ　居やしやんせうと思ふから、ソツと見附けたあなた

の金、一兩取つたはお前の難儀、救うて上げうと思ふか
ら。
孫七　アノ、一兩のその金を
八内　この女めが盗んだワ。
與五　サ、一兩戻さにや、コレ、おれが手首を此やうに、
刃物で切つて濟むまいぞ。その日暮らしの人足が、刀で
人を切つても濟むか。
瀬左　ナニ、その者が刀で切つたか。
與五　左樣でござります。併し刀は、私しが差して居つた
コレ、この刀、これで斯樣に切りました。
瀬左　その刀、これへ。
與五　ヘイ。
　ト狀箱を附けたるまゝ、瀬左衞門の前へ持ち行く。瀬
左衞門、宛名を見て、手早く裏返し置く。
大學　人足の身で大それた、旅人に手疵を負はせし奴。何
れの者か、それ吐かせ。
孫七　ヘイ、私しは、淸水村の百姓でござりまする。
大學　すりや、おのれも瀬左衞門が支配地の者。コリヤ、
ヤイ。二人が二人とも、其方が支配所。其まゝに差措く
か。

瀬左　イヤ、此まゝには差措きませぬ。御前に於て拙者め
が、キッと吟味を仕りまする。
　ト狀箱へ目を附け、懷中の紙入れより小判を取出す。
八内　これはしたり、その疵人より奴が一兩。
與五　膏藥代はこの男。
兩人　互ひに一兩、此奴から
　ト與五七は孫七へ、八内はお米へかゝる、この時瀬左
衞門、兩人へ、小判一兩づゝ目潰しに打つ。
アイタ〳〵。
　ト取つて
こりや、小判で一兩。
瀬左　身共がわいらへ立替へ遣はす。
兩人　こりやア有り難い。
孫七　不奉公した御主人に、どうもその金
よね　左樣あつては、折角の、わたしが盡す志し
瀬左　イヤ、合力は仕らぬ。立替へ遣はすその一兩。女、
所持せしその金を、身共へ渡しやれ。
よね　ハイ。
　ト合ひ方になり、持つたる一兩を瀬左衞門へ渡す。そ
れをよく〳〵見て

瀬左　この一兩の殘りの金子、下部が貯へ、ちよつとこれへ。
八内　ヘイ。
　ト財布の儘持ち行く。瀬左衞門改め見る。幸兵衞出かかりゐる。
瀬左　さてこそ下部が所持の金、數は十兩、殘らず覺えの
幸兵　お家の極印、ござるかな。
瀬左　改めて見やれ。
幸兵　心得た。
　ト金を改める。瀬左衞門、狀箱の密書をよく〳〵見る。大學之助心附き、キッと思ひ入れ。
コレ、見られよ、高橋どの、小判は僅かに十兩なれど、九兩の金は殘らず極印、向う梅。身が盗まれし御寄附の金。
瀬左　この文言は宛名を憚り、兩名ともに分らねど、紛失なしたる五千兩、殊にはお家の重器をば、奪はん爲の密事の段々。これも正しく
　ト大學之助へ目を附け
ア、詮議いたさば
　ト思ひ入れ。軍藏出かゝり窺ふ。與五七、一兩の金を出し
與五　ア、モシ〳〵。どうやら掏んだ金の譯、奴どのからお飛脚に、頼まれた路銀の一兩。サア〳〵、わしは返しまする。
　ト幸兵衞へ渡す。
幸兵　この一兩も覺えの極印、身が失ひし五千兩、殘らず印す向う梅。極印あるその金が、廻り〳〵てこの場へ來たも、手懸り知れたる、これ天命。下郎め、どうしてこの金を
八内　サア、その十兩は、お旦那の軍藏さまから
瀬左　貰ひ受けたか。
八内　左樣でござります。
瀬左　すりや、軍藏が詮議の手がかり。これと申すもその女、僅かな一兩盗みしゆゑ、いはゞ大金五千兩、行くへの知れるも、其方が働らき。
よれ　そんならわたしが、恥かしい、僅かな金を盗みしが
瀬左　お家のお役に立つたるぞ。その褒美には
　ト孫七を引寄せ、お米が方へ突きやる。
孫七　これは。
孫左　不奉公せし孫七が、勘當赦して、女へ褒美

孫七　すりや、私しが御勘當
よれ　お赦しなされて、以前に變らず
瀨左　主從の上、褒美の男。行く末長う女夫の結び。
孫七　エヽ、重々厚き
よれ　御惠み。
兩人　エヽ、有り難うございまする。
瀨左　して、この狀は何者から
與五　サア、譯は一向存じませぬ。あの奴に賴まれて、京都にござる笹山さまへ。
瀨左　それであらまし
軍藏　知られた高橋。
團平　觀念ひろげ。
ト軍藏、團平、切つてかゝるを、孫七、團平を引きつける。幸兵衞、軍藏を支へる。大學之助、拔いて瀨左衞門へ切つてゆく。立廻つて、その手を捕へ
瀨左　こりや大學さま、何ゆゑ拙者を
大學　ヤ。
ト振りほどく途端に、軍藏振り切つて瀨左衞門へかゝるを、大學之助、見事に軍藏の首を打ち落し
家の名汚す憎き軍藏。

瀨左　そのお手討ちの相伴は
ト拔討ちに八內をポンと切る。大學之助、血刀を差出す、幸兵衞、血を拭ふ。瀨左衞門の白刃は、孫七、手拭にて拭ふ。
大學　すりや、その下部も
瀨左　災ひ起すは下部の習ひ。
大學　ア、流石は高橋
幸兵　密書の使ひは
よれ　物事存ぜぬ。
孫七　證據はそれなる
よれ　密書の文言
瀨左　コリヤ。……他言いたさぬ。
ト有り合ふ大火鉢へ打込む。煙硝火パッと立つ。
幸兵　證據の一通
瀨左　火中いたした。
よれ　エヽ。
大學　ア、これにて安堵。
孫七　折角お手に
瀨左　コレ。あらまし胸に、ナ。
ト思ひ入れ。

大學　ヤ。

ト立ちかゝるを、瀬左衞門隔てる。團平かゝるを、幸兵衞、引附ける。孫七、與五七を見事に投げ、お米を圍ふ。

瀬左　承知いたした。

トよろしく

ひやうし幕

二幕目

鷹野の場
陣屋の場

役名――左枝大學之助。高橋瀬左衞門。百姓、佐五右衞門。坂本權平。篠原傳五。彦根嘉仲太。蟹山伴六。鳥本丹八。高橋彌十郎。松田幸兵衞。三上郷兵衞。佐五右衞門悴、里松。同女房、おわた。松浦玄蕃。小島林平。

本舞臺、三間の間。淺黄幕、松の大樹枝葉茂り、正面、高土手、夏草の盛り、鳴子、繩張り、所々に稻叢。舞臺先き、茂りし草土手。爰に早乙女、おろせ、おもよ、おはな、浴衣からげ、早乙女の拵らへにて菅笠に腰をかけ、煙草のみ居る。甚平、勘太、百姓の拵らへにて、草刈り籠を置き、鎌を持ち、めいめい草を刈り居る。よき所に榜示杙、多賀領高橋瀬左衞門支配地と書きある。在郷唄にて幕明く。

ト直ぐに念佛太鼓になり

勘太　コレ〳〵、お花女郎、今日も又、新田の植附けでござるか。さぞしんどうごんせうの。

はな　サイナア。併し、どこの在所も田植ゑ時。いつそ氣が晴れてようござんすわいなア。

ろせ　さうでござんす。日和のよいので、田植ゑ女の仕合せぢやわいなア。

甚平　イヤモウ、いつも田植ゑ時は、いから降るものでござるが、今年は天氣がよいので、また豐年でござらうわいの。

勘太　それ〳〵、今年も變らず當り年でござらう。ドリヤ、わしらも一服吸ひませう。おもよどの、火を貸して下さい。

もよ　サア〳〵、吸ひつけさんせ。コレ、お花さん、もう一息精出して、晩には觀音寺の夜談義、聽きに行からぢ

やないかいな。
はな　さうせうわいなア。
勘太　ほんに、そりやアよかららわえ。この勘太も、お花女郎と手を取つて、行かうぢやないか。よかろぞやよかろぞや。
　　ト お花の手を取る。
はな　エヽ、おかんせいな。
　　ト 振り切る。
甚平　それ見たか。なんで、おぬしに女が惚れやうぞい。
　　大笑ひだ、ハヽヽヽヽ。
勘太　イヤ、笑はれては男が立たぬぞ。サア、お花女郎。
はな　エヽ、おかんせいな〳〵。
甚平　さうぢや〳〵。お前方は、わしが後へ、取ッついたり〳〵。
女三　合點ぢやわいなア。
勘太　甚平、わりやア邪魔するか。
甚平　オヽ、邪魔する程に、われが思ふ女子を、つらまへて見ろ〳〵。
勘太　おれが目附きは、あのお花。
皆々　サア、取つて見やれ〳〵。

　　ト 釣り狐の合ひ方になり、念佛太鼓をかぶせ、皆々よろしく追ひ廻す。向うよりおわた、浴衣、前垂れ、素足にて、在所女房の拵らへ、中食の入りし飯臺を頭へ載せ、藥罐を下げ、片手に浴衣形の里松が手を引いて出てくる。後より小島林平、百姓の拵らへ、手甲、脚絆にて、大きなる草刈り籠を擔ぎ、鎌を下げ、咬へ煙管にて出て來り、直ぐに本舞臺へ來る。皆々入り亂れになり、勘太、おわたを捕へ
勘太　オッと、つらまへたぞ〳〵。
わた　コレ、甚平どの、何しなさんすぞいな。
はな　こりや、お前は、佐五右衞門さんのお内儀さん。
皆々　そりや違うたわいな。ワアイ〳〵。
林平　モシ〳〵、お前方はもう煙草かえ。モシ、おかみさん、爰らはもう左枝家の御領分でござりますかえ。
わた　イエ〳〵、この園原村は、鏡山の殿樣、俊行さまの御領地、地頭樣は、お情深い高橋瀨左衞門さま。アレ、あの榜示杙に記してござんわいな。
林平　成る程。まだ爰らは鏡山の御領地、殊にお情深い瀨左衞門さまとは。いつに變らぬ、高橋氏は實義の武士、人は一代、名は末代ぢやなア。

わた　見ればお前は、此あたりで見馴れぬお方。お前はマア、どこの在所からござんしたえ。
林平　ハイ〳〵。わしは遠國の伊勢參りでござりまするが路銀を切らしまして、拵ぎの爲、妾らの大百姓へ作男に入りましたて。
皆々　して、どこへ雇はれてござつた。
林平　ハイ。どこかまだ名も聞きませぬ。この村境の大庄屋でござりましたて。
ト思ひ入てにて挨拶する
三人　ア、そんなら甚五右衞門の內だんべい。
林平　慥か、そんな名でござりました。
はな　申し、おわたさん。こりやお前、中食を持つてござんしたのかえ。
わた　サイナア。今日はこちの人佐五右衞門どのゝ、先妻の命日、それゆゑ、お前方に上げうと思うて、茶の子を持つて來たのぢやわいなア。
女三　そりや嬉しうござんすわいなア。
甚平　佐五右衞門どのは、先妻と違うて、今度は若い女房を持たしやつたわいの。
わた　サイナア。今の連合ひ佐五右衞門どのは、お米といふ嫁入り盛りの娘もあり、殊に、姉御は京の町へ養子にやり、わしや三年あとから、この子を連れて後家入り。生さぬ仲のこの甲松を、眞の子よりも可愛がつて下さるゆゑ、家の娘のお米どのも、一倍わたしや大切ぢやわいなア。
はな　ほんに、御夫婦ながら、正直なお方。聞けば、お前には、妹御があるぢやござんせぬかえ。
わた　アイ、わたしにもお松というて、妹がござんしたが、十四の年から在所を出て、身狀が惡さに、恥かしい身になつて、京に居るとの事ぢやわいな。
はな　正直なおわたさんに事かはりろせ　身狀の惡い妹御。
勘太　イヤモウ、人に正直もあるに、此方の殿樣の御分地大學どのは、さて〳〵意地の惡い人ぢやわいの。
甚平　イヤモウ、日の寄る所へ玉が寄ると、供に歩く侍ひめらも、碌な奴は一人もござらぬ。
勘太　あの大學めが死をつたらよからうに、得て、憎まれ子國にはびこると、長生きをし居らうわいの。
三人　ハヽヽヽヽ。
ト林平これを聞き、思ひ入れあつて

林平　身は御大家のお血筋に立ちながら、お心猛きお生れ
ゆゑ、土民の疎み、世の嘲けり。ハテ、是非もなき

わた　エ。

　ト思ひ入れ。

林平　アイヤ、あの殿様にも困つたものサ。

　ト素知らぬ顔をして居る。

はな　サア〳〵、皆さん、おわたさんの心づくし、折角持
つてござんしたに、いつもの所で開かうわいな。

ろせ　それがようござんす。

もよ　サ、里松どのも來なさんせいな。

里松　コレ、母様、わしも姐様達と一緒に行かうわいな
う。

わた　ほんに、邪魔でござんせうに、子供といふものは。
　コレ、わやくを云ふまいぞや。

里松　アイ〳〵。

はな　そんならおわたさん

皆々　サア、ござんせいなア。

　ト念佛太鼓にて、おもよ、里松の手を引き、おはな、
　おろせ、藥罐の物を持ち、下座へ入る。殘りの人數捨
　ぜりふにて草を刈つてゐる。向うより松浦玄蕃、ぶッ
　裂き羽織、半纏、股引にて鷹を据ゑ、淺黄股引の中間
　二人附き、スタ〳〵と出て出て、舞臺へ來り

玄蕃　ヤイ〳〵、土ほぜりめら。今日は此あたりにて、主
人大學さまお鷹野。うぬらが爰にいらざる草を刈るゆゑ
に、小鳥めが一羽も居らぬ。サア、キリ〳〵と脇寄りせ
ぬと、うぬらも其まゝには致し置かぬぞ。

　ト叱りつける。皆々こなしあつて

勘太　ハイ〳〵。左やうなら脇へ參りませうが、村方へな
んのお觸れもござりませぬゆゑ、そこで草を刈りました。
御料簡なされて下さりませ。

玄蕃　イヤ、推參な土民めら。身共が詞を用ひぬに於ては、
うぬら一々引ッ縛る。家來ども、ソレ、逃がすな。

中間　ハア。

二人　そりや怒つたワ。

　ト下座へ逃げて入る。中間追ひかける。林平、下の方
　へ來て、煙草のみ居る。おわたも逃げんとするを玄蕃
　見つけ

玄蕃　コリヤ〳〵、女、其方ばかりは逃げる事はない。矢
張り爰に居ても、大事ない〳〵。

わた　ハイ〳〵。それは有り難うござりまするが、わたし

や植ゑかけた田もござりまする。ドリヤ、もそつとぢや。植ゑつけて來ようか。

ト行かうとするを、玄蕃引きとめ

玄蕃　イヤ／＼、滅多にはやらぬ／＼。見たところが、在所女房には惜しい年増ぢや。コレ、身共が心に從うてくれい。どうぢや／＼。

トしなだれる

わた　エヽ、弄らつしやりますな。獨り身ぢやござりませぬ。主のある者を捕へて、エヽ、アタ不行儀な。放さつしやらぬと、聽く事ぢやござりませぬぞ。

玄蕃　サア、そこが身共の、爰でな。

わた　エヽ、よさつしやりませ。

ト爭ふうち、玄蕃、懷中より密書を落す。おわた取つて「大學之助さまへ笹山官兵衞」

ト讀む。林平思ひ入れ。

玄蕃　これはしたり。われが見る狀ではないわえ。それを見ずとも、身共に、ちよつと。

トしなだれる。おわた狀を離さず

わた　おかんせいな。

玄蕃　ハテ、さう云はずと

ト捨ぜりふにて、おわたに戲れ、狀を取らうとする。はずみに、鷹の足に件の狀からみつき、玄蕃これを取らうとしてあせる。この時風の音して、トヒヨになり、小鳥大分飛んで來り、枝にとまる。鷹これを取らうと舞ひ上がつて、狀の附いたるまゝに鳥を追ひ廻し、小鳥飛び去る。この時、鷹の足、松の枝に搦み、いろ／＼して跪く。玄蕃、膽を潰す。この間に、おわた、玄蕃を突きこかし、下座へ入る。向うより三上鄕兵衞、半纏、股引、鷹狩の形にて、この體を見附け、駈け出で來り、玄蕃を見附け

鄕兵　これはしたり、玄蕃どの、御秘藏の小霞が、松の枝に足を搦み、アレ、あのやうに跪きまするワ。不調法千萬な。如何いたした儀でござる。

玄蕃　サア、拙者めも左やう存じて、殿樣へ參つた密書、あの足に搦みついたまゝ上がつたゆゑ、此まゝに致しては置かれませぬ。誠に珍事ちうよつでござる。

鄕兵　左やうでござる。あの儘に致して置きなば、鷹の命も危ふい／＼。殊に官兵衞どのより、又ぞろ何やら火急の御狀。殿樣未だ御披見なきうち、風に揉まれて封じ目切れ、もし他人の目にかゝつては一大事。こりやどう致

したらよからうなア。

ト いろ／＼氣を揉み、林平を見て

イヤ、幸ひな所に居合せた百姓。コリヤ、おのれ、よい所に居をつた。アレ、あの松ケ枝へ駈け上がつて、松に搦みし繩を切つて參れ。サア、早く、上がれ／＼。

ト 林平に迫る。林平、思ひ入れあつて

林平　モシ、お侍ひ樣。そりやあなた御無理でござりまする。三丈餘りもある松へ、どう上がられませう。左やうな蹴爪は持ちませぬ。枝が折れゝば命づく。こればかりは、御免なされませ／＼。

鄕兵　エヽ、此奴、埒の明かぬ奴でござる。もしあの枝から落ちたといつて

林平　助かりまするかな。

鄕兵　死ぬであらう。

林平　ソレ、御覽じませ。そのお役なら、御免なされませ御免なされませ。

鄕兵　ハテサテ、此奴は未練な奴でござる。この上は玄蕃どの、こりや如何おしやるぞ。

玄蕃　サア、お急きなさるな／＼。こりや斯樣仕らう。此あたりの杣どもを召し寄せ、この松を切り倒し、鷹を助けるより外はござらぬ。

鄕兵　イヤ、妙計々々。コリヤ／＼、土民、其方急いで杣どもを連れ參れ。サア、早く參れ／＼。

ト 林平を引ッ張る。

林平　ハテ、このお侍ひ樣は性急なお方ではあるぞ。この松は即ち、この國原村に久しい古木、これを滅多には切られますまい。

鄕兵　そりや又、何ゆゑ。

林平　ハテ、この所は多賀の太守、俊行さまの御領分。あなた方は大學さまの御近習方、尤も鷹野は武士のお役だと申せば、大家のお殿樣でも、御自身の泥草鞋は、こりや御遊興とは申されませぬが、他領へ踏んごみ、無理我まゝ。瓜や茄子を見るやうに、滅多に大木を切り倒し、出水、嵐、野分より、こなさん達の山あらし。村開闢の前から在る松、斧を入れようとは、御支配が違ひます。御分地の殿樣でも、大學どのでも、どなたでも、後から後悔なされぬがようござります。

玄蕃　ヤア、土民に似合はぬ樣々の吐かし事。鄕兵衞どの急いで杣をお連れなされい。

鄕兵　心得ました。ドレ、杣どもを

呼び　ト行かうとする。向うにて
　殿のお入り。
　ト呼ぶ。時の太鼓、誂らへの鳴り物にて、大學之助、花やかなるぶッ裂き羽織、半纏、股引、切草鞋、誂らへの形。後より坂本權平、半纏、股引、大小にて、結構なる騎射笠をもち、篠原傳五、同じ形にて、半弓を持ち、彦根嘉仲太、同じ形にて、床几を持ち、蟹山伴六、鳥本丹八、同じく鷹狩の形にて附き添ひ出で來り、花道よき所にて、大學之助、鷹の體を見る
玄蕃　殿には御入來遊ばされましたが。
大學　松浦玄蕃、三上鄉兵衞。松の梢に摑みしは、予が祕藏なす小霞ならずや。
權平　其まゝ打捨て置かれなば、鷹の命も危ないもの。
傳五　木樵を召寄せ、駈け上がらせ、斧にて枝を打ち落さば
嘉仲　鷹の命は助かる道理。
伴六　猶豫なされず、御兩所とも、
丹八　殿の御祕藏、あの小霞、早く助ける
四人　お手段召されい。
玄蕃　その儀も拙者油斷なく、杣を召寄せあの松を、切らんと申せば、これなる土民
鄉兵　いらざる留立て致すゆゑ、さてこそ延引。恐れ入り奉つてござりまする。
大學　すりや、その土民が留立てするとや。コリヤ、ヤイ、下司め、おのれ、足を摑みし梢の鷹、取り得る工風があつての事か。
林平　如何にも左やう。憚りながら、お二人の、お侍ひ樣が仰しやるは、人夫を以て松を切らうとなさるゆゑ、留めました。ハテ、田畑の脇へ大木を植ゑ置くは、憚りながら、なんの爲でござりまする。
大學　ヤ、なんと。
林平　こりやコレ、大風を除けん爲。申さずとも御存じでござりませう。田畑を大切に致すのが、百姓の心掛け。その風除けになる松を、切り崩してもらうては、この村の大きな迷惑。殊に今から人夫を呼び集め、何十人かゝつても、半時や一時に、切り倒される木でもござりませぬ。左やうに隙どる其うちに、梢の鷹は身を踠き、立ち所に命を落す。すりや、大木を切つたというて、鷹が死んでは、なんの役にも立ちますまい。草木心なしとは申せども、幾年ありしか知らぬこの松、切れば忽ち榮えを

失ひ、千年の齡も今日限り。鷹の壽命も、松の壽命も同じ事。あまり無益な御詮議と存ずるから、それゆゑお留め申したのでござりまする。

大學　土民には、ハテ悧發なる返答。して又、おのれが才智にて、この松を切らずして、鷹を助ける工風があるかサ、それ吐かせ。

林平　ござりまする。榮えの松も切らずして、鷹を助けるその工風、御前樣、この場でお目にかけませう。

大學　して又助ける

一同　その工風は。

林平　只今お目にかけませう。……御家來衆、その半弓をお貸しなされませ、

大學　望みに任せ。あの者へ。

傳五　ハツ。

ト持つたる半弓を渡す。嘉仲太、床几を置き、大學之助、花道よき所へ腰をかける。

林平　御覽じませ。この半弓を以て鷹の足がらみ射切る時は、大木も切り崩さず、鷹も全き私しの手の內。この場で御覽に入れませう。

大學　面白い。見事、足搦み切つた上、鷹の命を助くるか。

鄕兵　もし御祕藏の小霞に、凶事ばしあつては

一同　免さぬぞ。

林平　細工は流々。マア、御覽じませ。

大學　然らばこれにて、見物いたさう。

玄蕃　殿の御前無禮なきやう。

林平　ハツ。

ト風の音、木魂の合ひ方になり、林平、思ひ入れあつて、半弓を番ひ、松の梢を狙ふ。大學之助花道にて林平へ目をつける。林平切つて放つ。過たず弦音して鷹の足革を射切り、鷹は空へ飛び上がる。皆々見て

一同　ヤア、鷹が、助かつたワ〳〵。

玄蕃　早く捕まへさつしやいな。

一同　心得ました。

ト騷ぐうち、鷹は何方へか飛び行く。

アレ〳〵、鷹が外れたワ〳〵。

鄕兵　南無三。鷹が外れたる上は

玄蕃　笹山氏より參りし密書。足に搦んで

林平　ヤア。

ト思ひ入れ。

郷兵　玄蕃どの。こりや此まゝにはなりますまい。
玄蕃　承知いたした。いづれも、土民めに繩打たつしやい。
伴丹　心得ました。
　ト兩人ツカ〳〵とゆき
腕廻せ。
　ト林平へかゝる。少し立廻りあつて
林平　こりや、何科ござつて私しを
玄蕃　繩かけさするは御祕藏の、鷹を逃がせしその科で、
林平　ヤ、なんと、
傳五　いらざるうぬの猿智慧で
嘉仲　鷹の命は助けても
伴六　取逃がしては役に立ぬたワ。
丹八　それとも外れたるあの鷹を
權平　又ぞろ捕ふる工風があるか。
林平　そりや御無體と申すもの。
郷兵　然らば彼奴に繩打ち召れい。
一同　腕まはせ。
　ト立ちかゝる。
大學　聊爾いたすな。皆扣へよ。

一同　ハア。
　ト鳴り物になり、大學之助、舞臺へ來る。林平下へ扣へる。皆々取圍み居る思ひ入れ。
大學　最前より土民めが手練の程。なか〳〵常體の百姓づれに似合はぬ働らき。コリヤヤイ、おのれ、誠の百姓ではあるまい。素性を吐かせ。ナ、なんと。
林平　イヤ、全く以て
大學　大學之助が眼力に、見拔き置いたる上からは、陳じ立てひろいでも、おのれら如きに騙かられんや。たつて云はねば、近習の者、拷問いたせ。
一同　ハツ。土民め、御意ぢや。
　ト林平へかゝる。五人とも立廻りあつて、キツとなる。
玄蕃　こりや、手向ひか。
林平　全く以て
大學　素性を吐かせ。
林平　サアそれは
大林　サア〳〵〳〵〳〵
大學　どうだ。
林平　ハテ、恐ろしい御眼力。如何にも御前の仰せの如く

拙者は誠の士民ならず。親ども事はお家の譜代、小烏林左衛門倅、同苗林平と申す者。
大學　すりや、其方が
林平　即ち拙者お國詰め、殊に部屋住み、各々のお見知りなきを幸ひに
大學　姿を土民にやつしたか。
林平　如何にも左やう。
大學　して、その仔細は。
林平　御意見の爲。
大學　ヤ、なんと。
ト林平、草刈り籠より大小を出し、帶刀して、大學の側に差寄り
林平　エ、、お情なき御前樣。
ト誂らへの合ひ方、思ひ入れあつて
兼ねてお身持ち放埒にて、御城下の町人、百性、數多の難儀は數へがたし。親林左衛門憚り多くも、御幼少よりお育て申せし御近習役、齡寵り寄り歩行叶はず、拙者を招き申す條、其方士民の姿となり、お鷹野の道を窺ひ、殿の御行ひ狼藉あらば、制せよとの詞に從ひ、御覽の如く樣を變へ、先へ廻つて窺ふところ、他領へ入つて田畑を荒らし、剩へ、鷹野の爲に、大木を切らせん御我まゝ、嘆きを構はぬ非道。鷹の命を助けたる、拙者を誠の百姓と心得、權威を以て召捕らんと、御前よきまゝ佞辯の、おもねりへつらふ松浦、三上。それに從ふ近習の武士。耳をねぶる佞人讒者を、お用ゐあるは愚かな事。親に代つて身共が意見、お聞屆け下されて、殘らず遠ざけ、諸民を憐れむ御心あらば、大殿の御安堵。一家中の喜びは如何ばかり。御前樣、憚りながら、御心をお改め下さらば、御意見申せしこの身の大慶、有り難く存じ奉りまする。
ト思ひ入れ。大學之助、脇目もふらずに居る。
玄蕃　ヤア、默れ、二才め。身共を佞人讒者とは、舌長き今の一言。
鄕兵　こりや、此まゝでは濟みますまい。
林平　濟まぬというて、なんとおしやる。
鄕兵　ハテ、知れた事。三上が刀の
林平　切れ味見せると、お云やるか。
玄蕃　その舌の根を切り下げて
ト思ひ入れ。
大學　兩人扣へい。

二人　ぢやと申して。
大學　扣へいと申さば、扣へて居らう。
二人　ハツ。
大學　林左衞門が悴林平。
林平　ハツ。
大學　まだ弱年の身なれども、父が詞をよくも守り、予が目通りにて只今の諫め、大學之助一言一句も返す詞がない。うい奴ぢや。出かした。併し汝の諫めをも、予が聞入れねば如何いたす。
林平　ハツ。その儀は親共とも、暇乞ひの仕り參つたれば、お聞き濟みなき時は、その座を去らず
大學　切腹いたすか。
林平　輕き命を捨てましても
大學　諫言なすか。
林平　兼ねて覺悟は極め居りまする。
大學　ハテ、うい奴ぢや。……聞き届けた。
林平　ハツ。
大學　其方が諫言聞き届けた。卽ち鷹野も今日限り、直樣歸館いたすであらう。
玄蕃　アイヤ、殿樣、左やうあつては。

大學　ハテ、大事ない。歸館いたす。……ナ、何事も身が胸中に、とくと承知仕つて、この場より直樣立歸る。コリヤ、林平、今日よりして其方こと、身が目通りで使うてくれる。近習役を相勤めい。この由、林左衞門方へ申し遣はし、安堵させい〳〵。
林平　すりや、私しが憚り多き、御諫言をお聞き届け下され、お心を改めらるゝのみならず、今日よりして御近習格に取立てられ、お側仕へ仕れとは、有り難き御恵み。親ども斯くと承らば
大學　老いの喜び、滿足に思ふか。
林平　仰せまでも候はず。重々厚き御恵み。
大學　殊に家々の重器改めとして、管領の到着も今宵と聞く。其方は急ぎ邸へ。コリヤ、林平を、同道いたし遣はせ。
權平　畏まりました。……サ、林平どの、御同道仕らう。
大學　行け〳〵。
林平　ハツ。
ト合ひ方になり、林平、權平、思ひ入れあつて、下座へ入る。玄蕃、郷兵衞、思ひ入れあつて
玄蕃　御前、合點が參りませぬ。これまであなたに御諫言

申せし者は、一人も殘らずお手討ち。
鄕兵　その御短慮に引きかへて、生弱輩のあの林平、其ままに差措き、お歸しありし殿の胸中。何とも以て
四人　合點が參りませぬ。
大學　汝等が不審尤も。士民となつて今の諫言、わざと手討ちにならんず胸中。他領に於て大學が、侍ひ野人の差別無く、殺害なせしと國中へ觸れ流させ、それを云ひ立て武將への、聞えを憚る爲なんぞと、家老どもが云ひ合せ、かねてしつらふ座敷牢、某を押籠めになさんといふ事は、疾より推察いたせしゆゑ、無事に歸せしあの林平、予が眼力に見拔いて置いたワ。
玄蕃　流石は我が君、大學さま。天晴れ御賢慮。驚ろき入つてござりまする。
ト思ひ入れ。バタ／＼になり、下座より里松と勘太、以前の鷹を引ッ張つて、爭ひ／＼出る。最前足に搦みし一通、矢張り鷹と一緒に奪ひ合ふ。甚兵衞留めながら出る。
勘太　コレサ／＼。この子は無理を云ふ子だ。この鳥はおれが持つて行つて、菜を入れて煮て食ふワ。寄越さつしやい／＼。

里松　イヤ／＼、この鳥は此方の田へ下りたによつて、わしがのぢや／＼。
甚兵　コレサ、子供が鳥を何にする物だ。此方へ、寄越さつしやい／＼。
勘太　わやくを云ふと、親仁に告げるぞよ。
里松　イヤ／＼、おれがのぢや／＼。
勘太　ハテ、情のこはい。離さないと當所の支配、瀨左衞門さまへ訴へて牢へ入れるぞ。
甚兵　コレサ、離さぬか／＼。
ト捨ぜりふにて鷹を奪ひ合ひ、足に搦みし密書もろとも引合ひ／＼するゆゑ、密書はちぎれ／＼になり、鷹も兩羽搔ちぎれ、死ぬ。三人驚ろき
勘太　ア、、鳥を、引裂いたワ／＼。
里松　まどうて返せ／＼。
ト鷹を持つたるまゝ足摺りして泣く。鄕兵衞見つけ
鄕兵　ヤ、待て／＼。その餓鬼めが持つたるは、正しく御前の祕藏なる、只今外れたる、小霞でござるワ。
ト里松を捕へ
御覽なされい。鷹は羽搔を引裂かれ、こりやコレ、死んで居りまする。

玄蕃　殊に笹山氏より火急に來りし、未だ御披見遊ばされぬ、書翰も爰に。コレ〳〵、文字も切れ〴〵ちぎれ〳〵。こりやコレ、一くだりも讀めませぬワ、

ト密書を持つて思ひ入れ。大學之助カッと顏色變り、密書と鷹を兩手に持ち、キッと思ひ入れあつて、あたりへ投げ捨て、拔討ちに里松を切り倒す。「ワッ」と叫び倒れる。殘りの百姓「ワッ」といふて逃げて入る。皆々見て

郷兵　御前樣、他領に於ては、お手討ちを、決してなさらぬ今のお詞、

玄蕃　その刻限も終らぬうち、土民の子悴この如く、お手討ちになされしは

大學　他領の餓鬼ゆゑ。

郷兵　エ。

大學　今、土民めらが、當所は、高橋瀨左衞門の支配地と吐かしたぞよ、

玄蕃　御意の通り、あれなる榜示に記せしは

大學　ドレ。

ト土手の榜示へキッと目をつける。時の鐘、

瀨左衞門が支配地なれば、多賀の陣屋は村境、兼ねて意趣ある高橋兄弟、直樣押しかけ返答させ、樣子によつて。

ト兩人に思ひ入れにて呑み込ませる。

郷兵　只今これなる密事の狀、引きちぎつたるあの子悴。

玄蕃　君の祕藏の鷹もろとも、引裂いたるが自業自得。

大學　おのれ、高橋、今にぞ思ひ

皆々　すりや、御前樣には

大學　コリヤ。

ト思ひ入れ。時の太鼓になり、この道具をぶん廻す。

本舞臺、三間の間、中足の屋體、向うの床の間、誂らへ襖の緣側つき、石の手水鉢。東西高塀、見越しの松、すべて多賀家陣屋のかゝり。爰に松田幸兵衞麻上下、大小にて、狀を書いて居る。八ッの時計になり、この道具舞臺よき所まで押出し、留める。

ト侍ひ二人、下座より出て來る、

侍一　只今打ちましたが未の上刻。番代りでござりまする。

幸兵　成る程。相役は高橋氏、見えらるゝまで御陣屋の詰め番は、斯く申す松田幸兵衞。瀨左衞門どのわせらるゝ

初濱當時の

繪　本　番　附

に間もあるまい。暫らく扣へて居やれ。

侍二　ハツ。

ト唄になり、向うより高橋瀬左衞門、上下、大小にて、若黨一人、掛け物入れし白木の箱を持ち、林平、麻上下、大小に着替へ、草履取りの中間附き、出て來り、花道にて

林平　それへお越し召さるゝは、高橋瀬左衞門どの、その後は打絶えましてござるが、其許にも御健勝の段、祝着至極に存じまする。

瀬左　左やう御意なさるゝは、分地左枝家の御家中、林左衞門どのゝ御子息ではござらぬか。

林平　左やうにござりまする。幼少より其許樣の、劍術の指南下されし、林平めでござりまする。

瀬左　成る程、林平どの。さて〳〵、久々にも御意得申した。お物語りも爰は途中。マア〳〵、あれなる陣屋へ、サア〳〵、同道仕らう。

林平　先づ〳〵、お先へ。

瀬左　然らば、御免下されい。

ト兩人本舞臺へ來る。

幸兵　瀬左衞門どの、只今お越しなされたかな。

瀬左　これは幸兵衞どの、さぞかしお待ちなされたでござらうに、無禮の段は容赦にあづかりたう存ずる。只今も道にて、左枝の御家中、以前拙者が劍術の一手も指南仕つた林平どのに行合ひ、同道仕つた。サヽ、御遠慮なう、これへ〳〵。

林平　イヤ〳〵、お構ひ下さるな。拙者只今までも國許に罷りあり、部屋住みの身分。ソト今日お見出しにあづかり、今宵卽ち御到着遊ばさるゝ管領のお迎ひに、罷り越しましてござりまする。

幸兵　すりや、其許が、左枝家の老臣、林左衞門どのゝ御子息とな。拙者は高橋氏の相役、松田幸兵衞と申すもの、この程までも、フト致したる越度ござりしかど、瀬左衞門どのゝ働らきを以て、この身の明りも立つと申し、斯樣な喜ばしい儀はござらぬ。今日斯樣に御用相勤めまするも、誠に其許のお庇。幸兵衞、手を突いてお禮申す。

瀬左　忝なうござる〳〵。

ト思ひ入れ。

瀬左　これはしたり。サヽ、お手上げられい。只今林平のお云やる通り、都より管領の到着は、その家々の重器お改めとの事。卽ち拙者預かり奉る多賀の重器、菅家の一

軸、斯様に持參仕つてござる。殊更お出迎ひは、弟彌十郎が役目、即ち今日正七ツとの仰せ出され。これに附けても、お家の重器、紛失の香爐の行くへ。

林平　ヤ。

瀬左　アイヤ、弟彌十郎も、追ツつけこれへ參る筈でござる。

幸兵　ナニサマ、弟彌十郎どのは、お迎ひのお役でござるか。拙者も共々、道までお迎ひに參上仕る心掛けでござる。

瀬左　それは近頃、御苦勞に存じまする。

林平　この林平めも參上いたせば、御同道仕りませう。

幸兵　然らば後刻、高橋氏。

瀬左　御兩所。

林平　サ、お先へ。

幸兵　イザ、御同道仕りませう。

ト唄になり、幸兵衛、林平に家來附いて下座へ入る。瀬左衛門思ひ入れ。

瀬左　殿より預かり奉るお家の重器、菅家の一軸、身共が守護して罷りあれども、いま一品の靈龜の香爐紛失なせしも、正しく御家門

ト思ひ入れ。

事荒立てぬ香爐の詮議。ハテ、手がゝりが、ありさうなものぢやが。

ト思ひ入れ。この時、法螺貝の音、村々にて用心太鼓打ち立てる。半鐘を撞く。瀬左衛門、思ひ入れあつて

瀬左　ハテ、心得ぬ。時太鼓には事かはり、人を集むる法螺貝、半鐘。もし在方に狼藉者か、盜賊か。ハテ、心がかりな。

トきつと思ひ入れ。合ひ方になり、向うより大學之助立腹の體にて出て來る。後より郷兵衛、嘉仲太、伴五、丹八、附き添ひ、後より中間三人、吊り臺に子役の死骸を載せ、菰を掛け、これを荷はせ、ツカ／＼と出て來り、舞臺へ來る。瀬左衛門、見て

思ひがけなき、大學さまの御入來。

大學　瀬左衛門か。

瀬左　ハツ。……先づ／＼あれへ。

ト大學之助、草鞋のまゝ上座へ通り、床几にかける。皆々下に扣へる。瀬左衛門、思ひ入れあつて

見ますれば、今日は、鷹野のお催ふしと相見えまするか、最早御歸館でござりまするかな。

大學　コリヤ、近習の者。その死骸、瀬左衞門に、とつくと見せい。

一同　ハア。

ト吊り臺の子役の死骸を出し、よき所へ置く。

鄉兵　瀬左衞門どの、子悴が死骸、お覺えござるかな。

ト瀬左衞門、いろ〳〵あつて

拙者覺えはござらねど、帶に附けたる迷子札に

ト腰の札を引きり見て

清水村百姓佐五右衞門悴里松。……こりやコレ、瀬左衞門が支配所百姓、佐五右衞門が悴。

四人　大學さまのお手討ちでござる。

瀬左　さてこそ只今、村方にて、人集めの半鐘は、大學さまのお手討ちを、狼藉者と心得てか。

大學　その狼藉はその子悴、予が祕藏なす小霞といふ鷹、ソレ、その如く引裂き殺し、まだその上に、大切の書翰に。

ト思ひ入れ。

サ、鷹を殺せし憎くき童、腹中に据ゑかね、手討ちに致した。鷹の死骸を瀬左衞門へ。

傳五　ハア。

ト引裂きし鷹を瀬左衞門が前に置く。

瀬左　すりや、御祕藏のその鷹を

大學　その如く童が無禮、瀬左衞門、この所は其方の支配地でないか。イヤサ、百姓どもへ常よりキツと申し渡さば、かゝる無禮はないわえ。こりや、何か、分地の左枝家、殊に部屋住みの大學ゆゑ、百姓どもへ申しつけての、かゝる無禮か。さうか〳〵。

瀬左　アイヤ、左やうな儀存じもよらず。御前樣が當所のお鷹野、前以てお屆け下さらば、道筋警固、掃除の者附け置きまする筈なれど、御沙汰なきお越しゆゑ、かゝる狼藉出來いたす。そのお疑ひ、幾重にも、御容赦なし下さりませう。

大學　すりや、其方が申しつけではないと申すか。

瀬左　なか〳〵。左やうでござりまする。

大學　然らば童が親、佐五右衞門とやら、これへ召し寄せい。

瀬左　御用ばしござりまするかな。

大學　手討ちに致す。

瀬左　小兒をお手討ちの、又その上に。

大學　親めも呼び寄せ、鱠切りにせぬうちは、祕藏の鷹

を殺された、無念残念晴れやらぬワ。

瀬左　まだこの上に親の命を

大學　くどいワ。

瀬左　ハテ、是非もなき。

ト思ひ入れ。

郷兵　これサ、瀬左衛門どの、切られた親めは貴殿の御支配。コリヤ、庇ひ立ておしやるのか。ようござる。この上は近習の面々、何れも手分けなし、佐五右衛門といふ土民を尋ね、召連れさつしやい。

四人　心得ましてござりまする。

ト立ち上がる。この時、向うより佐五右衛門、老けたる拵らへ、百姓の形、後よりおわた走り出て來る。

佐五　ハイ／＼、申し上げまする。悴めが切られたとやら申す事、承りましたゆゑ、宙を飛んで參りました。モシ、そりや誠でござりまするか。仰しやつて下さりませ下さりませ。

わた　大切の／＼里松が、なんの科で切られました。僞はりでござりまするなら、どうぞお逢はせなされて下さりませ／＼。

ト兩人、縁先へ取りつき願ふ。

郷兵　さてはうぬらが餓鬼めの親か。コレ、お手討ちの死骸は、ソレ／＼、そこにあるワ。

佐五　ナニ、アノ里松の死骸が

わた　里松かいなう。

ト駈け寄り見て

佐五　ヤ、、、。こりや悴めぢや。

わた　里松ぢやわいの／＼／＼。此やうにむごたらしう、なんの科で切らしやつた。コレ、佐五右衛門どの、生さぬ仲でもお前の子、敵を取つて下さんせ／＼。

ト死骸に取り附き思ひ入れ。佐五右衛門、縁先へドッカと座し

佐五　コレ、瀬左衛門さま。あの悴はわしが實の子ぢやござりませぬ。この嬶めが三年以前、わしが所へ連れ子。あの餓鬼は義理のある子でござります。年端も行かぬ者を、どれ程の科で切られました。何奴めが切りました。云うて下さりませ／＼。

ト急きこんでいふ。

郷兵　ヤイ／＼、土百姓め。おのれら夫婦が餓鬼とあらば、さてはうぬが佐五右衛門だな。兩親とも縛り首だ。腕まはせ。

佐五　エヽ、おかつしやいな。子を殺されたその上に、なんでわしを縛り首とは、

大學　默れ、土民め。予が祕藏なす、鷹を殺したその科で

わた　エヽ、すりや、その鷹をテノ里松が

大學　親子の奴らが命取らねば、憤り散ぜぬ。サア、ぶッ放す。それへ出をらう。

佐五　エヽ。すりや悴を切つたはこなたぢやの。エヽ、腹の立つ。貴樣はおれが子の敵ぢや。

ト立ちかゝる。

四人　慮外な奴の。

ト引据ゑかゝる。佐五右衞門突きのけ、大學之助へかかるを、瀬左衞門引きつけ

瀬左　コリヤ待て、其方はうろたへたか。あなたをおのれどなたぢやと思ふ。當國多賀の御家門、大學之助さま、御分地の殿樣ぢやぞ。

佐五　エヽ。

ト思ひ入れ。

瀬左　コリヤヤイ、土民如きの身を以て、御大身の御方を汝等風情が、なんと敵を討たれうぞ。うつけ者。たわけ者。扣へ居らぬか。

わた　イエ〳〵、子の可愛さはどの親々も同じ事。大名でも、殿樣でも、敵を取らにやなりませぬ。

佐五　さうぢや〳〵。百姓の子は無理殺しにあうたりとも、下手人に取られぬといふお觸れでもござつたか。これにつけても、宿に殘した姉お米。コレ嬶よ。われもあの娘は生さぬ仲ゆゑ、義理があらう。おりや又生さぬ仲の義理。あの里松を殺した敵は大學どの。無法者、大惡人。人に怨みがあるものか、ないものか、今に思ひ知らせますぞ。

大學　ヤア、予に向つてその雜言。汝も刀の錆になれ。

ト立ちかゝる。瀬左衞門、留めて

瀬左　アイヤ御前、お待ち下さりませう。

大學　瀬左衞門、そちやあの土民を庇やるか。

瀬左　イヤ、全く以て。

佐五　エヽ、こなたはなう。

ト立ちかゝる。瀬左衞門、制して

瀬左　コリヤ、佐五右衞門。他領の殿とはいふものゝ、矢張り多賀家の御分地なれば、當家の御家門。俊行公も同然なるぞ。

ト思ひ入れ。

佐五　ムウ。
大學　ヤア、たつ〳〵留立てひろいだら、高橋、其方から手討ちの相伴。
ト切つてかゝる。瀬左衛門よろしく立廻り、郷兵衛三四人かゝらうとするを、佐五右衛門、立廻り。此うち瀬左衛門、箱の中より掛け物を取つて、大學之助が刀を打ち落し、一軸にて散々に大學之助を打ち据ゑる。大學之助キッとなつて
大學　コリヤ、瀬左衛門、手向ひか。
瀬左　全くお手向ひは仕らぬ。
大學　イヽヤ、手向ひ。なぜ打つた。
瀬左　イヤ、こりや御先祖の御靈筆、
大學　なんと。
瀬左　この一軸こそ菅家の正筆、多賀のお家に傳はる重器。
大學　ヤ。
瀬左　御先祖の御怒り、非道のあなたを、まツ斯う〳〵。
ト一軸にて打擲なす。大學之助キッとなつて、切つてかゝるを立廻り、瀬左衛門キッと留めて
お急きなさるな大學さま。身不肖なれども高橋瀬左衛門

多賀俊行公の御眼力を以て、一郡を支配仕り、上を敬ひ、下を憐み、政道に私し無きに、今日の仕儀。例へ幼少にもせよ、人間の命を取る事輕からず。元の起りは鷹野の道筋、御家門とは申しながら、他領の儀なれば、先觸れもあるべき筈。一向にお知らせなく、差掛りたる事なれば、大學さまとは知らぬから、辯まへ無き子忰、鷹を爭ひお手討ちになりし上は、御政道は相濟みしに、又ぞろ親をも害せんは、我まゝ氣まゝの御行跡。大殿、又は拙者が主人、俊行公のお耳に達する時には、御身の爲に惡かりなん。士民が忰一人たりとも、多賀の領地の農民なれば、其まゝには打捨て置けねど、いはゞ一家の間柄、事穩便に計らふ拙者が寸志。大學さま、イヤサ、大學之助さま、如何に百姓なればとて、蟲同然のこの手討ち。もと農民は天下の寶と申す。御前の鷹野は何の爲でござりまする。いま太平の御代なれど、亂を忘れぬ教へならずや。さればこそ、御大身の御身にも、草鞋にて露霜に打たれ給ふ。それに引きかへ、田畑を荒し、民百姓の難儀をいとはぬ御遊興の御鷹野。いま拙者めが諫めにて、非道のお心改められ、御本心にお勸め申す。御意見は即ち菅家のこの一首「わがたのむ人をむなしくな

すならば、天が下にて名をや流さん。」其お心の募りなば、惡の御名を天が下、流さん事は目のあたり、今の諫めもお用ひなくば、お命を申し請け、腹かッさばく拙者が心底。サヽ、大學之助さま、有無の返答、承りたう存じまする。

郷兵　いはれぬ無禮、瀬左衞門。イデ

四人　我れ〳〵が。

ト立ちかゝる。

大學　コリヤ、鎭まらぬか。下に居らう。いま高橋が諫めの一言、この身にヂッと。

ト思ひ入れ。

コリヤ、近習の者、暫らくの間、次へ立て〳〵。

ト目くばせして思ひ入れ。

一同　ハッ。

ト下座へ入る。郷兵衞殘る。

大學　ア、誠に忠言耳に逆ふと、家老どもが數度の諫言、一向に取上けぬ某、今といふ今五臟を貫き、心魂に徹したる瀬左衞門が意見。忝ない、喜ばしいぞよ。予が非道を矯め直すは、御先祖菅家のお手づから、怒り給ふ御打擲と思へば、さら〳〵以て恥かしからず。今より本心に戻る大學。瀬左衞門、よくぞ打擲いたしてくれたな。

瀬左　すりや、只今の拙言が諫言、お聽き屆け下されて

大學　家來も多くあるうちにて、誰れ一人諫言の武士もなく、他家の家來の瀬左衞門は、予が爲には弓矢神。其方が打擲なさずんば、いつまでも予が非道、今日只今、本心になつたるも、高橋が庇。ハテ、俊行どのには、良き家來を持ち召されたな。

瀬左　左やうなれば、いよ〳〵あなたは御本心に。

ト思ひ入れ。

然る時には、一同の喜び、拙者とても如何ばかりか、有り難く存じ奉りまする。

大學　これにつけても手討ちの小兒。

ト佐五右衞門と顏見合せ、思ひ入れ。

佐五右衞門とやら、夫婦の者、倅を討たれ、憤りの段、尤も至極。今といふ今、夢の覺めたるこの大學、其方に敵と討たれたいものなれど、予が本心になる上は、一國の喜びとある。これまでは無成敗に人を害ひ、其方にも愛子を失ひ、殘念ならんが、約束事と諦めよ。倅が菩提は予が弔うて得させん。大學之助、手を突き、頭を下げる程に、佐五右衞門、料簡してくれい。

ト思ひ入れ。佐五右衛門、おわた、こなしあつて

佐五　これはマア、なんと申してよからうやら、只今までは悴が敵、喰ひついてもと存じたなれど、お大名樣のその御挨拶。蟷螂同然の私しへ、お手を突かれて、頭を下げ、モシ〱、お手をお上げなされませ。力味返つた私しも、料簡せいとのお詞で、この上なんと申されませう。私しも、ハイ、男でござりまする。

わた　私しどもか胸も晴れ、コレ〱佐五右衛門どの、あの里松を切らつしやつたはお大名樣。その殿樣を御意見なされたは地頭樣、それで善心におなりなされば、死んだこの子は、あなたへ意見云うたも同然。

佐五　オヽ、さうぢや。女房、よう云うた。お心が直つて一國の喜びとなればナ、里松が命一つで、何萬人の助けか知れぬ。オヽ、出かした〱。ハイ〱、高橋さま、只今のお詞で、私しが胸もさつぱりと晴れましてござりまする。モウ〱お恨みは致しませぬ程に、あなた樣へよろしう、お詫び

わた　なされて下さりませ。

瀬左　オヽ、天晴れ出かした。其方が料簡は、即ち大學之助さまが一生のお身の納まり。申さば悴は氏神同然。コリヤ、些少なれども野邊の營み。

ト袱紗包みの金を遣る。

佐五　エヽ、有り難うござりまする。先達てもお米めが、多賀の社で一兩の、お惠みの上に孫七、御赦免ありし御高恩。

瀬左　すりや、孫七が男であつたか。

佐五　そのお米が姉のお龜、音信不通に京都の道具屋へ、養子合せの與兵衛といふは、高橋さまの弟御。御幼名は慥か孫三郎さま。

瀬左　すりや、孫三郎に娶はすお龜は

大學　ヤ。

ト思ひ入れ。

わた　アヽコレ、詞多きは却つて何かの。ナ、モシ。サ、もうお暇申しませう。

ト思ひ入れ。大學之助こなしあつて

大學　佐五右衛門夫婦の者。

ト思ひ入れ。

二人　ハツ。

大學　アヽ、愁傷の程察し入る。願ひあらば何事なりとも左枝の役所へ願うて參れ。

佐五　有り難う存じまする。左やうなれば瀬左衛門さま。
瀬左　夫婦の者。必らずあなたを。
　ト思ひ入れする。兩人呑みこみ
二人　ハイ。
　ト唄になり、佐五右衛門、死骸を抱き、おわたが手を
引き、こなしあつて向うへ入る。
大學　今の土民が心のうち、思ひやられて後の後悔。予が
本心になつたるも、偏へに菅家の御正筆、この一軸の御
惠み。
　ト思ひ入れあり
イヤナニ、瀬左衛門、某未だ多賀の重器、その御正筆
これまで一度も拜禮いたさぬ。瀬左衛門、よき折から、
なんと拜見させてはくれまいか。
瀬左　成る程〻この度、京都より管領の到着は、お寶改
めの役目。拙者預かり罷りある一軸、お上屋敷へ持參の
今日、餘人の拜禮は叶はずとも、御家門のあなた樣は、
拜禮の儀苦しうもござりますまい。イザ、お手水遊ばさ
れませう。
大學　承知いたした。郷兵衛、手水を。
　ト合ひ方變り、郷兵衛、下の方椽先の手水鉢の柄杓を
取上げ、大學之助、手を洗ふ。この時、玄蕃、塀の蔭
より手槍を携へ出かける姿、手水鉢へ映りしを大學之
助見附け、郷兵衛も思ひ入れあり、まだ早いといふ仕
方、瀬左衛門これを知らず、床の間の掛け物を取つて
箱の中の一軸を掛ける。上の方より以前の四人出かゝ
り、椽先に窺ひ居る。
瀬左　イザ、御拜あられませう。
大學　瀬左衛門、とても事に、その文、詳しう讀んでく
りやれ。
瀬左　承知仕りました。
　ト二腰を片脇へ置き、無腰にて一軸の方に近寄る。玄
蕃、手槍を大學之助に渡す。瀬左衛門、一軸に向ひ
九枝燈ハ盡ク唯斯曉　一葉舟飛デ不レ待レ秋
欲下以二浮生一期中後會上　還テ悲ム石火向レ風敲
「思ひやる心ばかりはさはらじを何隔つらん峯のしら雲」
ト讀むうち、玄蕃、一軸へ手をかける。瀬左衛門、見
て
ヤ、大切なる一軸へ。
ト刀を取つて立ちかゝる、大學之助、槍を持つて突い
てかゝり、太股をしたゝかに突く。瀬左衛門、タヂタ

ヂとなる。この時、下手より家來大勢、バラ／＼と出
で

一同　ヤア、御主人を

ト立騷ぐ。四人一度に拔いてかゝる。これにて家來向うへ逃げるな、四人追ひかけて入る。瀨左衞門、立ち上がらんとする。大學之助、槍にて突く。鄕兵衞、切つてかゝるを、瀨左衞門、裾をかいどり、鄕兵衞を引きつける。此うち、玄蕃は一軸を取納め、懷中して、床に掛けたる掛け物を取つて箱の中へ入れ、元の如く置く。凄き合ひ方になり、瀨左衞門こなしあつて

瀨左　こりや、瀨左衞門を、騙し討ちとは、卑怯至極。

大學　もう叶はぬソ、瀨左衞門。この程多賀の社にて、企てを氣取りし其方、生けては置かれぬ。今日まで生き延せしは、折よき場所にて出合はぬゆゑ、助け置いたが殘念至極。先觸れなさず今日の鷹野も、事がな出來よと願ふところ、幸ひ餓鬼が慮外を囮とし、まツ斯くなさん我れが計らひ。それとも知らずウカ／＼と、騙かられたかうつけ者めが。

瀨左　さては身共を騙かりし、大學どのゝ計らひよな。この場に命を落すとも、御身を失ひ諸人の嘆きを。

ト刀を拔き、槍の穗先を切つて捨て、よろめき立廻りあつて、大學之助タヂ／＼となる。鄕兵衞、切つてかかるを、瀨左衞門、立廻つて、鄕兵衞に手を負はせる玄蕃、一軸を持つて

玄蕃　我が君樣。

大學　一軸奪ひ、はや落ちよ。

玄蕃　ハツ。

ト捨て鐔にて向うへ走り入る。此うち、瀨左衞門、鄕兵衞立廻りあり、見事に切り下げる。鄕兵衞、苦しみ倒れる。大學之助、後より鄕兵衞の刀にて瀨左衞門をしたゝかに切り下げ、撞と座するを槍の先にて止めを刺す。この時、バタ／＼にて下座より林平走り出て來り

林平　ヤ、高橋どのを此お手討ち。

大學　そちや林平か。予に無禮せし瀨左衞門、それゆゑ身共が

林平　イヤ、相手はこの林平。高橋どのを討ちしは、拙者。申し譯には、まツこの通り。御前樣ではござりませぬ。

ト腹へ突き立てる。

大學　ハテ、愛い奴な。

トにつたりする。この時、向うより高橋彌十郎、麻上下、大小にて、草履取り一人附き出て來る。下座より幸兵衞、ツカ〳〵と出て

幸兵　ヤ、、林平どのゝこの自殺。高橋どのゝ横死といひ

彌十　ナニ、兄瀨左衞門どのを

ト駈け寄らんとして、大學之助を見て、席を畏れ、ハッと下へ下がつて思ひ入れあり。

こりや、大學之助さまのお手討ちよな。

林平　イ、ヤ、主人は御存じござらぬ。相手は即ちこの林平。その云ひ譯はこの切腹。

彌十　すりや、兄を害せし敵は左枝家、小島林平とな。

ト鄕兵衞の死骸を見て

外に深手の三上鄕兵衞。これも左枝の家中の武士。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

幸兵　大切なる管家の一軸。

ト箱を取上げ思ひ入れあつて

高橋どのには數ヶ所の手疵。この林平に、かすり手とても見えず。

大學　アイヤ、相手は林平。併し眼前、兄の仇、切腹したればこの末も、敵と覘ふ世話も無く、彌十郎にもさぞや滿足。

トこの間に彌十郎、思ひ入れあつて、大學之助を見詰め

彌十　御家門たる大學さまの、只今のお詞、身に取りまして如何ばかり

ト林平へ思ひ入れあつて

相手の武士の林平は、兄瀨左衞門が武術の門弟、辨まへある身を以て、師と賴んだる高橋を、よも刃傷に及ぶべき。

トこれにて林平思ひ入れ。彌十郎こなしあつて

ハテナア。

トこの時七ツの時計打つ。

大學　最早管領お着きの刻限。

彌十　すりや、あの時計は

幸兵　氣の毒ながら役目の時節。

彌十　とはいへ、眼前、兄の知死期を

ト瀨左衞門が死骸へ思ひ入れ。七つの時の太鼓を打つ、彌十郎、槍の穗先を取上げ

切り折る手槍は……すりや疾よりも、用意あつてか。

大學　立たぬかえ。

彌十　ハツ。

ト思ひ入れ。大學之助、林平が死骸を二重舞臺より蹴落し、持つたる扇をサラリと開く。これにて木の頭。彌十郎、大學之助へ目を附け、無念の思ひ入れ、キッとなる。大學之助、ニッタリと笑ふ。これをキザミにてよろしく。

ひやうし幕

三幕目

多賀御殿の場
高橋居宅の場

役名　鏡山の太守、俊行公。笹山官兵衞。官兵衞下部、權内。玄蕃妹、あざみ。矢橋喜惣太。粟津比良藏、堅田照太郎。三井秋之丞。腰元早百合。同、よもぎ、松浦玄蕃。下部、曾平。彌十郎妻、皐月。高橋彌十郎。

本舞臺、三間の間、高足、高欄附きの御殿。向う一面の障子、欄間、長押、鐵物、廻り椽。下の方、植込み、舞臺先中程より下座へ、繪心の波板、これに杜若たつぷり花ざかり、いづれも誂らへの通り、幕の内よりあざみ、腰元の形、踊りの稽古して居る。三井秋之丞、矢橋喜惣太、粟津比良藏、堅田照太郎麻上下、近習にて立ちかゝり居る。吉原雀の唄にて幕明く、

〽その手で深みへはんま千鳥、通ひ馴れたる土手八丁口八丁にのせられて、沖の鷗の二丁立、三丁立。

ト　あざみ踊り、よき程に爪づき倒れる。

秋之　あざみどの、踊りに辷つて倒れたところが、きつい見物だ。

四人　やんや〳〵。

ト　あざみ、ムッとし

あざ　なんぼ其やうに惡う云うても、わたしが所作は兩大和屋の直傳、此やうに踊りを稽古するも、殿樣のお爲。なぜと云はしやんせ、この間より殿樣には御病氣も、お床に附かせらるゝ程はなけれど、御家門方より日々のお見舞ひ。

喜惣　サア、それがどう致したな。

あざ　それゆゑわたしが、この面白い踊りでお慰め申したら、直ぐに御本腹。

比良　何を本腹、こなたの踊りを見ると
照太　肩癖が張りますワ。
あざ　又かいなア。なんぼ其やうに云うても、御殿に上がる踊り子のうち、わたし程の器量もないゆゑ、所作で殿様にくひつかせ、お手が附けばお前方も、目をかけてやるわいな。
比良　きつい自惚れ。鏡を見た事がござらぬか。
喜惣　檜物町の神主さんが聞いて呆れます。
あざ　それでもこの間、ポチヤ〳〵うまい奴ぢやと、方々の殿様が
四人　そりやどういふ氣であらう。
あざ　それでわたしも
四人　どうした。
あざ　コレ。
〽さうした黄菊と白菊の
トあざみ、口説模様の振りよろしく、四人は一人々々あざみを突き倒し、下座へ逃げ入る。唄になり、向うより皐月、家中女房の形にて出て來る。後より權内、中間にて、風呂敷包みと文箱を割掛けにして出て來り花道にて
權内　モシ〳〵。そこへござるは、皐月さまぢやござりませぬか。
皐月　ヤア、其方は權内かいの。
ト逃げようとするを
權内　アモシ。
ト引止める。
お旦那がどこへも出すなと、云ひつけて居るのに、ハア、こりや、あの彌十郎どのへ駈出してござるのだな。
皐月　ア、コレ、なんの、兄さんの心に叶はぬ所ぢやもの夫の内ぢやというて、なんの逃げ走つて行くものぢやぞいなう。
權内　さうして又、どこえ。
皐月　サア、御殿の卯の花さま、よもぎさまより、呼びにおこしなさんしたゆゑ、上がらうと思うてぢやが、其方は又
權内　わしは御城下所々へお使りの歸り道。旦那がお聞きなさると、また御立腹。サ、、御殿へ上がらずとも、これから、お歸りなされ〳〵。
ト引ッ張る。皐月、迷惑な思ひ入れ。
皐月　サア、歸りは歸らうが、權内、其方はァノ、煙管が

欲しいと云やつたぢやないか。ソレ
ト煙管筒より出してやる。
權内　ア、モシ。こりや銀でござりまする。これをアノ
ト悔りする。
皐月　遣る程に、サア、一緒に、歸つてたも／＼。
權内　ア、モシ／＼。なんの歸るに及ぶものか。旦那はあれでも大意地惡。なんと云はうと捨てゝ置いて、早う御殿へ、お出でなさい／＼。
皐月　イエ／＼、兄さんがまた腹立つては
權内　なにサ。小言は話し、叱るはお談義だと、目をくんねふつて
皐月　そんなら其方が
權内　サア、送つて參りませう。
ト矢張り唄にて本舞臺へ來る。此うちあざみは倒れたまゝ寢て居る。皐月、權内に囁く。
權内　モシ、ちとお賴み申します／＼。……モシ、お賴み申します。
あざ　エヽ、よい心持ちに眠つて居るものを。
ト起きて
そちや、なんでわたしを起したのぢや。

權内　ハイ、私しは、笹山官兵衞が家來。どうぞ卯の花さま、よもぎさまを、ちよつとお呼び申してもらはうと存じまして
あざ　そんならアノ、官兵衞さまの用事か。
權内　イエ、主人の用事ではござりませねど
あざ　さうして、誰れが用ぢや。
權内　サア
あざ　奥の女中に、先も知れぬ用を云うてくる。こりやなんでも
皐月　イヽヤ、怪しい事ではござりませぬ。わたしが賴みましたわいなア。
トそこへ出る
あざ　お前は彌十郎さまの御新造皐月さま。……イヤ、ほんに、お前に物云ふではなかつた。
皐月　モシ、あざみさん。わたしに物云はぬとはえ。
あざ　また云はれるものか。武藝お下手の彌十郎さまの御新造。
皐月　エ。……すりや、この程の試合に
あざ　イヤモウ、名を云はずと、お負け樣で、奥へ通用する。お前も、恥かきさんと、名を變へさんせいなア。

皐月　モシ、そんな事仰しやらずと、どうぞ卯の花さま、
よもぎさまに
あざ　誰れがお前に逢ふ者があらうぞいなア。
皐月　そんなら、奥いつぱい
あざ　不首尾と極印、打つてあるわいなア。
皐月　エヽ。……なぜ我が夫には其やうに、不覺を取つて
下さんしたぞいなア。
ト思ひ入れ。
〽女郎の誠と玉子の四角、あれば晦日に月が出る。
ト此うち、向うより玄蕃、麻上下にて家來を連れ、後
より笹山官兵衞、繼上下にて出て來り、花道にて
官兵　これは御分地大學さまの御家來、松浦玄蕃どの、今
日も御容體お伺ひでござるか。
玄蕃　これは笹山氏、太守樣には、矢張り相變らずかな。
官兵　イヤモウ、あの通り藝者、踊り子でお諫め申しても
兎角鬱性の御容體。
玄蕃　何は兎もあれ、先づ御殿へ。……家來、其方は中の
口へ。
家來　ハッ。
ト引返し入る。

官兵　イザ、お出でなされい。
ト矢張り鳴り物にて、本舞臺へ來る。此うち皐月、官
兵衞を見て、柴垣の蔭へ入る。權内も遲れて見附け、
隱れようとするを
ヤイ〳〵、わりや家來權内でないか。何しに御殿へ
權内　サア、私しが參りましたは
官兵　アノ、城下へ用事申しつけやつたに、爰にうろつい
て居る憎い奴の。
ト皐月、聞きかねてそこへ出て
皐月　アモシ、其やうに仰しやりますな。權内はわたしが
連れて參りましたわいなア。
官兵　そちや妹
玄蕃　ムウ。すりやお噂に承つた、彼のお負け彌十郎ど
のへ縁づかれたる
官兵　皐月めでござる、ヤイ妹、わりや何しにこの御殿へ
參つた。
皐月　サア、お前に隱してと思うたれど、お目にかゝつた
ら是非がない。私しが參りましたは、お前が無得心なゆ
ゑ、女子は一旦嫁いたら、一生里へ歸るまい爲、死んで
出る心で婚禮の夜の門火。……夫婦はそれ程の緣なもの

を、ちよつと〻云うて呼び寄せ、それぎり返しても下さんせぬゆゑ、奥の女中方を頼んで

官兵　イヤ、誰れが云はうと、どなたの御意でも、成らぬといふ譯は、日頃小男の身共を拒み、たつて望んだこの程の御前の試合。なに身共に刃が立つものか。ほんの小兒の戯れ、物の見事に打ち据ゑ、太守の御機嫌散々。面目ないかして、遠慮して居る腰拔けの彌十郎。

あざ　それで取返さんしたら、物を云うてもやりやんせう。コレ、皐月さん、男振りで知行は取られぬぞえ。

玄蕃　オヽ、身共もこの妹あざみを、御本家へ奉公に出しては置くが、婿を取るというても武藝が肝心。

官兵　成る程、侍ひに武藝の無いは、駕籠舁きに足の無いと云はうか。

玄蕃　啞の講釋師と云はうか。

あざ　鼻高橋でなうて

權内　ひく橋彌十郎さま。

官兵　極上大負けの腰ぬけ。

皆々　ハヽヽヽ。

　ト皐月、術なき思ひ入れにて

皐月　人は腰拔けとも未練とも云はゞ云へ、わしが爲には大事な夫。どうぞ兄さん。

官兵　まだ吐かすか。愚か者めが。

　ト奥にて驛鈴鳴る。

あざ　ありや殿樣の、これ、お出での知らせ。

權内　サア、皐月さま、お歸りなされませ。

官兵　イヤ／＼、斯ういふ未練者ゆゑ、腰拔けめが所へ拔けて行かうかも知れぬ。あざみどの。

あざ　それ／＼、わたしが部屋で兄御のお歸りを、待つてござんせ。

皐月　ハイ。

　ト皐月、思ひ入れ。合ひ方になり、しを／＼と下座に入る。四人殘り、あたりを見廻し

玄蕃　官兵衞どの、申し合せた儀を今日

官兵　コレサ。

　ト小聲になり

兼ねて大學さま、本家をお望みの企ては、一味の身共。表は忠臣顏に見せ、內證の絲からくり。お望みの寶も手引きしたれば、お手に入つたでござらうが。

玄蕃　サア、何もかも思ふ壺に參つたが、兎角妨げになるべきは高橋彌十郎。ところで彼奴めも。

初演當時の

繪　本　番　附

官兵　どういふその日のまんよさか、試合に手も無く打勝つたも、我が手の内。
權内　それもあなたの惡心を、天も感應まし〳〵て、まんまと彌十郎めは自滅同然。
あざ　なれども又、御前の首尾が、直るまいともいはれぬゆゑ、とゞめの工夫、兄さん、して來なさんしたかえ。
玄蕃　そりや、とつくり思案があるが、どうぞコレ、瀨左衞門を殺した者を、矢張り林平と心得て居るか。又は主人と勘を附けたか。
權内　その探りには、私しが參つて嗅ぎ出しませう。
官兵　オヽ、こりや其方に云ひつける。一時も早く
權内　畏まりました。
ト權内、向うへ走り入る。
官兵　して、今日の儀は
ト玄蕃兩人に囁く。
あざ　出來ました。
官兵　さすればいよ〳〵、大學さまの
ト障子の内にて
俊行　その企み、聞いた〳〵。
三人　ヤア、ありや殿のお聲。

ト悑り。
俊行　後を云はさぬにやアならぬ。腰元、云へ〳〵。
ト唄になり、障子開く。秋之丞、照太郎、蒲團、莨盆を直す。俊行公、羽織、小さ刀、病ひ鉢卷、長煙管を持ち出てくる。腰元、早百合、蓬、刀、料紙を持ち出て來り
早合　御前樣、私しどもに何を云へと
よも　御意遊ばします。
俊行　ハテ、其方達が色の企み、町家、遊所なぞでは手管魂膽なぞ云ふさうなが、なんの爲ぢや。話せ話せ。
官兵　すりや、御前には
玄蕃　そのお話しを
ト落ちついたる思ひ入れ。
俊行　オヽ、官兵衞、大學が家來玄蕃。
玄蕃　ハツ。今日も殿の御容體伺へと、主人が申しつけ。
官兵　あの御景色では、日々御鬱性も晴れませう。
早合　イヤモウ、御病氣この方は、日頃に變つて女子のお噂ばかり。
よも　お書物は伊勢物語、錦繪は女形。
あざ　それ〳〵、お楊枝入れは誰ケ袖、御酒は女郎花、あ

まりの事で、お吸物は、赤貝ばつかり。

官兵　すりや、御前には

俊行　賢を賢として色と易へよとは、孔子の手前勝手。それを思へば兼好は粹ぢや。老いたるも若きも只この迷ひと書いたるを、思へば忘られぬ。……ナア、世をも國をも思はずに、心に發する色情が、儘にならば喜見城、これを思へば鄙賤の身が、羨しいわやい。

ト鬱々としたる思ひ入れ。

早合　アレ又、御鬱性の

女三　御病氣が

玄蕃　ムウ。

ト俊行を、つく〴〵見て思ひ入れあつて

畏れながら、君の御容體を見奉るに、異なる御病氣。主人大學も、殊の外お案じ申し、奇妙な博士ござるに附き占はせましたるところ、君のお名乘、俊行の文字は龜の文字にかへる。龜は卽ち龜なり。これを以て種々判斷いたしましたるところ、この儀は正に君を守る名器の爲す業。さすれば當家の御重寶、靈龜の香爐紛失いたし、その虛に乘じて、邪鬼の業かと易者の訴へ。

官兵　靈龜の香爐は高橋彌十郎が預かり。もしや

俊行　紛失いたし〳〵、身が病症を發せしか。

官兵　こりや正しく

俊行　不屆きなる彌十郎、おのれ、どうしてくれうぞ。

ト赫として立ち上がる。

照太　アモシ、我が君、

秋之　それでは御病氣の

俊行　障りなす鹿盜人、重罪の程死に當れり。

皆々　すりや、彌十郎を

俊行　今に思ひ知らせてくれうワ。

ト唄になり、俊行、座敷を蹴立て、奧へ入る。皆々後に附きそひ、二重舞臺よりツイと殘らず入る。此うち上手の柴垣の蔭に皐月、聞いてゐて

皐月　外へ知らさぬ香爐の紛失。御前に現はれ、御糺明と殿樣の御怒り、夫の大事。こりや斯うしては居られぬわいの。

ト行かうとする後へ、官兵衞、出て

官兵　妹、どこへ行く。

皐月　エ、

官兵　彌十郎へ御前の樣子、知らせに行くか。

皐月　サア、なんのマア

官兵　いま聞く通りの御前の首尾、どうで命は無い彌十郎に、縁組させて置いては、其方も共々科の側杖。思ひ切つてしまへ。

皐月　サア。

官兵　思ひ切つて自筆の文で、去り狀くれと書いてやれば、所詮と思つて離縁するは知れた事。サア、書け。

トそこにある硯箱を差しつける。

皐月　そんならわたしが文さへやれは

官兵　オヽ、兄の爲、その身の仕合せ。

皐月　成る程、書きませう。

トこちらを向いて書かうとする。

官兵　インヤ、文言は身共が云はう。

皐月　すりや、仰せ書に。

官兵　われに書かせりや、御前の樣子ばかり、知らせてやるであらうが。

皐月　サア。

官兵　思ひ切るのが誠なら、身の云ふ通り、書け〱。

皐月　サア、なんと書くのでござんす。

ト是非なく筆紙を取る。

官兵　「ちよつと申入れ〱、この程兄官兵衞と試合の勝負に、不覺なるお働らきなされ候ふゆゑ、殿樣はじめ家中一統の物笑ひ、私しまでも恥辱に相成り候ふまゝ、夫婦の縁を切られ、早々に去り狀寄越し下さるべく候ふ」……それでよい〱。幸ひのこの文箱。

ト出す。皐月、中へ入れて封をする。

ア、コレ、權内めは歸してしまふ。誰れか使ひが

皐月　わたしが行つて來うかいなア。

官兵　何を馬鹿めが。……こりや遣りやうがある。

皐月　さうして誰れが

官兵　この泉水は、彌十郎が庭先へ流れ込めば、水に流して

皐月　すりや、この流れに使ひに

官兵　杜若の花を目印し。

ト一本折つて文箱へ差す。上の方へ流れ行く。

殊更に油斷はならぬ。身の片附くまで。

ト引ツ立てる。

皐月　ア、コレ、わたしを

兵官　身動きさせぬ、當座の縛め。

ト提げ緒にて縛らうとする。ちよつと立廻り、琴唄になり、チヨン〱と逆に廻して、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間、上の方へ寄せて二間の屋體、向う床の間、違ひ棚。上の方、三尺の鼠の壁。下手、窓。床の間の前の机を直し、この上に以前の槍の穗先飾り、下の方、植込み、行燈、四ツ目垣、枝折り戸。この外より舞臺前へかけて、御殿の流れの末、所々に杜若生ふ。尤も枝折り戸の外には、土橋掛けてあり、誂らへの道具。爰に高橋彌十郎、袴、着流し、手燭を持ち、流れの面を眺めて居る。蛙の聲。雨車の音、右の合ひ方にて、道具とまる。

彌十　古池や、蛙飛びこむ水の音。……こりや禪家の悟りの發句ぢやと、聞いては居れど、愚昧の身には、悟り得ぬこの彌十郎、泥にまぶれた名を立てうか。天より降らす天水の、濟らこの身の望みをとげうか。心定めぬ空の村雨。ハテ、風情ある、景色ぢやなア。

トこなし。右の合ひ方にて、下の方より以前の花を差したる文箱流れ來る。彌十郎、手燭にて透し見て取上げ

心無く、誰が折り取つて流せしと、取上げ見ればこりや文箱。この水上は、奥御殿のお泉水。何者が戯れか。但しは粗忽か。何にもせよ。

ト蓋を開き、中より一通出して

ナニ〳〵……「この程兄官兵衞と試合の勝負に、不覺なるお働らきなされしゆゑ、殿樣始め家中一統の物笑ひ、私しまでも恥辱に相成り候ふまゝ、夫婦の緣を切られ、早々に離緣狀寄越し下さるべく候ふ。」……ウム。

トいろ〳〵思ひ入れ。

こりや身が妻よりの文……この程御前に於て、官兵衞と晴れの試合に、不覺を取りしより何となく、妻皐月を連れ行き、其まゝ返さず、暇くれよと再三云ひ越す、兄めが無法は兎も角も、皐月に限り夫を捨つる、所存は無いと打捨て置きしが、流石は女の心變り。緣を切る氣になつたよな。……そりや此方も望むところ。後とも云はずたつた今、離緣のしるし、書いてやらうワ。

ト腹立ちの思ひ入れにて立ち上がり、右の文をちよつと繰返し見て

ハテ、心得ぬ文のとめ。かしくと書くべきを、のしくと書いたは。ウム

トいろ〳〵思案して

「津の國の、野宿の里に假寢して、松は根ごとにあらはれ

にけり。」……さてはこの程包み隱せしお預かりの……この身の越度が顯はれて、兄が手前に書いたる文か。ムウ。

トはつと當惑せしこなし。合ひ方、時の鐘にて、向うより下部曾平、口幕の形、頰かむりにて出て來り、花道より忍んで舞臺へ來て窺ふ。

その折からに今以て、立歸らぬ兄瀨左衞門が下部

曾平　曾平只今、罷り歸つてござりまする。

ト枝折り戶の中へ入り、おづ／＼蹲る。彌十郞キッとなり、ズンと立ち奧へ行かうとするを

アイヤ、彌十郞さま、そのお腹立ち、御尤もではござりますれど、

彌十　今さら何を云ふ事あつて。

曾平　サア、この程旦那のお供にて、多賀明神へ參りし折柄、お家の分地大學さまも御參詣、何か仔細のありさうな浪人めと御密談。樣子あらんと窺ふところ、その節紛失と承つた靈龜の香爐、持參の樣子。彼奴盜賊に極まつたと、取返さんにも先は曲者、追ひかけ追ひつめ一晝夜、くんづほぐれつ爭ふうち、最早夜陰の暗さは暗し、無念ながらも取逃がし、尋ねるうちにお旦那の御落命と、聞いて身も世もあられませうか。直ぐに陣屋で追ひ腹とは存ぜしが、あなたに一言申し上げたい儀がござつて、面押拭うて、罷り歸つてござりまする。

彌十　身共に一言申したいとは

曾平　卽ちこれが香爐の手がゝり。

ト口幕の密書を出す。彌十郞、取つて

彌十　「兼ねてお賴みなされし靈龜の香爐、盜ませ差上げ猶菅家の一軸は、程なく手に入れらくべく候ふ。」

曾平　手掛りをお渡し申し上ぐれば、旦那の追ひ腹、南無

ト腹を切らうとする。

彌十　コリヤ待て。なんで腹を切る。

曾平　なんでとは、お旦那を討つたるは小島林平。その座で相果てましたれば、仇を報ふ敵もなく、この世に用なき下郞が軀。

彌十　イヽヤ、用事も役目もある。

曾平　なんと。

ト合ひ方になり、彌十郞、床の間に飾りある槍の穗先を取つて來り

彌十　兄瀨左衞門どのゝ止めに殘りし、槍の穗先。

曾平　すりや、これが

彌十　この上兄へ奉公は、生き長らへて後世の營み。又一

三世坂東三津五郎の彌十郎

初演の錦繪

つには紛失の
曾平　寶の詮議を共々に
彌十　致すが未來の主人へ忠義。
曾平　然らば拙者は
彌十　暇をくれた。
曾平　これより直ぐに
彌十　いづくへなりと立退いて
曾平　身柄、身、寶の詮議。
彌十　兄が佛事を、弔らうてくれやれ。
曾平　ハツ。
ト合ひ方になり、曾平、花道へ行かうとする。向うにてバタ〳〵するゆゑ引返し、下の方へ入る。直ぐに時の鐘、合ひ方にて、向うより喜惣太、比良藏、照太郎秋之丞、いづれも股立ち、袴の形、十手を持ち、ツカツカと出て來り、直ぐに内へ入り
喜惣　高橋彌十郎、御前のお召し。
四人　立ちませい。
ト坂卷く。
彌十　何者かと存ずれば、御殿の御近習。何ゆゑのこの狼藉。
ト懷中の袱紗へ槍の穗先を包み、しつかりと懷中する。
喜惣　ヤア、狼藉とは何を以て。科あればこそ仰せを蒙むり
比良　斯くの如く我れ〳〵四人、迎ひとして罷り越したる上からは
照太　仔細は御前で相分らん。その身に覺えなきとても
秋之　容赦ならざるこの場の手詰め。動かず、去らず
喜惣　急いで御前へ
四人　立ちめされい。
彌十　ウム。その御糺明疾より承知。
ト奥へ行かうとするを
喜惣　ヤア、承知と口では云ひながら
四人　こりや、逃げるのか。
彌十　おてまへ方の所存に比べ、逃げるとは穢らはしい。如何なる罪科にあふとても、主君の御前、服改めて
四人　ムウ。
ト扣へる。彌十郎、屋體の内より上下を取出し、改める。四人氣を配り思ひ入れ。
彌十　直さま御同道仕らう。
秋之　御殿までも路次の用心。

四人　立ちませい。
ト十手を振上げ、取巻く
彌十　ハテ、仰々しい。
ト衣服を直す。時の鐘、唄にて、四人しづ／＼附け廻す。彌十郎悠々と、この人數向うへ入る。柴垣の蔭より權内、窺ひながら出で來り
權内　お旦那のお指圖で、彌十郎めがこの長屋、庭口から忍び込んで、しやツかゞんで樣子を聞けば、瀨左衞門を殺したは、矢張り小島林平と、思つてゐる曾平への話し、これではあなた方も枕を高く寢られるといふもの。この事申し上げたら、一かどの御褒美。一刻も早く。
ト行かうとする。曾平出て
曾平　待て。わりやア笹山の中間權内だな。
權内　瀨左衞門が奴曾平だな。
トぎよつと思ひ入れ。
曾平　わりやア何しに爰へ來た。
權内　サア。……こりやア何よ。おらがお旦那の妹御は、爰の内の御新造。ところでこの頃お里へ歸つてゐるから、皐月さまからお使ひに來た。
曾平　ムウ、そのお使ひに來た者が　瀨左衞門を殺したは矢ツ張り小島林平と、云うてゐるとはなんで吐かした。
權内　ヤア。
曾平　コリヤ、うぬも何か仔細のありさうな。サア、尋常に腸をさらけ出せ。
權内　イヽヤ、何も云ふ事は無い。お旦那の御用が遲なはる。そこを退け。
曾平　イヽヤ、吐かさにやア、この曾平が、腕かぎり云はせるぞよ。
權内　この權内も根かぎり、云ふまいが、どうする。
曾平　斯うする。
トかゝる。
權内　どつこい。
トこれより誂らへの合ひ方を借りて、兩人タテあつて、見得になる、チョン／＼と道具まはる。
元の御殿、二重眞中に俊行公、褥、脇息にかゝり居る。左右に照太郎、秋之丞、比良藏、喜惣太、附添ひ居る。玄蕃立ちかゝつて居る。彌十郎、留めて居る。所々に燭臺を照らし、管絃にて道具納まる。
彌十　こりや玄蕃、なんとおしやる。

玄蕃　知れた事。日頃、武藝の廣言をしながら、この程、笹山官兵衛との試合に、物の見事に打負けた不覺者。遠慮申しつけられたら、自滅すればよい事に、えゝ腹も切りかねる卑怯者ゆゑ、死やうを教へてやらうと思うて

ト又かゝるを突き廻し

彌十　イヽヤ、勝負は時の運次第、試合に負けたが恥辱とあつて腹切らば、侍ひの人種は盡きる。ちつとも恥とは思はぬ〳〵。武士の恥は、不忠不義より外には無いワ。

玄蕃　イヽヤ、不忠がある。

彌十　なんと。

玄蕃　大切なお預かりの、靈龜の香爐、なぜ失つた。

彌十　ヤ、すりやその儀を

玄蕃　御本家の寶、聞捨てならず。身が今日、お屆けに參り、御前にも疾より御承知。

彌十　ハツ。

ト俊行を見て平伏し

御前へ申し上げまする。申し譯にはござりませねど、先月二十九日、雨風烈しき夜に紛れ、盜賊の入つたるにや、お預かりの香爐紛失。お屆け申し上げ、御免を受けて切腹とは存じたなれど、お耳に達せぬ其うちに、ならう儀ならば詮議して、事納めたく存ずれど、遠慮の身なれば他行も叶はず、心盡しも無下となつたる今日のお咎め。さりながらこの儀に於ては、他家は元より、外に存ぜし者もなき香爐の紛失。如何いたして玄蕃には、御存じでござつたな。

玄蕃　ヤ。

彌十　サア、根を押し尋ね問ひたいところを、御前を憚り……この上は寶の詮議、日延べの儀を。

俊行　ヤア、いはれざる願ひ。この身が病中にかゝる珍事。詮議をおのれが手を借り、致さうや。われ國主の威勢を以て、暫時がうちに尋ね出だすワ。

彌十　然らば拙者めは

俊行　死を以て罪を償ふ今日の刑罪。

彌十　すりや、彌十郎は

俊行　身が手討ち。

皆々　エヽ。

ト悄り。

玄蕃　こりや、さうなければ叶ひますまい。その御意が出る上は、御前のお手を下さるゝまでもない。

皆々　我れ〳〵が

ト立ちかゝる。
俊行　イヤ、病中の鬱散。勇氣を試す身が手のうち。
皆々　然らば御前が
俊行　其方どもは皆次へ。
皆々　ハツ。
ト管絃になり、玄蕃、思ひ入れあつて先に、喜惣太、比良藏、秋之丞、照太郎、附いて奥へ入る。
俊行　高橋彌十郎。
彌十　ハツ。
俊行　罪の疑はしきは刑せずといへど、正しく其方は重き罪人。今手にかけて討ち果すが、そちや命が惜しいか。
彌十　こりや、改つた君のお尋ね。生きとし生けるもの、命惜しまぬ者がござりませうや。併し、犯せし罪科か、但しは主命、義に依らば
俊行　命は芥よりも輕し
彌十　また死は易し。生は難し
俊行　すりや、今日の其方が命は
彌十　俗に申す、盗人の暇はあれど、守り手の隙を窺ひ、寶を失ひしは誠に天災。
俊行　無成敗と思ふがやまで。
彌十　イヤ、全く左樣には存ぜねど、この身にも大切な
俊行　ヤ。
彌十　サア、願ひもあれど、主と病。
俊行　勝たれぬ事と覺悟して
彌十　イザ、御存分に、御刑罪。
ト合掌して摺り寄る。俊行、思ひ入れあつて
俊行　イヤ、その命、助けてくれう。
彌十　ヤ。
俊行　刀を穢すと、近習の者を呼ばざるは、其方に密々、賴みたき一儀あつて。
彌十　ハツ、お賴みとは畏れあり。主從になんの御遠慮。あま逆さまた儀なりとも
俊行　早速承知、先づ滿足。賴みといふは身が病症。其方といふ名醫ならねば、本腹いたさぬ晝夜の苦しみ。なんと療治いたしてくれまいか。
彌十　して、御前の御病症は
俊行　戀病みぢや。
彌十　エ。
ト思ひ入れ、合ひ方になり
俊行　サア、加茂川の水、山法師、叶はぬものはこりや

昔。いま身が威光を以てなさば、雲に棧、水の月も取らんは易けれども、只任せぬは戀の一字。胸を焦し、命も絶ゆる我が迷ひ。なんと晴らさせてくれまいか。

彌十　ムウ。さほどまでに御心を苦しむる、して、その戀ひ人は

ト摺り寄る。倭行、思ひ入れあつて、前へ流れの杜若を一本折つて

倭行　主ある花も、まツこのやうに手折らせい。

彌十　すりや、その

倭行　杜若の

彌十　色香を見する

倭行　皐月雨。

彌十　さては女房

倭行　皐月の闇に迷ふたわやい。

ト此うち後の襖をあけ。官兵衞、樣子を聞き居て

官兵　すりや、殿には

倭行　ヤ。

ト襖ピッシャリ閉す。

彌十　イヤ、殿の御病氣、拙者が配劑。

倭行　其方が醫藥を以て

彌十　御本腹させませう。

倭行　ムウ。承知いたして身も滿足。さりながら、藥種をつかふ花の一本。

彌十　木折な振りも矯め直す

倭行　花拵らへは

彌十　拙者が手際。

倭行　水を揚げるか。

彌十　流れるか

倭行　手活けに詠めて

彌十　御養生。

倭行　床の間敷かせて、待つて居るぞよ。

ト唄になり、倭行、杜若を彌十郎の前へ拋り、思ひ入れあつて奥へ入る。彌十郎、種々思案して居る。合ひ方彈きつゞけにて、下座より皐月出て來り、彌十郎を見るより

皐月　ヤア、我が夫、御無事でお出でなさんしたかいなア。

ト縋り泣く。

彌十　ハテ、仰山な。なぜ其やうに云やるぞ。

皐月　サア、飽きも飽かれもせぬ仲を、あの兄さんの胴慾な。添はする事はならぬと、呼び寄せたまゝ内へ留め、

思ひ切る思案せいと、毎日云はるゝその悲しさ、逃げて
行きたいにも遠慮の身。戸締めとやら、部屋に泣いてば
つかり居りましたわいなア

彌十　それに又、御殿へはどうして。

皐月　サア、あんまり心の遣る瀬なさ、あの中間の權内を
騙し、送つてもらうとて、勤めてゐた折朋輩の、あの卯
の花さん、よもぎさんが、わたしをお前の所へ、返して
下さんすやうに云うてもらひたさ、御殿へ上がつたとこ
ろがなう

彌十　上がりやつたところが

皐月　折惡う兄さんに逢うて、叱らるゝやら、云はるゝや
ら、まだそれよりは、モシ、この泉水から文箱を流しまし
たが、屆きましたかいなア。

彌十　如何にも。緣切つてくれといふ其方が文。ありや誠、
書いたのか。

皐月　サア、あれには段々譯がござんす。……お預かりの
靈龜の香爐紛失の事、殿樣のお耳へ入つて、重いお咎め
もあらう樣子ゆゑ、ちよつとお知らせ申したいにも、側
には兄さん、お前の緣を切る文、文言は仰せ書、仕方が
なさに文のとめ

彌十　のしくと書いたでこの身の科の、顯はれた事、承知
いたした。

皐月　サア、その事で今お手討ちと御近習の噂、それにマ
ア、いつに變らぬ

彌十　イヤ、お手討ち却つて、御前は上首尾。

皐月　エ、。そりやマア誠でござりまするかいなア。

彌十　サ、お預かりの靈龜の香爐は、一體御機嫌に入らぬ
品、よう紛失させたとお喜び。また其方の兄官兵衞と試
合に負けたも、當時靜謐、弓は袋、太刀は鞘へ納めた世
の中、武藝は要らぬ、よう負け居つたとお褒めのお詞
なんと粹殿樣ではないか。

皐月　エ、マア、それが定なら、エ、、有り難うござりま
す。

ト奧をいろ／＼拜み

その又有り難い次手、わたしが緣も兄さんの得心するや
うに、お願ひ申して下さんすりやよかつた。

トいろ／＼喜ぶ。

彌十　ア、なんにも知らずに

皐月　エ。

彌十　サ、其方に知らぬが、まだめでたいは、御加增まで

下されうとある。
皐月　アノ、御加增まで
彌十　まだある。……お屋敷へ葺屋町の芝居を呼んで、家中の者に見せようと御意なさる。
皐月　アノ芝居を
彌十　まだある。……屋形船を湖水に浮め、家中殘らず涼み遊山に遣はさるゝと御意なさる。
皐月　エ、マア、それほどまでに家來を惠む殿樣、有り難いと云はうか、勿體ないと云はうか。どうして御恩の程が
彌十　送らうと思やるなら、申しつける役目がある。
皐月　アノ、女子のわたしに。
彌十　サ、女子でなければならぬ忠義。
皐月　そりやマア、どういふ
彌十　お伽しやれ。
皐月　アノ、お側の
彌十　イヽヤ、お寢間の
皐月　エヽ。
　ト恟り、思ひ入れあり。
アノ、わたしに、

彌十　驚ろくは尤も。この程殿の御病氣は、其方を戀病み。
皐月　エヽ。
彌十　サア、花に准へてお命も、絶ゆるばかりとわりない御諚。得心なせばこの身も安穩。違背に及べば可愛さ餘つて寶の紛失、重き咎めに命まで、召されかねぬ御所存ゆゑ、君を思ふも身の大切、如何にもお伽をさせませうと、二言と云はずお請けしたが、なんと其方も
皐月　得心せいでござんすか。
彌十　夫とお主の、爲を思うて。
皐月　イエ〳〵、なんぼ夫とお主の爲ぢやとて、現在お前といふ男のある身に、惚れるといふやうな滅相なお主樣
　ト居丈高になろを
彌十　ヤレ、聲が高いワ。
　ト口をふさぎ、あたりを見廻しながら
サア、道を守る心からは、非道のお主、邪まの殿とも、思やるは尤もぢやが、戀に上下の隔てなく、そこが譬への思案の外。……身共ぢやというて、二世を掛けたる女房に、外の者なら直さま刃傷、刀で返事もしかねぬど、何を云うても主の一字。コレ、殿には其方に戀ひ焦れ、

お命にも關はる御病氣、それを癒すは其方といふ戀の妙藥。

皐月　サア、御病氣のお爲とあらば、この身の生膽を取られうが、骨を削り、身を裂かれうが、ちつともいとひはせぬけれど、それより辛い女子の操を破れとは、あんまりなお主の御諚。

彌十　すりや、これ程に云ひ聞かしても

皐月　この事ばかりは、堪忍して下さんせいなア。

彌十　ムウ。

ト思ひ入れ。本調子の合ひ方になり、彌十郎、杜若の葉を取つて前なる池へ流す。皐月思ひ入れ。

コレ見よ、皐月、唐土の貨狄といふ者、柳の一葉水に浮み、流るゝを見て、實にもと思ひ初めしより、工みて舟を作るといふ。君は船、臣は水。……サア、その水の心一つで、舟を浮べうと、碎かうと、其方がこの場の返事次第。渡りに船の忠義と云はすか。情嵐の不忠と云はすか。

皐月　サア

彌十　船の文字は公にすゝむる。これ程云へどすゝますば、身が腹切らうか。

皐月　サア

彌十　サア、命の瀬戸、心の樞柄、錨おろして、返事をしやれ。

皐月　おやというて

彌十　得心なければ是非に及ばぬ。お請け申せし殿への云ひ譯。さうぢや。

ト一腰を拔かうとする。

皐月　コレ、待つて下さんせ。

彌十　イヽヤ、退け。

トいろ〳〵と揉み合ひ、立廻りあつて

皐月　モシ、お詞に從ひませう。

彌十　なんと。

皐月　サア、不忠とあるゆゑ、是非に及ばず。

彌十　すりや、得心して、

皐月　お伽申したその上は、所詮お前とモウ……サア、尼法師とも身を變へて、浮世を捨てると覺悟の得心。

彌十　如何にお主の爲ぢやとて、女房に貞女も身も捨てよと

皐月　勸めなさんす心の中。

彌十　承知從ふ其方の心底

天保八年七月森田座所演

澤村訥升の彌十郎　坂東玉三郎の皐月

皐月　三世のお主
彌十　二世の妻
皐月　比べて見ればこれ程にも
彌十　忠義ほど世に
皐月　憂きものは
二人　無いわいなう。
　トほろりと思ひ入れ。奥にて五ツ半の時計鳴る。
彌十　ありやお夜詰めの引けるお時計。サア〱、浮かぬ顏では濟まぬ。涙も拭いて顏直しや。鏡を持つて居やるか。
　ト燭臺を持つてくる。
皐月　ハイ〱。
　ト濟まぬ思ひ入れにて、懷中より鏡を出し、顏を直すこなし、いろ〱あつて
ア、、尼になれば、鏡もこれが身納め。
彌十　サア、御前にもお待ちかね。浮き〱として早うお寢間へ。
皐月　そんなら、モウ
彌十　密かに身が召し連れる。よう顏直しやつたか。
皐月　ハイ。

彌十　それ又、涙で白粉が
皐月　なんのこの身にけはひ化粧。賣り物には
彌十　イヤ、さう云やるな。
皐月　エ。
彌十　イヤ、お伽には、花飾れぢや。
　ト苦笑ひする。皐月も、しいなりとなる。琴唄になり立ちかれる皐月を、無理に彌十郎手を引いて、兩人思ひ入れあつて、靜かに下座へ入る。矢張り琴唄にて、この道具を靜かにぶん廻す。
　本舞臺、向う一面に平舞臺の金襖、結構なる欄間。上下、袖にて折り返し、同じ欄間、金襖。鐙櫃飾りあり。誂らへの道具、所々に燭臺をともして、眞中に金屏風立てゝある。右の琴唄にて道具とまる。
　ト合ひ方にて、下手襖を明けて、あざみ、早百合、よもぎ、以前の形にて、鼻紙臺、烟草盆、茶臺、茶碗を載せ、めい〱これを持ち出で來り、ヒソ〱思ひ入れあつて
あざ　早百合どの、殿樣の御病氣は、彌十郎どのゝ女房、あの皐月どのに戀病みとは、きつい惚れやうぢやないか

いの。
早百　ソレイナ。日頃の堅いお顔も、のろいお顔に見ゆるわいなア。
よも　サア、お主様の事ぢやによつて、皐月どのも得心して、今宵お寢間のお伽とやら。
あざ　あの美しい皐月さんを、殿樣が抱いておよると思へば
早百　此方もいつそ
あざ　オヽ、けなる。
ト夢中になる
早百　コレ。
ト囁き、思ひ入れあつて、右の道具を屛風の中へ運び、よろしくこなしあつて、上の方の襖を明け、奧へ入る。
ト矢張り合ひ方にて、下の方の襖明け、彌十郎、皐月が手を引きて出で來り、皐月、懷へ嫁がる心、彌十郎いろ〳〵と呑みこます思ひ入れにて、なだめる。屛風をツツと明ける。内に結構なる夜着・蒲團、この上に俊行公、莨のみ居る。彌十郎、ハッと平伏する。
俊行　彌十郎か。

彌十　ハッ　お望みに任せ皐月を
俊行　過分。……休息せい。
ト琴の合ひ方になり、彌十郎、皐月に目くばせ〳〵して、屛風を立て、ホッと思ひ入れ、案じられるこなし樣々ある心。思ひ切つてツイと下の方、襖の中へ入る。
皐月、屛風が蔭より彌十郎が入るをとつくと見て、俊行が顏を見てにつこり、いろ〳〵會釋して、ト、俊行に寄り添ふ。俊行、思ひの外なるこなしにて
俊行　ハテ、家中の妻と申すのは、無造作なものぢやな。
皐月　サア、此やうに致しましたら、さぞや御前にはお下げすみ
俊行　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。これまで側の女子や妾どもは、兎角打解けいでもどかしかつたに。
ト皐月、恥かしきこなし。此うち、最前より、上の襖より、官兵衞、出て來り、屛風の外にて樣子を立聞いて居る。
俊行　不便な奴の。以後目を掛けて遣はす。望みがあらば何なりと望め。
皐月　サア。
ト云ひかねる。

倭行　ハテ、遠慮に及ばぬ。疾く申せサ。
皐月　左やうなれば、どうぞお取立て下さりませい。
倭行　夫彌十郎をか。
皐月　イエ、兄官兵衞を
倭行　ヤ。
皐月　サア、義理ある兄と申し、どうぞ人に勝れた立身を
倭行　ムウ。すりや、彌十郎には
皐月　愛想が盡きました。
倭行　アノ、夫に
皐月　盡きまいものか。口では二世といひながら、貞女を破れ、操を缺けと、水臭い、心にふツつり
倭行　さすればいよ〳〵、官兵衞に
皐月　サア、わたしが身は兄次第、兄さへお取立て下さりますれば、お宮仕へも心のまゝ。
倭行　ムウ、取立てゝ遣はさう。家老役に申しつけうか。但し領地を分け、大名に致さうか。
皐月　アモシ、それは兄が心を聞きました上。
倭行　其方が望み次第。なんにせい、官兵衞を呼んで
ト云ふうち
官兵　イヤ、笹山官兵衞、御前の宿直。
トつか〳〵と出て、平伏する。
皐月　ヤア、兄さんかいなア。
官兵　オヽ妹、出かした〳〵。最前からの樣子、あれにて殘らず承つた。殿のお伽、如何と案じたに、夫彌十郎と緣切つても、御奉公申したい詞の端々。それが彼の今流行る、名を取らうより德、兄の事まで御前へ執成し。忝ない〳〵。
皐月　そんならお前も喜んで、あの彌十郎どのと
官兵　夫婦の仲を身共が裂く。
倭行　主の威光で承知は致せど
皐月　主ある身では遠慮がち。
倭行　心遣ひに思うたが
官兵　枕を高くおよらせまする。
倭行　オヽ、出かす〳〵。彼れに寢間の伽をさすれば、官兵衞は外戚同然。サア、なんなりと、望め〳〵。
皐月　サア、そのお願ひの望みは
ト皐月、倭行に嫌らしくもたれ、官兵衞が顏を見る。
官兵衞、いろ〳〵心迷ふ思ひ入れにて
官兵　拙者が立身のお願ひは、勝手の重役、金奉行か。
皐月　右のお役に

官兵　トもたれる、俊行うなづくゆゑ
イヤ〳〵。ではない、御用人、御家老
ト皐月こなし、俊行うなづく。
イヤ〳〵、それではあまり慾の深いやうで思し召しも如何。萬石以上樂勤めか。……但し分地を貰うて大名になるか。
ト此うち、矢張り右の思ひ入れ。官兵衛、圖に乘り
イヤ、いつそ一足飛びに、殿には御隱居なされ、御家督を下さりませい。

俊行　イヤモウ、なんなりと望み次第。其方が心任せに取計らひ、家中どもへ、異議に及ばぬ墨附、彌十郎にと認め置いたるに、相手かはつて官兵衛、そちや仕合せ者ぢや。
ト手箱より墨附を出して渡す。

官兵　このお墨附頂戴の上は

俊行　今より其方は多賀の家督。

皐月　殿樣には御隱居。

官兵　ア、有り難うござりまする。
ト此うち、下手の襖より彌十郎、三方に腹切り刀を載せ持ち出でゐる。この時ツカ〳〵と出て

彌十　御家督の殿、イザすつぱりと、お腹召されい。
ト三方を突きつける。官兵衛、悄りして

官兵　ヤア〳〵。こりや彌十郎、なんで身共は腹切るのだ。

俊行　仔細はそれなる墨附に。

官兵　なんと。
ト官兵衛、墨附を開き
ナニ〳〵。……「多賀の太守先祖の眞筆、家の一軸紛失の科によつて、切腹申し付くるものなり。……管領印」
ヤア、こりやどうだ。

彌十　この度武將繼目に、諸國の寶お改め。先達て管領當國へお入りあつて、その旨仰せ渡され、吉日を選み、一軸御高覽に入るべきところ

俊行　その一軸は高橋瀬左衛門へ預け置きしが、右瀬左衛門は横死なし、最前見れば眞赤な似せ物。行くへ知れざる菅家の正筆。

彌十　これ即ち太守の越度、御家督の殿、腹切つて申し譯なされい。

官兵　ヤア、すりや家督になれば腹切らにやならぬか。

俊行　それこそ隱居へ即ち孝行。

官兵　イヤ、つい口拍子に乘つた家督。もう家督は蒔き直

しだ。
彌十　イヽヤ、一旦家督と殿の御諚は、金鐵同然。異議に及ばゞ、手を持ち添へて切らさうか。
官兵　サア、それは
彌十　サア〳〵。なんと。
官兵　アヽコレ、待つた。身に火が附いたら云つてしまはう。菅家の一軸は瀨左衞門を手にかけ、分地大學どのが摺替へ取つた。
俊行　それを聞かうばつかり。ソレ、高橋、縛せ。
官兵　ヤア。
ト逃げ出すを、彌十郎、引留める。ちよつと立廻り、見事に投げ
彌十　官兵衞、動くな。
トむごく引据ゑる。
官兵　ヤア〳〵、そんならこれも
彌十　オヽ、殿が女房に御執心、管領の指圖も、試合に負けたも皆僞はり、落つるところは一軸の、行場を尋ぬる太守の御賢慮。
俊行　御先祖菅公の眞筆は、多賀に於て一の寶。瀨左衞門横死より眞赤な似せ物、時に臨んで右の一軸お改め。南無三方。この儀露顯に及ぶ時は家の瑕瑾。日延べせんため病氣と稱し、寶の詮議。皐月に戀慕の戀病みも、汝の心を探らん爲。
皐月　血は分けねども、義理ある兄。嘘僞はりの請合ひも大事の夫が兄上の、慥かにそれと知れざる敵、云はす爲との事ゆゑに、心に思はぬ拵らへ事も、夫大事夫大切と必らず恨んで下さりまするな。
官兵　すりや、大學どのゝ企みのあらまし、身共に云はさう爲であつたか。
俊行　一軸、香爐、
彌十　兄の敵も
皐月　それと知れたる大學どの。
官兵　イヽヤ、今のは云ひ誤まり。寶も、敵も
彌十　知らぬとは云はさぬ、證據の密書。
ト一通をさしつける。
官兵　ヤア、その一通まで手に入つたか。もうこの上は
ト拔いて切つてかゝる。彌十郎、後に飾りある鎧にて受けとめる。烈しき立廻りのうち、蓋も取れ、鎧櫃の中へ官兵衞、轉げこむ。直ぐに彌十郎、蓋をシヤンとして、錠を下ろす。

皐月　これは。
彌十　取逃がさぬ繩目の代り。
俊行　事落着まで、追つての糺明。
皐月　心柄とはいひながら、命ばかりは
彌十　今日の御奉公に替へましても。
俊行　イヤ、願ひはまだあらう。
彌十　すりや、拙者が心中を
俊行　察して只今、暇をくれる。
彌十　アノ、願ひの通り
俊行　家門の大學、教へはせぬが、討たずばなるまい。
皐月　そんなら兄上の敵を
彌十　無念とゞまる槍の穂先。
　ト以前の槍の穂先を出して、口惜しき思ひ入れ。
俊行　サア、汝が無念を察しやり、我れに敵たふ大學が惡事、火急に面迫いたさぬも、何卒本意を
彌十　サア、本家を窺ふ烏滸の曲者、事荒立てゝは寶破却も計られず。時節を待つて取返し、惡人退治に家を出づれば、三世の縁も、まツから切つて
　ト彌十郎、髻を切る。
皐月　これは。
彌十　家を出づるは出家修行、最早主なき世捨て人。佛門堅固に、兄が迷ひを
皐月　晴らす回向を、どうぞこの身も
彌十　イヤ、大事の發心に、むざと女を連れられうか。
俊行　ハテ、佛經にも五者佛身如何、女身女人成佛ありと聞けば、例へ形は變へずとも、皐月は共に法の道連れ。
彌十　ハツ。君のお許しある上は、彼れめも共に
俊行　サア、法を合はする文字を其まゝ、合法と法名改め
彌十　三界無住に宿りを極めず
皐月　或ひは巡禮、遍路の境涯。
彌十　身は雲水と
皐月　思し召し
二人　下さりませう。
俊行　オヽ、出かした合法。
二人　我が君樣。
　ト後へ玄蕃、あざみ出て居て
玄蕃　すりや、御主人を敵と
あざ　覘ふか。

ト彌十郎、皐月へかゝらうとするを、俊行、一腰を拔いて、ポン／＼と切る。

彌十　これは。

俊行　其方達夫婦を手討ちと見せるも、油斷さする手段の死骸。

彌十　何から何まで

玄蕃　ところを。

トよろぼひ起きてかゝるを、彌十郎、皐月、引きつける。

俊行　修行者二人へ、寸志の手の內。

ト大小を彌十郎、皐月へ遣る。

彌十　御報謝渚かに

ト兩人を切り倒し、止めを刺す。

俊行　天晴れ見事。

彌十　して、この死骸は

俊行　二人が身替り。

彌十　然らば此まゝ。

俊行　堅固で暮らせ。

彌十　我が君樣。

俊行　コリヤ。……死骸は物を

ト左右の燭臺を扇にて吹き消す。

彌十　ハツ。

ト木の頭。

俊行　云はぬものぢや。

ト思ひ入れ。彌十郎、皐月よろしくこなし。　ひやうし幕

幕の外、花道の附けぎはへ樋の口を出す。時の鐘にて、右の樋の口より、官兵衞、以前の形、頰冠りにて、水に濡れて出て來り

官兵　危ない所を鎧櫃の、底をくりあけ、やう／＼爰までハテ、命冥加なおれだなア。

ト行きかける。樋の口の蔭より菖蒲革の侍ひ一人出て組附き、立廻りあつて、右の樋の口へポンと投げ込み、時の鐘にて官兵衞、向うへ走り入る。あとシヤギリ。

幕

四幕目　四條河原の場

役名――手代、傳三。蛇遣ひ、九介。非人、した

み酒の三。同、鍋太。關口多九郎。非人、胡麻八、太平次女房、お道。非人、うんざりお松。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、上の方、蒲鉾の非人小屋、正面筋違ひに見たる黒塀、忍び返し、枝垂れたる柳。二階座敷に掛け行燈、下に水茶屋、楊弓場。すべて四條河原の景色。爰に太平次女房、お道、前垂れ掛けにて茶を運び居る。よき所に胡麻八、鍋太、手妻の非人にて、薦の上にいろ〳〵手妻の道具を置き、立ちかゝり、饒舌つて居る。仕出し大勢、床几にかかり居る。この中に、關口多九郎、編笠浪人にて袖乞ひの體。傳三、道具屋の番頭の拵らへ、名酒の德利を持ち見物して居る。辻打ちにて幕明く。

胡麻　さて昨日天道樣がおくれましたゆゑ、小屋がしめつて居りますから、今日は爰で御機嫌を取ります。思へば私しは、毎日々々釘や針を食べますが、金佛にもなりませぬてネ。……ハ、、、、。マア何か一つやらかしませうから、よく出來たら彼の物をナ。……サア、鍋公、やつてくんな。

皆々　サア〳〵、所望ぢや〳〵。

ト これより鍋太、三味線を取上げ、鏡の合ひ方を彈く。胡麻八、手妻あつて

胡麻　先づ、首尾よくお騙されなすつて、おめでたうござります。

皆々　イヤ、奇妙だ〳〵。サア〳〵、錢をやるぞ。

ト 辻打ちになり、めい〳〵錢をやつて、仕出し別れて入る。あと楊弓の音。

傳三　時に、お道さん。段々夏になりました。さぞ忙がしうござりやせう。どうだね、御亭主の太平次さんは、旅仕事にでも行かれましたかえ。

みち　イエ、まだよい仕事もござりませぬが、この間は何ぢややら、大學さまとやらのお屋敷から、度々お人が參りますわいな。

傳三　アヽ、その左枝大學さまならばお大名、常から短氣な殿樣ゆゑ、住吉の濱屋敷へ、押籠め同然と聞きましたが、大方、その大學さまであらう。

ト 多九郎、これを聞き

多九　コレ〳〵、番頭。

傳三　オヽ、多九郎さんかえ。

多九　そんなら何か、大學さまは押籠め同然の御身分か。それぢやア猶々、貴樣の頼んだ香爐を、賣切つてしまはずばなるまいわえ。

傳三　サア、あの香爐を與兵衞どのが、見ると其まゝ、五十兩で買ふ程に、決して外へ賣るまいと、十兩といふ手附けを渡して、後金は明日明後日の積りゆゑ、掛先きを集めに、今日の夜船で大坂へ行き、內本町の日野屋から金取つて戻ると云うて、疾に內を出られたわいの。

多九　そんなら、今日明日には、後金の四十兩、納まるに違ひないの。

傳三　キツとわしが金取つてやりませう。その代り、コレ、口錢を一割五分も取らにやアならぬぞよ。

多九　ハテ、そりやア承知サ。

みち　モシ、傳三さん、お前方、爰に話してござんすなら、ちよつと見世を見て居て下さんせ。

傳三　オイ〱、ちよつとのうちならよいが、早く歸つておくれよ。

みち　ちよつとわたしや、あの扇長から、仕立て物の直しがあると云うて呼びに見えたゆゑ、直ぐに行つて來るわいな。

傳三　エヽ、かみさん、仕立て物をするぢやまで。夫婦稼いで金の置き所があるまいに。

みち　サア、わたしも土藏を建てうと思ふわいな。ホヽヽ。ちよつと行て參りまするぞえ。

ト辻打ちになり、とつかはと下座へ入る。

傳三　コレ〱、胡麻八。てめえ達の仲間に、蛇遣ひの女があるぢやアねえか。

胡麻　ハイ、慥かにござりやした。ナア、鍋太。

鍋太　アイ、そりやア女ぢやアござりませぬ。蛇遣ひの男でござりやすが、稼ぎに出やしたが、もう歸るでござりやせう。

胡麻　旦那、その蛇遣ひに御用がござりやすかえ。

傳三　サア、ちつと頼む事があるが、マア〱、歸つた時分に來て見ようわえ。イヤ〱、見世を見てくれろと、あの嬶アめが頼んで行つた。

多九　コレ〱、番頭、どうでおれが爰に居るから、氣遣ひなしに行つて來さつしな。

傳三　そんならお前、頼みましたぞえ。蛇遣ひが來たら、ちつと待たせて置いて下され。

鍋太　アイ〱、畏まりました。

初演の繪番附

傳三　ドリヤ、ちよつと行つて來ようか。

ト辻打ちになり、德利を提げ、とつかはと入ろ。矢張り鳴り物にて、向うより九介、非人の形にて、蜜柑籠へ蛇を大分入れ、これを抱へ、跡より、したみ酒の三、同じく非人にて、一升樽と梅干桶にお剰りを入れ、捨ぜりふにて出て來り、舞臺へ來て

三　どうだ、胡麻八、今日は貰ひがあつたか。

胡麻　イヤモウ、天氣のせゐか剛氣に貰つたて。

鍋太　三さん、そりやア生酒か、砂ごしか。

三　ナニ、したみぢやアねえ、一升おれが奢りサ。

九介　押の強い奴ぢやアねえか。また富川町のお剰りであらう。

多九　コレ〱、てめえ達の境涯は氣散じでいゝの。なんと、おれも仲間にしてはくれまいか。

九介　ナニ、仲間になりたいえ。旦那とした事が、素人衆の目からは樂のやうにも見えますが、モシモシ、御覽じませ。

ト蜜柑籠の蛇を見せ

こんな不氣味な物を、商賣なればこそ、懷へ入れたり、襟へ卷いたり、イヤモウ、とつけもない商賣でござりますよ。

三　そりやアさうと、姐えどのは小屋にか。なんだかこの頃は氣が浮かねえやうだの。

胡麻　ハテ、そりやア戀煩らひとやらであらうよ。

鍋太　なにか、上下者の太平次にか。

多九　ヤアなにか。太平次に、あの小屋の女が

九介　モシ、姐えどのはわし等が頭分サ。お前も近附きになつて、仲間へ入りたくば賴んで見なされ。

多九　近附きにして下され。

九介　呑み込みました。

ト小屋の側へ來て

コレ、姐御、寐たのか。ちつとマア爰へ出さつしやいな。

ト垂れを上げる。內にうんざりお松、女非人の拵らへにて、うたゝ寢して、思ひ入れあつて

まつ　アヽ、てめえ達は、もう歸つたのか。大分お怠けだの。コレ、また日上げを貸せと云ふまいよ。

三　なにサ、今日は大浮きサ。そこで姐御、一升買つて來ました。

まつ　話せるの。

九介　して、今日はどうだ。心持ちはようござんすか。
まつ　今日はちつといゝの。コレ、見りやア、爰で稼がつしやる浪人さんが來て居なさるが、なんぞ用か。
九介　姐御、聞かつしやい。わしらが仲間になりたいとよ。
まつ　ナニ、侍ひを打ッちやつて、蒲鉾小屋の附合ひがしたいとかえ。そりやア好い心掛けだね。
胡麻　モシ〳〵、お詞の中だが、わしらが仲間へ入らつしやつても、藝が無くつちやアいきませんよ。
鍋太　それサ、乞食もお前、藝が肝心でござりやす。
多九　サア、何も藝はないが、身共四つ竹を打つて。
胡麻　そいつアお前、乞食にやア持つて來い山櫻。姐御、仲間へ入れて進ぜさつしやい。
まつ　ほんに、それほど乞食になりたくば、仲間にしてやりやせう。
多九　イヤ、それは近頃忝なうござる。して、仲間入りがあらうな。
まつ　アイ、乞食の仲間入りといつて、別して大層な話もないね。わつちらも腹からの乞食でもござりやしねえ。元は近江で、百姓の娘、ほんの事だが、これでもお前女、男を使つた大百姓の娘サ。コレ、これを見な。
ト首に掛けた守の中より書き物を出し
なんの役にも立たぬ反故同樣だが、また何ぞの時に要らうかと、枕紙にもしねえが、浪人さん、讀んで見な。
ト多九郎へ渡す。
多九　なんだ。……「長德三年九月五日の誕生、江州千野村德太夫娘、まつ。」……ア丶、近江の生れだの。
まつ　左やうサ。百姓の子だが、あまッ子の時分から、田植ゑだのなんのと土ほぜりが嫌えでね。十四の年に、村の番太と色事で國を逃げて、それからモウ、親には勘當され、あつちこつちの手へ渡つて、宿場へも出たり、切りも稼いで、今年二十五になるが、これまでに亭主も十六人持つた。着ッきにけりが蒲鉾へ落ちたね。ほんの事だが善い事は知らねえが、惡い事といつたら、如才のある姐えぢやアねえよ。コレ、餘ッぽど爰も細つて居るわな。
ト襟を叩いて思ひ入れ。以前の書き物を守へ入れ、首へ掛ける。
多九　成る程。如才のあるのぢやアねえわえ。
九介　見なさい。道樂をしぬいたから、色氣があるわな。

三　姐御も、あの太平次どんに、餘ッぽど伸びて居るの。
まつ　エヽ、馬鹿を云へな。
多九　アヽ、あの侍ひあがりの太平次か。
まつ　エヽ、あの人は侍ひかえ。
多九　ありやア、徒士奉公した者サ。
まつ　道理こそ武士らしいところがあるなう。
胡麻　コレ〱、姐御、新入りがあるに、なんと酒でも始めようではねえか。
まつ　そいつアよからう。併しおらア豪敵に肩が張つたぞ。
鍋太　ちつと揉んで上げうか。
まつ　ナニ、女の手ぢやア利かねえよ。
三　そんならわしが揉んで進ぜよう。
まつ　三ぼう、ちつとやらかしてくんねえ。
三　オイ〱。斯うか〱。
ト お松の後へ廻り、肩を揉む。
胡麻　サア〱、新入り振舞ひに酒にせうぞえ。
九介　なんぞ肴があるかえ。
まつ　小屋にあつた。カウ、鍋公、取つて來な。

鍋太　アイ〱。
ト 小屋の中より缺け重箱に缺け摺鉢を添へ、肴の入れたるを取つて來り、樽の酒を德利へ入れ、茶碗を取出し
サア〱、姐御、始めなさい。
多九　新入りがちつと戴きませう。
まつ　そんなら、憚りながら、上げやせう。
ト 捨ぜりふにて鍋太、酌して、お松、茶碗を引きうけ酒を飲む。
胡麻　時に、姐御、新入りの馳走に、九介の踊りはどうだね。
まつ　よからうよ。始めねえ。
九介　おれが踊るが、三味線は、てめえ弾くか。
胡麻　そいつは承知サ。コレ、新入りさん。稽古ながら見習ひなさい。
多九　拜見いたさう。
まつ　オヤ、馬鹿らしい。
三　サア〱、早く、始めねえ〱。
ト 胡麻八、三味線弾く。九介踊る。何なりと流行り唄。振りよろしくあつて納まる。

皆々　サア、酒にすべい〱。

ト辻打ちになり、以前の傳三、德利を提げて出て來り

傳三　コレ〱、蛇遣ひの男は歸つたの。

多九　番頭か。アレ、あの男が蛇遣ひよ。

傳三　ア、、てめえか。コレ、おぬしが遣ふ蛇の中に、ひばかりがあるか。

九介　されば、あつたかも知れぬ。

ト蜜柑籠を出す。

まつ　ア、、ひばかりが何ぞになるかえ。

傳三　ちつと入用だが、有るなら賣つて下さいな。

まつ　コレ、九介、おつりきな相談だ。賣つてやらつしやいな。ドレ、籠を爰へ寄越さッし。

九介　サア〱、見てくんねえ。

ト籠を出す。お松、いろ〱捨ぜりふにて、蛇をいろいろ見分ける。

多九　コレ〱、番頭、氣味の惡いものを、イヤ〱、おらア嫌だぞ。

傳三　さうサ。姐えは苦手か。

まつ　アイ、わつちは蛇遣ひもして歩いたよ。

多九　成る程、さう見えるて。

トお松、ひばかりを一疋取出して

まつ　コレ〱、此奴がひばかりだよ。

傳三　エ、、その事か。

まつ　これが何になるえ。

傳三　サア、ちつとそれには話しがあるか

トお松、思ひ入れあつて

まつ　よし〱。こいつアわつちが野暮であつた。……コレ、ぬし達は、ちつと氣をきかしてくんねえ。

皆々　合點でござりやす。

胡麻　サア、噂アや。楊弓場の際で始めよう。

鍋太　さうしなさい。

九介　姐御、いゝやうに賴みます。

三　新入りさん、お前も行かねえか。

多九　ナニ、おらア聞いてもいゝ。……とはいふものゝ、今からこなた衆の仲間だ。見習ひながら行かうか。

皆々　そんなら姐御。

まつ　ちつとのうちだよ。

ト辻打ちになり、胡麻八、鍋太、多九郎、九介、三、附いて下座へ入る。

傳三　コレ姐えや、して、その蛇を、てめえ賣つてくれる

か。

まつ　ハテ、錢金になる事なら、隨分賣るのサ。

傳三　して、いくら位だ。

まつ　ハテ、蛇の相場に極りがあるものかな。いゝ加減に寄越しなさいな。

傳三　そんならぶッつけ一分だ。よしか。

まつ　蛇一疋を一分とは有り難い。サア、持つてお出で。

ト出す。

傳三　ア、コレ、どうして〳〵。買ひは買つたが、持つては行かれぬ。とてもの事に、そいつを引裂いて、血を取つてもらはう。

まつ　ア、、血がいるのかえ。待ちねえ。引裂いてあげよう。

ト捨ぜりふにて片口の中へぶちこみ、あちこちして口より引裂く。傳三、以前の德利を出し

傳三　コレ〳〵、この中へ賴みます。

ト蛇の血を德利へしたみこみ、傳三、振り廻す。

まつ　もうそれでよしかえ。

傳三　こりやア姐御、御苦勞々々々。

まつ　また相應な用があつたら、お賴み申しやす。

傳三、承知サ。そんならお松。

まつ　傳三さん。ア、、手でも洗つて來ようか。

ト辻打ちになり、下座へ入る。この鳴り物にて、向うより立場の太平次、襟附きの袷、紅皮の三度、藤倉草履、封じたる狀を大分下げ、飛脚屋の狀配りの形にて出て來る。下座より多九郎出て來る。三人行き合ひ、床几に腰をかけ

太平　番頭さん、そりやアなんだ。銘酒ぢやアないかえ。

傳三　太平次どん、この間、貴様にも話した、彼の毒が調合してあれど、今一藥がひばかりといふ蛇の生血、この小屋の蛇遣ひが持つてゐたゆゑ、たつた今、この酒の中へしたみ込んだ。こいつを彼の奴に喰はせて、めでたくゆけば、お艶はおれが女房にするつもり。

太平　そんなら、その毒で彼の奴をやらかすのか。そりやア手短かな話だの。コレ、それにつけても、この頃あの與兵衞が、おれが見る度に、無性に腹を立てるが、こいつ一圓合點がゆかねえの。

多九　コレ〳〵、太平次、一體マアおぬしの顏が、大學さまに瓜二つに割らずと其まゝ。その大學さまは、いつぞや江州で、あのお艶を妻にしようと云はしつたげな。そ

こで大學さまに當りがあるゆゑ。御前によく似たおぬしゆゑ、腹を立てると見えるわえ。

太平　イエ〳〵、そりやア話しが違つてゐる。道理こそ大學さまがわつしを買込み、高橋ゆかりの奴等なら、方づけてくれろとのお頼み。御前によく似たわつしゆゑに、癇癪を起すのは、そんなら、今は町人でも、御前を恨む心のねえでもねえわえ。

多九　アヽ、そんなら與兵衞は、高橋にゆかりの者か。

太平　アイ。大兄は彌左衞門。手討ちになつた彌十郎が次弟の孫三郎といつた高橋の、三人目の弟サ。

多九　そりやアとんだ事だ。

太平　何がとんだ事だ。

多九　さうとは知らず、あの番頭を頼んで、靈龜の香爐を五十兩に、與兵衞めに賣る筈で、手附けを取つて、あつちへ渡して置いたワ。

傳三　エヽ、そんならあの香爐を與兵衞が見ては悪いかえ。

太平　悪い段か。與兵衞があの香爐を多賀の屋敷へ上げると、高橋も家が立ち、俊行さまのお家も別條なく、折角お前が盗み出し、企んだ元締め大學さまも、蒟蒻島の蒟蒻。ハテ、そりやアとんだ事だ。

　トこのあたりに、お松出かゝつて窺ひ居る。

傳三　それぢやア滅多に、香爐も手離されぬ話しだが、是非々々與兵衞が買ふといつて、京大坂へ掛け先の金を取りに行つたのも、後金濟ます積りだわえ。

太平　して、手附けでも取つたのかえ。

多九　さうサ。十兩取つて遣つてしまひ、香爐も與兵衞が方へ預けて置いたのよ。

太平　そんなら、手短かに、與兵衞が留守を幸ひ、番頭、ちよろまかして來やれな。

傳三　どうして〳〵。大切な道具は戸棚へ入れて、鍵は阿母が腰へくツつけて、離す事ぢやアねえの。

太平　そいつア困つた話しだ。

まつ　モシ、太平次さん、その香爐とやらを、わつちが仕事してあげうか。

太平　ヤア、てめえは非人のうんざりお松。あの香爐を取返す手段があるか。

まつ　モシ、斯うしてはどうだえ。

　ト太平次に囁く。

太平　アヽ、そんなら與兵衞が留守を幸ひ、てめえが店へ

振り込めば、コレ、番頭、斯うだワ。
ト傳三にも囁く。
傳三　成る程。留守を幸ひに、そいつもよからう。
ト多九郎へ囁く。
多九　よし／＼。併し、それでもゆかないときは、手短かにその酒で
太平　マア、何にしろ、お松の趣向を、やらかして見るがいゝ。併し、振りこんだ時、なんぞ與兵衞が動きの取れぬ證文が無くば
傳三　そいつは奇妙な物がある。コレ。與兵衞が書いたこの起證。こいつが種になりさうだの。
ト懷中より與兵衞がお龜へやりし起證を出し
まつ　ほんに、そいつは奇妙だわえ。コレ「お龜どのへ與兵衞」といふ起證を、一番役に
ト守り袋を出してその中へ起證を入れろ。
多九　コレ、あの與兵衞めが歸らぬうちに
まつ　そんなら直ぐに仕掛けるよ。首尾よくいけば、モシ太平次さん、薄穢ないわつちでも、萬ざら腹からの乞食でもねえよ。間にやア、ちつと麥飯も、また藥食ひだわな。
ト嫌らしき思ひ入れ。
太平　そりやアモウ、首尾よく香爐を、ちよろまかしてくれさへしたなら、どうでもならうよ。
傳三　併し姐え、其まゝでも行くまいの。
まつ　サア、なんぼ乞食だといつて、身仕舞ひ道具の、だりむくつたのでも、持つて居るのサ。
ト小屋の中より古鏡、鏡立を取出し、筵の上へ坐り、たゝう紙の中より白粉茶碗を出し、顏を直す、
太平　エヽ、流石は女だけ、てめえのやうな氣前でも、紅白粉の貯へがあるの。
まつ　ハテ、誰れに見しよとて紅鐵漿つきよぞ、みんな主への心中立て。
ト鼻唄を唄ふ。
傳多　いゝ氣前だの。
太平　氣にくされはねえ奴よ。
トお松は髮を梳かす。辻打ちになり、向うよりお道、風呂敷包みを持ち出て來り
みち　オヤ、お前、いつの間に來なさつた。
太平　コレ、われも店を明けて、どこを歩いて居る。エ、
みち　アイ、わたしや扇長に仕事があつて、帶や小袖の縫

ひ直しを取つて來たわいな。

ト此うちよりお松、じろ／＼見て居る。

太平　おきやアがれ。後から附いては歩かれず。

みち　なんで又、女房に附いて歩く亭主があるものかいな。

太平　無くつてワ。抱寢をする亭主だもの、附いて歩いてもいゝぢやアねえか。

みち　そんなら附いて歩きなさんせいな。

トお松、こちらを見て

まつ　なんだな、太平次さん。なんぼ掛け構ひのねえわつちらだといつて、見てくれの惡い。氣障な事はよしねえな。

みち　オヤ、このお松どんは、何を其やうに腹を立てる。こりやア女房と亭主の話しだわな。

まつ　エヽ、よしなさいな。その話しが氣障だわな。イケあつかましい。

みち　何があつかましいえ。

まつ　あつかましいよ。コレ、かみさん。わつちらがやうな乞食だといつて、さう踏みつけにしねえものだわな。エヽ、お前は旦那衆、わつちらは乞食だよ。アイ、大勢ぢやアござりやしねえ。たつた一人でござりやすよ。アイ、どうでござりやすな。

みち　ありやマア、何を腹を立てるのぢやぞいな。

太平　コレサ、マア／＼、てめえ、先へ歸れよ／＼。

みち　ナニお前、歸る事があるものかな。わたしやまだこの仕立て物も、とつくりと相談してな。

太平　ハテ、大事ねえ。こりやアおらが後から持つてゆく。マア／＼、先へ歸れ／＼。

みち　それぢやといふて、なんぢややら、あの小屋のお松が、わたしに向つて

まつ　小屋のお松もすさまじい。素人衆のかみさんだといつて、乞食だといつて、あんまり退いた話しもねえよ。

傳多　ハテ、いゝわな／＼。

トこの中へ入る。

太平　コレ／＼、てめえ、まア先へ行つてくれろよ。コレ番頭、貴樣連れて行つて下さい。

傳三　呑み込んだ／＼。サア／＼、お道さん、わしと一緒に歩ばツし。

みち　ハテ、何も行くには及ばぬわいな。

傳三　イエ、先へ歸らつしやいよ。コレ、これも先へ持つ

て行くよ。
ト持つたる徳利に思ひ入れ。
太平　よしサ。先へ行かつしやいよ。
傳三　サア、來なさいよ。
ト辻打ちになり、傳三、件の徳利を抱へ、お道をせり立て、向うへ入る。太平次、風呂敷包みを受取り、殘る。お松見て
まつ　モシ、太平次さん。あんな綺麗なおかみさんがあつちやア、どうしてマア、わつちのやうな乞食をよもや
太平　イヽヤ、それもてめえの働らきで、首尾よくやつたら
多九　そりやアその時の相談に、ナウ、太平次
まつ　そんなら爰から道具屋へ
太平　與兵衞が留守へ附け込んで
ト風呂敷包みを渡す。お松取つて見て
まつ　こりや女小袖に女帶。
太平　身ぐるみ着かへて
まつ　うまく行つたら
トこの時、九介、三、鍋太、出かゝり
三人　姐御、御苦勞。
トおまつ、太平次に思ひ入れあり。
まつ　コレ。
太平　エヽ、やかましいわえ。
トこれをキザミにて、よろしく　ひやうし幕
幕の内、矢張り辻打ちにて、ツナギ。引返し

五幕目　道具屋の場

役名――百姓、佐五右衞門。手代、傳三。下女、おみよ。下部、貸平。道具屋娘、お龜。女非人、うんざりお松。道具屋、與兵衞。道具屋後家、おりよ。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、納戸口、更紗の暖簾を掛け、上の方、折り廻しの障子。下の方、段さんの戸棚。この前に置き物の唐獅子、櫓時計、堆朱の香爐臺、紫銅の大藥罐など並べ、壁に帳面いろ／＼、田代と印しせし軒暖簾。いつもの所、門口。下に木戸を少し見せ、すべて今出川道具屋の體。爰におりよ、母親の

拵らへ、お龜、振り袖の娘の形にて、おりよが髪結うてゐる。此方に下女おみよ、行燈の掃除して居る、てんつゝにて幕明く。

ト直ぐに向うより、傳三、幕明きの形にて、酒徳利を提げて來り、舞臺へ來て、内へ入る。

傳三　おみよ、いま行燈掃除か。馬鹿々々しい。

みよ　この番頭さんとした事が、歸り早々、もう小言かいなア。

傳三　小言ぢやアねえが、智恩院の八ツを先刻打つたワ。

りよ　コレ〳〵。傳三、其やうに云やんな。あれも遊んでは居ぬわいの。

かめ　母さん、もうよろしうござります。

ト髪結ひしまふ。

りよ　オイ〳〵、これはお世話。……おみよ見や、手傳つて結うてもらうたが、齢の十も若くなつたであらうもの。

みよ　ほんに、左やうでござります。まだ隨分お嫁入りが

りよ　そりや信濃へであらうな。ハヽヽヽ。

かめ　アレ、母さんの串談ばつかり。さぞ、氣味がお惡うござりませう。

りよ　なんのいの。

ト お龜、手を拭く。此うち、傳三、莨盆を抱へる。

かめ　その徳利は、傳三、わが身持つて來やつたか。

傳三　ハイ、こりや與兵衛さんに。……イヤナニ、アノ與兵衛さんの代りに、建仁寺町の竹垣さまへ、茶入れの事で參つたれば、幸ひ貰うた加茂川酒、一つ飲めと仰しやります。イヤ〳〵晝間酒を飲みましては、奉公が粗略になります。ハテ、其方は主思ひな。そんならこれごとやる程に、勝手に飲めと仰しやつて、貰うて參つた、こりや銘酒でござります。

りよ　さうとは知らずわしは又、與兵衛が大坂へ行つたを知りつゝ、どこへ行つた事ぢやと思ひました。

傳三　なんのお前樣、商賣の事より外といふたなら、錢湯ばかり。錢湯樣のお惠みで、與兵衛さまへ首尾ようこいつを

ト思ひ入れ。

りよ　傳三、何を首尾よう

傳三　イエサ、與兵衛さまが、首尾よう金を持つて、歸らつしやればよいといふ事。

かめ　なんのマア、正直な與兵衛さん、受取りさへなさん

したなら

りよ　イヤ〳〵。この頃、與兵衞が夜泊り、日泊り、その上、これまでの孝行な心に引きかへ、ぞん氣になつたはどうでも心に

ト思ひ入れ。

かめ　エ。

りよ　ホヽヽ。つい愚癡を云はうとした。コレ、おみよ、もう夕飯の拵らへしや。

みよ　ハイ〳〵、畏まりました。

りよ　わしは仕掛けた綿入れ物。ドレ、片付けてしまはうか。

ト唄に成り、おりよ先におみよ、行燈を持ち、奥へ入る。此うち、傳三は莨をのんで居る。お龜、櫛道具を片附け、奥へ行かうとする。傳三、德利を片寄せ

傳三　アヽモシ、お龜さん〳〵。

かめ　イエ、わしや

ト行かうとするを

傳三　これはしたり、マアちつと、お出で〳〵。

ト手を取り連れて來る。

かめ　又いつもの嫌らしい事ぢやないか。

傳三　なんの〳〵。お前の爲を云うて上げるのぢや。

かめ　わしが爲とは、そりや、どのやうな

傳三　お前、さつぱり知らずぢやが、與兵衞さんはこの頃中、祇園町に馴染が出來て、藝子狂ひ。それで足らいで磯せゝり。モウ〳〵あのお龜が、鼻に附いて〳〵、うるさい、と云うてぢやぞえ。

かめ　イヤ〳〵。わが身のそりや嘘ぢや。與兵衞さんの夜泊りは、謠ひ謡や茶の湯にお出で、どうしてそんなお心のないといふ證據は。

ト襟にかけし守り袋を出し、中を見て

ヤア、こりや起請が見えぬわいの。

トいろ〳〵尋ねる。

傳三　モシ〳〵。起請があるか。あるまいがな。與兵衞さまは玉歸り〳〵。評判の玉歸り。

ト立騒いで煽てる。

かめ　なんの、與兵衞さんの心が變つても、わしが心は變らぬわいの。

傳三　コレ、なんぼお前がさう云うても、與兵衞さんはおッつけ、ころり。

トお龜に見えぬやうに、德利へ指さして思ひ入れ。

大正十五年十月帝國劇場所演
尾上梅幸のお松　市川左團次の太平次
河合武雄のお道

かめ　エヽ、其やうに、ぎえんの悪いこと云やんないの。
傳三　ハテ、そこが老少不定、その時は傳三さしづめ跡取り、それぢやによつて、爰で手付けに。
　トずつと寄る。
かめ　アレモウ、うるさい。離しやいなう。
　ト突きのける。
傳三　ハテ、さう云はずと、ちよつと〳〵。
　トまた寄る。お龜逃げる。傳三これを追はへ歩く。此うち、てんつゝゝになり、向うより佐五右衞門、木綿やつし、股引、三尺手拭ひ、一本差し、草鞋の形にて、菅笠を持ち出て來り、舞臺へ來る。
佐五　オヽ、爰ぢや〳〵。……ちと御免なされ。
　ト云ふをも聞き入れず、お龜を追はへてゐる。
　これはいかな事。御免下されい。
　ト草鞋を脱いでズッと内へ入る。傳三、出合ひ頭に抱きつく。佐五右衞門、恟りする。傳三「ヤア」と思ひ入れ。お龜出て
かめ　お前は近江の父さんぢやござりませぬか。
佐五　さういふ其方はお龜かいの。
傳三　ヤア、そんなら實の
佐五　お龜が父親。番頭どの、今のはなんで
傳三　サア、あれは。……オヽ、それ〳〵、親御の事ゆゑお龜さんが、あれ位可愛からうと。
佐五　ハテ、いかい苦勞性な。……ハヽヽヽヽ。
　ト傳三しよげる。
かめ　ほんに、父さん、ようお出でなされましたなア。
傳三　左やう〳〵。ひよんな所へ……ようお出でなされました。ドレ、阿母樣へお知らせ申して
　ト合ひ方、これをしほに奥へ入る。
かめ　マア、お前も御無事で
佐五　其方も達者で、てもさても、大きうなつたなア。
かめ　アイ〳〵。あのナ、父さん、わたしやいつやら、與兵衞さんと谷汲の觀音樣へ、お詣り申したその時、お前には四五年あとにお目にかゝつたれど、今の母さんもまだ知らず、さうして妹のお米にも、小さい時に別れたゆゑに、逢ひたう思ふ其うち、ついした事で、清水村へ寄らなんだ。皆おまめでござんすかいなア。
佐五　オヽ、隨分と皆息災ぢや。
かめ　さうして、今の母さんが連れて見えた、弟の里松わえ。

佐五　サア、その里松めは。……まめで達者で、息災な程に、案じやんな〳〵。
ト思ひ入れ。奥にて
りよ　なんぢや。お龜の父御が見えた。ヤレ〳〵、それは。
ト云ひながら出て
オヽ、こりや、近江の佐五右衞門どの、なんと思うて久し振り。
佐五　これはおりよどの。無沙汰ぢやと思うて下さるな。何をいふも、百姓の
りよ　なんのいな、御無沙汰は互ひの事。……コレおみよ、お茶早う持つておぢや。
みよ　ハイ〳〵。
トてんつゝになり、花道よりお松、絹やつし、横帶、引摺り下駄、女房風の拵らへにて出て來り、直ぐに舞臺へ來る。此うち、おみよ、茶碗を茶臺に載せ、持ち出て佐五右衞門に出す。お松、門口より
まつ　ハイ、お許しなされませ。
トずつと内へ入る。お龜、思ひ入れ。
りよ　ついに見馴れぬ女中さん。……アヽ、今日裏長屋へ引越しの

まつ　イエ〳〵、わたしやそんな者ぢやござりません。與兵衞さんにちつとお目にかゝりたい事がござりやしてサ。お前さん、與兵衞さんのお母さんかえ。こりやお初にお目にかゝりやした。どうぞちよつと與兵衞さんに。
……モシ、姐さん、ちよつとお貸しよ。
トお龜が前にある煙管、莨盆を引寄せ、煙草をのむ。お龜、氣味惡き思ひ入れにて　ソロ〳〵とおりよの方へ寄ろ。おりよ、思ひ入れあつて
りよ　モシ〳〵。お前、折角のお出でぢやが、與兵衞は今日急な事で、大坂へ下りました。なんぞ用なら又そのうち。
まつ　ヘエ、そんならアノ與兵衞さんは、大坂へお下りかえ。……ほんに、人にやア沙汰もしないで。モシお母さんえ。さういふ事ならお歸りまで、わたしをどうかお内へ、お置きなすつて下さりませ。
りよ　そりや又お前、どうした譯で。
まつ　お母さんの前ぢやア、お恥かしいが、わたしはあの西石垣の扇源と申す呼び屋の、……サア、ついした事から與兵衞さんと、お心安くして居りやしたを、いらぬお世話な何奴だやら、ちやんと内へ吹込んで、今朝からの

やツさもツさ。仕樣がなさに駈け出して、與兵衞さんと
も相談と、參つたところがお留守ぢやア、今日の事には
參りやすまい。と云つて、內へは行かれず、否でもお歸
りなさるまで、お待ち申して、此しらちを
ト此うち、佐五右衞門、氣の毒な思ひ入れにて、莨盆
を持ち。後へ下がる。
りよ　そりやモウ、ひよんなお話しぢやが、よもや與兵衞
が其やうな
まつ　成る程。お留守へ參つてこんな事を申しちやア、お
前さんも御存じない事ゆゑ、どうか芝居で音羽屋の、親
仁が致す事のやうに、思し召すは尤もだが、今のお莨が
毒になれ、微塵わたしが、さら〳〵どうして。……とい
つて、ほんにはなさるまい。慥かな事は與兵衞さんと、
取交した爰に起證の。
かめ　エ、。
ト思ひ入れ●おりよは佐五右衞門へ氣の毒なこなし。
お松、守を出し
まつ　お目にかけるも、どうやら嫌らしいが、出さにやア
わたしが嘘でも……こりやアお守。……これでもなし…
……こりやア臍の緒。……ハテ、つい入れて置いたが

ト守の中より、いろ〳〵出して下に置く。佐五右衞門
これを後より見てゐて、臍の緒の書附けを煙管にて引
寄せ、取つて見て、お松が顏をちよつと見て懷中する。
お松これを知らず
これだ〳〵。これを御覽じて下さりませ。
ト起證をおりよが前に置く、おりよお龜と顏見合せ、
思ひ入れ。
モシ、お母さん。これがわつちが慥かな證據。御覽じて
下さりやしな。
ト廣げておりよへ突きつける。お龜あちらへ向く。お
りよ是非なく取つて、ちよつと見て
りよ　こりや違ひのない與兵衞の手蹟、……お龜どのへ與
兵衞。
ト淚聲にて讀む。お龜これを聞き、起證をソツと覗き
見て
かめ　ヤア、この起證は、わたしがなくした
ト取らうとするを、おりよ思ひ入れ。お松ちやつと手
早く取つて
まつ　オヤ〳〵〳〵。お前ばかりがお龜さんかえ。一つ町
にも同じ名は、いくらもありやすわな。起證のお龜はわ

たしが事。お母さん、なんと嘘ぢやアござりやすまいね。
りよ　サア、起證のお龜が……こなさんたら
まつ　與兵衛さんゆゑりだむくつて、斯う内方へ駈け込んで、據なくお母さんに、こんな事お申すからは、起證の通り、二世三世、變らぬわたしや與兵衛が女房。お氣に入らずと、お母さん、どうぞわたしをこなたの嫁に。……イヤ、履き物を上げられちやア
ト門口の下駄をしまふ。
かめ　モシ、母さん、あのやうに
りよ　サア、よいわいの。尤もぢやが、何を云うても憎いは與兵衛。人の內儀と此やうな。ほんに、いとしほげなこなさん、苦勞であらうな。シタガ、知つてござるか知らねども、あの與兵衛は、爰に居るお龜というて、小さいから云ひ號けの女房のある身。そこへどうも外には
まつ　そんなら、あのお子さんが。……それぢやア、わたしや弄み物。エ、口惜しい。どうしようねえ。こんなマア腹の立つ
りよ　コレ〳〵、さうした事でもあるまいが、肝心の與兵衛が居ねば、マア、今日は內へ歸らしやんして、與兵衛が戻つたその上では、ハテ、あれも男ぢや。こなさんの譯もつけるであらう程に、さう思うて、どうぞ內へ。
まつ　モシ〳〵。そのお騙しにたべやすまい。今こそ斯うした女房なれ、元はわたしも祇園町で、一夜六分の、花も咲かせて宮川町、繩手も踏んで道場か、高臺寺前下り坂、八坂を落ちて駈け上り、二條新地や御靈裏、おはもじながら風の辻、泣かぬ勤めの螢茶屋、あらゆる場所を駈け廻り、酸いも甘いも承知のわたし、素人方の口銕に乘つてそんならさうかえと、歸る女と思し召すか。お如才のないお母さん、お前さんでもござりやすめえ。ホヽヽ。女中衆、お茶一つおくれ。
りよ　ムウ。そんならどうでもこなさんは
まつ　アイ、與兵衛さんのおかみさん、この道具屋の花嫁御サ。
かめ　イエ〳〵、與兵衛さんにはわたしといふ
みよ　それ〳〵、親御樣のお許しの、ホツとした御新造樣がござんすりや、なんぼお前はさう云うても、及ばぬ事でござんすわいな。
まつ　默りやアがれ。この女め。及ばうが、及ぶまいが、コレ、この通りの起證がありやア、どこへ出ても與兵衛

が女房。もうこの內に居据つて、お夜食からして据ゑ膳だ。どなたもさう思つておくれ。

りよ　サア／＼、それも合點なれども、マア與兵衞が戻るまで

トおりよ歸さうと、いろ／＼する。

まつ　イヤ／＼、爰はわたしが內、手向けの水に一本花、立て線香に白餅の、御馳走たべたその上に、枕念佛を聞かないうちは、滅多に出やア致しやせんよ。

ト莨を吸ひつける。皆々持てあましたる思ひ入れ。傳三出て來り、おりよをこちらへ呼ぶ。

傳三　モシ／＼、阿母樣、奧で聞いて居りましたが、與兵衞さんの夜泊り・日泊り、ろくな事は出來まいと、存じて居つたが案の定。こりやマア、どうなされます。

りよ　どうというて、あの女中を、マア去なすより、外に思案は

傳三　サア、只さうばかり仰しやつても、とんと埒は明きませぬ。いづれ……れこでござりまするぞえ。

ト思ひ入れ。

りよ　サイナウ。それも少しばかりの事なれば

傳三　マア、わたしが一つ、話し合ひませう。

トお松の側へ來り、

モシ、お女中さん、お前にも無理はない。至極々々。……ちやが、爰にあるて。いくら云うても、その相手の與兵衞さんが留守なれは、サ、歸られまい。尤もぢや。そこが物は談合とやら、與兵衞さんの戻るまで、少々の胸倉金で

まつ　カウ／＼／＼、おきなさい。お前は爰の番頭さんか、わつちやアその嫌らしい、胸倉金のなんのかんのと……よいワ。それほど皆がわたしを歸したがる事だ。與兵衞さんの歸るまで、料簡つけて待つてやらう。

ト皆々思ひ入れ。

サア、姐さん、お出で。

トお龜が手を取つて引立てる。

かめ　アレイナア、わたしを

トおりよ留め

りよ　コレ／＼、お龜をなんで、こなさんは。

まつ　ハテ、與兵衞さんはお留守ゆゑ、わたしが事は解りませぬと、親分へ云はれやせうか。お龜さんを預かつて、待つのがわたしの料簡サ。與兵衞さんがお歸りなら、お龜さんと退去り書いて、わたしを內へ入れるとも、わつ

ちが手を切り、お龜さんを呼びなさるとも、主の心。それまで、笑はれない口ふさげの爲、お龜さんは預かつて歸りやすよ。

ト また引立てる。おりよ、おみよ支へる。お龜、思ひ入れ。傳三、留める。

傳三 マア〳〵、待ちなさい〳〵。成る程、云ひなさるなア尤もだが、いとしほなげにお龜さんを。……モシ〳〵なんとお龜さんの代りに、このおみよおやア

みよ エ、モウ、番頭さん、なんのわたしが

傳三 ハテ、誰れぞお龜さんの

ト 思案して

モシ、阿母さん。なんと、お龜さんの代りに、内方にある龜、香爐、龜といふ名でこぢつけて、香爐を預けては

りよ そりやモウ、あれで先さへ得心なら

傳三 マア〳〵、これへお出しなされませ。

ト おりよが腰の鍵にて戸棚を明け、中より序蒸の香爐を出し

りよ 傳三、シタガ、まだ買ひ切らぬこの香爐、外へやつては

傳三 ハテ、ようございます。こりや元より盗み物。

りよ エ。

ト 傳三ギョッとして

傳三 サア、なんであらうと、マア、遣はされませ。

ト 無理に取つて

モシ、女中さん、どうもお龜さんは渡されぬその代り、こりやコレ、靈龜の香爐といふ大切な物ぢやが、ちつとのうち、なんとこれを預かつて

まつ そんなら龜といふ名ゆゑ、お龜さんの代りにこの香爐。……ようござえす。預かつて待ちやせう。

傳三 アノ、聞き屆けて。……モシ、阿母さん、得心を致しました。お龜さん、嬉しからうな。……サア〳〵、そんなら、龜の香爐は

ト 手柄顔にいろ〳〵あつて、香爐をお松に渡さうとする。この時、佐五右衛門、香爐を取上げ

佐五 イヤ、番頭どの。この香爐は渡されぬ。

ト 合ひ方になり、眞中へ出る。お松、傳三、顔見合せ、思ひ入れ。この時、向うより立場の太平次、前幕の形にて出て來る。

傳三 モシ、折角香爐を承知のところ、渡されぬとは、お龜さんを

佐五　イヤ、どちらも渡されぬ。聞いたところが、こりやア與兵衞から起つた事。それに、お龜を連れて行かうと、廻り廻つて龜の香爐。おりよどのは得心でも、この實親の娘の名、龜の香爐渡すは不承知。……コレ、女中、相手の與兵衞が代りなら、何なりと持つてござれ。おりよどの、この香爐は先づそちらへ。

ト おりよに渡す。この時、太平次舞臺へ來り、門口に窺ふ。

まつ　ナニ、與兵衞さんの代りなら、待ちなさいよ。與の字のついた物ならば

傳三　夜着か、葭簀か、夜鷹蕎麥。

まつ　よしの木、さいかち、猿すべり。

傳三　いつそ、ふの字ぢやアどうだね。

まつ　馬鹿を云ひねえ。有卦にでも入りやアしまいし。……よいワ。なんのかのと氣を揉むより、蒔き直して爰の内に

佐五　そんならどうでも

まつ　お龜與兵衞と睦まじく、起證の通り、夫婦になるのサ。

ト 起證を見せる。

佐五　さうしてこなたは、少さいから、お龜と名を附けたのか。

まつ　アイ、七夜の折にお父さんが、附けておくれたそのまんまサ。

佐五　それでは與兵衞と夫婦には

まつ　どうしたとえ。

ト 佐五右衞門、以前の臍の緒書を出し、

佐五　長德三年九月五日の誕生、江州千野村、德兵衞娘まつ。

まつ　ヤ。……どうしてそれが。

ト 起證を捨て、臍の緒へかゝるを、グツと引きつける。外にて太平次思ひ入れ。

皆々　ア、モシ、滅多な

佐五　大事ござらぬ〳〵。……ヤイ、お松、わりやアまだおれを知るまいな。四年あとから連れ添ふ今の女房、おわたが妹。

まつ　ヤア、そんならこなたは、こちの姉聟。

ト 起き上がるを又引きつける。

りよ　ムウ。すりやこの女中は

かめ　今の母さん

佐五　オヽ、おわたが爲には實の妹。身状が惡さに緣切つて、別れし後は京都にと、噂に聞けどどうしたやら、負人間になつたかと、折々案じておれへの話し。思はず爰で出合つても、此方も知らねば、扣へるうち、最前守のその中より、取出す臍の緒、目にかゝつても、緣者の端と押隱し、事なく歸らば儘にもと、見る程猶々附け上がり、女の身にて筋なき騙り。コリヤ、でんどへ出ると首が飛ぶぞよ。

ト散々に舞臺へ摺りつけ思ひ入れ。

りよ　サア、わたしも與兵衞がよもやとは、思へど慥かな自筆の起證。

かめ　そんなら矢ツ張りわたしが失した……それで名宛を其まゝに、お龜というて見えたのぢやわいな。

ト起證を取つて懐へ入れる。

佐五　こりや内々で誰れぞ拾つて

傳三　左やうでござります。

ト云ひ〳〵、ソロ〳〵奥へ行きかゝる。

りよ　傳三、待ちや。

傳三　ハアイ。

ト蹲る。

りよ　與兵衞が留守を附け込んで、お龜と香爐を引上げうと、この頼み手は、どこぞにあらうな。

ト傳三ギツクリ。

佐五　それも女をぶちのめし、この佐五右衞門が白狀させて

トしゆろ箒を取る。お松、これはと逃げ出すを、足を掻いて打たうとする。この時太平次、ツカ〳〵と入つてこれを留める。傳三、この間に逃げて奥へ入る。

まつ　ヤア、お前は

ト思ひ入れ。

太平　やかましいわえ。……モシ〳〵、只今これへ來かゝつて、樣子を聞けばこの女は、あなたや内方のお龜さんの、どうやらお繋がりとやら。そんなら萬ざら他人でも、内證同志でこつそりと、……モシ、阿母樣、左やうぢやアござりませぬか。

りよ　太平次どのゝ、云はしやればそんな。もの騙られたといふではなし、此まゝ去なすが、ナウお龜。

かめ　アイ〳〵。……モシ、お父さん、今日はどうぞ堪忍して

佐五　イヤ〳〵、初めて逢つた姉聟が、折檻は女房へ土產。

ト立ちかゝる。皆々隔てる。太平次、お松を引立て

太平　すんでの事に危ない所へ……おれが來たのはうぬが仕合せ、長居をせずと……キリ〳〵と失しやアがれ。

ト思ひ入れあつて突き出し。門口を締めようとする。

まつ　オツと、待つてくんな。そこらに下駄を置いたつけ。

ト太平次、下駄を取つて投げ出し、門口を締める。お松拾つて

なんの、投げ出さずとよい事サ。……折角巧いと思つた所へ、あの姉聟の在郷めが、うせたばつかり、張り込んだ。下駄の錢もいま〳〵しい。こいつが一生つまらない。

ト合ひ方になり、お松、花道へ行き、取つて返し、門口に窺ふ。

りよ　なんとマア、見さつしやれ。怖い世の中ぢやないかいの。

太平　イヤモウ、今時は女でも油斷はなりませぬ。

かめ　わたしやどうせうと思うたところ、父さんが來てござんしたばつかりに、ナア、母さん。

りよ　それに、五年振りでお出での佐五右衞門さま、埓もない事にかゝつて、ろく〳〵お茶さへ

佐五　イエ〳〵、構うて下さるな。おりよどの、わしが今日來ました譯は

りよ　サア、お出での譯も聞きませうが、マア、ゆるりとなされて。コレ、お龜や、今のお禮や何やかや、たんと御馳走申してたも。

かめ　アイ〳〵。

みよ　モシ、阿母樣、爰よりは、奥がよろしうございませう。

りよ　イカサマ、それがよからう。……サア、佐五右衞門さま。

佐五　そんなら、あれでお話し申さう。

りよ　太平次どの、これにござれや。

ト唄になり、佐五右衞門先におりよ、香爐を持ち、お龜、おみよ、奥へ入る。太平次殘り、思ひ入れ。外よりお松、戸を明け

まつ　太平次さん。

太平　コレ。

トあたりへ、心遣ひあつて、表へ出て

お松、まんまとしくじつたよ。

まつ　見ねえな。十が九つやらかしたものを、あの姉聟のべら坊めが、とんだ所にうしやアがつて

太平　よいワ。とても阿母めが手離さない樣子なりやア、わりやアどこぞに隱れて居て、あのお鼈めを引上げろ。

まつ　そんなら、それさへ首尾よくすれば、わつちがお前に云つた事は

太平　そりやアどうでも。……ヤ、向うへ來るは慥かに與兵衞だ。

まつ　ナニ、與兵衞だえ。

太平　マア〳〵、わりやアちよつと隱れろ。

まつ　どこにしようかの。

太平　どこといつて、押入れか、緣の下。

まつ　お前も古い事を云ふねえ。この頃まで葺屋町で、團十郎が緣の下、春狂言にやア押入れへ、杜若が隱れて居たぢやアねえか。

太平　コレ、そんな事を云ふつち、ソレ、もう與兵衞が爰へ來る。

ト無理にお松を連れて內へ入り、兩人ウロ〳〵思ひ入れあつて

大和屋氣取りで爰へ入れ。

ト押入れへ突込み、戶を締める。跡を元のやうに直して居る。此うち、てんつゝになり、向うより（お松早替り）與兵衞、やつし、尻端折り一本差し、單羽織を疊んで前へ附け、眞田の三尺帶、藤倉草履にて出て來る、後より供の者、これも尻端折り、三尺手拭、草鞋の形にて、風呂敷包みを脊負ひ、菅笠二蓋持つて出てくる。捨ぜりふにて、直ぐに舞臺へ來り、門口を明けズツと內へ入る。太平次、恟り思ひ入れあつて

エ、、與兵衞さんかえ。

ト與兵衞、太平次を見て

與兵　太平次どのかえ。

トずつと奧へ行かうとする。

太平　ア、モシ、與兵衞さん、お前さん、慥か大坂へ

與兵　急な用で行く所を、伏見の船で用が足り、それで直ぐに歸つて來たのサ。

トつんとして行かうとする。

太平　モシ〳〵。わしやアちつとお前さんに

與兵　ハテ、用なれば、後の事にさつしやい。

太平　イエ、なにサ、ちつとばかり

ト引留める。これにて是非なく、

與兵　平助、おぬしは奥へ行つて阿母に、用が足りて、伏見から歸りましたと

供者　ハイ〳〵。

　ト奥へ入る。

與兵　太平次どの、なんの用だえ。

太平　サア、その用は、なにサ。……モシ、與兵衞さん、どうも合點が參りませぬ。先度中からお目にかゝると、何かわしへをかしな顏附き。何も此方にこれぞといふ、心覺えはござりませぬが、あるならお宿の者同然、久しく參るこの太平次、なぜ仰しやつては下さりませぬ。モシ、そりやアお恨みでござりますね。

　ト與兵衞、思ひ入れあつて

與兵　ハヽヽヽ。おらア又なんの事かと思つたら、そんなら、アノこなさんに、わしの顏附きが惡いといつて……なにサ、そりやアこなさんの心だ。何もこの與兵衞が方には

太平　イエ〳〵、有るでござりませう。モシ、仰しやつて下さりませ。

與兵　ハテサテ、心安いこなたとわし、これが斯うといふ事が

太平　イヽエ、ござりませう。與兵衞さん、わしの顏が似ましたらうね。

與兵　ムウ。そりや又誰れに。

太平　お前の兄御高橋樣の敵、左枝大學どのに。

與兵　ヤ。

　ト思ひ入れ、合ひ方になり

太平　なぜお隱しなされます。わしの女房は、兄御高橋彌左衞門さまへ勤めました腰元。その御縁にてお前樣が、孫三郎さまと仰しやつて、お小さいからこの內へ、御養子にござつてより、あなたを知らず、今日までお宿へ參つて、御樣子を見ますところ算盤嫌ひ、ヤツトウ〳〵がお好きなり、どうでも武家のお胤だと、存じて居ろうち兄御樣、非業にお果てなされてより、敵を討たうと思し召し、中兄高橋彌十郎さまは、靈龜の香爐を紛失の、その科ゆゑにお手討ちとやら、爰こそ日頃町人の、要らざる劍術お役に立ち、與兵衞が敵討と思ふにつけて私しを、御覽じる度に無念のお顏。さてこそあなたのお心にも、睨まれながら心の嬉しさ。よしない顏にこの面が、似て又悔しさ、口惜しさ。女房の主人は矢ッ張り御主人。これ程までに思つてゐる、この太平次に與兵衞さま、な

ぜお心を打明けては
ト與兵衛、思ひ入れあつて
與兵　アヽ、コレ／＼、太平次どの。こなさん、そりやア何を云ふのだ。成る程、脇目で見たならば、兄の敵を討つ心が、あらうと思ふも尤もなれど、高橋孫三郎といふ侍ひならば、敵も討たう、今は道具屋田代與兵衛、町人の身の生兵法。殊に、向うの敵は大名。どうして／＼、そんな事。そればかりでなく幼年より、養育の恩を捨て、家業を捨てゝは、どうも義理が。
太平　ヘエ。そんなら養子のこの家を、大切と思し召して
與兵　サア、只商ひに油斷なく
太平　イエ、その商ひを大切にして、義理の親御を大切に、思はつしやる身でこの頃續く、夜泊り、日泊り、阿母様へぞんな氣にあたるは
與兵　サア。
太平　愛想をつかされ、勘當うけ、望みを叶へる心であらうが。
與兵　イヽヤ、遊びに身が入つて、母への不孝は酒の科。口には知つて、心に知らぬも、みんな浮氣の一盛り、直る時には直るであらう。必らずともに太平次どの、意見して下さるな。
ト太平次思ひ入れあつて
與兵　成る程。それでなけりやアお望みに
太平　コレサ、そりやアこなた何を云ふのだ。
太平　イヤ、もう聞きませぬ。與兵衛さま、大概それと。
ト思ひ入れあつて
ドレ、一杯おねだり申しませうか。
ト唄になり、太平次ツイと奥へ入る。與兵衛、跡を見送り
與兵　あの太平次が、深切らしい今の詞は。……ハテナア。
ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより若黨曾平、木綿やつし、茶屋男の形にて、草履にて出て來り、直ぐに舞臺へ來て門口より
曾平　與兵衛さまはお宿にて
ト内を覗き。
ヤレ／＼、お宿でござりました。
與兵　オヽ、井筒屋の喜六か。さて何とも云ひ譯が
曾平　モシ／＼與兵衛さま、どうも今日はその云ひ譯では濟みませぬ。わしもさう／＼親方の前が
與兵　サア／＼、尤もだが、おぬしが内へ濟まぬ事は、承

知しながら此やうに
曾平　毎日々々釣らつしやるのは、そんならわしがお前の事で、首を縊つて死なうとも、構はつしやらぬお心意氣だね。
與兵　イヤ〳〵、さうぢやないが
曾平　イエ〳〵、さうだらう。ハテ、お賴もしいお心だ。それぢやアこの上片時も、もう待つ事は出來ませぬ。花代、雜用、引ツくるめて、サア、いま渡して下さりませ。
與兵　コレサ〳〵、其やうに大きな聲をする事は
曾平　大きな聲をされるのが否なれば、金を渡さつしやいな。
與兵　でも、どうも今といつては。
曾平　この身代で金がなくば、見當り次第金目な物を。
ト奧へ行かうとする。與兵衞、留めて
與兵　待ちやれ、奧には阿母。おぬしをやつては
ト引戾す。行かうとする。突き戾すはずみに曾平、もんどり打つて
曾平　アイタ、、、。
トこの物音にて、奧よりお龜出て來り
かめ　與兵衞さん、お歸りかいな。

ト曾平、起き上がり
曾平　ヤイ與兵衞、投げやアがつたな〳〵。
ト立ちかゝる。お龜、留めて
かめ　モシ〳〵、どこのお方か知らねども、マア〳〵靜かに。……ヤ、こなさんはアノ、どこやらで。
曾平　オヽ、見た筈だ。いつぞや近江の多賀の社で
かめ　それ〳〵。慥か高橋瀨左衞門さまの
曾平　步中間の曾平でござんす。
かめ　そんならお前、與兵衞さんの御家來筋ぢやないかえ、それがマア、なぜ此やうに
曾平　大きな聲をする氣もないが、わしも旦那に別れてから、仕樣がなさに祇園町の、非筒屋へ若い者。先度安井の金毘羅で、與兵衞さまに逢ひまして、ツイ一切りと引きつけたが、病みつきの始まりで、この頃每晚大騷ぎ。その花代、雜用、藝子、みんなわしが承り、銀匁を金に直したら、なんのかのと五十兩。催促しても今以て、勘定しないは家來筋、どうもしないと高を括つて、わしに溶せる氣と見えるワ。なんと恐ろしいぢやアないかえ。
ト此うち、上の障子よりおりよ、暖簾口より佐五右衞

門、出かゝり聞いてゐる。お龜、思ひ入れあつて

かめ　モシ、與兵衞さん、今あの人の云うた事、ありやマア、ほんでござんすかえ。

與兵　お龜、おぬしの前も面目ないが、ついした拍子の張合ひから

かめ　そりやアノ、眞實でござんすかいな。

與兵　嘘に外聞缺かれるものかえ。

ト　お龜、思ひ入れ。

かめ　ようござんす。お前の恥はわたしが恥。着類、着替へも頭の物も。こなさん、ちつと待つてござんせ。

與兵　イヤ、それにやア及ばない。喜六へ渡す金はある。日野屋の手代に豐後橋で、受取つた五十兩。

ト　財布を出す。

かめ　モシ、その金は香爐の

與兵　サア、あつちも急ぐ金ながら、おれが遊びの溜りをおぬしの物で濟ましては、どうも義理が、……それだによつて、この金を

かめ　でも、それ遣つては

與兵　ハテサ、おれに任せて置きやれ。コレ、喜六

ト　曾平、心附かぬゆゑ、大きくいふ。曾平悔り

ソレ、五十兩。

ト　財布のまゝ渡す。曾平、取つて

曾平　オヽ、そんならこれを

與兵　花代濟んだぞ。

ト　此方を向くはずみに、與兵衞はおりよ、曾平は佐五右衞門と顏見合せ、兩人ちやつと入る。與兵衞曾平、思ひ入れあつて

曾平　ヤレ／＼、今の事ぢやアあるまいと、思ひの外に五十兩。

かめ　お前、それでよい事なら、早う歸つて下さんせ。ほんにアタ憎らしい。

曾平　成る程、茶屋の若い者は、下齒には憎まれ勝手。ドレ、そんならわしやア歸りませう。

ト　立ち上がる。この時、傳三出て來て、曾平が財布を捕へ

傳三　ドッコイ／＼。この金を貴樣にやア渡されない。……モシ、與兵衞さま、お前マアこの金を、何にせうとて大坂まで、取りに行かうとなされました。わしが口入れした香爐の後金ぢやアござりませぬか。それを遊びの拂ひにやつて、此方の金はどうなります。

與兵　サ、それは
傳三　そりやアでは濟みませぬ。先づ、この金は
　ト取らうとする。
僧平　コレサ〳〵。この男は、おれがそれを知るものか。
　ト財布を引ッ張る。此はずみに傳三倒れる。
與兵　コレ〳〵、傳三、明日はキッと都合して、香爐の金
は渡さう程に、先づ、あの金は
傳三　なりませぬ〳〵。あの金は此方へ遣らずば、香爐を
返してやらつしやりませ。外にも大分望み手が
與兵　サア、尋ね〳〵た靈龜の香爐、外へやつてはこの身
の望み
かめ　エ。
　ト思ひ入れ。
與兵　イヤサ、望みかゝつた物ぢやに依つて、是非おれ
が。
傳三　そんならあの金此方へやつて
與兵　どうもさうは
傳三　そんなら香爐は
與兵　サアそれは。
兩人　サア〳〵〳〵。

　ト僧平、思ひ入れあつて
僧平　與兵衛さま。この金お貸し申しませう。
　ト合ひ方。
與兵　ヤ。
かめ　アノ今、憎てらしい事云うて
僧平　サア、折角取つた金なれど、親方の前を明日まで、
延ばすはわしが口一つ、聞けば……靈龜の香爐とやら。
それさへ手に入るものならば……五十兩がツイ百兩、儲
かりさうなものならば、與兵衛さん……ソレ、買つて置
かつしやりませ。
　ト金の財布を渡す。
與兵　そんなら暈六、その金を。……忝ない。サア、傳三
香爐はおれが買ひ取つたよ。ソレ、金を受取りやれ。
　ト出す。
傳三　それぢやア此方の
　ト思ひ入れ。
與兵　どうしたと。
傳三　サア、此方の方も附いたといふもの。ハテサテ、よ
もやと思つた掛取りが
かめ　打つて變つて、その金を

曾平　貸して歸るが東ッ子。せうびんながら男の端。……與兵衞さま、もうお暇申しませう。
　ト表へ出る。
與兵　そんなら明日。あの金は
　ト門口まで來る。曾平、思ひ入れあつて聲をひそめ
曾平　孫三郎さま。あれでよろしう
與兵　コリヤ〳〵……よくござつた
　ト門口シャンと締める。唄により、曾平、思ひ入れあつて向うへ入る。
ドレ、おれも外から歸つたまゝ、澁い顏の阿母へ、金の話しもちよつとして
　ト行かうとする、傳三、心附き
傳三　モシ、與兵衞さま、お前、今の仲直り、酒一つあがらぬか。
與兵　ナニ、おれに酒を飲め。
　ト德利を出して
傳三　加茂川の名酒、グッと一つ。
　ト袖を捕へる。
與兵　おきやアがれ。肴もなくつて飲まれるものか。
　ト袖を振り切り、唄になり、與兵衞、奥へ入る。傳三殘り惜しげに、跡を見送つて思ひ入れ。お龜、氣の毒なる思ひ入れ。
かめ　ほんに、愛想の無い與兵衞さん。……コレ、傳三、惡い事さへしやらずば、わしが酌してやらうわいの。
傳三　お龜さん、そりやアお前、ほんの事かえ。それでは一しほ酒が
　ト有りあふ茶碗を取る。お龜、何心なくつがうとする。傳三フト心附き
イヤ〳〵、この酒をすんでの事に、うぬが手で……オ、恐ろしや恐ろしや。
かめ　傳三、この酒が、なんで恐ろしいぞいの。
傳三　サア、そりやア……なにサ、それ〳〵、お娘御のお前さんに、酌をしてもらうては、ひよつと罰が當らうかと、それでアノ、恐ろしいわいな。
かめ　なんのマア、其やうな……お辭儀をせずと飲みやいなう。
傳三　イエ〳〵、お辭儀ぢやアござりませぬ。
かめ　そんなら一つ飲みやいなう。
　トまた酌しようとする。傳三、身を縮めて
傳三　これは又情ない。

ト思ひ入れ。この時奥にて

りよ　傳三や〳〵。

傳三　ハイ〳〵〳〵。

ト これをしほに徳利を片寄せる。此うち、合ひ方になり、奥よりおりよ出て來り

りよ　オヽ、爰に居やるか。いま、與兵衞が話には、日野屋の金を受取つて、香爐の代はわが身へと云やつたが、アノ、ほんに五十兩を

傳三　ハイ、怪しい金を五十兩、たつた今受取りました。

りよ　最前慥かに五十兩。……それに其方も五十兩。どうもわしは合點がゆかぬ。

傳三　そりやその筈だ。一旦外へ

かめ　アヽ、コレ。

ト思ひ入れ。

りよ　傳三、その金見せてたも。

傳三　アノ、これでござりまするか。

ト取つて財布出す。おりよ改め

りよ　ほんに、こりや誠の金。……傳三。こりやわしが預かるぞや。

傳三　モシ〳〵、阿母様、そりやなぜでござりまする。

りよ　最前其方云やつたには、あの香爐は盗み物。

傳三　エツ。

トぎよつとする。

りよ　サア、でもあるまいが、香爐の出所、その持ち主を同道しや。

傳三　アノ、持ち主を

りよ　連れて見えたら、何時でも、金は渡してやるわいなう。

ト財布を懐へ入れる。傳三、思ひ入れ。

ト奥にて

みよ　大方見世にでござりませう。

ト合ひ方、時の鐘になり、おみよ、行燈をもち、佐五右衞門、一緒に出て來る。

佐五　おりよどの、これにか。先刻の返事はどうでござるぞ。

りよ　オヽ、佐五右衞門さま、先刻の返事と仰しやるわえ。

佐五　ハアテ、あれ程云うたお龜が事、

かめ　モシ〳〵、母さん、わたしが事とは、なんでござんすえ。

りよ　ムウ。わしや串談かと聞いてゐたれば、すりやアノ

眞實。

佐五　知れた事サ。誠でなうて在所から、いま忙がしい最中を

りよ　そんならこなさん、眞の心で

佐五　娘お龜を取返しに

かめ　エ、。

ト思ひ入れ。傳三も思ひ入れ。

モシ、父さん、在所にはお米といふ妹もあるに、なぜわたしを

佐五　なぜというたら慾徳づくぢや。此方の國の殿様の御分地、左枝大學さまといふは、今の女房が連れて來た、里松といふ弟の敵ぢや。

かめ　ムウ、その里松が譯は知らねども、わたしをお前が取戻しに

佐五　サア、來た道筋……も話せば解る。その里松が子供同士。頑是もなう鷹を奪ひ合って引裂いた、その科ぢやとてむごたらしう、大學さまが直ぐに手討ち。おのれやれと思うても、あつちは大名、此方は百姓、口惜しうて口惜しうて、寢た間もおれは忘れぬに、向うはちつとも構はずに、いかつげなお侍ひめが、此方の內へわせ居つて、先達て多賀の社內で、殿様のお目にとまつた今出川の道具屋の娘、お龜といふは其方が、實の娘と聞き及ぶ。取返して差上げい、金銀は望み、と吐かしたこそ幸ひ、おのれ、大學め、なんでも爰で……福徳の三年目と、早速われを取返しに來たもこの譯ぢや。なんとお龜、嬉しからう。

ト此せりふのうち、おりよ思ひ入れ。

かめ　エ、モ、父さんとした事が、なんのそれが嬉しからう。辨まへも知らぬ時から、こなたのお世話で人並に、成人させてもらうたわたし、今更お前、取戻さうとは

傳三　それ／＼。こりやア佐五右衞門さまの餘り身勝手。お龜さんを戻す事は、例へ阿母様は御承知でも、マアこの番頭大承不知。なりませぬ／＼。

みよ　ほんにこりや番頭さんの、いつにない眞實な云ひやう、わたしが憚りな事ぢやけれど、どうやらこれは

りよ　ア、コレ／＼。皆何も云やんな。義理に違うた人ぢやもの、何を云うたとて耳には入らぬ。

傳三　ぢやというて、あのやうな。

かめ　ハテ、なんと父さんが云はしやんせうが、云ひ號けの與兵衞さんと、わしや別れて、あの怖らしい大學さま

へは。
佐五　イヽヤ、われが行くまいと、じや〳〵ばつても、おれがやる。もう與兵衞には添はしはせぬワ。
りよ　與兵衞にも愛想が盡きてか。
佐五　知れた事。噂ばかりと思ひの外、先刻の體裁を見た上は、娘は此方へ取戻し、大名のお妾樣ぢや。但し與兵衞があの身持ちで、この身代が立つといふ、母御の請合ひか。
りよ　サア、それは。
佐五　その見屆けぬ聟に、おれが娘と添はしては置かれぬ。それゆゑ連れて歸るのだ。お龜來い。
かみ　イエ〳〵、わたしや
ト行くまいとする。
佐五　うせうと云ふに。
ト無理に引立てる。
傳三　こりや又無體な
ト取支へるを突き退けて、引立てる。
かめ　アレ、母さん。
ト嫌がる。佐五右衞門これを引立てようとする。この立廻りの中へ、奥より與兵衞走り出で、お龜が手を拂ひ、佐五右衞門を見事に投げのける。
佐五　ヤア、與兵衞か。
傳三　モシ、あの父御めがお龜さんをナ
みよ　無理に連れてと仰しやりますぞえ。
ト此うち佐五右衞門起き上がり
佐五　ヤイ。わりや與兵衞、なぜおれを投げたのだ。
與兵　オヽ、投げました。奥で樣子を聞いて居れば、この與兵衞が不身持ちを、云ひ立てにしてあのお龜を、取返して行かうとは、あんまり道が違つた。
佐五　其方が身持ちを見限つて、娘をおれが取戻すを、なんで道が違つたとは。
與兵　さればサ。わしもお龜も養子の身の上、身持ち惰弱が目に餘れば、この與兵衞を勘當して、お龜に似合ひの緣を組み、内を立てるも母の料簡。その脇まへなく幼少から、くれた娘を引立てゝ、連れて行くとは非業非道。それでも道には違ひませぬか。
佐五　サア、そりやア
與兵　あんまり直ぐぢやアござるまいぞえ。
ト佐五右衞門、思ひ入れ。
佐五　どうするものだ。そんならそれよ。

ト傳三、落ちつきし思ひ入れ。

傳三　ヤレ、嬉しやこれで

みよ　變らず此方のお龜さま。

かめ　モシ、母さん、わたしや矢ッ張り内方の

りよ　オヽ、娘でなうてどうせうぞいの。

みよ　わたしらもこれで落ちついたわいなア。

傳三　イヤモウ、安堵したら腹がへつた。ドレ、茶漬けを一杯してやらう。

みよ　サア、ござんせ。

ト合ひ方になり、傳三、おみよ、奥へ入る。佐五右衞門、思ひ入れあつて

佐五　おりよどの、お龜の事はそれなりでも、娘の親へ手向ひした與兵衞、其まゝ置かつしやつては、こなさん、わしへ立つまいがの。

りよ　そりや云はしやんすまでもない。與兵衞はこの場で直ぐに勘當。

與兵　エ。

ト思ひ入れ。

かめ　そんなら見かねて今の時

佐五　おれに手向ひしたゆゑに

與兵　アノ、私しを御勘當とな。

りよ　與兵衞、それで望みは、叶はうがや。

與兵　ムウ　すりやこの頃の不身持ち、不孝も、みんな御承知で

佐五　コリヤ、それを云うては物が無い。矢ッ張りおれを投げたが科。して又、お龜は。

りよ　これも勘當。

かめ　そりや又何ゆゑに

りよ　布はぬきがら、男は女から、夫の身持ち放埒は、皆女房の粗略ゆゑ。與兵衞が惰弱もお龜が科。それゆゑ一緒に勘當する。佐五右衞門さま、母が無理ではあるまいがな。

ト思ひ入れ。

佐五　なんにも云はぬ、おりよどの。そんならわしが取戻して、大學どのへ上げるといふ、心を推して望みある、與兵衞と一緒に勘當とは、この佐五右衞門が存念足つても……、くれ〴〵他人の聟どの、足手纏ひにござらうがどうぞ連れ立ち、共々に

與兵　そりやお氣遣ひなされますな。この身の願ひに取りまぜて。

かめ　お前の胸もさつぱりと、晴らしまするが、せめてもの、生みの親への恩送り。そんな事とは露知らず、先刻は恨んで居りました。堪忍なされて下さりませ。

與兵　與兵衞も斯うとはお心を、知らぬ事とて勿體ない、手籠めに致した慮外は眞平。また母人へも詞にて、云ふに云はれぬこれまでの、御恩を仇な勘當を、願ひし事も身に取つて、餘儀なき事と幾重にも。

りよ　コレ、その云ひ譯は、やがてめでたう。

佐五　それ〳〵。マア、それまでは二人とも、不孝顔を見る程腹が立つ。わしやもう直ぐにお暇しませう。

りよ　でももう初夜前。

佐五　イヤ、明日立ちの心支度。宿屋で早う

　ト佐五右衞門お龜へ、思ひ入れあつて、氣を變へ。

其うち上がりませう。

　ト唄になり、佐五右衞門、向うへ入る。この唄のうち、奥より太平次出て來る。三人とも思ひ入れ。

太平　委細はとつくり與兵衞さま、よう勘當おうけなされました。流石高橋の若旦那さうなけりやならぬ所。

與兵　ア、コレ〳〵、太平次どの、不所存ゆゑに勘當受けた。與兵衞を捕へ流石のと、母の手前も何とやら、滅多な事云はつしやるな。

　ト太平次へ氣をかねる思ひ入れ。

太平　モシ、お前はまだわしに

りよ　これはしたり、太平次どの、不孝なゆゑに一時に、勘當したあの二人、明日がこなたの所へ行かうと、必らず構うて下さるな。……ア、彼奴にまだ遣る物がある。

　ト合ひ方になり、ちよつと暖簾口へ入り、以前の香爐を持つて來り

この靈龜の香爐はの、おのれが目利きで買うた代物、跡に殘して見る度に、腹が立つては罪障ゆゑ、捨てると思うて彼奴に遣ります。

與兵　ナニ、すりや、その靈龜の香爐まで

　ト思ひ入れ。太平次も思ひ入れ。

太平　成る程、そりや與兵衞さんに、いつち好いた下され物。……モシ、勘當うけたその上に、香爐がありやアお前の十分。口ぢやア憎いと仰しやれども、これ程までのお心ざし、仇おろそかに思し召しまするな。……サア、大事な物だ、しつかりと。

　ト太平次、香爐を與兵衞に渡して思ひ入れ。

與兵　重々厚き御恩の程……お龜、ともぐ\、ようお禮をかめ　アイ。有り難うござります。モシ、與兵衞さん、お前と一緒にどこまでも、連れ立つ事は嬉しいが、母さんに別れるが、わたしや今さら、

ト思ひ入れ。

與兵　そりやおれとても同じ事。いつまで云つても名殘は盡きまい。もう此まゝに……母者人。

かめ　隨分ともに、御機嫌よう。

ト兩人しをノ\門口へ出る。この時太平次、以前の徳利を見つけ、思ひ入れあつて

太平　モシ與兵衞さま、お待ちなさい。お詫がすんでお歸りまでは、云はゞ暫しの親子の別れ。ちつとお待ちなされませ。

ト徳利を持つて來り、有りあふ茶碗を取つて、おりよが前に置く。兩人は門の外に佇む。

サア、モシ、阿母樣、酒は憂ひを拂ふ玉箒とやら、こんな折にはわつさりと、一つお上がりなされませ。

りよ　イカサマ、有やうは先刻にから、持病の太平　サ、お癪なら猶の事。一つ上がつておよるがよい。

りよ　そんな事にしませうわいの。

ト茶碗を取上げる。太平次、徳利をよく振つて一つつぐ。おりよ飮み

サア、こなさんも一つ。

ト茶碗を太平次へ渡す。

太平　アイノ\。

ト云ひながら、立つてその茶碗を與兵衞へやる。與兵衞、取つて押戴く。おりよ、これをちよつと見る。太平次ニツコリと思ひ入れあつて徳利を持つて、行かうとする。おりよ徳利を押へ

りよ　待たつしやれ、太平次どの。與兵衞と杯する事はなりませぬぞ。

ト太平次、思ひ入れ

太平　モシ、さう仰しやるな。いとしほなげに、來年お逢ひなされうやら、乃至來々年にならうやら、知れないお別れ。めでたい門出を祝して

りよ　イヤノ\、勘當した子に杯は

太平　ハテ、あなたは御存じ無い分で

與兵　どうぞお慈悲に私しへ

かめ　お上げなされて下さりませ。

りよ　イヽヤ、ならぬぞ。杯がしたくば、一日なりと、早うその身の望みをば……イヤサ、望まずとても歸つた時は、めでたう親子の杯せう。マア、それまでは勘當の、與兵衞に杯ならぬ〳〵。
太平　それも聞えて居りまする。あれ程までに仰しやる事
りよ　イヤ、なんと云うても
太平　そんならちよつと、てう附けばかりも
りよ　イヤ、どうあつても
　　トおりよ德利を押へる。太平次は、いろ〳〵と云つて飮ませたき思ひ入れ、與兵衞は茶碗を持ちどうぞといふ思ひ入れ。お龜も共々願ふこなし。此うち、後へ傳三、頰冠り、尻からげにて、若い者を連れ、お龜へ窺ひ寄り
傳三　コレ、お龜さん。
　　ト引立てゝ行かうとする。
かめ　あれえ。
　　トこれにて與兵衞、茶碗を捨て、傳三を引きとめる。此若い者これを支へて、與兵衞に組みつき、とめる。此うち傳三、お龜を引立て入る、與兵衞、南無三と若い者を投げのけ、尻をからげながら、向うへ追つて入る。

若い者續いて向うへ入る。其うち此方も德利を互ひにせり合ひはずみにて、打ちこぼす。太平次思ひ入れ。おりよ「アツ」と苦しむ。
太平　もし、阿母さん。
　　ト側へ寄り、押へようとして、懷の以前の金、手に觸るゆゑ引出し
ヤ……こりや
　　ト取らうとする。おりよ血を吐く、太平次の手にかゝる。太平次手早く財布のまゝ取る。おりよ倒れる。折角與兵衞に呑ませる毒。……惜しい事をしてしまつたシタガ、思はず、五十兩。
　　ト思ひ入れ。ゴーンと時の鐘になる。戸棚の中よりお松出る。
まつ　太平次さん、よい事をしたの。
太平　コレ。……名を云ふなえ。
まつ　ほんに、こいつは野暮だつた。
太平　マア、誰れもうせないうち、爰を早く
まつ　それがいゝねえ。
　　ト矢張り時の鐘、太平次、お松に行けと思ひ入れ。お松呑みこみ、兩人門口の外へ出て、花道へ段々かゝ

る。
まつ　時に、聞きねえ。お前の云ひつけた通りに、戸棚の中に、土用の内の温石を見るやうに、隅の方にちよく／＼こなつて、なんでもよい間にお龜めをと、氣を付けて居たところが、因果と側に彼奴が居るゆゑ、それで擔ぎそくなつた。
太平　おれもあの與兵衛めへ、阿母めが香爐を遣つたは幸ひ、手もなく毒酒くらはせ、おツ殺せば、大學さまに頼まれた規模も立ち、香爐も手に入る上に、あのお龜を大學さまへと思ひの外、阿母めの固意地で、爭ふうちに徳利を、ぶツころばして毒酒は段切れ。其うちお龜も、與兵衛も、どうしてか、うしやアがらない。
まつ　ほんに、そいつは業腹な事をしたの。それでもお前、五十兩〆めて來たぢやアないか。
太平　オ、サ。阿母めが毒でくたばる時、懐にあつた五十兩、此奴はおれが勘定の外だ。
まつ　コレサ。その金の中でわつちを引上げ、どこぞこつそりと妙な所へ、世帯を持たしてくんねえな。
太平　よい、サそりやア合點だよ
まつ　合點ぢやアない、早くだよ。……オヤ／＼、蕎麥を誂らへたやうだ。
太平　おきやアがれ。
まつ　そりやアさうと、お前、あの阿母を殺して、むづかしくはあるまいかの。
太平　なにサ、そりやア氣遣ひない。お龜、與兵衛が勘當の其うちに、丁度くたばつたから、ソレ、殺し手は與兵衛となるワ。
まつ　成る程。こいつは好い間だの。
ト此せりふを云ひながら、中の間より東の花道へかゝるうち、道具替る。
本舞臺、三間の間、向う一面に玉椿の垣、内より卒塔婆大分に見ゆる。よき所に流れ灌頂、誂らへの古井戸。すべて妙覺寺裏手の體、一つ鉦の念佛にて、道具とまる。
ト時の鐘、蛙の聲。兩人舞臺へ來り、太平次、古井戸を見つけ
太平　待ちや／＼。今くたばる時、血を吐いて、薄穢ない、手をよごした。幸ひ爰に井戸があるワ。ちよつと一釣瓶かけてくれ。

初演錦繪　尾上松助のお松

初演の繪番附

まつ　アイ〳〵。……待ちねえ、釣瓶があればよいが。
ト井戸の側へ來り、覗いて
オヽ、ある〳〵。
ト着物の前を挾んで、釣瓶にて汲みにかゝり、汲めぬ思ひ入れ。
この繩釣瓶といふやつが、いま〳〵しい。汲み憎いものサ。
トやう〳〵に汲み上げる。此うち、太平次、お松を見て思ひ入れ。
もつと先へ手を出しねえな。
ト太平次へかける。太平次、本水にて手を洗ふ。
太平　もう一杯釣つてくれ。
まつ　まだ洗ふのか。よい加減にしねえな。根ツから釣れるものぢやアない。
トまた汲みかゝる。此うち始終一つ鉦の念佛。お松いろ〳〵あつて汲むうち、釣瓶の繩首へまとふ。
まつ　これな、氣障だ。この繩を取つてくんねえ。
太平　ドレ、この繩か。
ト取る振りをして、繩先を捕へ、グツと締め殺す。お松アツと跪くを、其まゝ足をすくつて井の內へポンと打込む。チヨンと拍子木の頭。太平次、井戸の內を伸び上がつて窺ふ。思ひ入れよろしく
ひやうし幕

六幕目　倉狩峠の場

役名――問屋人足與五郎實ハ孫七。飛脚、與五七。下部、團平。駕籠舁き、八八。同、三婦六。山伏、升法印。篠原傳五。太平次女房、お道。與兵衞女房、お龜。道具屋、與兵衞。佐五右衞門娘、お米。立場の太平次。

本舞臺、三間の間、うしろ黑幕。正面に古宮、黑木の鳥居、神木、その外樹木林。よき所に倉狩峠と書きし榜示杭。幕の中より雨車、雷の音、夕立の景色にて幕明く。
ト宮の椽先に、團平、旅奴の形、與五七、序幕の形、八八、三婦六、駕籠舁きにて、椽に腰を掛け、雨宿りをしてゐる。雲助二人、四つ手駕籠を下ろし、此うちへ入り、雨をやめて居る見得。皆々思ひ入れ。

皆々　うんらいぐうせいでん、桑原々々。
團平　桑原々々。
八八　コレサ、奴さん、お前、地震と雷をはき違へたのだ。
團平　ほんに、さうであつた、萬歳樂々々々。
三婦　コレサ、この奴さんは、桑原だわな。
團平　ナニ、桑原とはお醫者様の苗字か。
與五　イヤ、おへないへんぼうらいだ。
團平　へんぼうらいぐうでんとは、雷の呪ひであらう。なんと物知りか。
皆々　何を云はつしやる。
與五　時にお前、いま話さしつたその女を、お抱へなさるといふて、それを尋ねるのかえ。
團平　左やう〳〵。殿大學さまの惚れてござる。お龜といふ女を尋ねるて。
與五　そのお龜な、隨分知つてゐるて。モシ、奴さん、お前もいづぞや見たお方だぞえ。
團平　ほんにさうであつた。おらアどうしてか物覺えが惡いて。
八八　コレ〳〵、與五七どの、一昨日の晩、貴様や太平次が、木津の渡しから連れて來た、あの娘ぢやアねえか。

與五　ナニサ、あの玉は違ふワ。お龜といふは隨分知つて居るて。
三婦　待ちやれよ。後の大槇に雨宿りをしてゐた夫婦巡禮、彼奴らぢやアねえか。
八八　それ〳〵、連れの男は、とんと音羽屋といふ代物だ。
與五　其奴だ〳〵。その男は與兵衛といふのだ。聞けば養母を殺して、お龜と二人、道具屋を駈落ちして巡禮に出たと聞いたが、彼奴等を捉まへれば、どう廻しても金儲けだね。
團平　イヤモウ、金儲けの段か、お龜を締めて差上げれば、コレ、支度金は五十兩、この通り持つて居る。
ト首に掛けた財布を見せる
與五　そいつは相談物だわえ。もし今云つた夫婦連れが、お龜、與兵衛に極まれば、モシ、斯うなされませ。
ト囁く。團平呑み込み
團平　そんなら爰に逗留しようが、して、落ちつく宿は。
與五　斯うなされませ。この峠の立て場に、太平次といふ者がござります。お前、そこへ行つて、待つてござりませ。
團平　ア、、立場の太平次か。よし〳〵。

雲助　モシ〳〵、旦那。今の雨で路が辷ります。峠までお廉く參りませう。
團平　ア、駕籠か。成る程、まだ鳴りさうだな。酒手で乘せてゆくか。
雲助　お廉く參りませう。
與五　そんなら必らず、太平次が所へ。
團平　合點だ〳〵。
八八　コレ〳〵、儲け仕事なら、おいらも半口。
與五　ハテ、委細はあの宮の内で
三婦　雨を凌いで話さうか。
トまた雷きびしく鳴る。
團平　ア、桑原々々。
ト駕籠へ入る。
與五　ア、臆病な奴樣だ。
と捨ぜりふにて三人は宮の内へ内る。雲助、團平を駕籠に乘せて「桑原々々」と云ひ〳〵、向うへ入る。矢張り雨車、雷きびしく鳴る。向うより、太平次女房お道、世話女房の拵らへにて、跣足になり、草履を持ち前垂れを頭へかむり、俄雨にあうたる體。後よりお龜、與兵衛、巡禮の拵らへにて、與兵衛、仕込みの杖を突き、行李を脊負ひ、同行二人、西國巡禮と書いたろ菅笠を冠り、病氣、體。お龜これを介抱して出て來り、花道にて
かめ　モシ〳〵、おかみさん。爰らに人足はござりませぬかいな。このマア、雷さんで、いかう難儀しますわいなア。
みち　そりや難儀でござんせう。跡の峠に内があつたでござんせうに。見ればお若い女中さん、ようまア巡禮なされまするな。
トよく〳〵見て
ヤ、お前はお龜さんぢやアござりませぬか。
かめ　さう云はしやんすは、お道どの。こりやマア好い所で。コレ〳〵、與兵衛さん、お道どのに逢うたわいな。
與兵　そりやマア、どうして爰らへ來てござるのぢや。
みち　イヤモウ、お話し申せば、いろ〳〵樣子のある事でござりますが、折惡い夕立。マア〳〵、あのお宮の軒下へなりともお出でなされませ。
かめ　道中すがらあなたの御病氣、いかう難儀して居やしやんすわいなア。
みち　そりやマア、御難儀でござりませう。マア〳〵、あ

れへお出でなされませい。
トお道、捨ぜりふにて、二人を介抱して古宮の縁にかけさせる。

與兵　ほんにマア、どこで知る人に逢ふか知れぬ。イヤモウ、與兵衞は口外せぬけれど、こなた衆夫婦も、大概わしが跡の事も、推量して居るであらう。それはさうと、思ひがけない所で逢うたお道どの、定めし太平次どのも爰らへ宿替へしたといふやうな事か。さうか〳〵。

みち　左やうでござりまする。お二人が京都を立退きなされた後、こちの人が在所ゆゑ、急に此あたりへ引越しましたわいな。

かめ　そりやモウ、二人ながら達者で暮らさんして、めでたうござんす。それにつけても、御恩になつた母さんは息災な事ぢややら。久しう便り音信もないが、わたしや心にかゝつて
ト思ひ入れ。お道こなしあつて

みち　モシ、お龜さん。お前、阿母樣の事、ほんまに御在じござりませぬかえ。

かめ　ほんまに知らぬかとは、アノ母さんが、どうかなさんしたえ。

與兵　コレ〳〵、案じられる。阿母樣はどうなされたぞ。

みち　サア、お話し申すも泪の種。お前方の家出なされたその後で、盗人が入りまして、阿母樣は、お果てなされましたわいなア。
ト思ひ入れ。

二人　エヽ。

かめ　アノ、母さんがお果てなされて
ト泣き伏す。

與兵　コレ〳〵〳〵、そりや何かいの。その盜人が阿母樣をお殺し申したといふやうな事かいの。コレ、さうかいの〳〵。
トいろ〳〵思ひ入れ。

みち　アイ〳〵。お宅樣のお金を取らうとした事か、あなたを殺して金まで取つて參りましたが、今以て殺した奴が

與兵　どうしたぞ〳〵。

みち　知れませぬわいなう。
ト泣き伏す。お龜こなしあつて

かめ　エヽ、おいとしい阿母樣。叶はぬながらも、せめて女子のわたしなりと、お側にあつたらやみ〳〵と

與兵　かゝる非業な御臨終も致させまいに、何をいふにも兄々の、敵を討ちたいばつかりに、藁の上から大恩うけ養育ありし親を捨て、家出いたせし二人が不孝。罰報いで此やうに、日増し重なる持病の積。草葉の蔭にてさぞやさぞ
かめ　お恨みなされん、阿母様。
與兵　御免なされて
二人　下さりませ。
　ト思ひ入れ。お道こなしあつて
みち　御尤もでござりまする。お道理でござりまする。母御様の、お身の成行き、お聞きもあらば、さぞやお悔みなされうと、存じたなれど、申さにやならぬ事ゆゑに
　ト此うち、與兵衛、持病の癪の發りし思ひ入れにて苦しむ。お龜、駈け寄り
かめ　アヽ、また持病が起りましたかいな。
　ト介抱する
みち　モシ、お龜さん、お藥はござんせぬかえ。
かめ　サイナア。昨夜の泊りで皆になつたわいなア。
みち　アヽ、そりや困つたものでござりまする。どうぞお藥を
　ト思ひ入れあつて
ほんに、この先の在所に、大坂から來てござんす、醫者どのがござりまする。わたしがツイ一走り、藥を買うて參りませうわいなア。
　ト身拵らへする。
かめ　そんならお前、どうぞ買うて來て下さんせいな。
與兵　ハテ、この雷に、どうしてマア山路を
みち　ハテ、大事でござりませぬ。ちつとの間お待ちなされませ。わたしが直ぐに買うて參りますわいな。
　ト雷きびしく鳴る。お道、お龜の菅笠を借り、これをかざして、とつかはと下座へ入る。兩人あとを見送り
與兵　ヤレ／＼、マア氣の毒な、この石坂道を、ようマア藥、
　ト思ひ入れ。
どうも合點のゆかぬは、母様の御最期。殊に、あの太平次が、急にこの在所へ引越して來たといひ、アヽ、どうやらこれには
かめ　サア、わたしもさう思ふわいなア。
　トよき時分より與五七、八八、三婦六、頰冠りにて面を隱し、出かゝりゐて

與五　親殺しの與兵衞、見附けたぞ。
八八　ふん縛る。動きやアがるな。
　トこれにて兩人思ひ入れあり
與兵　ヤア、わりやア上下の與五七ぢやアないか。親殺しの與兵衞とは
與五　養母を締め殺し、逐電した與兵衞。見遁がしてやらが物は相談。そのお龜を渡して行くか。返事次第で
三人　ふん縛れ〱。
與兵　ア、コレ〱。滅多な事を云ふまいぞ。どうして母を殺害せう。殊に、お龜を渡せとは、こりや、わいら無法を云うて、女房を連れ行かうといふ企みぢやな。わいら寄つたら免さぬぞ
　ト身拵らへする。
與五　おきやアがれ。持病に惱むと聞いて居たワ。皆かゝつて締めさつしやれ。
皆々　合點だ〱。
與五　お龜はおれが
　トお龜へかゝる。與兵衞、息杖にて與五七をくらはす。八八、三婦六立ちかゝる。この時雷きびしく鳴る。三人耳を押へて

三人　ア、桑原〱。
　ト顫ふ。お龜、與兵衞に縋りつく。この時雷きびしく落ちたる音して、神木の杉へ煙硝火立つて、枝二つに折れる。皆々重なりあうて氣を失ふ。與兵衞、お龜をしつかりと抱き居る。空晴れて雷止む。與兵衞心つき思ひ入れあつて
與兵　コレ〱、お龜、もう夕立も晴れたさうな。ア、嬉しや〱。
　トお龜、心附き
かめ　與兵衞さん。そこらへお下がりなされたのかえ。
與兵　アレ、あの杉の木が折れてゐるワ。
かめ　エ、あそこかいな。道理こそ嚴しい鳴り音。
與兵　アレ〱、今の奴等はあのやうに、氣を失うたと見えるわえ。
かめ　鬼のやうな惡者が氣を失うて、こちらに怪我のないといふのは
與兵　正しく菅家の末葉たる、多賀のお家の靈龜の香爐、所持せし威德か天の助けか。
かめ　寶の香爐の
與兵　コレ。

皆々　アヽ、桑原々々。

ト一塊りになる。兩人見てニツロリと笑ふ思ひ入れにて、お龜の手を引く、直ぐに在郷唄にて道具廻ろ。

本舞臺、三間の間、向う鼠壁、納戸暖簾、平舞臺に仕立て、上の方へ誂らへの二階、丸太階子かけ、藁葺の門口。木部屋、藪疊、軒口に燕の棚、草鞋、草履大分、賣藥の札を掛け、辨慶に燒魚を差し、菰かぶりの四斗樽、德利、ちろりを散らし、よき所に誂らへの圍爐裏、自在に藥罐を掛け、お米、娘の拵らへにて、太平次が木綿のどんざ布子を着て、ひとへ帶にて圍爐裏の火を焚きゐる。茶棚、手桶、長床几、すべて倉狩峠一軒家、立て場の模樣。荒神棚に向ひ升法印、田舍法印の拵らへ、着流しにて、錫杖を持ち、荒神拂ひをしてゐる。太平次　やつし、中月代にて、草鞋を作り居る。在鄕唄にて道具とまる。

升法　南無、家の內、三寶大明神々々々々。

ト荒神拂ひ納まる。

太平　御苦勞でござりました。コレ姐えや、法印さんにお茶を進ぜい。

よれ　アイ。

ト圍爐裏の藥罐より茶をついで持ちゆき

アイ、お茶上がりませ。

升法　構はつしやるな／＼。コレ太平次どの、ついに見た事もないこの姐え。こりやどこから來て居ます

太平　アヽ、その姐えが、嚊アめが燒き餅の發端よ。

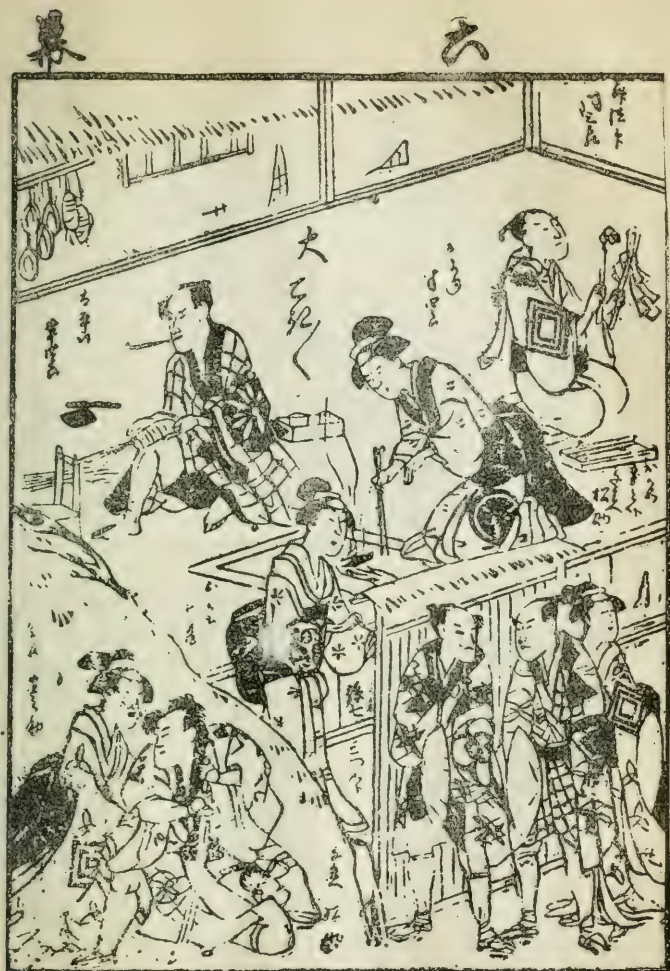
升法　アヽ、此やうな。成る程、これぢや夫婦喧嘩も出來さうなものサ。

太平　サア、そこが貴樣も素人だ。ハテ、おれがやうな、ひなた臭い男に、なんでそんな娘が附くものかな。

升法　そして、この子は、なんで來て居る。

太平　こりやア何よ。おれが仲間の與五七といふ三度と二人連れで、木津の渡し場へかゝつたところが、連れにはぐれたこの娘。乞食めらが取卷いて、着て居た物を取上げて、すんでの事に百萬遍をおツぱじめる所を、可哀さうだと思ふから、乞食めらを叩き散らして、連れの男が來次第渡してやる積り。コレ、必らず斯う世話をするを惡く氣取らぬがいゝよ。

よれ　アイ／＼。なんの惡う存じませう。一昨日の暮れ方連れにはぐれて難儀な所、お助けなされたその上に、お

内へお連れなされてのお世話。その深切が間違ひの端と
なり、お内儀さんのいさかひが、わたしやお氣の毒に存
じますわいな。
太平　ナニサ、嬶アが事は打ッちやつて置かつしやいな。
升法　して、姐えはどこの生れ。
よれ　アイ、近江の者でござります。
升法　ア、、御亭主と二人連れで、こりや大和巡りといふ
やうな事かの。
よれ　アイ、マア、左やうなものでござりまする。
升法　夫婦が大和といふ事は見通しの法印、やるものぢや
ごんせぬ。ちつと時代なせりふだが、ア、つがもねえ。
ハ、、、、。時に太平次どの、こなさんも京に住んでゐ
るから、おれが妹、譯があつて、現在の兄が仲人役のこ
の法印。相變らぬ夫婦喧嘩は、犬も喰はねえ世の譬へ。
もう好い加減に仲を直して下さいな。
太平　ハテ、兄貴を仲人に賴んだは、まさかの時に口を明
かすまい爲。貴樣の内へ引取つて、折角の挨拶だが、迚
もじんじゆくはしめえよ。
升法　サア、そこを一番貰ひに來たの。
よれ　左やうでござりまする。お二人のいさかひも、どう
やらわたしから起つた事と思はれますれば、お腹立ちも
ござりませうが、お内儀さんをお戻しなされて下さんせ。
左やうでござりませぬと、わたしから先へ爰のお内を
ト出ようとする思ひ入れ。
太平　オッとさうはならない。嬶アに代へても、亭主の尋
ねて見えるまで、世話をせねばならねえよ。コレ、して、
貴樣の亭主の名は。
よれ　アイ、與五郎と申しますわいな。
太平　エ、、アノ武家方に奉公した
よれ　よう御存じでござりまする。
ト思ひ入れ。てんつゝになり、向うより以前の駕籠舁
き、下部團平を駕籠に乘せ、息せきと出て來り、門口
に下ろす。
團平　もう爰か。早く來たな。
ト駕籠より出る。
駕甲　旦那。もう鳴る氣遣ひはござりませぬぞえ。
團平　イヤモウ、今の雷は、そこらへ落ちたやうだ。コレ、
駄賃は濟んでゐるぞよ。
駕乙　左やうでござります。コレ〱、太平次どの、お客
があるぞえ。

初演當時の

繪本番附

太平　オイ〳〵。どこからござつたのだ。
駕甲　何か旅のお方が、女中を尋ねると仰しやつて
太平　ナニ、旅のお方が、女中を尋ねると云つてか。そんなら今噂をした、與五郞といふ人か。
よれ　エヽ、あの與五郞さんが來てかえ。
ト門口へ駈け出る。團平ズッと入り
團平　太平次どのはおてまへか。
太平　ハイ、お前が與五郞さんかえ。
團平　イヽヤ、身共は團平と申す。
よれ　エヽ、違うたわいなア。
太平　姐え、連れの衆ぢやアねえか。
よれ　アイナ。
太平　ハテ、註文が合つたから、連れの衆だと思つたやつサ。
團平　コレ〳〵。身共は與五七と申す男が敎へて寄越した。
太平　エヽ、與五七かえ。隨分心安うござりまする。
團平　然らばちつと密々に話があるが、なんと內々で、聞いてはくれまいか。
太平　畏まりました。隨分承りませう。コレ、姐えや、てめえ、あそこにある鉈で、粗朶をこなして下さい。
よれ　アイ、これでこなしまするかえ。
ト鉈を取上げる。
太平　ムウ、それだ〳〵。コレ、法印どの、こなたはアノ嚊アを連れて來さつしやい。それ程までに云ふ事だ。もうわしが方はこれぎりに
升法　妹を呼び返して下さるか。
太平　貴樣に免じて得心するよ。
よれ　それでわたしも嬉しうござんす。
升法　そりやア有り難い。こなさん、相談事があらば、ゆつくりと話さつしやい。見世はわしが見張つて進ぜう。
太平　オウ、賴みましたぞえ。
駕舁　ドレ、おいらも一寢入りやつて行かうか。
太平　奴さん、斯うござりませ。
ト合ひ方になり、太平次先に團平を連れ、暖簾口へ入る。駕籠舁きは門口へ駕籠を置き、下の勝手口へ入るお米意氣地なく鉈を持つて、粗朶をこなす。升法印見て
升法　コレ〳〵、姐え、それぢやアゆかねえ。ドレ、おれがこなしてやらう。こなたは行燈でも灯すがよいぞえ。

よれ　アイ、お頼み申しまする。ドリヤ、灯りをつけませう。

ト唄になり、お米、行燈を尋れ、圍爐裏の火をともし行燈をつける。升法印、粗朶をこなす。矢張りこの唄になり、向うよりお道案内して、與兵衛、苦痛の思ひ入れにて、柳行李と菅笠を持ち、お亀、介抱しながら出て來り

みち　モシ、お二人様、あの灯りの見えまするが、太平次の内でござりまするが、道々もお話し申す通り、昨日女夫喧嘩して、内を出て居りますれば、門からわたしが案内して上げませう。

與兵　何分こなたを頼みまする。

かめ　モシ、孫三郎さん、お前、太平次どのに逢うたというて、また例の悪い顔しなさんすなえ。

與兵　ほんに、大學に似たあの太平次、逢うたら病が……

ア、まゝよ、お道どの、頼みます。

みち　アイ／＼。

ト門口へ來て

モシ、ちつと爰を明けて下さんせ。

升法　ヤ。さういふ聲は妹ぢやないか。

みち　エ、兄さん、來て居なさんすかえ。

升法　オイ。何事もおれが丸めて置いた。サア、入つたり入つたり。

みち　そりや世話でござんしたなう。

よれ　ありやお内儀さんの聲、ようマア戻つてお出でなさんしたなう。

ト門口へ出かゝる。お道見て

みち　エ、なんぢや、こなさんは、アタなめ過ぎた。この人の着る物を着て、エ、きいた風な。

トぴんとする。お米、氣の毒なる思ひ入れ。

升法　コレサ、妹、あの女中も、聞けば尤もな譯もあるよ。モウ／＼、燒餅はおれに預けて置きやれよ。

みち　イ、エイナ、みんなあの女子から起つた事ぢやわいな。……サ、モシ、お二人ながら、お入りなされませ。

與兵　いかい世話になりまするて。

ト行李、菅笠を持ち、兩人内へ入る。

升法　コレサ、妹、あのお二人は、どこからござつたのだ。

みち　サ、このお二人は、お前も知つて居なさんす

トお米がゐるゆゑ云ひかねる思ひ入れ。

升法　ア、、なにかえ、峠で日が暮れて、難儀さつしやる
旅の衆かえ。
みよ　マア、そんなお方ぢやわいなア。
よれ　エ、、なんでござりまするかえ。お二人連れ　お道
中、殊に、先刻の夕立に、途中で日をお暮らしなされた
といふやうな事でござりまするかえ。
かめ　アイ、わたしらは女夫連れの西國。仰しやる通り先
刻の夕立に、いかう難儀いたしましたわいな。
よれ　それはマア御難儀でござまりせう。わたしも夫と二
人、この大和路へかゝりまして、連れの男にはぐれまし
て、爰の内のいかいお世話に
ト挨拶する。
みち　エ、、なんぢやぞいな。又しても〱、女房のわた
しを差措いて、あんまりつべこべと、措いてもらひませ
うぞえ。
トこれにてお米、氣の毒さうに思ひ入れ。升法印、こ
の中へ入り
升法　これはしたり。又腹を立てるのか。どうしてもあの
女中を見ると、てめえはムカ〱するさうだ。コレ、姐
え、逆らつても惡い。マア〱、ちつとのうち、あの二
階へ、上がつて居さッし〱。
よれ　ハイ〱。どうぞお内儀さんの心の解けますやう
に、お前、詫び事なされて下さりませ。
升法　ハテ、呑み込んで居るよ。マア〱、逆らつては惡
い。二階へ行つて居さッしやいよ。
ト合ひ方になり、お米、氣の毒さうに二階へ上がる。
升法印捨ぜりふにて付いて上がり、梯子より二階の戸
を立てゝ、下りて來る。この途端、奥より太平次出て
來り、二人を見て
太平　ヤ、こりやお二人ながら、どうして爰へ。マア〱、
こちらへお出でなされませ。
ト上敷を敷いて、二人をよき所へ通す。
升法　ア、、太平次どのも、お近附きか。してマア、お二
人は。
みち　コレイナア、お前も知つて居さんす、京都今出川の
道具屋。
升法　エ、、お龜どのと與兵衛どのか。その與兵衛さまと
申すは、多賀の御家中、瀬左衞門さまの末の弟御、いは
ば妹は御家來筋、ようマア尋ねてお出でなされました。
與兵　久しう逢はぬ太平次どの。京都に居るうち、大兄の敵

たる、大學どのによう似たこなさん、見る度々に癪積の
蟲持ちのこの與兵衞、お龜を連れて旅先で、持病の癪に
惱まされ、殊に最前お内儀の、話しで聞いた母の横死、
兄は非業の死を遂げられ、また中兄は殿のお手討ち、敵
を討ちたいばつかりに、不孝に當り家出せし、跡にて義
理ある母の成行き。思へば、わし程な、因果な者がござ
らうかえ。

かめ　その上、主の持病の癪。道中すがらあそこ爰、宿
屋に長う逗留の、その物入りに貯への、路用もいつか遣
ひ捨て、心細い女夫づれ。…ほんに此やうなおはもじ
い、さもしい事を。

ト恥かしき思ひ入れ。

太平　そりやモウ、御尤もでござりまする。與兵衞さまの
お身の悔み、申さうやうもござりませぬ、養母の母御に
俄の御不幸。憖かに斯うとは存じたなれど、今日までも
口外いたさぬわしら夫婦。して、お二人はいづくを當に
この大和路へはお出でなされました。

與兵　成る程、この大和路へ參つたは

ト表の方へ思ひ入れあつて

敵と覘ふその人は、お上の聞え以ての外、東國近江を發
足なし、攝州住吉の濱屋敷に、押籠め同然と聞いたるが
只大切なは、コレ。

ト柳行李の中より靈龜の香爐を出し

兄彌十郎どの預かりありし、多賀家の重寶靈龜の香爐、
手に入る上はお屋敷へ、とは思へども、御大切を思ふか
ら、兄の朋友幸兵衞どの、兩宮御寄附の金子を繕ひ、勢
州と聞きしゆゑ、松田氏へ手渡しなし、その上にて兄の
仇。

ト云はうとする。太平次、思ひ入れあり、

太平　ア、モシ、奥には他聞の者もござれば、滅多にその
名を

ト思ひ入れ。與兵衞、手早く香爐を行李へしまふ。

みち　あなたは道から持病の惱み、殊に、路用も遣ひ切り
お二人ともに、いかい御苦勞。

太平　ハテ、そりやマア御難儀でござりませう。路用の金
は、御相談申したら

升法　コレ、妹、先刻に聞けば、お龜どのとやらは、その
大學が妾に欲しいと云うて、こゝらあたりを探すと聞い
たが、もしあのお子を

かめ　エ。

みち　ハテ、滅多な事を云はぬものぢやわいな。
太平　コレサ、女房、てめえ、大儀ながら、醫者を呼んで來ないか。
みち　ほんに、さうしやんせう。あの養珉さんを、お呼び申して來ようかいの。
太平　さうしやれ〱。
與兵　イヤ〱、心遣ひは忝ないが、構うて下さるな〱。
太平　イエ〱、さうでござりませぬ。大事のお身でござりまする。
がめ　ほんに、何かと世話になりまする。して、お前一人行きなさんすかえ。
升法　イエ〱、あの曲り角に、えて狼が出をるから、わしが送つて行きませう。
みち　お前と二人なら慥かぢや。左やうなら行て參りますぞえ。
升法　ドリヤ、一緒に行つてやらうか。
ト唄になり、時の鐘。升法印、小提灯を下げ、お道附いて向うへ入る。あと合ひ方。
太平　モシ、與兵衞さま、蚊がせゝりませう。その圍爐裏の側へ來て、横におなりなされませ。
與兵　さうしませう。免さつしやりませ。
ト寢ころぶ。
かめ　アヽ、又お前、うたゝ寢して、持病の上に風邪ひかうかえ。コレ、蚊がせゝらうぞえ。
トいろ〱して
ほんに思ひの外、蚊が少ない事ぢやわいな。
太平　ナニサお前、後になると、目の明けねえ程出やす。
ト澁團扇にてそこらぢう煽ぐ。お龜、太平次の側へ差寄り
かめ　コレ、太平次どの、今あの法印さんが云はしやんしたのは、大學どのから此わしを、尋ねて居るぢやござんせぬかえ。
太平　アヽ、いらざる事をあの法印が口走つて。左やうなら申しませうが、この間中から此あたりへ、大學どのゝ家來衆、お前に逢つたら勸め込み、あの住吉の濱屋敷へ妾に抱へて
ト與兵衞へ思ひ入れ。與兵衞フッと目を明き、聽き耳立てる。
今夜も今夜と、お前の支度金に、五十兩持つた奴どのが、暮れ前方から泊つて居ますわいの。

かめ　エヽ、そんならわたしが支度金持つて、大學どのゝ
アノ家來が。
ト思ひ入れ。
太平次どの、どうぞわたしを左枝の屋敷へ、奉公に遣つ
て下さんせいなア。
太平　アモシ、お前、滅相な事云ひなさる。向うは敵のあ
の大學。そこへどうして、アノお前を
かめ　サ、その敵の大學ゆゑ、わたしを遣つて身の代の、
金をあなたの路用とも、又その病を癒すとも
ト後云ひかねて忍び泣く。空寢入りせし與兵衛、起き
上がつて
與兵　コレ、忝ない。嬉しいぞや。路用に盡きたその上に
持病に冒され、この惱み。それを見かねて女氣の、現在
敵の妾にと、思ひ附いたる心根が
ト思ひ入れ。
かめ　どうぞ屋敷へ、アノわたしを
與兵　てかけ、妾に身を穢し、わしを貢ぐその金は、現在
敵の
ト云はうとして思ひ入れあり
どうも其方は遣られまい。

ト思ひ入れ。太平次こなしあつて
太平　御尤もでござります。先も多いに、名におふ兄御の
ト　あたりを見廻し
敵の屋敷へ入り込ませ、通ひ路あつたら、あなたのお爲
に。
かめ　サ、及ばずながらお前の手引き、これ幸ひ。その身
の代は取らずとも、屋敷の樣子を聞き出だす、願うても
ないわたしが役目。
與兵　憎しと思ふ現在の
かめ　その仇人に身を穢し
與兵　操を破るも
かめ　お前の爲。
與兵　成就するやう
かめ　そんなら屋敷へ
與兵　コレ、
ト手を合せ
行つてくりやれ。
かめ　アイ。
ト思ひ入れ。太平次、仕濟ましたりとこなしあつて、
三人顏見合せ、ホロリとする。時の鐘、合ひ方になり

奥より團平出で來り

團平　サテ〳〵、きつい蚤だ。うたゝ寢をして剛氣にくはれた。

トこれにて與兵衛、二枚屏風をして隠れる。

太平　モシ、團平さま、先刻お話しなされた、アレあの娘やう〳〵とわしが勸め込みましたが、いよ〳〵お連れなされますか。

團平　ヤ、なんと云やる。お屋敷に行かうと申すか。それは重疊。行つてさへくれるなら、コレ、支度金は五十兩。

ト財布のまゝ出し、太平次の前に置き

お目見得の身のまはりは、後からでも大事ない。サアサア、承知なら早いがよい。幸ひと駕籠の者も殘つて居るコレ、駕籠の衆〳〵。

ト呼び立てる。下の方より、駕籠舁き兩人出て來り

駕舁　ハイ〳〵、お歸りでござりますかえ。

團平　コレ〳〵、歸り駕籠は女中だから、大事に頼むよ。

駕舁　ハイ〳〵、畏まりました。

團平　サア〳〵、太平次、早いがよいよ〳〵。

トせり立てる。

太平　サア、此方は隨分ようござります。コレ、申し、お前がお屋敷へござるばかりに、支度金五十兩。これを路銀に

ト兩方へちよつと見せる。與兵衛、屏風の蔭より覗く

お龜、思ひ入れ。

かめ　その身の代の五十兩、わたしぢやと思し召し、お前のお身の御用に立て、隨分と息災に、わたしも奉公大切に。縁があつたら、また逢ふ事も

トつか〳〵と門口へ行く。駕籠へ乘り、ワツと泣く。

團平も附き、門口へ出る。與兵衛、思ひ入れあつて

與兵　必らず共に、時節を待つて

かめ　めでたう本望。

太平　アモシ。

與兵　それ叶はねば

かめ　これが別れの

與兵　ヤ。

ト出ようとする。太平次、門口をシヤンとさす。團平垂れを下ろし

團平　急がうぞえ。

ト唄、捨て鐘にて向うへかゝる。揚げ幕より與五七、

八八、三婦六を連れ、ヒソ〱と出で來り、花道にて行き合ひ、摺れ違うて、與五七、團平と囁き、駕籠は向うへ入る。三人は門口へ來り、樣子を窺ふ。與兵衞、太平次、思ひ入れあつて

與兵　如何にこの身の爲ぢやとて、現在の敵大學へ、この金取つて妾奉公。これにて病は癒ゆるとも、貧の病の大病は

ト　ほろりとする。門口に窺ふ三人スツと入り

與五　親殺しの與兵衞、見附けた。

三婦　代官所へうしやアがれ。

ト立ちかゝる。太平次、與兵衞を圍つて

太平　コレ、エ、、與五七。何があなたが親殺しだ。

與五　ハテ、道具屋の母親を、殺して立退く養子息子。親殺しだから連れて行くワ。太平次に構はずと、ふん縛れ。

二人　合點だ。……來やアがれ。

ト與兵衞へかゝる。太平次、三人を相手に立廻り、この時捨て鐘になり、向うよりお道出で來り、物騷がしきゆゑ、内を窺ふ。太平次そこに有る鉈を取つて、知らぬ顏にて與兵衞に打ちつける。この鉈、與兵衞の膝頭に當る。深疵ついて、タヂ〱とする。太平次仕濟まし顏にて、内より八八、三婦六を抛り出す。お道これに驚ろき、うろたへて門口の木部屋に入る。與五七逃げて出る。太平次、追ひ駈けて出て、仕方して、逃げろ〱と思ひ入れ。與五七、呑み込み、三婦六、八八に、來い〱、と仕方して、向うへ逃げて入る。太平次、與兵衞を介抱して

太平　モシ〱、お怪我はござりませぬか〱。

與兵　イヤ〱、さのみな事でもないが、コレ、この鉈を打ちつけ、持病の上に、アイタ〱。

ト立ち上がり、思ひ入れ。

太平　エ、、憎い奴でござります。モウ〱、この内にお出では御無用でござります。只今のお金もわしが預かりまして、お後から持參いたしまする間、お前樣はあの峠の、古宮までお出でなされて、あれでお待ちなされませ。支度を致し、後から參ります〱。

與兵　成る程。立て場の一つ家。又ぞろ彼奴等が大勢うせまいものでもない。あの古社へ行て夜を明かさうか。

太平　左やうなされませ。して、疵口が痛みはしませぬか。

與兵　ナニ、これしきな疵に。

ト手拭にて膝を結び、よろ／＼と立ち上がり
大切なる靈龜の香爐を、多賀のお家へ手渡すまでは
太平　御所持でござりまするか。
與兵　この柳行李の中に
太平　必らず油斷なされまするな。お御足は痛みませうが、ちつとも早く、サヽ、この提灯を、お持ちなされませ。
ト印しのある提灯を與兵衞に渡す。
與兵　そんなら太平次。
太平　直に參りますぞえ。
ト捨て鐘、合ひ方にて、與兵衞、柳行李と菅笠を肩に掛け、右の提灯を持ち、仕込みを突いて向うへ入る。
太平次、跡を見送り、金を數へ、思ひ入れあり
先づ、ざッと彼奴を騙して、お龜が身の代五十兩。道具屋の阿母を縊り殺して、引ッ奪つた五十兩。コレ
ト燕の巣の中より紙包みの五十兩を出し
これで都合百兩。……今のどさくさに、孫三郎めが、向う脛に疵を附けて置いたのも、道具屋で育つた與兵衞とはいふものゝ、瀬左衞門が敵の大學を討たうと思ふ程の奴。あのお龜もまんざら無手ではあるまいし、何しろ、あの孫三郎めを、峠の宮まで誘き出し、あそこで殺せば、明日の朝までには、狼が喰つてしまふ。それでマア後腹が病めぬといふもの。香爐を引ッたくつて、大學さまへ持つて行つて、また金にするワ。イヤ又、斯うまんが直るものか知らぬ。
ト金を一つにして首へ掛ける。此せりふのうちに、二階よりお米、聽き耳立てゝ居る。門口にお道立聞きゐて、さてはト思ひ入れ。お米、驚ろいたる思ひ入れ。
よね　エヽ、そんなら先刻に逢うた旅のお二人、知らぬ事とてわたしが姉さん、お龜さんとは先刻のお方、連れのお方は與兵衞さま。夫がた尋る瀬左衞門さまの、弟御孫三郎さま、お顔も知らぬぼっかりに。殊にあなたが、香爐と慥か云はんとしたが、それこそ慥か靈龜とやらの。
太平　ヤ。それを聞いたか。
よね　こりやもう爰には
ト二階より駈け來り、門口へ出ようとする。太平次、お米を引ッ捕へ
太平　ドッコイ。逃がしてなるものか。與五郎とやらを誘き寄せ、彼奴も高橋が枝葉の奴、押し方付けてその後で、

われを賣つて金にするワ。
よれ　アヽコレ、せめてゆかしい姉さんに
　ト行かうとするを、引ッ捕へ、荒繩にて縛り、手拭を
　口へ挾ませる。此うち抜き足をしてお道、花道へ行く。
みち　先へ廻つて、與兵衛さまを、お助け申さう。さうぢ
や。
　ト捨て鐘になり、向うへ走り入る。太平次、お米を引
立てゝ、丸梯子を上がり、お米を二階の柱へ縛りつけ
太平　二三日食はしたも、賣つてやつて金にするつもり
だ。われを逃がしていゝものか。
　ト云ひ〳〵下りて戸棚より脇差を取出し
孫三郎めを殺して來るうち、その二階にチッとして居
ろ
　ト行かうとして
イヤイヤ、おれが留守に、誰れがうせまいものでもな
い。マア梯子を
　ト丸太梯子を引き、納戸の中へぶち込み、思ひ入れあ
つて
併し、あゝして置いたら、蚊がせゝらるゝであらう。代
物に疵をつけてはならねえ。ドレ、燻しを仕掛けて置か
う。
　ト閑爐裏へ松の枝をさしくべ、粗朶をくべて蚊遣りを
仕掛ける。時の鐘蛙の聲になり、向うより孫七の與五
郎、木綿やつし、脚絆、草鞋、一本差し菅笠を持ち、
風呂敷包みを脊負ひ、スタ〳〵と出て來り
與五　アヽ、向うに見える灯りが、峠の一軒家であらう。
あそこへ行つて聞き合せたら、知れる事もあらうと麓の
噂。一船違つたばつかりに、あのお米を見失ひ、どこへ
行つて居る事やら。惡者の手へなど掛らねばよいが。ア
アコレ、心がゝりな事ではあるぞ。
　ト云ひ〳〵門口へ來る。太平次はいぶしを仕掛け、身
拵らへして門口へ出かゝる。
ハイ、お頼み申しませう〳〵。
　トこの聲を聞き、驚ろき、行燈の火を吹き消し、脇差
を後の方へ差込み、思ひ入れあつて
太平　アイ〳〵。どこからござつた。
與五　イヤ、わしは旅の者でござります。
　ト思ひ入れ。
これはしたり、暗い内でござりますね。
太平　コレ〳〵、爰は旅籠屋ではござらねえ。泊りなら、

外を頼まつしやい。
與五　イエ／＼、あへて泊らうと云ふのでもござらぬが、ちつとわしは、人を尋ねる者でござるて。
太平　エ、人を尋ねるえ。そりやア誰れを尋ねさつしやる。
與五　ハイ、道連れの女にはぐれましたが、もし爰らへ來はしませぬか。心當りがあらば、敎へて下さりませ。
トこの聲を聞き、二階にてお米あせる思ひ入れ。太平次、思ひ入れあつて
太平　エ、女の旅人かえ。そりやアちつと、心當りがごんすの。
與五　知つてござんすか。
太平　隨分、知つて居ります／＼。
トこれにてお米、逢へると心得、嬉しきこなし。
與五　して、その女は、爰の內に來て居りますかえ。
太平　イエ／＼、爰の內には居ませぬ。この近所の狩人の內に來て居りますて。
トこれにてお米また氣を揉む。
與五　ア、、近所に行つて居ますかえ。
太平　左やう、年の頃は廿歳ばかりな女でござらう。慥か道連れは與五郎といふ人だげな。
與五　左さうでござります。卽ちわしが與五郎でござります。
太平　エ。こなさんが與五郎どのかえ。
與五　左やうでござります。
太平　そんなら斯うしませう。わしやア近所に寄合ひがあつて行きますが、幸ひ道だから、その狩人の內へ寄つてその女を連れて來て進ぜうか。
與五　ハイ／＼、それは忝なうござります。なんならわしが參りませう。
太平　どうして／＼。谷川や小坂の三つも越えにやア行かれぬから、どうして知れはしませぬ。わしが連れて來てやりませう。行つて來るうち、留守を頼みますよ。
與五　隨分お留守を致しまするて。
太平　蚊がせゝらば、粗朶をくべて、燻さつしやりませ。直ぐに行つて來ます。
與五　御苦勞でござります。
ト太平次、ツカ／＼と行きかゝりしが、立戻つて
コレ、旅の衆、わしが歸るまで、必らず二階へ上がらつしやるなよ。

與五　畏まりました。
太平　ドレ、一走り。
ト時の鐘、山颪しになり、先の方へも氣遣ひ、後へも心を殘し、思ひ入れあつて、花道へ足早に行く。向うより與五七、八八、三婦六、ウソ〳〵出て來り、行き合ひ
與七　太平次か。
太平　コレ。
ト八八に囁く。二人は思ひ入れして、舞臺へ行き、下手の藪へ入る。
與七　そんなら引出し
太平　コレ、手傳つてもらはう。
ト兩人向うへ走り入る。與五郎、草鞋を脫ぎ
與五　ヤレ、嬉しや。あの男の云ふ通りでは、お米は爰へ連れて來るに違ひない。シタガ、早速に行くへが知れたので、ア、、安堵したわえ。
ト内を見廻し
ハテ、山家といふものは、灯もともさないで、行燈はどこにあるか、勝手は知れず。…エ、、こりやきつい蚤だ。そしてマア、夥しい蚊だぞ。こりや、亭主が歸るまで、圍爐裏へ燻しを仕掛けようか。
ト謠らへの合ひ方、捨て鐘、時鳥、蛙の聲になり、與五郎、圍爐裏へ差寄り、粗朶をいぶしつけ、煙草を吸ひつける。この時燕の巢に小鳥チヤロ〳〵といふ。恟りして
なんだ。チヤ〳〵クチヤいふは。ア、、燕の巢だな。
トこの時足許へ鼠出て駈け步く。また恟りし
ア、、氣味の惡い。蛇ぢやアねえか。
トよく〳〵透かし見て
ハ、ア、鼠だな。イカサマ、鼠の出さうな內だ。シイシイ。
ト煙管にて鼠を追ひ散らす。鼠二階へ逃げあがる。お米、下を見て、いろ〳〵身を踠き、思ひ入れ。
ハテ、もう歸りさうなものだが、大分手間取れるな。アアコレ、どうぞ早くお米に逢うて、安堵したいものだが。おれよりはあの女が、さぞ案じて居るであらう。ハテ、早く逢つて落ちつかせたいものだ。
ト此せりふの度々、お米、思ひ入れにて泣き倒るゝ途端、簪落ちる。鼠それを咬へたまゝにて欄間を走り、よき所より簪を落して、鼠は逃げて行く。與五郎また

悑りして
アレ、又、何か落ちたな。百足か。守宮か。モウ〳〵、蛇は御免だ。
ト燃えさしの薪を持つて、あちこち見廻す。簪を見つけ、拾ひ取つて
ヤ、こりや簪だが、ア、、こりや鼠が引いたと見えるわえ。鼠めが簪を引く位なら、爰の内は男ばかりの住居とも見えぬ。
ト燃えさしにて、簪をよく〳〵見て
ヤ、こりやコレ、この間お米が挿してゐた八つ丁字の紋所。これが爰にあるからは、もしやお米が。
ト思ひ入れあり。
今の亭主があわてた素振り、行きかゝつて立戻り、必らず二階へ上がるなと、氣を附け行つたが、どうも合點が
ト燃えさしを透かし、二階を見て
何やら二階に。
ト思ひ入れあつて、窺ひ〳〵二階へかゝり、上がらうとする。梯子が引いてあるゆゑ、あちこちとして、崩れ壁に踏みかけ、やう〳〵二階へ上がり、お米を探り見て
さてこそ女をむごたらしく
ト猿轡を取る。お米泣く。
コリヤ、お米か〳〵。

よね　よう來て下さんした〳〵。
ト大泣き。與五郎、制して

與五　コリヤ〳〵、聲が高い〳〵。
ト繩を解き、介抱して、二階の戸板を下ろし、これを踏まへる思ひ入れして、戸の棧を踏まへ、二人とも下家へ下り、介抱する。

よね　孫七さん、爰を早う、退いて下さんせ〳〵。
ト泣き聲にて引立てる。

與五　コレ〳〵、お米、どうして其方は
トこの時、後の毀れ壁、バラ〳〵と音して、ヌツと手を出し、八八、半身入らんとする。お米「ワツ」と驚ろく。與五郎刀を引下げ、お米を抱へ、キツと窺ふ。
八八、南無三と心得

八八　ワン〳〵〳〵。
ト犬の眞似して、ツツと身を引く。與五郎、思ひ入れあつて

與五　ハテ、犬にしては

よれ　エ。

與五　嚴しい物音。

ト また鼠出てお米が裾にまとふ。

よれ　あれえ。

ト 悔りして、與五郎に縋る。與五郎、思ひ入れ。

與五　エヽ、べら坊め。鼠だわえ。……コレ、お米、氣をしつかりしろ。

ト 思ひ入れ。時の鐘にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、元の古社になる。爰に與兵衞、最前の提灯を松の枝に掛け、立ちかゝつて居るを、お道留め居る見得、時の鐘にて道具とまる。

みち　アヽモシ、御尤もでござりまする。どうぞ只今申した通り、お立退きなされて下さりませ。

與兵　すりや、太平次は大學方の犬となり、香爐まで奪ひ取らんが爲、この社まで引出だし、我れをうま〳〵騙し込み、爰で殺さん企みよな。

みち　サア、その惡企みある太平次、折惡うお前の御持病その上お足の怪我といひ、大切なる御所持の香爐。目立たぬやうに、ちつとも早う

與兵　イヤ〳〵、爰に止まつて、あの太平次がうせるを待つて

みち　サア、御尤もぢやが、大事のお身、どうぞ爰を

與兵　逃げ走るこそ卑怯未練。殊に、腰には思はぬ疵。歩行叶はぬその時は、もしやミ〳〵と

ト 無念の思ひ入れ。お道、縋つてこなし、捨ぜりふにて東の口より篠原傳五、半纒、股引、大小、旅形の中間一人、消えたる弓張りを灯し、四つ手駕籠を擔ぎ、スタ〳〵と出で來り

傳五　不調法千萬、この山道で灯を消して堪るものか。

中間　イヤモウ、石に爪づきまして。

傳五　これは一向足許が見えぬワ。

ト 云ひ〳〵、舞臺に來り、提灯を見つけ

アレ〳〵、灯があるワ。サア〳〵早く、灯を借りて參れ參れ。

中間　ヘイ〳〵、畏まりました。コレ〳〵、ちよつと灯を貸さつしやい。

みち　ハイ〳〵。

ト 一向取合はず

モシ、どうぞ太平次が

ト與兵衛をなだめるうち、傳五、中間、灯を移す。お道、捨ぜりふにて太平次々々々と云ふ。

傳五　これは忝なうござつた。

ト禮を云ふ。お道、捨ぜりふにて聞きつけぬ思ひ入れ

みち　御尤もでござりまするが、太平次が

ト與兵衛を落さんとする思ひ入れ。傳五、太平次といふ事を聞きつけ、殊に、提灯に倉狩峠立場太の字の印しあるを見て、最前より目をつける事あつて

傳五　コレ〳〵。聞けば、貴樣達は太平次々々々と女中が云やるし、殊に、提灯の印しといひ……コレ、おてまへ達はこの峠にて、立場の太平次といふ者があるを知つてお居やるか。

ト兩人思ひ入れ。

與兵　太平次を尋ぬるお侍ひ樣。して、あなた樣は。

ト急いて聞く。

傳五　身は左枝家の侍ひぢや。

與兵　すりや、大學が……アイヤ、大學さまの御家來でござりますか。

傳五　如何にも左やうぢや。只今聞けばおてまへ達は、太平次々々々とお云やるが、もしや身寄りの

みち　ハイ〳〵、私しは太平次が女房でござりまする。

傳五　アノ、おてまへが……ハテ、よい所で逢ひました。道理こそ、その提灯の印し、倉狩峠立て場の印し、殊に、一軒家と聞きましたが、して、太平次は

與兵　ハイ、太平次はわしでござりまする。

傳五　すりや、太平次夫婦の衆か。これはよい折柄に逢ひ申した。卽ちおてまへ方へ、主人よりの書狀。

ト首に掛けたる狀箱を渡す。與兵衛、受取り、お道は揚げ幕の方へ心遣ひ、封を切らうとする。

イヤ〳〵、御狀は渡したが、誠お手前太平次かな。

與兵　左やうでござります〳〵。

傳五　成る程、提灯の文字と申し、相違ない。とくと見さつしやい。

ト提灯を差出す。與兵衛、狀を開き

與兵　「飛札を以て申し遣はし候ふ、かねて其方事、御主人のお顏に似寄るを幸ひ、高橋血筋の者ども、何れに罷り在るとも、手段を以て尋ね出し、お賴みの通り計らひくれらるべく候ふ、然れども、大學之助さま事、大殿の咎め立てによつて、播州住吉の濱屋敷にござある間、急ぎ住吉邊に參り、折を窺ひ、お目見得いたさるべく候ふ、

急ぎの道筋、旅駕籠一挺、近習の者差添へ、遣はし候ふ
月日、太平次へ、大學之助役人中。」
　ト讀む。お道思ひ入れ。
傳五　すりや太平次を住吉まで迎への爲
　卽ち役目は篠原傳五。サヽ、太平次にはこの旅駕籠
にて、これより彼の地へ同道いたされい。
與兵　すりや、大學さまより太平次を、アノこの太平次を
播州へ
　トお道と顏を見合せ、思ひ入れ。
みち　大學さまの迎へとあらば、もしや御身の……サ、氣
遣ひなれども、急なこの場、天の助けのあの旅駕籠。ど
うぞ爰を
　ト與兵衞もこなしあつて
與兵　左枝の家へ近寄るは、願うても無き好き幸ひ。爰か
ら直ぐに。
　ト行李を抱へ、思ひ入れ。向うバタ〳〵と人音する。
　傳五見て
傳五　この山中にて夜中といひ、烈しき人音。山賊などの
難儀も如何。サヽ、少しも早う。
　ト介抱して與兵衞を駕籠へ乘せ

大事の客人、心を附けて。
みち　そんなら早う。モシ……跡は女房の此わしに。
傳五　サ、太平次どのはお館へ。
與兵　先も氣遣ひ、跡へも心が
　ト向うを見て思ひ入れ。又揚げ幕にて人音する。
近くに人音。慥かに太平次。
みち　アコレ。サア、太平次どの。
與兵　あなたは御苦勞。
傳五　急げ。
　ト垂れを下ろす。捨ぜりふ、捨て鐘になり、提灯持ち
先へ立つて、傳五、駕籠に附き添ひ、東の方へ行く。
向うより與五七駈けて出て、舞臺を窺ふ。後より太平
次、息せきと出て來り、この時、駕籠は東の歩みより
中の間を通り、揚げ幕へ入る。お道思ひ入れして、小
田原提灯を宮の軒に吊し、菅笠を宮の脇へ立てかけ置
き、思ひ入れあつて宮の中へ入る。兩人、花道にて
與七　コレ〳〵。太平次、あの宮の軒に提灯が吊してある
ぞよ。
太平　そりやア慥かにおれの内の提灯であらう。
與七　なんだ、倉狩峠立場山太の字。

太平　先刻與兵衞めに貸したのだ。コレ、人違ひをしめえ
　によ。
與七　合點だ〳〵。
　ト二人ながら窺ひ〳〵、宮の際へ來て、太平次、菅笠
　を見附け、取上げて
太平　西國巡禮同行二人……違ひなし。これだ〳〵。
　ト與五七を引寄せ囁く。呑み込んで、提灯を切つて落
　す。宮の戸を明け、太平次切つて入る。バタ〳〵と物
　音してお道、手を負ひ、太平次に縋り
みち　コレ、太平次どの。
太平　ヤ、わりや女房か。
與七　そんなら内儀か。
みち　エヽ、こなさんは
太平　うぬは與兵衞と間男してうせたな。して、あの野郎
　はどこへこかした。それを吐かせ。
　ト引附ける。
みち　ナニ、間男とは、深切な、わしに惡名つけるのかい
　な。現在主筋の與兵衞さまを殺し、寶の香爐を手に入れ
　んとは情ない。コレ、こなさんの企みの程、聞いたによ
　つてお知らせ申し、爰をお遁がし申したわいな。

太平　すりや、與兵衞めを逃がしたか。エヽ、亭主の罰を
　思ひ知れ。
　ト踏みにじる。お道、苦しみ
太平　罰も報いも知りながら、阿母樣を無理殺し。その時
　からのその小指。こなさん、お主を
　ト云はうとするを酷く踏みつけ
太平　それを知られちやア、女房でも助け置かれぬ。さを
　ながら後も氣遣ひ、荒ごなしは濟んだ。與五七、嗅アり
　殺らして來い。
與七　合點だ。こなたは早く。
太平　エヽ、無駄骨を折らしやアがつた。
　トごん〳〵になり、太平次引返して向うへ入る。
みち　ア、コレどうぞ、與兵衞さまを
　ト立寄る。與五七引きつける。
與七　どうで死ぬなら、一思ひに
　ト拔いてぶつかける。お道、小石を取つて打ちつける。
　與五七、目へ砂の入りし思ひ入れにて、捨ぜりふにて
　あちこちとする。お道よろぼひ上がる。禪のツトメに
　なり、向うより升法印、小提灯を下げ、スタ〳〵と出
　て來り、この體を見て與五七を突き退け、お道を介抱

して
升法　ヤ、こりや、妹か。何奴がこんなに切つたのだ。コレ、氣を慥かに持て。この野郎めが切つたのか。但し外に相手があるか。
みち　法印どの、太平次どのが酷たらしく、ソレ、その男と二人して
升法　そんなら此奴が
與七　ア、コレおらア
ト行かうとする。立廻り、キッとなり、これより禪のツトメになり、兩人摑み合ひのタテあつて、落ちたる刀を取つて、與五七をしたゝかに切る。ウムと倒れるお道うめく。升法印、駈けより
升法　コレ、妹、氣をしつかりと
ト介抱する。お道苦しみ落入る。升法印思ひ入れあり
南無阿彌陀佛。これといふのも
トよろぼひ逃げる與五七を引きつけ
うぬ、太平次め、妹の敵、跡でうぬを。
ト口惜しき思ひ入れ。與五七逃げんとするを引ッ捕へて
うぬも同類。

與七　ヤ。
升法　動きやアがるな。
トきつと引敷く。この見得、よろしく道具廻る。
本舞臺、以前の立て場の茶屋。この道具に戻る。
ト捨て鐘、忍び三重にて、與五郎、お米に草鞋を穿かせ、逃げんとする見得。
與五　すりや、爰の亭主が、お龜どのに連れ添ふ孫三郎さまを殺し、御所持の香爐を大學方へ、遣はさうと云うたのぢやなせ。
よね　アイ、まだその上にお前の事。與五郎といふも高橋の、枝葉と云うて居た程に、早う爰を、立退いて下さんせ。
與五　ちつとも早く孫三郎さまの、お跡を尋ね、敵討のお力とならにやならぬ。サ、此まゝに。
ト捨て鐘にて、與五郎、お米の手を引いて、行かうとする。向うより太平次、スタ〳〵と戻り來り、ズッと内へ入る。兩人恟りする。太平次、窺ひ見て
太平　こりやア留守を賴んだ旅のお人かえ。
與五　ハイ。御亭主、いま戻らしつたか。

トお米を後へ隱す。お米ウヂ〳〵顫へて居る。

太平　さぞ待ちかねてござらうに、よく蚊を燻してござればよいに。

ト暗がりの思ひ入れにて、挨拶する。與五郎、身拵らへして、圍爐裏の際へ行く。お米に落ちついて居ろといふ思ひ入れ。

アコレ、行燈もそこへ出して置いたに。

ト行燈を尋ね廻る。

與五　ナニサ、決して構はつしやりますな。

太平　コレ、旅の衆、今に向うから連れの女を送つて來る筈だ。こなたが尋ねて來た事を聞いての、イヤモウ、大きに嬉しがつての。アヽ、もう今に來ませうよ。

ト此せりふ中、暗がりにて探り寄つて、門口へ栓をさして、刀をソツと拔いて、軒に吊せし草履を探り取つて、寢刃を合せ、與五郎、太平次が空言を云ふと思ひ、ニタ〳〵笑ひ居る。お米、この僞はりを聞いて、ワナワナ顫うて與五郎に取附く。

與五　そりやア大きに、お世話でござりました。

太平　ナニサ、人の世話は人がしないで、誰れがするものだ。……エヽ、きつい蚊だ。ドレ、マア、灯をつけて進ぜよう。

ト與五郎に探り寄つて、胸倉を取つて白刃を差しつける。この時圍爐裏の蚊燻しパツと燃え上がる。時の鐘。與五郎、太平次を振り離す。お米、與五郎に縋り、思ひ入れ。太平次思ひ入れあり

太平　ヤア、その女は

與五　今し方、來ましたよ。

太平　ヤ。

與五　この女は向うから、送られて來ましたよ。

太平　アヽ、そんなら、送られて、その女が

與五　アイ。

太平　そりやア早く來ましたの。……留守を賴んだ旅の人、二階を見るなと此方から、云つたを危ぶみ、こなさんは

ト思ひ入れ。

與五　貴樣の歸るその間、まち〳〵獨りぽつねんと、しても居られず二階から、話し相手に呼んだのサ。

太平　そこでこなさんが。……さぞ退屈でござらうよ。

與五　ナニサ、蚊にせゝられて眠りは出ず、猫より大きな鼠の騷ぎ、家鳴り地震が、めつきり〳〵。壁の崩れへ犬は這ひ込む。

太平　ヤ、
與五　なんだか不氣味な、お住居だ。
太平　それサ、海道端と云ひながら、人里遠き一軒家、
よね　わたしを泊めて孫七さんを、殺さうといふ惡心は
太平　頼まれた。
與五　エ。
太平　高橋由縁の奴等なら、枝葉を枯らしくれろとある、大學さまに頼まれた。
與五　すりや、大學が指圖を受け
よね　身寄りの者を尋ねるとや。
太平　三度飛脚の太平次が、大學さまに頼まれて、いはゞ國主の御名代、與五郎われをぶち殺し、お米は賣つて金にする。怪我せぬやうに此方へ寄れ。
與五　さては當所に出張して、高橋身寄りを尋ねる奴、助け置いては孫三郎さまのお爲にならぬ。よい所へ來合せて、大學一味のおのれ等、爰で逢うたが身の幸ひ、命は貰つた。覺悟をしろ。
太平　何を小癪な、青二才め。お米も側で邪魔すると、不便に思へど側杖に、惜しい物だが太平次が、名代に討つ返り討。頃も幸ひ皐月闇、倉狩峠の土となれ。

よね　エ、憎てらしい、あの一言。
與五　お米は後に構はすと、籠の方へ怪我せぬやうに
よね　どうして見捨てゝ
太平　女めはやらぬ。
ト駈け寄る。與五郎隔てる。立廻りあつて、太平次を引敷く。
與五　サア、動かれるなら、動いて見ろ。
トきつとなる。この時、壁の崩れより、八八、三婦六、竹槍を持ち、窺ひ居て、與五郎をしたゝかに突く。與五郎「ウム」と倒れる。お米、思ひ入れ。
よね　ヤア、孫七どの
ト寄らうとする。太平次、お米を引摺ゑる、これより捨て鐘、忍び三重、時鳥、蛙の聲。與五郎、起き上がり、切り拂ふ。八八、三婦六、竹槍にて與五郎へかゝる。三人立廻り、太平次、お米を引寄せ乘りかゝる。お米、太平次を掻きむしる。此うち、與五郎、二人を切り倒し、太平次が方へ切つて來る。太平次驚ろき、火入を目潰しに打ちつける。與五郎たぢろぐを太平次切り下げる。お米、駈け寄るを、引きつける。與五郎よろぼひながら、切つてかゝるはずみに、お米、ヨロ

文政七年五月市村座上演

三世坂東三津五郎の與五郎

七世市川團十郎の太平次

ヨロとして、與五郎が刀にて誤まつてお米を切る。お米、苦しみ倒れる。太平次、お米が疵を見て

太平　ヤ、大事の玉を疵物にしやアがつた。もうこれぢやア此奴も引け物だ。……オヽ〳〵、どんざ布子を血だらけにした。

トいろ〳〵見て

ア、惜しい物だ。

トお米を切り下げろ。これより二人を存分に切つて、

ト與五郎を切り倒し、乘つかゝり、立ちより、お米を引きつけ、脇腹へ刀を突ッ込む。

騙し込んだる孫三郎めは危ふく助かり、いらざる爰へ尋ねて來て、思ひがけないこの死樣。併し逃げてもあの孫三、後から殺してやる程に、うぬら夫婦は連れ立つて、地獄の道の先觸れに、死出の山から三途の川、手に手を取つて、うしやアがれ。

ト所々にて鷄の聲。明六ッの鐘、日の出、東の方の霞板へ出る。空に烏群がる。太平次見て

ア、東が白んだ。ハテ、夏の夜は

ト刀を拔き、直ぐに與五郎の胸許へ突立てろ。與五郎苦しむ。お米、落入る。太平次、足にとまりし蚊を追うとて、平手に太股をピタリと打つ。これを木の頭。

もう明けるさうだ。

ト木のキザミ、止めの刀。明け六ッの鐘。途端、一度に、

ひやうし幕

大切

安井福屋の場
合法庵室の場
敵討の場

役名――仲居、お縫。肴屋、五郎助。下部、關平。坂本權平。篠原傳五。彦根嘉仲太。鹽山伴六。質屋手代、善助。鳥本丹八。仲居、おりく。同、おくら。關口多九郎。道具屋娘、お鶴。道具屋、與兵衞。彌十郎妻、皐月。修行者、合法 實ハ高橋彌十郎。立場の太平次。左枝大學之助。

本舞臺、三間の間。上の方へ寄せて誂らへの枝折門、福屋と書いたる掛け行燈。一面の建仁寺垣、うしろ、中二階、軒に伊豫簾、團子提灯吊し、建仁寺

垣より舞臺を見越しの楓。その外、庭樹、梢ばかり見
える誂らへの道具、幕の內より舞臺へ床几三脚。爰に
關口多九郎、着流し、大小にて酒飲み居る。善助、質
屋の手代、一軸の風呂敷脊負ひ、おりく、おくら、拳
を打つて居る。踊り地にて幕明く。

りく　ゴウサイ／＼、スムウ、リヤン。

　　トよろしくあつて

オツと、善助さん、お助け。サア／＼、一つ飲ましやん
せ。

善助　今の手一つ取りそこなつた。負けぢやアない／＼。

くら　ぢやというて、リヤンというて、四つ出しなさんし
たぢやないかいな。

善助　イヤ、リヤンでない、ワンだから、四つ足は當り前
だ。

多九　おきやアがれ。コリヤ善助、一つ飲みやれ。……イ
ヤ、飲むといへば、仲居のお縫めが居ぬワ。酒が浮かぬ、
どこへ參つた。

りく　あのお縫さんは、お客を送つて、そこまで行きまし
たが、もう歸るでござんせう。

くら　多九郎さんのきついお案じ、こりやお縫どのに

多九　イヤ、又惚れるも無理ぢやアない。美しい仲居め、
彼奴といふ當も無くつて、每日々々酒飲みに來やうか。
誰れぞ呼びにやれ／＼。

善助　呼びにやれといへば、太平次どのは、今日爰へ來る
約束ぢやアござりませぬか。

多九　オヽ、サ、是非參らねばならぬといふ譯は、身共を斯
樣にお取立て下された、大學さまの御用もあれば

善助　サア、私しもお話し申して置いた、彼の質に取つて
置いた一軸の理窟で

多九　ハテ、その儀は何れ身共が、太平次に逢ひさへすれ
ば解る事だ。

善助　左やうなら、碇を下ろして待ちませうか。

多九　ハテ、お縫めは待たせ居るな。コレ、誰れぞ見て來
てくれぬかいの。

りく　ほんに、きつい惚れやうではある。そんならちよつ
と

　　ト花道を見て

おくらどの、あの提灯は、內のぢやないかいな。

くら　ほんに福屋と書いてある。ありや慥かにお縫どのぢ
やわいな。

多九　ドレ〳〵ほんに、提灯の振り附かせやうまで、粋に見えるて。
りく　イヨ、譽め詞樣。きつい物ぢやわいなア。
ト踊り地になり、向うよりお縫、仲居の形、福屋のぶら提灯を下げて出て來る。後より肴屋五郎助、惡者の親仁にて附いて出で來り、花道にて
五郎　ヤイ〳〵、お縫、わりや挨拶も無く、振り切つて行つて、濟まうと思ふか。
ぬひ　濟まぬというて、わたしぢやとて、どうなるものかいなア。
五郎　そんならわれは、親を親とも思はぬのぢやな。
ぬひ　思うたとて、どうマア仕樣が
五郎　無いと云はうが、どう云はうが、どこまでもへばりついて
ぬひ　わたしに外聞かゝすのかえ。
五郎　オヽ、金見ぬうちは歸りはせぬ。
ぬひ　そんならどうなとさんせ。金の生る木は持たぬわいなア。
ト矢張り踊り地にて、兩人せり合ひながら、舞臺へ來り

りく　お縫どの、先刻にから
多九　首を長くして待つて居た。サア〳〵、爰へ、來やれ來やれ。
ぬひ　多九郎さん、今日もお前がござんすと聞いたゆゑ、早う歸らうと思うたけれど、道でお客の惡洒落、蟲が好かん事ばかり、一つ飲まして下さんせ。
多九　そんな時には、一杯氣をつけると、面白くなるものだ。
善助　オヽ、それ〳〵。七段目ではないが、酒でも無理に參らずば
トついでやる。
ぬひ　ほんに、命も續かぬわいなア。
ト飲む。五郎助ムツとして
五郎　ヤイ〳〵お縫、おれが命も續かぬわい。
多九　コレお縫、あの男は
くら　なんでござんすぞいなア。
ぬひ　サア
五郎　イヤ、わしはあのお縫が親でござりまする。どなたも御免なされまし。
トお縫が側へ來り

ヤイ、お縫、酒を飲まにやア命が續かぬとは、おれに當てつけての事か。
ぬひ　なんのマア
五郎　イヤ〳〵、さうであらう。コリヤヤイ、親の爲なら前尻を賣る女郎にも、孝行な子はあるぞよ。又おれが甘い親なればこそ、御戸帳のやうな前垂れをして、旨い物は食ひ次第、酒は飮み次第の仲居をさせて置くは、有り難い事と、無心の度毎に、二言と云はず、寄越す筈だ。
ぬひ　サア、それぢやによつて、給金も、お客の花も、外へ散らさず、みんな
五郎　云ふな。一分か二分の目腐れ金、それが迭るうちか。親を大事と思ふなら、おれが云ふ三十兩
ぬひ　三十、五十のと、天王寺の塔ぢやあるまいし。
五郎　イヤ、出來る。新町へ三年行つてくりやれ。
ぬひ　エヽ。
五郎　サア、おれも大概な事なら、こんな事は云はねえ。義理のわるい騙り同然な借金、表沙汰になれば首に綱。親を暗い所へやるとも、明るく濟ますとも、われが心次第。得心して女郎になつてくれるか、
ぬひ　ぢやと云うて、どうしてマア。

五郎　否と云はうか、應といはうか、引摺つて行つて金にする。歩びやれ。
　ト引立てにかゝる。
くら　モシ、親仁さん、お前の娘ぢやと云うて親方持ち。
りく　さう自由にはなるまいぞえ。
五郎　イヤ、高が一分か二分の給金、後でついても事に濟む。ナア、お縫。
ぬひ　イエ〳〵、其やうに云はしやんしても
五郎　やかましい。うしやアがれ。
　ト手を取つて引立てる。お縫行くまいと焦る。立廻りの中へ多九郎出て、五郎助を見事に投げる。起き上がる所へ包み金を打ちつける。
多九　ヤア、この金は
　お縫が身の代、三十兩。
ぬひ　多九郎さん、そんならお前が
多九　この場のあらまし、見かねて投げ出すその金も、疾からお縫に多九郎が、思ひ剩つて魚心。
ぬひ　見ず知らずの父さんが、心からするその難儀を
多九　救つてやるその代り、お縫、おぬしを抱いて寐るぞ。

ぬひ　それではどうも
五郎　否だといつちやア、この金が手に入らにやア、われを女郎に賣つてやるぞ。
ぬひ　サア
多九　得心するか。
ぬひ　サア
三人　サア〳〵〳〵
多九　兼ねての思ひも金と相談。お縫が返事は
ぬひ　ようござんす。金を借らねば勤め奉公。どちらも苦界、あの二階で、わたしが返事を、多九郎さん
多九　そんならお縫。
善助　どうやら、斯うやら、金の威光で
多九　ハテ、金ぢやない男振り。
善助　前祝ひにわしも一緒に
多九　飲まさう。善助、來やれ。
ト踊り地になり、多九郎、善助、福屋の內へ入る。皆皆あたりを見廻し
仲居　お縫さん。
五郎　まんまと三十兩。
ぬひ　モシ。

ト合ひ方になり、思ひ入れあつて
お倉さん。おりくさん。わたしが身の上に無ければならぬ金の算段。郎勞するのを見かねて、斯う〳〵せいとお前方の詞を
りく　誰れしも出し憎い金。どうしたらよからうと思ふうち、思ひ附いたあのお侍ひ。お前に心あつて毎日內方へ來るを幸ひ
くら　內へ出入りの肴屋五郎助さん、お前の請け人、殊に深い緣もある樣子。年恰好も丁度好いと
五郎　思ひ附いた親の惡者。金を貸さにやア女郎に賣ると敵役の眞似がうまう行つて
ぬひ　如才のないあの侍ひも、三十兩といふ金。
くら　併し、お縫さんの身の代の、金を枷に
りく　連れて行つて寐ようといはゞ
ぬひ　ハテ、その時は爰を駈落ち。
くら　成る程、それもわたしらが
りく　幕を切つて上げうわいなア。
ぬひ　エヽ、嬉しうござんす。
くら　モシ、また話しもござんせう。わたしらは奧へ行つて

大正十五年十月帝國劇場上演

市川左團次の太平次

りく　座敷の様子

ぬひ　頼んだぞえ。

くら　サア、ござんせ。

　ト踊り地になり、仲居兩人奥へ入る。

五郎　時に、この三十兩では

ぬひ　不足の二十兩は爰にござんす。

　ト懐より袱紗に包みし金を出す。

五郎　この金はどうして

ぬひ　サア、わたしが兄さん孫七さんのお主、多賀の御家中高橋瀨左衛門さま、不慮の御最期。弟御の彌十郎さまはお手討ち、殘るは京へ養子にお出でなさんした孫三郎さまとやら、其お方の力となつて。敵大學どのを

　トあたりを見廻し

サア、其お力となるも先立つは金、拵らへてくれまいかと、お前を以て細々とのお文。兄の一世の忠義を立てさす事ぢやと、お客の祝儀、給金、頭の飾り、身のまはりも、みな人を頼んで

五郎　質入れした金でござるか。

ぬひ　これも、兄さんが大切なばつかり。

五郎　オヽ、出かさしつた／＼。この五十兩を遣つたら孫七どのも、さぞ喜ぶであらう。この間の狀に、女房お米を連れ、この地へ向けて參るとの文體。日を繰れば、もう疾に着する時分。

ぬひ　どうぞ少つとも早う屆けて、安堵させたいものでござんす。

五郎　それも尤も。そんなら斯うせう。内で待ち合はさうより、お迎ひがてら、倉狩峠、近江海道へ向けて

ぬひ　行つて下さんすか。

五郎　その方が早手廻し。

　ト二つの金を合せ、懐へ入れ行かうとする。

ぬひ　アモシ、必らずこの事を

五郎　ハテ、あれも孫七とは鰯を煮た鍋ぢや。

　ト時の鐘、合ひ方にて、五郎助、向うへ入る。お縫あと見送り

ぬひ　マア、あれはあれでよけれど、これからはあの侍ひの返事、一つよければ又二つ。むづかしの世の中ぢやなア。

　ト唄になり、お縫、思ひ入れあつて、門へ入る。直ぐにこの唄の彈き續け、時の鐘にて向うより立場の太平次、頰冠り、一本差し、走り出て來て、花道にて

太平　あの倉狩峠で、孫七夫婦をぶツ放し、跡くらまして
この大坂へ來たが、その人殺しを嚴しい詮議との風聞ゆ
ゑ、晝間歩くも無遠慮と、夜ばかり用を足すとは、どう
でも盜人じみて居るさうだ。福屋まで來いと、多九郎か
らの使ひ。氣の急くせゐか、もう來たさうだ。
トきよろ／＼しながら、舞臺へ來り、思ひ入れあつて、
小石を内へ投げ込む。合ひ方になり、内より多九郎出
て來り
多九　小石の合圖は
太平　わしでごんす。
多九　ムウ、太平次か。呼びにやつたに、ようこそ／＼。
太平　サア、わしも大學さまに頼まれ、さま／＼耳になる
事だらけサ。それゆゑ夜に入つて……して、わしを呼ん
だのわえ。
多九　サア、別儀でもない。かねておぬしもおれも手先へ
廻る大學さま、先達てより住吉の濱屋敷へ押籠め。その
節、お屋敷内へ置いては心遣ひと、預け置かれし菅家の
一軸、身共に受取り參れとの仰せゆゑ。
太平　そんなら、アノ、わしが預かつてゐる一軸を
多九　如何にも、急に御用があるゆゑ

太平　モシ、そりやアどうも合點がいかない。濱屋敷へ置
いては危ないと云つて、預けられた一軸……ハヽア、も
うこの太平次に用は無いと、出入りを止める下心だな。
多九　イヤ、さうではない。これには
太平　イエ／＼、云はつしやれ。何もかも腹一ぱい働らか
せた上、なり惱いお龜まで、かツ淺つて屋敷へ遂り、抱
かせて寐させるも、この太平次が庇おやアないか。
多九　イヤサ、そのお龜も屋敷へ連れ行き、手を替へ、品
を替へ、段々と口說けど、聞入れぬ不得心な女郎め。ど
うでしまひはお手討ちと、點がかゝつて居るワ。
太平　それはてん／＼の不器用だから。尤も、金は今まで
取つたれど、あの人ゆゑに日蔭者同然。なんぞどつさり
規模が無けりやア
多九　返さぬといふは、あの一軸、質に置いたであらう
が。
太平　それ程知つて居ながら、なぜ又寄越せといふのだ。
多九　サア、大學さまも心を改めたと、本家へ詫び事。押
籠めさへ免されたら、又お望みの企みも、樣々と、申し入
れたところが、聞済みあつて、近く赦免の使者が來る筈。
それゆゑ、一軸が入用だ。

太平　それだといつて、質に入つてゐる物を、ちやんころ無しに返せとは、比丘尼に何とやらだ。

多九　イヤ、その金はある。

太平　エヽ。

多九　サア、質入れは五十兩と聞いたゆゑ、即ち大學さまから

太平　アノ、金が來たかえ。

多九　サア、來たが、玆がおぬしに無心。その五十兩のうち、身共三十兩使つたて。

太平　おれの物を使ふとは、こなたも餘ツぽど

　ト むつとする。

多九　ハテ、よく腹を立てる男だ。その三十兩の代りだ。

　ト 懷より墨附を出してやる。太平來見て

太平　「高橋一家へ心を運ぶ下部の孫七、お米もろとも殺害に及び候ふ褒美として、押籠め御免の上は、新地五百石宛て行ふものなり。左枝大學。」……この墨附を、わしに

多九　貰つてやるワ。なんと、三十兩貸してもよからうが。

太平　これぢやア萬更

多九　ソレ、後の二十兩。

　ト 懷の金を渡し

　幸ひ質屋も持つて來て居る。どうぞ、おぬしの働らきで

太平　二十兩ぶツつけて、五十兩の代物を、口說いて見ようか。

多九　ハテ、それもちつとのうち。大學さまさへ赦免あれば

太平　直ぐに侍ひ、五百石。

多九　それもおぬしが

太平　倉狩峠で

　ト 切る眞似する。此うち、お縫二階の障子を明け、何心なく聞いてゐる。

ぬひ　エ。

　ト 聞き耳立てる。

太平　そこに居るのは

　ト 見る。障子ピツシヤリ閉す。

多九　イヤ、仲居どもだ。外に氣遣ふ人はない。

太平　そんなら、これから

多九　福屋の内で

太平　質屋に對談。

多八　太平次。
太平　オツと、その名は、だんまりだよ。
ト踊り地になり、多九郎先に太平次、墨附と金とを懐へ入れ、門の内へ入ろ。
トばた〳〵にて、向うより五郎助走り出て
五郎　コレ〳〵、お縫どの〳〵。大事ぢや。飛んだ事ぢや〳〵やつとござれ〳〵。
ト内よりお縫出て來り
ぬひ　五郎助さん、なんでござんすぞいなア。
五郎　なんぢやどころでない。亂ちき大事ぢや〳〵。
ト騒ぐ。
ぬひ　モシ〳〵。さうばかり云つては解らぬ。マア、譯はどうござんすぞいなア。
五郎　どうといつたら、殺された〳〵。
ぬひ　誰れがいなア。
五郎　サア、兄の孫七は殺されたわいの。
ぬひ　エヽ。
ト恟り、いろ〳〵思ひ入れあつて
そりやマアどこで、何奴が
ト五郎助に取附き、あせる。

五郎　サア、驚ろくは、尤もぢや〳〵。最前こなたに別れ近江海道へ出迎ふと、倉狩峠を村役人、御検視も一緒に、宿次ぎの傳馬。どういふ事かと、様子を聞けば、倉狩峠の一つ家で、旅の女と男が殺され、そのお検視の戻りぢやといふゆゑ、その殺された者は、所はどこ、名は何といふ者ぢやと聞いたれば、イヤ、夜のうちの事ゆゑ知れなんだが、やう〳〵割掛けに附いて居る、駄賃帳で大概解つたゆゑ、代官へ持つて行くといふ。駄賃帳を見たところが、コヽ、これぢや〳〵。
ト血だらけの駄賃帳を出す。お縫、取つて見て
ぬひ　「江州清水村孫七」……こりや覺えある兄さんの手蹟。血に染みて居るといひ、そんならどうでも、兄さんは……女子といふは慥かにお米さん。殺されたかいな殺されたかいな。
五郎　サア、膽の潰れたと云はうか、恟りしたと云はうか、折角拵らへた金も、これでは要らぬ金。持ち返つて、さうして、この事も知らさうと、ちよつとゝ云うて、駄賃帳を借りて來たわいの。
ぬひ　して〳〵、その殺した者の名は、なんと〳〵。
五郎　サア、おれもあんまり仰天して、それを聞かずに來

た。

ぬひ　エヽ、なんでござんすぞいなア。

五郎　マア／＼、何より忘れぬうち、最前の金。

トそこへ置き

その駄賃帳は證據、代官所へ持つて行くといふを、ちよつと〻云うて借りて來た。持つて行かにやならぬ。コレ、お縫どの、孫七が回向ようさつしやれ。おれは駄賃帳を持つて行かにやならぬ。ヤレ／＼、とんだ事だ。

ト時の鐘にて五郎助、駄賃帳を持つてうろたへ、向うへ走り入る。お縫いろ／＼思ひ入れあつて金を取上げ

ぬひ　心を盡して拵らへた金も、兄さんを喜ばさう爲。それにマア、望みも叶はず、夫婦もろとも、人手にかゝつて死なしやんすとは、どうした不運な身の上か。思へば薄い、兄弟の緣でござんしたわいなア。

ト泣き落す。この時奧にて

善助　イヤ／＼、それぢやア渡されない。

太平　ハテ、聞分けのない。おれの云ふ事をマア聞きやれな。

トこれにてお縫、金を懷へ入れ、思ひ入れあつて下の方へ來り、いろ／＼思案して居る。合ひ方になり、奧より太平次、善助出て來り

善助　わしが事より、こなさん、聞分けがない。マア、よく物を積つて見たがよい。そりやハヤ、利足は追ひ／＼入れてはあれど、五十兩の質を、二十兩出してくれろといふやうな

太平　サア、無理だから賴むのぢやアないか。五十兩の物を、五十兩遣りやア恩ひらなし。口說くには及ばないワ。

善助　口說くといふは、三百か一本の錢質の事。纒まつた三十兩。

太平　賴んでも聞かにやア、そこはおれが腕づくでも借りるぞよ。

善助　そんならわしが否といへば

太平　オヽ、高が貸し借り。首の落ちる出入りは無い兇狀。聞いた所が荒稼ぎ。それでも否か。

善助　こなさん達の通りを食つて、質屋の奉公がなるものか。

ト行かうとする。太平次、引ッ捕へ、せり合うて、風呂敷包みを取らうとする。此うち、お縫、最前の事を思ひ出したこなしにて、仲を引分け、善助に以前の金

を打ちつける。
ヤア、この金は
太平　こなたは慥かこの福屋の
ぬひ　アイ、お縫といふ仲居でござんす。
太平　ほんに、二三度來て、顏は
ぬひ　知つて居ながら、知らぬ顏のお客さん。
太平　イヤ、そりやア夜目、遠目とやら、時にマアその金
は
ぬひ　貸して上げよと思うて。
ト善助、此うち金を改め見て
アノ、大枚の五十兩。
太平　貸してもらふは忝ないが、どうやら心の
ぬひ　知れぬ事もなんにもない。二三度來てもお客はお客。
お前はお代官の沙汰になつても
太平　ヤ。
ト悄り。お縫、心を附ける思ひ入れあつて
ぬひ　よいと思へば、貸すまいわいなア。
太平　アヽ、コレサ。百の借り貸しも思案する世の中。ほ
つかりと五十兩
善助　又もや御意の變らぬうち。サア、代物をお渡し申
す。
ト風呂敷の中より一軸の箱を出し、太平次に渡し
わしは方の附いた事を、多九郎さまに、ちよつと届けて
歸りませう。ヤレ〳〵、危ないところを生返つたやう
だ。
ト合ひ方になり、善助、金を持ち、門の内へ入る。
太平　イヤ、どうも合點がゆかない。これが親類や縁者で
もなし、深い馴染も猶ない事。いゝ男なら惚れたとも思
はうが、その氣遣ひはないおれに
ぬひ　アノ、いゝ男にばかり惚れるものかえ。
太平　ヤ。
ぬひ　サア、色戀は心意氣ばかり。
太平　そんならおれに
ぬひ　附合つて見たら
太平　面白さうとお見立てか。
ぬひ　サア、それも素面では
太平　成る程。打解け易いは酒の上。
ぬひ　そんなら一つ
太平　あの二階で
トちよつと寄るを

ぬひ　飮まぬ先から、醉うたかいなア。
ト唄になり、お縫、太平次の手を引き、門の内へ入る
下座より仕出し二人捨ぜりふにて、出て向うへ入る。
門の内より、善助先にお倉、ぶら提灯を持ち、おりく
附いて出て來り
善助　ヤレ〳〵、大きに世話でござつた。
くら　そんなら、もうお歸りかいなア。わたしらも、幸ひ
用もあり
りく　辻まで送つて上げうわいなア。
善助　そいつは剛氣だね。
二人　サア、ござんせ。
ト騷ぎになり、三人向うへ入る。直ぐに二階の障子を
開ける。内に太平次、お縫の膝にもたれ、酒を飮んで
居る。銚子、鉢、杯、肴、取散らし、誂らへの合ひ方。
ぬひ　モシ、太平次さん。今からそんな卑怯な事云はずと、
もう一つ上がれいなア。
太平　イヤ〳〵、頭から茶碗で四五杯やらかしたから、餘
ツぽど廻り燈籠だ。
ぬひ　そんなら、もう否かえ。
太平　サア、ちつと息を拔いてやらうよ。

ぬひ　モシ、わたしや酒飮まぬ者は嫌ひぢや。そんなら、
もうよしなさんせ。
トつんとして茶碗を取上げる。
太平　ア、コレサ、氣の短かい。酒を飮まぬ者が嫌ひと
あれば、飮むは飮むが
ト茶碗を取上げて
今云つた事は、あれはほんかよ。
ぬひ　嘘に女が惚れられるものかいなア。
ト酒をつぐ。
太平　有り難い。
トぐつと飮んで、お縫へ獻さうとする。
ぬひ　見事ぢや。押へやんせう。
太平　また飮めか。
ぬひ　サア、お前と夫婦になつたら、どこへ世帶を持たう
ぞいなア。
ト太平次が持つて居る茶碗へ酒をつぐ。
太平　どこといつたら、マア、大坂なら島の内、江戸なら
二丁町近所よ。
ト飮んで下へ置く。
ぬひ　そんなら芝居の近所ぢやな。

ト下にある茶碗へ酒をツッとつぐ。

太平　てめえは江戸の事は知るまいが、江戸の芝居といつちやア、また違つたものサ。

ト酒を飲む。お縫また後へつぐ。

先づ魚は新場、小田原町が鼻の先、呉服屋は大丸、越後屋、米屋は伊勢町。船宿は堀留。

ト酒を飲む。お縫又つぐ。

淡雪は壺屋、蕎麥は砂場、自由の足りる事といつちやア、八文屋で飯を買つて、人形町の屋臺店で、十二文が茶を買へば、七五三の料理よりは旨い所よ。

ト拍子に乗つて酒を飲み、酔うたる思ひ入れ。

ぬひ　そりやマア面白い所ぢや。併し江戸は遠い所とやら行くのにも肝心の

太平　金はある。おぬしが先刻貸してくれて、方を附けたから、その金が二十兩爰に

ぬひ　なんの二十兩ばかり。つい遣うてしまうたら

太平　金の出來口、いくらもある。

ぬひ　そりやどこになア。

太平　おッつけ五百石。おれは侍ひになるワ。

ぬひ　何を口から出次第に。嘘々。

太平　ナニ、てめえに嘘を云ふものか。

ぬひ　侍ひもをかしいわいなア

太平　コレ、さう貶すなら見せる物がある。必らず人に云ふなよ。

ト以前の墨附を出して、奥の方ばかり見せる。

ぬひ　「赦免の上は新地五百石宛て行ふものなり。」

太平　なんと、キッとした物であらうか。

ぬひ　ほんに……その後を見せなさんせ。

太平　イヤ、この後は、女房になつた上の事〳〵。

ト墨附を懐へ入れ、捨ぜりふ云ひながら、太平次酔つて寝る。

ぬひ　モシ〳〵、寝なさんすかいなア。もう一つ飲まんせいなア〳〵。

ト懐へ手を入れようとする。

ト奥にて

若者　こちか〳〵。

トちり〳〵の合ひ方。お縫、悧りしてあたりを見廻し

ぬひ　なんの事ぢや。御幣廻しが始まつたさうな……モシ、太平次さん〳〵。

ト起しても起きぬゆゑ、ソッと懐へ手を入れ、右の墨

附を引出し、明けて見て
ヤア、こりやコレ、孫七お米もろとも、殺害に及び候ふ
褒美、と書いてあるは、さては
ト太平次、目を覺まし

太平　なんと。

ぬひ　兄さんの敵。

ト太平次が脇差を手早く取つて切りかける。太平次そこにある杯臺、銚子、掛け物の箱、掛け物を打ちつける。この立廻りに、一軸外へ飛んで見越しの楓の枝へ引ツかゝり、垣の外へハラリと下がる。墨附も外へ飛ぶ。始終、ちり〳〵の合ひ方にて、大勢騒ぎ居る。此うちよき程に、向うより彌十郎妻皐月、誂らへの形、一心寺彌勒堂と書いたる小提灯を灯し、ツカ〳〵と出て來り、二階の騒ぎを見上げる拍子に、一軸に目を附け、提灯に透かして見て

皐月　ヤア、こりや覺えある、慥かに

太平　なんと。

ト皐月、落ちたる一通も拾ひ上げ

皐月　高橋一家へ心を運ぶ下部の孫七、お米諸とも殺害に及び候ふ褒美として、押籠め赦免の上は、新地五百石宛て行ふものなり、太平次へ左枝大學。……すりや、倉狩峠にて殺害されたは

ぬひ　わたしが兄さん。

太平　さう云ふうぬは

ト見下ろす。

皐月　お縫がゆかり。

太平　すりや高橋にも

皐月　不思議に尋ねるこの一軸。

ト伸び上がり取らうとする。太平次、中二階より飛び下り支へる。お縫も續いて飛び下り、切りかける。三人よろしく立廻り、これより誂らへの合ひ方になり、太平次、お縫が刀を引ツたくり、一太刀浴せる。皐月隠し持つたる懐劍をお縫へ遣り、太平次を突き廻し、刃物を持ち添へ太平次を切る。立廻りよろしく、トゞ太平次、お縫とゝもに手を負ひ、皐月、太平次を押へ、お縫に扶らせる。太平次、苦しむ。此うち二階へ多九郎出て

多九　ヤア、人殺し〳〵。

ト飛んで下り、かゝらうとするを、皐月ちやつと留めろうち

ぬひ　イヤ、敵討……と云うては、助太刀の又かゝり合ひ……心中ぢや。

ト太平次が上に乘りかゝり、自害する。

皐月　とはいへ、樣子を

多九　女め。うぬ。

ト拔いて皐月に切つてかゝろ。刀餘つて楓の枝を切り落す。これにて皐月、一軸と墨附を取つて

皐月　忝ない。

多九　それを

トかゝらうとする。太平次が置きし二十兩の金を取つて打ちつける。金バラ／＼と散る。多九郎うろたへ、金を拾ふ。皐月、手拭を冠り、二品を持ち、時の鐘、誂らへの合ひ方にて、一散に向うへ走り入る。舞臺よろしく、この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、藁の葛屋、上の方少し前へ張出し、一間の二重舞臺、餓鬼骨の反故貼り障子を建て下の方竹簀の子、うしろ同じく餓鬼骨の反故障子、破れ壁。よき所の閑爐裏に竹自在の土瓶掛けてあり、屋體の外、榎の前に石地藏。下座の方竹藪。爰に高橋彌十郎、合法の拵らへにて、七厘にて土瓶の茶を煎じて居ろ。こなたに六部の笈あり。時鳥しきりに合ひ方、木魚の音にて道具とまる。

合法　あゝ、啼くワ／＼。時鳥も八千八聲啼き盡せば、死ぬるといふ世話の譬へ。我れも丁度その如く、斯かる艱苦も事成る上は、長らへ果てぬ冥府の鳥。……冥府といへば、亡き兄の、今日は命日。ドレマア回向を

ト矢張り合ひ方にて、笈の扉を開き、鉦を打ち鳴らす。

遙靈院劍光信士、出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛。……さぞ御無念にござりませう。現在敵はありながら、押籠められし國法に、討つ事ならず徒らに、月日を送る心の本意なさ。どうぞ宥免あるまでに、寶の詮議と敵の無事、兄の佛果を願ふも僧形。……とはいへ思へば……これはしたり。もう藥が上がつたさうな。

トまた元の所へ來り、土瓶の藥を茶碗へ量りながら

今の人の世話になるおのが身で、あの病人の世話をするも、これも他生の緣づくであらう。

ト茶碗の藥を持つて、障子の側へ來り

コレ、寢てか。二番が上がつた。服まつしやらぬか。

ト障子あける。始終、合ひ方。此うちに、與兵衞、筵

屏風を立て、病ほうけたる形にて、合法が着替への布子を引ッ掛け、革行李にもたれ居て、この時、與兵衞屏風を押し退け

與兵　これは〱、戴きます〱。

ト茶碗を戴き、一口服む。

合法　そして、容體はどうござるな。

與兵　サア、なんでも病に勝たらぞと、思うて見ても矢張り同然。

ト思ひ入れあつて

どういふ過去の因緣にや、深手にて危ふき折から、其許樣の通り合され、その場の難儀をお救ひ下され、この庵室に伴つて、行歩も自由ならぬ身を、この程よりの御介抱、只今死んでもこの御恩

合法　これはしたり。埒もない。死んで堪るものかいの。コレ、そんな氣の弱い事云はずとも、氣をしつかりと持つて、早く本腹。……ソレ、藥がさめようぞや、

トまた藥を服んで

與兵　ア、、なんの因果で此やうな

合法　サア、それも浮世の七轉び

與兵　もう八ツでござりませうか。

合法　目が覺めたなら、月でも眺めて。

ト與兵衞、空を見て

與兵　空は晴れても、氣は曇る。

トまた思ひ入れ。

合法　サア、それも病が苦になるゆゑ。マア、ちつと話して紛れるがよい。

與兵　イカサマ、斯うばかりして居らうより、そこへ出まして

合法　併し、夜風に當つては……よくその布子を引ッ掛けて、風邪でもその上へ引かぬやうに。

與兵　ハイ〱。

ト誂らへの合ひ方、篳篥の笛の音。與兵衞、布子を引ッ掛け、やう〱立ち上がる。合法、手を取り介抱なして、此方へ連れ來り、與兵衞、思ひ入れあつてあたりを眺め

今日は御同行の女中が、お見えなされぬが。

合法　左樣でござる。ちと木津村まで用事がござつて……

ほんにマア、この夜の更けるに

與兵　合法どの。あの篳篥は。

合法　ありや天王寺の勸學院で、稽古の樂器。病人には好

い氣慰み。
與兵　成る程、聽けばどこともなう、心を澄ますあの音色調べにこれと變れども、琴の斷つたる知音の故事。
合法　すりや、あの唐土對安道が
與兵　サア、切なる誠を
合法　爰に比べて、
與兵　合法どの。……その人を知る魂ひ見込みて、お頼み申す仔細がござるが、なんとお聞き屆け下されうや。
合法　ムウ、……魂ひ見込みて頼みたいとは。
　ト思ひ入れ。
與兵　サア、外ならぬ大事なれども、何を隱さう拙者めは……敵討でござるわいの。
合法　エ、。……すりや、望みある身の上とな。……ムウ。
與兵　サ、、頼みと申すは玆の事。この程倉狩峠にて、本望遂ぐる好き手筋と、わざと手の者と僞りおほせ、來る道の深江に於て、手段現はれ、既にその場で云ひ甲斐なく、返り討にもあふべき所、貴殿の助力に危く遁がれ親身も及ばぬ介抱に、本復いたし本望をと、今日まで思ひ暮らせしが、とても痛手の病症に、所詮全快叶はねば、敵も討たれず、やみ／＼と、此まゝ空しく死なんより、せめて先祖へ云ひ譯に、切腹なさん身の覺悟。
合法　ヤ、。
與兵　拙者が妻と定まる女も、敵の邸へ擒はれと、なりしを幸ひ近寄つて、望みを叶へる健氣な心底。何卒彼れが先途を見屆け、敵を討たせて下さらば、修羅の妄執、晴らす便りは外にはない。お頼み申す合法どの。どうぞ一重にこの事を
　ト合法、思ひ入れあつて
合法　ムウ。すりや始めて聞きし一大事。すりや、こなたにも敵討とな。
與兵　サア、息あるうちにこの事を、お頼み申し、死ぬれば本望。敵の實名、我が素性
合法　アイヤ、その名を滅多に明かすまいぞ。
與兵　エ。
合法　サア、危急に迫る頼みなれども、この儀は容赦にあづかりたい。……サ、斯樣に申せば卑怯未練と思はれんが、何をか包まん、我れとても、委細を云へば、同じ身の上。
與兵　ナニ、アノ、其許にも敵討。

合法　如何にも。……姓名知られし敵は大身、遇ひ次第にて明日をも知らぬ、命を抱いて貴殿の頼み、承つても詮ない事。
與兵　ムウ。それゆゑに助太刀は
合法　サア、未練とさみしておくりやるな。
與兵　ヘイ。
ト いろ〳〵思ひ入れあつて
さうぢや。例へ五體は叶はずとも、一心凝つたる我が念願、本望遂げいで置くべきや。
ト向うを見詰め、立たうとしても、足立たぬこなし。二三度あつて、摚と倒れる。合法、引起して
合法　ア、コレ、矢竹に逸るは尤もながら、病苦の身では何として、今の氣丈を張りに持ち、全快なしてその敵を
與兵　サア、本意が遂げたい。命が惜しい。佛神三寶、見離し給ふか。エヽ、口惜しい〳〵。
ト身を揉み苦しむ。
合法　ハテサテ、愚癡な。こりや身を揉むと爲にならぬか。
ト藥を服ませ、いろ〳〵介抱する。此うち、また誂らへ、篳篥入りの調べになり、お龜、物思ひの姿にて出て來り、直ぐに舞臺へ來り、入る。合法見て
ヤ、こりや女房と思ひの外。
ト思ひ入れ。
かめ　アイ。わたしや與兵衞さまに
ト與兵衞、顔を上げ、お龜を見て
ヤア、そちやお龜ぢやないか。
かめ　與兵衞さん。よう無事で居て下さんした。逢ひたかつたわいな〳〵。
ト走りより、縋り附いて泣く。與兵衞、思ひ入れ。
與兵　合點のゆかぬ。擒はれの身は籠の鳥。殊に、女の夜夜中。どうして其方は
かめ　サア
ト思ひ入れ。
合法　ヘエ。すりやこの女中が、いま話しの
かめ　二世とかけたる夫に別れ……いかい苦勞を、致しましたわいなア。
與兵　そんなら望みを叶へた上、首尾よう邸を拔けて來たのか。
かめ　サア、それは
トこの時、向うより村の歩き、駈けて出て來り

歩き　コレ〳〵、合法どの。村役人衆が、何か云ひ聞かす事があるげな。サア〳〵、ちやつと、ござれ〳〵。
合法　ナニ、今頃に庄屋樣で……幸ひ、爰に居るも、どうやら遠慮。
歩き　サア、早う、ござれ〳〵。
合法　モシ、女中。そこに藥も煎じてあれば、氣を附けて進ぜさつしやれ。與兵衞さま、わしはちよつと庄屋どのまで。
歩き　ハテ、早くござれよ。
合法　ヤレ、參りますワ。せわしない。
ト合ひ方になり、合法、歩きと、とつかは向うへ入る。
與兵　コレ、お龜。返答も無く、濟まぬ顏つき。樣子はどうぢや。サ、樣子を。
かめ　モシ、與兵衞さん。
ト與兵衞に取附き、チツと顏を見て
この程倉狩峠にて、擒はれ行きしその日より、あの住吉の濱屋敷、一間に押籠め、憎體な、侍ひどもが夜となう晝となう、入れ替り立ち替りては、大學が心に隨へと、嚇しつすかしつ、さま〴〵と、口說かるゝ身の切なさ、辛さ。

與兵　そりや、別るゝからは、互ひの胸に、よう得心して
かめ　さればいなア。望みを遂げたいばつかりに、この身を任すは合點で行ても、現在の夫を捨て、敵に枕を交すのが、口惜しさ、悲しさ。一つには、お前の病氣も案じられ。風の便りに爰と聞き、思ひ焦れて、やう〳〵と、人目の關を遁がれて來たも、今一度お顏を見たいばつかりに、歸りましたも果敢ない身の上。死んでも未來は女房ぢやと、モシ、與兵衞さん、どうぞ云うて下さりませいなア。
ト取りつき泣く。始終與兵衞苦しみながら、お龜を取つて突き退ける。誂らへ、笛入りの合ひ方。
與兵　ヤア、我れを慕うて歸りしを、貞女と云ひたけれど夫婦の緣もこれ限り。
かめ　エ、。すりや、アノわたしをとうせう。
與兵　夫でもない、女房でない。いづくへなりと、とツと
かめ　モシ、そりやマア何ゆゑ、胴慾な。心に叶はぬ事あれば、堪忍して下さんせ。わたしやこれまで戾つたも、云ふに云はれぬ大抵な
與兵　ヤア、何を云ひ譯。コリヤ、我れは病苦のその上に、

左枝の多勢に痛手を負ひ、今をも知れぬ命なりや、女ながらも敵の屋敷へ、入込みしこそこれ幸ひ、心をゆるさせ、大學が、小鬢の先でも一刀、何ゆゑ恨みの刃は當てぬ。

かめ　サア

與兵　返り討に逢ふとても、それこそ誠の與兵衛が女房。それに、夫婦の愛慾に引かれ、のめ〳〵と、三千年に一度咲く、花盛りを外に見て、立歸つたる卑怯者。兄の位牌へ云ひ譯も、頼みも切れし運の果。それも何ゆゑ、この體の、心に任せぬ病氣ゆゑ。エヽ、口惜しい、無念なわやい。

　ト身を掻きむしりつゝ、あせる。お龜、思ひ入れあつて

かめ　モシ。すりや返り討にあふとても、敵に刃を向けたなら

與兵　オヽ、それこそは誠の女房。

かめ　嬉しうござんす。その一言が聞きたさに、爰まで迷うて戻りました。

與兵　なんと。

かめ　何を隱さう、擒はれ行き、その時より心の覺悟。色に事よせ、騙し寄り、一太刀なりと恨みんと、氣は逸れども情なや、かよわい女の身は一つ、望みも遂げず仕損じて

與兵　ヤヽ。どうしたと。

かめ　憎や敵の

　ト思ひ入れ。

與兵　ヤ。

かめ　刃にかゝつて

　ト泣き落す。與兵衛、思ひ入れ。バタ〳〵になり、向うより皐月、一軸を抱へて、こけつまろびつ走り出で直ぐに舞臺へ來り

皐月　モシ、合法どの、喜ばしやんせ。

　ト内へ入る。お龜、一軸に恐るゝ思ひ入れ。

かめ　戀しい、床しい與兵衛さん。まだ云ひたい事はあれど、アレ眞筆の威徳に畏れ

與兵　なんと。

かめ　我が夫、おさらば。

　トどろ〳〵になり、龕燈にてお龜、消える。パツと掛け煙硝立つ。跡に血に染みし小袖殘る。兩人驚ろき

皐月　ヤヽ、今までありし女中さん。

與兵　姿は見えず、忽ちに、殘るは血汐のこの小袖。さて
はお龜は手にかゝつて。ホイ。
ト思ひ入れ。
皐月　譯は知らねど、今のお方は
與兵　この世を去りし魂魄の、迷うて爰まで來りしか。
皐月　この一軸の神威に畏れ
與兵　其まゝ形の見えざるは、返り討に討たれしゆゑ、この世の別れに來たのであつたか。さうとは知らず、叱つたは、消えよ、歸れと云うたも同然。
皐月　ムウ。そんならお前も敵討。
與兵　サア、その敵の手へ女房お龜、擒はれしを幸ひに、健氣な事を仕損じて、敵の爲に返り討。この世に亡き身と知つたら、よう暇乞ひをしようもの。
皐月　ほんに、この身につまされて、願ひも遂げず、あまつさへ、先立たしやんしたお心根。
與兵　さぞ、本意なからう。口惜しからう。これも前世の約束事。
皐月　果敢ない浮世の
與兵　身の果ちやなア。
ト與兵衞、血潮の小袖を持ち、皐月も共に思ひ入れ。

此うち、向うより以前の歩き、走り出て來り
歩き　コレ〳〵。合法どのは庄屋どのへ留め置いて、さる御大身樣が何やら御用で、この庵へ案內せいと、アレアレ、もうあそこへ、お出でなさるワ〳〵。
皐月　エヽ、ナニ、御大身樣が
ト此うち、與兵衞、苦しみ居るゆゑ、皐月介抱して
マア〳〵、お前はあの內へ
ト上の障子屋體へ入れ、蓮屏風を立て、一軸を押戴き笈の中へ隱す。此うち、時の太鼓、誂らへの合ひ方になり、向うより左枝大學之助、野袴、ぶツ裂き羽織にて、盤山伴六、鳥本丹八、彦根嘉仲太の三人、半纒、股引、大小にて、刀箱を持ち、出て來り、直ぐに舞臺へ來り、ズツと上へ通る。
見ますれば、お歷々樣の見苦しい、合法がこの庵へ
大學　夜中もいとはず、來たには仔細がある。して、其方は修行者めに、ゆかりの女か。
皐月　御意の通り。さうしてマア御用の儀は
嘉仲　外でもない。この程より隱まひある
伴六　與兵衞といふ腰拔けめ。
丹八　御前の用だ。

三人　爰へ出せ。
　ト皐月、思ひ入れあつて
皐月　如何なる事か存じませぬが、庵主居りませねば、その與兵衞……とやら申す人、隱まひありまする事やら、私しは一向に
大學　ヤア、知らぬと云はさうか。病みほうけて爰にうせる事、犬を入れて存じ居る。ソレ、家探し致せ。
三人　ハツ。
　ト踏み込まうとするを、皐月立廻り、三人を投げ退ける。
大學　コリヤ、手向ひか。
皐月　イヤ、全くお手向ひは致しませぬ。庵主留守と申し、殊に與兵衞とやらには、如何なるお咎め、それ承りました上ならでは。
大學　ムウ、科の次第は持たせし首級。……それ見せい。
伴六　ハツ。
　ト片袖に包みしお龜が首を出す。
皐月　ヤア、こりやアノお龜さんとやらの……すりや、アノあなたが
大學　執心かけし女なれども、我れを敵と刃向ひ立て、所詮心に隨はぬ、しぶとい女郎め。それゆゑ返り討に討ち放した。元の根ざしは與兵衞へ心中。その二才めを生け置いては、後日の邪魔ゆゑ、同じ刀で冥土の道連れ。これへ出せ。
皐月　サア、それは
大學　庇ひ立てして、われも刀の相伴するか。
皐月　サア
皆々　サア〱〱。いつその事に
　トまた踏み込まうとする。皐月とめる立廻り。大學之助、一腰へ手をかけ、立ちかゝる。皐月、見得よくとめる。この時、障子の内にて
與兵　ヤア、庇ひ立てして怪我あるな。
大學　さてこそ與兵衞め。爰へ引出せ。
　ト行かうとする皐月を引据ゑて居る。
三人　ハツ。……腰拔けめ。うせう。
　ト其まゝ障子蹴放し、先へかゝる丹八を與兵衞支へながら投げ退ける。この間に左右より與兵衞が手を取つて引立て、大學之助が前へ引据ゑる。皐月、思ひ入れ。與兵衞、大學之助を見て
與兵　恨み重なる仇敵。思へば〱

ト左右の手を振り解き、鞘を力に立ち上がり、抜討ちに大學之助へ切りつける。皆々思ひ入れ。大學之助、其まゝに與兵衞の刀を打ち落し、直ぐ與兵衞を一かせ切る。與兵衞、撞となり、皐月、思ひ入れ。大學之助與兵衞を引附け

大學　五體も叶はぬ身を以て、我れへの手向ひ、慮外な奴の。生け置くゆゑ、敵呼ばはり。その蟲の音も、一刀に

ト突き放し、白刃を振上げる。皐月、側なる嘉仲太を捕へ、突出す。その間に與兵衞、落ちたる白刃を取つて、グツと腹へ突き立てる。

皐月　ア、コレ。叶はぬまでもと思うたに

與兵　イヤ／＼、志しは忝なけれど、所詮存命叶はぬ命。……逃げよとあるとて、五町、七町、探し出され無念の死恥。人に難儀を掛けんより、斯く成り果つる覺悟の生害。せめては今際に一太刀でも、刃向うたがこの世の思ひ出。……とはいへ、目先へ父の仇、妻の敵を置きながら、討つ事ならず、腹切つて、死ぬるも因果なこの病苦。思へば／＼、口惜しい。

ト見詰めてキッと思ひ入れ。大學之助、與兵衞が襟を足下にかけ

大學　なにを／＼。……コリヤ、よく聞け。仔細あつて籠居の身も、今日免許の時を得て、御教書差出し、武將へ謁する都入り。少しもこの身に凶事あらば、その身は重罪、叶はぬ事だ。自滅したのはうぬが仕合せ。跪くな跪くな。……ハテ、好いざまな。

ト蹴飛ばす。皐月、思ひ入れ。

與兵　ムウ。

ト口惜しき思ひ入れ。

大學　ム、ハ、、、、、。二才めがくたばり首、その合法とやら歸りなば、持參いたせと申しつけい。小堀口にて供揃へ。コリヤ。

ト作六に囁く。

嘉仲　お乘り物。

ト向うにて

大勢　ハア。

ト乘り物を舁ぎ、バタ／＼と出て、舁き据ゑる。大學之助、直ぐに乘り移る。この時、作六下手へ小隱れ。皐月、思ひ入れあつて

皐月　して、御大身樣は

嘉仲　江州多賀の御分地。

丹八　左枝大學さまだワ。
皐月　エヽ。……すりや左枝大學さま。
ト立ちかゝらうとするを、近習隔てるうち
大學　乘り物遣れ。
ト戸をシヤンと閉める。
皆々　ハア。
ト時の鐘になり、この人数バタ〳〵と向うへかゝる。皐月呆れ、跡を見送つて居る。此うち向うより合法出て來り花道にて摺れちがひ、舞臺へ來る。この人数揚げ幕へ入る。
皐月　ヤア、遲かつたわいな〳〵。
合法　遲かつたとは。
皐月　いま爰へ敵大學が來居つてから、アレ、あの與兵衞さまに自滅させ、お龜さんとやらも手討ちにして、たつた今歸つたわいなア。
合法　ムウ。すりや今の乘り物が
皐月　現在敵を置きながら、女子の悲しさ。初手からそれと知るならば、仕様もあらうのに、別れの際に大學どのと、聞くと其まゝ乘り物を、近習の數多が警固をして
合法　すりや、濱屋敷の押籠めも
皐月　今日赦免して都入り
合法　して、供揃ひ、發足は
皐月　小堀口にて未明から
合法　エヽ、忝ない。
ト四方を拜して
我が兄高橋瀬左衞門どの、修羅の苦患を晴らさせ申さん。草葉の蔭にて喜ばれよ。
トこれを聞き、與兵衞むつくと起き上がり
與兵　ナニ、高橋とは近江の國、鏡山の高橋どのか。
合法　如何にも同苗彌十郎、寶の行くへ知れるまで、討つ事ならぬ殿のお指圖。
皐月　それゆゑ、夫婦お手討ちと、御披露あつて時節を計る
合法　假の修行者、この合法。
與兵　ヤ、、、。すりや某が血筋の兄。
合法　なんと。
與兵　幼少の時お別れ申し、京都へ養子の身なるゆゑ、互ひに顔は存ぜねど
合法　そんなら弟孫三郎か。
皐月　與兵衞といふ名にそれぞとは

合法　ドレ。

ト走り寄り、キッと顔を眺め

エヽ、知らぬ事とて、神ならぬ身の是非もなや。最前名乘り合うたなら、斯ういふ最期はさせまいもの。

皐月　一つ庵に在りながら、互ひに知らぬ他人向き。

合法　餘儀なき頼みの助太刀も、望みある身を愼んで

與兵　現在兄とも、

合法　弟とも、

皐月　知らぬ目の前、腹切るを、留める事さへならざりし

合法　これも敵の、皆爲す業。

與兵　思へば

皐月　思へば

合法　殘念なり。

ト思ひ入れ。

與兵　敵を討つべき兄者人、殿の手討ちと聞く悲しさ。それより仇を報はんものと、養母にわざと勘當うけ、月日を送る巡禮の、末期の際に兄の無事、名乘り合うたも、佛の惠み。

トよろぼひながら革行李より、袱紗包みの香爐を出し

これぞ紛失致したる、靈龜の香爐、兄者人へ、渡せば我れは、死すとも本望。

ト合法へ渡す

合法　誠にこれぞ靈龜の香爐。……もうこの上は今一いろ。

皐月　サア、その菅家の一軸も、不思議に取り得て、コレ、爰に。

ト笈の内より以前の一軸を出し、合法に見せる。

合法　ムウ。この一軸は、どうして其方の

皐月　樣子は、兄御に勤めたる、あの孫七が妹お縫、この天王寺の福屋に奉公。廻り廻つてその内へ、太平次とやらいふ惡者、この一軸を所持せし上、孫七夫婦を殺した事まで、不思議に知れて爭ひの、所へ思はず行きかゝり、共々お縫に力を添へ、敵を討たせ易々と、この一軸を取戻して

與兵　ナニ、太平次を討ちしとや。例へ我が手をかけずとも、ゆかりの刃にて留めし上は、養母の敵を討ちしも同然。

合法　一時に二品揃ひし上は

ト香爐を皐月へ渡し、笈の中より一腰を出し、腰へぼッ込む。

與兵　本意を遂ぐる
皐月　めでたう吉左右。
　ト合法、お龜が切り首を抱へ、ヂッと見て
合法　我が兄、弟、弟嫁、恨みは一つ左枝大學。まツ此やうに
　ト拔討ちに自在の先を切る。中より槍の穂先出る。
皐月　こりや、御無念の
合法　とゞまる穂先。
　ト手早く自在を取つて槍の柄をすゑる。
皐月　そんなら此まゝ。
合法　オヽ、サ。直ぐに向つて日頃の仇討ち。其方はこの場に止まつて、弟夫婦が亡骸を、目立たぬやうに取納め、二品の寶を本國へ急ぎ持參し、少しも早う、殿の御前へ披露せい。
皐月　して又、お前は。
合法　ハテ、いづれ敵に出合ふ日は、討つても死ぬる、討たいでも、死ぬる覺悟は極めて居る。
皐月　すりや、アノこれが
與兵　兄弟
合法　夫婦

三人　この世の別れ。
　ト三人思ひ入れ。七ツの鐘鳴る。合法キッとなる。
合法　ありやもう七ツ。
　ト行かうとする。與兵衛ヤンと思ひ入れ。
皐月　ア、モシ
　ト合法を留める。合法、與兵衛を見て
合法　南無阿彌陀佛。
　ト思ひ入れ。此うち、伴六出かゝり
伴六　合法。うぬを
　ト拔きかゝるを、合法そのまゝ支へて投げ退ける。また來るところを
皐月　爰構はずと
　ト伴六を隔てる。
合法　女房、さらば。
　トつか〳〵と花道へ行く。この時與兵衛、パッタリ落入る。合法、思ひ入れ。皐月、伴六を取つて押へる。ゴーンと時の鐘。途端よろしく、
　　　ひやうし幕
幕の外、合法自在の槍を構へ、キッとなる。早三重にて、向うへ一散に走り入る。直ぐに時の鐘、禪の

嘉永三年九月河原崎座上演
七世市川海老藏の大學之助　坂東彥三郎の合法

ツトメのツナギにて、この幕引返す。

本舞臺、三間の間、正面誂らへの閻魔堂、石の座像賽錢箱、花立、香爐一式飾り、上の方、合法ヶ辻と書いたる榜示杭、下座の方、藪疊、下の方、樹立茂り、うしろ打拔きの田畑畫き起し遠く見せたる好みの道具、月星の仕掛け物。すべてこの道具誂らへあり、轡の音、三味線入り馬士唄にて幕明く。

ト矢張り、右唄にて、向うより雲助二人、小田原提灯をつけたる菰包みの長持に、左枝大學之助荷物と荷札の附いたるを擔ぎ出て來る。後より別の雲助、會符の附いたる雨掛けの荷を擔ぎ出る。後より馬士、馱荷を附けたる馬を曳いて出る。いづれも長持唄、捨ぜりふにてよろしく下座へ入る。向うバタ〳〵にて、合法、自在の槍をかいこみ、走り出て、舞臺へ來り、向うをキッと見て

合法　あの行列こそ正しく左枝大學、日頃の本望。……南無、日本の諸天善神、別して我が造立の閻魔王。力を合せ、たび給へ。

ト四方を拜するうち、向うより「ハイホウ」の聲する。

これにて合法、閻魔堂の蔭へ身を忍ぶと、直ぐに行列三重、轡の音にて、向うより中間二人、向う梅の紋附いたる高張二挺持つて出る。これに續いて、奴二人、挾み箱、後より團平、伊達道具、後より足輕、弓張、同じく鐵砲三挺、後より誂らへの具足櫃差荷ひ、これに關口多九郎、旅侍ひにて附き添ひ出る。後より向う梅の紋附いたる箱提灯二つ。この後より陸尺四人、旅乘り物を擔ぎ出る。これに坂本權平、篠原傳五、彥根嘉仲太、鳥本丹八、半纏、股引、大小にて、引添ひ侍ひ、附いて來る。後より多勢、合羽籠、いづれも三尺手拭、脚絆、旅の行列にて、直ぐに舞臺へ來る。よき程に、合法、ツカ〳〵と同勢を押分け出て

合法　アイヤ、このお乘り物、暫くお待ち下さりませう。

トこれにて人數とまる。

多九　ヤア、今日左枝大學之助さま、都入りの御同勢

皆々　お乘り物を留めたる慮外者め。

合法　イヤ、全く慮外は仕らぬ。私しこそこの閻魔堂の傍らに、舍りを結ぶ修行者合法。先刻、殿大學さま、埴生への御光來、隱まひ置きし、即ち與兵衞が儀に附き

まして
多九　すりや、其方が修業者合法
合法　如何にも左やう。
權平　その節二才がくたばり首
傳五　持參いたせと女めに、仰せつけられあつたるゆゑ
合法　その儀について密々に
嘉仲　殿へお目見得したいのか。
合法　なか／＼。
ト乘り物へ摺り寄る。
權平　ヤア、云ふ事あらば、取次ぎ願へ。
丹八　殿へ直とは慮外な奴。
多九　ソレ、何れも、引立てさつしやい。
團平　ドレ、その役目を團平が
トつか／＼とかゝるを、見事に投げ退け
合法　ヤア、願ひありとは便らん僞はり。強惡無道の大學
どのゝ非道の刃に相果てし、高橋瀬左衛門が弟、同苗彌
十郎、兄の敵、弟の仇、觀念召されよ。
ト一腰を拔き、乘り物へ突き通し、直ぐに戸を刎ね退
けると乘り物の中には結構なる具足入れある。大學之
助居らぬゆゑ

ヤ、、、。こりや、乘り物には
四人　さてこそ高橋彌十郎だな。
多九　香爐を紛失させた科、手討ちと聞きしが、すりや存
命、例へ長らへうせればとて、根を斷つて葉を返り討。
合法　イヤ、本望遂げいで置くべきや。して、大學は
權平　オヽ、斯くと疾より御承知にて
嘉仲　殿には御身を忍ばせあれば
丹八　及ばぬ事と諦らめて
傳五　われもキリ／＼自滅なせ。
多九　仇討などとは叶はぬ事だ。
合法　エヽ、逃げ隱るゝとは卑怯な大學。例へいづくに忍
ぶとも
權平　ヤア、敵なぞとは慮外な修行者。
多九　この多九郎が奉公始め。申し合せた同勢殘らず。語
らひ置きし馬士、雲助。皆總懸りに、討取り召されい。
皆々　覺悟なせ。
ト皆々拔きつれて切つてかゝる。合法ちよつと立廻つ
て切り結ぶ。これにて同勢叶はず、下座と向うへ逃げ
て入る。合法双方を見て、キッと思ひ入れ。チヨンと
月に雲かゝる。これより誂らへの合ひ方になり、右の

人数、三人組、三人組、或は一人づつ合法にかゝる。これより種々面白きタテ。見事に切り倒し、荷物を殘らず突いて見ろ。トゞ自分も勞れたる思ひ入れ。最早突く物無きゆゑ、刀の血にて咽喉をしめし

合法　チエヽ、口惜しや。今まで刃向ふ其うちに、大學らしき者もなきは、はや逃げ失せたか、殘念な。千辛萬苦も水の泡。所詮この世に長らふべき命ならねど、本望を遂げず、腹切る無念。悔いても返らぬ我が不運。冥土の兄や弟に、いで追ひ附かん。南無阿彌陀佛。

ト槍の穂先を腹へ突ッ込み、こなし。この時ゴーンと時の鐘にて、上の藪疊を押分け、大學之助、この體を見て、思ひ入れあつて、スッと側へ來り

大學　高橋彌十郎。仇敵を討ち洩らし、殘念なるか。

合法　さういふ聲は

ト、チョンと月出る。合法、大學之助を見て

敵大學。

大學　斯ういふ事と知つたゆゑ、畔道傳ひに藪蔭へ、忍ぶと知らず、自殺なし、さぞかし殘念。察しやる。……ドレ、この世の暇を、取らしてくれう。

ト側へ立ちかゝるを、突き廻し

合法　イヤ、兄の敵、弟が仇。先づ、こなたこそ、冥土の魁け。

ト白刃をキッとさしつける。大學之助驚ろき

大學　ヤ、、。すりや腹切つたと思ひの外

合法　オヽ、其方も計れば、此方も手段。サア、尋常に覺悟召されい。

大學　小癪な奴の。

トこれより双盤入り、賑やかな鳴り物になり、兩人烈しき立廻りよろしくあつて、トゞ合法、槍の穂先にて大學之助を仕留める。

合法　國家の怨敵、兄弟の仇、その身に思ひ知らしつたか。

ト存分扶る。

大學　エヽ、口惜しい。

トよろしく立廻り、ドッコイととまる。頭取出て「先づ今日はこれぎり」めでたく

打出し幕

繪本合法衢（終り）

天罰起證文の事

其方殿と兄弟の契約致し候ふところ實正觀世音の引合せ他生の縁に野宿の一睡草の臥所の隣り同士に敵も討ち手も竹の内の達人割符を合す發句の手鑑これ卽ち後日の爲め仍て誓紙件の如し

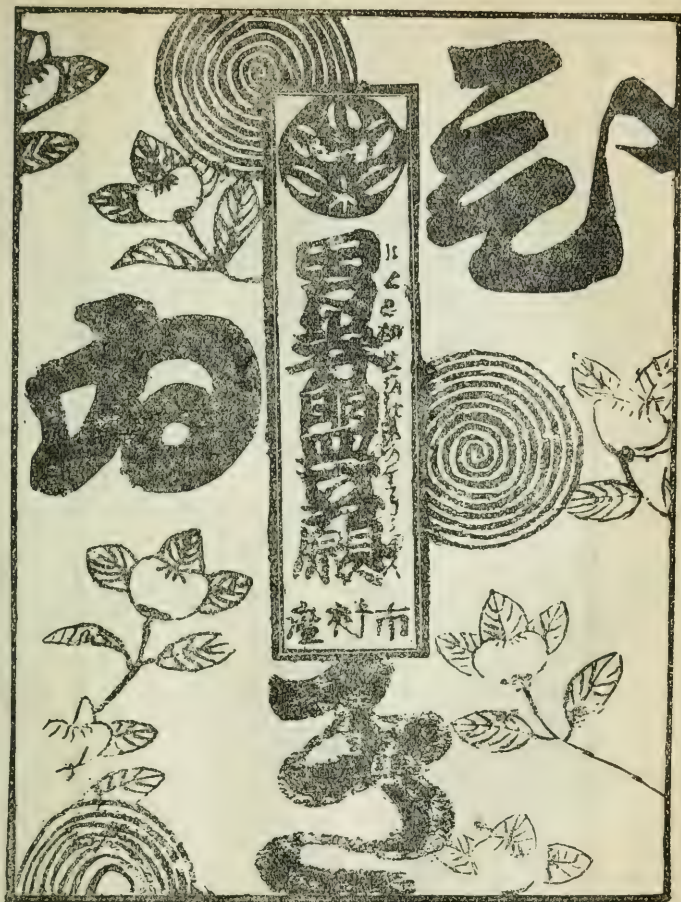
既に其日は十八日

大高主殿

印南志津摩どのへ

男券盟立願

全部七冊

初演の繪番附表紙

男券盟立願

發端　　羽州牧の林の場

役名　横山外記。百姓、當作。草刈り、四五太。
印南十内。若黨、白坂文治。十内女房おたみ。

本舞臺、正面、淺黄幕、本松にて、一面の小松の林。すべて羽州、牧の林の體。爰に横山外記、旅虚無僧の拵らへよろしく、拔き身を投げ出しながら、兩手をさげてうづくまり居る。印南十内、六部の拵らへよろしく、錫杖の仕込みを振り上げて居る。この見得、時の鐘にて幕明く。

外記　待つた、早まるまいぞ。眞劍は投げ出して居るぞ。
十内　ヤア、卑怯千萬。立ち上がつて勝負〳〵。
外記　斯く眞劍を投げ出すからは、手向ひは仕らぬ。早まるまいぞ〳〵。勝負は見えてござる。
十内　ヤ、なんと。
外記　竹の内極意の眞劍、受けたも同然でござる。

ト十内、思ひ入れ。外記、身を縮めて

あやまつて居る〳〵。

ト兩手を合せ、拜む。十内、こなしあつて、刀を拭ひシヤンと納める。合ひ方になり、外記、唾を呑み、落ちつきたるこなしにて、十内を見て、呆れしこなしにて、横手を打つ。

ハ、ア、天晴れ窮鳥、懐に入る時は、獵師もこれを取らず、眼前、白刃の下に、某が一命を助け下さるゝ仁心、誠に武士は斯うありたきものだ……けうといものだ。凡そ西國廣しといへども、竹の内一流に達し、諸流へ渡り試せども、誰れあつて某に對し、竹刀の切つ尖も向けるもの一人もない。然るに、いま貴殿の立合ひ、童を弄るも同然と思ひの外、初太刀より、附け入るべきゆるみを見せぬ刀の鋭さ、比べるに人なし、譬ふるに物なし。龍車に向ふ蟷螂が、なんとして及ばぬ〳〵。今より某が先生と仰ぐは、日本に貴殿一人。何卒、御指南下さらば生前の本望、偏へに願ひ存じまする。

ト三拜する。十内、こなしあつて

十内　貴殿の詞承はれば、流義も同じ竹の內。併し、藝道の甲乙は、一心のなすところ。まつた一つには、我が所持する印可の力と申すものサ。
外記　すりや、貴殿には、竹の內極意の印可、所持召さるるとな。
十内　如何にも。
外記　して、貴殿の御姓名は。
十内　拙者、元來、奥州松島家に仕官仕りし、印南十內と申す者。故あつて浪人仕り、斯く武者修行に出ましてござる。
外記　誠に、御高名承はり及びし印南氏。竹の內の極意を開き、東西に對す者なき事は、兼ねて承はる。某とても、斯く武者修業を仕るも、武術を云ひ立て、よき主取りも仕らんが爲。殊さら貴殿は、奥儀を極めし一流の達人、なぜ有附きはなされぬな。
十内　我が藝道を賣ぜらるゝは、その身の譽れ。二君を辭して仕へぬは、末代まで、名の譽れサ。
ト外記、感心のこなしにて
外記　ハテ、仁義正しき十內どの。イヤ／＼、恐れ入りましてござる。して、貴殿には、いづれの國へお越しなさるな。
十内　拙者、これより江戸表へ志し罷りありまする。して、其許には。
外記　拙者は、奥州南部へと志し罷りありまする。
十内　誠に雲水の身の上、御縁もござらば、重ねて面談仕る事もござらう。他生の緣の今日の立合ひ、必らず遺恨に思はれぬがよいてや。
外記　これは／＼、十內どのゝお詞とも存ぜぬ、勝負に打負けしは、我が藝の未熟なるゆゑの事。それに何ぞや、遺恨に存ずる手前でもござらぬ。何とやら、面恥しき今の御一言。斯う致さう、遺恨いたすまじき神文の仕り御疑念の晴らしませう。
十内　なんの／＼、それには及ばぬ事サ。
外記　イヤ／＼、何とやら、心濟みが仕らねば、是非に神文を仕らう。
十内　然らば如何やうとも。左樣にござらば、手前も御姓名を存ずる爲、神文の仕り、お互ひに取交しまするでござらう。して、其許の御姓名はな。
外記　拙者、元來、九州の浪人。横山外記と申す者。
十内　ムウ、横山外記どの。イヤ、御姓名承知仕つてご

ざる。

ト双方、矢立を出し、神文を書き

外記　遺恨いたさぬ誓ひの神文。

十内　以後、入魂に仕るこの神文。

ト両人、取交し

外記　斯様に致せば、心もさつぱり。

十内　御縁もござらば

外記　重ねて面談。

十内　マア、それまでは

外記　十内どの。

十内　横山どの。

両人　お別れ申しませう。

ト唄になり、外記、こなしあつて、向うへ靜々と入る。暮れ六ツの鐘鳴る。十内、見送り、思ひ入れあつて

十内　人相骨柄、只者ならぬ横山外記。試合に打負け、我れにおもねり、立歸りしは、ムウ……ア、まゝよ。ドリヤ、行て宿を求めうか。

ト合ひ方になり、靜々と下座へ入る。ト上の方より當作、百姓の形にて、四五太、柴刈りの形、下の方より順禮二人出で、双方、本舞臺へ來て

當作　なんと皆の衆、いま、六部と虚無僧の立合を、見て居さつしやりましたか。

順一　見た段ではない。なんと、六部は強い奴でござつたの。

四五　イヤモ、何が両方から、ピカ／＼するやつを抜いて打ち合ひました時は、脇の下から、冷たい汗がダラ／＼と出ましたて。

當作　おりや又、六部が刀を振り上げる、虚無僧がばつたりへたばつた時、南無三方、グッシャリといはされたさうなと思うてな、思はず知らず、お念佛を申しました。

順二　ところが、虚無僧を殺しもせず、其まゝに歸したはありやマア、どういふ事であらうな。

四五　遠目に見て居た事ぢやに依つて、何か云ふ事は聞えなんだが、虚無僧めがあやまつたと見えましたわい。

當作　ハア、、それで聞えた。後で書いた居たが、あやまり證文ぢやわえ。

順一　イヤ、どう思うても、六部は強い筈であるて。

皆々　そりや又、どうして。

四五　ハテ、後に佛が扣へてござるわいの。

當作　ハ、ア、そりや、理窟ぢやわえ。

皆々　サア、ござれ〳〵。

ト捨ぜりふにて、兩方へ別れて入る。チョン〳〵にて
この道具、引返す。

本舞臺、小松、左右へ引いて取り、淺黃幕を切つて
落すと、奥深き樹木茂り、上の方、黑木の鳥居、一
面に松の吊り枝、蔦の照り葉まとひあり。すべて羽
州阿古明神の森のかゝり、月の出入り、よき所の樹
木に、紙帳を吊り、印南十内、野宿せし體、山颪し
時の鐘、虫の聲、方々にてする。向うより横山外記
ツカ〳〵と走り出て、方々を窺ひ、ソロ〳〵紙帳の
側へ寄り、手早に刀をグッと突ッ込むと、バタ〳〵
にて、十内、急所の所を突かれし體にて、同じ拔き
身にてよろぼひ出て、苦しみながら

十内　ヤア、何者なれば、卑怯の闇討ち。さては、おのれ、
盜賊ぢやな。

外記　ヤア、盜賊とは奇ッ怪千萬、今日出合ひし横山外記
だワ。

十内　ムウ、さては、うぬ、立合に打負けしを、無念に思
ひ、闇討ちに致すな。

外記　イヤ、劍術の遺恨ばかりでない。最前、うぬが口
走つた竹の内極意の印可、我が手に入れば立身の柱にす
る。細言ぬかさずと、くたばれ〳〵。くたばつてしま
へ。

ト切りつける。十内、よろめきながら、兩人、少しば
かりタテありて、十内、樹木の蔭へ倒れる。外記、吹
替への死骸を引き出し、止めを刺し、懐中より印可の
一卷を探り取り、忝ないと押戴き、ツカ〳〵と行か
うとして思ひ入れあつて、立戻り、死骸と我が衣服を
手早く着かへ、面の皮を剝ぎ、月影にていろ〳〵見、
これでよいといふこなしにて、最前の神文を引出し、
我が方へ取りたる神文を死骸の懐へ入れて、笈を脊
負ひ

外記　斯く姿を取替へ、面の皮をあばいたれば、誰れあつ
て、彼れめを十内と見る者、よもあるまい。

ト一卷を出し

身共は又、この一卷を持つて

トこなしあつて、花道へかゝると、向うより、人音す
るゆゑ、立戻り、東の揚げ幕へ、足早に入る。合ひ方
時の鐘にて、若黨白坂文治、旅奴の形、割りがけに行

初演の繪番附

李をさして、小提灯を下げ出て來り、後より、印南十内の女房おたみ、着流し、浴衣を上に着て、菅笠、杖にて出て來り、花道にて

文治　奥樣、あの森が、彼の阿古明神と申すのでござりますか。宿場へ出ますのは、まだ半道餘りもござりまする。ちとこれにて、お休みなされませ。

たみ　成る程、さうしませうわいなう。今さら改めて云ふではなけれども、夫の行くへを尋ねん爲、行く先定めぬ長の旅路。力に思ふは其方一人。忠義一途に、大切にしてたもるに依つて、心の急くまゝ、今日の夜道。其方はさぞ草臥れやつたであらうの。

文治　これは〳〵、奥樣の結構なる、お詞にあづかりましてござりまする。印南のお家には、譜代の下郎、させる忠義もござらねど、十四年以來、若旦那志津摩さま、御誕生遊ばさるゝと程なく、親旦那十内さまには御出國。兼ねて諸國武者修業のお志し。斯く年月を重ね、御歸國なきゆゑ、志津摩さまを一先づ、江戸表へお供いたせしところ、細川さまの御目にとまり、召し出されてお小姓のお勤め。喜びあれば愁ひと、お前樣には、親旦那の事を思し召され、お行くへを尋ねんとの事。何を申すも雲を當て。併しながら、足手かいさま尋ねましたら、お目にかゝらぬと申す事はござりますまい。必らずお案じ遊ばされぬがようござりまする」

たみ　成る程、其方の云やる通り、早う十内どのに尋ね逢うたなら、志津摩が成長お話し申し、お喜びのお顏を見ようと、それ樂しみの長の旅路。この身はさら〳〵苦にならねど、男の身として、女子の介抱、一人、其方の心遣ひ、嬉しうござるぞや。

文治　御勿體ない、何お禮に及びませう。斯樣にお供仕りますも、矢張り御主人樣への御奉公でござりまする。

ト舞臺を見て

幸ひ、あれに拜殿が見えまする。先づあれへ參つて、暫らく御休息遊ばされませう。イザ、御案内仕りませう。

ト先へ立ち、上の方へ行きかゝり、死骸を見附け、提灯をさしかざし

奥樣、お待ちなさりませ。何者か、これに寐て居りまする。

トよく〳〵見て

こりや、コレ、手を負うて居りまする。

トおたみも、行きかゝり、文治、いろ〳〵改め見て
最早、絆切れしと見え、手足も冷え切つてござります
る。衣服なぞも、其まゝあれば、よも盜賊の業とも見え
ず、正しく意趣切りと見えまする。
たみ　いづくの人かは知らねども、この所へ來合せしも、
他生の緣。もしや他國の人ならば、其ゆかりの人へ知ら
せて進ぜたいものぢやなう。
文治　ナニサマ、左樣でござりまする。なんぞコレ、懷中
いたせしものもありさうなものぢやが。
ト死骸の懷中を探り、右の神文を取出して
何か書いたものがござりまする。
ト提灯にて透かし
サニ〳〵「今日計らずも、劍術の立合に知る人と罷りな
る上は、重ねての面會、入魂に交はり申すべく候ふ、横
山外記どのへ、印南十內。」
ト思ひ入れ。
こりやコレ慥かに、御主人十內さまの御自筆。
ト出す。おたみ、驚ろきながら取上げ
たみ　ほんに、こりや、夫十內どのゝ手蹟。これを所持す
るこの死骸。すりや、立合ひし相手は、夫十內どの、意
趣切りとあるからは。
文治　討つて立退きしは、御主人十內さまであつたか。
たみ　コレ。
ト思ひ入れにて押へ、あたりを窺ひ、顏見合せる。お
たみ、文治が持ちたる提灯を打ち落す。これをキツカ
ケによろしく、拍子、幕。

二幕目　淺草寺境內の場

役名――橫山大藏。白坂甚平。中間、愁助。泰村
隼太。若い者、淸八。質金源次兵衞。奴、亦介。
細川勝次郎。熊本勘解由。傾城、夏菊。百姓、治
作。同、女房おさへ。同妹、おみつ。庄屋、與茂
九郎。田上丈八。江戸屋茂平。道具屋萬七。水茶
屋おたつ。禿、みどり。印南志津摩。大高主殿。
本舞臺、三間、淺草雷神門のかゝり、上の方、開帳
札、納め手拭、石の手水鉢、その脇に水茶屋。長床
几二脚。若い者四五人、參詣の仕出しにて腰を掛け
てゐる。おたつ、茶屋女にて、茶を運びてゐる。辻

打ちに双盤、揚弓の音にて、幕明く。
ト左右より、いろ〳〵の仕出し、參詣の形にて行き違ひ入る。舞臺の若い者、捨ぜりふにて門の内へ入る。向うより、傾城夏菊、他所行きの形、禿みどり、遣り手附き、三浦屋若い者清八、羽織、風呂敷に大師様の護摩札を包み、これを提げ、後より萬七、羽織、やつし、道具屋の拵らへ、白鞘を風呂敷に包み、これを持ち、後より、庄屋與茂九郎、脚絆、草鞋、田舍者の拵らへ。江戸屋茂平、半合羽、裏襟の小袖、一本差し、京草履にて出て來り、この人數、本舞臺、長床几に腰を掛ける。おたつ、捨ぜりふにて茶を運ぶ。

たつ　これは、どなた樣も、よう御參詣なされましたな。サア、お茶を上げませうわいの。

萬七　おたつぼう、この頃は逢はぬの。

たつ　こりや、道具屋の萬七さん、よう御參詣なさんしたの。

清八　ほんに萬七さん、買ひ出しかえ。

萬七　こりやア、三浦屋の清八。イヤ、花魁もお出でだな。斯う見たところが、向島といふところを、一番ひねつて、上野だね〳〵。

夏菊　萬七さん、この間は、逢ひんせん。わたしや、今日大師さまへ、參りんしたわいなア。

遣手　ほんに萬七さん、見ると其まゝ上野へ行つたかとは、ほんによう當てさんしたわいなア。

清八　ハテ、當らないでどうするものか。おれが護摩のお札を持つて居るもの、古鐵買ひに見せても、大師參りサ。

みど　申し萬七さん、約束の裸人形と、役者畫を買うて下さんせいなア。

萬七　おきやアがれ。裸人形の役者畫のと、おれをば長右衞門と思ふさうだ。

茂平　コレ、與茂九どの、あれは、吉原の花魁といふものだ。見さつしやい、おらが宿の飯盛とは、きつい違ひであらうがの。

與茂　成る程なア、げいに美しいお女郎さまだア。江戸さアへ、出申した次手に、吉原拜見の致して置き申さうワ。

清八　ア、、お前方は、近在の衆だね。

與茂　ハイ、わしは、中仙道の浦和の在の、庄屋與茂九郎といふて、名高い者でござる。ちつと尋ね申すものがご

ざつて、馬喰町の苅豆屋とやらへ逗留して、毎日々々尋
ね歩き申して。
萬七　イカサマ、椋鳥風だわえ。
茂平　わしも、この人に掛り合ひの者でごんす、鴻の巣の
茂平といつて、宿ぢやア小口もきく子供屋でごんすが、
二三年後に、わしが抱への女を、土百姓の居候ふに、揚
げ玉にされまして、その殘金の濟まないうち、先の家內
中が駈落ちをしましての。
與茂　わしは、その駈落ち者の庄屋でござんすから、大き
に難儀をし申すわいの。夫婦に十六七の娘がござるが、
もし、爰らあたりへ、そんなものが店借りにでも來まし
たら、どうぞ知らせて下さりませ。
清八　そりやア空な尋ね物だわえ。
萬七　時に夏菊さん、觀音さまへ參りなさるなら、お連れ
になりませう。
夏菊　そりや嬉しうござんす。わたしや、あの若殿さんが、
今日參詣さんすと聞いたに依つて、逢うて行かにやなら
ぬわいなア。
萬七　エヽ、若殿樣とは、細川家の若殿勝次郎さまだね。
わしや、あの家中の、田上丈八さまといふ人に用があつ
て、馬道の稲屋まで參れとの事ゆゑ、出掛けやしたが、
コレ、おたつ坊、稲屋の內に、侍ひ衆は見えなんだか。
たつ　イヽエ、まだ、お出でゞはござんせぬわいなア。
茂兵　ほんに庄屋さん、稲屋の內で、鰹の刺身で、一杯や
らかさう。こなたも、飯時分でござらうの。
與平　イヤモウ、わしやア餘ッぽど、腹が來ました。早く
飯に逢ひたうごんす。
夏菊　そんなら、わたしらも稲屋へ行て、勝次郎さんのご
ざんすを、待たうわいの。
清八　そんなら、花魁。
夏菊　サア、ござんせいなア。
ト辻打ちになり、夏菊先に、皆々門の內へ入る。おた
つ、殘る。矢張りこの鳴り物にて、向うより、細川勝
次郎、羽織、着流し、大小にて、眞金源次兵衛、大小
袴ばかりの形、秦村隼太、裃、羽織、袴、大小にて
股立ち、若黨の拵らへ、侍ひ二人、千兩箱を差擔ひ出
て、直ぐに本舞臺へ來り、床几にかける。
源次　コリヤ／＼、茶屋の女子。只今この所へ、御大家の
殿と見え、忍びのお乘り物にて、御參詣ありしを、見う
けは致さぬか。

たつ　イエ〳〵、まだお見かけ申しませぬわいなア。

源次　お聞きあられましたか。未だ、お駕籠は見えませぬやうにござりまする。

勝次　オヽ、さうであらう。身は道を變へて、遠乘りと見せて、急いで爰へ參つたゆゑ、どうでも早かつたであらう。駕籠の來るまで、茶屋の座敷で待ち合さうわえ。

隼太　左樣がよろしうござりませう。卽ち、當寺へ御寄附の一千兩の金子も、この隼太めが附きまして、御前の御用相濟みまするまで、馬道の稻屋方へ參り、扣へまするでござりませう。

源次　御前にも、稻屋方へお入りなさるゝが、よろしうござりませう。

勝次　オヽ、さうせう〳〵。コリヤ、源次兵衞、必らず身共を、それと目立たぬやうに致せ。

源次　畏まりました。そこに如才はござりませぬ。お供廻りは、大川橋へお供待ち、申し附け置きましたれば、例へ、姫君にお逢ひなされても、細川家も若殿樣とは、お見えなされませぬ〳〵。

勝次　それは感心々々。身共をそれと見られぬやうに。

隼太　御前には稻屋方へ、女、案內してくりやれ。

たつ　畏まりました。サア、お出でなされませ。

ト辻打ちになり、勝次郎先に、皆々、おたつ、案內して、門の內へ入る。ト矢張り、この鳴り物にて、向うより、熊本勘解由、深編笠、大小、羽織衣裳。田上丈八、麻上下、大小、挾み箱、草履取り、侍ひ一人附き出て來る。直ぐに舞臺へ來て

丈八　イヤナニ、勘解由さま、只今、大川橋にて見受けましたは、若殿のお供廻り。さすれば、勝次郎さまには、最早參詣なされたと見えまする。

勘解　イカサマ、佐々木家より內意の使者まゐりしと、勝次郎めに申し聞かせ、釣り出したも、兼ねて傾城に現を拔かす勝次郎、姫と緣組み嫌ふを幸ひ、似せ者の姫を拵らへ、この所にて見合ひさせなば、ふつりなる姫なれば、變替へんと吐かすは必定。さすれば足利の上意を背く科にて、阿房拂ひが表向き。重くて切腹、政元を押籠め、差詰め細川家はこの勘解由が預かり。まつた、爰に傳はる吳道子が墨繪の雲龍、盜み取らせ、橫山大藏に預け置きしが、其方も、共々大切に致し、目立たぬやうに、合點か。

丈八　お氣遣ひなされますな。日頃から拔け目なき橫山大

藏、その儀にぬかりはござりますまい。殊更、禁廷よりの仰せ、それゆゑにこそ、一家中嚴しく詮議。嗅ぎ出されては一大事と、心を痛め罷りまして、

勘解　大事は小事より起ると申せば、萬事に心を付けるが肝要。して、當時造營の爲、細川家より寄附なす一千兩の金子の儀は。

丈八　その儀は、拙者が胸にござりますれば、お氣遣ひなされますな。それは兎もあれ、姫君と僞はる女めがござりまするか。

勘解　その女も、大藏が働らきで、今朝、身が屋敷へ召連れ參りしが、人目立つゆゑ、後より連れて參れと申し付け置いた。大方、今に大藏が見えるであらう。

丈八　して、その女は、何方の者でござります。

勘解　サア、住家は何れと定かならねど、この程、湯島の境内にて、妹を連れし田舍女房、金の才覺に、妹を、廓へ賣り渡さんと、相談を聞きたるゆゑ、旅宿を尋ね、委細を頼み置いたれば、小機轉の利いた女め、よもや、この役仕負ふせるは必定。ハテ、たかゞ不束な姫と見せる狂言。物ごし恰好の揃はぬのが勿怪の重寶。

丈八　それで拙者も、安堵いたしてござりまする。私しめは後に殘り、待ち合す者もござれば、勘解由さまにはお先へ。

勘解　然らば身共は、稻屋方にて待ち合さん。ナニ、丈八。

丈八　勘解由さま。

勘解　待つて居るぞよ。

ト辻打ちになり、勘解由、家來附いて門内へ入る。

丈八　これでマア、一方はいゝと云ふものだ。それはさうと、今日これで出合ふと、申し遣はした道具屋萬七、もう見えさうなものだが、彼れが參るまで、ドリヤ、一服いたさうか。

ト辻打ちになり、萬七、白鞘を持ち、下座より捨ぜりふにて出て來り、丈八を見て

萬七　ヤア、あなたは、田上丈八さまでござりまするか。

丈八　其方は道具屋萬七。ヤレ／＼、よい所で逢うたわえ。

萬七　私しも、急御用とござるゆゑ、最前よりお出でを相待ち居りましたが、して、私しへの御用とはな。

丈八　イヤ、別儀でない。細川家に傳はる仁王三郎の刀、兼ねて若殿の預りにて、一時も離さず帶してござれば

巻さあぐる折がない。幸ひ、今日若殿が、この所へ差して來たのはよい時節、見詣けの事から付け込んで、コリヤ。

ト囁き

なんと、呑み込んだか。

萬七　エヽ、左様なら、この萬七が面を知られぬを幸ひ、夏菊が親方と僞はり、金の代りに仁王三郎の刀を。

丈八　コリヤ、首尾よく巻きあげ、賣り拂へばわれが儲らき。その禮金はしつかりだワ。

萬七　お氣遣ひなされまするな、幸ひ持參のこの白鞘、殊に依つたら、こいつと吹替へませうて。

丈八　こりや、出來た〳〵。

ト云ふ所へ、おたつ、出て來る。これにて兩人、別れて、思ひ入れ。

たつ　モシ〳〵お侍ひ様、只今、稲屋のお座敷で、若殿さまが、丈八さまとやらを、お尋ねなされてお出でなされますわいな。

丈八　オヽ、丈八は身共ぢや。若殿のお尋ねとあらば、參らずばなるまい。

萬七　この萬七も、御一緒に參りませう。おたつぼう、お世話。

たつ　お早うお出でなされませ。

丈八　ドリヤ、お目にかゝらうか。

ト辻打ちになり、丈八、萬七、門内へ入る。おたつ、釜の下を焚きつける。東の口より白坂甚平、木綿やつし、脚絆、三尺手拭に、大小、旅の狀箱を衿に掛け三度笠を持ち、スタ〳〵と出て來り、本舞臺へ來て

甚平　ヤレ〳〵、今日も十里餘りであらう。爰はもう淺草の雷神門。ドリヤ、一服のんで行かうか。

ト床几に腰をかける。おたつ、茶を汲んで來り

たつ　お茶をお上がりなされませ。

甚平　オイ、女中、もう何時でござらうの。

たつ　ハイ、只今、八ツを打ちましたわいなア。

甚平　ハテ、日は長い事だ。

ト辻打ちになり、向うより亦介、奴の形、旅狀箱を首に掛け、飛脚の拵らへにて、スタスタ出て、甚平が脇へ腰をかけ

亦介　これは御免なされませ。コレ女中、茶を一つ下さい道を急いで、大汗になつた。

ト狀箱を取り、肌を脱ぎ、汗を拭く。おたつ、茶を汲

んで來る。
たつ　あなたは、遠國と見えまするが、御生國はいづれでござります。
甚平　ヘイ、身共は、奥州より五日半に、只今當地へ着いたしたて。して、其許のお國は、いづれでござる。
亦介　イヤ、下郎が生國は羽州なれど、只今では、當地に奉公いたして居ります。奥州より、五日半にござつたとは、さて〳〵、お達者な儀でござる。
甚平　羽州生れとあれば隣國の事、どうやら、故郷が懷かしうござるわえ。
亦介　下郎、お旦那よりの御狀を、さる御家中へ相渡さんと參つたところが、この淺草へと承はり、これまで參つてござる。お飛脚にも、當地初めてなら、奥山の稽古淨瑠璃、源水が獨樂の曲、見物してござれ。面白い事でござる。
ト辻打ちになり、向うより中間慾助、紺看板、生醉ひの體にて、捨せりふ云ひ〳〵、ヨロ〳〵出て來る。はるか後より大高主殿、深編笠、大小、浪人の拵らへにて出て來り、下の床几に腰を掛ける。おたつ、茶を持つて來て

たつ　これは、いつものお侍ひ樣、お早う御參詣なされましたな。サア、お茶を上げませう。
ト主殿、茶碗を取上げる。慾助、ヒヨロ〳〵と甚平と、亦介の眞中へ腰を掛ける。
慾助　コレ、水を一杯くれ〳〵。
トおたつ、不承々々に、水を汲んでやる。旨さうに呑む。亦介、甚平、呆れて、慾助を見てゐる。
なんだ〳〵〳〵、なんだキヨロ〳〵と、おれが面を見る、おれが面に、假宅でも出來たか。侍ひ、なんでおらが面を見るのたよ。
甚平　イヤ、身共は遠國者ゆゑ、當地の賑ひを見まして、只今のやうに、キヨロ〳〵と致した。不調法がござらば御免なさい〳〵。
慾助　なんだ、遠國者だ。とんだ氣紛れだ。此方の奴は、どこの屋敷の折助だ。
亦介　なんだ、身共を折助だ。身が折助ならば、おのれも折助だワ。茲な喰ひ倒れめが。
慾助　なんだ、喰ひ倒れだ。イヤ、おれに酒を、いつ振舞つたな。折助めが。
亦介　身共を折助だ。此奴、醉ひ倒れと捨て置けば、もう、

うぬ、免さぬわえ。
　ト かゝる。甚平、とめて
甚平　ハテ、貴様は、主人のお使ひ先ではござらぬか。此やうな奴に構はつしやるな。
欲助　コレ、エヽ、此やうな奴とは不作法千萬な。どこにおれが此やうな奴だ。茲な二本棒めが。うぬ、ひどい目に合はしてやらうか。
　ト 甚平が胸づくしを取る。甚平、慾助を取つて、見事に投げる。これにておたつ、驚ろき
たつ　ア、コレ、諍ひぢやわいな〳〵。
　ト 門の内へ走り入る。慾助、起き上がり、甚平、慾助へ、捨ぜりふにて立ちかゝる。兩人、あちこちと突き倒す。この時、大高主殿、編笠取つて、甚平をなだめ
主殿　お二人ながら、マア〳〵、待つしやりませ。
甚平　イヤ、お構ひなさるな。餘り法外な奴。
亦介　以後の見せしめに。
　ト 又かゝるを留めて
主殿　サヽ、御尤もでござれど、酒に性根を奪はれたる奴相手になさるは、大人氣ない。拙者が御挨拶仕る。料簡なされて遣はされいサ。
甚平　して、おてまへ樣は。
主殿　拙者は、尾羽打ち枯らしたる浪人でござるが、當寺へ毎日の參詣。何卒、主取りをも致し度き願ひ。見ますれば、御主人のお使ひと見受けました。些細な儀に、御主人の間をかゝつしやるは氣の毒。後より拙者が好いやうに計らひませう。お二人ともに、勝手次第にござりませ。
亦介　如何にも、下郎も火急のお使ひ。
甚平　心も急きますれば、御意に隨ひ。後は貴殿にお任せ申し、これでお別れ申すでござらう。
亦介　段々の御挨拶、忝なう存じまする。
主殿　ハテ、禮には及ばぬ。ござりませ。
亦介　ヘイ、お世話になりました。
　ト うろたへ紛れに、甚平が狀箱を取替へ、懷中して足早に門内へ入る。
慾助　ヤイ〳〵、なぜ逃がしやがつた〳〵。彼奴が代りに浪人め、うぬを相手にする。なぜ、逃がしやがつた逃がしやがつた。
　ト 主殿に掴みかゝる。主殿、突き退け

打濱の繪番附

主殿　サア、其許もお構ひなさずと、ござりませござりま
せ。
甚平　お志しは忝なうござるが、後にて、おてまへに
御苦勞を掛けましては。
主殿　ハテサテ、虫同然の奴。打捨てござりませ、ござり
ませ。
愁助　なんだ、虫だ。その頤を。
ト立ちかゝる。主殿、愁助を突きこかす。起き上がつ
て、むしやぶりかゝる。甚平、引きわけろ。愁助、ヒ
ヨロ〳〵として兩方へかゝる。この時、甚平、狀箱を
落す。愁助、これを踏む。甚平、取つて懷中する。こ
の時、出の唄になり、向うより、印南志津摩、若衆形
の拵らへ、振り袖、衣裳、上下にて、若黨二人、草履
取り、鑓持ち、挾み箱持ち附きて出て來り、直ぐに本
舞臺へ來る。
愁助　アヽ、痛い〳〵。うぬ、殺したな〳〵。
トひよろ〳〵しながら、逃げて居る。志津摩、これを
見て
志津　ありや、この方の下郎でないか。
侍ひ　ヘイ、左樣でござります。

志津　酒狂の體、見苦しい。此方へ引立て參れ。
侍ひ　ハツ、コレ愁助、扣へぬか〳〵。
愁助　否だ〳〵、どなたのお出でゞも、堪忍ならぬ。う
ぬ、浪人め。
ト立ちかゝるを、扇にてちよつと叩く。愁助、志津摩
を見て、怖さうな振りにて、それなりに下の方へ坐
り、蹲まつて倒れる。志津馬、主殿に向ひ
志津　酒狂とは申しながら、存じ寄らざる家來が慮外。只
管御容赦にあづかりませう。
主殿　これは、痛み入りましたる御挨拶。イヤモウ、下郎
には、まゝある習ひ、却つて氣の毒に存じまする。
志津　見ますれば、御浪人さうにござりまするが、こりや
當寺へ御參詣でござるか。
主殿　成る程、拙者、浪人でござりまする。殊更この頃、
年月馴染みましたる婦妻に別れ、いつ佛門に入るとなく
日毎に參詣仕るも、何卒、觀音菩薩の御利益にて、こ
の身も今一度、花咲く時節もござらうかと、それのみ願
ふ只今の身。御推量なされて。
ト思ひ入れあつて
志津　すりや、御流浪のうち、御内證にお別れなされ、そ

の佛果菩提の爲、二つには御身の有附きあらんかと、日毎の御參詣。御流浪の御身にて、過ぎ行かれし婦人の菩提をおとひなさるゝは、さて、御深切なお心でござりまするな。

ト此うち、主殿、志津摩の顏をつく〴〵見詰めゐて

主殿　忝なきそのお詞。誠に悧發の生れ立ち、後々は御立身の程、思ひやられて、奧床しきお若衆樣。殊には、拙者が別れたる女子どもに。

ト思ひ入れ。

志津　如何仕りましたな。

主殿　モ、見れば見るほど生寫し。

志津　そりや、何人にな。

主殿　身共が婦妻に。

志津　アノ、拙者めが。

主殿　よくお面が似ましたわえ。

志津　ヤ。

ト主殿、思ひ入れあつて

主殿　お話し申すも何とやら。お下げすみの程、面目次第もござりませぬ。

ト思ひ入れ。甚平、これまで後の方にゐて、この時ツッと覗き、志津摩を見て

甚平　ヤ、あなたは、若旦那志津摩さまではござりませぬか。

志津　オヽ、其方は、國元に殘りし白坂甚平ではないか。

甚平　左樣でござりまする。若旦那さま、先づは御機嫌の體を拜し、斯樣な喜ばしい儀はござりませぬ。あなた樣の御成長を見ましても、思ひ出しまするは、お行くへ知れぬ親旦那さま、いづく何方にござる事やら、お心柄とて只今では、人を害して日影の御身。

トあたりへ、よろしく心遣ひあつて

サア、奧樣おたみさまには、當所根岸とやらに、御別宅でござりますかな。

志津　如何にも。母上には、其方が兄文治を附け置き、御養育申すと雖も、只おなつかしきは、幼なき時にお別れ申せし父上さま、お顏も知らず、いづれでお目にかゝるとても、何を印に親子の名乘りと、それのみ悲しう思うて居るわいなう。

甚平　御尤もでござります。私しども兄弟が、足手かいさまにお尋ね申してなりとも、親旦那の御在所を聞き出しめでたうお逢はせ申しませう。若旦那、餘りキナ〳〵思

し召しますな。イヤ、それにつけ、お目にかゝつて嬉しい餘り、肝心の儀を申し上げませぬ。當月二日に、御隱居さまには、お果てなされましてござりまする。

志津　アノ、お祖母さまには、御死去とな。

ト愁ひのこなし。

甚平　左樣でござりまする。お驚ろきは御尤も。併しながら、お年も丁度八十五におなりなされまする。もう少しで米の守をお出しなされぬが、殘念なばかり。お年に惜しみはござりませぬ。即ち、御一門方よりお知らせの御狀箱、持參仕りました。

ト亦介が取違へし狀箱を出し、恟りして

南無三、御狀箱が違つてある。ア、、そんなら、今のモヤ〳〵のうち、先へ行つた中間が、取違へて行つたに極まつた。一走り、それよ。

ト行かうとして

ア、、イヤ〳〵、もう餘程の間、先の知れない尋ねもの併し、大方今に、取替へに見えるであらう。

志津　コリヤ甚平、狀箱を取違へたとは、どうやら氣掛りして、取違へた先はいづく。

甚平　イヤ、お案じなされまするな。別でもござりませぬ、一通りの御狀、大方、追ッつけ、取替へに參るでござりませう。

志津　それにて身も安堵いたしした。今日は、若殿さまには當寺へ、造營御寄附の金子を、御持參なされての御參詣、某は又、大殿さまの御代參。其方も、宿坊まで參つてよからう。

甚平　お供いたすでござりませう。

志津　イヤナニ、御縁もござらば、又重ねて。

主殿　左樣なれば、お若衆さま、お飛脚。

志津　お別れ申しませう。

ト唄になり、志津摩、供廻り、甚平附いて門内へ入る、欲助、下に醉ひ倒れ寢てゐる。主殿、後を本意なげに見送り居る。合ひ方になる。

主殿　てもさても、目元のかゝり、鼻筋の樣子、相果てた女房ともに、あのやうにまで似たものか。イヤ、モウ、瓜を二つに割らずと其まゝ。ハテ、よう似た

トいろ〳〵思ひ入れあつて

アイヤ、思ふまい〳〵。どういふ事にか、武士たる者が志しの優しきに、一日片時も忘られず、女に別れし悲しみより、姿形は變らねど、心に浮世を捨て坊主。觀

世音の靈前にて、誓ひしこの身。アヽ、迷ふまい〳〵。此やうな所に居ては、結句心の結ぼれ。アヽ、歸りませう歸りませう。

ト花道の中程まで行き、思ひ入れあつて、振り返り

イヤ〳〵、所詮、末の遂げぬ仇な契り。思ひ切らう、思ひ切らう。南無觀世音菩薩々々々々々々。

ト伏し拜み、行かうとして、また振り返り

ハテ、よう似た若衆どのぢやなア。どうで世を捨てた出家同然のこの身、女はフッツりと止めにして、精進物にせよとある、觀音のお告げではあるまいかと、云うても名も所も知らず、よし又、今逢うたというて、つい打ちつけに、わしと兄弟分になつて下されと、云はれもしまいし、ハテ、なんとせうな。

トいろ〳〵思ひ入れ。始終、揚弓の音。此うち、慾助醉の醒めたる體にて、ソロ〳〵と起き上がつて

慾助　ア、、、剛氣に醉つたぞ。オヽ、アヽ、今日はお供の筈であつたが、どうして爰に寐てゐたやら。慥かお供先で、ちよつと駒形の酒屋へ寄つて、ごんつくやらかしたと思つたまでは覺えたが、後は根ッから、夢中作左衞門だ。

ト我が形を見て

なんの態だ。どこもかしこも砂だらけ。イヤ、我が身ながらも、おへないよい〳〵だわえ。

ト云ひ〳〵、手桶を見附け、嗽ひをする。主殿、これを見て

主殿　コレ〳〵お中間、ちと、尋ねたい事がある。待たつしやれ。暇は取らせぬ。ちよつとこれへござつて下されれ。

慾助　ナニ、わしに尋ねたい用がある。貴樣は、どうやら見たやうな。オヽ、それ〳〵、慥か、爰に喧嘩をして、おれを投げたお侍ひだわえ。して、なんの用だ。

主殿　イヤ、外でもござらぬ。今日、當寺へ參詣なされたお若衆は、ありや、貴樣の御主人か。

ト慾助、思案あつて

慾助　アヽ、參詣した若衆どのとは、志津摩さまの事であらう。身共が御主人は、細川政元さま。今日御代參にござつた若衆どのは、印南志津摩といふ殿樣のお小姓。それがどうしました。

主殿　それなれば、身共、貴公に折入つて、ちと頼みたい事があつて。

慾助　頼みなら、重ねての事にさつせえ。お供に遅れて、
心が急きまする。
ト行かうとするを引き留め
主殿　コレ〳〵、貴公を頼み、骨は盗まぬぞや。
ト紙入れより一分出し
お近付きの爲、御酒まいつて下され。
ト慾助、取つてニコ〳〵して
慾助　ヤア、こりやお金か。これは〳〵、近頃、忝なう
存ずる。
主殿　その代り、拙者が頼みを。
慾助　イヤモウ、身に叶うた事ならば、なんでも承はら
う。して、なんのお頼みでござるな。
主殿　別儀でもござらぬ。おてまへの推擧で、細川家へ御
奉公はなるまいかな。
慾助　身共は慾助と申して、大部屋一巻きの部屋頭でござ
る。斯く中間奉公なら、わしが手先で、幾人でも抱へま
すが、おてまへ様は御浪人。大方、御知行のお望みがご
ざりませうな。
主殿　イヤモウ、知行の望みはさて措き、拙者中間は愚か
合羽籠、下座敷を擔いでなりとも、早急に奉公が致した
い。何分、貴様の組下で使つて下され。頼みまする〳〵
慾助　ハテサテ、それは易い事だ。わしが手先で済む事な
ら、今でも抱へまする。
主殿　それは忝ない。お世話下さるゝお禮に。
ト懐より金を二分出し
これは、お中間へ御酒を進ぜて下され。
ト遣る。慾助、思ひ入れにて
慾助　また金を下さるか。此やうにお心遣ひなされては、
一年の給金が、皆になりませう。
主殿　イヤモウ、給金は、其許さまへ、殘らず差上げませ
う。
慾助　それは近頃忝なう存じまする。これから、お近附
きの爲、馬道の内田で、酒を一杯やらかしませう。
主殿　兎も角も、お指圖次第に仕りませう。
慾助　サア〳〵、御同道いたさうか。
主殿　然らば、お頭。
慾助　ハテ、氣の早い。
兩人　ハヽヽヽヽ。
主殿　サア、ござりませ。
ト辻打ちになり、慾助、主殿、門の内へ入る。これに

て、道具、引き替る。

本舞臺、掛け行燈、障子三尺、口に長暖簾、稻屋の座敷のかゝり、上よりこの道具セリ下ろすと、太鼓入り、所作の切れになり、暖簾口より、傾城夏菊以前の形、後より禿、清八、銚子杯を持ち出る。

夏菊 コレ、殿さんがござんしたなら、いま云うた通りにしようわいなア。

清八 なんでも、思ひ入れ、仰しやりませ〳〵。

ト唄になり、向うより忍びの乘り物、これに眞金源次兵衛、泰村隼太、附いて出て來り、本舞臺へ來る。

源次 コリヤ〳〵、若殿のお出でぢやぞ〳〵。

トよき所へ、駕籠を据ゑる。夏菊、立ちかゝり

夏菊 サア、出やしやんせ〳〵〳〵。

源次 イヤ、若殿のお相方、夏菊どの、若殿のお駕籠をどう召さる。

夏菊 措かしやんせ〳〵。お前方までが眞顔になつて、よう知つて居るわいな。わたしが身請けは、今日の明日のと云はしやんして、佐々木家のお姫様と内祝言の杯とやら。エ、モ、腹の立つ。サア、若殿さんへ恨みのたけを云はにやならぬ。出やしやんせ、出やしやんせ。

源次 ア、それならば、姫君の事を聞き出して、若殿さまへ、お恨みを云ふ氣だな〳〵。

清八 イヤ、いふきでも紬ぎでも、さう聞いては、こりや、云はずには居られまい。

源次 斯うもくが割れるからは、何も隱す事はない。源次兵衞があらまし申さうか。成る程、今日爰で、若殿さまと、佐々木の姫君と、内々のお杯がござるわいの。

夏菊 さうでござんせう〳〵。

源次 よもや、お前は御存じではあるまいと思うたが、天知る地知る。ア、爭はれぬものでござりまする。成る程、それ聞いては腹が立ちませう。

隼太 若殿さまも、お前には、お顏が合はされますまい。大方お駕籠の内で、生きた心地はござりますまい。

夏菊 その厚皮な殿さんに逢うて、思ふ存分、云はにやならぬわいなア。

隼太 ハテ、若殿さまは、お前にお逢ひなされては、

夏菊 ハテ、退かんせいなア。

ト駕籠にかゝる。

サア、殿さん、出やしやんせ〳〵。

ト誂らへの合ひ方になり、駕籠の戸を明ける。內より治作、百姓の體の鬘にて、小袖、袴、一本差し、刀を持ち出る。夏菊、胸盡しを取つて、膽を潰したる顏にて、引きつれ出る。

サア、殿さん、下に居やしやんせ。ようマア、お前は、わたしを騙して、あのお姬さんと內祝言をさしやんすのエ、お前は。

ト顏を見て、恟りして

ヤ、、、、殿さんと思うたら。

隼太　なんと、よい若殿でござらうがなア。

夏菊　そんなら、このお方が

清八　若殿さまかえ。

治作　なんぢやか知らぬが、若殿ぢや〳〵。

夏菊　どうして、こんな若殿さんを。

ト暖簾の口より

勝次　拵らへたは、其方へ心中。

夏菊　ヤア、若殿さん。

ト勝次郎、出て

勝次　どうぢや太夫、その勝次郎に、恨みのたけを云ひやらぬか〳〵。これにて暫らく、御氣鬱をお晴らし遊ばされませう。

治作　オヽ、晴らさう〳〵。殊の外駕籠にて草臥れたわえ。疲れてトロ〳〵と眠氣の出たところを、胸盡しを取つて引き出されたゆゑ、こりや、どうなる事かと思うたれど、どこの國にか、大名若殿とも云はるゝ者を、駕籠に乘せるとは、餘り情ない致し方ぢや。コレ、近習の者ども、わいら、キツと曲事に申し付けうか、手打ちにせうか、憎き奴等の……どうだ大名の若殿は、この位な事であらうがな。

源次　それでは、餘りせりふが、强過ぎまする。

夏菊　ナウ殿さん、どういふ事で、此やうな殿さんを拵らへ、アノ、わたしへの心中とはえ。

勝次　サア、兼ねて足利家の御指圖にて、佐々木左京之進どのゝ姬を、某へ云ひ號け。輿入れ延引いたすに附き、度々の催促。殊更、この程、家老どもへ內意の使者。表向きの祝言はなくとも、何卒、內々杯なと致しくれとの賴み。これ幸ひと、近習の者に申し附け

源次　若殿さまを拵らへ、姬君に逢はせ參らすれば、噂に違ふ武骨の若殿。姬君方より變替へあらんは必定。さすれば、此方の變替へにならぬゆゑ、足利家よりも若殿へ

お咎めもなく、首尾よく縁邊、變替へのこれ一つ。

隼太　よし又、姫の氣に入つても、内々にて餘人と杯あつた姫君、不義者に仕立て、此方より天下晴れて變替へ仕る。

勝次　姫と縁さへ切れば、其方と添はれるではないか。それで、身共は今日一日は近習役。コレ、必らず、姫に逢うたら、物事に心を附けて合點か。

治作　ハア、それは氣遣ひなされますな。何も金錢づくでござりまする。しつかりとやつてお目にかけませうが、モシ、彼の雇ひ賃は、どうぞ先へ貰ひ申したうござりまする。

源次　ハテ、忙しない若殿ぢや。それも、首尾よくやつてから、御褒美のお金を下さるワ〳〵。喜べ〳〵。

治作　ヤア、默れ。お金を下さるとは、おのれ、家來の身でなんと申すぞ。詞を背くと、若殿にはならぬぞ。サア若殿、早う、雇ひ代を勘定してもらひませう。首尾よくやらかしましたら、極めの外、酒手も下さるであらうな。

隼太　ハテ、酒手どころか、首尾よく勤めさへすれば、何なりとも、望みの物を下さるゝワ。隨分と、若殿顏でやらかしませうぞ。

治作　呑み込みました。駄賃の外に、望みの物を下さるゝとは、エヽ、有り難い。イヤ、滿足に思ふわえ

ト此うち、向うより、侍ひ一人、走り出て

侍ひ　ハツ、御近習の方へ申し上げます。佐々木家の姫君をお供いたされ、奥女中の外山どの、この所まで見えられましてござりまする。

源次　急ぎこれへ、御案内申せ。

侍ひ　ハツ。

ト引返して入る。

勝次　サア〳〵、斯ういふ所へ姫が來ては、ひよつと勝次を放埒者ぢやと云うて、變替への妨げにはなるまいか。

夏菊　さう云うて、わたしらを撒いて、後でお姫さんと、ほんまの杯事さんすりや惡い。わたしや矢ッ張り、爰にゐるわいなア。

源次　ハテ、どうぞお前は今宵中に、若殿さまが、お身請けなさるゝ。委細は丈八どのが參れば、直ぐに埒が明きまするわいなう。

勝次　いつそ、心の濟むやうに、姫の側に見張つてゐるもよからう。ナア、皆の者。

清八　左様でござります。腰元衆ぢやと云へば、濟みさうなものでござりまする。

源次　サヽ／＼若殿さま、姫君のお出でゞござりまするぞ。爰が肝心の所でござるぞ。爰ばつかりの若殿さまでござりまするぞ。

治作　そこは、氣遣ひし給ふな。身共は細川勝次郎ぢや。若殿ぢや／＼／＼。

ト向う、揚げ幕の内にて、治作女房おさえ、聲をかける。

さえ　お姫さま、いざお越し遊ばされませう。

ト誂らへの唄になり、花道より、おさえ、妹おみつ、振り袖、姫の拵らへ。おさえ、帽子、奥女中の拵らへにて出て來り、直ぐに舞臺へ來て

憚りながら、それにお渡り遊ばされまするは、お云ひ號け遊ばされましたる、細川家の若殿、勝次郎さまでござりまするか。私し事は、佐々木家の姫君、敷島姫さまのお側仕へ、外山と申す者。何卒、姫君のお出での樣子を偏へにお取次ぎ、お願ひ申し上げまする。

勝次　承知仕つてござる。即ち、これなるが、勝次郎さまイザ、姫君、お近うお寄り遊ばされませう……ハツ、若殿樣へ申し上げます。お云ひ號けの姫君樣。御入りでござりまする。爰が、彼の肝心の所でござりまする。

治作　オヽ、如何にも云ひ號けぢや。この若殿は、云ひ號けはきつい好きぢや。いつぞやもお國の名物ぢやというて、送られたは、アヽ、よい菜漬であつた。あれは京菜か、からし菜か、糀漬に致したら、まだも風味がよからう。アヽ、いゝ漬菜でござつたの。

ト此せりふにて、おさえ、合點のゆかぬ思ひ入れ。下の、障子の内より勘解由、立ち聞きしてゐる。此うち始終、謠ひの合ひ方

さえ　これはマア、若殿樣には、何事を御意遊ばすやら。オホヽヽヽ。それは兎もあれ、モシ、姫君樣、あなたが日頃、戀しいと思し召す若殿樣、お側へ行て、ちやつと御挨拶をなされませいなア。

トおみつ、いろ／＼こなしあつて、勝次郎、兩方へ見えぬやうに、眞中に居ろ。

みつ　そんなら、あなたが若殿樣でござりまするかえ。よう出やつしやりましたなア。アノ、わしは、敷島姫でござりますよ。

トおさえ、袖を引いて敎へる思ひ入れ。

治作　アヽ、こなさんが、お姫どのか。この若殿が日頃から、逢ひたい〳〵と思うて居た敷島どのか。さて〳〵、聞いたより、蓮葉なお姫どのだ。いつぞや、この若殿がそれ樣の元へ、歌を書いて見知らしたが、あの返歌とやらの譯は、どう附けめされたな。

トおみつ、ウヂ〳〵する。おさえも合點のゆかぬこなし

さえ　エヽ、成る程、左樣な事もござりました。あなたから、お歌をお送り遊ばされました。そのお歌の御返事の事でござりまするか。モシ、姫君樣。いつぞやの、あのお歌の御返事の事でござりまするか。モシ〳〵、御返歌をなア。

トいろ〳〵思ひ入れ。おみつ、困る思ひ入れ。

みつ　ナニ、歌とやら、返歌とやら、そりやマア、なんの事でござりまするぞ。

さえ　シッ〳〵。

トおさえ、こなし。

みつ　エヽ、田植ゑ唄の事かえ。田植ゑ唄の、流行り唄のと、そんな下作な事を云ひ申したら、お父さんや、お母さんに叱られたといふ、唄の事でござり申すか。

ト勝次郎初め、皆々呆れるこなし。

治作　成る程、こりや、面白いよい唄でござる。その返歌は、直ぐに附けるぢやて。ハテ、連れて逃げるで案じるなど、こんな事ではどうであらうぞ。

ト此うち、勘解由、合點のゆかぬ思ひ入れ。舞臺の皆皆、姫を心得ぬといふこなし。おさえ、引取つて

さえ　成る程、そのお歌の御返歌を、とんと失念いたしました不調法は、御免下されませ。思ひ出しますれば、慥かその節、姫の方より、焚きさしの名香を差上げましたが、あなたは、お覺えがござりまするかえ。

治作　オヽ、名香々々、おめいかうは、十月の筈ぢやが、ちと早いな。今時分の講なら、太々講か、念佛講か、經子講も十月ぢや。マア〳〵、そんな事は後へ廻して、早う、お姫どのと、杯をしようか。

さえ　それは有り難うござりまする。御內々のお杯をなされて下されまするとは、姫の喜び。サア〳〵お姫樣、ズッと近うお寄り遊ばされませ。日頃戀しい床しいと思し召す、云ひ號けの若殿樣。

ト側へ寄せる。

治作　聞き及んだ、こなたがお姫どのか。

みつ　若殿さんとやら、今日から隨分。
さえ　ハイ、二世も三世も。
ト三人顏見合せ、驚ろく思ひ入れにて
ヤア、こちの人ぢやござんせぬか。
治作　さう云ふわれは、女房のおさえか。
みつ　ヤア、お前は姉さんのお連合ひ、治作さんかえ。
三人　これはしたり。
ト皆々、驚ろく思ひ入れにて
勝次　そんなら、姫も雇ひか。
夏菊　お姫さんと云うたも
源次　若殿樣の賴まれたのも
清八　夫婦であつたか。
皆々　こりや、どうぢや。
治作　コリヤヤイ、おりや、わいらが歸りを待ち兼ねて、尋ね出たが、歸らぬこそ道理、いつの間にやら、妹は結構なお姫樣。女房、われも其やうな形になつて、アヽこりや聞えた。おれに愛想が盡きて、おのれは夫を置き去りにひろいだな。
みつ　コレイナア、これには段々譯がござんすわいな。
さえ　コレ妹、構やんな。コレ、こちの人、わしに、置き去りにしたかと云はしやんすが、こなさんこそ、わしらを去いこくらうといふ拵らへ事で、義理のある借錢があると、わしら二人を蒔いて置いて、この江戸へ來て、此やうな若殿とやらになつて、云ひ號けの姫があるとは、こりや、こなさん、大名の內へ入り聟に行くのか。さうされては、女房が立たぬわいの。
治作　たわけ面め、百姓が大名の聟になつて堪るものか。おのれこそ、金の工面と家出しをつて、其やうに結構なかみさんになつたのは、エヽ、おのれ、玉の輿に乘つたのぢやな、玆な置き去り女房め。
さえ　なんぢや、置き去りぢや。こなさんこそ、わしらを騙して、若殿になつたのは、置き去りにしたも同然ぢやわいなア。
治作　イヤ、おのれこそ、僞はり者ぢや。家出して十日餘り、どこに、何をして居おつた。エヽ、腹が立つわい。
さえ　エヽ、わしが腹が立つわいなア。
ト兩方より、捨ぜりふにて立ちかゝる。おみつ、皆々捨ぜりふにてなだめる。勘解由、思ひ入れあつて、障子を引き立て入る。暖簾口より、與茂九郎、ウカ〳〵と出て、二人を見附け

與茂　イヤア、おぬし達は、治作夫婦ぢやないか。妹のおみつも來て居るな。さうとは知らず、この與茂九郎はわれさまの行く先を尋ねて來申した。委細は知り申さないが、何を爭ひ。マア〳〵、靜かにしやれ靜かにしやれ。

治作　イヤ〳〵、庄屋どの挨拶でも、わしが立つた腹は、横には寐ぬ〳〵。

みつ　ハテマア、靜かに云はんせいなア。

與茂　コレサ、てまへ達は、在所で庄屋に苦勞かけ、江戸へまで來て、巡り合つて、嬉しやと思ふと、其まゝ苦をかけるが、在所の苦勞に江戸の苦勞を合せて、二九の十八らう、宿老庄屋が裁人だ。靜まつてもらはう〳〵。

治作　イカサマ、庄屋どのゝ、江戸三涯まで來ての挨拶。お前の顏を立て、腹の立つ事も云ひますまい〳〵。

さへ　わたしも、お前の御挨拶なら、これぎりに、何も申しませぬわいなア。

ト與茂九郎、二人を見て

與茂　そりや、兩方ともに聞き分けて、嬉しうござる。ひよつと夫婦いさかひにでもなると、江戸三涯へまで來て外聞が悪い。時に治作、おぬしも嗅アどのも、いま見付け申したが、なんだか結構な物を引ッ張つて居召さるなさういふ形に出世し申す心で、そこで在所を駈落ちしたのだな。さうとは知らず、この與茂九郎は、正直者だと思つて居たが、見掛けに似合はぬ不頼もしい男だわえ。

みつ　成る程、尤もではござんすが、これには段々、譯のある事でござんすわいなア。

治作　ほんに、こなさんに借金を請合はせ、家出して出世したと思はつしやつては、大きな間違ひ。何を隱しませう、この衆に、據ろなく頼まれて、何が着附けぬ小袖に氣が張つて、術ない。もう脱ぎませう〳〵。免して下さい〳〵。

ト袴、小袖を脱ぐ。下は股引、木綿やつしになる。

與茂　アヽ、そんなら、其方衆は、雇はれて來たのか。して、お内儀も一緒か。

さへ　イヽエ、わたしや、外のお侍ひ樣に、頼まれて參りましたわいの。

治作　して、其方を頼んだお侍ひは。

ト横山大藏、奥にて

大藏　その頼み手は、これに居るて。

トこの時、暖簾口より、横山大藏出て、眞中へ出る。

合ひ方。
勝次　ヤア、其方は横山大藏。
源次　只今、お來やつたか。
大藏　若殿樣には、これにお渡り遊ばされまするか。今日姫君の似せ者を拵らへ參つたも、佐々木の御緣組みを變替へ、お氣に入りの夏菊太夫を、奧樣に致して差上げんと田上丈八とも內談の上、あなた樣には沙汰いたさず、この仕組み、若殿にも其お心にて、若殿の吹替へとは、我れ我れと同案の今日の仕儀。お案じなさるゝな。今宵中に夏菊どのは、御身請け。
勝次　コヽ、身が氣に入りの事だに依つて、出かす〳〵。
さえ　コレ、こちの人、わたしをお賴みなされは、あなたでござんすわいな。
治作　ムウ、われ〳〵お賴みなされたは、あのお侍ひ樣。
　ト大藏が顏を見て、恟りして
ヤア、お前は、お行くへ知れぬ若旦那、大藏さまぢやござりませぬか。
大藏　オヽ、さう云ふ其方は傳助でないか。久しうて逢うたなア。
治作　オヽ、久しうて逢ひました。見れば、立派なその姿こりや、いづれへか有りつきさつしやりましたな。いま出世の身で居きつしやりながら、よう訪れもさつしやらぬな。エヽ、お前はなう。これ、女房ども、日頃からわれに話す、彼の若旦那は、あのお方ぢやわいの。
さえ　エヽ、あなたが、お前の隱まはしやんした、若旦那樣かえ。あのお方が。
大藏　コリヤ〳〵女、若殿の御前、ツカ〳〵物を申すな。扣へて居らうぞ……アイヤ、若殿樣、太夫どのゝ御身請けの儀は、田上丈八、今晩中に埒明けまするとの儀。まつた勘解由さまにも、最前より、離れ座敷にお出でなされて、あなた樣をお待ち兼ね。廓の者も、伯父君の御目にかゝらぬうち、お歸しなさるゝがよろしうござりませう。
勝次　成る程、伯父御樣のお出でとあらは、お目にかゝらずばなるまい。コレ太夫、いま聞く通りぢや。キツと今宵は請け出す。其方、少しのうちぢや。廓へ行て、待つて居や〳〵。
夏菊　そんなら必らず、お待ち申しまするぞえ。
淸八　後方までに、お金が參りますれば、否でも先約のお方へ、太夫樣を上げねばなりませぬ。間違はぬやうにい

づれも樣。

源次　氣遣はずと、マア、歸りやれサ。

與茂　イヤ、氣遣ひといへば、この間、與茂九も尋ね廻つた。治作に逢うて、腹の虫が落ち付いたのか、ひもじいのが、グウ〳〵と唸り出した。女中、早く飯を出して下さい。

治作　オヽ、與茂九どの、話しもある程に、早う支度してございませ。

與茂　合點だ〳〵。ドリヤ、一杯掻込んで來ようか。

トつツと奥へ入る。

夏菊　そんなら殿さん、必らずともに。

與茂　ハテ、呑み込んで居るわいなう。ドリヤ、身共も勘解由さまに、お目にかゝつて來ようか。

淸八　サア、お出でなされませ。

ト唄になり、夏菊、淸八、向うへ入る。勝次郎、源次兵衞、作太、おたつ、奥へ入る。大藏、治作、おさえおみつ殘ると、合ひ方になり、治作、思ひ入れあつて大藏に向ひ

治作　モシ若旦那、エヽ、大藏さま。エヽ、お前樣はなう親旦那、橫山外記さまは、お前の母御樣、御死去なされてより、武者修業にお出でありしと、また御幼少なお前樣をば、私しにお預けなされて御遠國。私しも親旦那に奉公いたせし時の名は、傳助、御旦那より預りしみなし子のあなたと存じ、やう〳〵わしが手一つで育て上げるに隨つて、荒氣なその生ひ立ち、中仙道の浦和の在に、水呑み百姓のこの治作。問屋人足、二は小揚げ、雲助。駕籠に雇はれて、その日暮らしのその中へ、爰の市町盛り場で、博奕や酒に惡者附き合ひ、喧嘩で人を殺めたり年ある女郎を引き出したり、錢金の入る事ばかり、其うち、噂を聞けば、親御外記さまには、羽州牧の林といふ所にて、人手にかゝつて思はぬ御最期。その敵打つ心もなく、身貧なわしに借錢を負はせ、ようもこなたは家出さつしやつたの。その金ゆゑに、この治作は、今に難儀して居ますわいの〳〵。

さえ　女子の差出た事ながら、わたしや、この妹を連れ五年以前、治作どのゝ、夫婦になりました、さえと申しまする者。日頃、夫が苦勞に病むは、お前の借金、どうぞして濟ましたい〳〵と、苦にしてござんすゆゑ、この妹に勤め奉公させてなりと、夫の苦を助けんと、廓の人に相談の樣子を聞いて、お前のお頼み。恐ろしいとは思ひ

ながら、金が欲しさに道ならぬ人を偽はり、間に合すも
元の起りを尋ねて見れば
みつ　みんな、あなたの放埒。その金を、拵らへるわたし等が艱難、思へば〳〵あなたはなう。
治作　コリヤ、女房、妹も扣へて居れ。わいらは何も知らぬ者。お侍ひのあなたに向つて、扣へて居ろ〳〵。コレ、大藏さま、どうでも、こなたは、親旦那の敵を。
大藏　討たうが討つまいが、身共が親の敵なれば、わいらに習うて武士が立たうか。以前、我が方に居候ふの時分とは違ふぞ。只今では、細川政元の家中、横山大藏、よしみある其方なれば、身が在所を知らせてやるも存じたれど、水呑み百姓のわれなれば、無心合力がうるさからうと、それゆゑに沙汰いたさぬが、身が出世を喜ばゞ、神棚へ神酒でもあげて、身が武運長久を祈つてくれろ。併しながら、無心合力なぞに、決して參るな。取上げぬぞ。その代り、兩人の女に着せたるあの小袖は、今日の雇ひ代にくれて遣はす。有り難い事ぢやと思うて、サアサア、早う立歸れ。
治作　エヽ、その身の心に引き比べ、無心合力に來やうとは、コレ、よう云はれた事ぢやの。いま聞かんす通り、女房が妹を賣つてなりとも、金拵らへ、わしが苦を助けやうとの志し、その金も皆、こなさんの使うた金。それは兎もあれ、お前も武士ぢや。親御の敵討つ氣はござらぬか。
大藏　ハテ、いま云ふ通り、敵討たうが討つまいが、わいら如きに、指圖は受けぬ。重ねて吐かすと免さぬぞ。
治作　オヽ、其方からさ受出れば、輕い身分でも、此方も云ひ掛りぢや。今日から、貴樣の世話は勿論、もう主家來ではござらぬぞ。
大藏　ムウ、そんなら、われが方から、主從でないと申すか。
治作　オヽ、くどいわいの。
大藏　こりや忝ない、身共が日々の立身に、定めて無心にうせるでがなあらうと、案じて居つたに、家來の方から主でないと申すか。フヽヽヽ、ハヽヽヽヽ。
トこなしある。
これで、身共も氣が濟々と致した。
治作　エヽ、その願を。
ト立ちにかゝる。おさえ留める。治作、無念の思ひ入れ。

初演の繪番附

さえ　コレ、こちの人。
治作　ぢやと云うて。
さえ　モシ。
　ト きつと治作を留める。大藏、嘲笑つて
大藏　エヽ、大だわけめが。
　ト唄になり、大藏、悠々と向うへ入る。
治作　エヽ、今の一言。
　ト行かうとする。おさえ、おみつ留めて
さえ　ハテ、惡人なれど、お前の爲にはお主ぢやないか
え。
みつ　腹立つたとて、家來のお前、返らぬ事と諦らめて、
氣を靜めて下さんせいなア。
治作　エヽ、恩知らずめが。
　ト無念の思ひ入れ。この時、暖簾口より、與茂九郎、
　茂平、出て來り
與茂　サア／＼治作、おぬしに掛り合ひのある茂平どのも
連れて來た。金を濟ますとも、どうするとも、譯を立つ
て、おれも肩を脱がねばならぬ。さう思つて下さい。
茂平　コレ治作、おぬしが駈落ちしたと聞いたに依つて、
庄屋どのを連れて尋ねに來たが、早速逢つて、おれも落
ち付いた。して、おれが方の廿兩の出入りは、どうする
のだ。
さえ　お氣遣ひなされますな。夫がかゝり合ひの廿兩、ハ
イ、私しがお返し申しまするわいなア。
　ト茂平、見て
茂平　イヤア、女房のおさえに妹のおみつ、てまへ達は
こりや、なんといふ形だ。ハテ、結構な物を着たな。
さえ　サア、お前の金濟まさうと思うて、妹もわたしも
お屋敷方へ御奉公にあがつたなれど、譯を云へば長い事。
その廿兩の金、あの子とわたしが、この小袖を賣り代な
して、お前にあげまする程に、それで料簡して下さんせ
いなア。
茂平　イカサマ、おみつが形といひ、こなたのその形、古
着屋に見せても、廿兩が物はあらう。ようごんす。隨分
それで濟まして進ぜませう。與茂九どの、わしが方は、
マア、これで濟んだといふもの。
與茂　ヤレ嬉しや、わしもそれで一肩拔けたといふもの
だ。
治作　大きに御苦勞をかけました。コレ、女房ども、廿兩
といふ大枚の借金、其方の働らきで濟ましてくれると云

ふは忝ないが、もしや、その着類の事が、難儀になり
はせまいかの。
さえ　なんのいなア、わたしを頼んだのも、あの大藏さま。
濟まさにやならぬ廿兩も、根を考へても見れば、大藏さ
まの放埒の金なれば、云はゞ元々ぢやわいなア。
治作　ア、、それもさうかいの。
與茂　それ〳〵、あのやうな惡者に、いくら損をかけたと
て、大事ござらぬわいの。
治作　時に、マア、ちつとも早く、在所へ行かずば、近所
の手前。サア、嚊、支度しや。
さえ　アイ〳〵、合點でござんすわいなア。
治作　コレ〳〵、シタガ、其やうな形で、在所へ歸つたな
ら、近所の者が、不思議を打たうぞや。
みつ　ほんに、それ〳〵、姉さん、その形では、
さえ　なんのいなう。宿まで行けば、どうで茂平さんに渡
さにやならぬこの代物。
茂平　それ〳〵、どうで今夜は馬喰町泊り。その代物は廿
兩の代り、あんまり引摺つて裾を切るまいぞや。
治作　イヤ、モウ、嚊も、妹も、しつかい練り物に出た
やうなわいの。

皆々　ハ、、、、。
與茂　サア、ちつとも早く、宿まで連れ立つて行きませう
か。
治作　左樣いたしませう。そんなら、嚊も、妹も、來い。
さえ　サア、ござんせいなア。
ト唄になり、與茂九郎、茂平、おみつ、おさえ、治作、
連れ立つて、向うへ入る。暖簾口より勝次郎、源次兵
衛、田上丈八、道具屋萬七出る。
萬七　ハイ〳〵、お願ひでござりまする〳〵。何卒、お身
請けの儀を。
丈八　ハテ、只今、申し上げて見やうわサ……イヤナニ若
殿樣、この者儀は、夏菊が親方分の使ひでござりまする。
いよ〳〵、太夫をお身請けなされまするならば、只今、
金子を受取りたいと申しまするが、これや、マア、如何
いたしませう。
勝次　ハテ、太夫を、今宵中に身請け致すに相違ない事。
其方、よいやうに申して聞かせいサ。
丈八　畏まりました。コリヤ、三浦屋の使ひの者、コレ、
あの通りぢや、追ッつけ、金子は持參いたさう。それま
で待つがよからう。

萬七　イヤモウ、間違ひはござりますまいが、何を隱しませう。只今、外々よりの太夫が身請け、持參いたされて私し方にお待ちなされてゞござりまする。お大名のあなた樣、何しに相違はござりますまいが、何を申すも金子づく。大金に目がくれまするは、賤しい町人の習ひでござります。何卒、三百兩のお金、お渡しなされて下さりまするやうにと、親方が申し付け遣はしましてござりまする。

丈八　左樣ではあらうが、只今と云うては。

ト思ひ入れあつて、勝次郎が側へ行き

若殿樣、斯樣になされて下さりませ。今日、あなたのお對しなされた仁王三郎のお刀、お屋敷より金子の參るまで、私しへお預けなされて下さりませ。差當つたる三百兩の代りに、あの者へ暫らく預け置きまする。其うちには、私しが申し付けましたる身請けの金も、持參いたすでござります。何卒、その仁王三郎のお刀を、暫らくが間。

勝次　イヤモウ、そりや、其方さへ承知なら、少しの間は大事あるまい。源次兵衞、左樣ぢやないか。

源次　尤も、お家に傳はる、大切なる仁王三郎なれど、丈八どのゝ計らはるゝ事、お氣遣ひはござりますまい。

勝次　サア／＼丈八、暫らくが間、其方へ預ける。よろしく計らへ／＼。

ト刀を差出す。丈八、取つて

丈八　暫らくの間、お預かり申し上げまする。コリヤ／＼、廓の者、大切なる一腰なれど、其方が願ひに任せ、金子三百兩、追ッつけ參るまで、この刀を渡し置く。お金が參れば、引替へに致せ。

ト渡す。萬七、受取り

萬七　これは有り難うござります、御大家のあなた方、お疑ひ申すでは、さら／＼ござりませぬが、外の見請けを變替へまする事。斯樣のお印でもお預かり申しませねば、親方へ私しが相立ちませぬ。

丈八　今暫らくの間ぢや、この所に待つて居れサ。

萬七　ヘイ／＼、畏まりました。

ト合ひ方になり、萬七、刀を持ち、暖簾口へ入る。

勝次　コリヤ／＼丈八、氣遣ひはあるまいか。

源次　これは、どう致したものでござります。お氣に入りの丈八が、惡いやうには仕りませぬ。必らずお案じは御無用でござりまする。

ト この時、暖簾口より、隼太、千兩箱を抱へ出て來り

隼太　これは川上丈八どの、卽ち細川家より、當寺へ御寄附の金子千兩、若殿樣のお役目なれど、宿坊へは、おてまへ樣、御持參なさるゝがようござりませう。

丈八　承知いたした。身共が、キツと相渡さう。

ト箱を受取り

若殿には、お船に召され、片時も早く、お屋敷へ。お刀の儀は、拙者、後より持參仕るでござりませう。お腰が明いて見苦しい。憚りながら。

ト刀を渡し

源次兵衞どの、路次の間に心を附けて、お供おしやれ。

源次　承知いたしてござる。

勝次　そんなら、身共は先へ歸る程に、必らず〳〵今宵中に、太夫が身請け、二つには、今の仁王三郞。

丈八　ハテ、私しが追ツつけ、持參仕りまする。

勝次　早う來てくれいよ。

ト唄になり、勝次郞、源次兵衞附いて、向うへ入る。隼太、奥へ入ると、丈八、千兩箱を持ち、殘る。奥より萬七、仁王三郞と白鞘をもち窺ひ出で來り

萬七　丈八さま。

丈八　萬七、大儀。して、その刀は。

萬七　離れ座敷で、私しめが持參の白鞘、中心はまんまと入れ替へましたが、して、この仁王三郞の裁きは。

丈八　拔け目のないわれなれば、賣り拂つて金にしろ。その時は、われにも三つ割り一つ。隨分ぬかるな。

ト丈八へ渡す。

萬七　呑み込みました。引替へましたるこの刀。

丈八　そんなら、萬七。

萬七　丈八さま。

丈八　行け。

萬七　其うち、お目にかゝりませう。

ト辻打ちになり。丈八、白鞘を持ち、向うへ入る。丈八は、千兩箱抱へ、暖簾口へ入ると、チヨン〳〵にてこの道具、引上げる。

本舞臺、向う筋塀、よき所に榎の洞、竹の矢來、誂らへの井戶。上の方に、水茶屋、二十軒のかゝり、下の方に、四つ手駕籠一挺据ゑてある。辻打ちにて道具納まる。

ト奥より白坂甚平、狀箱を持つて出る。

甚平　ヤレ〳〵、若旦那は、きつうお手間が取れるぞ。此うちに先刻の奴が、狀箱を取替へに來やうかと、待つても〳〵來居らぬが、ア丶、コレ、どうぞ、早く取替へたいものだ。

ト懷中より、狀箱を出して見て

ア丶、コレ、狀箱が割れてあるが、先刻の中間の生醉ひめが、踏み居つた時に、痛んでゐたと見える。ア丶、コレ、渡すまで、蓋が割れねばよいが。

トうろ〳〵箱を直すうち、蓋、割れ、内より一通出る。

南無三、蓋が割れたワ。

ト落したる狀を取上げ見て

「横山大藏どのへ、同苗外記」ハテ、合點のゆかぬ。この外記といふ奴は、いつぞや羽州に於て、お旦那十内さまの御手にかゝり、討たれた侍ひ。それがこの狀の名宛にあるとは、何にもせよ、合點のゆかぬ。

ト封を切らうとする。下座より亦介出て、キヨロ〳〵として尋ね、甚平を見て

亦介　ヤ丶、おてまへは、最前お目にかゝつたお飛脚どのだな。

甚平　オ丶、先刻、狀箱を取違へた。

亦介　されば〳〵、不調法仕つた。只今、やう〳〵心附き、貴公のお行くへを、お尋ね申した。サア〳〵、此方の狀箱を、取替へませう〳〵。

ト狀箱を持ち、思ひ入れにて詫びる。

甚平　イヤ丶、滅多にこの狀は渡されぬ。

亦介　そりや又、なぜでござるな。エ丶、お腹立ちか〳〵その儀は、誠に下郎めが不調法。サア〳〵、此方の狀箱を。

甚平　イヤ丶、心得ぬ宛名のこの狀。中改めぬ其うちは、滅多には渡されぬ。

ト亦介、驚ろき思ひ入れにて

亦介　エ丶、そんなら、お旦那の名宛を讀んだか。南無三密事の御狀。われに知られては、奴が扶持の食ひ上げだ。おれに渡せ。

ト持ちたる狀を、取りにかゝる。立廻りあつて、甚平、亦介を見事に投げる。亦介、タヂ〳〵となり、これより立廻りよろしく、亦介を押へ付けて、一通を開き

甚平　「わざ〳〵飛脚を以て通達いたし候ふ、其方、無事にて成長の由承り、大慶に存じ候ふ。殊に幼少にてお

別れ、諸國を廻り、羽州牧の林にて、武藝の爭論にて、
印南十内といふ者
ト讀むうち、亦介、下より刎ね返し
亦介　それを。
トかゝる。立廻り。此うち、釋迦堂の大念佛にて、兩人よろしくタテあつて、トヾ甚平をあて、亦介、狀箱引ッ攫ひ、一散に向うへ走り入る。
甚平　うぬ、いづくまでも。
ト辻打ちになり、後より向うへ一散に走り入る。下座より、勘解由、丈八、千兩箱を抱へ、窺ひながら、出で來り
勘解　田上丈八、云ひ付け置いたる通り、當寺へ寄附の金千兩、其方、受取り置いたか。
丈八　若殿より受取り置きました。封印切つて、金は捲き上げ、箱の内は、目方を元の通りに拵らへ置きましたが、封印の儀は。
勘解　氣遣ひ致すな。兼ねて金役所の印形を拵らへ、所持いたすこの勘解由。
ト印判を渡す。
丈八　心得ました、……併し、往來しげきこの所。人目もござれば。
トあたりを見廻し、駕籠を見附け
オヽ、幸ひ辻駕籠。この内にてこの金を……勘解由さまにはあたり〳〵。
勘解　合點だ。
ト丈八、駕籠の内へ入り、垂れを下ろす。駕籠の内にて、コチ〳〵金箱を明ける音など、よろしくあり、勘解由、あたりへ心を附ける。此うち、下座より隼太、出かゝり、窺ひ居る。丈八、駕籠より金箱を抱へ出て
丈八　勘解由さま、まんまと詰め替へ、金子は即ち、あの駕籠に。
勘解　出來た〳〵。
トこの時、隼太、出て
隼太　千兩の金子を掠め取つたる勘解由さま。その荷擔人は田上丈八。
ト兩人、愕りして、思ひ入れ。
丈八　それ知られたる一大事。隼太め、覺悟。
ト拔いて切りかける。この立廻りのうち、後より、勘解由、一刀浴せる。と丈八、疊みかけ、兩人して切り殺し、止めを刺す。

勘解　蛙は口ゆゑ、隼太が最期。

丈八　して、この死骸は。

ト勘解由、あたりを見て

勘解　幸ひのその井戸。

丈八　心得ました。

ト死骸を、井戸の内へ打込む。此うち、茶屋の影より大高主殿、紺看板、中間の形にて、この様子を窺ひて入る。勘解由、丈八、顔見合せ、巧く行つたといふ思ひ入れ。向うより清八、走り出で來り、丈八を見て

清八　丈八さま、これにお出でなされましたか。太夫さまの身請けの事を、たつた今埓明けるやうに、お願ひ申せと、親方が申し付け遣はしました。

丈八　ハテ、只今、金子は持參いたす。コリヤ、家來參れ。

侍ひ　ハア、。

ト侍ひ二人出て來る。

丈八　コリヤヤイ、其方達は、この金子を、宿坊へ持參なし、相渡して罷り歸れ。

侍ひ　畏まりました。

ト金箱を持ち、奥へ入る。兩人、後を見送り

勘解　これから直ぐに廓へ參り、千兩の山吹色。花を咲かせる勘解由が全盛。

丈八　その節、太夫が身請けの金子も渡しくれう。

清八　エヽ、有り難うござります。

丈八　左樣ならば勘解由さま。今の金子を。

ト駕籠へ寄らうとする。勘解由とめて

勘解　コリヤ〳〵、丈八、ナ……その駕籠はナ、直ぐに借り受け、廓へ同道。

ト目で知らせる。丈八、呑み込み、こなしにて

丈八　成る程、それがよろしうござりませう……コリヤコリヤ、駕籠の者〳〵。

ト呼ぶ。下座より、ヘイ〳〵と駕籠舁き二人、出で來り

駕籠　お駕籠でござりますか。

勘解　その駕籠は、身共が借りた。其まゝ廓へ持つて參れ。

駕舁　ヘイ〳〵、畏まりましてござります。

勘解　丈八、參れ。

丈八　ドリヤ、お供いたしませうか。

ト辻打ちになり、勘解由先に、駕籠を吊らせ、丈八附

き添ひ、後より清八、皆々、向うへ入る。ト主殿、槍を擔ぎ、窺ひ〳〵、向うを見送り、出で來り

主殿　いづれの家中の侍ひやら、身共が後に聞くとも知らず、大それたる惡企み。アヽ、あの金ゆゑに、定めし難儀する人が出來るであらうに。

ト此うち、奥にて

呼び　お立ち。

ト呼ぶ聲する。トこれにて主殿、下の方へ來て窺ふ。行列三重になり、綺麗なる駕籠の戸明けて、この中に印南志津摩、以前の形にてゐる。駕籠舁きの者四人、若い者二人、中間慾助、草履取り、挾み箱持ち、附きて花道へ行く。主殿、槍をかたげ、乘り物に見惚れてゐる思ひ入れ。駕籠は、花道よき所にて立つ。この時、志津摩、舞臺の方を振返り。主殿と顏見合せ、駕籠の戸をピツシヤリ締めると、双盤を打ち込み、この人數皆々向うへ入る。主殿、いろ〳〵思ひ入れあつて

主殿　フム。

ト思ひ入れ。この時、辻打ちになり、この音に心付き、しやんと槍を擔ぎ、足早に向うへ入る。とチヨン〳〵チヨン〳〵と引き幕。

三幕目　細川館の場

役名――眞柄角左衞門實ハ横山外記。横山大藏。白坂甚平。中間、慾助。眞金源次兵衞。腰元、卯の葉。同、皐月。細川勝次郎。熊本勘解由。細川左衞門正基。乳母、おきよ。傾城、夏菊。田上丈八。仁木主計頭。印南志津摩。中間袖助實ハ大高主殿。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、向う、金襖、幕の内より、勝次郎、羽織、衣裳、若殿にて摺り鉢を構へ、味噌を摺つて居る。夏菊、傾城の形にて、俎板を扣へ、膾を刻みて居る。丈八、上下、衣裳、これも俎板を扣へ、鯛を料理して居る。腰元皐月、卯の葉、膳を拵らへて居る。その外、近習大勢、扣へて居る砧の合ひ方にて、幕明く。

勝次　この摺り鉢は、逃げ歩いて、どうもならぬ。誰れかある。來て、持たぬかいやい。

近習　ハア、。

ト摺り鉢を押へる。

夏菊　申し、お膾は、この位でよいかえ。

勝次　よいとも〳〵。その器用では、某が臺所も渡されう。隨分精出しや〳〵。

夏菊　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。

丈八　斯く美しき松の位を根曳きにして、屋敷へ引取り、祝言ぢやの、イヤ、島臺のと、上びた事を取措いて、下の世帯入り。若殿や太夫どのが御自身の切り刻み、高見から見ても居られず、田上丈八とも云はるゝ武士が、今日一日の料理番。昨日の劍は、今日の出刃と、變り果てたる有樣ぢやなア。

夏菊　オヽ、をかしゝまた丈八さんの述懐が始まつたわいア。シタガ、若殿樣の御遊興で、わたしらまでが、同じやうに、しつけもせぬ世帯事。

卯の　ハテ、績み紡ぎ、縫ひ針水仕の手業も、姬御前の嗜なみ。此やうな時に、覺えて置いたがよいわいなア。

皐月　若殿樣と、太夫樣は、一對のお雛樣。

夏菊　お雛樣でも、わたしや氣が濟まぬわいなア。

勝次　氣が濟まぬとは、何が〳〵。

夏菊　云ひ號けのお姬樣の事が。

勝次　また云ふかいやい。

丈八　イヤ〳〵、こりや、太夫樣が御尤もぢや。江州の御領主、佐々木左京之進さまの姬君との御緣組み。悋氣せぬのと、辛子のきかぬのは、世の中のすたり者。腰を入れて、仰しやれ〳〵。

夏菊　アイ、云はいでわいなア。

ト勝次郎が側へ寄る。

勝次　ハテサテ、云ひ號けの緣を嫌へばこそ、其方を根曳きにして、屋敷へ呼び寄せたぢやないか。

丈八　イカサマ、さう聞くと、若殿が尤もぢや。

勝次　おれが尤もか。

丈八　尤もでござります。

勝次　尤もならば。

ト夏菊を敎へる。

あやまらせろ〳〵。

丈八　それ〳〵、お側へ寄つて、あやまつたり〳〵。

夏菊　それぢやと云うて。

ト思ひ入れ。

腰元　サア、ちやつとあやまるが早いわいなア。

丈八　ソレ、あやまつたり。

ト夏菊を勝次郎が側へ突きやる。

夏菊　殿さん、堪忍して下さんせえ。

勝次　あやまつたら、抱きつけ。

夏菊　サア、それはな

勝次　抱きつかぬと、料簡せぬぞ。

夏菊　そんなら、斯うかえ。

ト抱きつく。

勝次　とやつたものぢや。

ト抱き寄せる。丈八、眞面目になり、あちら向くと、この時、向うより、奴袖助、黑の奴の形にて、走り出て

袖助　申し上げまする。

ト仰山に云ふ。勝次郎、恂りして、夏菊をのけ、唾のんでゐる。

袖助　鎌倉の昵近、仁木主計頭さま、追ツつけ御入來との儀でございまする。

勝次　成る程、呉道子が雲龍の一軸、受取りの爲、主計頭さま、御入來の儀は、先達て承知いたした。それは格別丈八、あの者は見馴れぬ者ぢやが。

丈八　イヤ、惣助が組下の下郎に召抱へしとあつて、御帳面に記してござります。

袖助　袖助と申す、新參の下郎、お見知り置き下さりませう。

勝次　新參の袖助、それへ出い。

丈八　御意ぢや、出ませい。

袖助　ネイ。

女皆　出やしやんせ〳〵。

袖助　ネイ。

丈八　出ませい〳〵。

ト續けて云ふ。袖助、ウロ〳〵して、眞中へ出る。

袖助　ネイ〳〵、〳〵、罷り出ましてござります。

勝次　袖助、この屋敷に奉公すれば、隨分大酒して、第一に好色を心掛けねばならぬ。屋敷の格式を、よう守つたがよいぞ。

袖助　ネイ、それは、變つた格式でござりまするな。

丈八　餘の屋敷とは違うて、不義一流は、お許しなさるゝ、なんと、變つたお屋敷ではないか。

袖助　それは、幸ひの事でござりまする。下郎は、生れ附いて、女が大好物でござりまする。

丈八　ハテ、類は友を集めるぢやなア。

袖助　今でこそ下郎なれ、時めきしその頃は、山谷通ひの派手小袖、傾城といふ古狐の骨頂に、鼻毛よまれて通ふ程にける程に、遂に身代しも盡きて、果は紙子の上を越し、紺の臺なし二合半。これを思へば四角な玉子も、ありもしやうが、傾城に、誠はないものでござります。

丈八　それ〳〵、傾城買ひより、紙屑買ひが百貫ましぢや。

勝次　凡そ、日本の嘘を集めたが、傾城ぢや。

夏菊　アイ、嘘を集めたが、傾城ぢやわいなア。

ト眞中へ出る。

皆々　ヤア、〳〵

夏菊　傾城に誠はござんせぬ。どうでお姫様のやうにはあるまいぞいなア。

ト煙管を打ちつける。

勝次　此奴が、宿入り早々、もう女夫喧嘩は早いわえ。

夏菊　早うても、こちや構やせぬわいなア。

ト勝次郎が側へ寄る。袖助、分け入り

袖助　そんなら、奥様といふは。

丈八　吉原のお傾城ぢや。

袖助　こりや堪らぬ。

ト逃げようとする。女形皆々、立ちふさがり

皆々　待たしやんせいなア。

勝次　投げ打ちに負けうかい。

ト煙管を投げ返す。

夏菊　ニヽ、なんぢやぞいなア。

ト爼板を打ちつける。

丈八　これは、どうしたものぢや。

ト爼板を片づける。

袖助　もう、一生懸命ぢや。

ト擂り鉢を打ちつけ割る。これより勝次郎、夏菊、袖助、有り合ひの道具を打ちつける。丈八、片附けて廻る。女形皆々。取押へる。この模様、さま〴〵あつて勝次郎、逃げ廻る。夏菊、押へる、袖助、丈八、取りさへながら、この人數皆々、せり合ひ殘らず奥へ入る。向うにて「仁木主計頭さま御入り」と呼ぶ。太鼓謠になり、向うより、仁木主計頭、長上下にて、近習附き出る。奥より細川左衛門正基、上下、大殿の拵らへ。熊本勘解由、上下、衣裳。横山大藏、前髪、上下にて小姓の拵らへ、印南志津摩、上下衣裳にて、小姓の拵らへ、正元の刀を持ち出る。眞金源次兵衛、同じく上

初演の絵番附

下にて附き出ろ。

正基　皆々、出迎へてよからう。

ト各々、並よく出迎ふ。

主計　これは細川どの、勘解由どの、いづれも。

正基　主計頭どのには、一別以來

勘解　お役目とあつて、御光駕の段

皆々　御苦勞千萬に存じまする。

主計　これは〳〵御挨拶。

正基　イザ先づ、これへ。

トまた太鼓、謠になり、二重舞臺へ通る。皆々、並よく並ぶ。鳴り物、打ち上げ

主計　この度、當今御位につかせられ、先年よりの式に任せ、鎌倉の武將より、拜賀の上使、役目を請けしは斯く申す主計頭。獻上の品は、御邊の重寶、雲龍の一軸、受取つて上洛せよと、これ以て武將の嚴命。然るところ先達て、一軸紛失の由。早速に上聞に達し、一軸詮議の爲二百日の日延べ願ひしところ、即ち、一軸差上げるまでいま一品、當家の重寶仁王三郎の刀、お預かりあるべき上意。故なく御承引あつて然るべう存じます。

正基　一軸詮議の日延べといひ、萬事主計頭どのゝ御心配大慶至極に存じまする。就中、一軸差上げるまで、仁王三郎の刀、差上げるの條、畏まり奉る。主計頭どのには、奥客の間へ御入り下され、麁酒一獻、差上げたら存じまする。

主計　然らば、萬事は後刻。

正基　イザ、主計頭どの。

主計　細川どの。

皆々　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、見附けの金襖、左右へ開く。奥座敷の模樣。主計頭、皆々に會釋して、靜々と入る。後に勘解由、大藏、殘る。

大藏　勘解由さま。

勘解　主計頭が入來あれば、兼ねての手筈、必らずぬかるな。

大藏　こなた樣には、大殿の御舍弟。比企谷のお屋敷に御分地を構へられ、折々參つて、御内意を蒙むる拙者でござれば、萬事につき、お心措きなう。

勘解　如何にも、其方が所存を見拔き、新參にありつかせしも、身共が計らひ。

大藏　お願ひに依つて、盜み出せし雲龍の一軸、必らず氣

取られぬやうに、イザ。

ト一軸を出す。

勘解　イヤ〳〵、主計頭が入來の今日、身が所持いたすは、石を抱いて淵に望むも同然。矢張り其方所持いたして。

大藏　然らば、お預かり申して居りませう。

ト懷中する。

勘解　何かにつけ、拔け目のなき其方、身が大望成就いたさば、取立てくれる。喜べ〳〵。

大藏　忝ない。もと身共は、九州の浪人、親どもの名は横山外記。先年、武者修業の折柄、闇討ちに討たれ、その敵を討たんと、心を盡すこの年月。

勘解　其方が親は、横山外記となつて、その附け覘ふ敵は何者。名はなんと。

大藏　されば、親人を討つて立退きし敵の名と申すは。

ト云はうとしてゐると、志津摩、ズッと出て

志津　勘解由さま、これにお入りでござりまするか。

ト兩人、恟りして

勘解　オヽ、志津摩か。

志津　對客の間へ、御入りあるやうと、殿樣の仰せ。大藏どのにも、御出席なされませう。

大藏　左樣仕らう。勘解由さま、萬事は後刻。

勘解　如何にも。ナニ志津摩、饗應の能役者、撿挍どもは、召寄せ置いたか。

志津　寶生權太夫、露崎撿挍、未明より相詰めさしてござりまする。

勘解　然らば出席いたさう。サア、大藏も參れ。

大藏　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、勘解由、大藏を連れ、奥へ入る。志津摩殘る。トこの唄をかりて、向うより乳母おきよ、出で來り、あたりを窺ひ

きよ　どうぞ志津摩さまに、お目にかゝりたいものぢや。

ト云ひながら、本舞臺へ來て、志津摩を見て

ヤア、若旦那。それにお出でなされまするか。

志津　そちや乳母のきよ、母樣の御病氣、お變りなさる事でもあつて、おぢやつたか。

きよ　イエ〳〵、左樣なのではござりませぬ。母御樣の御口上がござります。それゆゑ參りました。

志津　して、その御口上は。

きよ　お案じなさる事ぢやござりませぬ。何か、急にお話しなさらねばならぬ事がある程に、私しに參つて、お供

申せと、御口上でござります。
志津　ムウ、急なお話しとあれば、お目にかゝらずばなるまいが、陪臣者の來る事の叶はぬこの所へ、其方はどうして來やつた。
きよ　サア、私しも、四五日お目にかゝらず。幸ひよい折と存じ、ツイ、ウカ／＼爰まで參りましてござりまする。イヤ又、母御様のお案じなさるも御尤もかい。御幼少で親旦那様にお別れなされ、それより母御様の御艱難。この乳母までが同じやうに、肩と足引延ばすやうに思うて御成長。淺草の寺中、觀音院にゆかりあつて、預け置きしところ、當殿様の御目にとまり、お小姓に召し出され、その御縁に依つて、何不足なく、今では母御様も安樂に、當所根岸にお住居。不足なくお暮らしなさるるも、みな御慈悲深い、殿様の御高恩。必らず／＼、お忘れなさらぬがようござります。
志津　氣遣ひしやるな。その事は、よく心得て居る。それにつけても、お懷かしいは父上様。今程は、何國にお暮らしなさるやら、どうぞ／＼、お目にかゝりたいものぢやなア。
ト思ひ入れ。

きよ　これはしたり、また親旦那様の事仰しやりますか。いつぞや、羽州牧の林に於て、顏の皮を剝ぎ捨てし旅人の死骸。書附けを見れば、彼の懷中に、親旦那十內さまより遣はされし自筆の誓紙。親旦那十內さまが殺害なし、立退かれしに疑ひない。その意趣は知れねども、人を殺め、逃げ隱れする未練なる夫。それよりお行くへも尋ねられず、再びお歸りあつて、今は當所のお住居。この事が家中へ知れては、未練者の悴よと、世の人の口、重ねてお噂、御無用になされませえ。
志津　例へ卑怯な父上と、笑はゞ笑へ、未だこの世にましまさば、孝行が盡したいわいなう。
きよ　お道理ぢや／＼。お顏さへ御存じない親旦那ぢやもの、お逢ひなされたいも御尤も。子は親を慕ふ心の切なるに、親御は、空吹く風の便りも知れぬといふは、ほんに因果な。
　トちやつと泣き落す。また氣を替へ
ホヽヽヽ、わたしとした事が、よしない悔み。長居は恐れ。人目の憚り思へば、今日は觀音様の御緣日。お前様の現世、母御さまの御病氣平癒祈りの爲、御經讀誦いたしませう。

ト立つて行かうとする。志津摩、ちよつと留めて

志津　父上にお別れなされてより、母様の御丹精、其方の世話。世が世であらば御養生も、お心に任せんもの、昔に變る今の御苦勞。

ト悄れて云ふ。おきよもちよつと泣き、また氣を替へ

きよ　ドリヤ、お下がりをお待ち致しませうか。

ト唄になり、おきよ、こなしあつて、下座へ入る。この時、奥より袖助出て、志津摩を見て、こなしあり、志津摩、思案して居る。奥にて

丈八　志津摩どの〳〵。志津摩どのは、どれにござる。

ト呼ぶ。袖助、うろたへ、上手好みの中へ隠れる。丈八、出て

オヽ、志津摩どの、これに居さつしやるか。

志津　左様でござる。

丈八　只今、大殿の御前は、御酒宴最中。夜に入つては、薄茶をお乞ひなされう。お閨ひの掛け物も仕替へて、お花は其許に入れさせいと、御前よりの仰せ出でござる。

志津　成る程、その儀は承知いたして居ります。

ト奥へ行かうとする。

丈八　イヤ、志津摩どの、待つたしやい。

志津　まだなんぞ御用でござりますか。

ト序の舞になり、丈八、こなしあつて

丈八　ある段ではござらぬ。志津摩どの、貴殿、お閨ひの花は、何にせうと思し召す。

志津　されば、お閨ひへ御入り遊ばさるゝは、どうで夜分にも及びませう。杜若など、灯火に寫りがよからうと存じます。

丈八　成る程、杜若、ようござらう。其許のお手に觸れて、活けらるゝ杜若は、仕合せな杜若でござる。志津摩どの、どうぢやぞいの、どうでござる。日頃から目顔で知らせても、素知らぬ顔、思ひ焦れて拙者が杜若は、劍のやうになつてござる。さるに依つて、毎晩々々、杜若でござる。つい、ちよこ〳〵と叶へては下さるまいか。

ト袖を持つて寄り添ふ。袖助、小蔭より、得心するかと、あせる。

志津　イヤ、丈八どの、見ますれば、御酒興とも見えず、お放しなされい。

丈八　イヤ、放しませぬ。其許は、大殿のお小姓なれど、御寢所のお伽にも出さつしやれぬは、さすれば御前の御

目を掠めると申すでもござらぬ。得心さへ召さるれば、拙者は兄分、其許は弟分となつて、爪の皮の苦勞はさせぬ。アレ〳〵、奧は饗應のお能なり、こんな首尾は又とござるまい。引手になびいてくれさつしやい。

ト いろ〳〵じなつく。志津摩、よろしく突き退け

志津　若輩者と侮つて、先程からの法外、達てみだらな事をも仰せらるゝと、大殿樣へ言上仕りますぞ。

丈八　云ひたくば云はつしやい。其許ゆゑなら、首が飛んでも、いとひは仕らぬ。情ぢやわいの。慈悲ぢやわいの。

ト 抱きつく。

志津　ハテサテ、しつこい。

ト 突き飛ばす。

丈八　ちよつと口中のあしらひ。

ト また抱きつく。志津摩、嫌がる。この時、丈八、鍵を落す。ソッと袖助取つて隱れる。奧より

近習　丈八どの〳〵。

ト 近習、呼びに出る。志津摩、丈八を突きのける。丈八、取り違へ、近習に飛びかゝらうとして恟り

丈八　ヤア、其許は。

近習　丈八どの。

丈八　ても、ひどい目にあうた。

近習　大殿樣が召します。サア〳〵、ござりませ。

丈八　イヤ、拙者は、志津摩どのに。

近習　ハテサテ、ござりませと云ふのに。

丈八　エヽ、いま〳〵しい。

ト 丈八、ムッとして入る。近習の侍ひ、引ッ張つて入る。

志津　よしない事に暇取つて。ドレ、お圍ひの花を入れて置かうか。

ト 行かうとする。此うち、袖助、庭の杜若を手折りて、持ち出て來り

袖助　お花、差上げませう。

ト 少し顏を外けて、花を差出す。この時、序の舞、打ちあがる。和らかなる合ひ方になり、志津摩、顏を見ようとする。袖助、身を外けながら、入れ替る。志津摩、こなしあつて、花を取上げ見て

志津　水際清きこの一本。

袖助　雨に日に、月に色あり杜若。

志津　雨に日に、月に色あり杜若。

ト吟じ返し、こなしあつて

折柄の風情といひ、しをらしい即興。して、其方は。

袖助　昨日罷り出ました、新参の下郎でござります。

ト云ふうち、袖助が顔をつく／＼と見て

志津　どうやら、其方は。

ト思ひ出す事あつて

ほんにさうぢや。昨日、淺草の門前で、知る人になつた御浪人でござるか。

袖助　御意の通りでござります。

志津　その御浪人が、心得ぬその姿。して、この樣子は。

袖助　成る程、御不審は御尤もに存じまする。計らず、お屋敷へ御奉公に出ました、その仔細と申すは、面目ないが、侍ひにあるまじき、色情に迷ひまして。

志津　なんと仰せらるゝ。

ト思ひ入れ。

袖助　志津摩さま、夜前、慾助どのを賴みまして、差上げし一品、御覽下されしか。

ト志津摩、こなしあつて

志津　ムウ。すりや、昨夜、某へ渡せし艶書に、大高主殿と記せしは。

ト袖助を見て、こなし

袖助　面目次第もござりませぬ。

志津　ハテナア。

トこなし。

袖助　近頃、面目次第もないと申さうか、面押し出して申し出すも、お恥かしいお物語り、淺草に於てお出合ひ申し、御容顏を一目見るより、てもさても、美しいお若衆と、ぞつこん浸み込む心の惡念、及ばぬ事と存ずれども、せめては逢ひ見る夜すがらもあらうかと、御家來に聞き合せば、細川家のお小姓。浪人の氣散じは、その場で直ぐに歩中間にありつき、お屋敷へ參るより、命は露塵、顯はれたら百年目と、執心のあり丈を、拙ない自筆に知らせの艶書。志津摩どの、情といふ事御存じあらば、添臥しは叶はずとも、せめてお杯なりとも頂きまして、それを思ひ出に、フツツリと思ひ切りまするでござらうサア、なるならぬの御返事、この場で承りたう存じまする。

ト此うち、志津摩、いろ／＼思ひ入れ、思案のこなし

志津　不束な某を、さほどまでに御執心。身に取つて、斯樣な喜はしい儀はござりませぬ。

嘉永元年八月中村座上演（草双紙挿絵）

岩井条三郎の志津摩　四世中村歌右衛門の主殿

袖助　すりや、お聞入れ下されて。
志津　イヤ、御返事はなりませぬ。不義一統を忌めるは、
男女とても變らぬ掟。斯樣な事は、御前のお耳に達しま
しては、其許、拙者、お互ひに身の上でござりまする。
ト袂より文を出して
其許より遣はされた文、人目に立つては如何と存じ、其
まゝに所持いたした。重ねて斯樣な儀は、なされて下さ
れぬがようござる。
ト文を袖助へ返す。
袖助　志津摩どの、そりや、こなた、氣強いと申すもので
ござるぞや。
志津　潁川の瀧に、耳を洗ひし許由が例し。この杜若も、
水際が濁れば、お花にはなりますまい。
ト花を捨て、行かうとする。袖助、ちよつと留める。
志津摩、品よく振り切り
以後は、キツとお嗜なみなされサ。
ト唄になり、志津摩、杜若の花をもぎ、文もろともに
投げ捨て、ツイと奥へ入る。袖助、うつとりと見送り、
手を組み思案して
袖助　斯樣にまで心を認し、傳手を求めて云ひ寄るまでは
劍の山を渡るやうに、百千萬の思ひを籠めたこの艶書・
詠めもやらず戻すとは、餘り氣強いお若衆ぢやなア。
ト思ひ入れあつて、氣を替へ
イヤ／＼、恨み云ふは、みな此方が無分別、お大名の家
に、時めくお小姓と、見る影もない浪人。モウ／＼、フ
ツツリと、思ふまい／＼。これぎり／＼。
ト氣を替へようと、落ちたる花を取上げて
濁りし花を捨てたる一本、開く花形を取り捨て、莟の色
を殘せし心は、ムウ。
ト思案して、捨て置きし文を取上げ
色ある筆は仇にせじと、心ありてか、もしや。
ト文の封じ目へ、氣を附けて見て
こりや、封が切つてある。ハテ、
ト思ひ入れあつて、封じ紙を捨て、小口を開いて見て
我が手蹟と違ふゆゑ。驚ろきて奥を見やり、また文を
見て
「嬉しき御玉章、繰り返し／＼讀み入り候ふ、殊に拙な
き我が身へ、淺からぬ御志しの數々、稻舟のいなには
あらぬ筆に云はせ、返り事申し上げ候ふ」
ト讀みさし、ちよつと思案して

繋舟のいなにはあらぬ……いなにはあらぬ。

ト繰り返し〳〵また讀む。

「我が身にも深き願ひあつて、淺草觀世音へ祈願の折しも、殿樣の御代參を蒙むり、彼所の靈場にて御面談に及び、斯く玉章にあづかりし事、偏へに御佛の御しめしと一方ならず嬉しく存じ上げ候ふ。今宵、黄昏を合圖に、我が部屋へ御忍ばせ候はゞ、常磐の松の千代かけて、添臥し致したく、くれ〴〵も待ち上げ候ふ。大高主殿どのへ、印南志津摩——……こりやマア、夢ではないか。これと云ふも觀世音の御引合せ、エヽ〳〵、有り難い〳〵。

ト向うを遙拜すると、下座より慾助、中間の形にて出る。

慾助　袖助、どうだ、御返事があつたか。

ト脊中を叩く。袖助、悔りして、ちやつと文を隱し

袖助　お頭、喜んで下され、アノお返事が。

慾助　あつたか〳〵。

ト袖助、ちよつと思案して

袖助　イヤ、あつたはあつたけれど、亂騷ぎぢや。

慾助　なんといふ。御返事は亂騷ぎぢや。面妖な、おぬしの狀を渡した時は、どうかかうか好い返事がありさうにあつたが、どうでも、雲行きが變つたと見えるわえ。

袖助　變つた段か、いま志津摩とのがこれへ見えて、身共を見ると、あの可愛らしい目で、グツと睨みつけさつしやれた。

慾助　ホイ。して、なんと云はれた。

袖助　あのやうな文を寄越すとは、不行儀千萬な。其方は其方とも思はうが、取次ぎした慾助が不屆き者ぢや。

慾助　ヤア、

ト驚ろく思ひ入れ。

袖助　重ねてみだらな事があると、慾助も其方も命がないぞ。

慾助　ヤア〳〵〳〵。

ト思ひ入れ。

袖助　以來をキツと嗜なんだがよからうと、云ひ捨てにして、襖をサラリ。ズツと入つて、後バツタリ。イヤモウ、亂騷ぎぢや。

慾助　それはとんだ事だ。狀文の世話をするも、世話賃が欲しさ。我が大望も水の泡となつたか。アヽラ、口惜しや、金欲しやなア。

ト思ひ入れ。

袖助　ハヽヽ。イヤ、氣遣ひせぬがよい。斯う頼むから
は無駄骨は折らさぬ。
　ト胴亂より、一分一つ出し
寐酒を一杯飲まつしやい。
　ト慾助へ遣る。慾助、嬉しき思ひ入れ。
慾助　ヤア、一角仙人、御入來か。
袖助　この事がお上へ知れると、御身も身共も命がないぞ。
必らず共に、他言はならぬぞ〳〵。
慾助　それを云つて堪るものか。イヤ袖助、お身はお小姓
を念掛けろ。おらは又、お定まりの表門、さるお腰元
を。
袖助　ヤア、。
　ト思ひ入れ。
慾助　コリヤ、必らず云ふなよ。
袖助　おのれも云ふなよ。
慾助　オヽサ、戀をする身は相互ひだ。ハヽヽ。袖助、
お掃除をしまつたら、われも休め。ドリヤ、部屋へ行か
うか。
　ト唄になり、慾助、下座へ入る。袖助、見送り、落ち
つきしこなしにて、隠せし文を出して又見る。

袖助　「今宵黄昏を合圖に、我が部屋へ御忍ばせ……」
　ト讀み、上の方を見送り
志津摩どのゝ部屋は、あのお庭續き。
　トこの時、奥にて
大勢　サア〳〵、露崎どの、一曲始めさつしやい〳〵。
　ト聲すると、暮れ六ツの鐘鳴る。
袖助　ありや暮れ六ツ。幸ひ〳〵。
　トこなしあつて、頰冠りすると、獨吟、めりやすにな
ると
〽世の中に、心の外に又一つ、道の曇りや、泡雪の、消
える思ひは積りて夜半の、かねて頼みし文の傳手、かへ
り仰せの一言を、待つて明かせば明け遠き、空に初音の
山時鳥、さらに嬉しき合圖の扉。
　トこの唄のうち、袖助、榑へ出し、立ち兼ねるこなし。
それより心を落ちつけ、上の方へ歩みかける。唄のう
ち、チョン〳〵のキッカケにて、西へ引き道具。袖助
は上へ歩み、屋體は西へ引き上げ、東より杜若の澤、
八ツ橋の體。袖助、八ツ橋を渡る時、綺麗なる大和葺
き、二間ばかりの屋體出る。この上の方、妻戸、緣先に、
手水鉢、下草のあしらひ、雪見形の燈籠、枝折り戸あ

り、正面、屋臺の前側、障子を立て、取り付けよろしく、道具納まる。ト眞中の障子を明け、志津摩、袴を取りし形にて、手燭持ち、庭先へ窺ふ。袖助、ちよつと隠れる。志津摩、こなしあつて

志津　宵の妻戸に音づるゝは、その人と思ひの外、さては水鷄の動くにてありしか。

ト手燭を下に置き、薄團の上へ坐り、こなしあつて寢る。袖助、此うち、こなしあつて、あたりを窺ひながら、椽に上がり

袖助　志津摩どの〳〵。

ト小聲にて、寢たる志津摩へこなし。志津摩、その手を取つて、引き寄せる。袖助、片手にて障子をしめる。

〽叩くは誰れぞや、いつも來る、水鷄のはしに夢さへも、そゞろ枕の仇ならで、その情こそ淺からぬ。淺澤もとのかほよ花、手折りて濡るゝ緣ぞと。

トこの唄のうち、下座より腰元卯の葉、駒下駄を履き手燭を持ち出て、あたりを見て、小石を拾ひ、バラバラと打つ。下の方より慾助、頰冠りして出る。

慾助　いつもの合圖。

トそろ〳〵側へ寄り

卯の　待ち兼ねたわいなう。

ト手を持つて、引き寄せる。

慾助　不義はお家の堅い御法度。

卯の　例へ顯はれ、手討ちに會ふとも、お前ゆゑならいとひはしませぬ。

慾助　マア、それ程までに。

卯の　ござんせ。

ト慾助を連れ、下座へ入る。

〽誓ひ結ぶの神ならで、粹な菩薩の導きに、つい假初めの中垣も、解けて契りの男結び。

ト、チヤンと唄切れると、障子、左右へ開くと、内に袖助、志津摩、少し隔てゝ居り、左右にて硯を扣へ、起證を書いて居る。常の合ひ方に變る。二人、一度に書き終り、小柄にて小指を突き、血判をし、こなしあつて

袖助　約束變ぜぬといふ、誓ひの起證。

志津　私しとても。

ト兩人、起證を取交し、懐中して

主殿どの、只今お話し申しました私しが身の上。父の名

は、印南十内、人を殺めて國元を立退きましたは、非道とも、未練とも、お下げすみの段は、お恥かしう存じますれど、親を庇ふは子たるの道。父を敵と覘ふ者あらば、親子は一體、我れこそは十内が悴と名乘つて、父の代りに潔よう討たるゝ所存。さある時は、朝夕附き添ふ母人の御歎き、父上の安否も聞かず、如何はせんと、とつおいつ。其許の御本名、大高主殿と聞きしより、さては噂に聞きし神影流の達人、頼みにするはこの人ならで外になしと、斯く兄弟の結び、私しが親々は、こなたの爲にも親同然。何卒、父の行くへを尋ね、母さま諸とも朝夕の、お宮仕へを頼まん爲。主殿どの、必らずともに、お頼み申しまするぞや。

袖助　御心底の程、察し入りましてござる。未だお年若の其許すら、親御への孝心。ア、、某は罰當り。去年までは、鎌倉の諸侯に仕官の身の上、若氣の放埒、フト吉原へ通ひ初め、中近江屋の大淀と申す遊君に、引かれぬ義理に逢ふ夜の數も度重なり、身請けして女が親里、駒込邊に預け置きしを、朋輩の讒言に依つて、遂に御主人のお暇を蒙むり、彼の女が方に、二月餘り暮らすうち、假初めの病より、女は空しくなり、浮世の夢も覺め果てて、身の放埒を悔むにつけても、今一度歸參の願ひ。淺草の觀音へ祈願を籠め、毎日の參籠。然るに夜前、御家來の狼藉より、フトお顔を見ますれば。男女と變れども、過ぎ去りし大淀に生寫し。これ程に似るものかと、又もや兆す煩惱の、たゞ止み難きは迷ひの一つ。その念慮の通じてや、斯くお情にあづかれば、一命は君への賜物。御親父のお行くへ尋ね、母御とても、見捨ては致さぬ。この儀に於ては、ちつともお案じなされぬがよい。

志津　主殿どの、エ、、忝ない。

ト思ひ入れあり

袖助　イヤ、そのお禮は身共より。

志津　イヤ、拙者が。

袖助　イヤ、某が。

ト手を取り合つて

志津　父はこの世にありながら、孤兒同然。

袖助　たゞ假初めの契りより、

志津　弟と呼ばれ

袖助　兄と呼ばれ

志津　深い約束。

袖助　宿世の緣で

両人　あつたよなア。

ト こなしあると、近習が奥にて

呼び　志津摩さま、御前のお召しでござるぞ。志津摩どの志津摩どの。

志津　ハツ〳〵。只今それへ。

ト 袖助、うろたへる。志津摩、囁き、側の衣裳櫃を明けて、袖助を忍ばせ、蓋をする。この時、袂折り門より、丈八、窺ひ見る。志津摩、急いで袴を着けながら、フツと丈八と顔見合せる途端に、雪洞を吹き消す。これをキツカケに、カチ〳〵〳〵と、拍子幕。

ト 幕の内、舞の切れ、ツナギ早幕。引返す。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。向う金襖、上の方、折り廻し、塗り骨障子屋體。橋がゝりに中門。後へ寄せて高塀。所々に銀の燭臺數多灯し、大座敷の體爰に仁木主計頭上に居り、杯を受け持ち居る。小姓、酌に附き添ふ。この間に左衛門正元並び、末座に熊本勘解由、田上丈八、よき所に居る。後に近習の侍ひ、居並ぶ。舞臺に志津摩、小姓の拵らへ、前の通りにて、上下にて扇を持ち、舞ひ終りし見得。

春日龍神の謡の切れにて、幕明く。

ト 近習、舞を褒める。

主計　なか〳〵一興であつた。杯を遣はさう。これへこれへ。

正基　志津摩、頂戴仕れ。

志津　ハツ。

ト 衣紋を直す事あつて、平伏する。主計頭、杯を遣る。この時、侍ひ一人出て

侍ひ　申し上げます。江州佐々木家のお使者とあつて、殿様へ御直談との願ひ。通しませうか、如何に計らひませう。

正基　ムウ、内縁ある佐々木家の使者。後刻對面いたさう、暫らく次の間に扣へさせい。

主計　イヤ、一家内とござれば苦しかるまい。これにて對面いさされたがよい。

勘解　佐々木の使者、これへ通せ。

侍ひ　ハツ。御使者、この方へお通りなされい。

角左　畏まつてござる。

ト 向うより、眞柄角左衛門、上下、大小にて出て來る、勘解由、平舞臺へ坐る。志津摩、末座へ行く。角左衛

門、花道へ扣へる。

正基　左京之進どのゝ使者とあれば苦しうない。これへこれへ。

角左　ハッ。主人の名代でござれば、御同席御免下されい。

ト二重舞臺、正元が次に坐る。小姓、主計頭が側へ、煙草盆を持ち行く。

勘解　兄左衞門正基が悴、身が爲には甥の勝次郎、佐々木の息女と先達て、緣組みの取組み、輿入れを催促の使者と、いふやうな事でござらう。

角左　如何にも。拙者ことは、佐々木家の家來、眞柄角左衞門と申す者。當細川家と主人の息女、御緣組みを取組みしは、假初めならぬ武將よりの御指圖。さるによつて主人左京之進どのより、輿入れの儀を催促あれど、兎や角と日限延引。べん／＼と月日を延すは、御所存ばしあつての儀か、御返答承りて歸れよと、主人の口上。使者の趣き、段々斯くの通りでござりまする。

ト内より

源次　イヤ、その御返答は、拙者が仕りませう。

トばた／＼にて、眞金源次兵衞、上の障子屋體より、勝次郎、夏菊を引き立て出る。

勘解　眞金源次兵衞、その女は。

源次　夏菊と申す吉原の傾城。賣女を引込んで、館の内は揚屋同然。云ひ號けの緣を嫌つたる、正體は斯くの通り。

勝次　イヤ、全く某は、云ひ號けの緣邊を。

夏菊　なんのお嫌ひなされうぞいなア。

源次　嫌はぬ者が、なぜ傾城を請け出して、屋敷へ引込ましやつた。

勝次　サ、それは。

源次　云ひ譯があるか。

勝次　サア。

兩人　サア／＼／＼。

ト勝次郎、思ひ入れ。源次兵衞、こなし。

源次　叶はぬ所ぢや、御前に於て、放埒の段々、何もかも白狀々々。

角左　正基さま。御子息の放埒、姫を嫌はれ、主人左京之進が一分、相立たうと思し召すか。使者に參つた身共が目前、誤まりなき御政道が承りたう存ずる。

勘解　傾城に鼻毛をよまれ、身請けして館へ入れしは、云

ひ號けの姫を嫌ふも同然。武將へ對して云ひ譯あるまい。使者の口通りで、首を討つが潔白の云ひ譯。源次兵衛、早く／＼。

源次　心得ました。

ト下げ緒を取り、繩搦きして

若殿、腕廻さつしやい。

ト立ちかゝる。志津摩、末座より心遣ひあるべし。

正基　源次兵衛、待て。

源次　イヤ、伯父君の御下知でござります。

正基　例へ勘解由が下知にもせよ、繩かけるは僻事であらう。

源次　イヤ、科人同然の若殿、繩を掛けるがお家の潔白。

正基　イヤ、科はない。

源次　科はないとは。

正基　傾城の愛に溺れ、云ひ號けの姫を離別せうと、倅勝次郎が申したか。

源次　イヤ、全く。

正基　諸侯には、八人は許しの本文。例へ傾城を五人十人召抱へしとて、さのみ咎めには及ばぬ事。源次兵衛、批判があらうか。

トきつと云ふ。

批判がなくば、扣へて居れサ。

ト源次兵衛、こなし

源次　扣へて居りまする。

角左　して、此方の姫君、お輿入れの儀は、如何召さるゝ。

吉日良辰を選み、通達いたすでござらう。

主計　正基どの、先刻申せし仁王三郎の刀、雲龍の一軸、差上げらるゝまで、將軍家へお預けの旨、御承引の上は某、受取り立歸るでござらう。

正基　承知の上は違背なく、差上げまするでござらう。倅先達てより、其方へ預け置きたる仁王三郎の刀、主計頭どのへ差上げい。

勝次　畏まつてござりまする。即ち、これに帶し居りまする。

ト恭々しく、主計頭が前へ持ち行く。主計頭、受取る。

主斗　正基どの、失禮ながら、内見仕るでござらう。

正基　御苦勞ながら。

ト主計頭、こなしあつて、刀を改め見る事よろしくあつて、不審なる體にて

主計　勝次郎どの、いよ〳〵これが、お家の重寳、仁王三郎の一腰でござるかな。

勝次　成る程、仁王三郎に相違ござりませぬ。

正基　主計頭どの、仁王三郎の刀が、何とか致してござるか。

主計　さればサ、某、兼ねて聞き知り罷りあるに、仁王三郎の正銘は、直ぐ燒刃にして、物打ちより切尖までの金色、至つて鋭く、これ、正銘の目利かと存ずる。正銘かは存ぜねども、燒刃金色、雲泥の相違。正基どの、一度お改め下されい。

ト差出す。正基、取つて改め見て、驚ろき

正基　如何にも主計頭どのゝお目利の通り、こりやコレ、眞赤な似物。悴、コリヤ、如何いたした。仔細を申せ。どうぢや〳〵。

ト急いて云ふ。勝次郎、合點のゆかぬこなし。

勝次　主計頭さまといひ、父上のお詞、何とも合點が參りませぬ。何にもせよ。

ト刀を取上げ、改め見て、悄りして

如何にも、これは仁王三郎の刀ではござりませぬ。

正基　ヤ、、なんと。

勝次　大切の刀と存じ、晝夜帶して居りますれば、斯く似せ物になつてあらう筈がござりませぬ。

正基　さほど大切に存じ、晝夜帶し居りながら、何ゆゑに紛失いたした。武士の家に生れながら、腰刀を奪はるゝといふ、うつけ者があらうと思ふか。云ひ譯いたす程、その身の恥辱といふ所へ、心が附かぬか。うろたへ者めが。主計頭どのといひ、佐々木家の使者の目前、身が手にかける。覺悟いたせ。

ト刀に手をかける。

主計　待つた、正基どの、御立腹は尤も至極いたしてござるが、こりや全く、御子息の御料簡違ひでござらう。仰せの通り、武士が腰を奪はれしとあつては、自分の恥辱第一、細川の汚名となる儀。察するところ、日頃御所持と存ぜられしは、存じ違ひ。大切の刀ゆゑ、御家來のうち、腹心の者へ預け置かれしと申すやうな儀でもござらう。なんと勝次郎どの、さうでござるか。さうであらう、さうであらう。ハテ、お若いに似合はぬ、物覺えの悪い勝次郎どの。こりや、餘程、お氣力が疲れてあると見えまする。ハ、、、。

トこなし。勝次郎、ザツと俯向いて居る。正基もこな

し。

勘解　イヽヤ、勝次郎が物覺えは、ずんとようござる。併し、斯ういふ場合になつては、馬鹿げて見せにやなるまい。某は血筋、口外いたすも我れながら面目もない。丈八、有りの儘にお話し申せ。

丈八　ハツ、委細畏まつてござりますれども、何とやら、申し上げるも如何にござりまする。この儀ばかりは、御容赦にあづかりたう存じまする。

正基　只今勘解由が一言といひ、何さま、仔細のあるべきやうに相聞える。何事にもあれ、苦しうない。有やうに申し上げい。

丈八　すりや、どうござつても。ホイ。

　ト困る思ひ入れして

何を申すも主命。申し上げぬも不忠の至り。然らば、是非なく言上仕るでござりませう。

正基　サヽ、早う〳〵。

　ト急いて云ふ。

丈八　ハツ、若殿、さて〳〵お氣の毒ながら、只今お聞き及びの通り、この儀に於て、口外いたすまいと存じたれども、大殿の御意、主命でござれば是非に及ばず、只今、これにて申し上げまする。必らずお恨み下されまするな……ハツ、主計頭さま、大殿樣へ申し上げまする。若殿のお預かりの仁王三郎は、傾城の身の代に、遣はされましてござります。

正基　ヤヽヽ、なんと。

　ト驚ろきし思ひ入れ。

勝次　コリヤ〳〵丈八、そりや何を申す。廓の者へ刀を預けし時は、其方が進めしゆゑ。殊に金子を渡し、刀は其の方が取返し、某に與へたではないか。

丈八　申し〳〵若殿、そりや何を仰せられまする。廓へお刀を預けられしは、拙者がお進め申したと仰しやりますが、これは又、迷惑千萬。その上、お傾城の身の代を遣はし、刀は其方へ請け戻したと仰せられまするか。

勝次　なんと、覺えがあらうがな。

丈八　存じませぬ。

勝次　ヤ、なんと。

　ト思ひ入れ。

丈八　神以て存じませぬ。よし存じたところが、三百兩と申す身の代、拙者がどうして才覺いたさう。但し、あなたがその金子、お渡しなされましたか。

勝次　イヽヤ、その金子は、某が手に渡しはせねど、そりや、其方が彼の金子のうちを、三百兩遣はしてくれたではないか。

丈八　若殿樣、彼のとはな。

勝次　サア、彼のとは。

丈八　當年は庚申、かのとは來年でござりまする。ハヽヽハヽ、主計頭さまのお目鏡通り、物覺えの惡い。ムヽヽハヽヽヽ。

勝次　エヽ、みすく其方が計らうて置きながら、これぞといふ證據たければ、云ひ譯は立たぬか。

ト口惜しきこなし。この時、向うより侍ひ一人、走り出て

侍ひ　ハツ、申し上げまする。淺草普門院の住僧。何かお訴への趣きあるよし、扣へ居りまする。通しませうか。

正基　如何計らひませう。

侍ひ　ハツ。これへと申せ。

ト引返す。入れ替つて、普門院の住僧、千兩箱を擔がせ、花道に扣へる。

丈八　普門院の住僧。お訴への趣き、早く申し上げられい。

普門　ハツ、畏れ乍ら申し上げまする。先達て、將軍家よりの上意とあつて、當寺造營金一千兩、昨日御寄附遊ばされ候ふところ、改め見まするに、石瓦を以て、一千兩の目方を合せござりますゆゑ、早速言上仕りまする。イザ、御覽下されませう。

ト侍ひ、千兩箱を舞臺へ直し、元の所へ扣へる。各々立ち寄り改め見て

丈八　ヤアく、こりや、コレ、殘らず石と瓦。こりやどうぢや。

勘解　これで樣子が相解つた。傾城の身の代三百兩も、この金子のうちであらう。一災起れば二災起ると、ハテ、笑止千萬。ムヽハヽヽヽ。差當つて、普門院の迷惑ならん。追つて此方より沙汰いたさう。此まゝ置いて立歸れ。

普門　よろしう願ひ上げまする。

ト引返して入る。

勘解　サア、勝次郎、造營金寄附の役目は、卽ち其方。金子の云ひ譯あるか。サア、どうだ。

正基　假初めならぬ、將軍家よりの嚴命を以て、寄附する

ところの一千兩の金、私しに遣ひ果して相濟まうと思ふか。それのみならず、刀の紛失。生得、汝が愚才なるを見拔き、斯く相計らふ佞人ありと存ずれど、證據なければその身の科。今さら遁がるゝ道はないぞよ。うろたへ者めが。金子は兎もあれ、刀の紛失。差當つての申し譯、主計頭どのへ武士の立つべきか。思案いたせ。

ト少し愁ひのこなしあつて云ふ。勝次郎、畏れ入りたこなしにて、キッと思案を極め

勝次　申し譯ありながら、證據なければ詮なき事。主計頭さまへの申し譯。さうぢや。

夏菊　ア、申し、マア、待つて下さんせいなア。

ト留めるを振り切り、また死なうとする。この時、志津摩、ツカ／＼と寄つて、その手を留め

志津　勝次郎さま、今お果てなされては、却つて武將のお咎めを蒙むる道理。短慮功をなさずと申せば、急く場所ではござりますまい。先づ／＼お待ちなされませう。

勘解　待て志津摩、勝次郎が申し譯の切腹を咎め、紛失の仁王三郎の刀が、いま爰へ出るか。

志津　イヤサ、その儀は。

勘解　但し、刀紛失の科人が、外にあるか。若輩者の差出る所でない、扣へて居らうぞ。

ト此うち、志津摩、キッと思ひ入れあつて

志津　如何にも、仁王三郎のお刀、紛失させし科人は、外にござりまする。

勘解　ナニ、科人が外にあるとは。

志津　私しでござりまする。

勘解　ヤ、なんと。

勝次　ア、コレ／＼、志津摩、そりや、何を云ふぞいやい。

ト云ふを打消し

志津　イヤ／＼、大殿樣より、お預かりしあなた樣なれど、即ち、お刀勤番仰せ付けられしは、斯く申す印南志津摩。紛失させし誤まりは、私しに相違ござりませぬ。

勝次　でも、其方は。

志津　ハテ、斯く露顯の上は、何事も仰せられますな。御前には御大切の御身、假初めならぬお刀の紛失、御身に引請けられ下さる御恩、有り難うはござりますれど、奪ひ取られし私しが誤まり、必らず御いたはりは御無用に存じまする。

トいろ／＼呑み込ます事よろしくある。

勘解 ムウ、すりや、いよ〳〵刀紛失させし科人は、志津摩、其方とな。
志津 御意の通りでござりまする。
源丈 志津摩どの、して、お刀紛失の申し譯がござるか。
志津 如何にも、その申し譯は、只今これにて仕ります る。殿樣、御免下されませう。
ト腹を切らうとする。
主計 待て、志津摩とやら。そちやなぜ、切腹いたす。
志津 お刀紛失させし申し譯。
主計 イヤ、そりや云ひ譯にはなるまい。
志津 とは又、なぜでござりまするな。
主計 さればサ、いま其方が、勝次郎どのへの敎訓に、短慮は功をなさずとある。其方とても、いま切腹して、何者が功をなし、紛失の刀詮議仕出すべきや。
志津 サ、その儀は。
主計 才子ながらも、流石は若人、料簡が若い〳〵。
勘解 イヤ〳〵、主計頭どの、大切なる刀、紛失させし志津摩、生け置いても、政道が立ちまするか。
主計 ずんど立ちます。
勘解 とは又、どうして。

主計 今あの者が腹切つたとて、紛失の刀が出るといふにもあるまい。ぢやに依つて、その命を全うして、再び詮議仕出すが忠義の一つ。その身の大功。
志津 すりや、只今の死を止まり。
主計 粉骨細心、日を追つて詮議いたすが大功ならん。いま死するは誤まりであらうがな。
志津 重ね〳〵誤まり入り奉つてござりまする。
勘解 して、刀延引の申し譯は。
主計 そりや、主計頭が胸にござる。
勘解 すりや、其許樣の。
主計 如何にも。
勘解 ハテ、御深切な儀でござるな。
丈八 それはそれでも相濟まうが、志津摩どのには、大それた科がござる。
主計 ヤ、なんと。
丈八 いづれも、その品これへ。
ト向う、揚げ幕にて
侍ひ 心得ました。
ト袴形侍ひ兩人、口幕の小袖櫃を荷ひ、本舞臺、よき所へ直す。志津摩、驚ろき、それと寄らうとする。

丈八　丈八、凹てゝ
　大殿樣へ申し上げまする。志津摩が部屋に直せし小袖櫃に、忍び居る曲者、其まゝ持參いさせてござりまする。
志津　待った。この小袖櫃、拙者が所持、御不審うける覺えはござりませぬ。
丈八　胡亂にたくば擒以て、改めるがこの場の潔白。
志津　サア、その儀は。
丈八　但し、胡亂か。
志津　サア。
志丈　サア〱〱。
勸解　丈八、改めい。
丈八　畏まりました。ソレ、源次兵衞。
源次　心得ました……曲者、出居らう。
　ト蓋を明ける。丈八、中より袖助を引き出す。
丈八　さてこそ曲者。
　ト眞中へ引据ゑる。袖助、面目なきこなし。志津摩、ハッと差俯向く。皆々こなし。主計頭、袖助を見て
主計　其方は。
袖助　以前の御主人か。ハッ。

　ト赤面のこなし。志津摩、ハッと差俯向く。皆々、こなし。
丈八　なんと、いづれも御覽じたか。志津摩どのゝ小袖といふは、この豪なし、釘貫の一つ紋、志津摩どの、味をやらつしやるの。身共が日頃から申す事を聞き入れないのも道理。人には報いがあるぞや。下郎、わりや、何ゆゑ志津摩どのゝ部屋に忍び居つた。眞直ぐに吐かせ。
袖助　ハッ。
　ト俯向く。
正基　主計頭どの、この下郎、御存じでござるかな。
主計　去年、暇を遣はせし大高主殿と申す者。神影流の奥儀を極めし武術の達人、日の本廣しと申せども、かほどの者も、又あるまじと存じ、この度の上洛にも、召し連れんと存ぜしところ、身持ち放埒。これが彼の智者の一失、家中の掟立ち難く存ずるゆゑ、不便ながら勘當仕つてござる。
勸解　サア下郎、云ひ譯なくば、不義の大罪、志津摩もろとも、それへ直れ。
　ト袖助、こなしあつて
袖助　この期に及び、未練なる申し譯は仕らぬ。志津摩ど

の丶色香に迷ひ、寢所に忍び込みしは、拙者が一存なれば、志津摩どのゝ心は潔白。拙者ばかりを如何やうとも、御成敗にかけられませう。

志津　イヤ〳〵、不義云ひかけしはこの志津摩。こなたには、御存じない事。最前も頼みました通り、この身は死ぬると兼ねての覺悟。こなたには長らへて、後にまします母人樣や、また父上の御先途を見屆け下されい。大殿樣のお目を掠めし申し譯は、末來から仕りまする。不義云ひかけたは、この志津摩、私しばかりをお仕置に。

袖助　イヤ、科人は拙者め。

志津　イヤ、私し。

袖助　イヤ〳〵、拙者を

志津　御成敗に仰せつけ下されませう。

丈八　ヤア、舌たるい庇ひ立て。不義の掟は兩人とも、縛り首だ。覺悟して、それへ直れ。

正基　不便ながらも、家の掟は破られぬ。兩人とも、身が手にかくる。覺悟いたせ。

ト小姓に持たせし刀を取り、立たうとする。主計頭とめて

主計　イヤ、暫らく。正基どの、いま志津摩をお手討になされては、お家の重寶仁王三郎の刀の、詮議いたす當人がござるまい。

正基　ヤ、なんと。

主計　云はゞ些細な兩人が科。お家の寶には替へられますまい。その科を憎んでその人を憎まずといふ、古語もござれば、なんと、兩人が一命、この主計頭には下さるまいか。

正基　なんと御意なさるゝ。

主計　人は一言に依つて信義を知る。勝次郎どのゝ死を止め、刀紛失の誤まりを身に引請け、イヤサ、その身の科を、速かに名乘り出でたる大丈夫。末頼もしき志津摩が骨柄。主殿とても、先ッその通り、助け置かば、まさかの時用に立つべき者ども。それを存じて某が救ひ。

丈八　イヤ〳〵、主計頭さま、志津摩は格別、主殿は以前の御家來。助命とあるは、贔屓の御沙汰でござりますかな。

主計　ハヽヽヽ、以前は以前、今は當家の步中間。善は善、惡は惡と、分け明らむるは、情の政道。

勘解　ムウ。すりや、兩人が不義密通、善と見てのお捌きかな。

主計　漢の高祖は、楚國の軍に襲はれ、一度敗軍となりし時、高祖を追ひし揚志、丁公の兩人、揚志は生捕り、首刎ねんと云ふ。まつた丁公は、助けんと云ふ。天の助くる高祖にや、遂に遁がれて、九里山の一戰に打勝ち、その後、彼れ兩人、降參して、臣下となる。漢家の仕置、初め助けんと云ひし丁公は、變心あるとて、これを殺し、まつた殺さんと云ひし揚志を助けしは、張子房が智の深きところ。武士たる者は、善惡に付き、一心變ぜざるを大丈夫とこれを名く。山に登りて見ざれば、谷の深さを知らず。正基どの、助命いたさせ、召仕うて遣はされんや。

ト正基、こなしあつて

正基　志津摩は、以前の如く、大高主殿は、今日より帶刀許し、新地二百石、與へくれう。

勘解　すりや、二百石に

丈八　お身取立てとな。

正基　如何にも。

皆々　ハテナア。

ト顏見合せ、下に居る。

正基　家門の儀なれば、佐々木細川兩家の師範と定め、神影の流儀、家中の者に指南仕つてよからう。

袖助　すりや、助命下さるのみならず、二百石頂戴、兩家に於て、武術指南、仰せ付けられんとな。エヽ、有り難い。志津摩どの、お喜び下されい。これと申すも、古主の御恩。

志津　なんとお禮を申し上げてよからうやら。

袖助　大殿様。

志津　主計頭さま。

志津　エヽ、有り難う存じ奉りまする。

ト平伏する。

正基　近習の者、衣服大小を遣はせやい。

近習　ハッ。

ト廣蓋に、衣服大小を載せ、持つて出る。

正基　衣服を改めい。

ト大小を渡す。

主殿　ハッ。いづれも御免。

ト大小携へながら、ツイと下座へ入る。右のうち、角左衞門、こなしあつて、この時、靜かに貴をのみしまひ

角左　正基さま、先刻、主計頭さまが、神影の武術、國に

に双者もないとは、人も無げなる大言。それをお聞きなされて、主殿とやらが、天地にもないもの丶やうに、莫大の知行を下されて、兩家の師範などゝは、お歷々に似合ぬなされ方。ちと御麁忽かと存じます。

正恭　なんと。

角左　すべて、武藝の骨法と申すは、廣く諸流へ渡り、鍛練の術を得ねば、達人とは申されぬ。神影などは、一家の流儀、取らに足らず。凡そ日の本に秀でし流儀の最上と申すは、竹の內の一流。その奧儀を極めたる者、廣い日本に只一人でござる。

正恭　ハテナア。して、その一人と云ふは。

ト角左衞門、思ひ入れして

角左　拙者でござる。一流の達人とあつて、佐々木家の御見出しにあづかり、一家中へ指南を致し、次第に立身。當時、東山道近國に於て、身に續かん者あるまいと存ずるが、茲ぢやて。得ては武藝の自慢いたして、身を亡ぼす者が、まゝござるぢやて。いづれも後學ぢや、聞いて置かつしやれ。元來、身共は奧州の浪人、十五ヶ年以前より、武者修業の折柄、さる年、羽州牧の林に於きまして、これも變らぬ武者修行の浪人、軍學の論議より、武術の廣言、その場で試合を望み、是非に及ばず立合つて其まゝ、なんの苦もなく打ち据ゑてござる。それを遺恨に存じ、その夜、野宿いたした身共が寢所へ仕掛け、騙し討いたさんとする、武士に似合はぬ卑怯の振舞ひ。憎しと存ずるゆゑ、その場を去らず、眞二つにぶち放してござる。蛙は口ゆゑに呑まるゝと、おのが口からおのれが破滅。なんと世には、馬鹿な奴もあるではござらぬか。ハ、、、ハ、、、。

ト座中を見廻す事あつて

イヤ、こりや、話しでござる。この座に差合ひあらば、御免にあづかりませう。

ト皆々を詰るやうに云ふ。右せりふのうち、志津摩、もしや我が親かと思ふこなしあつて

志津　して、その節の御假名はな。

角左　されば、その節の身共が名は。

トこなしあつて

イヤ、その節も矢張り眞納角左衞門サ。

志津　ハテナア。

ト角左衞門に目を附けながら、ヂツと納まり居て、こなし。

初演の繪番附

丈八　何は兎もあれ、差當つたる造營金の紛失。若殿、仰せ分け、罷りござるかな。
勘解　假初めならぬ將軍家よりの命に依つて、差上げる造營金。廓通ひに遣ひなくして、云ひ譯が立つか。
勝次　イヤ、全く。
勘解　併し、外に盜賊あつて、金子奪ひ取られたならば、なぜ、盜賊の詮議は致さぬ。
勝次　サ、その儀は。
勘解　何れの道にも御身が越度、思案極めて、返答しやれ。
勝次　ハツ。
ト當惑のこなし。この時、奥より主殿、上下、衣裳に改め、出て來り
主殿　若殿樣、御當惑には及びませぬ。その盜賊は、相知れて罷りある。御賢慮安く、思し召されませう。ハツ、斯く時服頂戴、改めて、お目見得仕るやうにござります。承りますれば、造營金の紛失、只今お目見得の手始め、この詮議、何卒、拙者に仰せつけられ下されませうならば、有り難う存しまする。
正基　如何にも。役目、申し付けてくれう。
主殿　有り難う存じ奉りまする。

ト眞中へ居直る。
勘解　主殿、この詮議、其方が致すぢやまで。
主殿　ハツ……丈八どの、ちよと御意得ませう。
丈八　身共にか。
主殿　御苦勞ながら。
ト丈八、向うへ出て
丈八　なんの用でござる。
主殿　只今、お聞きの通り、殿樣よりのお目鏡に叶ひ、二百石頂戴、帶刀御免あつてござる。
丈八　おめでたう存じまする。
主殿　御奉公始めに、造營金の詮議、この場に於て明白に相糺しませうと存するが、知れませうかな。
丈八　イヤ、知れますまい。御身は何者か、俄か立身、成り上がり者だぞや。どれやらの屋敷に召仕はれて居つた時は、傾城狂ひのもくが割れ、お屋敷をほいまくられながら、若衆狂ひだ。貴樣のやうなうつけ者を、見所があるの、一器量あるのと目利なさるゝ御方もあれば、よい事と思つて、知行を遣はさるゝ御主人も御主人。貰ふ貴樣は大馬鹿の天上だ。大切なる、お金の盜賊、傾城や若衆の吟味とは違ふ。五年や十年、乃至、百年二百年かゝつ

ても、在所は知れぬ。オヽ、イヤ、滅多には知れまい知れまい。

主殿　所を詮議して、お目にかけやうが、先づ吟味の發端若殿、御放埓の入用と云ひ立て、造營金を掠め取りし非道の段々。丈八、眞直ぐに白狀しやれ。

丈八　默れ主殿。この丈八が造營金を掠めしなどゝは、なんのたは事。丈八は武士だ。侍ひだぞ。過言吐いたら、手は見せぬぞ。

主殿　イヤ、知らぬとは云はさぬ。夜前、淺草の境內にてひそめく密談。後に立ち聞く下主奴、その場の始終は、ナア、伯父御樣。

勘解　ヤ。

ト勘解由、ギックリ。

主殿　若殿を罪に落し、家國を手に入れんと企みの段々、御金藏の合鍵まで、一々聞き取るその場の對談。

丈八　すりや、その樣子を。

主殿　最前手に入る、この合鍵。

ト鍵を出す。丈八、それをト寄るを、見事に取つて投げる。

丈八　うぬ。主殿め。

ト拔いてかゝるを、其まゝ扇にて、ポンと當てる。勘解由、刀を拔きかゝる。左右よろしくあつて、しやんと見得になる。

主殿　勘解由さま、こりや、なんとなされまする。

勘解　イヤサ、これは。憎い丈八、ぶち放さうと思うて。

主殿　イヤ、詮議の濟むまで、殺す事罷りなりませぬ。

ト丈八、ムツとかゝるを、扇にてあしらひ、當てるこなし。

この手筋から詮議いたさば、お刀の在所までも、相知れさうなもの。御仁體が損ねまする。マヽ、お扣へあられませう。

ト勘解由、こなしあつて、下座に居る。主殿、丈八に息を入れる。其まゝ早繩をかける。

御造營金の盜賊知れたる上は、若殿樣、御切腹には及びますまい。

正甚　悴が虛名は、これで果てた。

主殿　ハッ……勘解由さま、この繩付きは、あなたへお預け申したく存じまする。

勘解　火水の拷問にかけ、要の根ざしを云はせて見ませう。

主計　イカサマ、勘解由どのゝ仰せの通り、並々ならぬ金子の盜賊。この筋より詮議いたさば、一軸の盜み手も、早速に相解りさうなもの。なんと勘解由どの、さは思し召されぬか。

勘解　なか〳〵左樣にござりまする。

主計　一方ならぬお家の重寶、大切な家に係はる一軸の詮議、其許の拷問に御如才はござるまい。

勘解　なか〳〵左樣にござりまする。

主計　なんと正甚どの、御覽なされい。御如才のないお顏付きではござらぬか。ハヽヽヽハヽヽヽ。

正甚　金子の盜賊、相解ると申し、この上は一軸の詮議。先づ差當つて刀の在所、延引いたさば、當家よりお取次下されし主計頭どのまで、越度とならん。隨分出精仕るでござらう。

主計　成る程、云はゞ御當家、斯く申す某まで、兩家に係はる寶の詮議。

主殿　及ばずながら、粉骨細身仕るでござりませう。

正甚　イザ、主計頭どの、角左衞門にも、圍の間へ。

角左　御馳走にあづかりませう。

主計　然らばお先へ。

主殿　先づ、入らせられませう。

ト唄になり、主計頭、正甚、角左衞門、近習附き添ひ勝次郎、夏菊附き、勘解由、丈八を引立て、主殿附き添ひ、人數、並よく奧へ入る。志津摩一人、思案の體合ひ方になり、下座より、横山大藏、委細立ち聞き、知らぬ體にて出で

大藏　志津摩どの〳〵。いかうお物案じの體。御氣色でも惡うござるかな。

トこれにて、志津摩、恟り、大藏を見て

志津　これは大藏どの、其許にもお物思ひの樣子。御氣分でも惡しうござりまするか。

大藏　イヤ、左樣にもござらぬ。一軸の紛失ゆゑ、お家の納まり如何ぞと、とつおいつ心を痛め居りまする。

志津　すりや、家國の納まりを、お案じなされて。

大藏　ハテ、どうしたものでござらうな。

ト思案する。志津摩、こなしあつて

志津　イヤ、私しは、大殿の御前へ。

ト立つて、奧へ行かうとする。

大藏　イヤ〳〵、志津摩どの、暫らく〳〵。

ト留める。

志津　御用でござるか。
大藏　志津摩どの、ちと、貴殿へ折入つて、お賴み申したい儀がござるが、なんとお聞き入れ下されうかな。
志津　これは改まつたお詞。して、お賴みなされたいとは。
大藏　イヤ、密事でござれば、他言せまじき御誓言が承りたい。
ト志津摩、こなしあつて
志津　私しも武士の悴、密事とござれば、他言仕りませぬ。
ト金打して
斯くの通り。
大藏　先づ以て、忝ない。
トあたりへ思ひ入れ。見廻して兩人、向うへ出て、大藏、小聲になり
お賴み申したいと申すは、外でもござらぬ。志津摩どの助太刀が致してもらひたい。
志津　なんと御意なさるゝ。
大藏　何を隱しませう。身共は親の敵を覘ふ者でござる。卽ち、その敵と申すは、先刻參つた眞柄角左衞門、本名は印南十内、彼奴が闇討にせし横山外記は、身が實父でござるわいなう。幼少にて別れしゆゑ、父の面體は存ぜねど、羽州牧の林で手にかゝつて、御最期ありしその節の取沙汰、いとけなき子心にも、無念止むを得ず、附け狙ふこの年月。身共を外記の悴とも知らず、今も十内が手柄話しに、その身の俗性、口走つて云うたは、彼奴が天命、名乘りかけて、討ち留めんとは存ずれども、竹の内の武術を得たる鳥滸の者、仕損じては一生の浮沈。貴殿が兄と賴まれし大高主殿どの、神影流の達人とある。御邊もろとも某に力を添へ、助太刀して下さらば、龍に翼を生ぜし同然。志津摩どの、お賴み申したいとは、右の仕合せでござる。
トこれを聞き、志津摩、思ひ入れあつて
志津　すりや、十内どのは、其許の爲には、敵とな。
大藏　なんと、助太刀の儀、御承知でござるか。
志津　サ、その儀は。
大藏　斯く口外せし上からは、返答次第で、此方も思案がござる。
ト急いて云ふ。
志津　サア、その儀は。

大藏　如何でござるな。
　ト志津摩、思案して
志津　如何にも、助太刀いたしませう。
大藏　しかとな。
志津　武士の金打、仔細を聞いて、卑怯構へる志津摩でござらぬ。
大藏　先づ以て忝ない。萬事は後刻。
志津　大藏どの。
大藏　志津摩どの、キッと詞を番ひましたぞ。
　ト唄になり、大藏、落ち付きしこなしにて、奥へ入る。後に志津摩、いろ〳〵思ひ入れあつて
志津　ア、、十内さまを、我が親人とも知らず、助太刀頼みし大藏が心は、我が手をかつて、父を討たん深い企み。無事にこの場を……ハテ、どうしたものであらうな。
　ト思案のこなし。奥にて
角左　イヤ〳〵、あれへ參つて、休息仕りまする。
　ト角左衞門、靜々と出る。志津摩、思ひ入れあつて、側近くより
志津　十内さま。
　ト角左衞門、訝かしきこなしにて

角左　なんと云ふ。
志津　父上樣、お懷かしう存じまする。
　ト取りつくを、突きのけ
角左　父上とは麁忽千萬、使者に參つた眞柄角左衞門、親と云はるゝ覺えないぞ。
志津　成る程、斯くばかりでは、御合點が參りますまい。水子の時、國元でお別れ申しましたお前の實子、志津摩でござりますわいの。
角左　なんと。
志津　最前、お物語りを聞きし時、さては父上かと、飛び立つやうに存じましたれど、滿座の中なれば、差扣へて居りました。申し親人、悴かと、たつた一言仰しやつて下されませいなう。
　ト取り附いて云ふ。角左衞門、思案する事あつて
角左　誠に、國元を出でしを思ひ出せば、はや十五年。
　ト志津摩が顏を、つく〴〵見て
ムウ、面ざしも見覺えあり。さては悴志津摩であつたよなア。
志津　武者修業のお志しと、本國をお出でありしは、まだ母樣の肌に抱かれ、お顏とても覺えねば、成人の後、

母樣のお話しを聞き、顏が見たい懷かしいと、明暮れ祈つて居りましたわいなう。
角左　身共とても、木石ならず、國に殘せる女房伜、如何なりしと案じ暮らせし長の年月。
志津　不思議に今宵廻り逢ひしも
角左　親子の奇緣
志津　盡きせぬしるし。
角左　伜。
志津　父上樣。
ト角左衞門、志津摩を引寄せ、顏を見て
角左　ハテ、おとなしう成人いたしたなア。
トこなし。
志津　申し、お喜び下されませ。母樣も當所にお出でござりまする。
角左　ナニ、女房どもゝ當國に居るとな。
トきつと思ひ入れある。
志津　ちよつと呼びに遣はしませう。
角左　イヤ待て。今日は使者の役目、對面の儀は、また重ねて。
ト立ち上がり、奥へ行かうとする。

志津　ぢやと申して、久々お逢ひなされぬ母樣、是非ともちよつと。
角左　家を出る時は、妻子を忘るゝは武士の習ひ。
志津　すりや、どうあつても。
角左　女に、とくと申し聞かせい。
志津　如何にも、父の命背くも不孝。併しながら、母の御物語り、あなた樣には、私し三才に足らざる節、諸國武者修業とあつて、御出國なされしとの事、何卒お行くへを尋ねんと、母人には、家來文次を召し連れられ、所々方々と尋ねさまよふ所に、一昨年羽州牧の林にて、旅人の横死、思はずその場へ行きがゝり、もしやと思ふ死骸を見れば、面體をあばきしゆゑ、何者とも定め難く、あたりを見れば、落ち散る一札、宛名は横山外記どのへ、印南十内と、しかも父上の御自筆でありしとの事。その場の事は知らねども、試合の勝負に遺恨を殘さぬ神文を取交しながら、その相手を討つて立退くとは、卑怯未練淺ましいお心。さは思へども、お命全う、助けたいと思ふが念願。心がゝりは奥に居る大藏、あなたがお手にかけられし横山が伜、父上を親の敵と狙へば、どう思うても、この屋敷には置き申されぬ……とは云ひながら、

初めて父上のお顔を見ると其まゝ、別れを急ぐやるせなさ。御推量なされて下さりませ。

ト泣く。此せりふのうち、さては奥に居るは、我が眞實の悴かと、思ひ入れあつて

角左　如何にも。親なればこそ、子なればこそ、親身の意見、忝ない。親ながらも面目ない。老いては子に從ふの本文、汝が詞に付いて、一先づ當國を立退き申さん。安心いたせ。

志津　エヽ、すりや、お聞き届け下されますとな。忝ない忝ない。

ト思案あつて、懐中より、袱紗包みの金を取出し

お行くへとても定めない、長の旅路。せめてこの金子をお持ちなされて下さりませ。

ト出す。角左衛門、手に取り

角左　其方が志し、忝ない。然らば此まゝ、立退くであらう。

志津　何國にも、御身御安堵の上は、必らず御左右を、待ちまする。

角左　云ふにや及ぶ。早速に通達いたすであらう。

志津　左様ならば父上様。

角左　悴。

志津　随分御無事で。

トこの時、奥にて

主殿　志津摩どのは、いづれにござる。志津摩どの〳〵。

志津　誰れやら參りまする。人の見ぬ間に、サヽ、早う早う。

角左　然らば、悴。

ト此うち、主殿、奥より出かけ

主殿　オヽ、志津摩どの、これにござるか。佐々木家の御使者を、殿がお尋ねでござる。角左衛門どのは、どれへござつたな。

ト此せりふにて、角左衛門、ちよつと小隠れする。

志津　されば、角左衛門どのには、只今御歸國なされてござりまする。

主殿　すりや、角左衛門どのには、最早歸國召されたとな。

志津　如何にも、左様でござりまする。

主殿　アノ、歸國を。ハテナア。

ト角左衛門を尻目にかけながら、こなしあつて上の方へ扣へる。此うち、角左衛門、思案を極め、向うへ行

かうとすると、人音する。また小蔭へ寄ると、向うバタバタにて、白坂甚平、口暮の形にて、密書を持ち、走り出て、内へ入る。摺れ違へて角左衛門、ツイと向うへ入る。

甚平　若旦那、これにござまりするか。

　ト急き込んで云ふ。

志津　甚平、あわだゞしい、何事ぢやぞいの。

甚平　何事ではない、大事ぢや〳〵。

志津　して、その仔細はどうぢや。

甚平　サア、その仔細と申すは、親旦那十内さまが。

志津　ナニ、父上が如何いたした。

　ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

甚平　闇討に遭うて、お果てなされましたわいの。

　ト思ひ入れ。

志津　心得ぬ其方が詞、父上がお討たれなされたとは、いつの何時。その様子は、どうぢや〳〵。

甚平　サア、そのお討たれなされたは。

　トいろ〳〵云ひ兼れるこなし。

志津　甚平、そちや狂氣いたしたか。心を靜めて様子を云へ。どうぢや。

甚平　オヽ、下郎は氣が狂つた。これが氣が狂はいでなんと致しませうぞいなう。十五年この方、御存命だと思ひ込んだ親旦那、御最期といふ慥かな證據は、コレ、この御狀。

　ト右の狀を打ちつける。志津摩は、合點のゆかぬこなしにて、取上げる。下の方へ、大瀬、窺ひ居る。

志津　ナニ、この一書が

　ト開き讀む。

「わざ〳〵飛札を以て通達いたし候ふ、其許、無事に暮らされ候ふか。誠に幼年にて相別れ、諸國を經巡り、羽州牧の林に於て、武藝の爭論に依つて、印南十内と云ふ浪人を手にかけ、懷中せし竹の內の印可を奪ひ取り、後難を思ひしゆゑ、面體をあばき、衣類を取替へ、討たれしを外記と思はせ、我れは十内となつて、その場を立退き、當時佐々木家の屋敷へ仕官いたし罷り在り」ヤ、、ヤ。

　ト大きに驚ろき

すりや、羽州牧の林にて、お討たれなされしは、父上であつたか。ホヽ、ホイ。

　ト思ひ入れ。愁ひのこなし。

甚平　オヽ、お道理だ〳〵。昨日淺草に於て、お國元の書狀と、ソレ、その密書と取違へ、開き見れば、横山外記が御主人を討つて立退きしと、身寄りの者へ知らせの文體。さてはと下郎が恟り仰天。手に入れし密書を奪ひ返して、逃げ出す飛脚。南無三寶と、晝夜にぽッ駈け、ぽッ詰め、引ッ捕へて詮議すれば、密書に變らぬ飛脚が白狀。敵の行くへ尋ねんと存ぜんが、イヤ〳〵、先づこの樣子を、お二方樣へお知らせ申さんと、晝夜飛んで立歸りました。樣子と云ふは、斯くの通りでござまりする。

卜これを聞き、主殿、こなし。大藏もこれを聞き、思ひ入れあつて、直ぐに拔き足して向うへ逃げて入る。志津摩、いろ〳〵こなし。

志津　すりや、たつた今、父上と思うて、名乘り合うたは敵外記であつたか。ソレ。

卜つか〳〵と、向ふへ行かうとする。甚平、留めて

甚平　待つた若旦那、血相變へて、どれへござりまする。

志津　敵の外記をぽッ駈けて、

甚平　ヤ、なんと。

志津　今この所にて、父上と思ひ、名乘り合つたは、正しく敵横山外記。程は行くまい。ソレ。

卜また行かうとする。

甚平　イヤ待つた。親旦那十内さまを、討つて、立退く程の曲者。なみ〳〵ならぬ武術の達人。討ち損じてはお家の恥辱。お急きなさるゝ所ぢやござりますまい。マアマア、お靜まりなされませ。

志津　現在、父の敵と知らず、路銀までを取り持たせ、やみやみこの場を落しやつたかと思へば、口惜しい、口惜しいわいなう。

卜向うを見て、無念の思ひ入れ。

甚平　御尤もだ〳〵。お道理だ〳〵……とあつて、又いまさら云つても詮なきお悔み。この上は、母御樣へも御物語り仕り、一時も早く敵討の出立。これに增したる御孝行はござるまい。

志津　如何にも、委細の譯を申し上げ、諸ともに敵討のお願ひ。さりながら、相手は名に負ふ竹の內の達人。ムウ。

卜きつと思案して、主殿を見て、こなしあつて

主殿どの、ちよつとこれへ。

主殿　身共にか。

志津　如何にも。

卜主殿、よき所へ直る事。

主殿　志津摩どの、身共に用事とはな。

志津　主殿どの、先刻よりお聞きの通り、其許樣と斯く兄弟の因みを致すからは、こなたの爲にも親の敵なりや、助太刀の儀は、御異變はござりますまい。緣を搦みし月日も變へず、敵の實否の知れたると云ふは、日頃信ずる淺草觀世音の靈驗。この儀母にも申し聞かさば、滿足仕るでござりませう。主殿どの、いよ／＼助太刀頼みまするぞや。

甚平　若旦那、なんと仰しやる。そりや、あなた樣には、主殿さまとやらと、御兄弟のお約束をなされましたとな。

志津　如何にも。計らず兄弟の因みを結びし今日より、主殿どのにも、當家へ仕官。武術に於ては、神影流の奧儀を極めし主殿どの、助太刀下さるゝ上は、最早敵の首は手に入つたも同然でござりまする。

甚平　奧樣、兄文治にも、喜びまするでござりませう。この上は時刻を移さず、御出立の御用意。サ、早く／＼。

ト進み立て、喜ぶ思ひ入れ。

志津　イヤ／＼、一旦敵討のお願ひ申し上げずば、出立は叶ふまい。この上は、主殿どのにも御一緒に、殿の御前へ参りませう。

ト立たうとする。

主殿　イヤ／＼、志津摩どの、先づ／＼お待ち下されい。此方に得心もさせず、助太刀を打ての、イヤ、敵討の願ひのと、そりやハヤ御身達は、御親父の儀なれば、外ならぬ敵討、兎も角も致されたがよいが、拙者に助太刀とは、甚だ迷惑に存ずる。

ト志津摩、思ひ入れあつて

志津　主殿どの、そりや本心で仰しやるか。

主殿　なんの僞はりを申さう。よう思うても御覽じろ。敵討と云へば、命づくでござる。殊に相手はしたゝか者。首尾よう討てばよけれども、返り討に討たれて御覽じろ、命を果すのみか、一生の物笑ひとなる事。そりやハヤ、只今までの如く、浪人の身の上でもござらうならば、のたれ死いたさうより、なるならざるはいとはず、やつて見まいものでもござらぬが、御覽の通り、一身上にありついてござるからは、また榮達も致し、安樂に暮らさねばならぬ。それに敵討の助太刀などとは、近頃迷惑に存ずる。

ト甚平、こなし。志津摩、急いて

志津　主殿どの、そりや、お詞が相違いたした。御卑怯に存じまする。

主殿　これはハヤ、迷惑千萬。貴公、先刻なんと仰せられた。親父を敵ぢやと申して、狙ふ者があるに依つて、力となつて先途を見屆けられいと、仰せられたは、畢竟、命に係はらぬ事ぢやによつて、そこで承知ぢやと申したその砌り、助太刀討たうとは申さなんだぞや。尤も先刻其許ゆゑなら、一命でも差上げやうと申した。その詞が相違したと思し召さうが、あれは手前が其許を執心に存じて、どうなりとして、手に入れたく存ずるに依つて、ほんの當座遁がれの手爾葉に申したのでござる。ハ、、ハ、必らずお腹をお立ちなされな。これは、身共ばかりではござらぬ、世間の人は、皆この通りサ。男でも女でも、手に入れようと存ずる時には、のろけた事を申すものでござる。先づ、正直に申さうなら、凡そ、十のものが一つ、そこらは誠であらうが、十が十ながら、皆嘘でござる。ハ、、、イヤ、お腹を立たるゝな。斯うなつては、手前も身を大切に致さねばならぬ。近頃不實には存ずれども、助太刀の儀は、主殿、氣の毒ながら、お斷わり申しまする。

トあちら向き、煙草盆を引寄せる。志津摩、いろ／＼口惜しき思ひ入れ。刀を取つて詰め寄せ

志津　主殿どの、そりや御卑怯でござる。兄弟の儀に依つて、一命に係はる事でも、引きはせじとの誓ひを立て、此やうに誓紙までを認めさつしやれたではないか。それに、今さら助太刀は不承知、敵討が恐ろしいとは、武士の誠も義理も、法も辨まへない腰拔け武士、家來の手前も面目なうござるわいなう。

ト泪を隱し、キッとなる。甚平、思ひ入れあつて

甚平　申し若旦那、あなたは、なんと心得てござりまする。人の心は、上からは知れるものではござらぬわいの。例へ、どのやうに云はつしやらうと、なぜよく本人を試した上で、兄弟の因みをなさらぬ。これ皆あなたの不覺と申すものでござるぞや。

ト主殿を尻目にかけながら

如何に、お年が入らせられぬと云つて、大抵僞はりを云ふも程のあるものだ。深切らしく見せかけて、兄弟の因みの、イヤ、兄分でござるのと、けれう、これが男と男なればこそ、もしや、若旦那が女で見さつしやい、一生の瑕物だワ。若旦那、もういくら云つても歸らぬ事だ。

ほんに、これが月夜に……とんだ泥坊に逢つたと思うて諦めておしまひなされませ。相手が竹の内の達人でも忠と孝との刀を以て、討たれぬ事はござりませぬ。憚りながら、下郎め兄弟が居りまする。氣遣ひはござりませぬぞ。サア、この上は、又あつちから、助太刀させてくれろと云つても、もう否だ。腰抜け武士と兄弟の因みがあつては、印南の御家名に疵が付きます。よしない事に心の濁り、さつぱりと洗ひ上げ、誠の武士と云はるゝやうに、とつくりと御思案なされ。

ト主殿を見て

大泥坊め、

ト合ひ方になり、こなしあつて、甚平、下座へ入る。主殿、手を拱み、思案する。志津摩も俯向き、泣いてゐる。この時、顔を上げ、思ひ入れあつて、主殿が側へズッと行く。

志津　主殿どの、こなたばかりは、さういふ心とは、露知らなんだわいの〳〵。その筈でもあらうか。寵愛の女中に別れ、その人の面影に、この志津摩が、似たとあつての執心。移り易い、淺はかな心とも、知らぬ凡夫の淺ましい。誠の武士と思ひ込んで、身の上を打明けたが、口惜しいわいの。

ト顔を見る。主殿、あちら向く、志津摩、思ひ入れあつて

エヽ……何を云うても空吹く風。

ト志津摩、ツッと立つ。主殿、振り袖を持ち留め、最前の起證を出し

主殿　志津摩どの、お腹立ちは尤もぢやが、コレ、兄弟の因みは切れませぬぞや。

ト志津摩、こなしあつて、起證を引ッたくり、我が所持の起證を出し、二枚重ねて、寸々に引裂き、主殿が目の前へ投げ付け、ツッと奥へ行かうとするを、引き留める。志津摩、沒義道に突き退け、また寄るを、平手にて主殿が顔をピッシャリと叩き、ツイと奥へ入るこの時、下の方より、主計頭出て

主計　大高主殿。

主殿　主計頭さま、只今、拙者が不實不道の行跡、逐一をお聞きに達しましたか。

主計　如何にも、日頃の勇氣實義に引替へ、卑怯未練の詞巧みに、殘らず承知いたした。

主殿　委細お聞きに達せし上は、拙者が行跡、善惡の見察

主計　承知仕りたう存じ奉りまする。

主計　尤もの尋ね。予が見極めし汝が心底。語つて聞かさん。元來、横山外記なる者、彼れ等が爲には親の敵、共に天を頂じかと、一心に迫る志津摩が孝心。家來の忠義もだし難く、卽ち智を以て、只今の有樣。色情の因みに依つて、助太刀討つては、武士の瑕瑾と存じ、わざと卑怯の詞を巧み、煩惱のきづなを斷ち切り、義に依つて助太刀討たん天晴れの志し。誠に、千里の馬は、常にしもあれど、これを見る伯樂なしと、斯程の者を埋れ木となし置くは、我が眼力の屆かざるところ。主計頭、殆んど感心いたしたわい。

主殿　ハア、、御賢察の上は包むに及ばす、義を見てせざるは勇なし。彼の者どもに、させるゆかりとてもござらねど、敵討と承り、これを捨てるは武士の本意に背く。さるに依つて、彼れらに疑念の怒りを起させ、取交し置きし起證を破つて、心よく助太刀を討たん拙者が存念、しろしめされし古主の御賢慮。この上は、當主人正基公より、暫時のお暇下し置かるゝやう、御推擧の段、偏へに願ひ奉ります。

主計　細川どのへは、某が執成し、本意を達して無事の歸參、再會を相待ち居るぞ。

主殿　重ね〴〵の御懇志、千萬有り難う存じます。

ト此うち、源次兵衞出かけ居て

源次　主殿、觀念。

ト切つてかゝる。かい潜り、キッと引き付ける。

主計　して、その者は。

主殿　お金の盜賊。

主計　すりや、丈八へ荷擔の曲者。

主殿　同類の成敗。

ト立廻り、見事にポンと切る。

斯くの通り。

主計　出來した。

トこの時、奥より志津摩、甚平、旅支度にて出る。

志津　主殿どの、御本心承つて、拙者が安堵。

甚平　先程よりの無禮の段々、眞平

志津　御免下されませう。

ト思ひ入れ。

主殿　イザ、この上は敵討御免の御書、お執成しは主計頭さま。

ト主殿、志津摩、甚平の三人

三人　偏へに願ひ奉りまする。
　ト三人思ひ入れ。
主計　イヽヤ、この願ひ、今は叶はぬ。
　トきつと云ふ。
三人　ヤ、なんと御意なされまする。
　ト思ひ入れ。
主計　さればサ、志津摩は、仁王三郎の刀紛失、再び詮議仕出し、正基どのへ差上げるまでは、私しの敵討、差免しては、掟が立たぬ。
主殿　すりや、仁王三郎の刀、詮議仕出だし、大殿様へ差上げなば。
主計　その時こそは、免しの一書、主計頭が申し請けてくれうわサ。
三人　エヽ、有り難い。
　トきつと平伏する。
主計　マア、それまでは、主殿、志津摩もろとも、當館をば出奔同然。
　ト九ツの鐘なる。主殿、思ひ入れして
主殿　最早九ツ。
主計　夜半に紛れて
主殿　刀の詮議。
主計　随分堅固で
志津　主計頭さま。
　トこの時、奥より正基、勘解由、丈八、出かけ
丈八　様子は聞いた。
　ト眞中へ出る。主計頭、立廻りにて見事に押へる。
勘解　正しく兩人。
　ト行かうとする。主計頭、抜討ちに、燭臺を切る。暗闇になる。主殿、志津摩、甚平の三人
三人　これは。
正基　最早、兩人は逃げ失せたり。
　ト思ひ入れ
志津　大殿様。
　ト戻らうとする。主殿、これを隔て、三人、立ち身にて、一時に手を合す。主計頭、向うを透かし見る。この引ッ張り、よろしく、幕。

四幕目　中仙道浦和宿の場

役名――百姓頓兵衛實ハ横山大藏。同女房、おつや

百姓、治作實ハ宮城傳助。同女房、おさえ。同妹、おみつ。駕籠舁き庄六實ハ白坂文治。同女房、おきの。同弟、庄三。

本舞臺、正面、藁葺きの田舍屋體、上の方、同じ藁葺きの隣家の門口、これに繩簾を掛けてあり、下の方、同じ藁家の門口、隣境に、生垣をしつらひ、舞臺先一面に、川の流れ、土手草、見合せよろしく、花道の角に、土橋を掛け、すべて中仙道、浦和宿棒鼻の掛り、爰に治作女房おさえ、世話女形浴衣の形、前垂れ襷にて、米をかして居る。この川下に、文治の女房おきの、これも浴衣の上に、前垂れ襷にて、洗濯物をして居る。土橋の際に、頓兵衛女房おつや同じ拵らへの女房の形にて、土大根を洗うて居る。各々この見得にて、在郷唄にて幕明く。

さえ　おきのさん、洗濯物かえ。精が出るなア。

　ト云ひ／＼、米を洗ふ。

きの　アイ、飯を仕掛けた間に、濯ぎものをせうと思うてな。

　ト云ひ／＼洗うてゐる。

つや　雨隣りの、精が出やんすなア。

　ト云ひ／＼、大根を洗ひ、せんぐり手桶へ入れる。

さえ　オヤ、おつやさん、ちつと手傳はうかえ。

つや　なんのマア、お前方の手しさひで、ゆく事ぢやないわいなア。

きの　ほんにおつやさんは、我精な事ぢやわいなア。

さえ　お前方が、そこに、洗うて居やしやんすに、川上から水を流すは、ちつと不遠慮ぢやなア。

きの　なんのいなア、白水は結句、垢が落ちてようござんす。構はずと流さんせ／＼。

さえ　そんなら、流すぞえ。

　ト桶より白水を流す。

なんとマアおきのさん、わたしらは、斯う水を自由に遣ふけれど、江戸では水道とやらで、折々、水の切れる事があるといなア。

きの　此やうに、澤山に遣ふ水が切れたなら、さぞ難儀な事であらうわいなア。

つや　お前方は、まだ江戸を見ずぢやな。その難儀をさせまいというて、どこにもかしこにも、掘抜き江戸が流行り出して、この頃は、もう出來合ひの掘抜き井戸がある

といなア。
きの　おさえさん、聞かしやんしたか。井戸までが、出來合ひがあるとは、江戸は、自由な所ぢやないかいなア。
さえ　ほんに、わたしも、去年の夏行て見たが、井戸はおろか、物事自由の足る、賑やかな、面白い所ぢやわいなア……それはさうと、あの妹のおみつが、先刻に茶の水を汲みに行きやつたが、もう戻りさうなものぢや。
きの　お前も又、あの子に水を汲みにやらすと、治作さんは何してぢやえ。
さえ　今朝から、どこへやら出たわいなア。
きの　オヽ、留守かえ。
さえ　アイ、留守でござんす。ほんにお前の所は、女夫仲がよし、共稼ぎで、面白からうなア。
きの　何云うてぢややら。今日も今日とて、仕事に出ると云うて、今に戻らぬわいなア。男のせいとうにかゝつて、つい隣のお前方の所へ、話しにさへえゝ行かぬわいな。
ト濯ぎ物を、きり／＼絞り上げて、盥に入れ、又外のを出して洗ふ。
さえ　イヤモウ、どこのもどこぢやぞいなア。女房といふ名ばつかりで、つい、たんまりと、内に居た事がござんせぬ。世帯の世話と、悪性狂ひのせいとうで、わたしもホツとするわいなア。
ト云ひ／＼、米を洗ふ。
きの　それはさうと、おつやさんの所へは、昨夜聟さんがござんしたさうなぞえ。
つや　オヤ、おきのさん、何云ひなさんすぞいなア。
さえ　イエ／＼、隠したさんすな。まだ聟さんに、近付きにはならぬけれど、晩にはきつと、樽を入れうぞえ。
きの　アイ／＼、さうせうわいなア。
つや　サア、有やうは、持つたわいなア。知つての通り、先の男は、鼻筋も通つて、看板附さは、相應であつたが、大の弱虫で、わしが側からいくらあせつても、辛氣な程埒が明かぬなまけ者。あのやうな男に添うて居たらば、いくらひだるい目にあはうも知れぬ。いつそ死んだが勿怪の幸ひ。後家も氣散じでよいものなれど、また不自由な時もあり、どうしたものであらうと思ふ所へ、馬さしの五郎助どのが、よい聟がある。男の中陰も經たぬうちに、そんな事をしては濟まぬと思うたけれど、たつて入れろ／＼と進めてゞあつたに依つて、つい、昨夜入れたわいなア、マア、聞かしやんせ、初手の男と違うて、年

は若いし、第一、自慢した達者さうな男。あれでは、わしにひもじい目もさせまいと、氣が落ちついたら、昨夜といふ昨夜、堪能する程寐たわいなア。
さえ　おつやさん、もう云ひなさんすな。そんな事聞くと猶腹が立つわいな。
きの　ほんにさうでござんす。男のさんげを云ふぢやないが、この中も、朝五ツ時分から、日暮れまで寐てな、日が暮れるや否や、ついと出るに依つて、お前も、ちつと内に居やんせと云うたれば、その云ひくさる事を聞いて下さんせいなア。
さえ　なんと云うたえ。
きの　ヤイ、そげめ、おれが體で、寐やうが起きやうが構やがるな、惡くあごたをならすと、骨箱をふんざくと云うたに依つてな、あんまり腹は立つし、わたしも思ひ切つて、エヽ、措かんせ、お前のはり込みも聞き飽きたわいな。これが他人ぢやなし、女房が男を、内に居やんせと云うたが、それ程腹が立つかえと、張り込んでやつたら、默つて出て行きをつたわいなア。
さえ　そりや、まだお前の所のは、結構ぢやわいなア。此方の男づらは、朝から出て、よいかと思うて、二三日も四五日も泊つて戻るわいなア。
きの　お前、それを默つて居やしやんすかえ。
さえ　どうも仕樣がないわいなア。
つや　エヽ、それぢやに依つて、内兜を見拔かれて、したい三昧、側で聞いても齒がゆいわいなア。コレ、おさえさん、わしや、治作さんの入り所を、よう知つて居るぞえ。
さえ　知つてゐるなら、云うて聞かせて下さんせいなア。
つや　そんなら云はうか。治作さんに云はんすなえ。
さえ　云ふこつちやないわいなア。
つや　アノ、中宿の煮賣り屋。
さえ　そんなら、あの後家さんとかえ。
つや　ぢやわいなア。
さえ　道理こそ、あの後家さんは、合點がゆかぬと思うたわいなア。そんな事がある に依つて、内へと云うては、一夜さも寐くさらぬわいなア。
つや　そんな水臭い男は、ぽい／＼とぽいまくつて、早う持ち替へたがよいわいな。
さえ　サア、まさかさうもならぬわいな。シタガ、昨夜はどう風が變つたやら、宵から内に居てな、今夜は眠いと

寐所を急いておぢやわいな。わしも爰でこそと、素知らぬ顔をしてな。

つや　なんと云はんしたえ。

さえ　サア、毎晩、寐所をした、その敷き手に敷かしたがよいと、それから、物も云はずに寐た振りをしたればな、ソツと寐所へ入つて、まじくち／＼として、どうも仕舞ひが附かなんだかして、コレ北の方、なんで其やうに御勿體をおつけなさるゝ。マア、爰へお出で……とやり／＼さつたに依つて、アイ、今夜はお邪魔でござりませうと云うたら、その云ひくさる事を聞かしやんせ。

つや　舌たるい事を云うたかえ。

さえ　舌たるい段か、二世とかけたる我が妻の、ひぞり給ふや、胴慾やと、鼻唄でな。

つや　オヽ好かぬ。

きの　そんな時に、よう掟定めをするがよいぞえ。

さえ　アイ、そこにぬかりはござんせぬ。これに懲りて、あんまり女房ぢやてゝ、安くさんすなと云うて、明日の朝までいぢり通しに起して置いたれば、草臥れたやら、その明る日は、晝過まで寐て居て、目が明くともう、悪口ぢやわいな。われのやうな悪い者を、女房に持つたはおれが因果ぢやと、それからわしが事を、板額ぢやの、イヤ、巴ぢやのと、ほんになぶり物にしくさるわいなア。

きの　どうマア、女子の方から。

つや　ハテ、茶屋の餅も、しいねば喰はれぬぢやないかえ。

きの　それはそれ、これはこれぢやわいなア。

さえ　お前の所のも、悋氣すると叱るかえ。

きの　叱るどころか、叩くやら踏むやら、いつそ益體ぢやわいなア。

さえ　ほんに、忘れてゐる事あるわいなア、おきのさん、お前に見せるものがござんす。

ト帶の間より、守り袋を出し

こちの人が、この守り袋を大事にかけて、持つて居るに依つて、あんまり合點がゆかぬゆゑ、こちの人、そりやなんぢやえと、わたしに咎められて、云ひやうがなかつたやら、この守り袋の中には、お隣の庄六どのが、豆腐屋のおかめと、懇ろをした、起請が入れてあると云うたぞえ。

きの　そりや、ほんにかいなア。

つや　どうも、おかめを見ると、味ぢやと思うたわいなア。

きの　サア／＼／＼、事ぢやわいなア。

ト立つたり居たり、こなし。

さえ　イヽエ、てつきり、此方の男が、間に合ひと見えるわいなア。憎さも憎し、ソツと取つて置いたが、先刻から見ぬ間がなかつた。なんと、爰で明けて見ようぢやないかえ。

トおつや、留めて

つや　イエ／＼、そりや悪からうわいな。爰で明けうより男の側でめつぱりこに、明けるがよいわいなア。

きの　さうでござんす。その守り袋は、わたしが預からうわいな。

さえ　アイ、お前に預けて置く程に、庄六さんが戻つてゞあつたら、目の前で詮議して、もし違うたら、矢ツ張り此方のぢやわいな。

きの　そりや、わたしがとつくり、詮議するわいな。

さえ　そんなら、頼んだぞえ。

ト守り袋を渡す。

つや　それ／＼、云ひ合して、よく吟味さんせ。わたしが證人に立たうわいな。

ト云ふうち、おさえ、米をしまふ。おきの、洗濯ものを盥へ入れる。おつや、大根を殘らず手桶へ入れる。

きの　オヽ、いつの間にやら、皆濯いだわいなア。

さえ　ドレ、飯でも炊かうか。

つや　おきのさん。

きの　おさえさん。

さえ　おつやさん。

三人　後にえ。

ト在郷唄になり、おつや、大根の手桶を提げ、正面の藁家へ入る。おさえ、米かし桶を抱へ、上の縄簾の内へ入る。おきの、洗濯盥を持ち、下の藁家へ入ると、右の唄をかりて、向うより百姓治作、駕籠舁きの拵らへにて、山駕籠を擔ぎ、出て來る。後より駕籠舁き庄六、同じ形にて、竹の息杖を二本擔ぎ出て來る。花道のよき所にとまり

治作　庄六、なんと、今日はまんがよかつたぞよ。

庄六　されば、上尾から大宮まで、戻りをげんこに極めて、外にちぎ百の酒手とは、まんが直る瑞相ぢやて。

治作　晩には出て來い。一杯飲まうワ。

庄六　イヤ、おりや、禁酒ぢやて。
治作　なんぢや、禁酒ぢや。近い酒が呆れてけつかるわえ。
庄六　ハヽヽヽ。
治作　サア〳〵、來やれ〳〵。
　ト唄の切れにて、兩人、舞臺へ來る。
庄六　治作、休みやれ。
　ト行かうとする。
治作　アヽ、コレ〳〵、肝心の事、忘れた。今の割は。
庄六　今の割とは。
治作　エヽ、鈍な男でござるわえ。駕籠代は、おぬしが受取つたぢやないか。
庄六　ほんにさうだの。割前を忘れるやつサ。
治作　ても、横着な奴ぢや。
庄六　ハヽヽヽ。
　ト笑ひながら、錢を出し、思案して
　待てよ。昨夜の奢りが百五十。こんな時に引かにや、みんなおれがかぶりになる。
治作　待て〳〵、さう嚴密にする事はない。また折があらう。先づ、今日の所は、美しく御割り候へ。

庄六　イヤ〳〵、此方の勘定も致した上、その後、錢を渡さうするにて候ふ。
治作　あら〳〵現金や、先づ〳〵御割り候へ。
庄六　エヽ、せう事がない、二つ割りにして。
治作　御渡し候ふや。
庄六　さあらば、錢を參らさう。
　ト錢を出して渡す。
治作　こなたこそ。
　ト取つて懐へ入れ、顔を見合せ
兩人　ハヽヽヽ。
　ト笑ふ思ひ入れ。
庄六　治作。
治作　庄六。
兩人　晩に逢はう。
　ト唄になり、治作は、上の藥家へ、庄六は、下の方、兩方へ別れて入る。ト矢張りこの唄をかり、向うより治作妹おみつ、振り袖、世話娘の拵らへ、おきの弟庄三、木綿やつし、兩人、水手桶を荷うて出て來り、花道のよき所にて
庄三　コレ、おみつさん、さうヒヨロ〳〵さんしては、水

が溢れてしまふわいの。

みつ　それぢやというて、お前がたんと入れてぢやに依つてぢやわいな。

ト云ひ／＼

庄三さん、しんどうなつたわいなア。

ト下ろす。

庄三　もう休むのかいな。

みつ　それぢやというて、肩も手も痛うてなりませぬものを。それはさうと、庄三さん、お前、この間云うた事、ねつから返事して下さんせぬなア。

庄三　また其やうな事云はんすが、おりや、嫌らしい事は嫌ひぢやわいの。

みつ　又お前が其やうに云はんすと、もうこの水を荷やせぬぞえ。

庄三　減相な。お前が荷うて下さんせぬと、この水に困るわいな。

みつ　それぢやと云うて、今のやうな事を云はんすに依つて、それでわしや、もう荷ふ事は否ぢやわいなア。

庄三　どうぞ、荷うて下さんせいなう。

みつ　そんなら、今のやうな事、云はんせぬか。

庄三　サア、それはな。

みつ　云うてなら、荷やせぬ。

ト行かうとする。

庄三　ア、コレイナア。

ト留める思ひ入れ。

みつ　云はんせぬか。

庄三　マア、云はぬわいなア。

みつ　イエ／＼、マアでは否ぢや。

庄三　そんなら、マアなしの、ウンぢやわいなア。

みつ　嘘ぢやないかえ。

庄三　ほんまぢやわいなア。

ト此うち、百姓頓兵衛、浴衣細帯、元服頭、大欠伸しながら出て、この體を見る。

頓兵　うまいな／＼。

トこれにて、兩人、恂りして、左右へ飛び退き

庄三　おみつさん、晩にえ。

トついと下座の口へ入る。おみつ、本意なさうに思ひ入れ。

みつ　コレ庄三さん、マア、待たしやんせなア。わたし一人、この水の仕様がないわいなア。

頓兵 大事ない。その水は、おれが持つてやる。オヽ、水を持つてやるばかりぢやない、水揚げもおれがしてやる。なんと、どうぢや〱。

みつ そりやマア、嬉しうござんすが、水揚げとは、そりや、なんの事でござんすえ。

頓兵 ハヽヽ、こいつは大笑ひだ。水揚げさへ知らぬ手入らず、初櫛より値打のある初物。こりや堪らぬわえ。

ト抱き付く。おみつ、アレと飛びのく。この拍子に、頓兵衛、おみつを、つく〴〵見て

ヤ、われは。

ト悔りする。

みつ エヽ、なんぢやぞいなア。悔りするわいなア。

頓兵 慥か去年、淺草で

ト云はうとして、思ひ入れあつて

お娘、おぬしはおれを知つてゐるか。

トおみつ、頓兵衛を見て

みつ アイ、どうやら、知つて居るやうにもあり、どうも思ひ出されぬわいなア。

頓兵 ムウ、よし〱、蠅叩きを落したれば、知るまい知るまい。昨夜、爰の内へ、入り聟に來た花聟ぢやわいなう。

みつ そんなら、お前は、おつやさんの小父さんかえ。

頓兵 オヽ、小父さんよ。これから心安くしてもらはにやならぬぞえ。

トおみつが手を取る。振り切り

みつ エヽ、なんぢやぞいなア。

頓兵 ハテ、さうツン〱とする事はない。

ト抱きつき、無理に頰ずりする。

みつ エヽ、嫌らしい、アレエ〱。

ト聲を立てゝも放さぬゆゑ、その手を食ひつく。

頓兵 アイタヽヽヽ

みつ 惡い事さしやんすと、おつやさんに告げるぞえ。

頓兵 滅相な。それを云つて堪るものか。

みつ イエ〱、告げて來るわいなア。

ト行かうとする。後より抱き留め

頓兵 ドツコイ〱〱。敵と見て、後を見するは卑怯千萬、返し合うて勝負々々と云ふまゝに、兩馬が間に落ち重なり、遂に本望達しけり。

トせりふのうち、おみつを追ひ廻し、せりふとまりまでに、おみつをこかす。この時、おつや、納戸口より

出て、腹の立つこなしにて、頓兵衞を引きつける。
ヤア。
ト顏見合す。
女房どもか。
ト眞面目になる。おみつ、氣の毒さうに、ウヂ〳〵する。おつや、頓兵衞が胸倉を取つて
つや　コレ、男づら、下に居くされ。こなさんは〳〵、やうやう昨夜、入り聟に來て、まだわしが味さへ、ろくろくに見せぬうちから、もう惡性かいなう。男づらは男づらとも思はうが。
トおみつを尻目にかけ
年もゆかぬ形をして、人の男を寐取らうとは、しやほんに、なんぢやの。
ト思ひ入れ
頓兵　ヤイ、虎鰒め、うなア、その面で悋氣をひろぐか。おきやアがれ。
ト突き退ける。後へ、庄三、出かゝり、見て居る。
つや　イヤ、こなさんは、人の顏の店おろし、措いてもらひませう。
頓兵　その膨れた所が、鰒に生寫しだワ。ハヽヽヽヽ。

つや　エヽ、腹の立つ。こなさんを。
トむしやぶりつく。
頓兵　何をしやがる。
ト突きのける。おつや、口惜しがつて、莨盆を投げつける。おみつ、いろ〳〵心遣ひの思ひ入れ。
うぬ、おれに投げ打ちをしやがつたな。
トそこらを見廻す。庄三、ソッと擂粉木を取つて來り後見のやうに、頓兵衞へ渡す。頓兵衞は、庄三を見つけずに
オヽ、誂らへたやうに、不思議にこの擂粉木の、我が手に入るといふは、これで叩きのめせといふ、神のお告げか。エヽ、忝ない。
ト擂粉木を押戴き、ひねくり廻す。庄三、また擂鉢を取つて來て、おつやに遣れと、おみつへ渡す。おみつウヂ〳〵するを、庄三、押しやる。おみつ、それにておつやの側へソッと擂鉢を置く。
つや　オヽ、氣の利いた所にこの擂鉢。サア、ぶつて見や。
頓兵　おれがカウ。
トこれより、兩人、擂粉木と擂鉢にて叩き合ひになり

世帯道具を投げ散らす。庄三、これを拾ひ集め、おみつと二人して、両方へ都合よく繰り出してやる。下の方の藁家より庄六、徳利を提げて出て

庄六　酒はあるが、肴がない。隣の入り聟めを煽てかけて。

ト云ひ／＼、内へ入り、この體を見て膽を潰し

ヤア／＼、こりや何事ぢや／＼。

トこの中へ入る。これにて、おみつ、庄三は、ツッと上と下へ別れて入る。頓兵衛、取違へて、庄六を突きこかす。おつや、頓兵衛と思ひ、庄六を叩くゆゑ、ウロウロして居る所へ、おきの、庄六を尋ねる心にて出て來り、これを見て

きの　おつやさん、こりや、こちの人をどうさんすえ。

つや　ほんに、こりや庄六さんぢやな。

庄六　とんだ所へ來合つて、おれにまで刎ねがかゝるやつさ。

ト方々を撫で廻し

マア、何から起つた夫婦喧嘩だ。譯を云やいの。

頓兵　譯もへちまもない。彼奴を。

つや　アレ、聞かしやんせ。入り聟の癖に、太平樂が過ぎるわいな。コレ、なんぼピク／＼しやつても、釜の下まで、わしが物ぢやぞえ。

頓兵　エヽ、その頬桁を。

ト又かゝるを、両方とめて

庄六　ハテサテ、悪い合點。夫婦喧嘩は身代の破滅ぢや。

きの　無理云ふは、男の高下ぢや。モウ／＼／＼、何も云はぬがよいわいなア。

マア／＼／＼、おぬしから默りや／＼。

つや　わしが姫御前ぢやに依つて、どうしてもよいと、高を括つて居るわいな。

ト煙管にて下を叩き、立ち身に外け、煙草をのむ。

頓兵　エヽ、あんまりフワ／＼しやがるな。

ト鼻をつまみ、脇を向く。合ひ方になる。

きの　モウ／＼、二人ながら、何も云ひなさんすな。男の惡性は、どこの浦も同じ事ぢやわいなア。

庄六　ヤア／＼嬶め、そりや何を吐かす。爰は、内とは違ふぞよ。男が惡性するとは、何を惡性した。それを吐かしやがれ。

きの　そんなら、云ふぞえ。

庄六　聞かうわえ／＼。

きの　アノ、古門前のおかめと、ありや何ぢやえ。

庄六　豆腐屋のおかめは、ありや女サ。

きの　エ、、女子は知れてござんす。お前、あのおかめと懇ろして居やしやんせうがの。

庄六　妙な事を吐かすわえ。おれが又、おかめと懇ろして居るといふは、わりや、なんぞ證據でもあつて云ふか。

きの　證據のない事を云ふものかいなア。

庄六　そんなら、それを爰へ出せ。

きの　見せるぞえ。

庄六　見ようわえ。

ト　おきの、最前の守り袋を出して

きの　これでも、懇ろして居やしやんせぬか。

ト守り袋を打ちつける。庄六、取上げ、覺えなき思ひ入れ。

庄六　なんだ、これが證據か。おきやがれ。

きの　早う、見やしやんせいなア。

庄六　面白い〳〵。

ト中を見て、内より書付けを取り、出し見て

イヤ、この書付けは。

ト悄りする。

きの　なんと、覺えがござんせうがな。

ト庄六、合點のゆかぬ思ひ入れにて

庄六　この守り袋は、誰れが持つてゐた。

きの　アイ、問はいでも、云はにやならぬ。東隣りの治作さんと、こなさんが云ひ合はしての、この狂ひ。こなさんから預かつたおかめが起證ぢやと、治作さんが白状してぢやわいなア。

庄六　すりや、治作が持つてゐたか。アノ治作が。

トきつとこなし。

きの　なんと、起證であらうがな。

ト庄六、こなしあつて

庄六　如何にも起證ぢや。

きの　ドレ、見さんせ。

ト取らうとする。庄六、ちよつと隱し

庄六　イヤ、別に見せる事はならぬ。

きの　ならぬてゝ、見ずに置かうか。寄越さんせ。

ト取りにかゝる。

庄六　エ、、何をしやがる。

ト突き飛ばす。

きの　こなさんは〳〵。

ト かゝる　これより又、庄六、おきの女夫喧嘩になり
そこにある道具を打ちつける。おつや、惘りして

つや　アヽ、コレ〳〵、女夫喧嘩は勝手にしたがよいが、
この道具に、此方の物ぢやわいな。

ト道具を片附ける。

庄六　斯うなつて來ては、此方のあつちのと、見境がある
ものか。いま〳〵しいわい。

トせり合ふ。頓兵衛、とめて

頓兵　これはしたり、表へ人が立つわいの〳〵。マア〳〵
默りや〳〵。

きの　イヤ、默るまいわいな。

庄六　オヽ、默るな。默りやせぬぞ。

頓兵　さりとては、惡い合點ぢや。女夫喧嘩は、身代の破
滅ぢや。マア〳〵、おぬしから、默りや〳〵。

つや　さうでござんす。ちつとづゝの無理は、男の高下ぢ
やと思うて、モウ〳〵、何も云はぬがよいわいの。

庄六　イヤ〳〵云ふ。グツと云ふのぢや。

きの　云ひたくば、いくらでも云はんせ〳〵〳〵。

庄六　云はいでわい。

きの　云はんせ。

庄六　云ふ〳〵。

つや　云はんせ〳〵。

トせり合ひに立ちかゝる。

頓兵　情ない。また始まつた。

きの　おつやさん、挨拶なら、よしにして下さんせいなア。

庄六　さうぢや、挨拶は賴まぬ。サア、去んでもらひませ
う。去なんせ〳〵。

頓兵　ハテ、さういふ事なら、嚊、戻らうわえ。

つや　アイ〳〵、行きやんせう〳〵。

ト二人ながら、表へ出ようとして

頓兵　待てよ、爰に、おれが內だ。

つや　ほんに、さうぢやわいなア。

頓兵　なんのこつた。女夫喧嘩で、すんでに內を取逃へや
うとした。

つや　自體これもこなさんから、起つた事ぢやわいな。

ト頓兵衛をこづく。

頓兵　エヽ、又かいやい。

ト突きのける。

きの　サア、今の起請を見せさんせ〳〵。

ト庄六にかゝる。

つや　済まぬわいなく。
頓兵　此奴がく。
ト　これより、四人のせり合ひになる。
きの　サア、内へ戻らんせ。
庄六　否ぢや。
ト振り切る。
つや　奥へござんせ。
頓兵　知らぬわえ。
つや　イヽヤ、ござんせ。
ト　おきのは庄六、おつやは頓兵衞を引ッ張る。突きのけて、双方入り亂れになり、トヾ間違うて、おつや、庄六を引ッ張つて、捨ぜりふにて、正面の納戸口へ入る。おきのは頓兵衞を引ッ張つて下の藁家へ入る。テンツツになり、亦介、三度笠、股引、胸當て、飛脚の形にて、菅笠を持ち出て來り
亦介　土橋の際と聞いたが、大方、あれであらう。
ト本舞臺へ來る。頓兵衞、下の藁屋より出ながら
頓兵　取違へるといふて、程のあるものだ。イケ馬鹿々々しい。
ト小言を云ひく、こちらへ來る。

亦介　コリヤく、ちと物が聞きたい。
頓兵　ハテ、なんでごんすな。
亦介　當浦和宿に、百姓の頓兵衞どのと申すは。
頓兵　その頓兵衞は、わしぢやが、何の用ぢやな。
亦介　さては、其許でござるか。ヤレく、よい所でお目にかゝりました。私しは、横山外記さまの。
ト云はうとする。
頓兵　アヽコレ。
トあたりへ心遣ひして、押へる。合ひ方
亦介　さては、主人の御子息、大藏さまでござるかな。
頓兵　如何にも。其方は、親人の家來か。
亦介　ハイ、亦介と申す下郎でござりまする。あなた様には、鎌倉に御座なさるゝと承はり、主人の身の上、御内意の文通。拙者、飛脚となつて、鎌倉へ參りしところ、右の密書は人手に渡り、その翌日、細川の屋敷にて、御主人外記さま、あなた様に出合ひながら、印南が餘類、敵なりと附け狙へば、その場に足を留め難く、一先づお立退きなされ、その後承はれば、あなた様にも、國遠との儀、お行くへを尋ねよと、主人の下知に依つて、所所方々と尋ねめぐり、思はずこの地に參りかゝり、樣子

を承はれば、夜前より、當浦和宿をお越しとの噂、早速に參つた主人のお使ひ、右の仕合せでござります。

頓兵　如何にも。長の年月、親人は闇討にあひ、御最期と思ひしに、矢張り御存命。敵討が敵持ちと、手の裏かへす浮世の轉變。して、親人は、いづれにござる。

亦介　去年、細川家より、直さま江戸表を立退き、當時花園義家卿へと取入り、日毎の立身。只今にては、岩倉典膳と御改名なされ、花園家の諸太夫。急ぎ御上京あつて、然るべう存じまする。

ト此うち、上の藁屋の内より、おみつ、出かけ、この様子を聞いてゐる。

頓兵　すりや、親人には、花園家に。

トちよつと思案して

ムウ、よし／＼。幸ひ手に入つた細川家の重寶。

ト懷中より袱紗に包みし一軸を出さうとして

何かの諸用をしまひ、後より上京。この趣きを申し上げい。

亦介　拙者も、これより鎌倉仁木家に住み込み、多門正が實否を見屆けて、申し上げいとの仰せ付け。それにつけ印南が餘類、この邊にさまよふの由、見附け次第に返り討に。

頓兵　それをぬかつてよいものか。某方は一刻も早く。

亦介　然らば大藏さま。

頓兵　萬事は後より。

亦介　お別れ申しませう。

ト唄になり、元の道へ走り入る。頓兵衛、思ひ入れ。フトおみつを見つける。おみつ、さし足して逃げようとする。

頓兵　コレ／＼お娘、待ちや／＼。

みつ　アイ。

ト思ひ入れ。

頓兵　爰へ來や／＼。

みつ　アイ。

ト逃げたき思ひ入れ。

頓兵　ハテ、爰へ來いと云ふのに。

みつ　アイ。

ト怖々側へ來て

なんぞ用かえ。

頓兵　お娘、おぬしは、なんぞ聞いたか。

みつ　アイ……イ、エ。

頓兵　すりや、なんにも聞きはせんか……ハテナウ。

トこなしあつて、軒にある鎌を、ソッと取つて、隠し持ち

コレ、ちつとおぬしに無心があるが、聞いてはくれまいか。

みつ　無心とはえ。

頓兵　サア、その無心と云ふは。斯うだ。

ト鎌にて、一かせ突く。ウンとのる。時の捨て鐘になる。

みつ　ヤア、こりやわしを殺すのかいなア。

頓兵　身の上を聞かれたら、どいつでも生けては置かぬ。くたばつてしまへ。

ト引き寄せる。

みつ　アレエ〳〵。

ト聲を立てる。これにて、下の藁屋より、庄三出て、これを見て

庄三　ヤア、おみつさんを。

ト云はうとするを、頓兵衛、庄三を引きつける。おみつ、それと寄るを、鎌にてなぐる。此うち、庄三、有り合ひたる鍬にて、打つてかゝる。かい潜つて、鍬を打ち落し、庄三をも切る。

エヽ、口惜しいなア。おみつさん、お前は早う逃げさんせいなら。

みつ　イエ〳〵、わたしより、お前逃げて下さんせいなア。

ト互ひ〳〵に逃げい〳〵と、氣を揉む。よい程に、頓兵衛、庄三を又一かせ切る。ウンと苦しむ。おみつ、よろめきながら

アレエ〳〵。

ト聲を立てる。

頓兵　おとぼねを立てやがるな。

トあちこちと、鎌にてなぐり散らし、これより兩人をむごく殺し、死骸の隠し所に困り、方々見廻し、以前の四つ手駕籠へおみつが死骸を入れ、庄三が死骸も駕籠へ入れようとして、はじるゆゑ、詮方なく、前の流れへ入れ、鍬にて向うへ突き出し、直ぐに流れにて手を洗うてゐる。始終、時の捨て鐘、蛙の聲。上の藁屋の内より

治作　このおみつは、どこへ行き居つた事ぢやら。

ト云ひ〳〵出て、思はず頓兵衛と顔見合せ

頓兵　ヤ、わりや傳助。
治作　こなさまは、どうして爰に。
頓兵　イヤ、おりや、昨夜爰の內へ入り聟に來た。
治作　すりや、この內の入り聟と云ふは。
頓兵　思ひがけない。
治作　大藏さま。
頓兵　下郞の傳助。
治作　ハテ、變つた所で
兩人　逢うたなア、
　ト合ひ方
治作　大藏さま、斯う見たところが、味な風俗。こりやまだ、惡黨がやみませぬか。親御外記さま、意趣切りの間違ひの譯も、とつくりと聞いて居りまする。すりや外記さまは、日蔭のお身の上。まさかの時には、親御の命にも代らうといふ、お心はござらぬか。こなたの非道を見限つて、家出したわしでも、以前のお主と思うて、意見するのぢや。エヽ、こなたはなう。不所存なお人ぢやなア。
　ト頓兵衞、こなしあつて
頓兵　傳助、よく意見した。よく云うてくれた、忝ない忝ない。
治作　非義を見限り、お暇を貰うても、喰ひ込んだ御扶持の恩を、忘るゝやうな傳助ぢやござらぬわいの。
頓兵　面白い〳〵。そんなら、矢ッ張り主ぢやぞよ。
治作　例へ主でも、善は善、惡は惡、道を立つるが忠義の潔白。
頓兵　すりや、善惡の分るまでは
治作　他人と他人。
頓兵　以前の主從。
治作　近所の附き合ひ。
頓兵　後に逢はう。
　ト唄になり、頓兵衞、心を殘し、正面の家へ入る。治作殘り、思ひ入れして
治作　久し振りでお目にかゝつた大藏さま、少しはお心も直らしやれたかと思ひの外、じだらくなあの風俗、もう云ふまいと思うても、まさか、お目にかゝれば捨てゝも置かれず、どうぞ誠の人間にして、進ぜたいものだがなア。
　ト思案して居る。合ひ方になり、奥より
庄六　燒餅喧嘩のお相伴で、さま〴〵な目に遭ふやつよ。

ト呟き／＼出て、治作を見附けて
オ、治作、爰に居やるか。

治作　庄六か。どうしておぬしは、爰に居た。

庄六　サア、聞いてくれ。山の神が荒れ出して、亂騷ぎであつた。

治作　イヤモウ、どこの荒神さまも、氣の強いには困り果てたものだ。

庄六　イヤ治作、おぬしに、ちつと見せる物がある。

治作　おれに見せる物とは。

庄六　イヤ、外でもない。これ、覺えがあるか。

ト以前の守り袋を、前に置く。治作、見て恟りする思ひ入れ。

なんと、おぬしが守りであらうがの。

ト治作、こなしあつて

治作　如何にも、こりや、おれが大事にかける守り袋だが
どうしておぬしが手へ。

庄六　いよ／＼、おぬしが守り袋に違ひないか。

治作　ハテ、異な事を念を押す。おれが守に違ひなければ。

庄六　違ひなくば…主人の敵、遁がれはあるまい。

ト息杖に仕込みの刀を抜き、切りつける。かい潜つて、手早く莨盆にて、しつかと受け留め

治作　待て、庄六、急かずと樣子を云へ。仔細はどうぢや。

庄六　ヤア、恍けまい。御主人の敵といふ、證據は即ち、その守。

治作　何がなんと。

トまた庄六、切り込む。治作、引き廻し、息杖をキツと構へて、兩人、しやんと見得になる。東西の家よりおさえ、おきの出て、この體を見て、ためらひ、樣子を聞いて居る。

庄六　女房が悋氣の云ひ募り、不思議に手に入るその守り、開き見れば、横山外記が系圖書。さてはと知つたる汝が俗性。これを所持なす汝こそ、横山外記が悴、大藏であらうがな。

ト治作、思ひ入れ

治作　して、身共が、横山大藏ならば。

庄六　六年以前、其方が親外記、身共が主人印南十内どのを討つて立退き、主人の奥方、御子息志津摩さま、身共は譜代の若黨白坂文治。主從諸とも外記を尋ぬれど、

今に於て行くへ知れず。さるに依つて主従と引き別れ東海道、中仙道に態を變へて、徘徊するも、敵の手がゝりを求めん爲。外記が忰とあるからは、骨肉といひ、敵の片割れ、ぶツ放して未來の供養。サア、横山大藏、逃がれはあるまい。抜き合はして、勝負々々。

ト これを聞いて、おさえ、こなし

治作　如何にも、證據ある上は、包むに及ばぬ。併し、大藏さまは身共が主人。元來身共は、奥州に於て、宮城何某が忰、仔細あつて、九州に漂泊し、浪々のうちに産れし身共、成人して大藏どのへ奉公。その後、悪黨を見限り、出國はしたれども、主人は主人、印南がゆかりとあれば、大藏どのに成り代つて、誰れ彼れの容赦はない。返り討に討ち放す。覺悟いたせ。

ト 息杖の刀を抜いて、キッと構へる。これを聞くうちおきの、こなし。

庄六　敵の餘類は、根を斷つて、葉を枯らす。觀念ひろげ。

治作　見事討つかよ。

庄六　おんでもない事。

治作　サア。

庄六　サア。

兩人　サア。

ト 切り結ぶ。おさえ、おきの、左右より入つて留める。

さえ　コレ、待たしやんせ、こちの人。

きの　早まつて下さんすな。

治作　なにを。

ト 引きかけて切り結ぶ。おさえ、二枚屏風を取つて、中を隔てる。兩人、切り込む拍子に、屏風を切る。おさえ、おきの、片々の屏風を取つて、おきのは治作が刃物、おさえは、庄六が刃物を、左右にて押へる。四人、キッと見得になる。

兩人　マア〳〵、待つて下さんせいなア。

庄六　女房ども、敵の枝葉を討つて捨つるを、なんで留める。

治作　俗姓を聞いたら、生けては置かぬ。邪魔せずと退け退け。

さえ　イエ〳〵、いづれが討つても討たれても、互ひに取り合ふ聟に舅。

きの　討つ討たれぬその先に、わたしらにも得心させ、一

家の緣を結んでから。
さえ　さもないうちは。
きさ　討たさぬ〳〵。
　ト双方こなしあつて
庄六　ムウ、御主人の仇を晴らすに、一家の緣結ぶといふ
　おさえどの〻一言。
治作　忠義にめで〻勝負する兩人。聟に舅といふ、おきの
　どの〻詞。
庄六　樣子があらう。
治作　樣子はどうぢや。
きさ　サア、その樣子といふは〻
　ト一度に守り袋を出して
　これを見て下さんせ。
　トおきのは治作へ、おさえは庄六へ渡す。兩人、見て
庄六　この守り袋は、白地の錦。
治作　この守り袋は、萠黄の錦。
　ト兩人、片手にて口を開き、書附けを出して見て
庄六　ムウ、臍の緒に記せし幼な名。すりや、治作が女房
　といふは。
さえ　アイ、幼少で別れた、妹でござんすわいなア。

治作　庄六が女房、この臍の緒に記したるは、覺えある我
　が家名。
きの　わたしが實の兄さんぢやわいなア。
　ト治作、庄六、顏見合せ、思ひ入れ。
庄六　親權平どの〻、兼ねての噂。國で別れた妹があつ
　たと聞いたが。
さえ　奧州で生れたわたし、女子の子は御奉公の妨けと、
　お屋敷へ出入りの町人、あのおみつが實の父御へ養子に
　貰はれ、その時、肌に添へありし臍の緒、白地の錦の守
　り袋、これを證據に、成人の後、兄弟の名乘りをせいと
　養父のお話し〻
治作　ムウ、幼少にて家出したれば、委細樣子は知らねど
　も、さては、其方が妹であつたか。
きの　お果てなされた親達が、常々のお話し。もと父さん
　は奧州で、印南十內さまの御家來、樣子あつてお暇を賜
　はり、九州へ流浪のうちに、產れた兄弟。其うちに、父
　さんは死なしやんす。お前は家出。その樣子を母さんが
　常々のお話し。臍の緒を入れ置きし萠黄の守り袋、これ
　を印に廻り逢はんと、親子もろとも奧州へ立越えしに、
　母さんも御病死。緣でかな、文治どのと馴染み、お主樣

の御最期より、遂に流浪の今の身の上。
さえ　知らぬ事とて、わたしが兄さん。
きの　お前の妹。
さえ　樣子といふは
兩人　この通りでござんすわいなア。
治作　ムヽ、師南十内どのは、親人の御主人であつたか。
庄六　身共とも朋輩。
きの　知らぬ兄弟。
治作　互ひに契なり
庄六　小舅なり。
きの　廻り／＼て
さえ　不思議の縁を
四人　結んだよなア。
ト四人顏見合せ、こなし。治作、拔き身を捨て眞中へ
ドッカと坐り
治作　サア、敵の餘類、討つて主人へ忠義を立てい。
さえ　コレ、互ひに無事を思ふがゆゑ。打明けたこの場の
仕儀。
きの　死なずと仕樣はござんせぬかいなア。
治作　イヽヤサ、一家は內證。妹、女房、其方達が爲にも
主人の敵。扶持を喰ひしこの傳助。白坂文治、[illegible]する
は、緣者と思うて後れたか。
庄六　オヽ、さうぢや、誤まつた。他人ならば、忠義を見
て、免す品もあるべきが、緣者と聞いて容赦はならぬ。
治作　合點がついたら、サア／＼、早く討て。
庄六　イヤ、覺悟の一命、討ち取つて手柄にならうか。立
ち上がつて、サア、勝負々々。
治作　尤も。この上は返り討ぢや。覺悟いたせ。
庄六　何を小癪な。
トまた拔き身を取り上げ、立ち向はんとする。兩人、
支へるを、突きのける。入れ代つて、おさえ、治作を
留め、おきの、庄六を留めて
きの　コレ、忠義々々と云はしやんすが、いづれ、治作さ
んの父御は、こなたのお主の御家來、心を合せて敵の詮
所、お主へ力を添えるのが、忠義の道ではござんせぬか
いなア。
さえ　おきのさんの云ふ通り、橫山は假のお主、當座の義
理に、死なしやんしては、親御の古主へ不忠となり、親
達へは不孝となり、よも未來から出かしたと、お喜びは
あるまいぞえ、茲の道理を聞き分けて、この場の勝負は

やめて下さんせ。討つは夫、討たるゝは兄さん、中に立つ身の悲しさを、思ひやつて下さんせいな。

ト泣く。兩人もこなしあつて

庄六　治作、いま討たるゝは、其方が心一つ。當座の主人へ義理は立たうけれど、未來の親へ不孝であらう。

治作　如何にも。知らぬうちは是非もなし、印南の家を、親人の主人と聞いては、見捨てるは不忠の第一。

庄六　彼れを思ひ

治作　これを思ひ

庄六　この場の勝負は

治作　ならぬわやい。

さえ　すりや、わたしらが云ふ事を。

きの　聞き入れて下さんすか。

ト兩人、拔き身をしやんと納める。

兩人　ア、嬉しや。

ト落ちつきしこなし。此うち、頓兵衞、納戸口よりズツと出て

頓兵　治作、勝負せぬは、卑怯であらう。

トおさえ、頓兵衞を見て、恟りして

さえ　ヤア、あなたは。

頓兵　淺草で對面した、横山大藏。

庄六　ナニ、横山大藏とな。

トきつと身構へする。

頓兵　ヤイ傳助、身共親子を付け狙ふ印南が下郎、なぜ踏み込んでぶち放さぬ。相手が怖いのか、恐ろしいのか。茲な大腰拔けめが。

庄六　外記が悴と名乘つて出たは、自業自得。敵の片割れぶち放す。覺悟ひろげ。

頓兵　何を小癪な。

ト拔き合はさうとする。治作、押し隔てゝ、眞中へ入り。

治作　イヤ、この勝負は、今はなるまい。

庄六　外記が悴、討つて主人へ手向けにするのだ。

頓兵　親人を付け狙ふがらくためら、一々に返り討だ。邪魔せずと退け。

治作　例へ印南は親人の古主でも、年一合でも御扶持を喰ひ込んだ後の御主人。この場の勝負を見つがいでは、一旦の義理が立たぬ。さすれば、印南家の助太刀は、猶ならぬ。親の主人と我が身の主人、四丁に掛つた胸の内を推量して、この場の勝負を身共に、預けてはくれまい

か。
きの　初めて逢うた兄さんのお頼み。
さえ　夫の心を推量して
きの　勝負を延べて
兩人　下さんせいなア。
　ト右のうち、庄六、思案する事あつて
庄六　この場の勝負、容赦して遣はさう。
さえ　すりや、聞き入れて
庄六　女房ども、もう何時。
きの　されば、七ツでもござんせう。
庄六　暮れ六ツまで、容赦するは一家のよしみ。大藏が命は、治作、お身にしつかと預けたぞ。
治作　忝ない。しつかりと預かつた。
　ト頓兵衛、思ひ入れして
頓兵　十内程の侍ひを、なんの苦もなく討ち留めた親人は、劍術無双の天晴れの達人。その子息の大藏さまだ。うぬら如きの蠅虫野郎が手くさいで、討ち留めんなぞとは、及ばぬ事、叶はぬ事だ。十内が女房、忰、助太刀する大高主殿、その外、身寄りの奴輩、どいつでも生けては置かぬ。覺悟して待つて居れと、皆の奴等に吐かしやアがれ。
庄六　うぬ、その廣言を。
　ト思ひ入れ。治作、押へて
治作　暮れ六ツまでは預かる切端。
頓兵　繩をゆるめて、此方の日算。
きの　マア、それまでは
さえ　長家の附合ひ。
庄六　女房、來い。
頓兵　傳助、參れ。
　ト唄になり、頓兵衛、治作、こなしあつて、納戸口へ入る。庄六、おきのを連れ、下の藁屋へ入る。おさえ殘ると、合ひ方。
さえ　ほんにマア、知らぬ事とは云ひながら、朝夕出合ひし庄六さんを、現在の兄さんとも知らず、差合ひくらぬおどけ話し、互ひに悋氣の云ひつのり、味な事から思はず、絶えて久しき兄弟の、名乘りをすると云ふは、ほんに血筋といふものは、爭はれぬものぢやなア……それにつけても夫の心底、現在お主は敵の片割れ、狙ふは親御の御主人樣、中に立つ身の切なさは、思ひやつて居ながらも、今の勝負を暮れ六ツまで、預かつた夫の心は。

ムウ。
ト思案のこなし
暮れ六ツと云うても間もない、時を限つて、預けた兄さんの心底。時が切れたら討つ所存か。但し、一家のよしみを思ひ、一旦この場を助ける心か。もし討つ心なら、夫は主人へ不忠の汚名。この身は夫へ義理立たず。こりや、兄さんの心底、討つか討たぬか、實否を正したその上で、兄さんへ折入つて、頼むより外はない。マア、何より兄さんに逢うて、ソレ。
ト行かうとして
イヤ／＼、今さし付けて尋ねたとて、明らさまに云ひもさんすまい。その實否を聞き糺すには、幸ひの。
ト下の方の駕籠を見附け
あの駕籠の内に忍んで、兄さんの様子を、ソレ。
ト駕籠の垂れを上げようとする。この時、頓兵衛、ツカ／＼と出て、駕籠を圍ひ
頓兵　ヤア、この駕籠を何とする。
さえ　エヽ。
ト恟りして
サア、この駕籠は、オヽ、それ／＼、この駕籠は、問屋から借りてある大事の商賣道具ぢやに依つて、内へしまつて置かうと思うて。
トまた寄らうとするを、引き廻し
頓兵　待て。コリヤ、なんぞ見たか。知つてゐるか。
さえ　ヤ、なんと。
頓兵　この駕籠、一寸も動かす事。マア／＼、ならぬならぬ。
トこれにておさえ、思ひ入れ。
さえ　合點のゆかぬ今の詞。殊にこの駕籠を庇はしやんすといひ、様子あり氣なこの駕籠。さう聞いては猶以て、捨てゝは置かれぬ。
ト駕籠へかゝらうとする。兩人、立廻りにて、駕籠の垂れを上げる。内におみつの死骸、入れてあるゆゑ、恟りして
ヤア、こりやコレ、妹が死骸。誰れが殺した。おみつイなう／＼。
ト呼び生ける事度々あつて
すりや、もう絆は切れたか。ハア、ヽヽヽ。
ト泣き落す。此うち、頓兵衛。思ひ入れあつて、向うへツカ／＼と行きにかゝる。おさえ、キッと思ひ入れ、

ツカ〳〵と行き、頓兵衞を引き留め

頓兵　大藏さま、こりや、どこへお出でなされまする。

　ト構はず行く。おさえ、引き留め

頓兵　どれ〳〵と云つて、身が行きたい所へ罷るのだ。

さえ　イヤ、そりやなりますまい。暮れ六ツまでには、勝負を預けた夫傳助なりや、お前の儘にはなりますまい。

頓兵　サ、そりやア。

さえ　殊に最前からの樣子と云ひ、こりや、こなさんが手にかけて、おみつを殺したのぢやなア。

頓兵　ヤア。

　トぎつくり。

さえ　エヽ、お前樣はなア。科ない妹を手にかけ、知らぬ顏で立退かうとは、あんまり非道な大惡人。けりやう、わたしが妹なればこそ、もし、餘所外の娘なら、お前を安穩で置きませうか。わたしが爲には義理のある、大事の妹なれど、夫に連れ添ふこの身なれば、惡黨なお前でも、お主と云ふ名が重いゆゑ、なんにも申しませぬぞえ。云ひませぬぞえ。現在妹が敵さへ、取る事ならぬこの身の悲しさ。どのやうにあらうと思うて下さりませいなア。その惡黨のお前でもな、お主樣と思へばこそ、忠義を思ふ夫の心、思ひやりがあるならば、此やうなむごたらしい、殺しやうがあるものか。思へば〳〵恨めしい、口惜しいわいなア。

　ト泣く。頓兵衞、こなしあつて

頓兵　なんだ、恨めしい。今わりやなんと云つた。夫に連れ添ふからは、この大藏さまは、お主だと云つたぞよ。そのお主樣に向つて、何を恨む。何が悲しい。例へどつであらうが、この大藏さまのお氣に背くと、直ぐにお手討だ。道で身共を恨めば、いつその事、われも。

　ト拔きかゝる。この時、奧より治作、ツカ〳〵と走り出で、頓兵衞を留めて

治作　大藏さま、待たつしやりませ。

頓兵　コリヤ傳助、なんで留める。

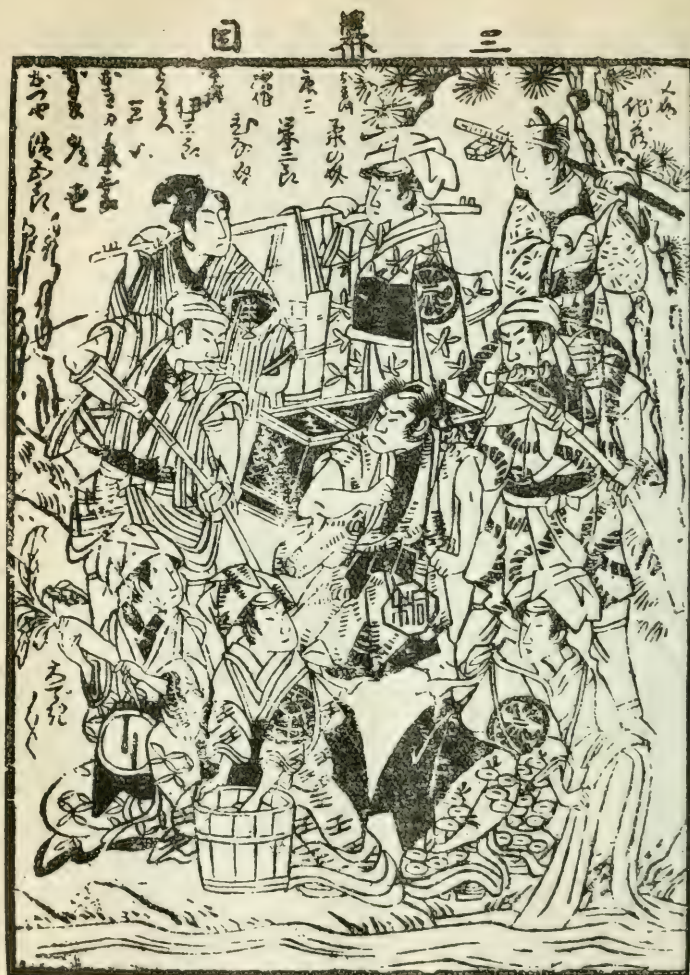
治作　ちつと、こなさんに用があつて。

頓兵　おみつとやらを、手にかけた身共ゆゑ、うぬも恨みを吐かす心か。

治作　イヽヤ、假にも御主人のお氣に背いて、お手討に遭うたは、彼れめが不運。恨みとは存じませぬ。

頓兵　よい料簡だ。して、おれに用といふは。

治作　親御、外記さまのお行くへが聞きたい。

頓兵　聞きたくば、云つて聞かさうが、われが底意は、敵か味方か。
治作　ヤ。なんと。
頓兵　茲な不忠者めが。
　ト治作を引き付ける。
治作　ナニ、不忠者めとは。
頓兵　うぬ、親人の行くへを云はせ、印南が餘類へ裏返らうといふ巧みであらうがな。
治作　エ、情ない。そりや、こなた樣の疑念といふもの。親旦那のお行くへを尋ね、裏返る心なら、先刻の勝負を預かり、これ程までに、心を碎きませぬわいの。
頓兵　吐かすな。うぬがやうな不忠者は、斯うして／＼斯うするわえ。
　トさん／＼に打擲する。おさえ、堪えかね
さえ　現在妹を殺されながら、チツと辛抱して居るも、お主樣と思ふゆゑ。その忠義をも無足にして、非道の打擲。如何にお主の高下ぢやとて、そりや又、あんまり。
　ト立ちかゝらうとするを、治作、おさえを引きのけ
治作　コリヤ、例へ逆さまな事にもせよ、詞返しならぬが主從ぞ。四百四病の病より、たつた一字の主といふ磐石は、押すに押されぬ家來の因果。辛抱してくれいやい。
　ト泣いて云ふ。
頓兵　サ、それ程、この大藏さまを大切に思ふなら、印南方のあの下郎め、目通りで殺らして見せい。
治作　サ、その儀は。
頓兵　討たぬか。何として、えゝ討ちはせまい。討たれまい。うぬ、それでも武士だと思ふか。扶持をくれたその恩義を思はぬは、人間でない。犬だ猫だ、獅子身中の虫とは、うぬが事だワ。
　トいろ／＼振り廻し、むごくして
われがやうな馬鹿者は、家來と思へば胸が悪い。主從でないぞ、勘當だ。
治作　ヤ、ナニ、拙者を勘當とは。
頓兵　オヽ、勘當も勘當、七生までの勘當だ。
治作　すりや、どうあつても。
頓兵　主でない、家來でない。
治作　家來でなくば、斯うするわえ。
　ト頓兵衞を引ッかつぎ、見事に取つて投げる。ト下の藁屋より、庄六、旅の形。おきの、抱へ帶、一腰差し

初演の繪番附

ト出る。おさえ始め、四人にて、頓兵衛を取巻く。

庄六　横山大藏。

四人　サア、覺悟いたせ。

ト取巻いて云ふ。頓兵衛、悧りしながら起き直り、眞中にドッカリ胡坐をかいて

頓兵　待て〳〵。うぬらは、こりや、寄つてたかつて、ひがいすな、身共一人をいとしほさうに、もみくちやにするな。ヤイ、そちらの奴め、うぬらが手にあふ大藏さまぢやない。出直せ〳〵。

庄六　へ、、、しやらくさい事をぬかしたりな。國元以來惡事のあり條、見付け次第、ぶち捨ていと、細川どの、御内意。うぬが命はお屋敷から、疾に貰つて置いたわやい。

きの　殊に、最前様子を聞けば、おみつさんも、弟の庄三も、其方の手にかけ殺したとの事。知らぬ體にして居たも、其方を取逃がすまい爲ぢやわいなア。

庄六　一方ならぬ横山大藏、覺悟ひろげ。

皆々　覺悟々々。

ト詰め寄る。

頓兵　ヤイ〳〵、うぬらは、覺悟々々と、頬桁が過ぎるぞよ。ヤイ〳〵傳助、現在の主人にあの如く、敵たふ奴を、默つて見て居る場所であるまい。サア、踏ん込んで、加勢しろ〳〵。

治作　イヽヤ、加勢はしますまい。

頓兵　そりや、なぜ。

治作　主でない。

頓兵　主でないとは。

治作　たつた今、勘當だと云うたぞや。

頓兵　ヤア。

ト悧り。

治作　しかも、念を入れて、七生までの勘當だと、云つたではないか。

頓兵　されば、そんな事を云うたかいの。

トぐにやりとする。

治作　惡黨を見限つて、家出した身共なれど、こなたの口から、主從の縁を切らねば、一旦の義が立たぬ。そこで、この坪へやらかしたのサ。

頓兵　出來た〳〵。

ト思はず云うて、手を打つ。

庄六　合點がいたら、くたばつてしまへ。

ト刀の反りを打つて、キッとなる。頓兵衛、悔りして
頓兵　待て／＼。最前、身が一命は、傳助に預けたぢやないか。コレ傳助、わりや、預かつたぢやないか。手向ひなるまいぞよ。
さえ　サア、それも暮れ六ツ限り。
頓兵　なんと。
さえ　もう、日は暮れてあるわいな。
頓兵　ドレ。
ト空を見て
いかさまなア。
庄六　親外記は、いづくに居るぞ。
治作　眞直ぐに白狀々々。
頓兵　もう、一生懸命ぢや、親人の在所は。
四人　外記が在所は。
頓兵　上方と聞いたばかり、住居は知らぬ。
四人　すりや、上方とな。
庄六　それ聞いたら、この世の暇。
ト飛びかゝるを、治作、庄六を下へ引き廻し
治作　コレ、この場の命は。
庄六　でも。
ト思ひ入れ。
治作　こればかりは、古主へ寸志。
トこれを聞き、頓兵衛、又キッとなつて
頓兵　叶はぬ腕立て、小癪な事を。
ト力む。
庄六　エヽ、命冥加な。
治作　ハテ、敵の行くへ知れたる上は。
さえ　御主人方へ、片時も早う。
きの　直ぐに旅立ち。
ト庄六、おきの、こなし。
頓兵　うぬらをやつちやア。
トかゝるを、治作、頓兵衛を引き廻す。おつや、出かゝり
つや　こちの人を、なんとする。
ト有り合せたる鎌を取つて、立ちかゝる。庄六、引き廻す。おつや、庄六に打つてかゝるを、抜き打ちに、ポンと切る。頓兵衛、これはと寄るを、庄六、刀を振り上げる、頓兵衛、ぐつたりと下に居る。身を縮め、庄六を治作、とめる。この途端、各々引ッ張りよろしく、カチ／＼／＼／＼。拍子、幕。

五幕目　新吉原の場

役名――三浦屋傾城大岸實ハ十内女房お民。新造、岸里。同、岸の戸。井筒屋おさよ。女中、おなか。道具屋萬七。三好吉十郎。高井屋庄五郎。太皷持ち、紙子義八。醫者、浮田妙庵。禿、磯彌。同、磯次。若い者、清八。井筒屋喜三郎。込山左次馬。綾瀨數右衞門。福田金兵衞。白坂甚平。白坂文治。

本舞臺、三間の間、井筒屋と染めたる軒暖簾、上の方へ寄せて、長暖簾、一文字を入れし、綺麗なる張付けよろしく、所々神棚、お福の面など取り付け、靑簾かけ、行燈、燭臺二つ三つ飾りつけ、長床几ならべ、すべて仲の町、七軒茶屋のかゝり、爰に福田金兵衞、羽織、着流し、脇差を側に置き、町人の拵らへよろしく、三好吉十郎、高井屋庄五郎、同じく一本差しの町人の拵らへ。浮田妙庵、醫者。紙子義八、太皷持ちの形、皆々拳を打つて居る。井筒屋おさよ、茶屋の女房の形。おなか、下女の拵らへにて酌をして居る。吸ひ物、酒、取散らし、騷ぎ、拳の聲にて幕明く。

皆々　サア〳〵旦那、おあがりなされ。

ト金兵衞、是非なく、杯を取上げる。

さよ　時に旦那、今日はどつちへお出でなさんしたかえ。

なか　王子でござりますか。眞崎の御開張かえ。

金兵　今日は一日屋根船で、向島よ。

吉十　イエ又、咬へ煙管で、白髭の方を、ぶら〳〵歩行はようござりますよ。

庄五　イヤ、よいと云や、今日弘福寺の前で見かけた御殿模樣は、美しかつたぢやないか。

妙庵　そりやよかつたが、鯉の汁のぬるいには、グッと大肝積竹で、七夕虫にさはつたわえ。

皆々　そりや、何といふ洒落だ。

妙庵　ハア、甚だ虫にさわつたといふ事よ。

皆々　おきやアがれ。

金兵　時に、義八は、どこまで行つた。

義八　今日は、江戸へ出ました。あなたの御近所にちよつと。

三郎　さう云つても、色とは思はねえよ。

皆々　ハヽヽヽヽ。
さな　マア、お一つ、おあがりなされませ。
　トまた騒ぎになり、花道より、萬七、序幕の道具屋の拵らへ、萠黄の風呂敷に、刀を巻き、水指の竹の花活を持ち、出で來り、直ぐに舞臺へ來る。金兵衞を見て
萬十　金兵衞さまぢやござりませぬか。
四人　こりやア、田原町の萬七さんぢやないか。
金兵　なんだ〳〵。面白い掘出しでもあつたか。
萬七　左樣サ、この間お話し申しました品を、お宿へ持つて參りましたら、向島へと申す事ゆゑ、お尋ね申して、くる〳〵後ばかり追つて居りました。
金兵　そして、話しの物を持つて來たのか。
萬七　サア、持つて參りましたが。
　トおさよ、おなかへ心遣ひのこなし。金兵衞、呑み込み
金兵　コレおさよ、今日は、一日酒浸りで、腹中甚だ妙。山かけ豆腐を拵らへてくれぬか。
さよ　ハイ〳〵、畏まりましたが、それより、なんと、大坂漬と甘露梅で、さら〳〵と御膳は、どうでござりまする。
皆々　有り難いね。
金兵　そんなら、云ひ付けてくりやれ。次手に、燗もはつたりものにして。
さよ　畏まりました。
　トおさよ、おなか、奥へ入る。
金兵　サア、遠慮はない。萬七、その代物は。
　ト萬七、風呂敷包みより、白鞘を出して
萬七　モシ、これでござります。
　ト金兵衞、取つて見て
金兵　これが細川家の重寶、仁王三郎とやらか。
萬七　左樣でござります。先の賣り主は田上丈八と申すお侍ひ、元はキッとした、盗み物でござりまする。
金兵　よし〳〵。して、値段は。
萬七　サア、晴れた物なら貳百兩の折紙でござりまするが、根が暗いゆゑに百兩サ。
吉十　ナニ、アノ、それが百兩か。
妙庵　出刃庖丁から見れば、高いものだね。
義八　でも、初鰹の一兩二分から見りや、廉いものだ。
　ト庄五郎、腰に差した、ポンといふ煙管やうの脇差を拔いて

庄五　貳百疋なら、お讓り申しませうが、旦那、こりやどうだ。

萬七　無駄を云ひなさんな。

金兵　イカサマ、尋ねても直ぐにない代物。シタガ、もちつと値段は引かぬか。

萬七　どう致しまして、平常、お世話になるお前樣だからわたしは、たゞ中次ばかりサ。

金兵　また商賣じみるよ。そんなら、買つて置かうが、卅や四十は爰にあるが、何もこれを渡して、後金といふ理窟でもない。萬七や、斯うしてくれないか。この代物を直ぐにおれが預からう。その代り、ちよつと一筆、書いてやらうから、それを持つて、明日、内へ取りに來てはどうだ。

萬七　なにサ、外さまぢやなし、隨分、それでようござりまする。

金兵　そんなら、ちよつと硯箱を……萬七、おぬしが矢立を貸してくりやれ。

ト萬七が矢立を出す。金兵兵、鼻紙へサラ／＼と書いて

「一札の事、仁王三郎の刀一腰代、百兩に相極め、代物慥かに受取り申し候ふ。右代金の儀は、明日、この手形を以て相違なく、相渡し申すべく候ふ、道具屋萬七どの福田屋金兵衞」これでよいかえ。

ト一札を萬七に渡す。

萬七　これには及びませぬが、あなたの御念でございますから、左樣なら、明日までお預かり申しませう。

金兵　併し、高い物だぞえ。

ト白鞘を金兵衞、受取つて見る。

萬七　とんだ事を仰せられます。

金兵　高く買つた祝ひに、今夜は三浦屋へ、一緒に行きは仲の町か。

萬七　そりや有り難う。久しく三浦屋の二階へも上がりませぬ。お供いたしませう。

皆々　萬七さんは、遣り手に足があるといふ風だぞえ。

萬七　こりやアむごい事を云つたものだ。

ト奥より、おさよ、出て來て

さよ　モシ旦那、お茶も出來ましたが、二階へお出でなされませぬか。

金兵　イカサマ、爰より二階が久しぶりでよいわえ。

萬七　二階々々。

初演の絵番附

ト考へる。
皆々　二階々々、たわけは口元だよ。
萬七　よく地口の先を折るぞ。
皆々　ざまは。ハヽヽヽハヽヽヽヽヽ。
さよ　おなかや〳〵。
なか　アイ〳〵。
ト おなか出る。
さよ　あの大岸さんへ行ての、花魁に、金兵衞さんがお出
でなされた。お知らせ申しや。
なか　アイ〳〵、畏まりました。
ト箱提灯をつける。
さよ　左樣なら、マアお二階へ。
金兵　サア、行きやせうか。
皆々　サア、お出でなされませ。
ト淸搔きになり、金兵衞、白鞘を持ち、皆々付いて奥
へ入る。此うちおなか、箱提灯をさげ、花道へかゝる。
向うより込山左次馬、羽織、着流し、大小の形、中間
を連れて出て、花道にて行き合ふ。
左次　おなかぼう、どこへ行きたまふ。
なか　ハイ、どなたえ。

ト左次馬を見て
オヤ、左次馬さま、ようお出でなされました。ちよつと
一丁目まで。
左次　コリヤ〳〵、一丁目へ行くなら、大岸には、おれが
來た事は、沙汰なしぢやぞや。
なか　イエ〳〵、お知らせ申さぬと、後で叱られますよ。
左次　ハテ、知らせては、あやまるわえ。
なか　イエ〳〵〳〵、申しまする。
トおなか、このせりふを云ひながら、向うへ入る。摺
れ違つて、白坂文治、羽織、大小の形にて出る。
左次　ハテサテ、知らせては悪いといふに。エヽ、意地の
悪い。
ト此うち、文治、左次馬を見て
文治　アイヤ、卒爾ながら、物が承はりたう存じます
る。
左次　なんでござるな。
文治　見請けましたるところが、當所御案内のお方のやう
に存じられますが、この里に、大岸どのと申す傾城がご
ざりまするかな。
左次　ナニ、大岸、その大岸は、身共が。

ト こなしあつて
成る程、あります。
文治　して、それは、何方の女郎衆でござりまする。
左次　江戸町一丁目、三浦屋。しかも大岸は、お職サ。
文治　江戸町一丁目、三浦屋でござりますかな。
左次　ハテ、くどいお人だ。身共、心急きまする。細見を
買つて見さつしやるがよい。
文治　忝なう存じます。お庇で承知いたしましてござり
まする。
左次　ハテ、野暮なお侍ひな。
ト左次馬、構はず、舞臺へ來る。此うち、おさよ、そ
こらを片付けてゐる。
左次　おさほう、どうぢや〳〵。
さよ　よう入らつしやりました。たつた今も、お噂を致し
ました。
左次　それは忝ない。
ト上へ上がる。おさよ、莨盆を出す。此うち、文治、
鼻紙へ石筆にて、所書を書き、名前を留める事あり。
左次馬は、此うち、狀差しの文を見る。
文治　是非とも、今宵はお目にかゝつて。さうぢや〳〵。

トこなしあつて、方々見廻し〳〵、下座へ入る。
左次　おさ〳〵、あの文に、身共が名が書いてあるが。
さよ　ほんに、今朝ほどお屆け申すのでござりましたが、
御免なされませ。ツイ〳〵忙しいので。
ト文を取つて來り
花魁から、昨日お文が出て居りましたわいな。
左次　ムウ、大岸が文か、なんの出さいでもよい事を。あ
やまらせるの
ト云ひながら、開いて見る。中より起請出る。
さよ　何か怪しい物が。
ト寄合つて見て
こりや、花魁からの御起請でござりまする。
ト左次馬、悔りして
左次　ナニ、起請か。ハテ、野暮な物を、マア、寄越した
な。どうか身共がのろいやうに思はれて……なんの、こ
んな事をせいでもよい事を。
さよ　なんの、お前さん、誰れが左樣存じませう。互ひに
深うおなりなされては、野暮になるが色の習ひ。それ程
に思し召す花魁を、必らず〳〵、仇な事なされて、氣を
揉ませなされぬがようござりまする。

ト このせりふのうち、起證を肌に付けたり、讀んで見たり、いろ〳〵嬉しき思ひ入れ。

さよ　ほんに、お二人の仲が、これぢやもの、朝のお歸りが遲いも御無理はござりませぬわいなア。

左次　これは面目ない……有やうは聞いてくりやれ。どういふ事か、おれには、大岸も打解けて、憂い辛い勤めの話しを致すぢや。所で身共は返事をしながら、つい眠ると、何か耳を引ッ張るやら、啣へた楊枝で、顔中を突ついたりして、夜中、寐かし居らぬ所へ、外の客人がやかましく云ふゆゑ、ちよつとゝ云はれて、不肖々々に、自烈たいよと障子をピッシヤリ、廊下をトン〳〵と踏んで行く時は、誠に可哀さうにと、思はず泪が。ハヽヽヽ、野暮な奴の。

さよ　イエ、モウ、花魁も一通りでなく、お呼び申しなさるゝ事ぢやに依つて、ちとお前さんも、眠い目はなさりうちでござりまする。ほんに、あなたと落ち合つた客人は、大抵腹の立つ事ぢやござりますまい。

左次　イヤ、モウ、そこら中が、灰吹の音や、大小言で、大岸の色客は、どんな奴だ、面が見たいなどと云はれる時は、身共は、夜具をグッスリかぶつて、隱れて居るやつよ。

さよ　イエ、モウ、それがよろしうござります。そして、もう直ぐに、お出でなされますか。

左次　イヤ〳〵、どうでまんじりとも寐かさぬゆゑ、ちつとのうち、奧でトロ〳〵とやつてから行かう。

さよ　それもよろしうござりませう。そして、お供さんわえ。

左次　いづれも下宿へ。

ト 紙入れより二朱二つ出して、紙に包み

コリヤ〳〵角内、われは又河岸であらう。必らず女郎にかかれまいぞ。此やうなものでも、取るやうにしをれ。

ト 起證を、わざと見せびらかす。

中間　どう致しまして、わたしどもが。

左次　ハテ、手の無いやつな。ハヽヽヽ。

さよ　二疊敷が、およるには、靜かでようござりませう。

左次　承知々々。

ト 清搔になり、左次馬、奧へ入る。供は、下座へ入る矢張り、騷ぎの合ひ形にて、向うより、井筒屋弟喜三郎、羽織、着流しにて、先へ立ち、綾瀬數右衛門、羽織、着流し、大小にて出て來り

数右　喜三郎には、よい所で逢つた。どこへ参つた。
喜三　ヘイ、お蔵前まで参じました。ほんに、花魁から、文が出て居りました。
数右　なんぢや。大岸の所から文が出て居る。
喜三　左様でござります。マア、私しどもまで、お早う入らつしやりませ。
数右　成る程〳〵。サヽ、行きやれ。
ト矢張り騒ぎ唄にて、両人、本舞臺へ来て
喜三　姉さん、綾さんが入らしつたよ。
さよ　これは〳〵、ようお出で遊ばしました。
数右　時に、いま喜三郎が、大岸が方から、手紙が参つて居ると申したが。
さよ　左様でござります。お文が出て居りまする。喜三さん、それを、旦那へ。
ト喜三郎、状差しの文を持つて来り
喜三　成る程〳〵、大岸さんの手は、見事だぞ〳〵。
ト数右衛門へ渡す。数右衛門、取つて見て、段々文を讀み、封じたる起請を出し
数右　なんぢや、天罰起請文。
さよ　モシ綾さん、大分お派手でござりまする。

数右　なんの〳〵、此方は、たゞ一通りのやうに思つて居れど、おつなものさ、人には相縁奇縁とやら、どう致した事か、あの大岸が身共には、内證の入り譯、何もかも打明け、明日は當番ぢや、寐かしてくれいと申しても、聞入れず、何か耳を引ッ張つたり、鄭へた楊枝で頬を突つきしたり何かしをつて、寐かさす、それゆゑに、朝の歸りも、つい遅うなり、イヤモウ、容傾城の心が放れ、互ひに心底づくになつては、イヤモウ、埒もないものな。
さよ　でも、其やうなものまで、遣はさるゝ花魁のお心。随分とお優しうなされておあげなさるが、ようござりまする。
喜三　そりや姉さん、大岸さまも、綾さんの實なお心に、どうかなされての事サ。
数右　成る程、それゆゑ、大岸も、今では外の客のやうにも致さす、身も本妻のやうに存じ居るて。ハヽヽ、ハヽヽ、時におさよ、もう身共も、直ぐに行かう。提灯を付けてくりやれ。
さよ　イエ、モシ、ちつとお待ちなされませ。花魁へ、先程申し上げました事がござりますから、大岸さまがお見

えなさるでござりませうわいな。
數右　なんぢや、大岸が見える……左様なら、一服のまうか。
さよ　それがよろしうござりませう。
ト此うち、向うより、おなか、提灯をさげて戻つて來る。
なか　綾さん、ようお出でなされました。もう、花魁も、今お見えなされます。
さよ　左次馬さんの事を、申しやつたか。
なか　ハイ、左様申しましたが。
ト向うを見て
モシ〳〵、向うから來る提灯は、慥か花魁でござりまする。
喜三　ドレ、ほんに、大岸さんだ〳〵。
數右　ナニ、大岸がもう來やるとか。
さよ　ほんに、大岸さんぢやわいなア。
ト華やかなる出の唄になり、向うより、若い者清八、大提灯を持ち出て來る。後より三浦屋傾城大岸、襠裲傾城の形にて出る。後より、若い者、長柄をさしかけ出る。その後に禿磯彌、磯次、附いて出る。岸里、留め袖、岸の戸、振り袖、新造の形にて出る。皆々、花道に留まる。
さよ　花魁。
喜三　お早うござりましたの。
大岸　おかさん、お許しなんし。早う參りいせうと思ひしたが、持病の積で。
岸里　モシ花魁、もうさつぱりと、ようおざんすかえ。
岸の　また今の藥をあがらぬわいなア。
大岸　なんの、苦勞にしておくんなんずな。
清八　花魁、綾さんも、あれにお見えなされますぞえ。
さよ　ちとマア、おかけなされませ。
大岸　そんなら、そこへ參りんせう。子供、來や。
禿二　アイヽ。
ト皆々、本舞臺へ來る。大岸、床几へかける。皆それそれに並ぶ。おさよ、莨をつけて出す。
大岸　綾さん、よくお出でなさんしたの。
岸里　そして、いつの間に。
數右　イヤ、たつた今。今日は、是非晝からと存じたところ、御用が繁いで、つい遲うなつた。
岸の　なんの、餘所々々に、面白い事があつて。

数右　イヽヤヽ實々。
大岸　嘘ばつかり。
ト膝を抓ろ。数右衛門、こなし
数右　アイタヽヽ。何も抓るゝ科はせぬぞや。
大岸　抓つたが、腹が立つかえ。お前、わたしが憎からう
な。ほんに、文を見てかえ。
数右　成る程、文は届いた。大岸、あの起證は、ほんに、
わしが所へ。
大岸　ほんでなうてわいなア。疑りなんすだけ、腹が立つ
わいなア。
数右　ハヽヽ、成る程、こりや、身共が悪かつたが、ついぞ
今まで。
ト、びんとこなし。数右衛門、思ひ入れあつて
ト云はうとして、皆々を見て、小聲になり
あの心底では、今宵は逢うてくれる心か。
大岸　その心がなうて、あのやうな。エヽ、モ、なんぢや
いなア。
数右　オツと、誤まつた。そんなら、サア、行かうではな
いか。
さよ　まだ花魁には。

数右　なんぢや、他に客があるか。
清八　イエ、何もお心にかゝる客人ではござりませぬ。ソ
レ、御存じの。
岸の　又いつもの、彼のぢやわいなア。
数右　彼のとは……金兵衛とやらか。
大岸　否でならぬわいなア。
トこなしあつて
おなかどん、そして、彼のわえ。
なか　ハイ、武壘に、およつてゞござりまする。
ト左次馬が事を云ふ。
大岸　オヤ、馬鹿らしいね。
数右　そんなら、わしは先へ行く程にな……必らず、癪で
も發しやるなよ。
大岸　岸里さん、ちよつと耳をお貸しなんし。
ト岸里に囁く。岸里、禿に囁くと
磯彌　磯次どん、來さつし。
ト磯次と二人連れ立ち、奥へ入る。
さよ　おなか、綾さんを、お送り申しや。
数右　ナニ、それには及ぶまい。
なか　でも、それでは、お悪うござりまする。

大岸　ト提灯をつける。
必らず、寐ずに待つて居ておくんなんしよ。
ト吉原雀になり、おなか、提灯を下げて、数右衛門を
連れて、向うへ入る。
禿二　サア／＼、お出でなんし／＼。
ト奥より礒彌、礒次、左次馬を引ッ張つて出る。
左次　コレサ／＼／＼、何をするえ／＼。折角よく寐て居
るものを。
大岸　お起し申して、お氣の毒ざんすね。腹が立つなら、
堪忍さんせ。
岸里　ほんに、花魁が寐かし申しなさんせぬやうで、おさ
よさんの前も、氣の毒でござんす。
岸の　左次馬さん、馬鹿らしうおざんすわな。
左次　コレ、大きな聲をして、名を云ふまい。慥か二階に、
いつもの小言を云ふ、金兵衛が來て居るではないか。
喜三　アイ、大勢連れで、來てゞござります。
清八　成る程、色事師は遣る瀬がないね。
大岸　お前、金兵衛さんが怖いかえ。
ト左次馬が側へ寄る。
左次　サア、いつもおれが落ち合ふと、獨り寐をして、腹
が立つゆゑ、彼奴がおれを見ると。
大岸　そりや、向うが無理といふもの、獨り寐するも心柄。
なんぼ獨り寐というても、寐かさぬ人もあり。
ト左次馬へかけて云ふ。左次馬、こなしあつて、ぞく
ぞく嬉しき思ひ入れ。
左次　こりや又、明日は雨だわえ。
岸の　雨より雪がようおざんすの。
左次　ナニ、今頃雪が降るものだ。なぜおぬし達は、其や
うに雨や雪を降らせたがる。
岸里　なぜでもでおつす。
左次　なぜだ／＼。
ト聞きたがる。
岸里　雨や雪が降りいすと、主を無理にも、留めなんすか
ら。
岸の　花魁の心意氣を察し申して、降らせとうおつすの
サ。
清八　お前方、又、降れ／＼坊主を拵らへて。
禿二　ナニ、そりや、照る／＼坊主だものを。
清八　ほんにさうだつけ。
トこれを聞き、左次馬、嬉しきこなし。

大岸　ほんに、夜の明けんせん國へ、行きたうおざんす。

ト扇にて、左次馬を突く。左次馬、心意氣。

喜三　夜の明けない國がありやア、油屋か、蠟燭屋を始めたい。

左次　成る程、こりや、いつちよからう。ハ、、、……時に大岸、あのお主が寄越した、起の字な。ソレ、ありやマア、ほんの事か。

大岸　ほんの事なればこそ、みんなが、あのやうに云うてぢやござんせんかいなア。

左次　そんなら何か、今夜は

ト小聲になり

眞に逢つてくれる氣か。

大岸　サア、此方はその心なれど、お前の方が。

左次　コレサ／＼、お主さへ誠なら、身共は命でもだ。

大岸　そりや、アノ眞實かえ。

左次　なにを。主に嘘を。

喜三　樣子は聞いた。色男、動くな。

ト左次馬を引きつける。

淸八　喜三さん、俄の稽古には、まだ早いね。

喜左　ハ、、、、。

喜三　時に旦那、二階には、彼のが居りますから、花魁より先へ、お出でなされませぬか。

さよ　ほんに、それがようござりませう。

左次　そんなら大岸、先へ行く程に、早く來やれよ。

岸里　花魁は、直ぐにお出でなんすわな。

大岸　可愛い男を、ちつとのうちも、手離して置かれるものかいなア。

左次　エ、、有り難いわえ。

さよ　喜三さん、御一緒に行きな。

喜三　承知サ……サア、お出でなされませ。

ト雛鶴になり、喜三郎先に、箱提灯を下げて、左次馬後より向うへ入る。最前より、白坂文治、出て居て、樣子を窺ひ、この時

文治　御免なさい／＼。

ト大岸が前へ來り

イヤ、ナニ、おたみさま、只今のお名は大岸さまとやら、先づは御機嫌ようお出で遊ばされ、如何ばかり喜ばしう存じまする。

大岸　わしを、おたみと云はしやんすは、誰れさんぢやえ。

文治　イヤ、拙者めでござりまする。
　ト大岸、文治を見て
大岸　ほんに、其方は。
文治　白坂文治めでござりまする。
　ト大岸、これより、わざと酒に醉ひたるこなし。
岸里　モシ、岸の戸さん、主は、花魁のゆかりのお方とい
　ふやうな事さうなわいな。
岸の　今まで、內證へもお見えなんせんが、なんぞ眞なお
　話なら、わたしらは、ナアおさよさん。
さよ　なんの、花魁も、お前方へ御遠慮はござりますまい
　あなた、爰に居ります者に、氣兼ねをなされぬがようご
　ざりますぞえ。
清八　みな御親類も同然でござりまする。
岸里　無駄ぢや。おつせんよ。
清八　ハ、、、、、。
文治　忝なうござりまする。さて、何からお話し申し上
　げようやら、お目にかゝりますれば、泪が先立ちまして、
　心に思ふ百分一も云ひたい事も申されませぬ。時に、早
　速承りませうは、志津摩さまを始め、我れ〳〵まで、
　去年當地を出府のその後、斯様なお身におなりなされし
　は、深い御思案のある事と、拙者めは、憚りながら存じ
　まするが、定めて左様でござりませうな。
大岸　オホ、、、、なんのいなう。小さい時分から屋敷に
　育ち、左様然らばの挨拶にホッとして、よい折もあるな
　らばと、思ふに幸ひ日頃の堅藏は、みんな他國させて置
　いて、わしが身儘に、よい殿御と抱かれて寐たい浮氣な
　勤め。なんの、深い思案があらうぞいの。
文治　イカサマ、左様仰せられまするも、世上を憚り、望
　みある御身、文治めも推量いたして居りまする。それに
　つけても、彼の紛失のお家の重寶、定めし御油斷はござ
　りますまいな。
大岸　ア、、コレイナウ。あの重寶とやら、蝶々とやら、
　そりやアノ、男の役ぢやないか。志津摩といひ、其方衆
　尋ねて見やるがよいわいなア。
文治　イヤモウ、それに如才はござりませぬが、敵の行く
　へ……サア、形を變へてその品の手筋を、方々尋ねさま
　よひ、やう〳〵この程、江戸へ歸つてあなたのお噂承
　り、初めて悔りするうちにも、御發明なるあなたの事、
　矢ッ張り詮議のその爲に、なされる勤めと存じたゆゑ、
　今宵お尋ね申し、お目にかゝるも主從の、盡きせぬ御緣

と存すれば、斯様に有り難い

大岸　エヽモウ、なんぢやいなう。いから其方は、口が輕うなりやつたの。なんと岸里さん、角町へ頼んで、太鼓持ちにしようぢやござんせぬか……なる氣はないかや。大抵、面白い事ぢやないぞや。女子なら、わしと同じやうに、勤めしやればよいになア。

文治　これは又、わつけもない、何を仰せられまする。下拙め事は、輕い奉公は勤め居りますけれど、忠義は重きお旦那の御恩、片時も忘るゝ儀はござりませぬ。彼のお願ひは上げましても、折惡しく刀の紛失。

大岸　そりや、あの田町の法印さんに、見てもらふと、直ぐに知れうのに、岸の戸さん、一昨日の簪は、奇妙であつたなア。

文治　イヤモウ、占ひ八卦は申すに及ばず、いろ／＼と心を盡し、志津摩さま、主殿さまにも、種々に御詮議なされど、今に在所も定かならず、あなたの方にもその手掛りは。

大岸　アレ、又かいな。なんの、わしがそれを思ふ事かいな。暮れば初會、明ければ馴染み、男相手の床の内、掛けらるやら掛けるやら、手管口舌のもつれには、鴛鴦の衾も山鳥の、中を隔てし枕と枕、つい其うちに明け烏、後朝送れば、居續けの、客を寐させて身仕舞ひ部屋、鐵漿つける間も、昨夜の噂、今日の待ち人、出す文も、書く間忙しく鈴の音、もう書見世か清掻の、寐もせで暮らす仇な身の上……ほんに明日は髮洗ひ日であつた。もうも、とんとこの身に遣る瀨がない。なんの餘所他の事に構うて居られうぞいの。

ト取合はぬこなし。文治、これを聞き、こなしあつて

文治　すりやアノ、貞女の道も打忘れ、旦那の事に露ほども、お心にかゝりませぬ事か。

大岸　旦那と書くは色客の、箸紙より他にないわいな。

文治　して、御子息志津摩さまのお身の上は。

大岸　女郎の身に、なんの子があつてよいものかいな。

文治　エヽ、こなた樣はなう。

ト思ひ入れ。

大岸　岸の戸さん、いつもの所を、ちつと撫つておくれ。

さよ　花魁、とうぞなされましたかえ。

岸里　又、いつものでござんせうわいなう。

岸の　金龍丸を、あげ申しんせうかえ。

大岸　イ、エイナア、海老屋の客衆の無理酒で、昨夜の

醉が出たさうな。
ト貸盆に額を當てゝこなし。岸里、岸の戸、脊中を撫つてゐる。おさよ、文次へ氣の毒なる思ひ入れ。文治思ひ入れあつて

文治 イ、ヤ、ナニ、女中方、大岸さまに用事ござつて、わざ／＼お尋ね申し、先刻より、いろ／＼申しても、御覽の通り大醉なされて、せうどもござらぬ。併し、生醉本性を違へぬお心が、あるかないか、いま一言申し上げたい儀もござれば、ちと、他聞を憚る儀、少しの間、この所を。

トおさよ、岸里、岸の戸の三人

三人 わたしらに、退いてくれいと云はしやんすのかえ。

文治 御無心ながら、お頼み申す。

岸の そんなら、其うち岸里さん。

岸里 わたしや、ちつとおさよさんに。

さよ 吉さんの事でござんすかえ。

清八 モシ、客人の替へ玉は、食ひやせぬよ。

岸里 なんの。

トこなし。

さよ サア、ござんせ。

ト岸里先に、皆々奥へ入る。あと合ひ方、文治、後見送り、こなしあつて

文治 へ、、、イヤモウ、奥様、後先の事辨まへもなく、一途に存じまする心から、只今のやうに申しましたが、こりや私しが不調法、さぞお心に障りましたでござりませう、お宥されて下さりませ。他聞を憚り、あなた樣には、わざと今の通りの御挨拶。イカサマ、これ程までにお心を盡され、大事をヂッと押包んで、人の譏り、嘲りもをいとひなされず、胸の御苦勞、無理な酒でも召上がられずば、疾にお命もござりますまい。お道理でござりますが、御家來の私しに、なんの御遠慮。サア、モシ、他聞は皆遠ざけました。どうぞ、御本心をお聞かせなされて下さりませ。文治め、安心仕りたうござりまするモシ、奥樣。

トこのせりふのうち、金兵衞、立聞きしてゐる。この時、大岸、フト金兵衞と顏見合す。双方、恟り。金兵衞、これにて入る。大岸、寢返りのこなし。文治、これを見て、キッと思ひ入れあり、刀を拔き、大岸が目先へ突きつける事よろしくあつて、大岸、これに構はず、其まゝに寢入る。文治、思ひ入れあつて

こりや、誠に本性はないと見えた。
トきつとこなし。
エ、、こなたはなア。七人の子はなすとも、女に肌を許すなとは、茲の譬へ。併し、こなたに限つて、さうした心であらうとは、今の今まで思はなんだ。去る者は日に疎しと、旦那の別れに一日過ぎ、一月過ぎ、一年經つにつけ、淋しさのいたづらから、男を捕へてほたへた色事、自由にその身が持ちたいゆゑ、我れと好んでこの勤めかエ、……情ない道知らず、見下げ果てた……サア申すもあなたが大切から。少しなりとも、夢幻しに、文治が詞がお耳に入つたなら、どうぞ心を取り直して、若旦那と共々に、モシ、奧様、おたみさま……何を云つても死人に文言。
トほろりとして
覺めた時分に今一度。
トこなしあつて、涙を押へる。唄になり、大岸に心を殘して、しを／＼と奧へ入ると、直ぐに吉十郎、萬七妙庵、庄五郎、義八出で來り
萬七　モシ、花魁。
庄五　お目覺まされませう。

トこれにて、おさよ、岸の戶、岸里出て來り
喜三　こりやをかしい。丁度忠臣藏の七段目のやうぢやわいなア。
庄五　おきやアがれ。おいらア、三人侍ひにしたか。
さよ　ほんにマア、風でも引かしやんせうぞえ。岸里さん、裾へなんぞ掛け申して
岸里　イエ／＼、酒に醉はしやんしたには、ちつと風に當るとようござんす。この間は、居續けの客人で、あんまり酒が過ぎるゆゑ、ついにない花魁の醉ひやう。
岸里　でも、先刻からの事ぢやに依つて、もう起し申すがよからうわいな。岸里さん、起し申しなんし。
岸里　モシ、花魁え、風引かしやんせうぞえ。
皆々　モシ、花魁え／＼。
ト皆々、大岸を搖り起す。大岸、顏を上げて
大岸　磯次や、水一つくりや。
磯次　アイ、、、。
ト奧へ水を取りに行く。岸里、莨をつけてやる。
義八　花魁、きつうお醉ひなされやうな。
皆々　旦那が、奧に待つてゞござりやす。
ト磯次、水呑を持つて來る。大岸、これを一口呑む。

吉十　時に花魁、金兵衞さまは、どうしてくれる心だえ。
庄五　張りの強いも、程のあつたものだ。
妙庵　解らない新造衆ぢやあるまいし。
義八　何もかも、御承知のお前さんの事だわな。
萬七　わたしや、田原町の萬七といつて、道具商賣する者でござります。初にお目にかゝつて申すも、どうやら、をかしらしいが、聞けば金兵衞さんも、これまで久しうござるさうだが、氣の毒ぢやござりませぬか。わたしどもが、刀脇差を賣るにも、向うで惚れて、値を付けてもどうかした事で、賣り憎い事もあるもの。また向う次第で、元値に賣るもある事。そりや、何事も同じ事ぢやござりませぬか。
ト大岸、このせりふを聞いて、こなしあつて
大岸　成る程、お前のやうに、さう譯を云うておくんなんすりや、お嬉しうござんすが、わたしや、ちつと。
ト萬七へ思ひ入れ。
萬七　わたしや、ちつとゝは、金兵衞さまに逢ひ憎いと云ふのかえ。
ト少しムッとしたるこなし。大岸、その顔を指にて突き

大岸　アノマア、怖い顔わいなア。
ト寄り添ふ。萬七、こなし。
萬七　大岸さん、こりやお前、焦らすのだな〳〵。
大岸　エヽ、なんの事ぢやぞいなア。
ト皆々に見えぬやうに、萬七が手を、チッとしめる。萬七、ブル〳〵慄へながら、小聲にて
萬七　コレサ、おなぶりか。花魁、お前まだ、醉が醒めぬの。
大岸　イヽエ、實と誠と、眞の事でおつす。
萬七　アノ、わたしのやうなものに。
大岸　ハテ、客は客、間夫は間夫。これが勤めの樂しみぢやわいなア。
トこなし。萬七、手拭にて汗を拭きながら
萬七　そして、アノ金兵衞さまへの返事はどうだな。
皆々　返事はどうだな。
金兵　その返事は、おれが直に聞かう。
ト合ひ方になり、奥より金兵衞、ズッと出る。萬七、愕り、飛びのく拍子に、幕明の爲替手形を落す。大岸ソッと拾ひ上げ、思ひ入れあつて、懐中して、直ぐに行かうとする。

大岸、待ちやれ、物をも云はず、どこへ行く。
大岸　どこへと云うて、内へ行くのでござんすわいなア。
金兵　内へ行くなら、金兵衞が、戀の返事を聞かせてくりやれ。
大岸　金兵衞さん、返事々々と仰山らしい。返事は、疾からして居るぢやないかいな。
金兵　さればサ、その返事が聞きたさに、毎晩々々通ふのではないか。
大岸　それはマア、誰れも頼みはせぬに、よう通うて下さんすなア。わたしが返事は、いつぞやから、名代ばかりで歸し申すが、返事でござんすわいなア。
金兵　ハヽア、それで讀めた。すりや、これまで、名代、名代で濟したのは、この金兵衞が、氣に入らぬのぢやな。
大岸　マア、そんなものかいな。
金兵　ムウ、すりや、嫌な客は金輪際、振つて／＼振りつけるか。
大岸　サア、その意氣張りが廓の習ひ、大抵面白い境界ではござんせぬかえ。
金兵　ハテナア、恥を捨てゝも、君傾城の勤めが面白いとは、これも又、過去の因縁でがなあらう。ハヽヽヽ。
ト嘲笑ふ。大岸、こなし
大岸　オホヽヽヽ。なんぢややら、滅多無性に傾城々々となんぼ其やうに下げすみなんしてもな、江口の遊女は歌の德で、勅選にあひしとやら。なんとマア、賤しい勤めする身でも、女は氏無うて玉の輿とやら。移り變るが、浮世の習ひぢやござんせんか。
吉十　さうとも／＼。嫁が舅になるは忽ち。
庄五　土筆は直ぐに杉菜と變じ
妙庵　茶臼は飛び石、團扇は釜敷。
萬七　古鍔は七輪の網と鞍替へ。
義八　大通は一つ長家の佐次兵衞と變る。チヨン／＼。
ト手を打つ。
四人　おきやアがれ。
皆々　大岸さん、いつも花ぢやア居られまいによ。
トこのせりふのうち、大岸、右の手形をソッと開き見る事あつて、悧り。金兵衞に思ひ入れあつて、氣を替へ
大岸　サア、それも承知はして居れど、ついした事の張合ひから、どうも今では、金兵衞さんに。

金兵　イヤ、何も改めてあやまるには及ばぬ事。お主が心が解けさへすれば、この金兵衛は、
女三　堪忍してあげなさんすかえ。
金兵　堪忍しないでどうするものだ。
大岸　イヽエ、なんぼ美しう云はんしても、お前の心が、
金兵　知れぬと云ふなら、なんなりと、心中見せる、望み次第。
五人　こりや、面白くなつて來たわえ。
大岸　そんなら、必らず、心底見せて下さんすかえ。
金兵　なんなりとも〳〵。
大岸　そんなら、これから一緒に、わたしが部屋へ、
金兵　成る程、行きたいは行きたいが、ちつと後に。
　トこなし。
岸の　と云うて、騙しなんすと、聞きいせんぞえ。
金兵　なに僞はりを。勿體ない。
大岸　そんならキツと。
金兵　待つて居やれ。
岸の　淸八どんや〳〵。
　ト呼ぶ。奧より淸八出て
淸八　安公、明日江戸へ出たら、賴むによ……、サア、よろしうござりまする。
五人　モシ旦那、おめでたく酒に致しませう。
金兵　よからう〳〵。おさよ、お主も祝ひに一杯飮みやれ飮みやれ。
さよ　アイ、左樣いたしませう。
金兵　皆も來やれ〳〵。
　ト鷺娘になり、金兵衛先に、立役皆々、奧へ入る。と大岸、岸里、岸の戸、禿二人、淸八、提灯を持ち、先へ立ち、向うへ入る。文治出て、大岸が跡を見送り
文治　心知れざるおたみさま、先へ廻つて今一度。さうだ、
　ト時の鐘になり、文治、思ひ入れあつて、向うへ入る。あと合ひ方、金兵衛、奧より出て、思ひ入れあつて
金兵　合點のゆかない大岸が心、最前ちよつと樣子を聞けば、細川正基の家中、印南志津摩が親のおたみ、紛失した寶を詮議せにや、望みが叶はぬといふ。その寶はこの仁王三郎の刀。こりや、此まゝおきやア危ないもの。どうぞよい思案が。
　トいろ〳〵隱す思ひ入れあつて、トヾ、我が腰の物へ心附き、手早く白鞘と入れ替へる。
斯うして置けば。

ト云はうとして、思ひ入れ、口を押へる。この見得、
清掻になり、道具替る。
本舞臺、一面の大格子、西の方へ寄せて、三浦屋と
染めたる長暖簾、江戸町一丁目三浦屋と書きたる雨
覆ひかけし天水桶取りつけ、よろしく道具納まる。
ト清掻になり、向うより大岸、その外、以前の人數附
き添ひ、戻つて來る。後より、白坂甚平、紺やつし、
大小、野暮なる拵らへ、古編笠にて附いて來る。

甚平　モシ、どうぞお遣りなされて下さりませ。御全盛の
お傾城様、お情で助かります。お慈悲でございます。お
遣りなされて下さりませ。
ト　このせりふにて、皆々、本舞臺へ來る。

清八　こりやアとんだ物貰ひだ。花魁が、ナニ錢を持つて
ござるものだ。馬鹿々々しい。氣のきかない物貰ひだわ
え。

岸里　清八どん、なんなりと取らして進ぜたがようおつす
わな。

清八　なんのお前、癖になりまする、

岸里　ハテ、ようおつすわな。
ト鏡袋より、壹分を出し、紙に捻つて
コレ、そな人、さもしけれど、これをおあげ申しんせ
う。
ト清八、取つて

清八　なんだ、百疋かえ。こりやア、とんだ事をしやがつ
た。ハテ、仕合せな物貰ひだわえ。
ト金を出す。甚平、思ひ入れあつて

甚平　アイヤ、金銀の合力うける者でござらぬ。

清八　物貰ひが、錢金が欲しくなくつて、何が欲しい。

甚平　花魁のお情が申し受けたい。

清八　アノ、そんな形で、花魁の

甚平　情の手の内、申し受けに、わざ／＼參つた。大岸さ
ま、取らしてやつて下さりませ。

清八　此奴、怪しからぬ事を吐かす奴だ。面を見てやら
う。
ト編笠へ手をかける。立廻りにて、見事に投げる。皆
皆、こなし。
うぬ、とんだ目に遭はしやがつたな。うぬを。
ト又しめにかゝる。片手にて捻ぢ上げる。此うち始終
大岸は、甚平に心を附けて見て居る。

大岸　この大岸が、情を貰ひたいとは、どうやら、樣子あり氣な笠の内。

清八　その編笠を。

ト振り切り、取りにかゝる。立廻りあつて

甚平　胡散な者でござらぬ。拙者が顔、とくと御覧下されい。

トこの時、笠を脱ぐ。大岸、甚平を見て、愕りして

大岸　ヤア、そちや家來の甚平。

ト云ふを、打消して

甚平　イヽヤ、存ぜぬ、近附きでござらぬぞ。

大岸　でも、其方は。

甚平　アイヤ、何事も明らさまに、云つてしまへば物がない。所を互ひに云はず語らず。

ト大岸、思ひ入れあつて

大岸　ムウ、すりや、何か詳しい話があつて

甚平　イヤ、口說きに參つた。

大岸　ヤ、なんと。

甚平　三浦屋の大岸どの、聞き及んでわざ〱と。

大岸　アノ、わしを。

甚平　如何にも。

大岸　ハテナウ。

ト思ひ入れあつて

岸里さん、主には、ちつと用がある。お前方は、先へ部屋へ行て下さんせ。

岸里　そんなら花魁。

岸の　わたしどもは、先へ行くぞえ。

大岸　子供行きや。

禿二　アイヽ。

ト清搔になり、この人數皆々、暖簾口へ入る。甚平、大岸殘り、思ひ入れあつて

甚平　サア、大岸さん、色よい返事をして下さりませ。

大岸　あの人とした事が、もう、誰れも氣兼ねはない。話しがあらば、ちやつと云やいなう。

甚平　すりや、拙者が申す事、お聞き下さるお心かな。

大岸　ハテ、委細の譯を聞かうと思ひ、皆さんを遠ざけたのぢやわいなう。

甚平　左樣お心遣ひ下さる段、先づ以て喜ばしう存じます。然らば、奥樣、抱かれて寐て下さりませ。

大岸　コレイナウ。そりや何を云やる。あたりに氣を兼ねる者は居ず、ほんの事を云やいなう。

甚平　奥様。下郎めが、先刻より申す事、僞はりと思はっしやりまするか。
大岸　ヤヽ、なんと云やる。
甚平　眞實誠に、あなた樣の、お情にあづかりたい下郎が本心。
大岸　すりやアノ、眞實に。
ト呆るゝ思ひ入れ、
甚平　現在、家來の私し、お疑ひは御尤も。
ト思ひ入れあつて、刀を抜き、床几の端にて小指を切る。大岸、思ひ入れ。
甚平　下郎めが心底、斯くの通り。お主樣へ無體の戀慕、嘘戲むれに申されませうか。この世は愚か未來までも、惚れて惚れて惚れ抜きました。斯く思ひ込んだ惡念は、昨日や今日の事ぢやござりませぬ。そも〳〵親旦那、御出國のお留守より、獨り寐臥しの床の内、さぞ肌淋しうお暮らしなされうと、フト存じ付いたが因果の始まり。いま傾城とおなりなされば、情を商ふ三浦屋の大岸どの、誰れに遠慮憚りもない。
ト兩腰を投げ出し
この甚平も、大岸どのゝ間夫とやらになるからは、この世の本望。サア、大岸どの、見ず知らずの男にも、帶紐解くは勤めの習ひ。まして幼少より御家來のこの甚平、互ひに氣を知つた仲。始めつから打解けて、寐物語りが致したい。サヽ、御返事はどうでござる。
ト寄り添ふ、大岸、このせりふのうち、思ひ入れあつて、甚平が投げ出したる刀を押取り、拔打ちに、りうりうと打ち据ゑる。
こりや、何ゆゑ拙者を、打擲さつしやる。
大岸　何ゆゑとは、茲な人でなし。現在主人へ無體の戀慕……こりや、なんぢやな、夫に別れ、賴り少ないこの身と思ひ、主從の道を忘れ、そちや、わしを侮るのぢやなエヽ、如何に女子の主ぢやとて、家來にまで見下げらると、思へば口惜しいわえ。ヤイ、さうしたみだらな心を持つて居ながら、人がましいこの兩腰、ようも差いて居られた事ぢやなう。さうした心とは露知らず、天晴れ忠義の家來ぢやと、力に思うて暮らしたが口惜しいわい。ヤイ〳〵、もうこの上は詞はない。主從の緣もこれまで、重ねて云やんな、聞く耳ないぞ。
甚平　ムウ、すりや、拙者を御勘當とな。忝ない。そりや拙者が望むところ。主從の緣が切れゝば、猶以て心はさ

つばり、他人となつて抱かれて寐れば、遠慮はない。サア、どうぞ思ひを晴らさせて下さりませ。慈悲ぢや、情ぢや。

ト袖に縋つて云ふと、大岸、うろさき思ひ入れにて、身を外ける。甚平、猶も取縋り

これ程までに、事を分け、耻を捨てゝ申すのに、聞き入れないとは、そりやあんまり曲がない。コレ、この甚平は、こなたの事を思ひ詰め、煩らひますわいの、死ますわいの、此まゝに、思ひ死をしたならば、迷ひますわいの。サア、應と云うて下され、慈悲ぢやわいの。情ぢやわいの。

トいろ〳〵付け廻し云ふ。大岸、ヂッと涙を隠しながら

大岸　エヽ、淺ましい人畜生。意見も道理も聞分けない犬猫同然、開けば聞く程耳の穢れ、

ト行かうとするを、引き留め

甚平　ムウ、すりや、これ程に云うても聞き入れないか。エヽ、恨めしい心ぢやなう。

ト思ひ入れ。

よい、この上は、人の花と詠めさせるもむやくしい。この身とても生き長らへ、焦れ死に死なうより、こなたを殺し、共にこの身も冥途の道連れ、長い未來で口說き落す。

ト刀を取つて

但し心を取り直し、抱かれて寐て下さるか。刺し違へて死なせうか。サア〳〵〳〵。

トぢり〳〵と付け廻す。大岸、沒義道に振り切り、行かうとする。甚平、引き留める。この立廻りの中へ、白坂文治、ツカ〳〵と出て

文治　弟、待て。

ト隔てる。甚平、文治を見て

甚平　兄者人か。

トこなし。

大岸　オヽ、文治、よい所へ、よう來てたもつた。最前からの甚平がの。

文治　ようござります。何もかも承はりました。道に背いて不義ひろぐ弟め、拙者が折檻。

ト拔き打ちに、大岸をりう〳〵と峯打ちに打ち据ゑる。

大岸　待ちや文治。こりや何ゆゑに、このたみを。

文治　不義いたづらの意見の答。

大岸　ヤ。

文治　奥様、あなたさまはなう。いつぞや羽州牧の林に於て、旅人を討つて立退かれしは親旦那、なりや、御存命だ御存命だと、思ひ居つた二年の年月、遂に横山が計略にて、現在敵に欺むかれし、その無念さ、あなたには、なんとも思はつしやりませぬか。イヤサ、口惜しうはござらぬか。この下郎めは、その時の事を思ひ出すと、腹わたが沸え返り、無念で／＼なりませぬわいなう。早速敵討願ひ上げても、揚て、加へてお家の重寶、仁王三郎の刀の紛失、詮議仕出して差上げるまでは、敵討の願ひ叶はず、それゆゑに江戸を立退き、心を碎いて一腰の詮議、行くへ知れねば詮方なく、又も當地へ戻つて聞けば、あなたの取沙汰。惘りせまいか、驚ろくまいか、まだしも、御思案あつての事かと、思ふに違ふ最前の仕儀。それが印南十内さまの奥様と云はるゝ形か。エヽ、情ない御所存でござりますなう。

甚平　その上、宵より見聞くところ、武家町人の差別もなく、男を捕へ、あられぬ行跡。それゆゑにこそ某も、心に思はぬ不義いたづら。指まで切つて心中を見せ、もし得心の色あらば、お主たりとも手にかけて、直ぐにこの身も腹切らんと、覺悟極めて無體の戀慕。忠義に捨つる命は一つ、惜しいとは存じませぬわいなう。斯程にまでに心を碎く、下郎にも劣つたこなたの魂ひ。それとは夢にも御存じなく、一緒に敵が討ちたいと、この年月思し召す、志津摩さまのお心、どのやうにあらうと思はつしやります。詞交すも身の穢れ。一時も早く紛失の一腰詮議なし、志津摩さまを以て、敵討のお願ひ申し受ける。兄者人、立たつせえ。

文治　成る程、それが上分別。さは云へ、弟甚平が不義を御承知なされぬは、まだしもお主への云ひ譯。ならう事ならお心を改められ、志津摩さまと御一緒に、敵を討つお心はござりませぬか。コレサ、泣いてござつては濟みませぬ。一生不義不貞の汚名を受けて、仇な勤めがなさりたいか。イヤサ、變る枕が樂しみか。エヽ、淺ましいどうで本氣ぢやござるまい。氣狂ひどの、助兵衛どの、もうこの上は、この文治も、御家來ではござらぬぞや。

甚平　オヽ、さうだ。此やうな親があつては、志津摩さままで武士がすたる。我れ、志津摩さまに成り代り、肉緣の水放れ、家名を穢せしいたづら者の、成敗はまッから。

ト泣き入つたる大岸を、引き付ける。

斯うして〳〵。
文治 斯うして〳〵
二人 斯う〳〵〳〵。
ト双方へ引き付ける。これにて、大岸の上着、仕掛にて、脊筋、双方へ引き裂けると、下着の白無垢の兩袖口、俗名と戒名と書きつけあり、兩人、見て
甚平 フム、劍當院夏岳居士。
文治 俗名は印南十內。
二人 これは。
大岸 この世と未來と隔つれど、心は夫に一つ添臥し、肌身放さぬ俗名、法名。
二人 ヤ、、なんと。
ト思ひ入れ、胡弓入りの合ひ方になり
大岸 夫に別れしそも〳〵より、仇に浮世は暮らさねど、辿る甲斐なき夢心、毎夜々々に變る枕は、君傾城の憂き苦界と、一圖に思ふ心からは、いたづらとも、放埒とも、疑ひは尤もながら、大切なる刀の紛失、女子の身で、なんと詮議がなるものぞ……とあつて、刀差上げねば、敵討の願ひ叶はず、兎やせん角やと思案とり〳〵、思ひ當りし色里の、入込み多い武家町人、あのゝものゝと色仕掛け、侍ひ衆には手管の駈引き、大門口の東雲は、漸造禿の伏せ勢に、後を見せる客さんも、引返して尋常の、勝負は時の浮氣の花、五つ蒲團の戰爭に、口舌仕掛けで組打ちの、横合ひから遣り手が加勢、殺して歸す明日の夜は、伽羅で樒の香を隱す、坊さん客の長羽織、醫者さまらしい顏付きで、てつきり騙す化け物と、下戶と云はせず無理酒に、醉はして置いて問ひ藥。譬へ無口な初會でも、匕の加減に煎じ詰め、嘘は五戒の一つぞと、たぐりかけたる珠數の輪の、責め念佛に成佛を、させて涅槃の床廻し。商人衆は十露盤の、玉に曲輪の出番には、引けさへ待たず早歸り、おや馬鹿らしうおつすよと、ちつとも掛け値のない顏で、去なせて明日は筆先に、近く御見を神かけて、祈りまゐらせ候べくと、誓ふ起證の勿體ない、現在嘘に命をも、續けば續く幾千枚、書いて送りし身の罪は、八萬地獄の數知れず、例へ奈落へ沈むとも、なんの儘よと打解けて、寐る夜はあれど心の帶は、いつかな解かぬ刀の詮議、心中見やうの、髮切るのと、無理云ひかけて幾腰を、改め見れど人目には、仇に心の亂れ燒と、譏らば譏れ望みある、心の內は直燒刃。貞女を捨てゝ立て通す、この身の操といふ事は、曇らぬ胸に姿見

の、あり〱見えてありながら、それとは見えぬ我が身の資。なんぼ姿は傾城の、淺ましうなり下がつても、わしも武士の女房ぢやもの、貞女と大事を忘られうかいなう。例へ千人萬人の口の端にかゝるとも、その恥かしい目はいとはねど、さぞや未來で我が夫の、憎んでお出でなされうと、思ひ廻せば情ない、この憂き苦界をあの世から、佛になつてござるなら、もしや見えるか知らねども、やみ〱と闇討に、討たれ給ひし靈魂の、修羅の巷に迷ふ身で、なんの見やうか見やせまい。魂魄この土にましまさば、おれゆゑ苦勞いぢらしや、不便や可哀や、出かしたと、褒められうぞと思ふのに、現在二人の家來にさへ、いたづら者よ、犬よ猫よと云はるゝは、どうした因果な身の上と、思へば悔しい口惜しい、切ない悲しい身の上ぢやなア。

ト大きに泣く。兩人も互ひに顏見合せ、こなしあつて

甚平　さては、刀詮議の爲でござりましたか。さうした譯とは夢にも存ぜず

文治　疑ひ過して今の後悔、家來の身として勿體ない。主でない家來でないと、出放題の雜言過言、なんとお詫を申さうやら。奧樣、矢ッ張り元の家來ぢやと、たつた一言仰しやつて下さりませ。

甚平　愛想づかしも強意見も、矢ッ張りあなたが大切さ。女儀に稀れなる貞節信義、それに引替へ料簡の、刃金なまりて面目ない。

文治　申し奧樣。

兩人　お宥されて下さりませ。

ト泣いて云ふ。大岸、こなしあつて

大岸　なんのマア、疑ひさへ晴れたなら、なんの恨み。わしをわしと思うての、其方衆の今の意見も、仇には受けぬ忠義の道。

文治　奧樣の御流浪も、元はと云へば横山外記。

甚平　思へば〱。

三人　口惜しいなア。

ト大きく泣く。

文治　この上は一刻も早く、紛失の一腰、詮議仕出し、敵討のお願ひ申し上げん、とは云へ、差當つて刀の在所が

大岸　氣遣ひしやんな、心を盡した甲斐あつて、今宵と云ふ今宵、その手掛りが知れたわいの。

文治　ナニ、手掛りが知れましたとな。

甚平　して、その刀の持ち主は。

文治　いづくの誰れ。
大岸　ア、コレ。
ト思ひ入れ。この時、暖簾口より、綾瀬数右衛門、込山左次馬出て
左次　おたみどのゝ心底承はつて、安堵いたした。
ト三人、これを見てこなし。
三人　ヤア、あなた方は。
数右　屋敷を離散召されしより、おたみどのゝ行跡よろしからずと、お聞きに達し、誠十内が妻、放埒とは、預かりの刀を詮議なさん深き所存か。
左次　但しは武家の作法を捨て、遊女賣女に落ちぶれたは、敵の事も打忘れ、身の儘に樂しむいたづらか。
数右　不義か貞女か、見分け参れと、在國の我れ〳〵ゆゑ。
左次　おたみどのゝ存じられぬが幸ひ、入込みしこの両人。
大岸　すりや、矢ツ張り御傍輩のお方々でござりましたか。さうとは知らず、僞はりにも、あられぬ事を申し上げ、お恥かしう存じまする。
文治　誠に、御仁心なる正甚公。左様まで印南一家を。

甚平　思し召さるゝ段、我れ〳〵までも如何はかりか
大岸　お二人様より、御前よしなに
三人　偏へに願ひ上げまする。
トこの時、九ツの鐘響き、四ツの拍子木打つ。金兵衛、奥より出て
金兵　大岸、引けは打つたが、いよ〳〵今宵は金兵衛と。
大岸　して、お前の心底は。
金兵　ハテ、そりや何なりと望み次第。して、その望みといふは。
大岸　お前の持つて居やしやんす仁王三郎。
金兵　ヤ。
ト思ひ入れ。
大岸　サア、その刀が欲しうござんす。
金兵　成る程、持つてさへ居りやア、何より安い事だが、その仁王三郎とやら、この金兵衛は持つては居ぬ。
大岸　アノ、これでも。
ト最前の拾ひし賣上げの一札を出して見せる。
金兵　ヤア、それを。
ト取らうとする。
大岸　文治、これを讀んで見や。

初演の繪番附

ト文治に渡す。文治、開き

文治　「一つ、仁王三郎の刀一腰、代金を百兩に取極め、代物慥かに受取り申し候ふ。代金の儀は、この手形を以て相違なく相渡し申すべく候ふ。」宛名は道具屋萬七どの、福田金兵衞。

金兵　ムウ。

トこなし。

大岸　サア、慥かな證據が出る上は、覺えないとは云はれまいがの。

左次　南無三、その刀が出ては、丈八の身の上。

數右　ヤ、なんと。

ト左次馬、ギックリ。

左次　イヤサ、その刀が出さへすれば、敵討の願ひも叶ふといふもの。

數右　ハテ、それは、云はいでも知れた事サ。

金兵　とても手形が出る上は、せう事がない。サア、おぬしが欲しがる仁王三郎、これで心底が見えたであらうがな。

ト白鞘、渡す。大岸、文治、甚平の三人。

三人　ドレ。

ト三人打寄り、白鞘を抜き放し、改め見て

文治　こりや、コレ、燒刃金色。

甚平　物打まで

大岸　似ても似つかぬ、こりや眞赤な。

數右　ヤ、なんと

金兵　似せ物と云ふのか

大岸　誠の仁王三郎の一腰が、欲しうござんす。

金兵　して、その刀、似せ物といふには、なんぞ慥かな證據があるか。

大岸　オホヽヽ、もと仁王三郎は、周防の國にて名もなき鍛治、旦夕鍛への其うちに、自然と心に叶うたる、一刀を打ち上げる。

文治　即ち、これを試みんと思ふ折節、隣家に忍べる二人の盜賊、

大岸　一人目當に切りつけしに、後に立つたる賊もろとも

甚平　只一刀に二人を切る。

文治　この試しを阿吽に表し仁王三郎。

甚平　この時より名附けしゆゑ、その寸尺に極りあり。

大岸　まだその上に、口傳の見所、なんと僞物でござんせうがの。

金兵　ハ、、、、耳學問の目利き自慢。但し諸國の刀鍛治
一々に知つてゐるか。
大岸　お望みならば申しませう。
金兵　面白い。先づ近代の名鍛冶は。
大岸　檜垣やすり、でんかい重吉、宇田の國光、千手院力王。
數右　さて山城の國には。
文治　小鍛冶宗近、鵜の丸、蝶丸、來の國行、國俊。
左次　丹波の國には。
甚平　綾部の政次。
金兵　して、東國には。
文治　みいり正宗。
數右　相模の國には、
文治　新五郎政宗。
左次　長門の國には
甚平　秋國有風。
金兵　肥前と肥後は
大岸　延壽國平。
數右　阿波と讃岐に
文治　成よし成宗。

左次　武藏に
文治　爲義。
數右　備前に
文治　長船。
金兵　美濃の國には
大岸　志津三郎、内ぶち外ぶち、數も限らぬ刀の名鍛冶。
金兵　サア、それは。
まだこの上にも、疑ひがござんすか。
ト大岸、文治、甚平の三人
三人　サア。
四人　サア〳〵。
左次　して、正銘の刀は。
大岸　卽ち、これに。
ト金兵衞が帶せし脇差を、手早く引き拔く。この時、萬七も出て、金兵衞、左次馬三人、それを取りにかゝる。金兵衞は文治、甚平は左次馬、數右衞門は萬七と立廻り
刀の切れ味。
ト左次馬をポンと切る。この一刀にて、萬七も共に切られ、双方仕掛けにて、見事に二つになる。數右衞門

甚平、文治の三人

三人　天晴れ見事。

大岸　啊呍の奇瑞。

金兵　その刀を。

ト取りにかゝるを、立廻りて、刀をヒラリと見せ

大岸　とつくりと見やしやんせ。

ト刀を目の先へさしつけろ。しやんと見得。この見得よろしく、カチ〳〵〳〵〳〵。

引幕

六幕目　鴫立澤の場

役名――横山外記。横山大藏。白坂甚平。白坂文治。文治女房、おきの。奴、慾助。奴、赤介。馬士、腕骨の吉。同、あごたの權。同、ねつこの音。駕籠舁き、目玉の八。同、荷縮の六。同、向う疵の三。同、きがたの市。同、おとがひの松。大高主殿。

本舞臺、三間の間、うしろ波幕、正面に九尺の辻堂、開き戸など誂らへあり。所々、稻村。上の方、切り穴にて、布を張りたる川。蘆の茂りたる體、左右柱卷、松の大樹。下の方、鴫立澤といふ榜示杭。すべて東海道大磯の入り口。テンツヽにて幕明く。

ト爰に權、吉、音、松、馬士の形、五人の旅人、菅笠、草鞋、銘々、荷を肩に掛け、これを四人の馬士、引ッ張りゐる。

馬四　コレサ、歸り馬だ。乘つてござい〳〵。

旅一　コレサ、馬はいらぬと云ふに。うるさい手合ひだ。

權　ハテ、藤澤まで丁場が長い。乘つてござい〳〵。

旅二　イヤ〳〵、まだ日は高い。馬は入らぬと云ふに。

吉　とんだ事を云ふ衆だ。もう七ツ過ぎでござる。馬入を越すと、直ぐに日が暮れるであらう。

音　それ〳〵、藤澤までは心元ない。さう云はずと乘つてござい。

松　どうでわしらは、藤澤へ歸る馬だ。酒手で行きませう。

旅皆　ハテ、馬は入らぬと云ふに。うるさい手合ひだ。放しやれ〳〵。

ト旅人、振り切つて、捨ぜりふ云ひながら、向うへ入

権　る。矢張り、かすめたるテンツヽにて
　エヽ、イケしわい奴等だ。時にてまへ達は、見たか
知らねえが、この次、梅澤に逗留してゐる侍ひ、主従二
人と見えて、毎日々々、此あたりをうろつくが、彼奴等
は、マア、胡散な奴等ぢやないか。
吉　それ〳〵、彼奴等が大方、頓兵衛が話した、奴等で
あらうも知れない。
音　イヤ、頓兵衛が話しと云へば、おいらが仲間へ入つ
た、あの頓兵衛は、元は侍ひだげなの。
松　ハテ、この男は、それを今知つたか。コレ、あの男
は、これよ。
　ト囁く。音、頷きて
音　アヽ、それで讀めたわえ。
権　時に、もう七ツ過ぎでもあらうが、なんぞよい荷物
が來さうなものだが。
三人　ほんに、よい仕事を見付けたいものだわえ。
　トてんつゝになり、花道より、駕籠舁き三、八、古袷
を掛けたる早桶を擔ぎ、出て來る。ト下座より六、市
駕籠舁きの形にて、四つ手駕籠を舁いて出る。本舞臺
にて、兩方、行き逢うて

音　コリヤ、飯隅の手合ぢやないか。精が出るな。
六市　オイ、平塚までの駄賃よ。
　ト権、音、松の三人
三人　こちらの荷はなんだ。早桶ぢやないか。
三　オヽヨ、南湖の町に居た行倒れよ。
八　この死人を、河津の降徳寺へ投げ込みに持つて行く
のだ。
四　そりや、とんだ仕事を請合つたな。
六　コレ三や、おいらは後の松原から、やみで行くのだ
がな、相談して代らないか。
三　イカサマ、死人を擔ぐより、生きた佛を擔ぐのが、
仕事がしよいて。
市　代るはよいが、わいらは駄賃はどうだ。
八　死人だけ、駄賃はしつかり。一人前、じば半で請合
つた。
六　いゝ駄賃だな。なんと正六四で打つべえが、代らな
いか。
三　さいなんなら、代へべえ〳〵。
六　いゝワ。代へろ〳〵。
　ト桶も駕籠も下ろす、

八　時にコレ、早桶と駕籠と取替へるのか。
市　とんだ事を云つたものだ。駕籠を其方へやると、此方の商賣が止まるワ。
三　そんなら、死人を出して、駕籠へ乘せて行きやれ。駕籠の旦那を早桶へぶち込んで、消りまでやらう。
四人　さうすべえ〳〵。
ト桶の繩を解き、内よりごま鹽の當つたる經帷子の慾助を引き出す。三、八、慾助を抑へて居る。六、市、駕籠の側へ寄つて
市　モシ、旦那え〳〵。
ト起す。これにて、目を醒し
亦介　アヽ、よい心持ちだ。もう極めの所へ來たか。早かつたの。
六　イヽエ、まだ極めの所へ參りませぬが、よい代りがあるから、どうぞ替へてやつて下さりませ。
亦介　なんだ、駕籠を替へる。アヽモウ、道中で馬や駕籠を替へられるには、手間が取れて惡いぞ。
ト云ひながら、駕籠より出る。
時に、その替り駕籠はどれだ。
三　イエ〳〵、駕籠はござりませぬ。投げ込みの棺と代へたに依つて、この人をその駕籠へ乘せると、この桶が明きますから、御不自由でも、この早桶へ乘つておくんなさいませ。
トこれにて、亦介膽を潰し
亦介　ヤイ〳〵〳〵、おのれらは〳〵、よい加減に馬鹿を吐かせ。駕籠を替へるもある事だが、弔ひと替つて、その上、身共を早桶へ入れるとは、言語道斷、珍事ちうよう、慮外な奴の。
ト反りを打つて思ひ入れ。
四　こりや、旦那のが尤もだわえ。
六　ハテ、尤もであらうが、此方も商賣づくの事だ。
市　折さん、いざござを云はずと、早く早桶へ入りなさい。
亦介　おのれらは、武士を嘲弄いたすが、憎くい奴等の。
權　イカサマ、錢は奴さまの物だ、不請して、桶へ入りなさい。
亦介　否だ〳〵、達て桶へ入れと吐かすと、うぬら、一々切りさげるぞ。
ト竹光抜いて知らずに力む。
八　此奴はをかしい折助だ。なんで切るのだ。

三　田楽串で、人が切れるものか。

皆々　ハヽヽヽ。

ト竹光を振り廻す。市、三、六、八、息杖にてぶつてかゝる。四人の馬士、兩人を留める。このどさくさの中へ、向うより襦袢の上へ前垂れを帯にして、田植ゑ女、頭へ水の入りたる桶を載せて來り、この中へ突り、突きとばされて、桶の水、慾助へかゝる。この人數みなみなぶちやつて、下座へ逃げて入る。これを追うて下座へ入る。時の鐘になり、ひつそとなる。慾助、ビクビクと手足を動かし、息を吹き返すこなし、よろしく置き上がつて、方々を見廻し、力なき思ひ入れにて、ヒヨロ／＼歩いて見る。此うち、下座より、田植ゑ女、晝飯を持ち・駕籠に椀を入れ薬罐に持ち添へて出て來る。慾助、これを見ると、につこり笑うて、飯櫃に手をかける。恟りして、慾助を見て、ヲツと云うて向うへ逃げて入る。これより慾助、かつかちめいて、飯をひツ掴んで喰ひ、咽喉へつかへるをかしみ、薬罐の茶を何杯も／＼も呑んで、箸を折り、揚枝に使ひ、それより力の付きしこなしにて、力足を踏んで見たり聲を立てゝ見たり、いろ／＼をかしみ、よきキツカケに、下座より以前の人數、亦介とぶち合ひながら出る。慾助、これを見て、この中へ入り留める事。

慾助　待ちやれ／＼。何を騒ぐのだ。おれが買つた／＼、おれに預けろ／＼。

ト兩人を捨ぜりふにて留めて居る。皆々、慾助を見て

皆々　イヤア／＼、幽靈だ／＼。

ト膽を潰して、兩方へ別れる。息杖を斜に構へ、捨ぜりふ云うて居る。慾助、これに心附かず、亦介の首を脇の下へ引挾み、留めて居る。亦介夢中になつて、慄へてゐる。

亦介　イヽヨ奴さん、わしが預かつたよ。わしに預けなさい。コレ、ウムと云ひなさい、なぜお前、慄へてゐる。わしが預かつたよ。

慾助　南無阿彌陀佛々々々々々々。

亦介　ハテ、ようござんすよ。靜かにさつせい。外聞が悪い。

六　こりやマア、どういふ事だ。

三　慥かに魔がさしたのだ。

皆々　ぶち殺せ／＼。

ト息杖にて、したゝか慾助をくらはせる。これにて亦

介を放す。
愁助　オヽ、痛い〳〵。うぬらは、なぜ裁人をぶつた〳〵
皆々　なんだ、裁人だ。
愁助　オヽ、裁人だ。
皆々　おきやアがれ、罪人だワ。
愁助　なぜ罪人だと吐かしやアがつた。
皆々　ソレ、うぬが形を見やがれ。
愁助　ドレ。
ト姿を見て、愕りして
こりやアどうだ〳〵。我が身ながら、呆れた形だ。コレ、みんな聞いてくれろ。おらア、喰ひ醉ふと、二日も三日も夢中になるが、今朝南湖の立場で、づぶろくになつたと思つたが、そんなら、死んだと思つて、投げ込みへやらうとしたのか。おらア、醉ふと、おへないよい〳〵だぞ。
亦介　そんなら、こなたは幽靈ではなかつたのか。
愁助　なにサ、わしやアこのあたりに、ちつと尋ねる人がごんして、それで爰をまごつきますが、イヤ、まごつくと云へば、コレ馬士達、馬士の頓兵衛といふを知らないか。

亦介　アヽ、その頓兵衛といふ馬士は、わしも逢はにやならぬ事があつて、尋ねますが、以前が武士上がりの馬士コレ、わいらは知らないか。
六　知つてゐる段か。その人は、慥かに。
ト亦介に囁く。
これでごんせうが。
亦介　それ〳〵、そのお方に、今宵夜に紛れ、親旦那樣が漁舟にて、この海手へござる筈。兼ねて御所持の品を受取つて、若旦那のお身の有りつき。久々にて親子の御對面をなさるのサ。
愁助　アヽ、そんなら、こなたも、大藏さまの家來筋だの。親子御對面とは、おめでたい。そのめでたい次手、この愁助も、今から大藏さまの世話にならにやなりませぬ。
亦介　ハテ、知らぬ事とて、わしらも、あの大藏さまとは
皆々　同腹中サ。
亦權　大高主殿を殺してくれろと
皆々　頼まれました。
愁助　そりやア頼もしいわえ。この間梅澤で見掛けたは、慥かに大高主殿。印南の奴等をぶち殺して、横山親子の御對面、めでたい門出、一首浮かんだわえ。

初演の繪番附

皆々　聞きたい〳〵。
慾助　横山や、旦那親子は御對面。
皆々　なんと〳〵。
慾助　印南一家の種や絕やさん。
皆々　イヤ、こいつは出來た。
慾助　ハイ、幽靈に御報謝。
皆々　何を云はつしやる。
　ト向うにて
甚平　ヤア〳〵、斯うござりませ。
皆々　サア、あの聲は。
慾助　何かは立場で。
亦介　幽靈奴の仲直り。
駕四　酒にすべいか。
馬四　サア、ござりませ。
　トてんつゝになり、慾助、桶へかゝりたる袷を引ッ抱へ、亦介先に、皆々下座へ入る。ト向うより白坂甚平大小、旅の形にて、文治女房おきの、一本差し、浴衣がけ、旅の姿にて、女笠を持ち、甚平に附き、足早に出て來り、花道にて
きの　ヤレ〳〵、よい所でお前に逢ひましたわいの。
甚平　左樣でござる。いつぞや、兄文治どのに別れてより、拙者は大高さまのお供いたし、東海道をあちこちと、今に尋ねて居りまする。
きの　すりや、お前は主殿さまの。
甚平　お供いたして此あたり、少し手掛りござるゆゑ……マア〳〵何事も、あれへ參つて詳しう話しませう。
きの　そんなら甚平さん。
甚平　マア、ござりませ。
　ト兩人、本舞臺へ來る。
きの　ほんにマア、思ひがけもない所で逢ひましたなう。
甚平　イヤモウ、お前に逢うて、御主人方の御安否が知れ拙者も滿足いたしました。それにつけ、此あたりに、ちと心當りがござるゆゑ。大高どの諸とも、梅澤宿に宿を取り、この近邊を每日の詮議。して、志津摩さま、母上おたみさまにも、御機嫌ようお入りなされますかな。
きの　イヤモウ、御主人樣方は、皆お揃ひ遊ばして、御機嫌よい程に、必らず案じさしやんすな。夫文治どのは、志津摩さまのお供して、中仙道から甲斐、駿河・信濃までも、尋ね步きましたれども、これぞといふ手懸りもなく、何卒、仁木多門正さまへ便り、鎌倉表を尋ねんとは

思へども、人目立つゆゑ、主従夫婦、後や先になり、忍びの道中。マア〳〵、お前も無事で、これ程嬉しい事はござんせぬ。いま心當りと云はしやんすが、もしや敵が此あたりに。

甚平　サア、敵外記が在所は、未だ分明ならねど、一軸の盜賊横山大藏、姿を變へ、この海道に徘徊なす由。何卒一軸を取戻し、敵の片割れ横山大藏。

きの　コレ、音高し、人や聞く。

甚平　サア、彼れが行くへ尋ねんと、主殿さま諸ともに、心を盡せど今以て、彼れめが在所知れぬのは、武運に盡きた我れ〳〵と、先非を悔いて居りまする。

卜よき自分に、亦介、醉ひたる體にて出かける。おきのを見て

亦介　イヨ〳〵、夫婦連れの旅人め。こりや何ぢやな、夫婦連れ立つて、箱根へ湯泉か。エヽ、羨やましい。こゝな畜生め。

卜おきのが脊中を叩く

きの　エヽ、阿房らしい。何さんすぞいなア。

亦介　何さんすとは、慈な命取りめ。あの若い男はな、そもじの御亭か。二人連れの道行き道中、アヽ、羨やましいわえ。さぞ晩には、泊りへ着いて

卜思ひ入れあり

イヤモウ、堪えられぬわえ。

卜おきのへ抱きつく。甚平、取つて見事に投げる。

甚平　此奴はなだ。イケ不作法な。見れば武士の家來さうなが、女と侮つて、惡てんがうすると免さぬぞ。

亦介　コリヤヤイ、おのれなぜ、身共を投げた。われが道連れであらうが、女房であらうが、美しいから無駄を云つたものだ。そんなら、有り難いと、身共に禮を云ふべき筈を、ホイと身共を、なぜ投げた。おのれ、身が相手になるか。相手になるなら、なつてくれう。サア、どうだどうだ。

卜甚平が側へ詰め寄つて、よく〳〵顏を見て

ハテ、どうやらわれも、見たやうな侍ひだわえ。

甚平　さう云へば、おれもどうやら、見覺えの貳合半だと思ふが……オヽ、それ〳〵、われや、いつぞや江戸の淺草で。

亦介　ほんに、それ〳〵、雷門の水茶屋で。

甚平　敵外記が使ひにうせし、密書を持參の奴めだな。

亦介　成る程、その時、その狀箱を捲き上げた。わりやア

飛脚の侍ひ。
甚平　ハテ、よい所で出會したわえ。
亦介　ハテ、悪い所で出會したわえ。
甚平　うぬに吐かさせ、敵の在所。奴め、うぬを。
　ト引きつける。
亦介　イヤ、こりや斯うしては居られぬわえ。
　ト振り切つて逃げる。甚平、引き戻して、やらじと、立廻り。亦介、振り切つて、一散に逃げて入る。甚平追ひかけんとする。おきの、留めて
きの　コリヤ、待つた甚平どの、今こなさんの詞では、逃げ失せたあの下郎こそ、
甚平　慥かに敵の身内の奴。彼奴を捕へて在所の詮議。
きの　そんなら今のは、敵の手懸り。
甚平　イデ、追ひ駈けて一詮議。お前はこれなる辻堂に。
きの　影を隠して、お前の安否を、甚平さん。
甚平　ドリヤ、一走り。
きの　サア、早うござんせ。
甚平　合點だ。
　ト捨て鐘になり、甚平、向うへ一散に入る。おきの、正面の辻堂へ影を隠す。此うち、下の稲村の中より、横山大藏、頬冠りにて顔を隠し、覗ひ出て、辻堂の中へ目を附け、思ひ入れあつて、舞臺の鳴立澤の碑の石を蹴倒し、この蔭より澁紙包みの一腰を出し、脇ばさみ、碑の影より竹筒を引き出し、これを持つて、舞臺を窺ひ、筒の内より一軸を取出し、懐中して
大藏　親人へ渡す大事の一軸。殊にこの身の。
　ト思ひ入れあつて、辻堂の方を見やり、こなしあつて下の方、竹藪の竹を切つて、竹鎗にして引ッ提げ、辻堂へ窺ひ寄り、扉の間よりしたたかに竹鎗を突ッ込む。これにておきの、急所を突かれ、鎗に縋つて舞臺へ出る。立廻りにて大藏、おきのをしたかゝに突き伏せる。倒れてある碑の石に腰をかけ、摺火打ちにて、莨をのみつける。此うち、一つ鉦、念佛、物凄き合ひ方。
きの　ヤア、何奴なれば、かゝる狼藉。盗賊か但し又、敵の廻し者か。女一人を騙し討とは、卑怯な奴の。
大藏　コレ女郎、わりやアおれを見知つて居るか。
　ト此の聲にて、おきの、大藏をよく〳〵見て
きの　ヤア、其方は横山大藏ぢやな。
　ト無念の思ひ入れ。
大藏　オ、大藏ぢや。女郎め、久しいな。うぬら主従が

欲しがる一軸は、これか。
ト懐より出し
これが欲しいか。欲しからうが、こりやならぬ。親人へ渡し、おれが出世の種にする。身が親を、敵と覘ふ志津摩、主殿は勿論、それに附き添ふ家來の奴等、どうで生けては置かれぬワ。今の野郎にうぬ諸とも、直ぐにこの場を水葬禮、鴫立澤の土となれ。
ト竹鎗にて、したゝか突く。
きの　エヽ、口惜しい。女一人を騙し討。みす／＼おのれが所持なすは、御主人方のお尋ねなさるゝ一軸、コレ甚平どの、大藏が來て居るわいなう。甚平どの。
大藏　やかましい、おと骨立てるな。くたばつてしまへ。
ト竹鎗を引き拔き、刀へ手をかける。おきの、落ちたる竹鎗を手早く取つて、大藏が右の太股を、したゝか突く。大藏、悔りするうち、懐中の一軸を引き出し、これを枷に好みの鳴り物にて、烈しいタテ、いろ／＼大藏、跛を引き／＼、仕組みよろしく、トゞよき所にて、向うより甚平、駈け戻り
甚平　エヽ、殘念な。奴めを見失うた。
ト此せりふを云ひながら、舞臺へ來て、この體を見て大藏を突き廻して、一軸へ手をかけ、キッと見得になる。
ヤア、わりや横山大藏だな。
大藏　南無三、野郎、戻つたか。
きの　ヤア甚平どの、お前の行た後で、敵大藏が詮議する一軸を持參なし、わたしに深手を負はせたわいなア。
甚平　すりや、尋ぬる一軸とや。よき所で敵の片割れ横山大藏、おのれが首にこの一軸、志津摩さまへ土産にする一軸を渡すまいか。
大藏　小癪な奴等だ。くたばつてしまへ。
ト立廻りにて、甚平、大藏を一刀切る。大藏、ウンと急所を押へる拍子に、一軸を取落す。甚平、手早く取つて頂く。この時、後に窺ひ居たる、慾助、出刃を引ッ提げ、一軸を持ちたる甚平が腕をしたゝかに切りつける。甚平、これにてタヂ／＼となる。この間に慾助一軸を引ッ浚ひ
慾助　忝ない。
ト一散に向うへ走り入る。
甚平　南無三、折角手に入るあの一軸。
きの　跡追ひ駈けて、取戻さんせ。

甚平　ぢやというて、お前の難儀見捨てゝは。

きの　ハテ、忠義の一つ、早うござんせ。此まゝ、お前を見捨

甚平　とは云ふものゝ、先も氣遣ひ。

てゝは。

きの　未練な事を。

ト　これにて、甚平、氣を替へて

甚平　さうぢや。

ト　一散に跡を追うて向うへ行く。大藏、追ひ駈けんと

するを、おきの、足に縋つて邪魔する。

大藏　エヽ、足手まとひの女郎め。一軸が、あの野郎の手

に入つても、此あたりには、この大藏へ荷擔の奴等を附

け置いたれば、取返すには知れた事。今の野郎も、往生

だワ。

きの　エヽ、心元ないその一言。どうぞ一軸を首尾よう、

甚平どの。

ト　思ひ入れあつて

差當つたる御主人の當の敵。横山大藏、覺悟しや。

ト　大藏へ切りつける。

大藏　小癪な女郎め。返り討の手始め、くたばつてしま

へ。

ト　おきのへ切りつける。これより物凄き合ひ方になり、

兩人立廻りあつて、トヾ、大藏、おきのをなぶり殺し

に切りつける。この時、向うより、大高主殿、半合羽

大小、旅出立ちにて、後先へ心を配り、出て來て、舞

臺の體を見て、ツカ〳〵と走り寄つて、大藏を突き退

け、兩人、キッと顏見合す。

主殿　ヤ、其方は。

大藏　大高主殿。

主殿　横山大藏、よい所で逢うたなア。

大藏　親人を附け覘ふ大高主殿。覺悟ひろげ。

ト　切つてかゝる。主殿、立廻りあつて、一つ當てる。

大藏、ウンと倒れる。主殿、おきのを引き起し

主殿　ヤア、そちや文治が女房、深手を負うたな。

きの　主殿さま、大切なる一軸を、甚平どのが取戻し、一

旦この場を立退きたれど、大藏へ一味の惡者、又ぞろ奪

つて立退きましたわいなア。

主殿　すりや、一軸は甚平が手に入りしが、彼れが一味の

惡黨ばらに。

きの　先も氣遣ひ、どうぞあの一軸を。

ト　思ひ入れあつて、苦しみ、バッタリと落入る。

主殿　不便や、其方は事切れしか。ホイ。

ト　この時、大藏起き上がり、後より主殿に切りつける、立廻りあつて、大藏を切り伏せ、辻堂の前にて、兩人キッとなつて

實の盜賊、横山大藏、思ひ知つたか。

ト　立ち身にて、大藏を抉る。この見得にて、チョンチョンとキッカケ、道具、廻る。

本舞臺、三波の間、うしろ誂らへの浪幕、蛇籠などあしらひ、波に茂りたる蘆、苫船一艘、つなぎあり、すべて馬入川の景色。爰に甚平、以前の形、大わらはにて深手を負ひ、一軸を啣へ、拔刀にて慾助を引据ゑ居る。權、市、三、松、八、吉、晋、竹鎗にて取卷き居る。この見得にて、禪のツトメにて、道具とまる。

ト　甚平、この人數を相手に、存分タテあつて、八人を切り散らし、息をつく所を、慾助、出刃庖丁にて、甚平をしたゝか突く。ト、甚平、慾助を仕留め、苦しき思ひ入れにて

甚平　エヽ、口惜しい。大切な一軸、我が手には入りたれど、大勢に圍まれ、この深手。此まゝこの場で死するとも、御主人方へこの一軸。

ト　立ち上がりても、よろめき、苦しき體にて

どうぞ存命叶はぬ某。この場で一命終るとも、大切のこの一軸、敵の輩へ渡さんや。潔く腹切つて、この土にとゞまり、印南一家の人々へ、手渡しせいで置くべきか。

ト　刀を拔き、腹を切り、臟腑を摑み出し、疵口へ納め苦しみながら、上の方、川の端へいざり寄り、兩手にて疵の口を押へ、俯向けに川へ落ちる。この時、捨て鐘の頭を打ち込み、上の方の苫舟より、横山外記、好みの形にて窺ひ出る。この時、空へ、朧なる月を引き出す。外記、川の端へ覗ひ寄つて、甚平が死骸をかき寄せ、髻を摑み、引き上げ、臟腑を分け、血に染みし一軸を取り出し、死骸を直ぐに川へ蹴込む。一軸を開き、月影に透かし見る事。始終、時鳥。蛙の聲、時の鐘にて、向うより白坂文治、旅がけの形にて、葛籠を脊負ひ、小提灯を提げ、三度笠をかざし、俄雨を凌ぐ體にて、スタ／＼出て來り、花道より、外記を見付け提灯を隱して舞臺へ窺ひ來り、外記が前へ提灯を出す

よろしく、拍子、幕。
ると、兩人、左右へ別れ、ためらひ見る。この仕組み
かける。これにて、兩人よろしく立廻り、月、雲へ入
この時、外記、提灯を叩き落す。と文治、一軸へ手を

七　幕　目　　仁木屋敷の場

役名＝岩倉典膳實ハ横山外記。多門奥方、重波。
十内妻、おたみ。同一子、志津摩。下郎、筈平實ハ
赤介。奴、綱平。同、國平。宮城傳助。白坂文治
仁木多門正。

本舞臺、三間の間、通り二重、見附け金襖。上の方
一間の圍ひの間、數寄屋、障子を閉て、この內、四
方棚に茶器いろ〳〵飾り付けあり、下の方、卯の花
垣よろしく、すべて、多門正、鎌倉の屋敷の體。爰
に仁木多門正奥方重波、衣裝、裲襠にて、二重舞臺
の眞中に立つてゐる。下に白坂文治、木綿やつし、
大小にて、葛籠を脊負ひ、立つて居る。下郎國平、
綺麗なる奴にて、文治に立ちかゝつて居る。重波、

これを制してゐる。この見得、時の太皷にて、幕明
く。

重波　國平、立ち騷いで見苦しい。扣へて居やうぞ。
國平　餘りと申せば聞分けのなき下郎め。殊に怪しき葛籠
を所持いたし居りますゆゑ、引立たうと存じまして。
文治　ハヽヽ、二合半のもつさう野郎が、下郎呼ばはり、
お臍が秩父坂東を廻りさうだワ。善にもせよ、惡にもせ
よ、願ひの筋があらばこそ、推して御前へ通つたからは
お聞き濟みのあるまでは、爰一寸も動きやせないワ。
國平　まだ〳〵此奴、推參千萬な。このお屋敷をどこだと
思ふ。忝なくも鎌倉の執權職。
文治　仁木多門正さまのお屋敷と、知つたに依つて、推し
ての願ひサ。
重波　この屋敷を、夫多門正の屋敷と知つて、推しての願
ひとあるからは、深い樣子がなければならぬ。殊に依つ
たら其方が願ひ、取上げてやるまいものでもない。して
その願ひの筋は。
文治　これは〳〵、結構なるお詞にあづかりましてござり
まする。卽ち、下郎めがお願ひの筋は、これでござりま
する。

ト葛籠を下ろす。

國平　何にもせよ、怪しい葛籠。先づその中を。

ト國平、葛籠へかゝるを、文治、支へる。立廻り、重波、葛籠を押へ

重波　待て國平。品に依つたら願ひの筋を、開き届け遣はさうといふ、自らが詞も待たず、詮議立て、慮外であらうぞ。

國平　でも。

重波　ハテ、明けぬうちこそ奥床し。マヽ、扣へてゐい。

國平　ハテ、仕合せな奴でござるわえ。

文治　即ち、拙者が願ひのこの一書。

ト懐中より、書付けを出す。國平、ムウと思ひ入れ。重波、取つてこなしあつて、開き見て

重波　すりや、この中には。

文治　明けてそれとは申さねど、内に籠めたる願ひの一品お預かり下されますかな。

重波　如何にも、願ひの一品、しつかりと預かりました。

トこの時、切り幕にて、「殿のお歸り」と呼ぶ。

文治　ナニ、殿樣のお歸りとな。

ト向うを見る。

國平　その願書を。

ト重波にかゝらうとする。文治、立廻りにて

文治　コリヤ、なんとするのだ。

國平　その願書の文言を。

重波　ハテ、いらざる下郎が願ひの采配、扣へてゐい。

國平　でも。

重波　扣へて居ぬか。

國平　ヘイ。

ト太鼓、謡になり、向うより、仁木多門正、上下、衣裝、後より、綱平、奴にて附き出て、直ぐに本舞臺へ來る。皆々よろしく住ふ。

重波　只今、御下城遊ばしましたか。

多門　今日は二日の登城ゆゑ、思はざる暇入り、やうやく只今下城。見れば日馴れぬその者は。

重波　イヤ、この者ことは、殿樣へお願ひの筋あつて。

多門　すりや、某へ願ひとなア。

國平　殿樣へ、お願ひの筋あらば、取次の役人へ願ふべき筈を、賤しい態をして、直の願ひとは、慮外な奴。

綱平　それで、おぬしが出しやばるのか。

文治　それゆゑ、出しやばられてござりまする。

國平　黙れ野郎め、お願ひの筋は格別、怪しいその葛籠の中。
綱平　葛籠の中がどうしたと。
國平　この國平が、改めうと思つて。
重波　イヤ、改めるに及ばぬ。この願ひは自らが、聞き届けたる上は、折を見合せ、殿様へ取次いたして遣はす。
多門　すりや、あの者の願ひは。
重波　自らが、後程、ゆる／＼申し上ぐるでござりませう。
ト向うにて
百姓　ハイ／＼、お訴へ申し上げます／＼。
ト向うより百姓大勢、口幕の甚平が死骸を戸板に乘せ、ワヤ／＼云うて、本舞臺へ死骸を直し
ハイ／＼、お訴への者でござりまする／＼。
ト口々に、やかましう云ふ。
綱平　ヤイ／＼、やかましいわえ。其やうに口々に申さずとも、相解るやうに、一人それへ出て、様子を申し上げる。
百姓　ヘイ／＼。
ト一人出て
申し上げますでござりまする。お殿様、御免下されませ。
綱平　苦しうない、それへ出て、早う様子を申し上げい。
百姓　ヘイ／＼、恐れながら申し上げまするでござります。御領分の馬入川に、流れて居りましたこの死骸、村中で寄つてたかつて、やう／＼引き揚げましてござりまする。お訴へと申しまするは
百姓　ヘイ／＼、この事でござりまする。
綱平　すりや、この死骸が、馬入川に流れて居つたとな。
百姓　左様でござりまする。
ト皆々扣へる。文治、思ひ入れあつて
文治　ムウ、さては昨夜馬入川にて……ムウ。ハテナア。
ト思ひ入れ。
國平　野郎め、わりや、その死骸を知つてゐるか。
文治　イヤ、全く。
國平　でも、今の一言、どうやら存じて居るやうだぞよ。
多門　國平、扣へい。
國平　ハツ。
多門　死骸を改め遣はさう。綱平、近う。
綱平　ハツ。

ト合ひ方になり、多門正、下へ下り、死骸の側へ行く、綱平、心得て死骸を少し動かして見せる。多門正、思ひ入れあつて

多門　ムウ、見れば自殺の切腹と見ゆる。

トよく／＼見て

さてこそ、忠死の自殺遂げたれども、一通りの切腹にあらず。正しく五臟の不足。

文重　ナニ、死骸の五臟が不足いたせしとな。

多門　アヽ、これにて思ひ當りし事あり。古へ、讃岐の國志度の浦の乙女、藤原の鎌足の爲に、海底に沈み、彼の紛失の玉を取り得、追手の難を遁がれんと、乳の下を掻き切つて、玉を隱せし例しあり。こりやコレ、何か大切の品を隱さん爲のこの切腹。察するところ、又ぞろその品を、奪ひ取られしと見えたり。ハテ、不便の最期であつたなア。

文治　すりや、昨夜出會せしが、正しく曲者。面見知らいで、殘念な。

國平　さすれば、その場の樣子な。

多重　存じて居るか。

ト文治、こなしあつて

文治　イヤ、存じませぬ。

兩人　ハテナア。

重波　如何なる事か存ぜねども、不便な事でござりますなア。

多門　何は兎もあれ、百姓どもは、死骸を其まゝ、立歸れ。

百姓　へイ／＼。有り難うござりまする。

多門　國平、その死骸、片附けてよからう。

國平　畏まりました。

文治　して、拙者めは。

重波　暫らく休息。綱平、その葛籠、自らが部屋へ。

綱平　畏まりましてござりまする。

文治　然らば此まゝ。

多門　後刻、逢はう。

文治　御免下さりませう。

ト歌になり、文治、思ひ入れあつて、奥へ入る。國平指圖して、死骸を舁いで入る。綱平、葛籠を持つて入る。百姓皆々、捨ぜりふにて、向うへ入る。多門正、重波、殘る。

重波　御前には、未明からの御登城、定めしお疲れ遊ばし

ましたでござりませう。

多門　君に仕へて私しなきは、臣たる道。さのみ苦勞にも思はぬ。

重波　成る程、左樣でござりませうが、兎角、常から御養生が肝心でござりまする。折々は九献でも召上がるが、よろしうござりまする。誰ぞ、九献の用意しや。

多門　イヤ〳〵、今朝は九献のお流れ頂戴いたし、少し酩酊の氣味もある。よしにしやれ〳〵。

重波　左樣ならば、暫らくこれにて、醉をお醒まし遊ばしませ。

多門　左樣いたさう。

ト莨盆を扣へる。

重波　ほんに、いつぞやは、お尋ね申し上げませうと存じて居りましたが、アノ、大學の中に、桃の夭々たる、その葉、しん〳〵たり、而してこの子爰に嫁ぐとは、夫婦仲よう添ひ遂げまして、さうして、アノ、嬰兒を儲ける事さうにござりまするが、矢張り左樣でござりまするかな。

多門　婚禮は萬歲の始め、子胤を宿すは子孫の礎。さるに依つて、子なきは去るべしと七去の第一。

重波　サア、その子胤を宿しまするは、どう致した工合なものでござりますぞいな。

多門　嗜なみやれ。それを身共か存じて居らうか。馬鹿馬鹿しい。

重波　それでも、子なきは去るべしとあるからは、どうでわたしも、お見捨てに逢ふまいと存じて、隨分嬰兒を儲けるやうに、心掛けて居りますれど、これはかりは、ホヽ、ホヽ、ヽ。どんな工合なものでござりまする。とてもわたしに子胤のない事は、御堪忍遊ばして、何卒、仁木の家名相續いたしまするやうに

多門　養子をせいか。

重波　いづれの道にも、武士の家國の相續ならぬは、例へ大身小身に限らず、先祖への不孝ぢやに依つて、養子の儀を。

多門　人旣に命を知るに及び、實子なくば養子をして、家を納めよ、さなきうちは、血緣を待つべしとの本文。武家の掟は背かれまい。

重波　すりや、養子をお進め申しましても。

多門　ハテ、くどく云やるな。兎角、物にくどいと、差出るのが、其方の癖、嗜なみやれ〳〵。

重波　ハイ、左樣ならば、嗜なみまするでござりませう。

トこの時、向うよりおたみ、絹やつし、着流し、一腰を差し、後より苦平、捻切り奴にて、附き添ひ出る。

苦平　ヤイ〳〵、最前から、下がれ〳〵と云ひ聞かすに、御前近く不禮な奴め、キリ〳〵と下がり居らぬか。

たみ　ハイ〳〵、お願ひの者でござりまする。どうぞ殿樣の御前まで、お通しなされて下さりませ。

苦平　ヤア、女の身として、殿樣へ直訴とは、野太い奴、キリ〳〵下がり居らう。

ト此せりふにて、本舞臺へ來る。

重波　笘平、騷がしい、何事ぢや。

苦平　ハッ、何か殿樣へ御出訴したき由にて、罷り通りまするゆゑ、斯くの仕合せでござりまする。

重波　見た所が、褄はづれといひ、形格好賤しからぬ物腰。直々の願ひとは、仔細ぞあらん。女中、して、その樣子は。

たみ　これは〳〵。結構なるお詞にあづかり、お嬉しう存じまする。當お館を、多門正さまのお館と存じまして、わざ〳〵お願ひに上がりました、その樣子と申しまするは。

トこなしあつて

どうぞ、殿樣のお目にかゝり、直々に申し上げたう存じまする。

重波　すりや、あの直々に……ハテナウ。

ト此うち、多門正、つく〴〵おたみを見こなしあつて

多門　その形賤からず、雨を帶びたる海棠の花の面ざし。ハテ、揚貴妃も、まだ存命で居つたよなア。

ト見惚るゝこなし。重波、少し腹の立つこなし。

苦平　願ひの趣き申さぬは、胡散な女。キリ〳〵御門外へ出てうせう。

たみ　すりや、どうあつても、この所には。

苦平　ならぬ〳〵。叶はぬ事だワ。サア、キリ〳〵と立たう。

ト引き立てる。

多門　下郎め、待て。

苦平　でも。

多門　イヤ、苦しうない。其まゝに致して置け。

苦平　ぢやと申しまして。

多門　ハテ、苦しうない。其まゝに差措き、扣へて居れ。

苦平　ネイ。
　ト思ひ入れあつて、西の口へ入る。
多門　今承はれば、何か願ひの趣き、某に直々に申したいとやら。定めし他聞を憚る事と見える。さうか〳〵。
たみ　成る程、御推量の通り、殿様へ、密かのお願ひ。
多門　さう見える〳〵。概ね、其方が願ひの様子も、多門正、承知いたして居る。苦しうない、サヽ、近う参れ参れ
　ト打解けしこなし。重波、悔りして
重波　アイヤ、御前様、素性知れざるあの女中、お側近うと御意遊ばしますといひ、殊に密々の願ひの筋も、御存じとござりまするが、そのマア願ひは、何事の願ひでござりまするぞえ。
多門　奉公の願ひサ。
重波　エヽ、それで、アノ、お抱へ遊ばすお心かえ。
多門　如何にも。
重波　アノ、お手廻りのお腰元に。
多門　イヽヤ、妾に。
重波　エヽ。
　ト悔りする。

たみ　イヽエ、私しば。
　ト云ふを押へて
多門　コリヤ〳〵、詞多きは品少しサ。身が閨の伽に致すならば、其方が願ひも、某が肌を合してしつぽりと……なんと、身の助かりの願ひであらうが。
　ト呑み込ます。おたみ、思ひ入れあつて
たみ　成る程、御推量の通り。
多門　妾になる氣か。
たみ　ハイ、左樣さうにござりまする。
　トこなし。
重波　イヤ、そりやなりませぬ。ほんにマア、日頃もの堅いあなたが、いつの間に其やうな、みだらなお心におなり遊ばしましたぞいなア。道理こそ、養子の事、お進め申しても、御得心がなかつた筈。例へこの上、如何やうにお向り遊ばしても、この事ばつかりは。
多門　また差出るか。
重波　イヽエ、差出るではござりませねど、餘りと申しますれば。
多門　それ〳〵、それが物にくどいといふもの。
重波　でも、こればかりは。

多門　離縁せうか。
重波　イヽエ、お暇は頂きますまい。アイ、お暇を頂きまするやうな、この身に科はござりませぬ。
多門　イヽヤ、科がある。
重波　科があるとは。
多門　なぜ産まぬ。
重波　エヽ。
多門　子なきは去るべし、七去の第一。
重波　それでも、そりやあなた、御無理でござりまする。
たみ　ムウ、すりや、あなたが奥樣でござりますかいなア。
多門　ハテ、奥であらうが、口であらうが、其方は、默つて居やれサ。
重波　イエ〳〵、默つて居りますまい。高いも低いも悋氣ばかりは、姫御前の
多門　趣意を立つれば、離縁せうか。
重波　サ、それは。
多門　然らば、妾奉公極める間、この場を立て。機轉きかしやれ。
重波　ハイ、左樣ならば、奥へ參りも致しませうが、モシ、今日は不成日でござりまする。
多門　また差出るか。
重波　ハイ〳〵、よろしうお極め遊ばしませ。
ト合ひ方になり、こなしあつて、奥へ入る。此うち、おたみ、氣の毒なるこなしあつて
たみ　多門正さま。
多門　印南十内が後家たみ。
たみ　すりや、疾より私しが身の上を。
多門　兼ねて聞き及びし年恰好、多門正へ直々の願ひとあるからは、必定、敵討の願ひであらう。
たみ　女でこそあれ、夫の敵、柞志津摩と一致して、首尾よう敵討ち負ふせ、再び印南の家が立てさせたさ。
多門　尤も。流石は武門の家に育ちし、切なる心底。相手は名に負ふ竹の内の達人。若人といひ、女の手の內。心元ない。
トおたみ、思ひ入れあつて、上の方の松の枝をキッと見て、ツカ〳〵と寄り、拔打ちに切らうとする。
多門　ヤレ、待て。
たみ　女ながらも、無念に凝つたるわたしが手の內。
多門　イヽヤ、手練を試す刄は有情。心なき樹木すら、切

るに及ばぬ。
たみ　すりや、刀の切れ味を。
多門　見るまでもない。天晴れ業物。
たみ　とても事に、とつくりと。
ト拔き身を多門正に差出す。多門正、手に取り、改め見て
多門　疑ひもなき仁王三郎、これで志津摩が功は立つた。
たみ　左樣ならば、仇討の儀を。
多門　敵の行くへが相知れたか、
たみ　いつぞや、江戸表を立退き、京都へ有りつき、先頃より、この鎌倉へ下向と聞く。
多門　如何にも、推量の通り、この度、一軸催促の爲に、花園の義家卿、御下向に附き添ふ、岩倉典膳、未だ實否は解らねども、正しく敵横山外記。其方が爲には優曇華の花、盲龜の浮木、討たしてくれたいものなれど、今は成らぬ。
たみ　とは、又なぜでござりまする。
多門　武將の嚴命に依つて、禁廷へ差上ぐる細川家の重寶吳道が雲龍の一軸、紛失して行くへ知れず、取次は斯くいふ多門正。再び尋ね出し、差上げねば、某は元より細川家の大事。然るに、一軸の盜賊、今に於て、在所知れず。所にこの度禁廷より、中納言義家卿を以て、一軸の御催促再度に及ぶ。卽ち、中納言家へ附き添ひの諸大夫、岩倉典膳、大内の權威を以て、日々に來つて我れを責むる彼奴が心底。察するところ、彼の一軸、忰大藏、盜み出せしを、大高主殿が忠義を以て、再び奪ひ返せしところ、又ぞろ彼れが手に入れ、所持なすに相違ない。全くコレ、折を見合せ、禁廷へ差上げ、仁木細川の兩家を奪ふ彼奴が結構、とサ、推量は致したれど、これぞといふ證據もなく、まして、當時中納言の權ある横山、迂濶に事を計られず。さるに依つて思慮を廻らし、速かに一軸を奪ひ返し、その上でこそ、其方達が年來の本望、やはか討たさで置くべきか。そつとも氣遣ひ致さぬがよいわサ。
たみ　すりや、首尾よう一軸、お手に入つたその上では。
多門　討たしてくれう。
たみ　エヽ、忝ない。して、岩倉典膳とやら、いよく〵敵横山と、お糺し遊ばす一つの手蔓。
ト以前の密書を出す。
多門　この一通は。

たみ　先達て敵外記より、倅大藏へ遣はしたるこの密書。
多門　それこそ屈竟。
ト開き見て
これさへあれば今宵中に、實否は明白。よし〳〵。
ト此うち、苫平、下の方より出て、立ち聞きして
苫平　樣子は聞いた。斯くあらんと先達てより、下郎とな
つて入込んだ。敵と覘ふ、うぬから先へ。
トおたみに切つてかゝる。立廻つて、ポンと當てる。
苫平、ウンと倒れる。
多門　蛙は口ゆゑ、不覺の下郎。
たみ　暫時、呼吸を。
多門　其まゝにして、奧へ行きやれ。
たみ　左樣ならば、多門正さま。
多門　萬事、密かに。
たみ　後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、こなしあつて、おたみ、奧へ入る。多門
正、苫平を引起し、ちよつと活を入れる。苫平、氣の
附くこなしにて、あたりを見廻し
苫平　南無三、今の女めは、いづくへうせた。うぬ。
ト奧へ行かうとする。

多門　下郎め、待て。
苫平　ヤ、なんと。
多門　いま口走つた、おのれが俗姓。主人と云ひしは正し
く横山。有やうに白狀いたせ。
苫平　それ知つたら、生かしちや置かぬ。觀念。
ト切つてかゝる。この時、奧より、印南志津摩、走り
出て、苫平を突き廻し
志津　敵の片割れ。
ト拔打ちに、見事にポンと切り倒す。
多門　さそくの一刀、狂はぬ手の內。さてこそ汝は聞き及
びし
志津　細川家の新參、印南志津摩でござりまする。
多門　さこそあらん。
トこの時、奧より重波出かゝり居て
重波　最前文治が同道して、その身の願ひを自らまで、密
かの賴み。
多門　ムウ。それゆゑにこそ、最前の
重波　推して願ひし養子の謎々。
多門　如何にも、妾の連れ子。こりや、養はねばなるまい
わえ。

重波　なんとこれぱかりは、差出ましても、大事ござりませぬかな。
多門　許して遣はす。
重波　ドリヤ、機轉きかしませうか。
ト唄になり、こなしあつて、しやんと襖を立て、入る。
多門　イカサマ、聞きしよりは器量の若者。コリヤ、母も疾より。
志津　すりや、先達て、お館へ。
多門　願ひの趣き、追ツつけ成就。
志津　エヽ、忝ない。
トこの時、向う、揚げ幕にて「岩倉さまの御入り」と呼ぶ。
ナニ、岩倉とや。
ト思ひ入れ、
多門　身が推察は、正しく横山。
志津　ナニ、横山とな。
トきつとなるを、多門正、押へて
多門　コリヤ、大切なる中納言家の直臣。ナ、コリヤ。
ト囁く。

志津　すりや、お指圖のあるまでは。
多門　大事の客人。
志津　とは云ふものゝ。
トまた行かうとするを、よろしく留めて
多門　ハテ、性悪な奴ではあるわえ。
ト唄になり、多門正、奥へ行けと仕方する。志津摩、向うを見詰めながら、奥へ入る。ト直ぐに太鼓、謠になり、多門正、出迎ふと、向うより横山外記、上下、衣裝、侍ひ三人附き添ひ出で、花道よき所にてとまる。
これは〳〵、岩倉典膳どのには、毎度御苦勞の御入り。いざ先づこれへ。
外記　罷り通りまする。
ト太鼓、謠にて、外記、本舞臺へ通る。多門正、次へ住ふ。侍ひ、下座へ入る。
多門　誠に岩倉氏には、當地久しく御逗留。花の都に事變り、雪月花は至つて不自由なるこの鎌倉。さぞ御氣欝。その代り、時鳥はお聞き飽きなされたでござらう。これも彼の、たまさかに承はる、月が啼いたかなどゝ疑ふばかり、微かに承はりてこそ、風雅の餘情にも相成り

ませうが、餘り澤山に啼かれては、雀も同然でござるてな。ハヽヽヽ。

外記　イヤ／＼、あながち左樣でもござらぬ。拙者元來、物事とぼしき事は至つて嫌ひ。隨分物事澤山な事が好きでござる。この頃、逗留のつれ／＼に、一句いたしてござるが。

多門　これは／＼、さぞ玉句でござらう。ちと承はりたう存じまする。

外記　イヤ、なか／＼お聞かせ申すやうな句ではござらぬ。

多門　イヤ、是非とも／＼。

外記　然らば申しませうか……「俯向いて聞くや雲間の時鳥」なんと、どうでござらう。

多門　イカサマ、面白う承はりましてござる。流石は殿上の御側近くお勤めなさるゝ程ござつて、驚ろき入りましてござる。我れ／＼しきは、武骨なる武門に育ち、詩歌連俳の道などは、なか／＼及び絶えました儀でござる。ハテサテ、お羨やましう存じまする。

外記　ナニサマ、ハヤ、云はつしやれば左樣なもので、兎角風雅の道などは、大内に仕へまする、これ一德でござる。只今申せし一句なども、誠に、拙者が平生存じ居る事を、其まゝに申したものでござる。その仔細と申すは拙者、當國へ下向仕つても、諸士を初め、其許など、足利家の執權を司つてはござれども、この典膳に對し過言がましき儀は、えゝ云はつしやるまい。凡そ當鎌倉中で、某が頭を下げて聞くものは、時鳥より外にはござらぬ。そこで彼の「俯向いて聞くや雲間の時鳥」でござる。なんと、句意が相解り申したでござらう、

多門　存ぜぬながら、追ひ／＼感吟仕つてござる。仰せの如く、當時鎌倉に於て、貴所の上に立つて、物申す者は、イカサマ、時鳥より外にはござるまい。こりや、なか／＼承はる事でござりまする。とても事に、お短册を頂戴仕りたう存じまする。

外記　イヤモウ、御所望とあれば、相認めるでござらう。

多門　然らば、御苦勞ながら。

ト硯、短册を出す。外記、認める事よろしくあつて

外記　これで、ようござるか。

ト差出す。多門正、取つて

多門　御手蹟と云ひ、何から何まで御鍛練。恐れ入りましてござりまする。

外記　イヤモウ、お望みとあらば、如何程なりと書いて進ぜませう。
多門　有り難う存じまする。墨繼ぎの立端と申し、殊に氣高き一句の様と申し。
ト此せりふのうち、懐中より最前の密書を出し、密かに引合はして見て
こりや、正しく。
外記　なんとぞ致したか。
多門　アイヤ、正しく御手蹟は、行成やうと相見えます。ハテ、見事でござる。
トこなしあつて
これは〳〵、餘りお話しに取紛れ、お茶さへ差上げませぬ、不作法千萬。誰ぞ、お茶を持て。
ト内にて
たみ　畏まりました。
ト合ひ方になり、おたみ、茶臺に蒔繪の湯呑を載せ、恭々しく持つて出て
お茶、差上げませう。
ト外記へ出す。
外記　オ、、大儀〳〵。

ト取る。おたみ、下へ下がる。外記、つく〴〵、おたみを見て
多門正どの、まだ見かけぬ女でござるが、何者でござるな。
多門　成る程、お見知りなき筈。やうやく今日參つた新參の女でござりまする。
外記　ナニサマ、左様ござらう。なか〳〵よき器量でござる。
多門　イヤモウ、甚だ不調法者でござりまする。兎角、武士に育ちまする者は、男女ともに、武骨でござりまする。岩倉氏などには、歴々の女も及ばぬ優しきお心ばえ。ちよつと仰せらるゝ事が、斯様なものぢや。畏れながら、拜見いたせ。
ト右の短册を出す。おたみ、恭々しく手に取上げ、思ひ入れあつて
たみ　この手蹟は。
ト云ふを押へて
多門　なんと、見事であらうが。
たみ　正しく、密書に違はぬ同筆。夫の敵。
ト懐劍にて突いてかゝらうとするを押しとめ

多門　イヽヤ、御馳走はまだ早いぞ。
外記　なんと云はつしやる。
多門　イヤサ、御馳走の冷し物はまだ早いと、サア、役人
　どもへ申して參れ。
たみ　ぢやと申しまして。
多門　ハテ、不調法千萬。早まつて人違ひいたすな。あな
　たは中納言家の御昵近、岩倉典膳どの。其方が敵と覘ふ
　横山外記とやらは、夫十內を騙し討に致したる卑怯者。
　剩へ、竹の內極意の印可まで盜み、立退く程の小さき
　根性、云はゞ盜賊。その上、死骸の面體をあばき、その
　身十內となり、後難を恐るゝ未練者、武士でない。侍ひ
　でない。まこと遺恨あつての刃傷ならば、その座に於て
　腹切るか、但し、敵と名乘り、尋常に勝負いたすべきに
　左樣な所存はなく、穢くも逃げ隠るゝ犬侍ひ。今頃は變
　名などして、錨を下ろし、なう／＼と大きな面を致して
　居るでござらう。これを思へば、日本は小國と申すが、
　なか／＼廣いものでござるてな。ハヽヽヽ。なんと岩倉
　氏、左樣ではござらぬか。
　ト此うち、外記、一つ／＼こたへるこなしあつて
外記　これサ／＼、多門正どの、餘りツカ／＼と云はつし
　やるな。横山外記と申すは、身共でござるて。
たみ　ヤ、なんと。
　ト思ひ入れ。
外記　劍術の遺恨に依つて、印南十內を只一刀にぶち殺し
　たは、身共でござる。
たみ　さてこそ。
　ト思ひ入れ。
外記　多門正どの、卑怯未練に逃げ隠れ、本名を包む外記
　ではござらぬ。當時、岩倉典膳と改名いたせしは、主人
　中納言家のお指圖、私しの料簡でない。なんとそれでも
　卑怯者、未練者でござるか。
多門　これは／＼不調法千萬。其許樣が横山外記どのであ
　らうとは、夢々存ぜず、先刻よりの無禮過言、幾重にも
　御免下されませう。ハテサテ、外記どのでござつたよな
　ア。
外記　元來、十內を殺し、印可を我が手に入れしは、慾心
　でござらぬ。大切なる奥儀の祕書、他家へ渡しては、一
　生埋れ木になりまする。そこを存じて、身が所持いたし
　居るは同流のよしみ、武士の情と申すもの。これが所謂
　る仁の道、陰德でござる。なりや某には、恩こそあれ

彼れが敵などゝ、恨む筈はない儀でござる。なんと、さうは思はつしやれぬか。コリヤ〳〵女、いま聞く通りだ。なんと合點がいたら、伜志津摩へも、因果を含め、敵討の事は、さつぱり止めるがよい。殊にわいらが杖柱とも頼む大高主殿、まだその外に、どこぞそこらの醉興人が、敵討たせてやらうなどと、五人十人の助太刀を語らうても、なんとして〳〵、竹の内一人と呼ばれし十内さへ、なんの苦もなく仕留めたる我が手の内。それにわれ達が刃向ふは、正眞の燈心で鯨を突くやうなものだ。及ばぬ事だ、叶はぬ事だ。よしにせい〳〵。それとも達て、自滅がしたくて、敵討の勝負いたしてくれろと頼む事なら、是非に及ばぬ。尋常に立合つてくれうが、われ、その代り、禁廷よりのお祟りで、わいらを初め主人細川、世話さつしやる多門正どのまで、家國の大事に及ぶが、苦しうないか。よもや、家を捨て、世話いたす馬鹿者もあるまい。さすれば、敵討の種はなくなつたも同然だと諦らめてしまへ〳〵。ハテ、いぢらしいものだわえ。ムム、ハ、、、、、。

トあざ笑ふ。此せりふのうち、多門正、素知らぬ顏にて莨をのんでゐる。文治、下座より出かゝりて聞いてゐる。おたみ、いろ〳〵無念のこなしあつて

たみ　聞けば聞く程非道の有り條。夫の敵は倶に天を戴かずと、例へこの身は返り討に遭ふとても、一太刀なりと恨みたいと、心は矢竹に逸れども、御主人のお家と云ひ當お館の仇となつては、討つに討たれず、現在敵を見ながらも、手を空しくするかと思へば、口惜しい〳〵わいなう。

ト無念のこなし。文治もよろしくあつて、外記、うそぶいてゐる。多門正、こなしあつて

多門　イカサマ、其方が料簡相違いたした。當時外記どのは、花園家の御家來、其方達如きが敵なればとて、手向ひがならうか。只今の御教訓の通り、敵討はさつぱりと諦らめてしまふがよい。思ひ切れ〳〵。

トこの時、文治、スツと出て

文治　イ、ヤ、思ひ切りますまい。

多門　ヤ、なんと。

文治　彼奴一人に出ッくはさうと、主も家來も散り〳〵ばら〳〵、千辛萬苦の苦しみも、この時を待たんが爲。今月今日その時節到來して、巡り逢うたる當の敵、見遁がす事は罷りならぬ。サア、奥樣、寶の山へ入りながら

手を空しくしてござる事はない。初太刀をなさりませ。

外記　下郎めが扣へて居ります、サヽ、お立ちなされ〳〵。多門正どの、彼れは何者でござる。

多門　されば、女が家來と相見えまする。

外記　イカサマ、さうござらう。ハテサテ、下郎に似合はぬ、しをらしい奴でござる。コリヤ〳〵、下郎よ、わりや何か、くたばつた十内が下郎だな。そこで主人の敵などゝ、及ばぬ忠義のなまくら物を、ひねくつて見る氣か。ハテ、いぢらしい根性だな。併し、茲をよく聞けよ。この典膳はナ、産れつき慈悲深いに依つて、わいら主従に討たれてくれたう思へど、當時花園家の諸太夫を勤める岩倉典膳、役儀が重い。その些細な敵討ぐらゐに係はる身でない。いはば武將家にも係はる寶、受取りの勅使の御供。假初めの事でない程に、時節を待つがよい。凡そ九十年も待つて居れ、その時分には、どうぞ致して、討たれてくれうワ。

文治　エヽ、モ、是非に及ばぬ。

　ト飛びかゝらうとする。おたみ、留めて

たみ　コレ待ちや、滅多に早まりやんな。

文治　イヤ〳〵、あの廣言を聞いて、なんと堪えて居られませう。ヱウ〳〵〳〵、堪え袋が張り裂けるほど、無念で〳〵なりませぬわいなう。

たみ　さればいなう、その無念、口惜しいに無理ではない。尤もは尤もなれど、其方より、このわしが、ヂツと辛抱して居る心の内、その口惜しさは如何ばかりと思ひやり辛抱してたもいなう。

文治　エヽ。

　ト拳を握り、泣く。

多門　朝顔の、露より脆き命かな。たゞ一時の身の榮を、おのが千歳と思ふ輩、少なからざる世の中に、巡り逢ふ事は一中夢、さめる時節を待つて居れサ。

たみ　すりや、どうあつても

多門　北州の千年も、遂に亡ぶる時節があらうワ。

外記　イヽヤ、身が亡ぶる時節より、多門正、お身が國家の亡び、腹切つてしまへ。

多門　ヤ、なんと。

外記　この度の勅使下向は、吳道子が雲龍の軸。再度の催促、今に於て差上げぬ多門正、禁廷への申し譯に、切腹いたさにやなるまい。

多門　イヤ、滅多に腹は得いたすまい。

外記　なぜ致さぬ。
多門　一軸差上げまする。
外記　そりやいつ。
多門　今宵中に詮議いたして。
外記　して、盗賊は相知れたか。
多門　追ッつけ、搦めてお目にかけまする。
外記　アノ、盗賊をや。
多門　なか〳〵。
外記　ハテナア。
　ト向う揚げ幕にて
傳助　その盗賊、それへ參つて、申し譯仕らう。
國綱　サア、盗賊め、うせう。
　ト時の太鼓にて、向うより宮城傳助、やつし、着流しにて出る。綱平、國平附き添ひ、直ぐに本舞臺へ來る。
多門　合點のゆかぬ寶の盗賊。
　ト多門正、こなし。
綱平　即ち、彼れめが自身の白狀。
國平　猶豫ならずと、これまで
國綱　召連れましてござりまする。

　ト傳助、思ひ入れあつて
傳助　サア、寶の盗賊でござる。よく見知つて置かつしやい。
外多　すりや、其方が盗賊とな。
　トおたみ、外記、㤨りして
たみ　ヤア、其方は。
外記　宮城傳助。
文治　誠に。
　ト云はうとするを、傳助、消して
傳助　ア、コレ〳〵、いづれも樣、滅多な事を云はつしやりますな。知りませぬぞ。知らぬ〳〵、ア、存じませぬぞ。
たみ　でも、其方は傳助。
傳助　ハテサテ
　ト睨みつけ
　如何にも、傳助と云ふ者に違ひはござらぬ。こなたさま達は、知らぬ〳〵、知りませぬ。
たみ　そんならいよ〳〵。
外記　身共も。
文治　拙者も。

たみ　わしとても。
ト外記、文治、おたみの三人
三人　フム、覺えないとな。
ト傳助、こなしあつて
傳助　寶の盜賊に相違ござらぬ。
多門　すりや、其方が。
外記　ハテ、盜賊で
ト外記、文治、おたみ、多門正の四人
多門　あつたよなア。何にもせよ、盜賊とあらば、繩打て。
綱平　ハツ、腕廻せ。
ト手早に繩かけ、引据ゑる。各々こなしあつて、合ひ方。
多門　して、其方は、下賤の身を以て、何ゆゑに大切なる一軸を奪ひ取つた。
國綱　その仔細、有やうに申し上げい。
傳助　仔細といつて、高の知れたる水呑み百姓。夏秋の年貢に詰まり、計つても〳〵計り負ふせざる年々の未進。どうせうかと思案とり〳〵、惡い事には染み易く、譬への通りの貧の盜み。ついした事の出來心、今では思へばこの寶ゆゑに、お歴々の家にかゝはり、罪なき人も罪に落ちる五逆罪と、今さら夢が覺めしゆゑ、我が身の科を我が訴人、樣子といふは、この通りでござりまする。
多門　ハテ、匹夫に似合はぬ天晴れの白狀。盜賊と名乘る上からは、盜み取りし一軸、速かにこれへ出せ。
傳助　サア、その一軸は。
ト當惑の思ひ入れ。
多門　如何いたした。
傳助　サア、それは。
多門　但し、盜賊と名乘つて來たは、仔細があつてか。
傳助　イヤ、全く。
多門　一軸を出すか。
傳助　サア、それは。
多門　仔細があるか。
傳助　サア。
多傳　サア〳〵〳〵。
文治　ハテ、不分明な盜賊ちやな。
ト外記、思ひ入れあつて
外記　多門正どの、いよ〳〵、今宵中に一軸、差上げ召さるか。

多門　成る程、典膳どのゝ御入來にて、この仁木多門に詮議の一軸、如何にも、今宵中に差上げまする。
外記　アノ、今宵中にや。
多門　如何にも。
外記　ハテナア。
トこなし。
多門　明白ならざる一軸の盜賊。この上は、彼れめを拷問にかけ、一軸の在所白狀させい。
國綱　畏まりました。
外記　ハヽヽ、黑白分らぬ彼れめが一言、例へ如何程拷問にかけさつしやつても、この一軸は、何として〳〵、心元ない。
多門　所を、詮議し出して、お目にかけう。
外記　そりや、どうして。
多門　サ、そこが彼の下世話に申す、負うた子に敎へられて淺瀨とやら、彼れが筋よりたぐりなば、一軸の手がゝりも、取りつくまいものでもござらぬ。
外記　ハテ、覺束ないものでござるの。
多門　飛鳥川の淵瀨、一夜に變ずる世の諺なりや、覺束ない彼れが一言も、それと事は定められぬ。水の流れの強きと弱きは、大石を穿つて流るゝ風雨の變應、落つれば同じ水は一筋、誠の一軸手に入らぬとも申されまい。
外記　すりや、どうあつても一軸を。
多門　詮議の工風は、拙者が胸に。
國綱　すりや、この者は。
多門　拷問とげて、白狀させい。
文治　して、殿樣には、
多門　暫時休息、お客人には麁茶一服。
外記　拙者はこれにて、拷問見物仕らう。
多門　ハテ、お物好きな事でござる。ハヽヽ、兩人も奧へ來やれ。
文治　先づ、お入りあられませう。
ト唄になり、多門正、思ひ入れあつて、おたみを連れ、文治も附いて入る。あと合ひ方にて、外記、莨をのみ居る。綱平、國平、傳助へ立ちかゝつて
國平　サア、土ほじりめ、痛めをせぬうちに、早く一軸を出してしまへ。
綱平　盜賊と名乘る程の根性骨で、なぜ盜んだ一軸を出さないか。詞の甘い其うちに出せばよし、惡くじくねると、骨ひしいで云はせるぞよ。

國平　オヽ、それこそ、矢柄ぶり〳〵鐵砲ひしぎ、どんな手ひどい責め苦にかけやうもしれない。とても盗賊と名乘り次手に、早く一軸を

國綱　出してしまへ。

傳助　ハヽヽヽ、盗んで一軸を、今頃まで持つてゐる位なら、初めから盗人はせぬわいの。

綱平　して、一軸は、なんと致した。

國平　賣り拂つてしまつたか。

綱平　但し、誰れぞに頼まれて、その方へ遣つてしまつたか。

傳助　イヽヤ、知らぬ。

國平　賣り拂つたに相違ないか。

傳助　イヽヤ、知らぬ。

綱平　頼み手を白狀するか。

傳助　イヽヤ、知らぬ。

綱平　死太い奴の。

ト此うち、外記、こなしあつて

外記　ハヽヽヽ、兩人の下郎が問ひ狀、手ぬるい〳〵。なかなか容易く白狀いたすまい。ヤイ、匹夫め、わりや何者に頼まれて、一軸を盗み取つた。云つてしまへ。

傳助　ハテ、貧苦に迫つて、一軸は盗んだなれど、その賓の行くへは、どこまで知らぬ〳〵、知りませぬぞ。

外記　兩人とも聞いたか。知つて云はざる一軸、行くへ。なか〳〵一應では行くまい〳〵。

綱平　でも、御主人より仰せを受けた我れ〳〵。この上ば手ひどき拷問にかけて。

トきつとなるを、外記とめて

外記　ハテ、そこが血氣の一圖といふもの。斯樣の拷問には、仁を用ひねば、白狀も致すまい。

國綱　すりや、仁心を以て。

外記　如何にも。この科人は、暫時某預かつて、白狀させて見ませう。

國綱　なんと御意なされまする。

外記　この典膳が、情の拷問ナ。

ト國平へ目配せして

なか〳〵、其方達如きの拷問ではゆくまい。國平とやらなんと左樣ではあるまいか。

ト國平、呑み込み、

國平　イカサマ、典膳さまの情を以ての拷問、我れ〳〵がこの役目を。

外記　典膳が代つてくれう。
綱平　イヤ、それでは。
國平　ハテ、大切なるお客人様の仰せ。無下に申すも、どうやら異なもの。
綱平　ムウ、仔細ありげな。
國平　ヤ、なんと。
綱平　イヤサ、必らず御油斷なきやうに。
國平　左樣ござらば典膳さま。
外記　兩人、次へ。
兩人　ネイ。
ト唄になり、こなしあつて、國平、綱平、下の方へ入る。外記、あたりを窺ひ、傳助が側へ來て、物云はずに、繩を解く。傳助、悄りして
傳助　これは。
外記　宮城傳助。
傳助　親旦那、横山外記さま。
外記　コリヤ。
ト合ひ方になり、こなしあつて
傳助、まめで居つたなア。
傳助　親旦那樣、この傳助が繩目を、お赦しなされたお心はな。
外記　問ふに及ばぬ。そちや、一軸の盜賊でよもあるまいがな。
傳助　エ。
外記　一軸の盜賊は、外にあらう。
傳助　ヤ、なんと御意なされまする。
外記　その身に覺えもなき盜賊の科を、そちや、なんで引受けた。
傳助　ハテ、忠義ゆゑに。
外記　ナニ、忠義ゆゑとは。
ト傳助、キッとなつて
傳助　モシ親旦那、エヽ、こなたさまはなう。惡に募つて細川家の雲龍の一軸、こなた樣が持つてござらうがの。サア、それを推量したゆゑに、その盜賊は我れなりと、名乘つて出たるこの傳助は、昔のお主へ忠義の一つ。この身は如何やうな罪科に遭ふとも、あなた樣の惡名を拔きたいばつかり。爰の所を聞き分けて、どうぞ一軸を、お出しなされて下さりませいなう。
外記　ヤイ〳〵傳助、そりや何を云ふのだ。この典膳、覺えないぞ。

初演の絵番附

傳助　イヽヤ、そりや人にもよりけり、私しに隱さつしやる事はない。サア〳〵、早くお出しなされて、盜賊の惡名を拔けて下さりませ、エヽ、申し、ちつとは、傳助が心にもなつて、見て下さりませいなう。
外記　傳助、その忠義立て、止めに致せ。
傳助　忠義を止めにせいとは。
外記　そりや、忠義になるまい。
傳助　ヤ、なんと。
外記　この典膳、覺えない。
傳助　すりや、これ程までに忠義と思ひ、事を分けて申しても。
外記　毛頭知らぬ。
傳助　すりや、どうあつても。
外記　くどい。
傳助　ムウ。
ト手を組み、ヂツと思ひ入れ。こなしあつて
外記　傳助、われ、それ程に、この典膳を思つて、忠義を盡したいか。
傳助　君辱めらるゝ時は、臣必らず死す。
外記　ムウ、よいワ。それ程忠義が立てたくば、立てさせてくれう。
傳助　アノ、私しに忠義を立てさせて下さるとは。
ト外記、あたりを見て、こなしあつて
外記　殺してしまへ。
傳助　そりや誰れを。
外記　この家の主、仁木多門正を。
傳助　ヤ、なんと。
外記　彼れめさへ殺してしまへば某が望み達する。なりや、其方が忠義、第一。魏の曹操が心に習ひ、劍を以て人を殺さず、辯を以て人を害せサ。
傳助　如何にも、忠義にさへなる事なら、善惡ともにお詞に隨ひませうが、して、劍を持たずに害する工風は。
外記　即ちこれ。
ト懷中より文箱を出し、中より紙包みの藥を出し、傳助へ渡す。
傳助　これは。
外記　當時、明朝にて、專ら用ゆる三蟲の毒藥。慥かに覺えのこの祕藥。
傳助　すりや、この毒藥を以て。
外記　多門正を自滅させい。

傳助　して、毒薬を服ます工風は。

外記　某をもてなしの茶の湯、幸ひ囲ひに釜のたぎり、釜は元より水さしへも。

傳助　それでは、却つて上客の。

外記　コリヤ、存まぬ仕様は胸にある。必らず首尾よう。

傳助　心得ました。

外記　傳助。

傳助　お旦那。

外記　奥で合図を待つて居るぞ。

ト唄になり、外記、思ひ入れあつて奥へ入る。傳助、残り、後見送り、こなしあつて、懐中より薬の包みを出し、二重舞臺へ上がり、奥を窺ひ、思ひ入れあつて道具替る。

本舞臺、一面の磨き伊豫簾をかけ、此うちに風呂、茶棚、茶器一式飾りつけあり。誂らへの鳴り物にて道具とまる。

ト下座より、傳助、窺ひ出て、手拭を覆面にして、右圍ひの内へ忍び、釜、水指へ毒を入れ、窺ひ出る。下の方より綱平出て

綱平　盗賊め、誰れが許し、その縛めを解いた。不敵の匹夫め、腕まはせ。

トかゝるを立廻り、傳助、綱平を立廻りにて、ポンと當て、タヂ〳〵とするうち、下座へツイと入る。綱平心附き

盗賊め、ソレ。

トつか〳〵と奥へ行かうとする。國平出て、綱平を止める。立廻りになる。この時、待合の銅鑼鳴る。

あの音は。

國平　茶の湯の知らせ。

綱平　ソレ。

ト行かうとする。立廻り、兩人爭ひ、下座へ入る。正面の簾、上げる。上の方、外記。重波、風呂に直り、茶を立てゝゐる。その脇に、多門正、控へる。重波、茶碗を置く。外記、袱紗と茶碗を取上げる。多門正、重波、會釋ある。外記、茶碗の中をキッと見て

外記　多門正どの、このお茶はたべますまい。

多門　とは又、なぜでござるな。

外記　こりや、毒でござる。

多重　ヤ、なんと。

外記　茶碗の内の泡立ちは、青きを去つて、茶の赤色。こりやコレ、正しく毒でござる。
多門　イヤ、全く。
ト當惑のこなし。外記、思ひ入れあつて
外記　左様でなくば、疑念晴らしだ。御夫婦、サア、毒味さつせえ。
多門　すりや、某夫婦に
多重　毒味とな。
外記　如何にも。
多門　稀れ人の御疑念晴らしの爲なれば、某は勿論、殊には奥、其方が不調法なる手前、毒味をしやれ。
重波　畏まりました。
ト茶碗を取上げ、呑まうとする。下の方より綱平出て
綱平　アイヤ／＼奥様、暫らくお待ち遊ばされませう。憚りながら、殿様へ申し上げます。大切なるお客人の事なれば、お茶の御馳走、水は元より、吟味に吟味を仕り、清めましたる事は、申さずとも知れた事。併し、得ては蜘蛛の類の毒虫、器の内をめぐり、毒ある時は御大切なる御身の障り、この毒味は下郎めに、仰せつけられ下されませう。

ト同じく下の方より國平出て
國平　イヤ、そりやなるまい。
綱平　御主人を大切に存じ、奥様に代つて毒味するを、なぜ留める。
國平　サア、留めたは、オヽ、それ／＼、大切なるお上のお茶の湯、下ざまの身分として、毒味なぞとは不作法千萬と、サア、お叱りのないうち、留めてやつたは、朋輩のよしみを思つての事サ。
綱平　イヤ、無禮慮外を辨へて、もしお茶に毒あらば、御主人のお命に係はる大事ぢやに依つて、是非ともこのお毒味を。
國平　ハテサテ、われがこの毒味をしてはな。
綱平　ヤ、なんと。
國平　イヤサ、われ一人、この毒味をしては、この國平は功なきに似たり。われ一人、忠義を立てうとは、そりや得手勝手といふものだに依つて、一番止めたのだ。
綱平　すりや、おぬしが忠義を立てたいといふのか。
國平　如何にもさうサ。
綱平　ハテナア。
トこなし。

多門　イカサマ、いま國平が一言、忠義を爭ふ天晴れの心底。その心に愛で、この毒味は、其方に申し付ける。忠義を立てさせてくれう。サ、早く毒味いたせ。

國平　エ。

ト愕りする思ひ入れ。

多門　國平、そちや忠義を立てたいと云うたではないか。

國平　でも、餘り慮外失禮。この儀は幾重にも。

多門　すりや、慮外失禮を辨まへて、この毒味を致さぬとな。

國平　忠と無禮の二道に、當惑いたして罷りありまする。

多門　ハテ、當惑いたして居るよな。アハヽヽヽ。

外記　イヤ、多門正どの、茶がさめて、不馳走になります。早く毒味さつせえ。

多重　ハッ。

ト始終、好みの合ひ方にて、多門正、袱紗と茶碗を取上げ、一口飲んで重波が前へ置く。重波、同じくこなしあつて茶碗を取上げ、呑む。此うち、綱平、心遣ひの思ひ入れ。外記、始終、莨をのみながら、兩人へ心を付けてゐる。

重波　御意に從ひ

兩人　毒味いたしてござりまする。

ト外記、綱平、國平の三人

三人　お心持ちはどうでござる。

ト多門正、こなしあつて

多門　何ともござらぬ。

外記　ヤ、なんと。

多門　いつ／＼よりも、至極健やか。

外記　して、奥方には。

重波　わたしとても、心が淸々と致しましてござりまする。

外記　アノ、御兩所ともに。ハテナア。

ト外記、國平、こなし。

綱平　ヤレ／＼、それで下郎も落ち付きました。なんと國平、おぬしも落ち付いたであらうな。

國平　如何にも、落ち付きました。

ト思ひ入れ。

多門　典膳どの、これで疑念が晴れましたでござらうの。

外記　左樣さうにござる。

ト合點のゆかぬ思ひ入れ。

多門　先づ以て、祝着に存じまする。お疑ひ晴れたる上か

らは、改めて拙者が手前、不調法ながら、薄茶一服差上げん。奥、床の花も入れ直し召されい。

重波　畏まりました。

外記　イヤ〳〵、奥方のお手際の花、入れさつしやるなら典膳が望みがござる。

重波　ナニ、そのお望みとは。

外記　お庭の垣根の卯の花一枝、手折つてお入れなされい。典膳、拜見仕りたい。

多門　お客人の御所望。サヽ、早う〳〵。

重波　畏まりました。

ト誂らへの合ひ方になり、重波、花鋏を持つて、立ち上がつて、路次下駄を穿き、靜々と上の垣根の卯の花を切らうとして爪づき、苦しきこなし。外記、目を附けてゐる。重波、苦しみを隱し、圍ひに來て、花を活ける。此うち多門正、茶を立てながら、苦しきを隱し思はず茶碗を落す。

ト外記、につたりと思ひ入れあつて

外記　御兩所、何とぞ召されたか。

重多　イヤ、何とも致しませぬ。

ト苦しきを隱すこなし、綱平、心ならぬこなし。

綱平　見ますれば、御兩所樣、只ならぬ御樣子、如何なされましたな。

ト多門正、重波、苦しみながら

多門　甚だ腹痛。

重波　エヽ。

ト苦しみながら驚ろく。

外記　毒藥の廻る事早く、霜雪春風に解るに等し。ハテ、めぐるワ〳〵。

綱平　ヤヽヽ、なんと。

トきつとなる。

多門　すりや、身に覺えなき毒藥を、圍ひの茶器へ移し入れ、毒味に事寄せ、我れを害せん計略であつたよなア。

重波　さうとは知らず自らが、濃茶の手前を疑はれ、毒味の手段に陷りしか。

多重　エヽ、殘念なア。

ト兩人、いろ〳〵苦しみ、トヾ『ウム』とのめる。

外記　ハヽヽヽ。

ト笑ふ。

綱平　何にもせよ、一詮議。

ト外記にかゝらうとする。國平、支へる。立廻りよろ

しく、チョン／＼のキツカケ。この道具、元へぶん廻す。

賑やかなる鳴り物にて、この道具納まる。

ト爰に傳助、土壇に直り、キツと見得。中間八人、捕ひの襦袢にて、めい／＼土俵を持ち、傳助を取卷いてゐる見得。直ぐに打つてかゝる。立廻り、よき見得にて、花やかなる鳴り物にて、花々しきタテあつて、皆々を奥へ追ひ込む。ト引代つて綱平、傳助に打つてかゝる。かい潛つて、刀を落し、綱平を一打ちに切り倒し、奥へ行かうとする。後へ外記、出かけゐて

外記　宮城傳助、昔を忘れぬ古主へ忠節、汝が心底見屆けたれば、改めて一味の契約。

傳助　すりや、私しが古への、恩義を忘のぬ心底を、御賞美下さるゝとや。エヽ、忝ない。

外記　いま改めて、契約の印。

ト懷中より一軸と密書を出し

これを汝に預け遣はす。この上は、猶も忠節。

ト傳助、二品を取つて

傳助　何がさて、斯く改めて御契約の上は、心は一致。憚りながら、御片腕とも思し召し、忠勤勵むでござりませう。

外記　ホヽ、天晴れ／＼、その一言にて某も滿足。日頃の大望、時來るか。エヽ、忝ない。

ト後へ、重波、出かゝりゐて、この體を見てゐる。

傳助　綱平、もうよい、起きろ。

ト綱平、跳ね起きる。

綱平　合點だ。

外記　こりや、どうだ。

ト呆れし思ひ入れ。

綱平　最前、一刀にかけられしは、云ひ合せの空死。なんと巧く行つたでごんせうが。

傳助　この二品を、多門正さまへ早う／＼。

ト綱平に渡す。

綱平　合點だ。

ト一散に奥へ入る。

外記　それを。

ト寄るを、傳助、隔てる。

重波　宮城傳助、出かした／＼。

傳助　ヤア、奥樣、首尾よう參りましてござりまする。

外記　ヤ、、、、。こりやどうだ〳〵。

重波　毒殺の手段あらん事を知り、これなる忠臣宮城傳助と云ひ合せ、夫多門正を初め自らまで、一旦毒にて死したる體に見せたるは、汝が盗み取つたる二品を、念なう此方へ取戻さん爲。

傳助　最前、三蟲の毒藥と云つて渡されし藥を、我が懷中にて摺替へ置き、毒と見せしば、延命長壽の補ひ藥。

外記　エ、、、。

　ト口惜しきこなし。

傳助　さりながら、一旦名乘りし寶の盗賊は、どこまでもこの傳助。何卒、盗賊の惡名は、お削りなされて下さりませ。

重波　成る程、尤もの願ひ。其方が忠心に愛で、聞き屆けたわいの。

傳助　エ、、忝ない。

　ト傳助、外記が側へ寄り、詰めかけて

サア、親旦那典膳さま、斯くの如く、下郎ながらも宮城傳助、暫らくも古主の恩を思ひ、盗賊の惡名は、この身に引受くれば、仁木さまの御仁心を以て、こなたの惡名は削りましたぞや。この上は、武道の立つやうに、まこと印南十内を、我が手にかけたと名乘り、十内さまの奥樣、御子息樣に、尋常に敵討の勝負して下され。モシ、典膳さま。

　トいろ〳〵に理解を説いて云ふうち外記、無念の思ひ入れにて、物をも云はず。傳助を引きつけ、さん〴〵に打つて

外記　ヤア、茲な恩知らずめ。さほど口悧巧に吐かしても古主の恩を思はずに、多門正と云ひ合せ、よく典膳を一杯やりやがつたな。

　ト摺りつけて打擲なし

まだその上に、印南親子に討たれてくれいとは、コリヤ、うぬ、印南方へ荷擔人なしたか。茲な不忠の人非人めが

　ト蹴とばす。傳助、キッとなり

傳助　イ、ヤ、荷擔人は致さねども、コレ、印南十内さまは、わしが爲には大恩ある、親傳助が御主人樣。さるに依つて、この事を、仁木さまへお願ひ申し、一軸を取り得たる功立たば、首尾よく敵を討たせて下されと、申し上げるとはいふものゝ、僅かでも、古主のこなたを計略の、ほぞへ嵌めたる我が誤り、その申し譯は、この傳助が、まッこの通り。

ト腹へ突ッ込む。後へ多門正、出かゝり、これを見て居る。

重波　ヤア〳〵〳〵。

ト驚ろくこなし

多門　下郎に似合はぬ天晴れの忠死。如何にも其方が願ひの通り、横山外心、今の名は岩倉典膳、盗賊の汚名は、削り遣はす。喜べ〳〵。

重波　ア、惜しき忠義のこの若者、心おきなう成佛いたせ。

傳助　エ、、忝ない。これを冥土の土産にせん。南無阿彌陀佛。

ト傳助、笛を掻いて落入る。此うち、三人キッとこなし。

外記　何奴も此奴も、皆印南方へ心を寄せる大馬鹿めら……よし〳〵、この上は多門正どの、改めて雲龍の軸、某へお渡しなされい。

多門　イヽヤ、其許へは、えゝ渡しますまい。

外記　ヤ、なんと。

多門　大切なる一軸の儀でござれば、某、直々御旅館へ立越え、義家卿へお目見得申し上げ、その上にて、差上げるでござらう。

外記　すりや、其許が直々に。

多門　如何にも。

外記　ハテ、御念の入つた儀でござる。

多門　最前の組子ども。

八人　ハツ。

ト中間八人出る。

多門　典膳どのを、御旅館まで、お見送り申せ。

八人　ハツ。

多門　隨分、麁略のないやうにな。綱平、合點か。

綱平　畏まりました。

外記　何から何まで、お心付け、御叮嚀な儀でござる。

多門　もしも印南が身寄りの者ども、路次の狼藉もあらんかと、寸志ばかり。

外記　過分に存ずる。

重波　典膳さまのお立ち。

外記　然らば多門正どの。

多門　段々御苦勞。

外記　ア、〳〵。

ト思ひ入れ。

綱平　ドリヤ、典膳さまを送り申さうか。

ト時の太鼓になり、中間八人、外記を眞中に包み、外記、悠々と向うへ入る。綱平、警固して皆々入る。奥よりバタ〳〵にて、おたみ、文治附き添ひ、走り出て

たみ　多門正さま、折角手に入りし横山外記、やみ〳〵とお館を、お歸しなされしお心は。

文治　印南親子主從、敵討をお止めなさるゝお心でござりまするか。

たみ　斯くなれば、日頃の願ひも水の泡。

文次　この上は、跡ぼッ駈けて、おたみさま。

たみ　文治。

文治　ソレ。

トきつとなつて、行かうとする。

多門　ヤレ、早まるな、兩人待て。

たみ　なぜお止めなされまする。

多門　その願ひは叶はぬ。

たみ　とは又、なぜでござりまする。

多門　假初めならぬ典膳は、勅使の添へ人。

重波　女の身といひ、添へ人の典膳へ、いま敵討ちなば、勅使へ對しての無禮。

たみ　ぢやと申して、みす〳〵敵を。

多門　ハテ、急く所でない、伜志津摩・大高主殿、山の内の城下、途中に待ち受け、討取る手筈、先達て申し置いた。

たみ　ヤ、、なんと。

重波　夫多門正の計らひにて、敵典膳、當館を速かに歸し置き、勅使の御旅館へ直々に上がり、大切なる雲龍の一軸、差上げしその上で、典膳が惡事の段々言上なして、首尾よく敵を討たする手筈。

たみ　すりや、途中に於て。

多門　それと事を計らひあれば、氣遣ひ致すな。

兩人　エ、、忝ない。

重波　其方は屋敷に殘りゐて、敵討の吉左右を待つたがよい。

文治　して、拙者めは。

多門　片時も早く

重波　仇討の場所へ。

文治　エ、、忝ない。奥樣、おさらば。

たみ　必らず吉左右。

文治　心得ました。

ト七ッの太鼓を打つ。

たみ　あの太鼓は。

重波　圓覺寺の八ッ。

多門　はや、仇討の

重波　修羅の太鼓か。

文治　エヽ、忝ない。

ト手を合せ拜む。

多門　行け。

文治　ハッ。

ト文治、向うへ走り入る。

重波　ハテ、勇ましい。

ト引ッ張りよろしく、幕。

大詰　鎌倉海道仇討の場

役名 ━ 横山外記。白坂文治。毒虫の彌藏。奴、國平。奴、綱平。印南志津摩。大高主殿。

本舞臺、三間の間、うしろ黒幕、松板の並木、仕掛けの稻村、正面に飾り、すべて、鎌倉山の内の街道

時の鐘、禪のツトメにて幕明く。

ト向うより、文治、凛々しき出立ちにて、一散に出て來る。東の口より、綱平、一散に駈け來り、兩人、本舞臺にて行き合ひ

文治　ヤア、貴樣は奴の綱平どのか。

綱平　さう云はるゝは、印南の御家來、文治どのか、一大事が出來いたした。

文治　ナニ、一大事とは。

綱平　御主人の仰せにて、勅使の旅館へ警固なす横山外記、道にて駕籠を切り拔け、附け置きたる下郎ともに手を負はせ、いづくへか逃げ失せました。

ト文治、驚ろく思ひ入れ。

綱平　ヤヽ、すりや、敵横山は、逃げ失せしとな。

綱平　さりながら、御主人の計らひにて、鎌倉の出口々々に人數を以て圍み置けば、駕籠の鳥も同然。殊さら朋輩の國平め、正しく外記へ内通に、失せたに違ひない。必らず油斷さつしやるな。

文治　如何にも。お二方へ申し達して、外記が行くへ。

綱平　この綱平は、出口々々を固め申さん。

文治　お頼み申す。

網平　合點だ。

ト向うへ走り入る。

文治　ドレ、この樣子を。

ト思ひ入れ。

御兩所へ。

ト向う、揚げ幕にて、馬士唄の聲する。これにて文治、思ひ入れあり、稻村の影へ隱れる。始終時の鐘、向うより、三、六、市、吉、權、松、市、いづれも馬士の拵らへにて、仁木多門正荷物といふ繪符を差したる呉蓙の包みの長持を、大勢にて擔ぎ、唄を唄ひながら出る。後より國平、三度笠、風合羽、すべて三度の體にて拵らへ。毒虫の彌藏、馬士にて、先に立ち、飛脚提灯を持ち、出て來り、直ぐに本舞臺へ來り

國平　サア／＼、夜の明けぬうち、鎌倉を離れにやならない。早くぼッつけろ／＼。

彌藏　合點でごんす。この毒虫の彌藏が請合つたせうがにやア、今夜中に江戸までぼッつけまする。氣遣ひさっしやりますな。

國平　急ぎさへすれば、極めの外に、酒手はしつかり增しだ。早く賴む／＼。

彌藏　合點でごんす。サア、やれ／＼。

トまた唄にて舁き上げ、行かうとする。文治、頰冠りにて顏を隱し、窺ひ寄つて

文治　モシ／＼、これはどなたのお荷物でござりまする。

國平　それを聞いて何にする。このお荷物は、仁木多門正さまから、江戸のお屋敷へ、お急ぎの送り荷物だ。わりやア人足か。コレ、エヽ、お急ぎゆゑ、江戸まで通してやるのだ、サア／＼、早くやれ／＼。

ト行かうとする。文治、棒鼻を捕へて

文治　イヽヤ、仁木さまのお荷物とは心得ぬ。殊に宰領は奴の國平、詮議ものだ。動きやアがるな。

ト冠りし手拭を取る。國平、顏を見て、恟りして

國平　イヤア、うぬ、志津摩を同道ひろいだ若黨めだな。そんなら荷物の譯を。

ト思ひ入れあつて

エヽ、いま／＼しい。

文治　何にもせよ、怪しい長持、通す事はならないぞ。殊さら橫山外記へ內通ひろいだ二合半め、敵の在所をほざかせる、眞直に白狀ひろぐまいか。

國平　いんにや、知らない。御主人の荷物を受取つて、宰

領なすこの國平。この繪符が目にかゝらぬか。邪魔ひろぐと、ひどい目に遭はせるぞよ。

文治 ヤア、盜人猛々しい。似せ繪符を拵らへて、怪しい荷物を廻す國平。サア、横山が行くへを吐かせ。

國平 イヤ、どこまでも、おらア知らない。邪魔ひろがば、ぶッちめろ。

彌吉 合點だ。

ト息杖にてなつてかゝる。文治、脇差を拔いて切り拂ふ。これにて馬士八人、方々へ逃げ込む。文治、後を追うて入る。國平、殘る。向うより、一散に綱平、駈け來り、兩人立廻りあつて、キッとなる。

綱平 うぬ、國平めだな。

國平 綱平か。南無三。

ト逃げんとするを引ッ捕へ

綱平 ドッコイ、さうはさせない。サア、外記が在所を吐かすまいか。

國平 もう破れかぶれだ。覺悟ひろげ。

ト切つてかゝる。これより綱平、拔き合せ、ドッコイと見得になる、兩人、賑やかな鳴り物にて、花々しきタテあつて、トゞ、國平、ちよつと當て、下座へ一散に入る。綱平、起き上がつて、この跡を追ひ、下座へ入る。この時、明け六ッの鐘、所々にて鷄の聲する

ト長持の蓋を刎ねのけ、内より外記、這ひ出て、跡を見送り、思ひ入れあつて

外記 印南大高を出し拔かんと、この中へ忍び來り、奧州へ立退かんと思ひしに、今の下郎が目を附けたれば、もうこの中には危ないもの。

ト雲行きを見る思ひ入れあつて

最早、明けるに程もあるまい。片時も早くこの所を、ソレ。

ト花道へかゝると、向う揚げ幕より、志津摩、白無垢の馬簾つき、凜々しき形にて、手鎗を持ち、走り出て來り、外記をキッと見て留める。外記、これにギックリして、取つて返し、東の花道へかゝる。東の口より大高主殿、野袴、凜々しき形にて出立つ。外記キッと留め、本舞臺へ附き戻す。外記、逃げんとするを、下座より文治、出かゝり留まる。外記、三人に取圍まれキッとなり、

外記 コリヤ、うぬらは、待ち伏せひろいだな。

主殿 ヤア、卑怯なり岩倉典膳、本名は横山外記、汝を討

初演の繪番附

たんその爲に、年月心を盡したる。志津摩が助太刀大高
主殿。
志津　先年、羽州牧の林に於て、父印南十内を闇討になし
印可を奪ひ立退きたる、親の敵の横外山記、仇討の御免
の願ひを立て、爰に待ちうけし十内が一子、同苗志津
摩。
文治　印南が若黨、白坂文治。はや先達て、汝が悴大藏は
大高さまのお手にかゝつてこの世の暇。
外記　すりや、悴大藏は、エヽ、口惜しい。
ト思ひ入れ。
主殿　天命遁がれぬ横山外記、爰で逢ひしは優曇華まさり
志津　今日只今、父の敵。
文治　女房、弟が爲にも仇。
主殿　イザ、立ち上がつて
志津　勝負々々。
外記　小癪な奴等の。斯くなるからは百年目、先年羽州を
武者修行の砌り、おのれが親の印南十内、闇討になし立
退きしは、斯く云ふ横山外記なり。
三人　さてこそな。
外記　うぬら、寄つたら返り討たぞ。

志津　父の敵。
文治　お主の仇
三人　覺悟なせ。
外記　面倒な。ソリヤ。
ト下知する。後より國平はじめ、以前の人數、息杖に
て打つてかゝる。これより大タチになつて、志津摩、
外記相手に、抜き合せ、主殿は多勢を相手に切り散ら
し／＼、下座へ入る。文治も續いて入らんとする時、
彌藏、文治へかゝるを、相手に兩人、立廻り、トヾ、
彌藏を切り倒す。國平、後より切つてかゝる。少し立
廻りあつて、國平を切り伏せ
文次　志津摩さま／＼。
ト呼びながら、一散に下座へ入る。引き違へて主殿、
以前の八人を相手に、大童になつて出て來り、いろい
ろタテあつて、トヾ、この人數を殘らず存分に切り下
げる。三かゝるを、眞向に切り割る。六かゝるを、胴
切りにする。仕掛けにて、稲村の上へ、吹替への形出
る。後向きに飛び附く、この見得よろしく、この道具
を上へ引いて取る。正面の黒幕を落すと

本舞臺、中二階まで、打抜きたる道具。すべて、仁木多門正の山屋敷、表門のかゝり誂らへの道具立て爰に外記、志津摩、兩方ともに深手を負うたる體にて、志津摩、外記を手鎗にて突きかけてゐる。後に大勢、待ひにて、六尺棒を持ち、前後を圍み

大勢　アリヤ〳〵

ト掛け聲。志津摩、外記を切り伏せ、存分に抉る。この時、主殿、文治出て來り

主殿　ヤア志津摩、首尾よう敵を。

志津　今こそ本望達したり。思ひ知つたか、横山外記。

ト思ひ入れ。

主殿　エヽ、お出かしなされました。

文治　手柄々々。

ト云うて、まづ、今日はこれぎり、ドン〳〵〳〵

と打出し。

男券盟立願（終り）

神武八重垣一流免許之事

一 臨機應變　良將之達道也

一 講武習兵者　軍旅之樞要也

遊心文武之門舞於手玄術之場而　逞名覺人者其誰也月本武者之助と聞えたる國は豐前の毛谷村にかせぎ男の斧右衛門くり女房のお六櫛さすが昔を捨かれし手蹟指南を下の森北野の繪馬に奉掛振袖の寺入こし元の請狀に慥な人主喜田孫兵衛京極内匠の乳兄弟園と照とは姉妹の女歌舞妓も下關沖に名高き岸柳島　何某檢使として試合場所に落ちりし二世の起請に三世の師弟誓詞の條々　如件

維時永祿二年五月五日

吉岡民右衛門

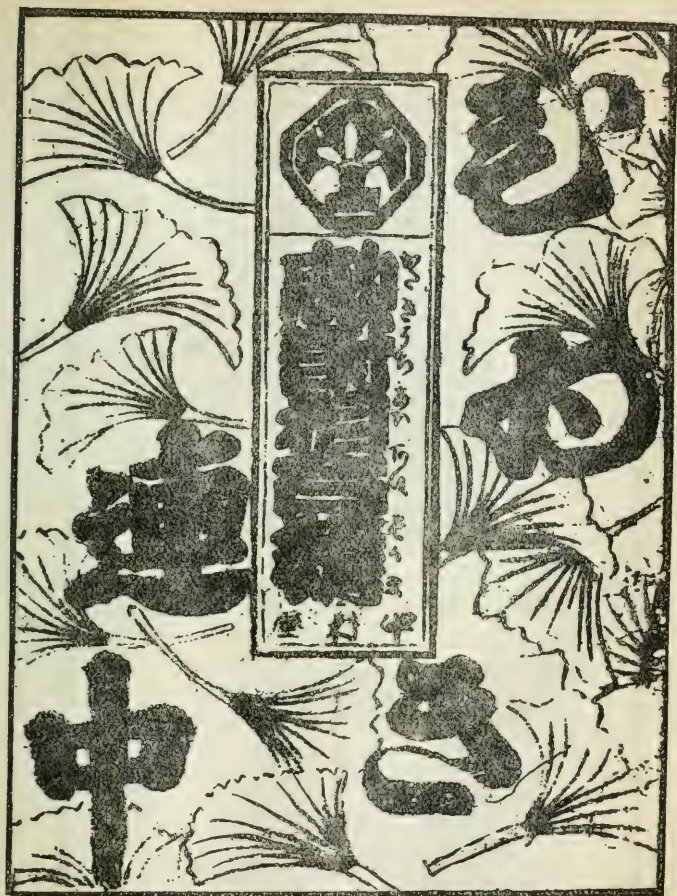
佐々木官次郎殿江　吉岡一味齋

狂言盡榮櫓

敵討相合袴

傚流行稗史而

全部八册

初演の繪番附表紙

敵討相合袴

序幕　飾間館の場

役名　飾間彌生之助。傾城、靜江。同、龍野。門脇義平。加川新左衛門。赤尾十平次。吉岡一味齋。吉岡民右衛門。佐々木官次郎。民右衛門娘、お照。同腰元、おりく。一味齋下郎、紫藏。春風藤藏。小道具屋勘六。京極内匠。

本舞臺三間の間、喰ひ違ひに石垣、竹矢來の土手。播磨の國、斑鳩の宿入り口。幕の内より、彌生之助、鐙大口にて床几にかゝり、新左衛門、十平次、義平胴丸小手脛當。軍兵大勢扣へ居る。ドンチャンにて幕明く。

彌生　大領久吉公、御武德に依つて、四海納まると云へど、未だ武智柴田の殘黨あつて、反逆の企て。

義平　さるによつて、播州の國主たる、飾間彌生之助どのには、當斑鳩へ討手。

新左　近國へは軍勢の催促、今日の到着なれば

十平　我れ劣らじと勇者の面々馳せ參じ

義平　加勢あるでござりませう。エイオ、。

　トどんちやんにて、向うより、靜江、女武者、着流し紅の鉢卷、簑を引ッ掛け長刀を持ち走り出て來て

靜江　御注進々々々。

彌生　あわたゞしい注進とは。

靜江　御上使、木村鳴門之助さまには、今日御入りのところ、思ひがけない合戰の催ほし、お通りの間は路次を開き、鎧兜を禮服に改め、お出迎ひあられませうや。お聞入れござりませねば、御上使へ敵たふ道理。御返答承はれと、女武者の私しが注進。

彌生　イヤ、ならぬ／＼。上使のお通りにあつて、軍勢を纏め引上げなば、その虚に乘つて敵軍込み入るは知れた事。

靜江　これはマア、笑止な事でござんすなア。

　ト又ドンチャンにて向うより、龍野、同じく着流し紅の鉢卷、簑を引掛け、長刀を持ち走り出て來て

龍野　申し上げまする。山田峠に出張の者ども、御上使へ對し軍勢を引取りましてはと、お願ひ申しましたれど、お聞入れなきに依つて、味方の若武者敵對ましたれば、御上使には御立腹にて、御歸洛との事でございまする。

彌生　すりや、上使には歸洛とな。よし／＼。斯うやらう爲に、春風藤藏と云ひ合せて、拵らへた勢揃へ。大儀であつた／＼。

新左　モシ／＼、若殿、そりや何を仰しやりまする。

十平　とんと合點が、參りませぬ。

彌生　樣子と云ふは、大領公の御上意にて、云ひ號けある浮田の姫、婚禮の使ひと云ふに違ひない。いま婚禮しては、この室の津の傾城どもを呼んで、遊興はならぬに依つて、殘黨討手の勢揃ひと僞はり、上使を歸したは、春風藤藏が作者ぢや。

靜江　ほんにあられもない、室の津のわたし等が、此のやうな女武者とは

龍野　恥かしいやら怖いやらの、注進でござんすわいなア。

ト又ドンチヤンにて向うより藤藏、着附け社杯にて、走り出て來て

藤藏　若殿樣へ申し上げまする。

彌生　ムウ、春風藤藏、何れへ參つたぞ。

藤藏　されはでござる。勢揃ひと僞はり、御上使を追ひ歸しましては、一旦はよろしいやうなものゝ、後の祟りがむづかしからうと存じましたゆゑ、急に姫路へ參り、御上使にお願ひ申し上げて、御上使の趣きを承りたるところ

彌生　いよ／＼婚禮媒酌の上使か。

藤藏　イヤ／＼、左やうではござらぬ。お家の重寶、武宗皇帝の色紙、久吉公たつて御懇望の上使。

義平　さう云ふ事なら上使の趣きを、早う知らせてくれゝば、この騷ぎはせぬ。

藤藏　さるによつて、御上使に相願ひ、申し譯を仕り、今夕酉の刻に、上使の御入りでござりまする。

彌生　それで大きに落ちついたが、甲冑の云ひ譯は何とした。

藤藏　都藤の森の競馬に習ひ、端午の故例、氏神の祭禮と、申上げて置きましてござりまする。

彌生　オヽ、天晴れ／＼、流石の藤藏。

十平　酉の刻とござれは、餘程の間。
藤蔵　室の津の貳人の者は、お腰元と申し立て。
静江　ほんに粹な春風さま。
彌生　歸館の上にて一獻汲まん。
龍野　そんなら、この龍野も。
　ト彌生之助、手を取つて
彌生　勝つ色見せる
皆々　これは。
彌生　軍神の血祭り。
藤蔵　勝鬨々々。
皆々　エイ〳〵、オヽ〳〵。
　トどんちやんにて、この人数、並よく、チヨン〳〵にて道具廻る。
　本舞臺、三間の間、淺黄幕、葉櫻の吊り枝。舞臺前柵、一面に花菖蒲の盛り、すべて播洲津田の細江のかゝり、道具とまる。
　ト唄になり、向うよりお雪、振り袖、浴衣を引ッ張り手覆脚絆にて、お陸同じく浴衣、手覆脚絆にて、杖と菅笠を持ち、中間、荷を擔ぎ出て來る。後より内匠、着附け馬乘り袴にて出て來て
内匠　これは〳〵、お雪どのには、只今有馬よりお歸りでござるかな。
ゆき　どなたかと存じましたら、京極内匠どの。
りく　只今有馬より戻りましてござりますが、内匠さまにも、御機嫌ようお出でなされました。
内匠　サテハヤ、有馬の湯治場は、殊の外賑やかな事でござるてな。
ゆき　有馬山いなの笹原と歌にも詠まれました通りの名所ゆゑ、一入よい景でござりますわいなア。
りく　一味齋の御内室にも、皆息災でござりませう。
内匠　そりや此方の家内は、隨分息災。それに付き、武運長久の爲、民右衛門どのゝ内方には、この間瑜伽權現へ祭禮に依つて參詣でござる。
ゆき　そんならアノ母樣には、留守のうち瑜伽さまへ參つてかいな。
りく　慥か瑜伽權現さまのお祭時分でござりまするが、それで大方お留守でもお出でなされ
内匠　常々そさま、御信心の瑜伽さまゆゑ。
ゆき　その瑜伽さまの御利生で

ト内匠、思ひ入れあつて

内匠　兼ねて頼んだ、ソレ、お雪どのへの附け文、ナア、お陸どの。

トお陸これを消して

りく　アイヤ、文ではござんせぬ。

ト思ひ入れにて空を見る。

内匠　文、サア、降つて來さうな五月雨時分ぢやと云ふ事。降らぬ先に早く行かつしやりませぬか。

りく　ソレ、それが氣組みぢや。いま菖蒲の花盛りを、お雪さんが見てぢやわいな。

内匠　されば五月雨に。

トお雪に見惚れて

花は一入増す色香。

トお雪これを心付かず

ゆき　津田の菖蒲は播磨の名所。

ト内匠、菖蒲を壹本取つて

内匠　でも、花菖蒲の盛りなア。

トお雪の側へ來るゆゑ氣味の惡きこなしにて、ズイと行かうとする。内匠、ちよつと振り袖を捉へる拍子に、お雪懐中より印籠を落す。内匠取つて

内匠　この印籠は。

ゆき　そりや、わたしがのでござりまする。

内匠　蒔繪の模様は、吉野の川邊に、卯の花と古歌一首。

りく　内匠さま、そりや大事のでござりまする。どうぞ返して下さりませ。

ト内匠、矢張り印籠を見詰め居て

内匠　「朝ぼらけ吉野の岡の卯の花も、猶有明の月かとぞ見る」

ゆき　そりや父様へ、若殿様から下された御印籠。

りく　今度湯治に、藥を入れてお貰ひなされた、大事の品でござります。

内匠　この印籠に、身共が貰うた。これが欲しくば。

トまた振り袖を捉へる。

ゆき　エ、。

ト恟りする。

内匠　お陸どの、兼ねての返事は。

りく　サア、それは。

ト避ける。

内匠　コレ。

トまた袖を捉へる。

りく　その印籠を。
ゆき　だんないわい。
ト振り切つて泣く。唄になり、お雪、お陸、下座へ入る。内匠殘り印籠を出し
内匠　ハテ、よい物が手に入つたわい。
ト唄になり、内匠、下座へ入る。この唄をかりて、向うより官次郎、着流し大小旅姿にて、お照と出て來り
官次　繁藏が文通で、親人へ御勘當の詫びをしようと、河内の國から遙々と、五年振りで御城下を拜むと云ふもの。
てる　なんのいなア、わたしとても父さんの御浪人の時、このお屋敷へ奧勤め、その折柄、お前との忍び合ひ。あの峯松をお腹に宿し、身重になつた上、お家の法度を背いた科で、お前までを日蔭のお身にしたも、元の起りはわたしゆゑ、久し振りで殿樣の御城下へござんしても、以前と違ひ今の御浪人。
官次　ハテ、役にも立たぬ述懷。其方の親御民右衞門どのも、おれや其方が追放の後、飾間家へ御召し出しとの事なれど、以前不義した身の上、今さら聟舅の名乘り合ひもなるまい。何事も繁藏に逢うた上の事。どこに居るか、マア、おぢや。

ト本舞臺へ來る。繁藏出て來て顏見合せ。
官照．繁藏か。
繁藏　これは若旦那、御夫婦。親旦那一味齋どのへ、御勘當のお詫びを致したところ、不義の兩人、一つの功を立てぬうちは、親子の對面も表立つてはならぬとのお詞ゆゑ、サアなんでも一つの功をと、いろ／＼苦勞を致しましても、高が下郞の私し。それゆゑ峯松さまのお顏を見ながら、ちよつと河内の佐田まで參りまして、御相談とは存じましたが、折惡いお屋敷の御混雜、親旦那のお側一寸も身動きならぬこの繁藏。それゆゑに憚りをもいとはず、文通でお呼び寄せ申しましてござります。して、峯松さまは。
てる　さればいなう。あの子も共にと思うたけれど、官次郞どの仰しやるには、夫婦の者さへ宥りるか宥りぬか知れぬ勘當。幼ない者まで連れて行て、却つてお叱りでも請けてはと、大事を取つた主のお詞。無理にと云はれもせず、其方の母御へ預けて來たが、モウ、それは／＼大人しうなりやつての。
繁藏．その筈の事。父方の祖父樣は、誰れあらう八重垣流の達人、吉岡一味齋さま。母方の祖父樣も同門吉岡民右

衞門さま。

てる　ほんに世が世の時であらうなら、お乳や乳人に傅づかれ

繁藏　吉岡のお世繼と、立派にお育ちなされうに

官次　不義の科にて御勘當、親の因果が子に報ふと

繁藏　繁藏づれが在所の茅屋、お侍ひの城郭とも、思うてお暮らしなさるは

官次　主人の罰と親の恥。

てる　冥加に盡きた報いはあの子。

繁藏　お二人樣。

官照　繁藏。

ト三人、思ひ入れあつて

繁藏　ハ、、、。下郎めとした事が、お力を付ける筈を同じやうにメソ〳〵と。

ト手拭にて泪を拭ひ、思ひ入れ。

官次　それはさうと、お照が親御民右衞門どのも、三年以前當職へ有り付き、今では親人一味齋どのと、屋敷へも毎かど其方より文通。

繁藏　あなたのお詫びが濟んだ上、御機嫌次第でお照さまをも、民右衞門さまへお詫び事。

てる　物堅い父さんなれど、官次郎さまのお詫びが濟んだら、樣子次第で妹のお雪や、腰元お陸に、わたしがお詫び。

繁藏　サア、それも下郎が間を見合せ

官次　何事も繁藏、其方を。

繁藏　ハテ、お案じなくとも、お二人樣。

兩人　其方は案內。

繁藏　マア、お出でなされませ。

ト唄になり三人入る、と道具廻る。

本舞臺、三間の間、九尺の屋體、庇付き、本椽側。上の方、建仁寺垣、枝垂れ柳の見越し植込み、柴垣、下の方に枝折り戸。爰に民右衞門、着附け羽織にて庭を詠め、莨のんで居る。時の鐘にて道具とまる。

ト合ひ方、バタ〳〵にて、上の方の枝折り門より春風藤藏、內匠の胸倉を取り出て來て

藤藏　サア、身が先生の所へ、うせい〳〵。

內匠　それは迷惑な。マア、そこを放さつしやれ。

藤藏　イ、ヤ放さぬ。大事の證據になる男だワ。

トせり合ふうち

民右　これは〳〵何事でござる。

ト藤藏、思ひ入れあつて

藤藏　何事とは、腹が立つて〳〵口惜しうござる。

民右　何を其やうに立腹召さるゝぞ。

藤藏　これが腹が立たいで。身共は先生の門弟でござるぞよ。

民右　師弟なれば、なんで立腹さつしやる。

藤藏　破門して下され。

ト民右衞門、心得ぬこなし。

民右　何かよく〳〵の立腹でござらうが、樣子も申さず破門とは、合點ゆかぬ。マア、仔細を云はつしやれ。

藤藏　仔細と云ふは、この内匠どのでござる。そこへ話して下され。

内匠　これは、ます〳〵迷惑千萬な。身共が存じた事でもないに。さうして、云うても云はいでもの事を。

藤藏　でも、こなたを證人に連れ參つたのだ。

ト内匠、頭を搔き

内匠　そりやハヤ證人ではござれども、仔細を申す事は免さつしやれ。

民右　何か樣子は合點參らねど、證人に召連れたる内匠どの。殊に師弟の春風どのが、この通りの立腹。

藤藏　その譯は斯うでござる。

ト合ひ方になり

兼ねて一味齋どのには老年に及ばれ、去々年御師範を辭して、八重垣流にて同じ吉岡の苗字うち、先生を推擧なされし、一味齋どの。それに今さらこの間も、若殿の御前にて申さるゝは、ア、老いては麒麟も駑馬に劣ると、一味齋が眼力の相違は不忠の第一。去々年推擧仕つた民右衞門、同流と申し、我れに劣らぬ達人と思ひの外、未だ手練未熟との取沙汰、如何にもこの間御前の稽古にて、門弟中への敎へ方見渡したるところ、太刀筋と申し構への相違、一向八重垣流はどこへやら、闇雲流でもあらん。いま泰平の御代なればこそ。亂世で見さつしやれ、亂痴氣大騷ぎと申すもの。あれでは一家中の先生ではなくて、劍術進上先生だなどゝ、イヤハヤ惡しざまな申し分。

ト内匠、いろ〳〵思ひ入れあつて

内匠　その節その座にあつたるこの内匠なれば、後日の證人になれと、達て春風どのゝ申さるゝゆゑ、この内匠左やうな證人には相成る事は眞平御容赦と申したなれど、

聞入れなくて無理無體に、これへ連れ參られてござる。
ト春風、いろ〳〵と腹を立て
藤藏　コレサ〳〵、こなたは傎平容赦であらうが、この春風は民右衞門どのゝ門弟、聞捨てに相成らうや。
ト民右衞門、思ひ入れあつて
民右　すりや、その譯でござるか。親々の不和なるは武士の意地なれど、よもや一味齋どのに限つて
內匠　それ見さつしやれ。此やうな事を申すと、云ふ者ばつかり味に思はれるゝから、よさつしやれと云ふに、證人ぢやと云うて、武士の胸倉を引提へて、引摺り引ッ張り。
藤藏　でも、默つて居ては師弟の間が相濟まぬ。一味齋どのがあのやうに云はれるからは、身共を始め一家中の門弟ども、破門と一致仕つた。
ト民右衞門「ムウ」と思ひ入れ。兩人、してやつたりとこなし。
それとも我れ〳〵の申す事ゆゑ、あの春風などが申す事は、僞はりとも思し召しござらうが、僞はりならぬ證據があるからの事。內匠どの、出さつしやれ。
內匠　出せとはな。

藤藏　ソレ、證據の品を。
ト內匠、わざと驚ろき
內匠　滅相な。この證據を出して見さつしやれ。誠に愛想づかし。
民右　證據とあれば見ようかい。
內匠　さう云ふ事なら見せ申さう。
ト藤藏キッとなり
藤藏　これ程の事、打捨て置かれぬ事なれば、同門弟へ申し聞かさう。うぬ、一味齋の人非人め。
ト合ひ方になり、內匠と顏見合せ、藤藏、そこらを蹴立てゝ下座へ入る。
內匠　民右衞門どの、これを見さつしやれ。
ト懷中より紙に包んだ杯を出す。
民右　その杯がどう致した。
內匠　この度若殿より、改めて下された杯の蒔繪は「吉野の川邊に卯の花」の古歌一首。「朝ぼらけ吉野の岡の卯の花も、猶有明の月かとぞ見る」
民右　ヤア。
トぎよつとする。
內匠　この古歌は、貴殿へ若殿より下された器財にて、覺

えがござらう。こりや「吉野の岡の卯の花」と、吉岡を詠み入れ、有明の月殘り多しと御賞美あつたは、吉岡家の規模と申す者。こりやよく／＼思ふに、民右衛門どのへは沙汰なしにて、慥かに御師範に上がつたと見えて、專ら風聞。身共へも披露せいと云はぬばかりに、この杯を見せびらかしてござる。

ト此うち、民右衛門思ひ入れあつて

民右　證據まであるその話し。ムウ……して、身共が所持のその古銘のある器財、どうして又こなたは。

内匠　御息女お雪どのと、身共深う云ひ交はして、夫婦に成らうと堅き誓ひに、下されたこの印籠。

ト以前の印籠を出して見せる。民右衛門驚ろき

民右　すりや、若殿より下された印籠を、湯治へ參ればこそ、大切な彼の良藥も遣はせしに、夫婦の固めに、親も免さぬ不義者、憎くい奴。

内匠　その御立腹であらうと存ずるから、口外せまいと思うたなれど、どうで始終は婿舅、捨て置かれぬ仕儀でござれば申しますが、こりや思案さつしやらずばなりますい。

ト民右衛門思ひ入れあつて氣を替へ

民右　何は兎もあれ、その印籠を此方に。

内匠　イヤ／＼、大事の證據、婚禮濟んだその上にて。

民右　然らば、その杯が預かりたい。

内匠　これは又、一家を披露いたす證據でござる。

ト思ひ入れあつて

ドリヤ、滿中を廻らうか。

ト唄になり、内匠、こなしあつて下座へ入る。民右衛門殘り

民右　一味齋とは、去々年、師範を辭さん爲、八重垣の同流を尋ねられしところ、同苗うちの拙者とあつて、一味齋の推擧にて、お召し出しにあづかりたれば、當時の恩義はあれど、親々は同門にて、武術勝れて却つて不和。併し表立たねど、官次郎の事もあれば、申さば、姻舅。一旦の恩義を見せ、再び身共をお暇とは、矢張り不和なる遺恨の心底。

ト思ひ入れあつて

御主人は元より、家内安全祈りの爲、娘が湯治の戻りも待たず、女房くらは、備前の瑜伽權現へ、祭禮に依つて代參させしに、神の惠みもない事か。身共とは心のうらはら。おのれ一味齋。

ト きつとなるこなしにて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、上の方、九尺の屋體。大和葺き丸太柱、圍ひの體。一面に葭簀掛けあり、下の方、障子立て、待合の體。爰に松の木、蜘蛛手に手水桶圍ひの際に鎖にて金燈籠吊しあり、道具とまる。

ト 合ひ方、蛙の聲にて圍ひの内より

三人　さて〳〵面白い事でござつた、

ト 簾を上げる。伊平、伴藏、肴附け麻裃にて刀を提げ、勘六、肴附け社杯、壹本差し、道具屋にて何れも茶客の體にて出て來る。待合より一味齋、惣髮胴服の形にて送り出て來て、辭儀して居る。

伊平　誠に、お好き者とは申しながら、いつとても〳〵風流でござる。

伴藏　お道具と申し、會席と申し、お心付けられた事でござるて。

勘六　私しなども、よき折から、伊平どのと同道で、お國へ參つて御馳走に預かりました。大坂表では壹丁目筋で小道具商賣でござりまするが、茶道至つて熱心で、唐物の方も取扱ひますて。

一味　イヤモウ、何も上げます物もござりませぬ。

伊平　これは先生には、毎度面白い事でござりました。甚だ勝手ながら、お禮もこれにて申し上げまする。お立ち下され。

三人　先生、もうお入りなされ。お勞れでござらう。

一味　左やうなら、御免下されい。

伴藏　私しは、お勝手のお賄ひに、ちと御用ござれは、これにてお別れ申しまする。御免下されい。

三人　然らばこれにて。

ト 三人、切り戶を出て、下の方へ入る。後に一味齋、こなしあつて

一味　茶に四つの長所あり、繁花寂寞、嵩山叔姬と、唐土人の譽めたるも理り。これからは自身の手前。ドリヤ、獨服を樂しまうか。

ト 茶を立てにかゝる。下の方より繁藏出て

繁藏　イヤ申し、お旦那へ下郎めがお願ひ。

ト 時鳥啼く。

一味　ナニ、願ひとは。

繁藏　若旦那、官次郎さまの、御勘當のお詫び。

一味　コリヤ〳〵繁藏、伜が事は、お家の掟を背きたる不

義の科人。
紫蔵　その御立腹は御尤もでござりますれども、ほんの若氣のお心違ひ。御追放より早五年、何かの辛苦御艱難。
一味　くど／＼申すな。親子の恩愛知らぬ身ではなけれども、頑ないものは憂き世の中。鳥類の時鳥も、八千八聲啼き盡せば、その身の終りと云ふでないか。餘り泣かせぬやうに致せやい。
ト思ひ入れ。時鳥の聲、紫蔵空を見て
紫蔵　噂を申せば　影はなけれどあの時鳥。
ト此うち官次郎出かけ居て
官次　その時鳥は、親御戀しと。
ト思ひ入れ。
一味　あの聲は。
紫蔵　よく啼く鳥ではござりませぬか。
一味　如何にも。親子戀しと啼く筈かい。
ト茶を立てながら官次郎へちやつとこなし。紫蔵、思ひ入れあつて
紫蔵　モシ、その時鳥が、親御戀しとなア。
ト官次郎へ思ひ入れあつてツッと入れて、下手へ入る官次郎、おづ／＼と一味齋が側へ出て

官次　モシ殿、お懐かしうござりまする。
ト一味齋、思ひ入れ、キッとなり。
一味　今日の茶の湯に活けたる花の沙羅双樹。
官次　エ。
ト活けたる花を取つて投げ出す。官次郎見て
この花は。
ト本調子の合ひ方。
一味　釋尊誕生の折、産湯に灌佛なしたる花。
ト官次郎喜び
官次　すりや、産湯の花とは、親子の恩愛、お逢ひなされて下さるとな。
一味　イヽや、沙羅双樹は釋家を隔て、猥りに席を分けたる花。さるによつて、身近う參ると免さぬぞ。
官次　エヽ。
一味　お家の法度を背きたれば、親子と云ふに云はれぬ仕儀。我が子に産湯に遣うた沙羅双樹。それゆゑ逢はれぬ。
トこなしあつて
一味齋は耳順に及んで、云ふ事さへも聞えぬわい。
官次　そりや又あんまり御胴慾。

一味　胴慾とは其方の事。今も今とて繁藏が、身共へ詫びぬ相願へど、お咎めは赦されぬ。サ、恩愛餘つてこの嘆きの、空にも知るゝ時鳥。
官次　人間老少不定といへど
一味　老いは老立ち、殘るは若鳥。
官次　勿體ない。茶の湯に邪魔な正午明け。
一味　子ゆゑの闇も告ぐる鳥、どうぞ冥土の。
官次　エ。
一味　禪語に依れば涙の茶柄杓。
　ト茶を立てながら思ひ入れ。
官次　その親鳥のお側離れて
一味　現在、我が子を我が子とも
官次　云ふに云はれぬお宮仕へ。
一味　思へば思へば時鳥の
官次　八千八聲の
　ト顔見合せ
兩人　血を吐く思ひであるわいなう。
　ト思ひ入れ。一味齋茶碗を差出し
一味　松虫のりんとも云はぬ黒茶碗、老いの樂しみ、濃き茶の剩り、親の手づから遣るではない、この黒茶碗の形は卽ち、七種の內の菖蒲。そのあやめなる今日の茶の湯の、後見一口。
官次　すりや、親子と云はずに私しに。エ、有り難う存じ奉ります。
一味　子を持つて知る親の恩とは、合點がいたか。いま啼いたる時鳥の親めは、孫鳥の顔見るさへ叶はぬは、よくよく因果の親子の緣。妹鳥は幼ない時、誘拐されて、どこにどうして、籠の鳥さへ恨みがち。神や佛へお詫び申さにやならぬわい。
　ト茶席を終へながらこなし。
官次　御尤もなるお案じの、妹が身の上、又一つには峯松と云ふ子鳥の
一味　ヤ。
官次　顔をお目にかけたらござりまする。
一味　オ、道理ぢや〳〵。見たいわやい。
　トこの時、パッタリと時鳥死して落つる。官次郎、恟りして茶碗、取落して割る。
一味　八千八聲啼き盡して、死したる鳥は時鳥。
官次　これはしたり、大切なる茶碗を割つて
一味　コリヤ、茶碗の價は格別に、七種のうちのこのあや

め。

官次　あやめに別れて時鳥の。

ト次ぎ／＼心がゝりの思ひ入れある。

一味　死して落ちたる時鳥、頃は五月の菖蒲時。

官次　親御戀しのその鳥と

一味　あやめに別かれ

官次　アヽ、時鳥の雨を誘うて。

一味　空も無情の

官次　曇るこの身は

一味　愛別離苦。

官次　モシ。

ト縋るを振り切り

一味　健固で暮らせ。

ト唄になり、思ひ入れ、簾一面に下りる。官次郎、後を見て

官次　餘所ながらでも親子の對面、有り難う存じまする。シタガ、人目にかゝらぬやうに、勝手知つたこの待合ひに。

ト官次郎、下の方へ入る。トばた／＼にて内匠、藤藏の胸倉を取つて出で來り

内匠　サア、一味齋どのへ連れてござらつしやい／＼。

藤藏　これは又迷惑千萬な、マア、放さつしやれ。

内匠　イヽヤ放さぬ。大事の證人の春風どの、こなたを逃がしてよからうか。

藤藏　これは／＼情ない。拙者は只今朋輩と、所用あつて吉岡先生の宅へ罷り越す途中、貴殿へ對する無禮は致さず、何がお氣に障つたやら、無理に引摺らつしやるが、何事でござる。

内匠　何事とは、その先生の、吉岡どのゝ事だ。

藤藏　コレサ／＼、どうしたものだ。民右先生が一味齋どのを、惡口の證人なら、この事ばかりは只管御容赦御容赦。ハテ、ない事ならよけれども、正眞正銘誠の事ゆゑ、この春風を證人に立て、毒を云はれて堪るものか。この儀は眞平々々。

ト行かうとする。

内匠　貴樣を逃がして堪るものか。

藤藏　でも、一味齋どのゝお目にかゝらぬうち。

内匠　いつかな放さぬ。

藤藏　でも拙者は。

ト爭ふ。一味齋、圍ひの簾を揚げ出て

一味　荒々しい。京極内匠、何事ぢや。
内匠　何事とは、腹が立つて／＼口惜しうござる。
一味　何を立腹するのぢや。
内匠　これが腹が立たいで、どうしませうぞ。親御文山より、こなたの御子息官次郎どのへ、佐々木の苗字を遣はした縁によつて、この内匠お世話に相成り、掛り人と成つて、兵術出精いたすも、微塵流を立てたさ。さればこそ師匠とも、親とも申してよい間柄なりや内匠、一味齋どのには縁の深い者でござる。飼ひ犬でも噛まれると腹が立ちますわい。
一味　そりや申さいでも知れた事ぢやが、なんで立腹いたす。サア、仔細を申せ／＼。
内匠　仔細と申すは、この春風藤藏どのでござる。そこで話して下され。
藤藏　コレサ／＼、迷惑な事を云はつしやるな。身共が存じた事ではない。
内匠　でも、こなたを證人に連れ參つたのぢや。
　ト藤藏、頭を掻き／＼
藤藏　そりやハヤ證人ではござれども、仔細を申す事は免さつしやれ。

　ト一味齋、心得ぬこなしにて
一味　何か様子は知れぬが、證人に召連れたる藤藏どの、殊に身共が世話うちの内匠が立腹。
藤藏　その仔細と云ふは、斯うでござる。
　ト云はうとするゆゑ、内匠さう云うては惡い、云ひ兼ねろと仕方する。藤藏、呑み込み
イヤ／＼／＼、身共、仔細は申されぬ／＼。
内匠　ハテササ、それを云はぬと云ふ事があるものか。云はつしやれ。よいワ、云はずば身共が申さう……先生には去々年、師範を辭して、民右衞門どのを推擧あつたれど、その恩義も相忘れ、只今にては我が利慾、殿より師範と相成りしは、全くおのれが器量と思うて、自慢高慢何やらであつた。
　ト考へる。藤藏思ひ入れ。
オヽ、麒麟／＼。老いては麒麟も駑馬に劣るとは雖も、始めからの駑馬に劣つたる一味齋などゝ、人も無げなる廣言。若殿に相向ひ、畏れながら、よき師範をお召し出し、誠に良禽は木を選みて棲むの道理、拙者を師となされしは、摩利支天の引合せ。この上は師範を辭したる一味齋は、御扶持を減じられ、遠國へ蟄居がよろしうござ

初演の繪番附

らうと、出る儘の申し分にて、八重垣流も闇雲流など、
と蘇秦張儀の如く云ひ觸れたれば、一家中はハヤこの
沙汰。舌は三寸の者なれど息の根とは
　ト藤藏こなしあつて
藤藏　その節、その座にあつたるこの藤藏なれば、後日の
證人になれと內匠の勸め。藤藏、左やうな證人に相成る
事は、只管容赦と申したなれど、聞入れなくて無性無體
に、引摺つて參られたのでござる。
　ト內匠、刀を捻くり
內匠　コリヤ〳〵、春風どの、こなたは只管容赦であ
らうが、この內匠は一味齋とのゝ厚恩の者。親よりは大
切なお人。聞捨てにならうや。
　トきつとなつて
おのれ民右衛門め。
　ト行かうとする。
一味　內匠、靜まれ。すりや、仔細と云ふはその事か。
藤藏　ソレ、內匠どの、どことても同じでござるぞや。
　ト云はうとするゆゑ
內匠　コレサ〳〵、春風どの、さうではない。
　トもつと煽てるのぢや〳〵と、氣を揉むこなし。藤藏、
　呑み込み
藤藏　イヤサ、何でござるて。どこの何國とても、此やう
な事を申すと云ふ者ばかり、味に思はれるから止めさつ
しやれと云ふに、證人だと云つて、武士の胸倉を引ッ捕
へて、爰まで引摺り參つたぞや。これで濟まうと思はつ
しやるか。
內匠　でも、知らぬ顏にては、一味齋どのへ恩義が濟まぬ
……お聞きの通りでござる。佛のやうな先生にても、申
し分にては一家中は、イヤこの沙汰。緣を切つてお世話
にも相成らぬ。
　トきつと云ふ。一味齋、ムッとしたるこなし、兩人、
　うまいと思ひ入れ。
藤藏　併し、こなたは一味齋どのゝお世話うち。身共は民
右衛門どのは師匠の儀でござれば、依估贔屓は有うち。
惡く云はれて腹が立つのが、これ人情なれど、あいらが
何か申す事は、取るにも足らぬと思はつしやらうが、僞
はりならぬ證據がござる。もう斯うなつたらば何も隱さ
ぬ。內匠どの。出さつしやるがよい。
內匠　如何にも證據見せ申さう。
　ト一味齋、思ひ入れあつて

一味　證據を以ての申し分。聞き屆けてやらう。
内匠　左やうならば。これでござりまする。
ト合ひ方に成り、懷中より以前の印籠を出す。一味齋見て
一味　この印籠は、吉野の卯の花の蒔繪。古歌一首「朝ぼらけ吉野の岡の卯の花も」。
内匠　「猶有明の月かとぞ見る」その歌は、吉岡を詠み入れて、若殿が殊の外御賞美あつて、一味齋を蔑らに申した證據の印籠。
一味　身共、杯の蒔繪に下されたが、同じ吉岡ゆゑ、民右衛門どのにも下されたとあるその印籠で。
内匠　なんと一味齋どの、武士の眼からホロ〳〵と、涙のこぼれる程口惜しうござる。
一味　此方には去々年、推擧いたす程の事、野心はなけれども、以前の不和を思うて。
トこなしある。兩人、もうよいと思ひ入れあつて
藤藏　その證據と申し、身共も據なく證人になつたれど、長居は恐れ。お暇〳〵。
ト藤藏こなしあつて下座へ入る。
内匠　これぢやに依つて、内匠が胸は燃えるやうでござる。

エ、〳〵、恩知らずめ。
ト一味齋こなしあり
一味　師範を辭したる身共なれども、不和を思うて意趣晴らしとあれば。
内匠　身共が云ふ事、僞はりと思はつしやるなら、民右衛門どのへ、何喰はぬ顔にて面談さつしやれ。
一味　ハテ、其方は扣へて居やれ。
ト始終合ひ方。下座より民右衛門出て來て
民右　一味齋どの、御在宿かな。
一味　茶客で、只今まで取込み居つたて。
ト内匠、思ひ入れあつて、下の方へ來る。民右衛門、こなしあり
民右　御意得たうござる。
一味　これは改まつた、身共に。
民右　さて、これまでは段々の恩義。千萬忝なうござる。
トきつと成り
一味齋どの、こなたにもお似合ひなされぬぞ。
一味　ナニ、身共に似合はぬとは。
ト内匠、一味齋に、ソレ見たかと思ひ入れある。
民右　御身には年に及ばれ、去々年御師範を辭して、身共

を推擧下されたこなた。親々の不和は格別、何恨みあつて身共を、若殿へ惡しざまに申された。何ゆゑ讒言のさつしやれたぞ。

ト急いたるこなしにて云ふ。

一味　イヤ〳〵、民右衛門どの、默らつしやい。いかう急いたる樣子ぢや。身に覺えない事を申さるゝが、こなたの恨みより、身共が恨み。一味齋を何ゆゑ讒言な致した。

ト民右衛門、心得ぬ思ひ入れにて

民右　ナニ、民右衛門が惡しざまの舌頭にかけたとは。

一味　知るまいと思ふか。殿より拜領の印籠をひけらかし、御師範顏の自慢高慢。

民右　一向覺えのない事を申さるゝが。

一味　恍けさつしやるな。

民右　こなたこそ、殿より下された杯にて、再び師範を勤めるつもり。

一味　ナニ、杯とは合點がゆかぬ。

民右　こなたが恍けさつしやるのだ。諸人の舌頭、取るに足らぬと思へども、若殿より拜領の杯にて、披露なすが慥かな證據。讒言は取措かつしやい。

一味　默れ民右衛門、讒言などゝは穢らはしい。舌頭に任せ親々の不和の遺恨を晴らさん爲、若殿へ惡しざまに申したな。

民右　云はぬ事を云つたとあれば。

一味　武士の意地づく。

民右　ムウ。

ト兩人、刀を取つて詰め寄る。內匠、悧りして中へ入り

內匠　これはお二人ともに、御師範の身を以て、私しに劍戟の振舞。マア〳〵、待たつしやりませ〳〵。

一味　申したと云はれては武士が立たぬ。

民右　ぢやに依つて、討ち果して云ひ譯立てる。

ト一味齋、思ひ入れあつて

一味　京極內匠。吉岡兩家の中を、何ゆゑ破る。

內匠　ヤア、。

ト大きに悧りする。

一味　吉岡兩家を亡き者にして、おのれが手練の未熟にて、佞人ばらへ取入つて、微塵流の師範にならんと、世話になる恩義も思はず、獅子心中の虫とはおのれが事であらう。

内匠　何がなんと。

一味　察するに、若殿より頂戴の、吉岡を詠み入れたる吉野の杯、それを奪うて種となし、民右衛門どのへ身が事を、悪しざまに申したな。

内匠　ヤア。

一味　最前、證據と持つて參りし杯は、密かに奪ひ取りしよな。

民右　すりや、此方の印籠も、娘雪をば騙し透かして取つたるか。

一民　サア、尋常に申すまいか。

内匠　イヽヤ知らぬ。存じ申さぬ。

一味　知らぬとあれば、この艶書。

ト懐中より文を出す。

内匠　ヤア。

ト悄りする。

一味　殿より下されたる杯紛失。合點ゆかぬと思ふあたりに、落ち散る艶書、お雪どのへ焦るゝ内匠とあるからは、民右衛門どのゝ息女お雪どのを、戀慕して厚皮面なこの附け文。隨分證據であらうぞや。

内匠　それを。

ト取らうとする。立廻り。民右衛門、内匠を取つて押へる。懐より杯と印籠を取落す。兩人取上げ

一味　さてこそ頂戴のこの杯と。

民右　兩家を御賞美下された、この印籠、この杯。

一味　致し方もある奴なれども、今は免す。

民右　不屆き者めが。

ト突き放す。内匠、思ひ入れ。

一民　以後を嗜み居らう。

ト誂らへの合ひ方。

内匠　成る程、斯うなつたれば是非がない。推量通り、杯を盗み、今日思はずもお雪が手から、印籠を無理に所望して、それを種にて吉岡兩家へ、遺恨を含ませ、相討ちさせんと思ひの外、民右衛門は一徹、一味齋の老眼に見顯はされたか。殘念々々。併し、これとても劍術師範の一家を起さう爲なれば、僞はり表裏も武士の計略。

一味　イカサマ、さう聞けば、まだしもぢやが、日頃の未熟、その魂ひでは心元ない。

内匠　すりや、身共の魂ひが心元ないとか。

ト思ひ入れあつてキッとなり

イヽヤ吉岡の御兩人。

ト合ひ方になり

日頃の未熟に魂ひが、心元ないとあるが、先づ差當り身共が魂ひを、お目利さつしやれ。

ト刀をスラリと拔き、兩人の鼻先へ突きつける。

一味　莫耶が劍も持ち手に依るもの。

民右　定めて業物でござらうか。

ト嘲笑ふ。

内匠　餘り嬲らつしやるな。いま目利にかけて見せう……お出入りの小道具どの。

勘六　ハイ〳〵〳〵。

ト下座より出て來る。

内匠　コリヤ〳〵、貴樣を呼んだは、この刀の目利。

ト差出す。勘六取つて

勘六　私しも大坂で、近江屋勘六と云はるゝ小道具商賣。好きで唐物も致しまするが、親人は人に知られた小道具の目利でござりました。

ト煙管にて目釘を拔き、身を拔いて見て

お拵らへは格別、身は天晴れ牛王吉光、燒刃も勝れて誠に名刀。失禮ながらお道具でござりまする。

内匠　流石はその職、よく目利した。

勘六　道具屋目利の子ぢやものを、餘り屑の事は申しませぬ。

民右　定めて業物でござらう。ハヽヽヽ。

トまた嘲笑ふ。

内匠　民右衞門どの、又しても〳〵、何をせゝら笑ふのぢや。

民右　刀の銘を當にして、切れ味を天晴れと思ふは、虎の威をかる狐の譬へ。身共が取持はこの刀。

トすらりと拔く。

内匠　ヤア。

ト思ひ入れ。

民右　武士たる身にて刀の目利不定にて、小道具屋の目利を當に、大切にさつしやる魂ひ。まだ無銘なれども、誠の牛王吉光はこれでござる。

内匠　すりや、身共が所持の牛王吉光は。

ト口惜しき思ひ入れ。勘六、民右衞門の側へ行き、刀を見て愕りして

勘六　こりや無銘なれども天晴れ名作。正眞の牛王吉光でもあらうかい。

民右　誠牛王吉光の切れ味は。

ト金燈籠を吊つたる鎖を中より切り落す。

内匠　ヤア。

ト大きに驚ろく。一味齋思はず

一味　天晴れ。

ト感心のこなし、合ひ方變る。民右衞門内匠へ刀を差しつけ

民右　鐵を切るに、少しも刃金のこぼれぬは、誠の業物。

一味　殊に切つたる鎖の動かぬ手の内。流石は上達、刀も銘作、

内匠　すりや、その刀が誠の牛王吉光とや、

ト民右衞門が刀を見て

アノそれが、アノ吉光。

ト頻りに刀の欲しき思ひ入れ。

民右　民右衞門が所持の刀は、これでござる。

ト刀を納める。勘六、面目なきこなしにて

勘六　すりや、この吉光が正眞でござれは。

内匠　この牛王吉光は。

勘六　鍋炭掻きも同じ事。

ト内匠、立腹して

内匠　うぬ、道具屋め。

ト切らうとする。勘六、恟りして逃げて入る。

内匠　鍋炭掻きの刀でも、狂はぬ手練は。

トあたりを見て、松の木の側へツカ〳〵と行き、こなしあつて、手水桶を胴中より切り落す。本水サッと離れる。

水の入つたる手水桶、直ぐに切つたる手の内見屆け、感心召されい。

一味　イヽヤ、感心せまい。器に水を保たせ切れば、丸木を切るも同じ事。手の内未熟な刀の鈍刀。

内匠　ヤ。

一味　汝、茶人の白痴と嘲けれども、一心の極まりが茶道の極意。武藝も同じ只一心。心茲にあらざれば

内匠　明き盲目と侮どるか。うぬ、

ト刀を持つてキッとなる。一味齋、遠當ての思ひ入れ内匠、倒れる。民右衞門、驚ろき

民右　この遠當ての誠の御手練、定めて流儀の

一味　秘書と申すは、八重垣流の陽の一卷、肌身離さずコレ爰に。

ト懷中より袱紗を取出し、一卷を出して見せる。内匠心付き、一卷を見て思ひ入れ。

民右　身共、所持の陰の一卷は、召使ふ與五郎とて、實に摩利支天の再來とも云ふべき達人ゆゑ、門弟どもの嫉みをいとひ、密かに一卷相讓り、世間を憚る身が勘當。
一味　すりや、陰の一卷は其方に。
兩人　流儀の繁昌。エヽ、忝ない、
　ト兩人喜ぶ。内匠、思ひ入れあつて
内匠　斯く赤恥を搔いたる内匠。何卒竹刀の立合ひ。
一味　イヤ、そりや止しにせい。例へこの上出精しても月に猿猴。
民右　蟷螂が斧。
兩人　及ばぬ事ぢや。
内匠　ムウ。
　ト無念のこなしあつて、庭にある手鍬を取つて、民右衞門へ打つてかゝる。民右衞門、扇にて請け留め、ちよつと立廻り。白囃子になり、打つて行き、トゞ民右衞門、扇を打ち落され、さんざんに打たれる。
内匠が手の内、なんとその身に堪えたか。
　ト民右衞門、默つて扣へる。一味齋、こなしあつて
一味　内匠、其方はその試合を、勝と思ふか。
内匠　知れた事。打ち据ゑたれば、盲目が見ても、内匠が勝ちサ。
一味　さう云ふ其方がうろたへ者。今の試合の其うちに、その身に打たれた袖の手裡劍。
内匠　ヤア。
　ト左右の袖を見て驚ろき
この兩袖の割り笄は。
一味　民右衞門どのゝ御手練。
内匠　エヽ。
一味　それを見よ。今の試合のうち、その笄にて急所を打たれてあるならば、忽ち即死。さすれば勝負に打勝つ事はなるまい。うろたへ者めが。
　ト内匠、口惜しきこなしにて、兩袖の笄を取つて、民右衞門へ打ち返す。民右衞門、扇にて打ち落す。内匠、ギヨツとする。一味齋内匠を引据ゑて
一味　コリヤヤイ、其方が父文山は、筆道の小師範、その悴なれども筆道に拙く、生兵法を云ひ立て、佐々木の氏を改めて京極内匠、文山どのには故人となられ存命のうち、身が悴官次郎に、筆法の絶えぬやうにと、上意によつて佐々木の苗字を下され、吉岡を名乘らす、佐々木官次郎。その砌り文山より贈られたる、コレ

ト差して居る差添小柄を拔いて出し
四つ目結びの紋散らしのこの小柄。然るに忰は奥女中、お照どのと不義、五年後に追放。その節身共が取上げ置きたるこの小柄は、文山より忰へ苗字を下されし縁に依つて、今日まで世話いたせしに、又しても〳〵、折を窺ひ陽の一卷、盜み取らんと計らふその上に、兩家の仲を破りて、師範にならんなどゝ不屆き千萬、厚意の程も思はぬ人非人。向後は世話いたさぬ。緣の切れ目ぢや。小柄も返す。何づれへなりとも行き居らう。

ト小柄を打ちつけ、思ひ入れある。六ツの時計鳴る。

民右　ありや暮れ六ツ。今夕の上使の御入り。拙者は色紙差上ぐる役目。

一味　ヤイ内匠。

ト扇にて内匠の額を上げ

人面獸心と云ふは

民右　面は人で心は獸。

一味　どうやら畜生面ぢや。

兩人　後刻。

ト唄になり、互ひに目禮して一味齋は奥へ民右衞門は下座へ入る。内匠、ヂツと無念のこなし。この時下座より藤藏、出て來りて

藤藏　内匠どの〳〵……コレサ、内匠どの。

ト内匠、これにて藤藏と顏見合せ、矢張り無念の思ひ入れ。

餘り氣遣ひさに、あれにて密かに窺ひ居つたが、折角申し合せたる事を、老ぼれ二人が老功に見顯はされ、意氣地はござらぬ。この上の料簡は。

ト内匠よろしくこなしあつて

内匠　もう内匠めが一生懸命。内も五もいらぬ。恥辱と恥の上塗りしをつた老ぼれ二人、思ひ知らせてこの場を立退くより、外に思案は。

トぢつと思ひ入れ。

藤藏　成る程、もうそこらが極の手。それについちやア大事の似せ物。最前の似せ筆と吹替へ、正眞の色紙。

ト懷中より色紙を出し渡す。

内匠　忝ない。こりや正眞の色紙。この上は。

ト囁く。

藤藏　すりや兩人を。

内匠　コレサ。

ト押へて

おれも後から行く程に……氣を附けておくりやれ。

藤藏　心得た。

ト合ひ方になり、藤藏、下の方へ入る。内匠、思ひ入れあつて小柄を出し

内匠　四ツ目結びの紋ぢらし、親文山より官次郎へ、讓られしこの小柄。フム。

ト思案の思ひ入れ。下座にて人音するゆゑ、下の方へ影を隱す。

ト下座よりお照、お陸走り出て來て

りく　繁藏どの〳〵、折惡い、どれへ去なれた知らぬ。

てる　久々にて今、父樣にはお目にかゝつたなれど、母樣のお留守。それに内匠が參つたとあれば、見附けられては難儀ゆゑ、お隣まで來たが、繁藏はどこへやら。

りく　お前が當お屋敷へお勤めなされて、官次郎どのと不義の科にて、五年あとに御追放、その後私しどもはお屋敷へ參りましたれば、お顏は知らず、今日思はずもお目にかゝり、御挨拶を申す間もなく、折惡いあの内匠どのシタガ、お雪さまには、ようお目にかゝりましたなア。

てる　斯う云ふうちも見附けられては一大事。

りく　繁藏どのにお逢ひなさるゝ間。

トあたりを見て

幸ひの、あの待合に。

ト側へ行き、内を窺つて思ひ入れあり

モシ〳〵、お喜びなされませ。

トいそ〳〵お照の側へ來て囁く。

てる　エヽ、そんなら官次郎さまが、あの内に。

ト思ひ入れ。

りく　アヽ、モシ。

ト押へて

エヽ、あのお嬉しさうな……ちやつとお出でなされまし。

ト待合の内へ入れて障子を締めながら

ハイ、おゆるりと。

トこちらへ來て

ほんに餘計な御奉公ぢやわいの。

トこなし。此うち、内匠、始終窺ひ見て、この時

内匠　うまい只中、すつぱり見付けた。引摺り出して

ト待合へ行かうとする。お陸、恟くりして支へ

りく　内匠どの、血相替えて、こりやどこへ。

内匠　どこへとはこの待合、お陸、われが取持ちで、お照

官次郎が乳繰り合ひ、引捉へれば立歸りの不義の重罪。吉岡二人はいよ〳〵越度。色紙がなければ、民右衛門は重罪の縛り首。お雪が戀の叶はぬ意趣に、姉のお照を、ソレ。

ト行かうとするを、お陸、驚ろき留めて

りく　内匠さま、待たしやんせ。

ト留めるを、内匠、振り放す。立廻りにてしつかり留める。

内匠　オヽ、お雪が戀の意趣晴らしに、官次郎と、あのお照を。

りく　捕へさんすりや、重なる不義の科人なれど、お雪さまから起つて、姉のお照さまの不義の詮議なりや、お雪さまの

内匠　戀を叶へて寝ささうとは古いやつ。これまで數通の文の取持ち、一度も色よい返事なければ、騙されたが腹が立つ。

りく　イヽヤ、騙さぬ、この場の仕儀。お照さまの不義と云ひ、色紙が紛失なした時には、旦那様は重々罪。

内匠　コレ、その色紙もおれが盜んで爰にある。

ト出して見せる。

りく　エヽ、すりや色紙もお前が。

内匠　オヽ、何もかも戀の闇。

りく　ムウ、そんならわたしが取持ちで……お雪さんと抱かれて寐さへなされたら。

内匠　知れた事、聟舅、色紙を返せば、民右衛門に科はない。

りく　サア、それぢやに依つて、この戀叶へにや、旦那様のお身の上……折悪い奧様のお留守、何かにつゞまる

トちつと思ひ入れあつて

いよ〳〵取持ちせにやなりませぬ。

内匠　とは云へどうも。

ト疑念の思ひ入れ。お陸、内匠の刀にて指を切る。時の鐘、合ひ方。

内匠　何ゆゑ指を切つたぞ。

りく　あんまり疑ひ深いゆゑ。

内匠　ヤ。

りく　お雪さまのその代り、指まで切つてわたしが取持ち、後とも云はず得心させ、初夜を合圖に、お前を忍ばせしませう。

内匠　こりや面白い。

ト お陸、思ひ入れあつて
りく　何にも知らぬお雪さまの、貞と孝とに……わたしが忠義。
　ト云はうとして、ホロリとする。
内匠　お陸、泣くか。
りく　サア、お雪さまが初めてぢやに依つて、怖いやら、嬉しいやらで。
内匠　推量しての嬉し泣きか。そんならいよ〳〵
りく　東の方から垣越しに
内匠　馬場を廻つて枝垂れ柳を
りく　傳うて庭の
内匠　あの小座舗。
りく　モシ。
　ト内匠に囁く。
内匠　か。
りく　アイ。
　ト木の頭にて「ハア丶」と思ひ入れ。内匠、喜び、頷くをキザミにて、よろしく
　ひやうし幕

二幕目　阿彌陀寺の場

役名——飾間大內藏の太夫。同一子、彌生之助。木村鳴戸之助。吉岡一味齋。吉岡民右衞門。春風藤藏。門脇義平。赤尾十平次。加川新左衞門。民右衞門妻、お倉。同娘、お雪。同腰元、お陸。佐々木官次郎。同下郎、繁藏。京極內匠。

本舞臺、三間の間、二重舞臺。見附け金襖。幕を張り、二重舞臺上の方に鳴門之助、着附け、社杯、床几にかゝり、その前に三方の上に色紙の箱を直し、次に彌生之助、着附け社杯。平舞臺の眞中に民右衞門直り、新左衞門、義平、十平次、三人立ちかゝり藤藏、官次郎お照を引立て居る。早舞にて幕明く。

皆々　すりや、色紙は紛失とな。
藤藏　不義の兩人、動くな。
鳴門　大領久吉公の上意なれども、片岡造酒正どのゝ內意に依つて、罷り越したる木村鳴戸之助。久吉公御所望の色紙紛失、定めて彌生之助どのにも當惑でござらう。

十平　色紙紛失の折柄に、不義の科あるこの兩人。
舞平　お家御放逐あつたるお照と、佐々木官次郎。
藤藏　一旦追放の身を以て、又ぞろや立歸り、親の家にて
しかも二人が、待合のちん／＼繰合ひ。これが再び不義
の證據。
彌生　すりや、お照と云ひ官次郎、追放の身を以て、再び
不義の重罪人とな。
藤藏　お照と云ふは、吉岡民右衛門が娘。
彌生　先達て當奥にて、相勤め居つたるお照と申すが、民
右衛門が娘。追放のその後、去々年、民右衛門を召出し
て、師範と致せば縁はあれども、親子を包みての奉公。
然るに今日のこの仕儀なれば、不義は格別、差當る寶紛
失の上は、御上使へ申し譯が相立たぬ。何卒御上使の御
仁心の持ちまして
鳴戸　日延べの願ひか。
民右　ハツ。
鳴戸　若年ながらも木村鳴戸之助、造酒正どのへよしなに
申さん。また造酒正どのにも、仁義ある人なれば、久吉
公へは定めて執成し。其方より申さずとても、許し遣は
す。

彌生　エヽ、有り難う存じ奉りまする。
鳴戸　この上とも一命に替へても、日延べの願ひ請合ふか
らは、この場の納まり。各々安堵召されい。
彌生　エヽ、有り難う存じまする。
鳴戸　拙者はこれにて歸洛いたさん。
彌生　然らば偏へに聚樂の御所へ。
鳴戸　承知でござる。
皆々　御上使のお立ち。
ト唄になり、鳴戸之助、思ひ入れあつて向うへ入る。
皆々　して、この上は。
民右　差當り越度と云ふはこの民右衛門。日延べの願ひ相
叶へば、色紙の詮議、
藤藏　不義者の佐々木官次郎、云ひ譯あるか。
官次　サア、その云ひ譯もござりませねど、全く不義にあ
らず、お館へ入込む者に、紛れましての親への對面、身
の詫び言。
てる　私しとても。
藤藏　抱かれて寐やうと、お館内を揚屋にしたな。
官次　イヽヤ全く。
民右　何にも申すな。云ひ譯立たぬぞ。

ト この時、下座にて

一味　その申し譯は一味齋、申し上ぐるでござりませう。

民右　ヤ、なんと。

ト 合ひ方になり、一味齋、羽織野袴にて出る。

一味　大切なる色紙、紛失に依つて、差當る不義の科ある兩人ゆゑ、盜賊の疑ひ。その親々は吉岡兩人。

民右　して、此方の申し譯は。

一味　されば、不義の罪人の親々なれば、ナ、民右衞門どの

民右　一味齋どの、身の潔白の

一民　思案もござらう。

ト 兩人キッと思ひ入れ。奧にて

大内　兩人思案に及ばぬ。掟の成敗、申し付けん。

ト 奧より大内藏、鷹野の形にて、ツカ／＼と出る。

一民　これは大殿、御自身の御裁許、畏れ入り奉つてござりまする。

ト 平伏する。

大内　予は病氣保養にて、鷹野遊覽の歸るさ、思ひ掛けなき不時の上使は、片岡造酒正よりの内意、弟彌生之助對客あつて、武宗皇帝の色紙紛失、鳴戸之助どの日延べを請合ひ、歸りし上は、直さま草を分つて詮議。まつた不義の兩人は、疑ひに依つて盜賊の重罪。殊に親々は重き役目の事なれば、忽がせならぬ今宵の成敗。

一味　如何にも、飾間家の師範たる、我れ／＼が忰と

民右　娘。

大内　一味齋は民右衞門の娘照、また民右衞門は一味齋の忰官次郎と、互ひに取替へ、一家の掟の縛り首。

ト これにて藤藏、思ひ入れ。

藤藏　こりや斯うありさうなものでござりまする……檢使の役目はこの藤藏。

大内　イヽヤ、罷りならぬ。我れ賤しくも眞柴の五奉行、飾間大内藏の太夫とて、播磨美作の國主。

彌生　申さば君子に二言なし、この上の上意。

大内　古へ多田滿仲、美女丸が首討つて出せと、仲光へ主命、遁がるゝ方もなく、切れとあるも、また切るのも主人。

一民　それには引替へ、我が子の罪人。

大内　イヽヤ、二人を幸壽と思ふな。予が云ひ付けは國の掟。その兩人は美女丸なるぞ。討ち手も檢使も、矢張り親々。

藤藏　イヽヤ、殿の仰せでござれと、親々が檢使にては。
内藏　默れ春風、又しても〳〵、この大内藏が裁許いたす
に批判あるか。
藤藏　でも、餘りなる御贔屓ゆゑ。いつそ身共が。
ト　つか〳〵と行くを、大内藏支へて、藤藏を當てる。
大内　吉岡の兩人、檢使と介錯。
一民　重き御上意、畏まり奉つてござりまする。
民右　御殿の内にて御成敗は、血汐の穢れ。何卒殿の御仁心にて、御菩提所の阿彌陀寺にて成敗あれば、この上もなき彼れらが功德。何卒お慈悲に。
大内　尤もなるその願ひ。すりや、予が推量の……許して遣はす。
彌生　讀經誘ふ松風に、吹かるゝ諸鳥も功德とあれば。
一民　阿彌陀寺にて二人が引導。
ト　合ひ方になり、下座より駕籠を舁き出る。
一味　民右衛門どの、こなたの娘は此方へ。
民右　貴殿の悴は拙者めが。
ト　一味齋はお照、民右衛門は官次郎を駕籠へ乘せる。
大内藏、思ひ入れあつて
大内　武士の表裏を寫せば、淨玻璃の、鏡は直ぐなる者の譬へ。
官次　「子は親に似るなるものを松山の。
てる　戀しき時は鏡をぞ見る。」
ト　五人顏を見合せ
大内　見えぬ冥途の
民一　子ゆゑの
ト　こなしあつて
あの世の闇路。
ト　乘り物の戸を立てる。
大内　破鏡再び、コリヤ、照らさぬぞよ。
ト　一味齋、民右衛門、思ひ入れ。
一民　ハツ。
大内　皆次へ。
ト　靜かなる三重、時の太鼓になり、大内藏愁ひのこなし。乘り物二挺、一味齋民右衛門附き添ひ、向うへ入る。彌生之助、皆々、奥へ入る。後に大内藏殘り、思ひ入れあつて
大内　燒野の雉子、夜の鶴、實にも子ゆゑの闇ぢやなア。
ト　時の鐘、しつぽりとした合ひ方。大内藏、これを見送り、思ひ入れ。道具替る。

本舞臺、三間の間、亭屋臺の庭。民右衛門うちの道具になる。

ト時の鐘、しつぽりとした合ひ方になり、上の方、柳の木へ内匠、頬冠りして登り出て、竹垣を越える。この時、屋體の簾上がる。

ト内にお陸、お雪の紋の付いたる振り袖着て、床の上に待ち詫びる體。内匠、垣を傳はり下りて、そろ〳〵と忍び來る。闇がりの思ひ入れ。

りく　モシ、お雪さん、ようお得心なされました。それでこそ御孝行になりますぞえ。

ト云ひながら、探り〳〵内匠を捕へる。

内匠　お陸、こなたの世話でこの嬉しさ。

トお陸の振り袖を捕へ、お雪と云ふ心にて喜ぶ。お陸内匠の手を取る。内匠、身慄ひをして喜び、兩人屋體へ上がる。

お雪どの、よう得心して下されたの……ヤ、、、物を云はぬは恥かしいのか。

ト云ひ〳〵お陸へこなし。ヂツとして居るゆゑ

こりやモウどうも。

トお陸に抱き付く。簾下りる。チョン〳〵にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、黒幕。一面の生垣。時の鐘にて道具とまる。

ト矢張り捨て鐘にて、向うより藤藏出て來て

藤藏　吉岡二人の奴等めが、お照官次郎を首討つと云つて阿彌陀寺へ來たこそ曲事。樣子を見屆け引ッ捕へて、二人は重罪。それ〳〵。

ト下座へ入る。引違へて下座バタ〳〵にて内匠、お陸を引ッ捕へ出て來て

内匠　うぬ、お陸め、よくもお雪となつて、身共を騙したな。

りく　そのお腹立てさんすは尤もぢやが、これには段々。

内匠　樣子を聞くに及ばぬ。合點のゆかぬはお雪と僞はり、身共に抱かれて寐た心は。

りく　お雪さまと僞はつて、抱かれて寐たは、主の爲。

内匠　ヤ、なんと。

りく　その色紙を此方へ。

ト内匠が懷へかゝるを、引退け、立廻り。

内匠　すりや、色紙が欲しさに。さうはならぬ。

りく　常々お前がお雪さんに惚れさんして、是非取持てと日毎の附け文。旦那様の物堅いに、お雪さんの不承知。今日有馬から戻りがけ、道にて逢うて印籠を、無理に貰はれ、ハッと當惑、どうしたならばよからうと、思ふ矢先に最前の、お照さまの二度の不義、殊に色紙の紛失と又も重なる難儀に、お前は陰に戀の叶はぬ意趣晴らし、旦那様のお命にかゝはるゆゑ、惚れてござんすお雪さまを取持てば、色紙も戻つて、御存命と思うたゆゑ、覺悟極めてこの通り、お雪さまの振り袖にて、寝たのもお主が大事ゆゑ。三世の緣に二世ならぬ、仇な枕に身を穢せしも、色紙が欲しさ、不義の科をもお助け申さんばつかりに、淺き心の女子ながらも、みんな忠義でござんすわいなア。

ト此うち内匠、いろ〳〵こなしあつて

内匠　すりや、うぬが忠義ゆゑか。まんざらでもない年増盛り、一度の枕に不便なれども、僞はられたが腹が立つ。

トきつとなり

もう今頃は民右衛門めも、死ぬであらう。

りく　そりや又どうして。

内匠　春風藤藏に云ひ付けやつて、不義の成敗。

りく　エヽ、口惜しい。やみ〳〵と計られたか。

内匠　色紙の様子を知つたうぬ。

りく　エヽ、。

ト惘りする。

内匠　後日の妨げ、生けては置かれぬ。

ト抜打ちにお陸を一かせ切る。ア、と苦しむ。凄き合ひ方。この時、生垣を押し分け、お照出て、惘りして

てる　今のは慥かに腰元の、お陸と京極内匠どの。

りく　御勘當のお照さまか。

ト内匠、探り寄つて

内匠　それ知つたれば、可哀やうぬも。

トお照も切り倒す。ムウと苦しむ。

てる　エヽ、胴慾な。こりやわしまでを。

トお陸、驚ろき、苦しみながら

りく　そんならお照さまも。ヤ、、、、。

内匠　刀次手、身共が引導。

陸照　エヽ、。

ト口惜しきこなしにて、内匠に取り付くを

内匠　この寺裏で、南無妙法蓮陀佛。
ト兩人を切り倒す。此うち下座より藤藏出て窺ふ。この時、後生垣バタ／＼するゆゑ、内匠藤藏、樣子を窺ふ。忍び三重になり、生垣を破り官次郎出て
官次　師恩の義理を思うたゆゑ、内匠めに騙かられて、似せ物にて民右衞門どのゝ越度。殊にこの身の不義の重罪、子ゆゑの闇に親々の、科を赦して落されし、お志しは忝ないが。後にてもしやお身の上が、氣遣はしい。お照は來ぬか、まだ後か。一先づこの場を、さうぢや。
ト向うへ行きかける。内匠、藤藏、物云はずに官次郎へ切り付けんと探り行く。官次郎、これを知らずに向うへ入る。後にて兩人切り結び、
内匠　うぬ、官次郎め。
ト恟りして
藤藏　内匠どの。
内匠　春風か。
藤藏　殘念や、官次郎を取逃がしました。
内匠　まだ鬱憤の殘るは二人。牛王吉光、陽の一卷、奪ひ取つて他國で立身。
藤藏　身共も出奔。ソレ。

内匠　もうこの上は。
藤藏　老ぼれめを。
兩人　さうぢや。
ト兩人キツと思ひ入れ。時の鐘、チヨン／＼にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、二重舞臺、來光柱、金張り附き彩色の欄間、合天井。正面に阿彌陀の座像。前に机、打敷掛けてあり、よき所に造り花。左右に松の立ち木。爰に一味齋、民右衞門、首桶を持つて居る禪のツトメにて道具とまる。
一味　大殿の御意に隨ひ、互ひに悴と娘を取替へ。
民右　墓所を隔てゝ討ち放したる縛り首。
兩人　イザ、實檢を。
ト一緒に首桶の蓋を取る。双方杯と印籠あるゆゑ恟りして
民右　娘が首と思ひの外。
一味　悴に替るその印籠。
民右　此方は杯。
ト顏見合せ、側にある燈籠の灯を吹き消す。時の鐘、

合ひ方、机の下より内匠出て窺ふ。

一味　斯くなる上は何をか包まん、家の秘書たる陽の一巻。

ト懐中より一巻を出して差出す。

民右　この民右衛門も、牛王吉光。

ト刀を差出す。

一味　ヤ、、これは。

民右　所詮娘が不義の重罪、命に替へても兩人を助けんと、思ふ矢先に殿の仁心。弓矢の冥加、互ひに娘と悴を取替へ、縛り首の成敗に、彌陀の利劍は助けよとの謎々。元より牛王吉光の、この刀を此方へ渡し、その上にて以前の不和を云ひ立てよ、表に怒りを顯はして、こなたの刃でこの身の引導、さもない時には切腹と、覺悟極めて落しやつたる官次郎。

一味　ホヽオ、天晴れの心底。さうとは知らいで一味齋も助けんと、態と科ある云ひ譯に、老いさらばいし身が心。いづれの親も同じ慈悲心。八重垣流の陽の一巻、こなたへ渡しその上にて、矢張り以前の不和を云ひ立て、こなたの手にて討ち果され、身が後をも頼まんに、猶豫あつては切腹と、覺悟は同じ二人の親。イザ一巻。

ト内匠、双方の二品を取る。

民一　これで本望。

ト思ひ入れ。この時、内匠、一味齋を一枷切る。ア、と苦しむ。三味線入り禪のツトメになる。

民右　ヤ、ア、一味齋には切腹か。

一味　ヤア、、さては一巻取得ん爲、實證を云ひ立て、不和を忘れず、騙かりて騙し討か。

トまた内匠、民右衛門を一枷切る。

民右　ヤア、こなたとても詞を巧みに、不和なる意趣に騙し討か。

ト兩人、心得ぬこなし。

一民　この苦痛は。

ト兩人ガックリとなる。内匠、せゝら笑ひ

内匠　大べら坊めが。

ト双方を又一枷づゝ切る。

兩人　ヤ、、さう云ふ聲は。

内匠　京極内匠が鈍刀刃金、うぬらが五體へ堪えたか。

兩人　ヤア／＼／＼。

ト悔りする。木魚の合ひ方。

内匠　うぬらが子供の不義密通、再びうせたが身の破滅、

計略を以て官次郎に似せ筆させ、民右衛門が越度を拵らへ、誠の色紙は春風に盗ませて、爰に所持して居るわい。

一民　ヤア、さてはおのれが。

内匠　居候ふを恩に掛け、一味齋の達人面が氣に喰はぬ。武術の奥義の陽の一巻、日頃盗んで〳〵と、思へどうぬが肌身離さず、手練と云ひ、牛王吉光、なじられたのが腹が立ち、娘のお雪に惚れ込んで、その取持ちのお陸めが、偽はり計つた恨みの刀、次手にお照めも共に寂滅。遺恨重なる意趣晴らし、吉岡二人の老ぼれめ、なんと思ひ知つたであらうが。

民一　チエ、、。

ト口惜しき思ひ入れ。

内匠　陽の一巻、牛王吉光、これが欲しさにこの殺生。

民右　おのれ、内匠め。

ト闇がりにて切り掛ける立廻り。内匠、兩人を切り倒し、一味齋に乘りかゝつて

内匠　南無阿彌。

ト止めを刺す。忍び三重。探り〳〵民右衛門に乘りかかり

内匠　とつくり禪定で往生しろ。

ト止めを刺す。この時後へ十平次、義平、新左衛門、窺ひ出て

三人　内匠どの。

内匠　三人の者。古いやつぢやが、身寄りの奴等が駈けつけるは知れた事。其奴を忍んで、合點か。

三人　心得ました。

ト新左衛門、向うを見て

新左　アレ、向うに灯影が。

ト三人、小蔭へ忍ぶ。内匠、頰冠りする。始終時の鐘。向うより繁藏、提灯を持ち出て來る。内匠、そろ〳〵東の花道へかゝる。繁藏、本舞臺へ來て、一味齋の死骸に躓き、兩人の死骸を見て

繁藏　こりやお旦那と云ひ、民右衛門さまにも。ヤア〳〵ヤアそんなら。

ト向うを見る。内匠「エイ」と手裏劍を打つ。提灯にて請け留める。内匠ツイと東の揚げ幕へ入る。繁藏、いろ〳〵思ひ入れ。バタ〳〵にて佐五平、提灯を持ち、お倉、お雪と連れ立ち、出て來りて

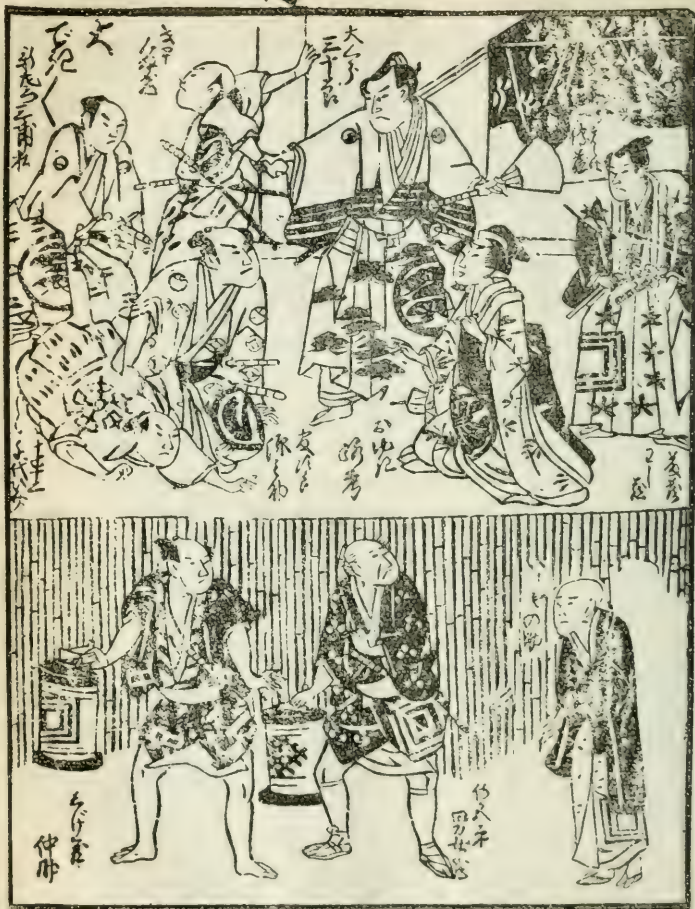
佐五　お倉さま、お雪さま、危なうございます。

ゆき　母様、よい所でお目にかゝりましたなア。
くら　瑜伽さまより戻りかけ、道であらまし様子は聞いた
が、何は兎もあれ、極楽寺へちつとも早う。
ゆき　わしやどうやら、胸騒ぎがするやうなわいの。
佐五　そりや道をお急ぎなされたゆゑでござりませう。
ト云ひながら本舞臺へ來て
佐五　ヤ、そこに居るは繁藏ではないか。
くら　ほんに繁藏、そこにかいなア。
繁藏　そこどころぢやござりませぬ。民右衛門さまもお旦
那も、切られさつしやりました。
三人　エ、、、、、。
ト大悔りする。お雪、お倉、吹替への死骸に取り付き
くら　モシ、こちの人民右衛門どの。
ゆき　父さんいなア。
くら　コレ繁藏、殺した奴は何者ぢやぞいの。
繁藏　イヤサ、拙者も只今擦れ違ひ、闇がりゆゑにしつか
りと、顔は見えねど提灯へ、打つて逃げたるこの小柄。
ト拔いて見て
ヤ、、、、、こりや四ツ目結ひの紋ぢらし、若旦那の差
し料。

くら　なんと云やる。その小柄が、官次郎の小柄とあれ
ば。
佐雪　そんなら敵は。ウム。
くら　佐々木官次郎。
三人　エ、、、、、。
ト口惜しきこなし。皆々、死骸に取り付き、泣き落す。
三味線入り、大小の合ひ方。トヒヨにて、日覆より鷹
舞ひ下がる。向うより大内藏、青附け馬乘り袴、小手
を掛け、狩裝束の形、鷹杖を持ち、ツカ／＼と出て來
る。次に勢子大勢、松明を持ち、花道にて鷹を見て
大内　紀の關守がたつか弓、白鳥と化して飛び去りし例し。
今宵山野に夜据ゑの鷹、自然と拳を放れ、これへ飛び來
りしゆゑ、後を慕うて參り見れば、菩提所の阿彌陀寺。
秘藏の鷹のこの騷ぎは、心得ざる振舞ひ。
ト本舞臺へ來て
家來松明。
ト燈火に透かし見て
こりや、一味齋、民右衛門、算を亂せしこの有樣。
くら　ヤ、あなたは。
三人　殿、大内藏の太夫さま。

初演當時の

月

繪本番附

ト大内藏、皆々を見て
大内　其方達は、吉岡が妻子の者。
繁藏　下郎めは、一味齋が家來でございまする、
大内　ムウ。吉岡兩家は名に聞えたる武術の師範。やみやみ不覺の橫死を遂げしは、必定仔細のあるべき事……その上、數ヶ所の疵と云ひ……なか／＼多勢を以て向ふとも、迂濶に切らるゝ兩人ならず、殊にこの如く、止めをしかと刺したるは、討ち果しの體にてはなく……正しく意趣ある者が、騙し討になしたりと覺えたり。ハテ殘念至極。この兩人は大内藏が、分けても愛臣たりし者。かかる最後を遂げつるも、宿世の緣か。ハテ、悲慘なる次第ぢやなア。
くら　畏れながら殿樣へのお願ひ。
大内　ナニ、願ひとは。
倉雪　敵討が致したうございまする。
大内　尤も敵討の儀は、眞柴家へ屆けなければ相成らねど、斯く云ふ大内藏は五奉行を司れば、五畿内中の政事は心任せ。兼ねて病氣と云ひ立て、夜行の狩も、殘黨ばらを詮議の爲。して又、敵の手懸りは、
ト三人、そこらを尋ねる。お倉心附き

くら　繁藏、今の小柄を。
繁藏　イヤ、この小柄は。
ト思ひ入れあつて
ハツ。
ト差出す。大内藏、見て
大内　こりや四ツ目結ひの紋散らし。佐文山より官次郎、佐々木の苗字を讓りし折、遣はしたるこの小柄、
繁藏　ハア。
大内　すりや、二人を討ちたる敵と云ふは。
三人　いよ／＼佐々木官次郎。
大内　さすれば今討たれたるが、其方の主人とあれば、親を殺し、また民右衛門を討つたる敵。
ゆき　敵と云ふは姉樣と、云ひ交さしやんした官次郎さま。エヽ、情ない、どうせうぞいなア。
大内　繁藏、汝は官次郎の家來。さすれば眼前、この二人とは敵同士。
繁藏　ハ、ア、さうだ。
ト刀を拔き、切腹せうとする。大内藏押へて
大内　ヤイ、うろたへ者め。いま死する命を全うして、例へ官次郎が敵持ちにもせよ、先途を見屆けずば、下郎な

からも忠義が立つまい。
繁藏　ぢやと申して。
大内　イヤサ、うろたへる所でない。命を捨てるばかりが、忠義ではあるまい。
繁藏　サア、それは。
大内　人を殺めて立退く奴が、我が定紋の小柄を打ちかけはせまい。敵は敵、討ち手は討ち手と、思案したその上にて、其方も共々に、敵討に出ずはなるまい。
繁藏　ハッ、畏れ入りましてござりまする。
大内　イヽヤ、高が女と下郎の手練。この大内藏が目からは小兒のわざくれ。敵討は覺束ない。
三人　ハア、、
ト當惑の思ひ入れ。この時、新左衞門、お雪にかゝる。立廻りて池へ抛り込む。大内藏見て
大内　ホヽウ、流石は吉岡兩家の流儀、天晴れの手練。敵討に出立いたせ。
三人　左樣ならば、敵討の
大内　許しの墨附、時刻を移さず、五奉行たるこの大内藏が遣はす。
ト腰に差したる扇を持つて、見せる。お倉お雪見て

皆々　このお扇子は。
大内　久吉公の御直筆、地紙に書きし紅葉と櫻に、遊ばされたる古歌は「紅葉をも花をも祈る心をば、手向けの向の神や知るらん。」
倉繁　花と紅葉は
大内　兩家の吉岡。
皆々　すりや、そのお扇子を。
大内　兩家へ墨附。
ト扇を引裂き、お雪とお倉に渡す。
倉雪　ハッ。
大内　云はゞ大事の敵討。門出を祝して何をがな。
トつッと蓮の手水鉢を見る。この時、松の枝に十平次、種ケ島を持つて覗つて居る。大内藏、見付けて
大内　佛の庭の水盥は、八功徳池の蓮の臺。移り變りし二人が最後。今は冥土の闇の夜に、啼かぬ鴉の聲聞けば、生れぬ先の父ぞ戀しき……エイ。
ト大内藏、手裏劍打つ。十平次、パッと落ちて、大内藏に切つてかゝるを、拔打ちに、ポンと切り、鞘に納め
門出の血祭り、當座の餞別。

ト刀をお倉へ渡す。

三人　エヽ、有り難うございまする。

大内　健固で暮らせ。

皆々　御前様。

大内　めでたう出立。

三人　ハヽア。

ト、チョンと木の頭。

大内　行け。

トきざみにて、よろしく。

ひやうし幕

三　幕　目　　北野天神の場

役名──民右衛門女房、お倉。同娘、お雪。浪人、鬼柳屯。同、閑雲左司馬。醫者、水の谷辨庵。清明堂左門實ハ佐々木官次郎。

本舞臺、三間の間、眞中に繪馬堂、いろ〳〵の繪馬を掛け、この中に誂らへ誰が袖の額あり、下の方へ寄つて、葭簀圍ひの茶屋、下座の口に朱の片鳥居、天滿宮と云ふ額。下の方に御手洗、舞臺に床几を直し、仕出し、腰をかけ、茶屋娘、茶を酌み運んで居る。下の方に、荒繩の圓座の上に、荒木の天神を置き、側に行者一人、鈴を振り、捨ぜりふにて、錢を貰ひ居る。すべて、北野境内の景色。大拍子、鰐口、揚弓の音にて、幕明く。

ト東西より、天神詣りの仕出し、大勢出て、左右へ別れ入る。

仕出　今日は二十五日、取分け天氣はよし、さて夥しい參詣でござるな。

同　商人衆は大きな仕合せサ。イヤ又、御利生あらたかな天神さまゆゑ、この廣い北野の境内は、追ツつけ群集で詰まりますわいの。

茶娘　あなた方は、お下向でござりますかえ。

仕出　わしらは今詣る者でござるが、下の森に生醉ひの侍ひ衆が暴れ歩いて、何か參りかゝる若い女中を見ると、滅多無性にじやらつくので、大騷ぎでござつたて。

同　それは憎い奴でございます。アヽ、どうぞわたしらも出會ひともないものだが。

同　何を云はつしやる。なんぼ生醉ひでも、おいらに誰

が構ふぞい。

四人　ハヽヽヽ、サア、参りませう。

ト矢張り鳴り物、生け殺しにて、仕出し、皆々、行者天神を持ち、下座へ入る。

ト大拍子、出の唄になり、向うより、お雪、振り袖、抱へ。おくら、抱へ、帽子にて、袱紗包みを持ち、雨人、日傘をさし出る。

くら　コレ／＼娘、あまり走つて危ないぞや。

ゆき　お前もソワ／＼して、怪我して下さりますなえ。

くら　モウ、よもや爰までは來まいわいの。

ゆき　どうぞ脇道へ行たら、ようござんすが。

ト後を見て

モシイナア、母様、また此方へ來さうなわいなア。

くら　ほんにどうやら……エヽ、ひよんな酒の醉ひに出合つた事ではあるぞ。

ト茶店を見て

幸ひのあの茶店。ちやつとおちや／＼。

ト兩人、舞臺へ來り

ちとお賴み申しませう。

茶娘　ハイ／＼、なんの御用でござりまするえ。

くら　わたしらは、天神さまへ参る者でござりますが、道で酒の醉ひの衆に出合ひ、何か若い娘を連れましたゆゑ、てんがうばかり、それゆゑ爰へ逃げて來ましたが、どうやら又後追うて來さうな。幸ひのこの店。御無心ながら、ちよつとの間貸して下さんせえ。

茶娘　それは、マア／＼、御難儀でござりませう。お易い事でござりまする。サア／＼、お掛けなされませ。

ゆき　母様、爰に居たら、ツイ見付けませうぞえ。

くら　それ／＼、どうぞ迚もの事に、奥へ忍んで居たうござんすが。

茶娘　サア／＼、どこへなとお出でなされませ。

くら　もし爰へ見えたなら、上の森の方へ行たと、必らず好いやうに云うて下さんせえ。

茶娘　そりやお心遣ひなされまするな。呑み込んで居りますわいなア。

ゆき　そんなら早う母様。

くら　モシ、賴みましたぞえ。

ト大拍子になり、茶屋娘、案内して、お倉、お雪、茶店の内へ入る、

ト向うより、辨庵、醫者にて、その外子供大勢、手習

ひ子、思ひ〳〵の形にて、櫻の造り花を頭へ押し、北野天滿宮と書いたる、結構なる額を差擔ひ、ヨイ〳〵ワイ〳〵と云ひながら出て來る。後より、左門、手習ひ師匠の拵らへ、大小にて、出て、直ぐに皆々舞臺へ來り

左門　ヤレ〳〵、溫なしう皆、よう持つて來たな。爰まで來れば、もうお詣り申して納める分の事ぢや。併し、今のやうに、道で生醉ひが居ても、必らず構ふものぢやないぞ。此方より默つて避けて通るものぢやぞ

子供　ハイ〳〵、畏まりました。

左門　辨庵さま、今日は御深切に、ようお世話なされて下さりまするな。

辨庵　これは御叮嚀な。常平生お心安う致すは、斯樣な時の爲でござる。さて皆行儀がようござつた。

左門　イヤモウ、隨分溫なしうするものぢや。その代り、この茶店で、ちつと休んでから參詣しませうぞ。

子一　イエ〳〵、私しどもは草臥れは致しませぬ。

辨庵　イヤ〳〵、四條高倉より、この北野までは餘程の道のり。草臥れぬとは、エヽ、流石は子供衆、平に休んだがよい。

子二　イエ〳〵、早く天神さまへ參つて、額が上げたうごさります。ナウ、みんな。

子三　お師匠樣は、後からお參りなされませ。

左門　然らばさう致さう。身共は一服のんでから參らう。必らず皆、はぐれまいぞ。

子二　そりや私しが氣を付けて、やるものではござりませぬ。

子四　そんなら參つて參じまう。

左門　また身共が見ぬと云つて、惡あがきして怪我せまいぞ。

子一　ハイ〳〵、畏まりました。左樣ならばお師匠樣。

辨庵　コリヤ〳〵、額は世話役衆の所へ上げるぢや。勿論先生のお目代りに付いて行てな。

子二　そりや私しが知つた小父さんが、二十五日にはお宮へ坐つてござりまする。

子四　その小父さんへ賴んで、お師匠樣のお出を。

子供　お待ち申して居りませう。

辨庵　そんなら緩りと、左門さま。

左門　オヽサ、參つて來やれ〳〵。

ト大拍子に鰐口の音にて、子供殘らず額を持ち、ヨイ

ヨイワイ〳〵云ひながら、辨庵、世話燒いて、下座へ
入る、

皆はぐれまいぞ。アヽ、ソリヤ〳〵ほだえて怪我せまい
ぞ。内には親達がある事でござるぞ。

トこなしあつて

案じる親のあるは羨しい。案じる親は人手に討たれ、倶
に天の戴かぬ敵の實否を尋ねん爲、この北野へ日參して
心を盡せど手懸りとても。

ト思ひ入れあつて

暫らくこれにて。

ト腰をかける。大拍子、鰐口の音にて、向うより、仕
出し大勢、この中へ、義平、着流し、大小、尻端折り
頬冠りして交り出て、舞臺へ來り、仕出しは、ウロウ
ロ下座へ入る。義平は床几へ腰をかけ

義平　コリヤ〳〵、茶を一つくりやれ、亭主は居らぬか。

ト左門、義平を見て

左門　ヤア、其方は。

義平　南無三

ト行くを引ツ捕へ

左門　好い所へ門脇義平。親人横死の仔細、眞直ぐに申
せ。

義平　馬鹿を云へ。どうして、おれが知るものか。

左門　イヽヤ、さうは云はさぬ。親人横死の砌り、敵の實
否を糺さんと、本國へ下る途中、讃州丸龜にて家來紫藏
に逢ひしに、先年筆道の苗字許されし折、師匠佐文山よ
り讓られし、四ツ目結ひの小柄を證據に、親人併びに民
右衛門どのを討つたりとの疑ひ。されどもその小柄は、
五ケ年以前、お國を立越えし砌り、親人取り置かれし入
り譯、明白に申し宥め、それより紫藏が申せしその場の
樣子、合點ゆかぬは内匠が出發。その内匠と入魂の義平、
其方もその砌り出發との事。すりや察するところ、其方
も京極内匠と同腹中に疑ひなし。サア、眞直ぐに白狀い
たせ。

義平　例へどのやうに吐かしても、おらア知らない。

左門　この上にも陳ずれば、憂目を見せて。

ト腕捻ぢ上げる。

義平　アイタ……、申します〳〵。ちつと緩めて下さい下
さい。

ト腕を緩め

左門　サア、眞直ぐに申せ。

義平　斯う手籠めにあつちやア百年目、何もかも云つてくれう。高が斯うだ。内匠どのには、お雪が戀の叶はぬ意趣に、武宗皇帝の色紙を盗ませ、陽の一卷、吉光の刀が欲しさ、播州の阿彌阿寺にて、一味齋氏右衛門を騙し討にして、立退く所へ來かゝる人影。討ちかけた手裏劍は義絶の印、一味齋が戻された、四ツ目結ひの紋散らし、こなたへ罪を塗らう爲。斯うスッパリと云ふからは、やうやうこれまでおめでたく、生き延びた命ばかりやア、どうぞお慈悲に助けて下さい。

左門　すりや敵は京極内匠よな。好く申した。その褒美に赦しくれたいものなれど、ちと思ふ仔細あれば、暫らくのうち窮命いたせ。

義平　そりや又あんまり。

　トもぎ放さうとするを、肌を脱がせ、刀の下げ緒にてしつかり兩腕を締め上げ、また肌を入れさせ、喚くゆゑ義平が手拭にて、猿轡を嵌め、左門、手前の手拭を出し、頬冠りさせる。此うち、下座より、辨庵出て、この體を見て

辨庵　ヤア左門さま、この體は。

左門　樣子は歸宅の上。モシ。

　ト囁く。

辨庵　すりや敵の

　ト云ふを

左門　これサ……大事の客人、御苦勞ながら。

辨庵　左樣ならお先へ。

左門　早う〳〵。

辨庵　サア、うせう。

　ト大拍子、揚弓の音にて、義平、投げ首して立ち上がる。辨庵、捨ぜりふにて引立て〳〵、向うへ入る。左門、こなしあつて

左門　未だ武運に盡きざる印。我が災難も一時に晴れ、敵の手懸り知れると云ふも、日頃參詣する天滿宮の惠み、エヽ、忝ない……暫時休息して拜禮いたさう。

　ト腰をかけ、大拍子、揚弓の音にて、向うより、鬼柳屯、五分月代、着流し、大小、片肌脱ぎ。左司馬、同じく一本差し、尻を端折り、兩人大醉の體にて中間いか内の手を取り出て來り、花道にて

鬼柳　この馱折助め、折角おいらが慰んで居る鳥を、うぬが邪魔を入れやアがつて、高飛びをさせたな。

左司　コレ二合半、おいらを誰れだと思ひやアがる。祇園

清水智恩院、盛り場を素見して歩く、地廻りの闇雲左司馬。

鬼柳　それ〳〵、この鬼柳屯さまも、三條四條は云ふに及ばず、大佛から金閣寺。

いか　おきやアがれ、拜見なら此方にいゝ傳手があるわえ。見つともない、放しやアがれ。

ト振り解いて

このいか内さまも、洛中をそゝつて歩いても、思ひ付きがないゆゑ、折角北野と川岸を替へて、下の森で見かぢつた年増盛り。らぬらが娘といちやついたばつかり、がらがら種なしにした恨みは、おれも五分々々だワ。

左司　ハア、そんならお主も、娘と一座のあの年増を。

いか　お身さま達が埋んだに違ひない。出してくれろ〳〵。

鬼柳　爰らが見ず知らず、同氣求める有り難い所だ。

左司　それサ、どこの馬の骨でも、色と酒ぢやア直に百年も馴染みだ。狆ころのやうだぜ

いか　コレ、さう氣安くするな。あれもごだつき組ぢやア胴取りだ。全體お身様達は、こなからか、ごんつくのしたみだらうが、さうぼろを亂しちやア突ッかゝるに押しが利かないぜ。

鬼柳　おきやアがれ。酒にぼろは亂さないが、氣の亂れるは今の娘だ。

いか　そりやアおれも同じ事よ。

左司　これサ、爰で無駄を云つて居ずと、三人して見付けたら

いか　娘と年増の分け取りだ。

三人　サア、探せ〳〵。

ト三人、ヒヨロ〳〵舞臺へ來り、左門が兩方へ腰をかけ

鬼柳　コレ〳〵、公にちつと聞きたい事がある。

ト左門、煙草のみ、知らぬ振りにて居る。

左司　この二才め、唖か聾か、なぜ挨拶をしないのだ。

ト左門、思ひ入れあつて

左門　ムウ、拙者が事でござりますか。して、お尋ねなされたい事とは。

鬼柳　ハヽヽヽ、この男は馬鹿慇懃な石部金吉金兜。なんぼ二十五日だと云つて、石で拵らへた天神さまを見るやうに、さう堅くして居ちやア云ひ悪い。石臼で彫るやうに。

ト拳を振り上げ、思ひ入れあつて

碎け居れ〳〵。

ト酒の息を吹きかける。左門、ムツとする。

左司　コレ、ムツとするな〳〵。おれも御馳走に。

ト吹きかける。左門、キッとなり、また氣を替へ

左門　ハヽヽヽ、こりや忝ない。御兩所の酒の匂ひで、思はず拙者も醉うた心地を相伴いたす。千萬忝なうござりまする。

鬼柳　ハヽハヽヽヽ、こりや若いに似合はぬ通り者だ。コリヤ、通り者、通人樣、おいらが尋ねる者を出しておくれ。

左門　そりや、なんでござるな。

三人　娘と年增。

左門　なんと仰せらるゝ。

鬼柳　白を切るな〳〵。いま爰へ十六七の娘と
いか三十餘りの年增と

左司　逃げて來たを隱さうがな。

左門　ハテ、益體もない。一向此方は存じませぬ。

鬼柳　これサ、どぢを云ふな。お主が隱したは、遠目から見拔いて置いたぞ。

左門　それは其許達のお目違ひと申すものだ。

鬼柳　うぬ、最前から詞を盡して賴むのに、出しやアがらないか。

ト胸倉を取り

なんでもおれが相手だ。サア、云へ、云はないか。

ト無性に小突くを、左司馬、中へ入り、引分け

左司　待て〳〵〳〵、この位にして云はぬは、本當に知らないと見えた。マア〳〵、おれに任して置かッし……てまへ直實知らないか。

左門　イヤ、毛頭存じませぬ。

鬼柳　エヽ、コレ、折角三人して樂しまうと思つた代物をあの野暮が。

左司　ハテ、おれがいゝと云やア、呑み込んで居る。張合ひのない、ひやうたくれに相手になつて、肝心の鳥を逃がしちやアならない。これから本社の方を探して來よう。

鬼柳　でも、あんまり小自烈てえ野郎め。コレ〳〵。

トまた行くを、左司馬、捨ぜりふにて引留め、大拍子鰐口の音にて、三人下座へ入る。左門、後見送り

左門　人物は相應に見ゆれど、歷々方の二男三男でもあらうか。徒然草に所謂る、鼎を被つて踊つたる、醉興とは事替り、武家の祿を喰む者でも、あのやうな者もあるち

やてなア……お宮の方へ行き居つたが、エヽ、また子供が危ない。ドリヤ、參詣いたさうか。

ト唄になり、左門、下座へ入る。あと合ひ方、茶店の内より

くら　娘、必らず出やんな。マア、わしがとつくり樣子を見る程に、案じる事はないぞ。

ト云ひながら、茶屋娘を連れて、出て來り、あたりを窺ふ事あつて

茶娘　イエモウ、慥か北野の方へ參つた樣子でござりまする。

くら　ほんに、ひやいな所を、こなさんのお庇で、忝なうござんすわいなア。

茶娘　なんのお禮に及びませうぞ。もう、お氣遣ひはござりますまい。けれどマア、御緩りとお休み遊ばしてお出でなされませ。

くら　イエモウ、御深切、お嬉しうござんす。斯う致しませう。娘はこれまで一日も、懈怠なう參つてゞござんすが、わたしは又、偶々の參詣、どうでも若い娘を連れては兎角心遣ひ。また御無心ながら、此まゝ娘は奧へ置いて下さりませ。直にわたし一人參つて來ませうわいな。

茶娘　そりや御勝手のよいやうになされませ。

くら　そんなら、さうして下さんせ。

ト奧へ向ひ

コレ娘、今云うた通り、爰に忍んで居や。直ぐにお參り申して來る程に、必らず案じやるな……左樣なら、ちつとの間、お賴み申しまする。

茶娘　ハイ〳〵、お氣遣ひなされますな。ドレ、お娘樣へお茶でもお上げ申しませう。

ト手桶を見て

オヽ、とんと忘れた。水が一雫もない。斯う致しませう。私しはちよつと下の森へ行て、水を汲んで參じまする。其うち奧から店をばお娘御さんに見て居ておもらひ申しませう。結句誰れも居りませぬと、その方がお氣遣ひがござりませぬ。

くら　そんなら又、今の侍ひが來ぬうちに。

茶娘　イエモウ、つい一釣瓶汲んだら、直ぐに戻りまする。

ト奧へ向ひ

どうぞそれから、店を見て居て下さりませえ。

くら　そんなら早う。

茶娘　ドレ、一釣瓶汲んで來うか。
くら　ドレ、參詣して來ませうか。
ト唄になり、茶屋娘、手桶を持ち、いそ／＼向うへ入る。お倉、思ひ入れあつて
ドレ、早う參詣して來ませうか。
ト始終大拍子にて、お倉、思ひ入れあつて、行かうとする。此うち、下座より、いか內、欠張り生醉にて、出て居る。
いか　ドツコイしめたぞ。女中さん、待ち給へ／＼。
くら　こなさんは最前、下の森で逢うた奴どの。
いか　エヽ、有り難い。その見忘れぬ所が命だぜ。
ト腰を叩く。
くら　最前と云ひ、重ね／＼慮外しやると免さぬぞ。
ト行かうとするを、いか內留め
いか　これサ／＼、さうおどかしちやア此方も命づく。こなさんはマア、何がおつかなくつて足早に行きなさる。
くら　わしや御代參が急くに依つて、こなさんと同じやうに、悠長らしうはならぬわいの。
いか　イヤ、おれもその悠長らしい事は嫌ひだから、返事を、ちやつと／＼。

くら　返事とは。
いか　その返事は、この返事よ。
ト お倉に抱きつくを、やう／＼振り拂ひ
くら　エヽ、アタ嫌らしい。何しやるぞいの。
いか　なんと云つたら、戀サ／＼。御代參のお屋敷女中と折助とは、笑ひ本なら當り前。どうぞ叶へておくれたら、それこそモウ、ほんに／＼有り難くて、親子ともに有り難涙を、ぽたり／＼と流して居るわいの。
くら　ホヽヽ、こりやをかしい。こんな所に子供が居るかいの。
いか　居るとも／＼。
くら　そりやどこに。
いか　爰にキツと坊主の子が、鯱張り返つて待つて居るわいの。ちよつと爰で。
ト轉ばさうとして、袱紗包みを捕へる。
くら　ア、コレ。
ト大事がる。
いか　こりやアなんだ。
くら　こりや大切の物ぢやわいの。
いか　ハヽア、此奴、色男の文だな／＼。

くら　どうしてマア。
いか　それでなか、ドレ、見てくれう。
　ト取りにかゝる。
くら　アヽ、手荒にして下さるな。成る程、見せう程に、
早う行んで下されや。
　ト包みより、本を出し
コレ、この本は百人一首、こなさん方が見て、なんの役
に立たぬもの。見ん事サア、讀めるかえ。
いか　この女中さんは、よくおれを侮るが、この折助もそ
の昔は、歌も詠み、詩も作り、茶の湯俳諧、花も活ける
優男だ。その百人首を讀んだら、否とは云はさぬぞ。
くら　エヽ、しつこい。そんなら見しやせぬ。
いか　イヤ、見にやア置かぬ。
　ト奪ひ合ふ拍子に、一枚引破る。
くら　ヤア、大切な百人首を。
いか　エヽ、面倒な。
　ト轉ばす。此うち下座より、左門、出て、様子を見て
居て、この時、いか内を引退け、投げる。
いか　アイタヽヽ、ヽ、ヤア、うぬは最前の二才め。この女が
肩を持ち、ナヽ、なんでおれを投げた。

左門　知れた事、女童を捕へ無體の始末。口惜しくば不
肖ながら相手にならうか。
いか　サア、それは。
左門　立ち上がつて勝負いたせ。
いか　イヤ致すまい。あの女中と致したらよからうが、貴
様と致したら猶痛からう……とは云ふものゝ
左門　勝負いたすか。
いか　べら坊め、はッつけめ。
　ト大拍子になり、いか内、悪態をつきながら向うへ走
り入る。此うち、お倉、百人首の破れを持ち、ヂッと
思ひ入れあつて、あたりの小石を袂へ入れ
くら　さうぢや。
　ト駈け出さうとする。
左門　コリヤ／＼お女中、見れば石を拾うて袂へ入れ、覺
悟の體は、云はずと知れた百人一首を破りしゆゑか。
くら　お主へどうも申し譯が。
　ト思ひ入れ。
左門　こりや近頃御粗忽、買ひ求むれば手に入るその本。
くら　イヤ、この百人一首は主人の物好き。歌も書き、手
を選んで書かされたる本なれば、とても斯うした災難ゆ

る。今さら死ぬるも約束事。覺悟極めて居りまする。

左門　ハテ、それは笑止千萬。ドレ、お見せなされい。

ト本を見て

如何にも、こりや大明の文徴明が筆流。さても書いたり見事々々。

ト思ひ入れあつて

イヤ、お女中、氣遣ひなされな。死ぬるに及ばぬ。

くら　エヽ、そりや如何いたしまして。

左門　ちと存じ寄りもござれば、加筆いたして見ますでござらう。

くら　エ、すりやあなたが。

左門　破れた紙中の表は、權中納言定家、裏は正三位家隆いづれも知れた讀歌。これが手本、途中と云ひ筆耕机も揃はねば、ア、どうぞ似つこらしう見えれば好いが。

ト小刀にて本の綴を切り、紙に困つたる思ひ入れ。表紙の内紙を取り、これが好いと云ふこなし、懐中硯、筆を取出し、床几を机にして、破れと見合す事あつて書きしまひ

この上は綴ぢるばかり。ソレ、改めて御覽じろ。

ト差出す。お倉、引合せ見る事あつて

くら　誠にこれは。

左門　大方は似寄りましたか。

くら　似たとは愚か一分一點。

左門　違はざそれで、間に合はさつしやれい。

くら　エヽ、嬉しや〳〵。好いお方にお目にかゝり、死ぬる命を助かつた御恩は忘れませぬ。エヽ、有り難うござります。

ト本を載き、喜ぶ思ひ入れ。

左門　これは〳〵、あつたら命を、どんぶり云はすが氣の毒さ。どうやら斯うやら取繕ろひ進ぜまするのでござるて。

くら　重ねてお禮に參る爲、お名前を。

左門　なんの〳〵、恩にかけねば、禮を受ける覺えござらぬ。

くら　イエ〳〵、筆道を好みまする、主人の爲でもござりますれば。

左門　この上は辭するに及ばず、拙者は四條高倉、清明堂左門と申して、聊か筆道の手引を致しまする。

くら　覺えましてござりまする。今日の御恩は追つて。これと申すも、災難をお除けなさる、天滿宮の加護と存じ

初演の繪番附

ますれば、お禮參り致して參じませう。
左門　それは何より。然らばお女中。
くら　重ねてお目にかゝりませう。
ト唄になり、お倉、本を見て、左門と顏見合せ、思ひ入れあつて、下座へ入る。あと合ひ方、左門、殘り
左門　さて〳〵今日は、いろ〳〵な事に懸り合せて……この子供は何を致し居るか。今日を樂しみに致し居ると見える。ドレ、一服のんで待たうか。
ト床几へ腰を掛け
茶を一つ下され。女中〳〵……ハテ、爰の女子はどれへ參つた。
ト三味線入りの夜神樂になり、左門、莨のみ居る。茶店の内より、お雪、ツッと出て、氣の毒なるこなしいろ〳〵あつて、茶を酌み持つて、左門が側へおづおづ行く。
ゆき　お茶上げませう。
ト俯向きながら差出す。
左門　ホウ、女中、矢ッ張り內に居さつしやれたか。
ト茶碗を取りながら見て
いつもこの店の女中は、慥か詰め袖。見れば振り袖の若い女中。エヽ、聞えた。參詣のお方かな。
ゆき　アイ。
ト云ふはずみに顏を上げる。
左門　これはしたり、お茶の給仕とは、近頃慮外、戴きまする。
ゆき　これはマア、わたしら風情が上げましたお茶を、戴き遊ばして下さりましては、ほんに冥加ないと申しませうか。お嬉しうございますわいなア。
ト云ひ〳〵、チッと顏見合せ、こなし。
左門　どうやら見知つたやうなお女中。
ゆき　わたしもどうやら。
左門　オヽ、御存じの筈、毎日〳〵。
ゆき　ほんに、この天神さまへ御參詣。
左門　若い女中の御奇特な。
ゆき　お若いあなたも御信心な。
左門　定めて深い願ひあつてか。
ゆき　どうでも大事の御願望
左門　樣子は何か存ぜねど
ゆき　お目にかゝるは日每〳〵
左門　所も多いが

ゆき　天神さまへ
左門　二人が日參。
ゆき　あなたも
左門　お前も
兩人　不思議な縁でございますなア。
　トこなし。
左門　サヽ、これへお腰をおかけなされ。ハテサテ、平に苦しうござらぬ。
　トお雪の手を取り、腰をかけさす。お雪、始終恥かしきこなし。
時に、合點がゆきませぬは、この店の女子は見えず、こなた樣が奥にござつたは。
ゆき　成る程、私しは先刻に參詣いたしませうと存じましたなれども、酒に醉うたお方が、てんがうばつかりなさんすゆゑ、餘り怖さに爰へ逃げて參じて、奥へ隠れて居りましたのでござんすわいなア。
左門　それで樣子が知れました。ハテサア、それは惡い奴等でござりましたなア。
　ト云ふうち、始終下座の方へ子供を案じるこなし。お雪、どうぞ云ひ寄りたいと思ふこなし、いろ／＼あつて、フッと袖の繪馬を見て、左門へ
ゆき　申し／＼。
　ト小聲にて云ふ。左門、矢張り下座を見て居る。
コレ申し。
　ト大きな聲にて云ふ。
左門　オヽ、女中、なんでござるな。
ゆき　あなたはきつう、何やらお案じの樣子でござりまするが。
左門　イヤ、何を隠しませう、私しは手蹟指南いたしますが、今日天滿宮の御縁日ゆゑ、大勢の子供を預かり參詣いたし、この所で休息のうち、今お話しの生醉ひにでも出合ひ、怪我でも致しては親達へ申し譯がない。どうぞ早う戻つてくれればよいがと、その事を案じまして……して拙者へ御用は。
ゆき　サア、あなたにお尋ね申しまするは。
左門　お尋ねなさるゝは。
ゆき　そりやアノ。
左門　なんでござるな。
ゆき　サア、アノ。
　トもぢ／＼して、思ひ切つて

あれでござりまする。
ト袖の繪馬を教へる。
左門　ムウ、あの誰ヶ袖の繪馬が、なんとしましたな。
ゆき　サア、あのやうに殿達の袖と、また姫御前の振り袖と、一緒にして、天神さまへ繪馬にお上げなさるゝは、どう云ふ心でござんすやら、それをちよつと
ト恥かしさうに云ふ。
左門　ハヽヽヽ、拙者も大勢の子供に、手習ひは教へますれど、あの繪馬の
ゆき　心をあなたは
左門　存じませぬ。
ゆき　私しは又。
左門　どう御推量なされたな。
ゆき　サア、あの殿達の袖は、あのマアあなたにして、又こちらの振り袖は、あのマアあなたの奧樣に准らへて、一緒にして、繪馬にお上げなされた心は、女夫におなりなされました大願成就、大方あの繪馬は、あなたと奧樣とお二人して、お上げなされたであらうと存じますわいなア。
左門　ハヽヽヽヽ、これは當惑。元より拙者、女房はござりませぬ。
ゆき　エヽ。
左門　元來遠國の者でござるが、仔細あつて當地へ參り、只今の世渡り。まだ無妻で居りまするて。
ゆき　そんなら、あなたに奧樣はござりませぬかえ。
左門　左樣々々。
ゆき　それはマア
ト嬉しきこなし、顔見合せ、ちやつと氣を替へ
御不自由にござりませうなア。
左門　御推量下されい。
ト兩人こなし。大拍子になり、下座より、鬼柳屯、左司馬、ヨロ／＼出て來り
鬼柳　オヽ、最前の娘だ。
左司　思ふさま尋ねさして、ちやんと爰で樂しんで居るな。
鬼柳　見りやア最前の二才野郎、さてはおのれが色だな色だな。
左門　イヤ／＼、全く左樣の者ではござらぬ。女中は只今初めて逢ひましたお人でござるぞ。
鬼柳　云ふな／＼。お主が色だ。

左司　さうだ〳〵。最前の時も矢ッ張り、うぬが埋んで置きやアがつたらう。われが色なら猶面白い。
鬼柳　斯うなつちやア、色でも女房でも、おいら二人が貰つたぞ。
左門　イヤ、如何やうに仰せられても、拙者は一向。
鬼柳　やかましいわえ。斯うして貰ふワ。
左司　おれも斯うして。
ト兩人より、左門が胸倉を取る。お雪、怖がり、左門が後へ隱れ慄ふ。
左門　これは當惑。マア〳〵、お放しなされて下されい。
鬼柳　嫌だ〳〵。あの女を、成る程あなたに差上げませうと云はないうちは
左司　泥龜が時をつくつても放しやアしない。サア、くれろ。
鬼柳　エヽ、マヂ〳〵と、張合ひのない
兩人　野郎めだ。
ト振り廻す。左門、詫びるを聞かず、兩人、いろ〳〵ある。この時、子供皆々戻つて來て、屯、左司馬に取り付き。
皆々　お師匠樣を、なんとする〳〵。
ト邪魔する。兩人、退けても〳〵無理に取り付く。左門、子供に怪我させまいと、いろ〳〵焦り心遣ひ。お雪もよろしくあろ、ト屯、左司馬、持てあまし
兩人　エヽ、いま〳〵しい。
ト一時に刀を引拔く、子供、慌てゝ店の内へ逃げ込む直ぐに兩人、左門へ打つてかゝる。兩人が首筋を捕らへ
左門　これは危ない。マア〳〵、お待ちなされませサ。
兩人　こりや手向ひか。
左門　イヤ、全く手向ひは致しませぬ。連れた子供に怪我でもあつては、申し譯がござりませぬ。先づ〳〵刃物をお納め下さりませう。
兩人　否だ〳〵。
ト無理に取らうとしても放さぬゆゑ
うぬ、放しやアがらないか。
左門　すりや、どのやうにお詫び申しても。
兩人　くどい〳〵。放しやアがれ。
トもぎ放さんとするを、左門、二人が刃物を引ッたくり、かゝるところを取つて投げ、散々に胸打ちに打ち据ゑる。

アイタヽヽ。
左門　先刻より重々の慮外、詫び言すれば付け上がり、若い女中へ無體の非道。その上、子供を相手に刀を拔く狼藉。キッと致し方もあれど、此方に怪我なきゆゑ、この分に濟ましくれる。キリ〳〵歸りやれ。
ト拔き身を抛つてやる。兩人、思ひ入れあつて
鬼柳　オヽ、歸るをおのれに習はうか。娘をくれずば、くれぬまでの事を、よく酒に醉うて居る者を擲つたな。この分ぢやア濟まさないぞ。
左司　これサ、この返報持つて行くは、おれが胸にある。マア、來やれ〳〵。
兩人　うぬ、覺えてうせろ。
ト刀を持ち、やう〳〵上の方へ行きかゝる。子供皆々出て
子供　ワアイ、負けた〳〵。
ト手を叩き囃てる。鬼柳、腹立ち、後へ戻るを左司馬マアよいと宥め、大拍子になり、捨ぜりふ云ひ〳〵、やう〳〵兩人下座へ入る。
左門　コリヤ〳〵、もう好い〳〵。最前から餘程の隙入り親達もさぞ待ち兼ね。もう歸らうぞや。
皆々　ハイ〳〵。
ゆき　これはマア、不思議な御縁で、殊にお世話さまになりまして、お嬉しう存じまする。
左門　なんのお禮に及ぶ事。拙者は四條高倉にて、手蹟指南の清明堂左門と申す者。お傘の御用などの節は、御遠慮なう。
ゆき　お尋ね申しまするでござりませう。
左門　相待ちまする。
ト兩人こなし。
子一　申し、お師匠樣、歸ります道で
子二　昨日あげました謠を
子三　ま一度お浚ひ
皆々　なされて下さりませ。
左門　オヽ、それは好い心掛けぢや。サア〳〵、先へ行きやれ〳〵。
ト子供皆々先に立ち、花道の方へ行きかける。お雪、左門と入れ替り、下の方へ來る。この時、下座より、鬼柳、左司馬、窺ひ出て、下手より
兩人　女め、うせう。
ト左司馬かゝるを、左門、突き廻して、有り合ひし手

桶をかぶせ突く。これにて左司馬、下の方の御手洗へ落ちる。續いて、鬼柳、かゝるを、左門、側の荒繩の圓座をかぶせる。この繩の端落ち散つたるを、子供皆々持つて、花道へ驅けかゝると、鬼柳、繩に卷かれ、グル／＼と廻つて同じく御手洗へ落ちる。

ゆき　モシ。

ト左門へ取り付くを、ちよつと拂つて

左門　〽一挺の弓の勢ひたり。

ト此うち、子供、花道に並び

子供　〽一挺の弓の勢ひたり、東南西北の敵を安く滅せり。

トお雪、この謠に心を留め、チツと聞いて、こなし。下座より　お倉、出て窺ふ。左門、花道中程にて立ちとまり、振り返つて、お雪と顏見合せ、双方こなしあつて、ちよつと辭儀する。お雪、それトこなしにて膝を叩く。兩人途端にてチヨンと頭を入れる。

左門　行きやれ／＼。

トよろしくこなし、

拍子幕

ト幕の外、大拍子にて、左門、子供皆々の後より向うへ入る。

四幕目

寺子屋の場

小栗栖の場

役名――清明堂左門、實ハ佐々木官次郎。醫者、水の谷辨庵。鞠屋與六。民右衞門妻、お倉。同娘、お雪。同下部、佐五平。下男、三助。門脇義平。鬼柳市。闇雲左司馬。京極内匠。

本舞臺、三間の間、二重舞臺、上の方障子屋體。向う赤壁、これに門弟の木札掛けあり、暖簾口、いつもの所に門口。この外、隣の二階座敷。下は黒塀、表に「手蹟指南清明堂左門」と云ふ標札掛けあり、幕の内より鞠屋與六、撫で付け着流し、手習ひ子大勢机を直して居る。二重舞臺に辨庵、着流し、坊主の醫者にて、莨のみながら、本を見て居る。幕の内よりいろはにほへと、この中はお人下されと、ワヤワヤ云うて居る。「元より藥の酒なれば」と惡童の切れにて幕明く。

手習　いろはにほへと。

同　この中はお人下され。
同　一筆啓上仕り候ふ。
與六　ちりぬるをわか。やかましい。隣の二階で太皷や三味線の、浚ひの騷ぎで、手習ひが出來るものぢやない。
手習　ソレ、新弟子さん、水。
與六　また水かい。小さな形をして、大人を使ふがな。
辨庵　コレ與六どの、そりや貴樣が惡い。
與六　どうして惡い。
辨庵　ハテ、年嵩でも、今日この頃の新弟子。師匠樣は獨り者。そこでこの水の谷辨庵も、長屋の事なり、何か手傳ひに來て居るが、惡い事は惡いと云はにやならぬ。
手習　兄弟子の云ふ事聞かぬと、お師匠樣に云ひ付けるぞ。
皆々　云ひ付けろ〳〵。
與六　サア〳〵、よい〳〵。水は入れて遣るぞ。
　ト門口の際の水桶にて、水入れへ水を入れて差出し
　ソリヤ、水を入れたぞ。皆精出して習へ〳〵。
手習　人に指圖せうより、こなた精出さつしやれ。
與六　此奴等が、兎角人に口を明かし居らぬが、コレ、お醫者樣、お前、他所の人ぢやから、譯を知るまい。この鞠屋の與六は、今出川の鞠商賣、親々の育てやうが惡うて、とんと明き盲目、無筆を悔む折も折、あとの月出口の柳で、鞠を蹴つて居たが、さつと降り來る春雨の、中に蛙の飛び交ふ有樣。柳の枝へ一寸飛び、二寸飛び、後には十寸十一寸飛び、遂には小枝へ飛び付きし一念。ハハア、さうぢやな、一日に一字習へば、三百六十字との敎へ、例へ今からでも習ふに上がる筆の冥加と、思ひ付いての弟子入りぢや。今に兄弟子になつて見せるぞ。
手習　追ひ拔かれるなら、追ひ拔いて見や。
同　新弟子だてら、口答へするならば
皆々　卦算で叩け〳〵。
　ト七種の合ひ方になり、子供皆々、與六を追ひかけ叩く。辨庵、取支へ、皆々追ひ廻る。奧より左門、着流しにて、莨盆を提げ出て來て、
左門　これは、どうしたものぢや〳〵。
皆々　ソリヤ、お師匠樣ぢや。云ひ付けろ〳〵。
　ト靜まり、口々に云ふ。
與六　オヽ、云ひ付けるなら云ひ付けて見い。十五冊の双紙を習ひ切つたのぢや。
皆々　お師匠樣、新弟子だてら口答へ致しまする。

左門　オヽ、與六が惡くば呵つてやらう。この間、天神參りをさせたから、その代り精出して、習つた〳〵。
　ト皆々子供手習ひにかゝる。
左門　イヤ、與六どの、この左門、先達てよりこの高倉に手蹟指南。こなたは今出川で麹商賣。御近所にもあらうのに、この邊土へ寺入りをなされたは、どう云ふ事でござる。
與六　されば、近所にもござれど、双紙を抱へて出入り致すも外聞惡し、そこで此方へ上がりました。不調法者、よろしうお頼み申しまする。
左門　イヤモウ、書くに覺え、習ふに上がる精さへ出せば一字千金、御覽じる通り手蹟指南も出來まするものでござる。
辨庵　左門どの、お茶でも上げませうか。
左門　これは辨庵さま、御深切に、毎日〳〵お世話でござります。
辨庵　お前が今寢てござる間に、娘の子をお世話が頼みたい、今日は日柄もよし、弟子をお願ひ申しますと、案内がござりました。
左門　ハテナア、女子の弟子は、連れがなければ惡からうなア。
與六　ハテ、何であらうと、取込むがようござりまする。また赤飯か小豆餅、酒も一杯呑めると云ふものぢや。
左門　イヤサヽ、變替へもなるまい。寺入りぢや。晝から休すます。精出さうぞ。
皆々　ソリヤ、寺入りぢや〳〵。
　ト手を叩き喜び、また手習ひにかゝる。
皆々　いろはにほへと。
　ト「樵歌牧笛」と枕獅子の唄になり、向うよりお倉、着流し抱へ帶。お雪、振り袖にて、連れ立ち、後より下男三助、机と文庫を一荷にして、重箱を持ち出て來て、表札を見て
くら　文徴明の風にて、手跡指南　清明堂左門。
　ト讀み
　爰ぢや〳〵。モシ、お頼み申しまする。
辨庵　ア、大方最前の寺入りであらう。此方へお入りなされませ、
くら　左樣なら、御免なされませ、
　ト内へ入る。
左門　サア〳〵、此方へござらつしやりませ。

くら　さてはあなたがお師匠様。

ト云ひ〳〵顔を見合せ

左門　ほんに、こなたはこの間。

くら　北野の社内で百人首の、お世話に預かりましたお方。この上ともに、よろしうお願ひ申します。

左門　そのこなたが、娘御を連れられて、今日の弟子入り。

くら　これも不思議な御縁でござりませう。

左門　御覧の通り、男ばかりの弟子衆ではござりますれど、お頼みとあれど、随分教へまするでござりまする。表になら、此方へ入らつしやりませ。

くら　娘、こちへ入つて、お師匠様へ御挨拶を申しや。

ゆき　それでもどうやら。

くら　これはしたり、恥かしうては濟まぬ。さゝやつとお師匠様にお近附きになりやいの。

ト恥かしがるお雪を連れて入り、左門の前へ突きやるお雪、思ひ入れ。合ひ方になり、左門と顔見合せ

左門　こなたもこの間、北野の社にて。

ト お雪も思ひ入れ。

ゆき　お目にかゝつた左門さま。所は慥かに六條で、手蹟の御指南、幸ひと、押しかけての弟子入り。

左門　そんならこなたも、アノ母御も。

くら　北野の社内でお近附き。

ゆき　お師匠様、今からお頼み申し上げまする。

左門　すりや、手蹟の指南が請けたさに、母御と相談の上にて……ハテ、寺入りでござつたよなア。

ト與六、お雪を見て手習ひを止め、見惚れて居る。

くら　母親育ちに甘やかしまして、手習ひをさせませなんだが、今の後悔。一入お世話でござりませう。コレ三助持たせた品を爰へ出しや。

三助　ハイ〳〵。

ト重箱、銀包みを出して直す。

左門　これは云はれぬ事を、忝なうござる。

くら　ほんの娘の參つた印ばかり。此お重は、子達へ土産。

三助　云はねど知れた蒸し物、煮〆。娘に世話を燒豆腐でござりまする。

左門　これは御念の入つた。子供衆、今からして中ようせうぞや。

ト與六、お雪の側へ來て

與六　姐さん、ようお上がりぢや。定めて初々しからう。おれも手習ひは新弟子で、心細うてならなんだが、今日

からお前は弟子朋輩。机を並べて手習ひする。するばかりではない書きもする。これが又、かゝずば居らるゝものかいな。

トいろ〳〵思ひ入れある。

くら　どうであなた方のお世話でござりまする。イヤ、お師匠、私しは一貫町まで、用事がござりまして参りますから、戻りにお寄り申しませう。

左門　成る程、娘御には、子供衆と杯をさせて遊ばせませう。緩りと行てござりませ。

くら　左様なら、お頼み申しまする。

ト行かうとする。お雪ちよつと留めて

ゆき　母様、何かの事を直々に、お頼み申さうと思ふけれど、差付けてはどうやら。

ト思ひ入れある。

くら　これはしたり、あれ程わしが云ひ聞かせたではないか。御覧じませ、まだ未通女でござりまする。サア、三助、おぢや。

ト唄になり、お倉、思ひ入れあつて、三助を連れ、向うへ入る。

左門　サア、寺入りぢや。机を片附けて休め〳〵。

皆々　そりやこそお休み〳〵。

ト机文庫を片付ける。

與六　新弟子様、奥へお出で。

トお雪の手を取るを寺子三人出て引退けて

子一　又差出るのか。人形の頭や

子二　源之助の似顔を書いたのを

子三　お師匠様へ

三人　云ふぞや〳〵。

與六　やかましいわい。氏より育ちと、いづれを見ても徒ら育ち。喜三次が子に年増がね。ハテ、世話甲斐もなき阿婆擦れぢやなア

ト此うち寺子二人、紙を引裂き、與六の帯へ付けて

皆々　あつたら男に、尾が下がつた〳〵。

ト手を叩き、與六を囃す。與六、腹を立て追ひかける。「山又山に山めぐり」と山姥の唄にて、皆々奥へ逃げて入る。これを辨庵、與六をなだめながら、重箱を持つて奥へ入る。あとお雪左門残り

左門　隣の二階の浚へ講で、きつう賑やかぢや。イヤ、お雪どの、この間北野の社で、近附きになつて、師匠の挨拶は済んだが、今日は日柄が善いから、ちよつと手習ひ

仕初めをせうか。

ゆき　ハイ、兎角よろしうお頼み申しまする。

左門　ドレ、教へて進ぜうか。

トこれより琴入り六段のやうなる合ひ方になり、左門、机を取つて來て

左門　コレ、御持參の机、硯箱、艸紙もある。サア、机の前へ直つた〳〵。

トお雪、机へ直り、墨を摺る。

左門　時に、文章にせうか、女今川か。

ゆき　イエ〳〵其やうなむづかしい事より、ツイ知れ易いいろはを

左門　アノ、いろはから習ふのか。

ゆき　アイ。

ト左門に見惚れて思ひ入れ。

左門　ちつと下地があらうと思うたのに、皆目とは、親達も親達ぢや。幸ひ〳〵、爰にいろはの手本。

ト他の机の上にある手本を取つて、お雪の机の上に置き

ゆき　マア、一遍讀んで見さつしやれ。

ゆき　これを讀むのでござりますかえ。一イ二ウ三イ四ウ。

ト指を付き、字の數を讀む。

左門　コレ〳〵、それはどうしたものぢや。

ゆき　それでも讀めと仰しやるから。

左門　ハテ、數を讀むのではない。字を讀むのぢやわい。

ト手を取り、一字づゝ押へて

いろはにほへと……サア、讀んで見さつしやれい。

ト字を押へ、教へる。

ゆき　い。

ト指にて押へ讀む。

左門　ろ。

ゆき　ろ。

ト一字づゝ押へて教へる。お雪教へるとその通り讀みお雪一人にて讀むと、わざといの字をはの字、すの字をとの字に讀んだり愚鈍に覺える。左門、さうではないといろ〳〵教へて、ホッとして

左門　これはしたり、早呑み込みぢやに依つて覺えが惡い。とつくりと教へる程に、師匠の云ふ通り云はつしやれ。

ゆき　ハイ〳〵。あなたの仰つしやる通り申しませう。

左門　い。

ト手本を抑へる。

ゆき　い

左門　ろ。

ゆき　ろ。

左門　は。

ゆき　は。

左門　に。

ゆき　に。

左門　ほ。

ゆき　ほ。

左門　へ。

ゆき　へ。

左門　と。

ゆき　と。

左門　さうぢや。

ゆき　さうぢや。

左門　それを云ふのではない。

ゆき　それを云ふのではない。

左門　教へる讀み聲を云はつしやれ。

ト焦れて手本を叩く。

ゆき　敎へる讀聲を云はつしやれ。

ト同じく手本を叩く。

左門　これは困つたものぢや。

ト頭を掻く。

ゆき　これは困つたものぢや

ト頭を掻く。

左門　もうよい〳〵。手本の讀みは後へ廻して、字を敎へませう。どうで手を持つて敎へずばなるまい。ドレ〳〵。

トお雪の後へ廻り、手を持ち添へて

隨分ともに、筆を柔らかに持たうぞ。サア〳〵、い。

ト讀みながら書かせる。お雪、筆をグニヤリと持つて取落す。

これはどうしたものぢや。

ゆき　それでも、柔らかに持てと仰しやるもの。

左門　さうではない、手を柔らかに、筆をしつかり持つがよい。

トまた敎へる。お雪、力んで筆を持つ。

これはどうぢや。

ゆき　しつかりと持てと仰しやるかる。

左門　さりとては片意地な。よい加減がよい。サア〳〵、

覺えやうぞ。い、ろ。
ト讀みながら手を持ち教へる。右の二字を幾度も教へ
る事あつて
先づ一服いたさう。ヤレ〱、難儀千萬なお弟子ぢや。
トこちらへ來て莨をのむ。
ゆき　いろ。
ト讀み〱手習ひする。左門、見て居て
左門　さうぢや〱。大分ようなつたぞ。よし〱。
ト此うちお雪、艸紙を刎れて何遍も書く。
もうよい〱。これから、はの字を教へませう。
ト立たうとするを
ゆき　アノ申し、あなたのお手で、いろと云ふ字を學びま
したら、後はモウ習はいでもよろしうござりまする。
左門　もう飽きたのか。せめていろはから、ちりぬるまで
覺えたがよい。
ゆき　イエ〱、思ひ思うて習ひ込んだ、いろと云ふ字。
ちりぬると云へば、どうやら氣にかゝります。必らずと
もに、お忘れなされて下さりまするなえ。
左門　ハ、、、師匠様が忘れてよいものか。
トお雪、側にある淸書艸紙を取つて

ゆき　申し、お師匠様、この草紙の上書の繪を御覽じまし
たか。
左門　この上書の繪は。
ゆき　高砂の尉と姥とを繪に畫いて、淸書艸紙と書いてご
ざりまする。
左門　それが讀めるか。それに又、いろはから習ふと云ふ
は、とんと讀めぬ。
ゆき　私しよりは、あなたのお心が讀めかねて、
左門　ヤ。
ゆき　その高砂は水も洩らさぬ女夫中。尤も友白髪の末ま
でも、變らぬ契りに。
トまた艸紙を取つて
嶋臺替りの松竹梅。
ト見せる。左門取つて
左門　そんならこなたは、寺入りではなうて。
ゆき　嫁入りがしたさでござりまする。
ト常の合ひ方になり、兩人思ひ入れ。
左門　すりや、この左門をやもめと聞いて。
ゆき　この頃北野でお目にかゝり、何かに付けて頼もしさ
うなお心を、母様に話したれば、それは幸ひ、似合ひの

縁組み。マア、弟子入りの分にしてと、今日のしだら。眞實あなたを思ひ候べくの、文より早いこの艸紙。松竹梅の御指南を、請けたいやうなものゝやうな者ぢやわいなア。

トくど〳〵と云ふ。

左門　ハテ、味いに持ち込んだな。折角の頼みなれど、身が返事はこれぢや。

ト他の艸紙を見せる。お雪見て

ゆき　この上書きは龍虎、梅竹。

左門　サア、その上書きの通り、龍となり虎となる勢ひも、時到らねば地中に潜む虫同樣。今こそ寺屋の稼業なれど身に深い願ひがあつて、それ叶ふまでは獨身で居る心の誓ひ。梅の色よい返答も、年與れ竹の時節を待てば、ナ、命さへあれば

ト艸紙を取つて

コレ、老松の千代かけて

ゆき　女夫になつて下さりますか

左門　その時はどうなりとも。

ゆき　エヽ、嬉しうござりまする。

ト云はうとして

と云うてそれが、いつの事やら、當もない日を。

トまた艸紙を取つて

松風は、こちや否ぢやわいなア。

ト艸紙を打ちつける。

左門　さう云はれては、艸紙も師匠も澀苦茶ぢや。師家の約束したれど、寺入りが嫁入りになつたのは、此方から變替へぢや〳〵。

ゆき　イヽエ、變替へは致しませぬ。女夫にならにや置かぬわいなア

左門　これは難儀な。この母御は何して居らるゝ事ぢややら。

ゆき　アイ、母樣は得心でござりまする。

左門　母御が得心でも、身が不得心ぢや。師匠の云ふ事聞かぬと、泊めるぞよ。

ゆき　アイ、今日も明日も明後日も、泊めて欲しいわいたア。

左門　さりとては困つたお弟子。娘も娘なり、母御も母御ぢや。不埒と云ふも程のあるものぢや。

トむつとしてあちらへ行く。

ゆき　そりやあなた、お胴慾ぢや〳〵〳〵わいなア。

ト泣く。

左門　コレ〳〵、奥には子供も居る。師匠が弟子を泣かしたと云うては悪い。泣きやんな〳〵。

ト側へ行て介抱する。お雪、左門に取り付き

ゆき　これ程までに思ひ詰めて來たものを。

左門　我れとても同じ人間、木石ではござらぬわいの。

ゆき　そのお心に違ひがなくば

左門　この身の願ひ叶ふ上は

ゆき　夫婦妹脊の

左門　緣をしがらむ時節がござらう。

ゆき　それ樂しみに。エ、。

ト左門に抱き付く。子供皆々出て

子一　ワアイ〳〵、お師匠樣と

子二　新弟子樣と

皆々　ほうやれ〳〵〳〵。

ト手を叩く。兩人驚ろき飛び退き

左門　イヤ、今のは何ぢや。女子と云ふものは成人して、男を持たねばならぬ。夫へ社杯の着せやう、小笠原流を指南したのぢや。

ゆき　アイ、小笠原流を習うて居たのぢやわいなア。

左門　時に、今日は寺入りで休んだ代り、明日は早う來ませうぞ。

大勢　お師匠樣、明日え。

ト「獅子虎でんの」と石橋のちらしにて、子役皆々、艸紙を持つて向うへ入る。

左門　寺入りと云ふと、皆子供は喜びぢや。

ト向うより男出て來て

若者　申し、左門さま、お内でござりますか。

左門　これはお家主の男衆。

若者　何やらお侍ひらしい人が二人ござつて、お前を預かるの引くのと云ひます。それで呼びに參りました。

左門　何であらうと、身共を預け引かすると云ふは、何事か、ちよつと行て來よう。お雪どの、留主を賴みます。

ト云ひ〳〵羽織を着て、一腰を差す。

ゆき　早う戻つて下さりませえ。

左門　サア、行きませう。

ト唄になり、左門、若者附いて向うへ入る。お雪、殘り居て

ゆき　斯うして居れば、どうやら心細いやらにもあり、こちや手習ひなとせうか。

ト合ひ方になり、お雪、机に直る。此うち奥より與六出て來て、思ひ入れ。

今のお師匠様のお詞では、何やら深いお願ひの、叶ふまではと仰しやるゆゑ、大事の事を打明けて頼まれもせず、どうぞよい思案はない事かいなア。

ト机に凭れ、辛氣のこなし。

與六　その思案、貸して進ぜうか。

ゆき　ヤア、お前は最前のお方。思案を貸さうとかえ。

與六　その思案と云ふは、斯うするのぢや、

ト抱き付く。

ゆき　ア、申し、何をなされますぞいナ。

與六　何をするとは、最前からの様子奥から聞いて居たが、お師匠様には色男、寺入りと見せかけて、ほの字にれの字にたの字ぢやないか。そのお師匠様の代稽古なり、また常から仰しやるには、何でも師匠を眞似よ〱と仰せ我れらは元より一條今出川の鞠屋與六、そこで鞠與〱と云はれたゆゑ、鞠の目代の眞似してのこの惣髪。菅原の淨瑠璃の、希世を眞似ての鞠屋の與六、師匠の眞似を鞠與〱で、傳授の一卷、ソッと握つてコレ御覽。

トお雪の手を取つて我が懐へ入れようとする。

ゆき　そんな事は存じませぬわないア。

ト振り切り、あちらへ行て手習して居る。

與六　そりやお雪さん、胴慾ぢや。今日寺入りのお姿を、フッと見初めてそれからは、手習ひすれど手に付かず、筆の命毛絶えなは絶えよ、どうぞ女房に硯箱とは思へども、明けてそれとは油煙墨、取つて机のすきもなく、心の底の水入れを、打明けて語らうか、どう艸紙から艸紙、手習ひ艸紙の眞黒になつて、いきりきつて居るわいなア。

ト云ひ〱お雪を捕へ抱きつく。

ゆき　アレ、惡い事。

ト逃げる。奥より辨庵出て、與六を突き仆し

辨庵　鞠與どの。

與六　鞠與がどうしたえ。

辨庵　そりや潮來とやらの囃子のやうぢやが、一體寺屋で自墮落は。

與六　なんぼ寺屋ぢやとて、坊主が差出る事はない。退かつしやれ。

ト辨庵支える。それを引退け、お雪を追ひかけると、種蒔の歌になり、向うより左司馬、前幕の形。鬼柳屯、

手拭にて眉間を卷き、侍ひと中間に手を引かれ、怪我人の體。後より他の侍ひ中間附いて、左門を中にして出て來て

左門　マア、私しの宅へござらつしやりませ。

ト云ひ〳〵門口へ來て內へ入る。

與六　ヤア、先生。

ゆき　お師匠樣、よう戾つて下さんした。

辨庵　申し、お前の留守にこの鞠與どのが。

與六　コリヤ〳〵〳〵、醫者なら醫者のやうに、匕加減して物を云へ〳〵。

左門　ようござる。聞いて惡くば聞きますまい。お雪どの母御は歸られましたか。

ゆき　母樣はまだでござりまする。

左門　母御樣へ渡すまでは、大切の預かり者。端近に居ずともマア奧へ。

辨庵　愚老と一緒にござれ。

與六　きつい御愚老な事ぢや。

ト合ひ方。

ゆき　お師匠樣にも。

ト左門、與六の方へ思ひ入れあつて

左門　マア、先へ行かつしやれ。

ゆき　アイ

トこなし。お雪、辨庵、連れ立ち奧へ入る。

皆々　サア、どうするのだ〳〵。

左門　マア、此方へ入らつしやれ。

ト皆々內へ入り、屯そこに佇れて呻る。

左門　いま家主から呼びに參つて、行て見れは、この間北野で逢うたお武家方のやうな衆。身共を預けるの引くのとあるから、宅へ連れ立つて來ましたが、群集の中で手籠めに合うたを根に持つて、仕返しにござつたか。

皆々　知れた事だわい〳〵。

左司　この野郎が、疵が付いて、死にさうだ〳〵。

ト鬼柳唸る。

左門　それは氣の毒千萬な。

左司　氣の毒千萬も凄まじいわい。その時おれもこの野郎も、打ちのめされたが仕合せと、おらア疵も付かないが、この野郎は眉間に疵、剛氣にぶたれて體はよい〳〵。これぢやア主人方へ歸られない。この譯立てをしてもらはにやア、屋敷へ濟まないと云ひ、世間へ男が濟まない。こんなよい〳〵野郎でも、鬼柳の屯と云ふ二本差し。お

れは又、闇雲左司馬と云ふ者だ。この始末をしてくれろ。死にやア下手人だ。

皆々　オヽ、濟まないぞ〳〵。

ト左門、鬼柳を見て

左門　すりや、この間北野の時の意趣、彼れこれを持ち込んでの下手人呼ばりか。

與六　こりやお師匠樣、氣の毒乍ら濟みますまい。帶刀なした侍ひの身が、疵付けられては、先づ第一が扶持の喰ひ上げ、こりや濟むまい。もと喧嘩の起りと云ふは、今日寺入りした娘からの事。丸う納まつたと思はつしやるなら、お娘を出して渡した上、下手人の云ひ譯立て、金で扱つて濟みさうなものぢやござらぬか。

ト左門、思ひ入れあつて

左門　與六どの、こなたはいから先方の肩を持たつしやるの。

與六　ヤ。

左門　師匠には疎遠の挨拶。こなたの知つた事ぢやない。構はつしやるな。

與六　構ひはせぬが、娘が爰に取込んであるによつて。

皆々　オヽ、その娘を出せ〳〵。

左門　イヤ、取込みはせぬ。今日此方へ弟子入りに見えて、母御から預かつた娘、大事の預かり者ぢや。

左司　さう云やア、吔が下手人を取るのだ。

皆々　サア、下手人〳〵

ト鬼柳、唸りながら

鬼柳　おれが息のあるうち、下手人を取つてくれろ〳〵。

左門　オヽ、下手人を取つてやる。サア、譯立てをつけて進ぜう。

ト最前の銀包みを出して

寺子屋渡世に貯へとてはござらぬ、酒でも呑んで下され。

左司　コレエヽ、いま命が冥土へ飛ぶかゝどうするかと云ふ怪我人に、銀包み一つ。べら坊め、入らないわえ。

ト銀包みを打ちつける。

鬼柳　アヽ、苦しい〳〵。引入るやうだ〳〵。

皆々　オヽ、さうであらう〳〵。サア、下手人にらしやアがれ。

左司　但し、娘を渡すか。

左門　サア、それは。

皆々　サア〳〵〳〵、どうだえ。

ト此の時、障子屋體よりお雪、袱紗の金を抛る。左司馬と顔見合せ、左司馬、恟りする。お雪、障子をピッシヤリ閉す。左司馬、ツカ〳〵と行くを、左門引退けて

左門　浪人しても清明堂左門、一足でも踏ん込むと、手は見せぬぞ。

トきつとなる。皆々氣味の惡きこなし。左門、與六へ目を付け

この譯合ひも大方は知れてある。何も云はぬ。疵養生代を持つて歸れ。

ト左司馬の前へ抛る。左司馬、取つて見て

左司　こりやアなんだ、貳拾兩。貳拾兩ぢやア料簡ならない。

鬼柳　ロリヤ〳〵、貳拾兩なら、よからうぞい〳〵。

左司　イカサマ、それもさうかい。コレ、鞠與さま、こなたの符牒は。

ト云はうとして、與六と顔にて思ひ入れ。

與六　ほんに、このお弟子は、八ツ上がりを忘れて居た。お師匠樣、明日え。

ト行かうとする。

左門　與六どの、待たつしやれ。元この意趣の起りは、寺入りした娘からと、あの衆が譯を云はぬ先に、どうしてこなたは知つて居るぞ。

與六　ヤア。

ト恟りする。

左門　一つ穴とは見え透いた云ひ合せ。この場で一々詮議するは安けれど、屋敷方の掛り合ひ。師弟の親誼に免してくれる。只一通りの寺子屋折檻、竹のしつぺい。

ト與六を引ッ捕へ、竹箆にてしたゝか打つて、机を繩からげに脊中に負はせる。

皆々　こりや、鞠與どのを。

左門　師弟の縁もこれ限り。キリ〳〵失せう。

ト外へ取つて突きやる。皆々介抱して

左司　ヤレ〳〵、可哀さうに。公卿衆も同然の大撫で付けの鞠與どのを

皆々　此やうに手荒うするとは

與六　ヤレ、騷がれな方々。昨日までは叡慮に叶ひ、今日は逆鱗蒙むつて、机脊負せのこの繩目、菅丞相ではなうで、肝積師匠ぢやなア。

左司　それぢやと云うて。

トきつとなる。

與六　コリヤ、だんまりの天神。

ト梅を斷ちますと云ふ唄になり、與六先に左司馬、鬼柳、皆々向うへ入る。左門殘り

左門　取るにも足らぬ輩どもが、今の惡口。ヂツと辛抱して居るも、身に大切の願ひあるゆゑ。

トこなしあつて

ドリヤ〳〵、賴まれた扇を書いて。

ト雛子の唄になり、左門、机文庫を直し、何本も何本も扇を出し、ほんとに詩發句を書く。これを書くうち奧よりお雪出て來て

ゆき　モシ、お師匠樣。

左門　ホウ、お雪どの、只今の心ざし、無下にもならず、時の用には立たない暮らしの身共ゆゑ、遣ひは遣うたなれど、金子は返進しますぞや。

ゆき　イエ〳〵、この間の北野の體裁は、私しから起つた事。黃金は朽ちても朽ちせぬは、お侍ひ樣の魂ひ。女夫の緣を願ひまする、わたしが身の上。

左門　アイヤ、系圖正しいお人ならば、猶以て添はれませぬ。京洛中に望む家も多からうが、見る影もない寺子屋風情を、慕ふは近頃一興。母御もこなたも、こりやちと存じ違ひでござらうぞや。

ゆき　サア外へと云うては、緣付きのならぬと云ふは。

左門　樣子があらう。すりや、どうあつてもこの左門と。

ゆき　譯一通り、お聞きなされて下さりませ。

ト思ひ入れあつて門口をしめる。合ひ方。上着を脫ぐ。下は繼ぎ〳〵の模樣やつしの振り袖。此うちお倉、これも繼ぎ〳〵のやつしにて、一腰を差し、出て來て、門口にて窺ふ。お雪、思ひ入れあつて

お恥かしいこの身の懺悔。父樣は由緖ある侍ひなれど、活計も盡きて今の貧苦。この間北野のお社にて、思ひ初めても、染めかねる、松を時雨の跡絕えて、ほんに思へば果敢ない別れ。内へ戾つて母さんと談合で、立寄る綱も詮方なう。親子の者が僅かの着物も、代になして拵らへました今の金。今日の小袖も只一日の損料借り。朝は萎む朝顏の、露より脆き我れ〳〵が身の上、不便と思うて下されませいなア。

ト泣く。左門、こなしあつて

左門　ム、ウ、それ程までに身を入れて、左門が女房になりたいとは。

ゆき　サア、緣を結んだその上で、お賴み申す一大事。
左門　ナニ、一大事とは。
くら　その樣子は、母が申しませう。
　ト合ひ方。お倉、內へ入る。
左門　こなたは母御。
くら　御覽の通り、成人の娘を連れての寺入りも、力とな
　つて親子が願ひを、叶へておもらひ申さう爲。
左門　ムウ。して親子のお身の上に、一大事の願ひとは。
くら　敵討の助太刀がお賴み申したい。
左門　して、その敵は、主人の敵か、但し又、親の敵か。
ゆき　わたしが爲には父さんや、姉さんの敵。
くら　わたしが爲には夫と云ひ、娘の敵。何を隱さん我
　れ我れは、高賀家の浪人、吉岡民右衞門が妻娘。三年以
　前、播州飾間の太守、彌生之助さまのお召出しにて、夫
　の出世を喜ぶ間もなう。
ゆき　同國阿彌陀寺にて、父さんはお討され遊ばし、剩へ
　牛王吉光の刀まで奪ひ取られ、同門の吉岡一味齋どのと
　云ひ、その時まで行くへの知れぬわたしが姉さん、お照
　さままでその日の御最期。
くら　何卒敵を討ち負ふせ、夫の無念を晴らさんと、心は
　矢竹にはやれども、情ない女子の力。哀れ力となるべき
　人もと、都は多くの入り込む所、敵の在所も知らん爲、
　この程よりの北野へ日參、心を盡した甲斐あつて、この
　程北野でお目にかゝり、賴もしさうなお方ゆゑ
ゆき　母さんとお話し申し、今日押しつけての寺入りも
くら　娘と云ひ、わたしが願ひ。緣を結んで敵の助太刀。
ゆき　世に便りない二人が身の上。御推量遊ばして
くら　力となつて
兩人　下さりませいなア。
　ト此うち、左門一つ〳〵思ひ入れあつて
左門　ハテ、思ひ寄らざる御親子のお身の上。して、吉岡
　どのを討つたる敵は。
くら　これなる娘が姉のお照と、不義の科にて六年以前、
　飾間家を追放されし、一味齋どのゝ實子、官次郎と云ふ
　者なれど、所を隔てこの年月、面體とても知らねども、夫
　民右衞門橫死の場所へ、行き會はせし一味齋の下部、繁
　藏へ打ち掛けし、小柄は四つ目結ひの紋散らし。
　ト懷より前幕の小柄を出し
　後日の證據と、わたしが方へ取り置きたる、官次郎が所
　持の小柄。拔きさしならぬ敵の手がゝり。

左門 ト左門、小柄を取つて見て
成る程、覺えのこの小柄、紫藏が物語り、殊にこの
程北野にて、門脇義平が
ト戸棚へ思ひ入れ。
いよ／＼敵は我れなりと、諸人を惑はす内匠に取入り、
この官次郎を敵とは、流石は女、淺はか／＼。

ゆき なんと云はんす。

くら 今の詞の端々と云ひ、覺えの小柄とあるからは、そ
んならこなたは。

左門 一味齋が勘當の悴、こなたの娘お照どのと、不義の
科にて六年以前、飾間家を追放の、我れこそ佐々木官次
郎。

ゆき そんなら。
ト思ひ入れあつて
ハア、。
ト泣き落す。お倉、身構へして文庫の内より一腰を出
し

くら 夫の敵。
ト切りかゝるを、左門よろしく留め

左門 小柄の證據あるからは、一途に思ふは理りなれど、
我れの爲には現在親たる一味齋、男たる吉岡民右衛門、
女房までを何意趣あつて、親類縁者の唐吉岡、我が手に
掛ける筈がない。急かずと様子をお聞きなされい。

くら なんと。
ト刀を引き、思ひ入れ。

左門 氣遣ひ召されな。敵は討たす。身共が討たす。

くら その身が敵でありながら

ゆき 敵を討たすと云はしやんすは。

左門 くど／＼云はぬ。身共が云ひ譯。
ト戸棚の方へ行くを、お倉、ちよつと刀を構へる。

左門 暫らく。
ト顔にて思へる。合ひ方、戸棚より、義平を出す。

倉寄 これは。

左門 サア、門脇義平、委細を申せ。

義平 成る程、いつぞやから虜になつて、戸棚住居。内匠
どのには播州の、阿彌陀寺にて一味齋と、民右衛門に意
趣晴なし、奥女中のお照は惚れて居たれど、官次郎と不
義にて追放、それに不首尾の内匠どの、殿の重寶、色紙
を盗み、一味齋と民右衛門を、討つたも内匠どのゝ業。
牛王吉光、陽の一巻も奪ひ立退く。その起りは一味齋に

恨み重なり、民右衛門に赤恥かゝされ、お雪に惚れて口説き落して、抱かれて寐たが腰元のお陸ゆゑ、騙されたと腹立て、兼ねての意趣に殺したのだ。それより外は身共は知らない。

くら　さてはさう云ふ仕儀であつたか。

左門　その悪黨の内匠に組みせし門脇義平。

義平　その折駈け付けた奴等をば、殺らしてしまへと内匠どのが、云ひ付けて立退き、十平次と新左衛門は、殿様に殺されたれど、身共はその場を助かつて、方々流浪の其うち

左門　巡り會うたが、官次郎が仕合せ。

ゆき　すりや、敵と云ふは京極内匠。

くら　さうとも知らで、官次郎どのを敵と思うて。

ゆき　すんでの事に。

　トお雪こなしあつて

ゆき　それ見やしやんせ。官次郎さまは敵でござんせぬ。わたしやこれで落ちついたわいなア。

義平　もう證據になつたからは、官次郎どの、免して下され。

左門　まだ／＼其方は、敵の手引きに。

　ト元の戸棚へ打込み、錠を下ろす。お倉、思ひ入れあつて

くら　これまでの嘆きは格別、表立たねど、姉のお照と云ひ約束の

ゆき　アノ、官次郎さまは。

　ト左門を見てこなし。

くら　盡きせぬ縁に、お雪が聟がね。

ゆき　そんならアノ。

左門　盡未來まで夫婦となつて、互ひに親の

皆々　敵討ち。

　ト奥より

辨庵　千秋万歳の寺子に醫者が奉る。

　ト謡を諷ひ／＼辨庵、盆にちろりと茶碗、重箱持ち出て

サア／＼、お持たせの赤飯と、有り合せのちろり酒。

左門　水の谷どの、これは御苦勞。

くら　そんならめでたう。

皆々　三々九度。

　トよろしく婚禮の杯事になる。これにて「糸による」と綱手車のめりやすになり、向うより、内匠、そぼろの

初演の繪番附

内匠 百日、破れたる斧流し、病人の拵らへ、躄にて車に乘り、我が手に棒にて車を押し、出て來て花道にても、運盡き弓にて今のこの身。五體叶はぬ腰拔け病。アア、物の報いは恐ろしいものなア。

ト此うち皆々こなしありて

くら 何やら表に。
辨庵 物貰ひか知らぬ。
左門 何か世の中の身の述懷。
内匠 躄に御報謝。

ト めりやすの切れにて、内匠、本舞臺へ來る。

辨庵 手の内なら急がしい、通らつしやれ。
左門 イヤ〳〵、今日は志しの日。ドレ〳〵、進ぜう。

ト 貲盆の抽出より錢を出し、門口へ來て

サア手の内。
内匠 これは有り難うござりまする。

ト兩人、顏見合せ、悄りして

左門 ヤア、其方は。
内匠 官次郎どのか。
左門 衰へたれど、京極内匠。

皆々 ナニ、内匠が來たとは。

ト悄りして思ひ入れ。

辨庵 その内匠と云ふは、敵の内匠かな。
左門 オヽ、内匠だ〳〵。

ト喜ぶ。

ゆき モシ〳〵母樣々々。

ト嬉しきこなし。

くら 娘々。
左門 コリヤ、喜ばつしやれ、親の敵。
皆々 内匠ぢやといの〳〵。

ト躍り上がり、いろ〳〵喜ぶ。

内匠 これは怪しからぬ騷ぎやうぢや。
左門 尋ね待つたる其方こそ、我が親一味齋。
くら 夫吉岡民右衞門。
ゆき 父樣と云ひ姉さんの
左門 その敵たる京極内匠。

ト刀を取つてキッとなる。

皆々 覺悟いたせ。
内匠 ヤレ早まるまい。京極内匠は敵を討たれに來た。
くら ヤア、恍けまい。我れ〳〵が親を

左門　討つて立退き今となり、討たれに來たとは
皆々　合點がゆかぬ。
内匠　その樣子一通り、聞いて疑ひ晴らして下され。
ト合ひ方になり、内匠、棒を力に車を下りて、躄り躄り、苦しきこなしにて内へ入り
ア丶、惡い事はせまいもの。いつぞや播州阿彌陀寺にて恨み重なる意趣晴らしに、一味齋どの民右衞門どの、討つて立退くその起りは、八重垣流の陽の一卷、牛王吉光、これが欲しさ、殊に惚れたるお雪どの。
ト お雪、思ひ入れある。
腰元のお陸を騙し、お雪どのを取持てと、その難題に否應なく、抱かれて寢たが矢ッ張りお陸。欺むかれたる口惜しさに、これも殺して立退く折、樣子を知つたお照どの、惚れては居れど是非もなく、一討ち二度に、四人殺した罪か、何の報いか、コレ、見て下され。
ト左の膝頭を括つたる足を出して
世にも因果な人面疔。
倉雪　エ丶丶。
ト氣味の惡きこなし。
左門　すりや、人面疔に。
内匠　五体の惱みに身の弱り、進む食事は共々に、喰はせ喰はせ、と人面疔の泣き叫び。我が身の足が物云ふ病。思へば我れながら恐ろしき、こんな病もあるものかと、思へば人を殺めた報い、懺悔六十四罪を滅ぼすと思へば、仄かに京地にござると聞いて、躄りながらに尋ね來て、思ひ掛けないお倉どのと云ひ、お雪どの、定めて敵と覘ふであらうが、今のこの身ぢや、一先づこの場は免して下され。
左門　そりや卑怯であらう京極内匠。
三人　敵持つ身の逃げ支度か。
内匠　ハテ、天道はない事か。心が竹なら割つて見せたい敵を覘ふこなた衆と、知つて討たれに來る程の仕儀。如何に敵の内匠でも、サア立ち上がつて勝負の出來ぬこの病。勝負をすれば討たれるワ。いま内匠が死んでは、殿の重寶武宗皇帝の色紙、並びに陽の一卷、牛王吉光、この行くへは何とする。
三人　サアそれは。
内匠　それでは三品の行くへが暗闇。それとも討つか。サア、殺せ殺せ。
トこれにて皆々、當惑の思ひ入れ。

うろたへ者めが。

ト持つたる杖棒にて舞臺を叩く。左門、心得、「ムウ」と立ち上がり、拔きかゝらうとするを、内匠杖にて居ながらキツと留める。三人キツと身構へする。

左門　さては油斷を致させて、叩き伏せんず心よな。

内匠　イヤ、手向ひでない。

左門　ヤ、なんと。

ト合ひ方變つて

内匠　すべて杖と云ふ物は、老を助けて力となる。身共も歩みは叶はねども、この棒杖に助けられ、爰までなりと參つたは杖の德。丁度其方もその通り、例へ敵を討ち負ふせても、今云ふ三品が手に入らずば、不忠と云ひ、一旦沒收の吉岡兩家が相立つまい。即ち三品は其方達が大望の身の杖も同然。心をとくと落ち付けて、その上で勝負せい。

三人　ムウ。

ト思ひ入れ。

内匠　それも身共が隱れ家にある。

三人　ヤ。

内匠　今日爰へ尋ねて來たは、その三品を返し與へ、勝負して討たれて死ぬるが身の本望。ナニこの態で生きて居られう。今にも死ぬると覺悟極めて、せめてもの罪亡ぼし。深草の極樂寺、表の山が内匠の隱れ家。

左門　イカサマ、惡黨ながらも理の當然。

内匠　まだ／＼疑ひ、作病と思ふなら、醫者に見せるが慥かな證據。

左門　幸ひ／＼此方に

辨庵　頼まれ居れば、愚老が脈を。

ト内匠の側へ來て

人面疔で惱まつしやるさうな。

内匠　誠に業病でござる。

辨庵　ドレ／＼。

ト内匠の脈を見て驚ろき

こりや血氣の通ひもなく、とんと絶脈、甚だ危うござる。

内匠　命の終りを待つばかりでござる。

辨庵　一體癰疔は火の毒なるゆゑ、寒熱が強く、惡寒がござらう。尤も人面疔と申すは、膝頭が段々腐れ、犢鼻骨、膝眼と顯はるれば、自然目鼻のやうに骨が出るゆゑ、これを人面疔と申す。俗には人の面が出來て食事を

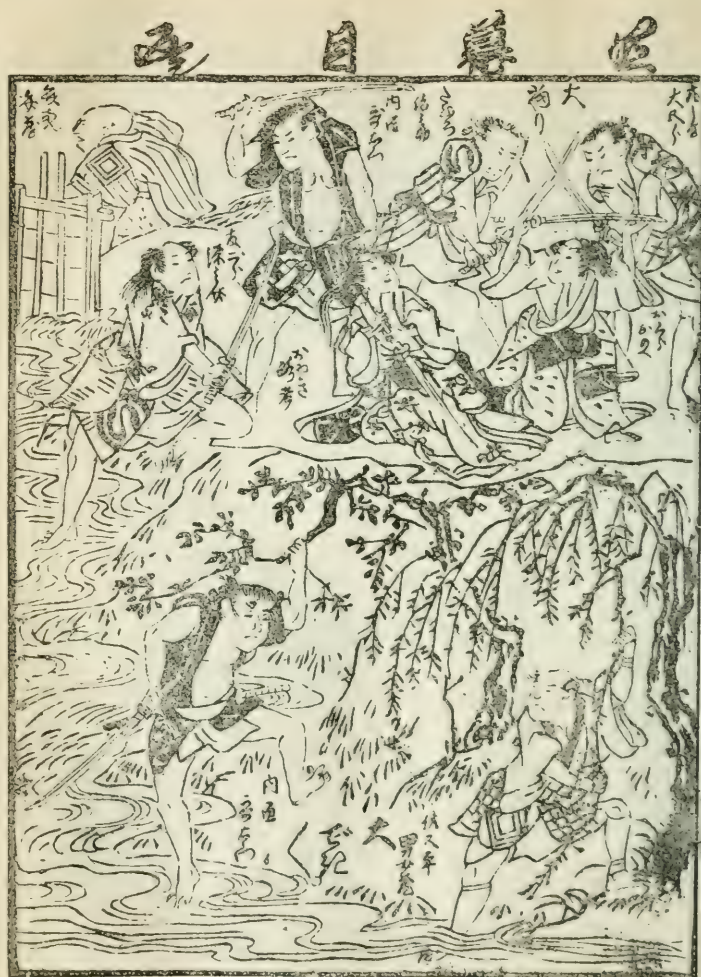
致すと申すが、左樣でもござらぬ。
左門　すりや疑ひもなく、内匠には人面疔とな。
倉雪　人の恨みも思ひ知つたか。
内匠　イヤモウ、なんと云はれても是非がござらぬ。併し醫者どの、身が人面疔は、その形人の如く、ひだるうなると詞を發して、食事をねだる因果の病。
辨庵　然らばその人面疔を、とくと見ませう。
ト内匠の膝へ手をやるを、内匠押へて
内匠　その儀は偏へに免さつしやれ。この如き脈證に、病は顯はれてござる。如何に業病の身でも、見せまするも面目ない。これぱつかりは。
辨庵　そりやモウ、見いでもよろしうござる。
皆々　ハテ、恐ろしい病もあればあるもの。
内匠　この上は身共が願ひ、極樂寺の隱れ家へござつて、右の三品を相渡し、覺ながらも勝負を決して、討たれませう。
左門　イヤ、腰拔け相手に勝負はなるまい。
内匠　成る程、武士の本意になりませぬわい。
くら　然らば本腹まで
ゆき　敵討を待つのかえ。

内匠　そりや悪からう。どうで本腹叶はぬ業病、今にも死なば本望であるまいがや。
左門　先づ何よりはその三品、深草の隱れ家へ行て受取つた上。
くら　勝負はその上
内匠　イカサマ、それが上分別。
ト辨庵、思ひ出したるこなしにて
辨庵　時に敵討と云へば、この間通つたが、小栗栖の藪のあたりに非人小屋、顔は見なんだが、慥かに、あれは敵討と見える。
左門　もしや下部の繁藏が、身共が京地に居る事を、知らずに姿をやつせしものか。
辨庵　あの中間どのなら共々に、敵討たせいではさぞ殘念。
左門　深草の極樂寺まで、行く道なれば
ゆき　知らせて共に敵討。
内匠　そんなら身共は。
辨庵　念に念入れ、愚老が附いて參らうか。
左門　それは御苦勞。
倉雪　水の谷さま。
左門　必らず内匠を。

辨庵　とても事に車を曳いて
左門　木幡に近き深草へ
くら　親と夫の事を思へば
ゆき　馬はなけれど。
辨庵　この車。
内匠　曳いて功德にさつしやりませ。
ト綱手車の切れにて、内匠、車へ乘り、辨庵、車の綱を曳いて向うへ入る。あと見送つて。
左門　敵ながらも惡心發起の京極内匠。
くら　有無を云はせず、その場に於て
ゆき　日頃の本望。
左門　これより直ぐに小栗栖にて、家來繁藏伴はん。
トこの時、戸棚の戸をバラ／＼と破つて、義平出て
義平　この樣子をば内匠どのへ。
ト行かうとするを、左門、一刀に切つて捨てる。
倉雪　殺した死骸は。
左門　どうで爰には長居はならず。後構はずに、この場は此まゝ。
倉雪　はや日は暮れて眞の宵闇。
左門　用意の提灯。

ト居にある小田原提灯を出す。
皆々　ちつとも早う。
トごん／＼にて、向うへ走り入る。チョン／＼にて、道具廻る。
本舞臺、三間の間、向う高土手、後は一面に藪垣。眞中に蒲鉾の非人小屋。下の方、樋の口、これより舞臺前へ落ち口。平舞臺に玉椿の茂りたるこんもりした生垣。この中に石の道祖神、木綿幟を立て、この側に石燈籠、火をともし、棕梠の土手、この川岸こんもりとして茂りたる川柳大分、所々松の枝柳いろ／＼本葉付きにて茂りあり。道具とまる。
ト矢張り時の鐘にて、向うより佐五平、先に、提灯を灯し、お倉、お雪、後より左門出て來て、花道にて
佐五　向うの土手に見える非人小屋が、そこでござりませう。
くら　ほんに燈臺元暗しとやらで、繁藏どのとやらが、木幡近所に居るとは知らなんだの。
左門　ちつとも早う、繁藏に逢うて喜ばさうわい。
ゆき　さぞ思ひ掛けなう思ふでござりませう。

佐五　サア〳〵、お出でなされませ〳〵。
　ト本舞臺へ來て、花道の方にて
　モシ、水は干て居ますが、樋の口の落ち口でございます
　る。氣をお付けなされませ。
皆々　合點ぢや〳〵
　ト落ち口の所を跨ぎ〳〵、本舞臺へ來て、佐五平、小
　屋の側へ行く。
佐五　この土手の小屋にどぶさる非人め、これへ出をら
　う。
　ト大きな聲にて云ふ。
左門　コリヤ〳〵、身共が下部ぢや。其やうに云はずと、
　樣子を聞かつしやれ。
佐五　合點でござりまする……この土手に居る非人のこな
　たは、佐々木官次郎さまの御家來であらうな。
　ト小屋を覗き
　顏は見えぬと領づくからは、お尋ねなさるゝ繁藏どので
　ござりませう。
左門　ドレ〳〵、繁藏なら身共が
　ト皆々土手へ上がり、非人小屋の菰垂れを上げる。
ゆき　繁藏どの、ちやつと出やしやんせ。官次郎どのぢや
　わいの。
くら　何か病氣の體に見ゆるが、術ないかや。
左門　ものを云はぬか……とは云へ、もしや人違ひか。
内匠　イヤ、おれだワ。
　ト顏を上げる。
皆々　ヤ、なんと。
　ト提灯にて顏を見て、恟りする。
内匠　京極内匠だワ。
皆々　ヤア。
左門　すりや、最前身が方へ參り、人を殺せし報いによつ
　て、人面疔の業病、今をも知れぬ病氣の樣子。牛王吉光
　陽の一卷、渡した上にて敵討の、勝負も勝手次第にと、
　病に發起の身の懺悔。
ゆき　誤まり入つたる最前の仕儀、せめてその身を助ける
　爲、深草の極樂寺の裏手にて、お念佛を聞いて往生待つ
　ばかりと云うたゆゑ
くら　善に強きは惡にもと、さても殊勝なものかなと、思
　へど眼前夫の敵、又この小栗栖は敵を覘ふ非人あり、そ
　れは慥かに官次郎どのゝ下部。
左門　繁藏ならんと、共に敵討いたさんと、尋ね參つたこ

の所に、住ふ非人は矢ッ張り京極。
内匠　内匠だが、恟りか。
左門　すりや、人面疔の業病にて、叶はぬ躄と申せしは
内匠　嘘だワ。
皆々　エヽヽヽヽ。
ト恟りする。
内匠　うぬらを爰へ誘き出し、惚れて居るお雪をば、女房
にしよう爲ぢやわい。
ト非人小屋よりズッと立つて出る。左門、思ひ入れあ
つて
左門　幸ひなる内匠が息災。吉岡が兩家の者、揃ひし上は
尋常に
皆々　サア、勝負々々。
トお雪、刀を拔く。
内匠　如何にも勝負してくれう。足場の惡きこの堤。それ
なる平場へ。
左門　サア。
ト内匠、非人小屋より刀を取出す。
皆々　サア／＼／＼。
ト平舞臺へ下りて、内匠、双方へ心を配る。三人、チ
リチリと付けて來る。内匠、水船へポンと飛び込む。
皆々驚ろき
皆々　ヤア。
左門　南無三、内匠め。
トきつとなる。この途端に、川柳の茂みより左司馬、
玉椿の茂みより鬼柳、竹槍にて左門お倉を突く。「ア
ア」と苦しむ。一つ鉦、もの凄き合ひ方。佐五平、大
きに恟りして、うろたへて玉椿の茂みへ隱れる。お雪
驚ろくを、鬼柳、槍を突き捨てにして、お雪を引ッ抱
へ、
鬼柳　サア、内匠どの、女房にする。來い。
ト引立てるを、刀に拂ふ立廻り。内匠、水船より上が
つて來て、着物の水を絞り／＼
内匠　二人の者、大儀であつた。
鬼柳　こなたの惚れて居る此お雪、京に居る事を聞き出し
て、鞠屋の與六に入込ませ、その上北野で生醉ひ仕掛
け。
左司　貳拾兩を強請り取り、何もかも思ふ壺。
内匠　その代り、その貳拾兩が骨折り賃、わいらはこの場
を。

初演の繪番附

鬼柳 でも、止めをば。
内匠 大事ない。此奴等は後でおれが嬲り殺し。
鬼左 そんなら内匠どの
内匠 行け〳〵。
ト左司馬、鬼柳、下座へ入る。内匠、嫌がるお雪を捕へる。お倉苦しみ
官倉 卑怯な内匠、騙し討とは。
内匠 卑怯ぢや。これが武士の計り事ぢや。
左門 心得ぬは、人面疔にて病み労れくら脈も通はず病氣の體
ゆき お醫者さんが御覽じたのに、病の僞はりとは。
左門 但しあの水の谷辨庵も、敵の廻し者か。
内に その醫者坊主は、この小屋に。
ト非人小屋より繩付きの辨庵を引摺り出す。
三人 ヤア、水の谷さまは。
辨庵 身動きならぬこの繩目。
内匠 最前絶脈して病氣の體を、誠と心得、油斷をさせ、車を曳いて深草へと、思ふに相違のこの小栗栖、躄と云つたも人面疔も、皆大噓。お雪親子、官次郎に、心をゆるさせこの所へ引出し、返り討したその上で、お雪どのを女房にせうと、目算違らず話して縛り繩。なんとマア

このおれは、恐ろしい内匠ぢやなア。
くら でも心得ぬ、脈まで通はぬ病氣の體は。
内匠 その正體はこの通り。
ト兩肌を脱ぐ。身體中繩にて括り、白木綿にて一卷を腹に括りつけある。
三人 五體を縛りしその繩は。
内匠 斯くの如く經絡を縛り留めたれば、血氣通はぬ絶脈に、誠の病苦と心得て、油斷させしは身が計略。この藪醫者が脈ぐらゐで、例へ扁鵲耆婆たりとも、この計らひには及ぶまい。
ト云ひ〳〵脈と體の繩をほどき、膝を包んだ裂れを取つて
あと方もない人面疔、京極内匠は息災延命。無病無疵の體を見よ。なんと膽が潰れたか。
三人 エ、、、、、。
ト無念のこなし。辨庵うろつくを
内匠 マア、此奴めは血祭りに。
ト辨庵を拔打ちに切つて捨てる。お倉、切りかけるをこれも切つて捨てる。これにてお雪切つて行くを、内

匠引ッ捕へ
エヽ、邪魔立てすると。

ト髑髏を括りし繩にてお雪を縛り、額をヂッと見て思ひ入れ。此うち左門、道祖神の幟を取つて疵口を括る。佐五平、始終玉椿の影より顔を出したり引込めたり、アル／＼慄へ／＼怖がり居る。よき程に左門、内匠に切つて行く。立廻り。キッと見得あつて本雨を降らす双盤、少しタテあつて、土手より立廻りにて左門、樋の口の落ち口へ落ちる。此うちお雪、いろ／＼焦る。内匠、樋の口を明ける。本水にて水船へ落ちる。これにて左門、本水にあばかれ苦しむ。内匠、土手より下りて來て、お雪の側へ寄り、繩を解いて

官次郎はあの通り。これからわれを女房にする。

ト抱きつかうとする。此うち左門、やう／＼上がり來り、内匠へ切りかけようとするを、内匠「エヽ、」と左門を一栁切つて、お雪に抱きつく。

内匠　サア、抱かれて寐るか。
ゆき　否ぢや／＼。

ト突き退けるを、また抱きつく。

エヽ、穢らはしい。

ト突き退ける。内匠キッとなつて

内匠　うぬ、もう人の花と詠めさゝうより、いつその事に。
ゆき　エヽ、、。

ト驚ろく。

内匠　惚れて居れども、未練はないわい。

トお雪を一栁切る。苦しむ。

とは云へ、あんまり惜しいもの

ト抱き付いて口を吸ふ。左門、苦しみ

内匠　斯くやみ／＼と騙かられ、吉岡兩家の者どもは、如何なる武運に盡き果したか
ゆき　官次郎さま。
雪官　エヽ、口惜しい。

ト此うち内匠、小屋より着替への着物を出して來る。

ゆき　とても長らへ居られぬ深手。
内匠　未來の夫婦は、勝手にしろ。

ト着物を着替へてしまひ

内匠が刀の引導で、お陸とお照が淨土と法華、これが南無妙法蓮陀佛、一味齋と民右衛門が、禪宗で南無阿彌と
つくり往生、醫者とお倉は倶舍淨實、官次郎が苦しみは

御門徒。忝ない〳〵と、長念佛の死損なひ。眞實惚れた
眞言のお雪、おんあぼぎやアとくたばれ。
トお雪の止めを刺す。忍び三重、時の鐘。
これが牛王吉光の切れ味。
トよろしく左門を切り仆し、止めを刺して
八宗けん戦、有り難からうが。
トこなしあつて
慥かに一人折助めが。後日の妨げ、どこぞに隱れて。
トあたりへ思ひ入れ。佐五平、玉椿の垣より顏を出して、燈籠の火を吹き消す。時の鐘。合ひ方にて、內匠刀にてそこらを毆り廻る。佐五平、玉椿の蔭よりソロソロ出て、二重舞臺へ上がり、立ち木の中へ隱れる。內匠、毆り〳〵土手の二重舞臺へ上がり、そこらを毆り、松の木椿の枝を切り落す。佐五平、土手より辷り落ちる。內匠、下りて來る。佐五平、怖々下の方の川柳の茂みへ隱れる。內匠、玉椿の垣を切りちらし、突いて廻り、トゞ下の川柳の茂みへ刀を突き込む。危ふく佐五平、此方へ拔け、內匠、川柳を切つても切れぬゆゑ、滯りながら思ひ入れ。佐五平、又元へ隱れる。內匠、思ひ入れあつて

內匠　ハテ心得ぬ。下部の隱るゝ木立木蔭を、切り拂ふに行くへ知れず、榎松の木、玉椿、皆切り拂ふに切れる落ち枝。名にし刃は牛王吉光、同じ樹木の其うちに、川に聳えし岸の柳、枝垂れに依つて名作にも、容易く切れぬは大風雪も、風にならうてしな枝よく、物を保ちて大丈夫。我れもこれより變名して、京極內匠を元の氏、佐々木岸柳と、岸の柳を名に呼んで、一先づ浮世を忍んで立身。
ト刀を納め、花道へかゝる。此うち佐五平、隱れ所に困り、水船へ忍び込み、隱れ居る。內匠、花道にて
どうで敵と覘ふは必定。併し、吉岡兩家の奴等は、我が身ながらも恐ろしい程殺したぞ。カウツ、先づ始まりが腰元お陸。
ト指を折り
刀次手にお照も共に、これで二人。
ト指を折り
一味齋と民右衞門。
ト一つ〳〵指を折る。
一度に四人、また小栗栖で阿母のお倉。
ト五本指を折り

數ならねども藪醫者一人。

ト また指を折り

寶のある二才が官次郎。

ト指を折り

可愛さ餘つてお宰もバッサリ。

ト指を八本折つて

殺した〳〵。〆めて八人。

ト思ひ入れ。チョンと木の頭。佐五平、水鉢より顔を出す。

ム、、。ハ、、、、。

ト笑ふ。よろしく。

ト幕の外、時の鐘にて、內匠、向うへ入る。　ひやうし幕

五幕目

豐前國德入寺の場
杉坂越辻堂の場

役名　月本武者之助。一味齋娘、お園。駕籠舁き、才六。同、庄六。若黨、佐五平。下部、槊藏。官次郎一子、粂松。馬士、洞八。坊主、新了。杣、李右衛門、同、與喜藏。春風藤藏。お六母、お熊。毛谷村のお六。杣、斧右衛門。佐々木岸柳實ハ京極內匠。

本舞臺、正面石垣、草土手の上に誂らへの玉垣。上の方に板松の並木、この側に下馬札。下の大杉、大木の松の立ち木、側へ小杭に德入寺領と記しあり、すべて豐前國禿崎の大寺門前のかゝりよろしく、幕の內より庄六、才六、雲助の形にて辻駕籠の側に煙草のんで居る。辻打ちにて幕明く。

ト東西の花道、臆病口より、物參り、旅人の仕出し大勢出て來る。

兩人　ハイ、駕籠〳〵、駕籠やらうか。ハイ駕籠〳〵。

ト駕籠を呼んで居る。奧より旅人出て來る。

庄六　親方、安目で早駕までどうだね。相談は出來まいかね。

ト附いて來る。

旅人　ナニ駕籠だ。おらア乘るのぢやアない、乘せる氣だ。片棒行からが、酒手ではなるまいか。

庄六　アハ、、。じやら〳〵となんだア。乘らすばよしサ。

てうす事はごんせぬ。

才六　庄六々々、打ッちやつて置きやな。どうで相手になるのぢやアない。

庄六　それだと云つて、見やな。氣の利いた風で、てうしやアがる。

才六　ハテ、いゝわえ。見掛け倒しの旅烏だ。錢が無くば無いと云へばいゝに。

旅人　コレ、安くしやアがるな。錢がなくても金があるワ。

才六　それも雪駄の金だらう。

旅人　おきやアがれ、野呂馬め。

才六　野呂馬で五十三次を、九州の果へ流れて來て、脛一本で食はれるものか。

庄六　オイ、おれよりわれが氣が長い。相手になるな。打ッちやつて置け。

才六　それでもあんまりだ。かつたいめ。

旅人　おれがかつたいなら、うぬらアはッつけだ。

才六　エヽ、べら坊め、腹がへるワ。早く行け。

旅人　いらぬお世話だ。定宿があるワ。

才六　木賃ぢやア泊めない。べら坊やい。

旅人　うぬ等がべら坊だ。才六やい。

才六　似た山やい。うんつくやい。

ト兩方、惡態を吐きながら、旅人捨ぜりふにて花道へ入る。

庄六　ハヽヽヽ、面白い野郎だ。コレ、つけが惡いぢやアないか。門番のやす松に酒手を借りて、極めちやアどうだ。

才六　さうすべい〳〵。片棒取りや松坂へ行きやア、やみげんこぢやアして來るわな。

ト矢張り辻打ちにて、庄六、才六、駕籠を舁いて下座へ入る。と三味線入り大拍子の鳴り物になり、花道より武者之助、若黨二人、草履取り、鎗、挾み箱を持たせ、出て來る。これに權門駕籠一挺、この後に附き出て來て

武者　コリヤ、家來ども、寺中へ參つて、廟參の案內いたせ。

侍ひ　ハッ、畏まつてござりまする。

ト先へ駈け拔けて下座へ入る。武者之助、皆々本舞臺へ來て

武者　多聞を憚る忍びの廟參。乘り物立てい。

皆々　ハツ。

ト合ひ方になり、乘り物を下ろす。武者之助、挾み箱に腰をかけ、乘り物よりお園、誂らへの腰元の形にて香包みと珠數を持ち出て

その　憚り多い武者之助さま、御同門のよしみとお見捨てなう、だん／＼の御介抱、有り難う存じまする。

武者　誠に下世話にも申す、水の流れと人の行く末。名にし負ふ吉岡一味齋の息女、武者之助づれの腰元はしたと、呼び呼ばるゝも時世の盛衰。さりながら、御親父の横死、兄御官次郎の落命。蔭ながら聞く武者之助が殘念哀れ復讐の手段もがなと、心には思へど、其許の行くへ何國と定かならざれば、年回の佛事回向の程も覺束なく、同門と申し、殊更神道八重垣の一流については、元祖たる吉岡一味齋、當寺は即ち武者之助が菩提所、一味齋の石碑造立なし、余が門弟を始め、諸國に武術修行の者、香花の的に營み建てしも武者之助ゝ斯くと聞き傳へば一味齋の血筋、其許を始め、もし復讐の志しあらは、尋ね來らんと某が胸中、案に違はず月本が屋敷へ、奉公望む腰元の園、忍びの廟參。必らずともに家來ども、この事沙汰いたすな。

皆々　委細畏まつてござりまする。

その　お心深い武者之助さま、身の上申し上げまするも、面目ならはござりますれど、兄官次郎他家へ出まして、女子のわたしに家督の噂。所詮存らへ居りましては、吉岡の家の爲ならずと、淺い女子の心狂ひ、よしない思案で家出を致し、その後にての家の騷動。他國で父の横死を聞き、又ぞろや兄官次郎、敵の爲に返り討の、悲しい便りに詮方なく、叶はぬまでも心の願ひ、逢せんものと所々方々、流浪のうちにお國へ參り、樣子を承りまするところ、當寺に於て一味齋の、墓所へまで御供。月本さまのお情を、蒙ひましての身の願ひ。

武者　氣遣ひあるな。武門の意地、時節もあらば、また何卒よい思案のあるまいものでもない。只今にては雲を當敵、京極が行くへ聞き出すまで。

その　矢張りあなたのお腰元。御用に立ちまするが、却つてわたしが御奉公。

武者　ハテ、兎も角も臨機應變。必らず身の上大切に、時節を待つが親父へ孝行。

その　エヽ、有り難うござりまする。これでわたしが

武者　コリヤ、まだ安堵の禮は早い。千辛萬苦の月日を尋

ね、憂い辛い目を辛抱せねば。

その　そりや、御教訓までもない、及ばずながら女子の一念。

武者　菜摘み水汲む御佛の、修行にならぬ今日の佛參。

その　念珠に恨みの數積り、香の煙りは修羅の炎。

武者　ハテ、敵だに討ち果せば、名は隱れなき孝義双烈。

その　それもあなたの

武者　イヤサ、密かに時節を待ちやれ。

ト兩人思ひ入れ。合ひ方になり、下座より以前の若黨先に黒衣の所化、同宿一人附き出て來りて

所化　これは月本武者之助さま、只今御廟參の御案内承りまして、お迎ひに參上仕つてござりまする。

武者　御叮嚀の儀。今日は佛事萬端、何れも方、御苦勞に存じまする。

所化　これは／＼御挨拶。分けて拙僧始め、同屬どもへもお志し、過分に仰せられまして、忝なう存じまする。

武者　イヤモウ、ほんの心ばかり。兼ねて御案内申す通り、表立たぬ忍びの廟參にござれば、その段賴み存じまする。

所化　御案内の趣き、承知仕つてござりまする。最早修行も始まりますれば、イザ、御參詣下されませう。

武者　然らばそれへ。コリヤ、お園、御寺内は最早心慮及ばぬ。矢張り此まゝ。

その　左樣ならば、マアお先へ。

所化　イザ／＼お越しなされませう。

武者　供の者、皆參れ。

ト開帳太鼓の鳴り物になり、所化先へ案内して、武者之助、お園、供廻り殘し、同宿これに附いて下座へ入る。直ぐにこの鳴り物にて花道より岸柳、浪人の拵らへにて、お熊婆を脊中に負うて出て來り

岸柳　母者人、爰はもう禿崎の德入寺、負はれて居ても辛どからう。あの松原で一休み。コレ、目さへ不自由になくば、見晴らした好い山川の風景。好い氣晴らしでござるになア。

ト鳴り物にて本舞臺へ來る。この時下座より庄六、オ六、駕籠を舁き出て來て、岸柳に行き當る。

これは不調法な。見さつしやる通りの足弱連れ。行かさつしやれ／＼。

ト行き過ぎる。

庄六　イヤ、彼奴は何であらう。横そつぽうを重い柄頭で

どやされて、行かさつしやいも氣が強い、

オ六　コレ、お侍ひ、待たつしやい。棒組みの面へ疵が附いた。

庄六　コレナア、おさぶ。なんぼこなたが二本差して、侍ひ振つても、おいらも人だ、米食ふ虫だわな。

オ六　雲助こそして居れ、藝はない。しら几帳面の人足だ。男の面へ疵が附いて、行かしやれでは濟まないよ。

ト岸柳を引き戻し、兩方より突ッかゝる。岸柳、思ひ入れあつて

岸柳　成る程、不時の拙者が過ち。其許方の腹立ちもあらうが、見さつしやる通り、不眼の上に歩行叶はぬ足弱を連れて、心急く往來の過ち。其方にも又、斯程に廣い大道を除けて、往來いたされぬが誤まり。互ひの事ぢや、料簡召され。

庄六　ナニ、料簡もすさまじい。コレ、鼻柱がグワンと云つて、のめる張合ひに顏が砂だらけだ。野郎め、三番叟ぢやあるまいし、色の黒い尉にしやアがつた。

オ六　オヽ、足の泥から拭つてもらはう。

ト庄六、岸柳が胸倉を取る。オ六、尻まくりして、岸柳が鼻の先へ泥足を踏み出す。岸柳、ヂツと思ひ入れあつて

岸柳　こりや尤も。麁相とは申せど、其許方の面體を汚し、脛に泥を踏みつけられ、拭へとあるは理の當然。然らば兎も角も。先づ〳〵、靜かに召され〳〵。

ト兩人を突き放し、よき所を見て菱を下ろし

母者人、氣遣ひな事ぢやござらぬ。ちつとのうち、これにござれ……さて〳〵、思はぬ不調法。お足を拭ひませう。

ト鼻紙を出して、オ六が足を拭く。オ六、庄六、顏見合せ

オ六　庄六、なんと張合ひのない、算段の惡い奴等だ。ハア。

庄六　斯う云ふのろい氣のきかない才六に、マア、いつそ此方ゝ膏藥代もぶち負けて、それで料簡してやらう。

岸柳　成る程、それも御尤も。金錢で濟むお詫びならば、如何やうとも致したいが、見さつしやる通り、尾羽打枯らし貯へもなき瘠せ浪人、卒爾ながら物取りの、こりや貴樣達、お目違ひぢや。

兩人　なんだ物取りだ。なんでおいらが物取りだ。

岸柳　物取りでなくば御料簡。

才六　料簡否だ。踏みのめされて。

兩人　物取りとは、なんで吐かすのだ。

岸柳　こりやモウうぬら料簡が。

兩人　ならないと云つて、どうするのだ。

ト兩方よりかゝるを、岸柳、立廻りにて、兩人を取つて投げ、起き上がつてかゝるを、直ぐに引拔いて胸打ちに兩人を打ち据ゑ

岸柳　浪人と侮り、無禮の上に足弱を見込み騙り事。腕が廻らば命がないぞ。

トきつとなつて打ち据ゑる。兩人、這々に起き上がつて

庄六　アヽ、あやまつた。御免。

才六　ほんの酒手の出來心、雲助の株だと料簡して

庄六　命ばかりはお助けなさい。

兩人　ヤレ人殺し。逃げろ〳〵。

ト庄六、才六、うろたへながら、下の大柱外へ逃げて入る。岸柳、追ひかけ行かうとして

岸柳　イヤ〳〵、よしなき刀汚し。母者人のさぞ待ち兼ね。

ト刀を納め、お熊が側へ來て

案じをかけぬは不眼の幸ひ。母者人、サア、負はれさつしやれ。

トまたお熊を脊に負ひ

粒々辛苦の米穀に、彼奴等も生きる同じ人間。ハテ、穀潰しどもではある。

ト編笠を被り行かうとする。この時下座より武者之助、先に若黨、中間、附き出て來て

武者　イヤ御浪人、暫らく。

ト呼び留める。

岸柳　此方の儀でござるか。

武者　如何にも。拙者最前より佛參の歸るさ、參り合せ、始終あれにて窺ひ見るに、下郎どもが雜言耳にもかけず、御神妙の振舞ひ、殊更武術、天晴れの御手練、誠の大丈夫とは貴殿の事、近頃頼もしう存じまする。

岸柳　これは〳〵、存じ寄らぬお歴々の御賞美。法外の奴輩、切り捨てんとは存じましたれども、御覽の如く、年老い朽ちた母一人、彼れこれを存じて、無念の仕合せ、云ひ甲斐なき者とお蔑み。近頃恥かしう存じまする。

武者　イヤ、孝行は萬善の源。近頃御奇特に存じまする。

若黨　コリヤ、浪人め、お旦那が御挨拶なさるゝに、編笠をも取らぬ慮外者。

大勢　キリ〳〵編笠を取り居らう。

岸柳　これは御家來衆、御尤ものお咎めでござるが、奉公望む自分でござるゆゑ、相應の有りつきまでは、尾羽打枯らせしこの姿。人に顔を見知られともなき身の願ひ。幾重にも御容赦下されい。

武者　如何にも。恥を思はれてのお愼み、御尤もに存じます。

岸柳　最前よりの御樣子、誠に仁義あるお方と存じますれば、折を見合せ今日のお禮、又は自分をお頼み申す儀もござれば、何卒御姓名をお聞かせなされて下さりませ。

武者　これは〳〵、お尋ねにあづかり、名乘りまするも近頃烏滸がましうはござれども、また包み隱しまする謂れもござらぬ。某は當國の産ではござらぬ。小倉の藩中、月本武者之助と申す者でござる。

ト岸柳、これを聞いて驚ろいたる思ひ入れあつて

岸柳　すりや其許が、月本武者之助どのとな。

武者　如何にも。

岸柳　アノ其許が。ハ、ハア、。

ト愁傷の體。武者之助、思ひ入れあつて

武者　ムウ、武者之助と申す手前の姓名を聞かれ、心濟まぬ樣子、合點參らぬ。なんぞ樣子ばしござつてかな。

岸柳　御推量の通り、貴殿が武者之助どのならば、ちと折入つてお願ひ申さねばならぬ仕儀。他の聞えを憚りますれば、何卒御家來衆を。

ト武者之助、思ひ入れあつて

武者　ムウ。イヤナニ家來ども、其方達は神主方へ參り、追ツつけ武者之助參詣仕ると、案内いたし、直さまあの方に待ち合せよ、必らずこれへ參るまいぞ。

若黨　畏まりました。

武者　行け〳〵。

供皆　ハア、。

ト供廻り皆々下座へ入る。武者之助、思ひ入れあつて

武者　サア、家來を退けましてござる。何事もお心措きなう。

岸柳　お志しの程、先づ以て忝なう存じまする。

ト岸柳、これにて編笠を取り、思ひ入れあつて

武者　ついにお目にかゝつた事ござらねば、お近附きでござらうやうもなし。先づ其許の御家名は。

岸柳　拙者儀は、佐々木岸柳と申しまする者でござる。

武者　ナニ、佐々木岸柳。

ト思ひ入れあつて

岸柳　率爾ながら、がんりうと書きまするその文字は。

武者　岸の柳と書きまする。

岸柳　ムウ、岸の柳、がんりう。

　トこなし。岸柳、思ひ入れあつて

岸柳　武者之助どの、ハテ、異な事の御不審でござるな。

武者　如何にも。拙者が古朋輩に、丁度貴殿と同名、佐々木がんりうと申す者ござつたゆゑ、世間には同じ姓名もあるものと存じ、承つてござるが、拙者古朋輩のがんりうは、巖の流と書きましたて。

岸柳　すりや、貴殿の古朋輩の、がんりうどのは巖の流。

武者　おてまへのがんりうは岸の柳。

岸柳　同じ稱への

武者　姓名も

兩人　あればあるものでござる。ハヽヽヽ。

岸柳　して、その巖流どのと申せしは。

武者　恐らく九州に於ての劍術の達人でござつたが、惜しむらくは三ケ年以前、古人に相成りましてござる。

岸柳　それは殘念な儀でござつたな。

武者　して、おてまへの御生國は。

　ト岸柳、思ひ入れあつて

岸柳　サア、手前生國は……上方、都の近邊、近江源氏、それ〳〵、江州の者でござる。

　ト武者之助、思ひ入れあつて

武者　成る程、お詞で思ひ出しました。江州に佐々木氏を名乘る、劍術の達人ありと承り及んでござるが、お目にかゝるは今が始めて。ハテ、岸柳どのでござつたよな。

岸柳　面目もなき御對面を申しまする。誠に、天に不時の風雨あり、人に不時の災ひありと、云ひ傳へまするも只今の身の上、讒者の佞辯にてかゝる浪々。いつ花の咲く時節もと、思ひ暮らしまするところ、おてまへ樣の御主人、即ち小倉の御城主立浪家より、矢島帶刀どのゝ御推擧にて、拙者を召抱へられたいとの御挨拶なれども、誰れござらう小倉には、月本どの、其許と申す劍術の達人御座なさるゝに、手前劍術を申し立て、御奉公に出まするも、何とやららしう存じまするゆゑ、貴殿へのお願ひ、何卒御門弟になされ下されますまいか。弟子となりますれば、御奉公に出ましたも同然と申すもの。この儀偏へに、お聞き屆け下さりませうや。

武者　ハレヤレ、其許が佐々木岸柳どのでござつたよな。

九州に一人、上方に一人、同じ名前の劍術の達人、兼ねて聞き及んだる岸柳どの、時節もあらば參會仕り、兵法軍術の御相談をも仕りたいと存じ居りましたるところなれば、幸ひの分別で、手前も大慶に存じまする。然らば、なんぼお賴みでござるにもせよ、貴殿を弟子などゝは、思ひ寄らぬ儀でござる。鳥なき里の蝙蝠、及ばぬ武藝も、家中の指南ではござらぬ。兵法の相談相手に罷りなりまする程の事なりや、貴殿御奉公に出さつしやれてござらうならば、いよ〳〵家中の勵みとも相成る儀。こりや、まさかの時、主人のお役に立つと申すものでござる。及ばずながら共々、御推擧申さう。私しへの御遠慮ならば、決してそれに及ばず。御奉公にお出で下されい。こりや武者之助、分けて貴殿へのお願ひでござる。

岸柳　これは結構な御挨拶、驚ろき入りましてござる。御門弟にさへなされ下されうならば、成る程、御奉公に出まするでござらう。

武者　イヤ〳〵、弟子と申す儀は御容赦下されい。

岸柳　イヤ、どうござりませうとも。

武者　自他ともその儀は、お免し下されい。岸柳どの程の人、武者之助が弟子と申しては、他の聞え、人が笑ひまする。

岸柳　然らば、今一つお願ひがござるが、お聞き屆け下されうか。

武者　如何やうな儀なりとも、承るでござりませう。

岸柳　先づ以て忝なきお詞、御覽の如く一人のこの母、不眼の上に、百日と限りある膈の病。せめて一日半日も、安樂に暮らさせたく、奉公望めど、心ばかり、詮方盡きて折に幸ひ、承れば小倉の御城下には、國主よりの高札、月本武者之助に打勝ちなば、五百石の知行宛て行はんとの儀。聞くに心は飛び立てども、名にし負ふ武者之助どの、拙者とても一流は立つれども、なか〳〵及ばぬ未熟の業、とあつて此まゝ打過しなば、いつを春とて母人の、笑ひ顏見る時節もなし。兎やせん角やと思案の終り。所詮義を捨て耻を捨て、勝負に負けて下さるやう、無體の賴みせんものと、思ひ詰めしも母の爲とは云ひながら、武道に外れたこの願ひ。弓矢神の冥加にも、盡き果てん腰拔け武士、人でなしとお蔑しみも、存じながら申ゆゑなれば、ちつともいとはぬ。推量あつて右の段々、お聞き入れ下さらば、御恩は死んでも忘れ申さぬ。限りある老母が命、見立てし後は國主の御前、今の仔細を申し上

げ、腹切つて御耻辱は、その時雪ぎ申すでござらう。頭を土につけまする。

ト兩手を突いて平伏する。武者之助、思ひ入れあつて

武者　ホ、ウ、天晴れ〳〵、感心いたした。耻を捨てゝの御孝心、それでこそ誠の武士、如何にもお賴み聞き屆けました。實に立合ひましたところでからが、流石の岸柳どのに、極めて打勝ちまする手練は覺束なうござれども、お賴みとござらば、成る程、心得ましてござる。御前に於て立合ひの節、滿座の中で思ふ樣打たれませう。ハレ、何事かと存じたれば、思ひも寄らぬ事のお賴みでござつたな。

岸柳　すりや、拙者に負けさつしやつて下さりまするぢやまで。

武者　何がさて、其許に打負けましたと申してからが、これまで手練いたしたる、兵法、軍術が、俄に下るものでもござらぬ。其許の有りつきは、御孝心の爲なれば、成る程、勝負に打負けませう。

岸柳　エ、、忘れは置かぬ御恩の程、この身に餘る喜ひ。コレコレ、母人、共々にお禮仰しやれ〳〵。

トお熊を捕へ、よろしく辭儀をさする事あつて

エ、、忝なう存じまする。

ト思ひ入れ。

家來　ハツ、お迎ひ。

ト以前の同勢、お園を乘せたる乘り物にて出て來る。

武者　然らば萬事は約諾の砌り、それまでは御老母の介抱が專一。

ト行きさうにする。岸柳、思ひ入れあつて

岸柳　イヤナニ、月本氏、後日に及んで岸柳が、賴んだに依つてなどゝ仰せらるゝ儀は。

武者　御念に及ばぬ。月本武者之助、武士でござる。口外いたさぬと申す誓言。

ト小柄にて金打する。

岸柳　重々厚き御仁心、お禮は重ねて。

武者　再會は御前に於て、岸柳どの。

岸柳　武者之助どの。

武者　お別れ申す。

ト唄になり、武者之助、先にお園が乘り物、これに附いて供廻り殘らず花道へ入る。岸柳、ニツコリ思ひ入れ。下の柱外より才六、庄六出て、婆もあたりを見廻し

くま　コリヤ和子、お前の願ひの通り。
庄才　まんまと首尾よく、月本めを。
岸柳　コリヤ。
ト思ひ入れ、三人よろしく口を塞ぐ。ゴン／＼にて道具廻る。
本舞臺、三間の間、向う淺黄幕。板松。上の方に寄せて藁葺きの妙見堂、この後より折り廻りの茨垣、石塔、並び立てあり、下の方、稲村、松の立ち木、すべて豊前の國杉坂越、葬所の體、道具とまる。
ト向うより坊主新了、幟を持ち、建立をして出る。後より二人、題目太鼓を持ち出る。後より杢右衛門、與喜藏、杣の形にて鋸を差し、木を脊負ひ、出て來る、始終てんつゝ。
新了　金燈籠の建立、多少には限りませぬ、お志しを願ひます。
皆々　南無妙法蓮華經。
杢右　徳入寺の坊様、日が長いて、賽錢も餘計であらうの。
新了　オヽ、杣の杢右衛門どの、與喜藏、山戻りか。
與喜　一精出して、また登るのだが、この間から杣仲間の正直者、斧右衛門の阿母が、内に居ぬといの。
杢右　それで娘のお六が、あの孝行者ゆゑ、どうぞ内へ歸るやうにと、いろ／＼と云うて居るげな。
新了　イヤ、斧右衛門の阿母は、あの杉坂の妙見堂に、七日程前から引越し切りにして居らるゝ。また代々講の世話も、大方身に沁みてするやうになり、むづかしい阿母も、だん／＼先が近寄るに依つて、その筈でもあらう。
ト矢張りてんつゝにて、本舞臺へ來る。ト下座より、お熊、出て來て
くま　杣の杢右衛門、山戻りおやの。こなた様達の精出すのを見るにつけて、死んだ佛を思ひ出す事ぢやわいの。
新了　そりやその筈の事、杣の仲間でも、人の知つた斧右衛門、去年の秋死なれた後、今の斧右衛門は、兎角見るから、かいしよな者ぢやて。
くま　さればいの。アノ今の斧右衛門は、娘のお六が七年以前に、どこやらから連れて戻つて、間もなう親仁どのは死んだゆゑ、せう事なしに彼奴を、二代目の斧右衛門と、披露目はしてもあの通りの極道。山稼ぎの荒仕事はよう出來ず、杣仲間へ入りながら、雜役馬の手綱を引いて、のら／＼と日を送る、彼奴が面を見るも、いま／＼

しいに依つて、この間から内を出て、このお堂へ通夜同然に、引越して來て居れば、却つて氣樂でようござるわいの。

杢右　イヤモウ、村中でむづかしやと噂する、斧右衞門の阿母に、なか〳〵今の斧右衞門は氣に入るまい。

與喜　それに又、實の娘のあのお六ヵ郎は、又とない孝行者。何も娘の爲と思うて、腹を立てぬがよいぞや。

くま　なんのいの、斯うして居るうちもお六めは、毎日毎日わしが喰ひ物を持ち運び、內へ戻れと詫び言し居れど、モウ〳〵、あの聟めが面を見ると、何ぢやらムシヤ〳〵と、毛谷村へ戻る氣はないわいの。

與喜　アヽ、さりとては堅意地な婆樣ではある。

杢右　歸りとむない事ならば、勝手にするがよいわいの。

新丁　ドレ、わしは本堂の燈明、拵らへせねばならぬ。

杢右　おいらも、もう一精出さうかい。

くま　まそつと休んで行かしやれぬか。

二人　また戻りしなに寄りませう。

ト風の音になり、新丁、杢右衞門、與喜藏、上の方へ入る。お熊、そこら片附けながら、こなしあつて

くま　ヤレ〳〵、今日は旅人も多いかして、賽錢も思ひの外。併し、腹は餘ツぽど晝下がり。定めて彼のお人も

トちよつと辻堂へ思ひ入れ。

このお六は、もう來をる時分ぢやが。

トてんつゝになり、向うよりお六、田舍模樣、やつし女房の拵らへにて、重箱を風呂敷に包み、藥罐を提げて出て來る。後より洞八、馬士の拵らへにて、小さき樽を提げて干鱈を繩にてからげ、オヽイ〳〵と呼びかけながら出る。

洞八　コレ〳〵、毛谷村のお六さま、無性に急いで、どこへ行くのだ。

ろく　オヽ、洞八さん、見れば馬も引かずに、お前もどこへ行かしやんす。

洞八　イヤ、馬は坂の下り口へ繫いで置いたが、若い女房の只一人、山道を淋しからうと、連れになる氣で呼びかけた。

ろく　わたしは、あの杉坂の妙見堂まで、母樣の飯を持つて行くわいな。

洞八　それは幸ひ、おれも阿母に話しもある。そこまで一緒に。

ろく　そんなら洞八さん。

洞八　サア、行きなさい。

ト矢張りてんつゝにて本舞臺へ來る。お熊お六を見て

くま　コレお六、今まで何をして居たぞいやい。モウ〳〵、先刻にからひもじうて、腹が脊へ引ッ附いて、また向うへ出たわいやい。

ろく　サイナア、わたしもさう思うて、飯拵らへも氣を急いたれど、こちの人の斧右衛門どのが、駕籠を引いて行くと云はれます。あの病持ちの斧右衛門どのゆゑ

ト云ふを打消して

くま　ヤイ〳〵、又しても〳〵、あのならず者の斧右衛門が事ばかり、あのやうな健忘病にかゝつて、産みの母が飢ゑるのを、わりや何とも思はぬかい。

洞八　これはしたり阿母、そりやどうしたものだ。村中でもあの毛谷村のお六は、又とない孝行娘ぢやと人の噂。其やうに叱らぬがよい。又お六坊も、兎角阿母の氣に入らぬあの斧右衛門を大事にするは、折角盡す孝行の道が缺けると云ふもの。なんであらうと、阿母の云ふ事を聞いて、あの斧右衛門をばぼいまくつて、また新らしい達者な聟を持つたがよい。

ろく　エヽ、洞八さん、お前までが同じやうに、こちの人をぼい出せのなんのと、母樣の氣に入らいでも、わたしが氣に入つた男ぢや程に、外から構うて下さんすなえ。

洞八　ハテサテ、なんぼ構ふなと云つても、阿母に袂から口をかけて置いた。それでマア、早速ながら干鰈に濁酒。

ト前へ出す。お熊、樽を振つて見て

くま　ても氣の早い和郎ではある。何事も後にとつくりではない、この樽は、マヽ、預かつて置かうかい。

ト片附ける。お六、藥罐を撫でゝ

ろく　母樣、茶も煎うして持つて來たけれど、道が遠いで、ツイぬるうなつたわいなア。

ト重箱を出す。

くま　イヤモウ、時が延びたら、ひだるいも忘れたやうな。コリヤ、このなりに妙見樣のお堂へ入れて後の樂しみ。それまで德入寺で、茶を煎う沸かして參らう。

ト藥罐を持ち、立ち上がるを、お六、留めて

ろく　母樣、茶々はわたしが煎うして參じませう。

くま　イヤ、大事ない、構やるな。わしが自身持つて行く。

ろく　ア、モシ、何は兎もあれ、此やうに內を外にござつては、世間の聞え。わたしが切なさ。どうぞマア、內へお歸りなされて。

くま　否ぢや〳〵。あの斧右衛門がへちまふうちは、いつまでも内へは去なぬ。
ろく　そんなら矢ッ張りお前は爰に。
くま　妙見様と首ッ引。このお堂がおれが隠居所。
洞八　お六女郎、あの婆様の機嫌直さうと思ふなら、よう思案して見るがよい。
くま　なんのいの、おりや滅多に機嫌は直らぬ。
ろく　それぢやと云うて母様を、いつまでも爰に置きましては。
洞八　孝行娘の心では、覺束なかろ、ナウ婆様。
くま　イヤモ、婆様々〳〵と、耳やかましい。山時鳥、聞くもうるさい。
ろく　ハテマア母様、わたしが云ふ事を。
　ト留めるを振り拂ひ
くま　エヽ、親の心を子知らずではあるわい。
　ト唄になり、お熊、藥罐を提げ、こなしあつて下座へ入る。お六、こなしあつて
お六　ほんにマア、如何に堅意地ぢやと云うて、親の心を子知らずとは、あんまりな母様。これ程心を盡しても、娘の心を親のお前が、知らぬのぢやわいなア。
　トぢつと惘れてこなし。洞八、お六が側へ寄つて
洞八　コレお六、其やうに述懐云ふは尤もだが、それでは親に孝行か、亭主に孝行か譯が知れぬ。其やうにからかうが好きなら、この洞八が持ち合せの、胡瓜のかう〳〵味がよい。丸かぶりにして見る氣はないか。
　ト抱きつくを
ろく　エヽ、じやら〳〵と何をしなさんすぞいなア。
　ト洞八が手をしつかりと握る。洞八、手の痛むこなし。
洞八　アイタヽヽヽ、コレ、手が折れるやうだ。お六坊どうする〳〵。
ろく　ほんに、又しても〳〵、いらざるてんがうばつかりして、コレイナア、わしや斧右衛門どのと云ふ、歴とした男があるぞえ。なんぼこちの人が、あのやうな虚弱い生れつきぢやと云うて、女房のわしをよいかと思うて、アタ嫌らしい。常の女子ぢやと思うたら、ちつと當が違ふぞえ。今度から今のやうな事云はしやんすか。もうあやまつたか。サア、どうぢやぞいなア。
　ト手を握つてこなし。
洞八　アヽ、コレ〳〵、あやまつた〳〵。マア、爰を放してくれ〳〵。

ろく　ホヽヽ、口程にもない。そんなら今度から、今のやうな事云うたら、どうするか知らぬ程に、さう思うて居なさんせえ。

　ト洞八を突き放す。洞八、ヒヨロ〳〵となつて

洞八　イヤモウ、見掛けに寄らぬ力強。角力を取る氣で、こいつは一番、こじつけにやアならぬ。

　トまた抱きつきにかゝるを、お六、有り合ふ石の線香立を頭へかぶせ

ろく　エヽ、知らぬわいなア……ドリヤ、こちの人を尋ねて來うか。

　トてんつゝになり、下座へ入る。洞八、いろ〳〵探り廻つて

洞八　ヤア〳〵、目の中へ灰を入れた。とんだ目に合はしたな〳〵。

　トそこらを探り廻る。矢張りてんつゝにて、向うより斧右衞門、ぼつとせ、木綿やつしにて、馬の口綱を引いて出る。この馬に佐五平、旅の形、馬に乘り、居眠り出る。斧右衞門、馬を引き、直ぐに本舞臺へ來ると、洞八、探り廻つて、斧右衞門に抱きつく。

斧右　ヤア〳〵、壺中に人に抱きつくは誰れぢや。滅相な。

　ト洞八、恟りして

洞八　ヤア、さう云ふ聲は斧右衞門か。

　ト目を摺り赤め、斧右衞門を見る。

斧右　おぬしは誰れやろ……オヽ、馬方の洞八か。こりやなんの眞似ぢや。

洞八　イヤサ、こりや今……エヽ、おのれ、苛い目に合したなア。

斧右　何をおれが知つた事か。

洞八　エヽ、おのれ……イヤサ斧右衞門、馬を引いて來たかいやい。

斧右　イヤ、おりや今日は天氣もよし、うか〳〵して居やうより、ちつとなりと駄賃が手助けと、馬を引いて出て來たが、あれ見や旅人は馬の上でグウ〳〵高鼾、シタガ、マア、どこへ乘せて行く積りであつたか。洞八、われは知らぬか。

洞八　ハヽヽ、イヤハヤ、呆れて物が云はれぬ。自身に乘せた旅人の、行く先をさへ知らぬ呆氣。成る程、譫がせりせり吐かすも至極尤も。それが矢ッ張り、健忘の病とやらか。

斧右　イヤ、健忘が此やうに、兩方の手があるものかい。

洞八　ムウ、斯う見たところが、よい〳〵と云ふでもないが、をかしい病。その癖、立振舞ひはいつもの通り。ハテナア。

斧右　コレ、その振舞ひで思ひ出した。おりや今日、庄屋どのに振舞ひの馳走がある筈。それでわざ〳〵腹をへらして置いた。これから直ぐに行く程に、洞八、この馬はわれに頼む。おらが内へ引いて戻つてくれ。

ト云ひながら、綱を松の木へ括しつける。

洞八　イヤ、おれはまだ外に用がある。滅法界な。旅人を乘せたなり、とんだ事を云ふわえ。

斧右　ハテサテ、それでもおりや行きたいが。

ト留めるを

洞八　エヽ、大べら坊め。

ト振り放し、下座へ入る。合ひ方。

斧右　アヽ、コレ〳〵、洞八、待たんかいの。洞八々々、

ドウ〳〵〳〵。

ト大きな聲にて云ふ。これにて繋いたる馬、あちこち動く。佐五平、居眠り居て、バツタリ落ちる。斧右衞門、悔りして

ヤア〳〵、馬から落ちて落馬ぢやさうな。どこも痛みはしませぬか。

ト水を掬ひ飲ませて介抱する。

佐五　イヤ〳〵、居眠つて居た所爲か、思ひがけなう怪我もしませぬが、して、爰は何と云ふ所だな。

斧右　ハイ、爰は

ト忘れたる思ひ入れにて、いろ〳〵考へ

オヽ、それ〳〵、杉坂の峠でござります。

佐五　然らば、もう爰で下りても大事ないが、このあたりに、毛谷村と云ふ在所があるか。

斧右　ハイ、その毛谷村は、このあたり……オヽ、わしが在所でござります。

佐五　ムウ、その毛谷村と云ふ所に、以前は播磨の屋敷に奉公された、與五郎と云ふ仁が、今は何とやら云ふ山挊ぎをして居らるゝと云ふ事だが、與五郎と云ふ人は知らぬか。

斧右　成る程、それもどうやら聞いたやうなかい……オヽさうぢや〳〵。おれが名ぢや〳〵。

佐五　ナニ、おれが名とは。

斧右　イヤ、わしは去年の秋、大病を煩ひまして、それから物覺えが惡うなりまして、とんと忘れてしまひました。

その與五郎は、わたしが以前の名でござります。
佐五　ムウ。そんなら馬方のてまへが、以前の名は與五郎。
ト斧右衛門が顏をいろ〳〵見て
ムウ、イカサマ、餘程以前の事、身共も老眼。ハタと失念。成る程、吉岡の屋敷にて、古朋輩の中間與五郎、姿變れば見違ひ申した。
斧右　貝やうに仰しやる親仁樣は。
佐五　吉岡民右衛門の家來佐五平、こなたの行くへを尋ね居つた。
ト斧右衛門、だん〳〵思ひ出すこなしにて
斧右　ほんに左樣でござりました。吉岡の御家來佐五平どの、マア〳〵、御無事で何より重疊。して、お旦那民右衛門さまにも、御機嫌ようお入りなされますか。
佐五　ムウ、すりやおてまへは、國遠召されてその後は。
斧右　イヤモ、お國の便りはそれなりに、承つた事はござりませぬ。
佐五　與五郎どの、聞かつしやい。お旦那の民右衛門さまは、人手にかゝつてお果てなされました。
斧右　エ、。
ト大きに驚ろく。
佐五　まだその上にいろ〳〵樣々、話せば長い月日の經つ間、悔りする事だらけでござる。
斧右　ムウ。して、そのお旦那民右衛門さまを殺した奴、町人百姓ではよもござるまい。敵は何國の何者でござります。
佐五　敵と云ふは、微塵流の達人、京極内匠と云ふ奴。
斧右　ナニ、京極内匠と云ふ奴。
庄六　イヤ〳〵、料簡しないぞ〳〵。
トこれを聞いて斧右衛門、思ひ入れ。佐五平も向うを見て
佐五　何か騷がしい。あの人聲は。
斧右　爰は往還、木影へなりと參つてゆるりと。
佐五　まだ話す事だらけなれば
斧右　佐五平どの。
佐五　與五郎どの。
斧右　サア、斯うござりませ。
トてんつゝになり、斧右衛門、佐五平を連れ立ち、下座へ入る、ト矢張りてんつゝになり、向うより藤藏、鼠木綿やつし、旅虚無僧の形にて、ツカ〳〵と出て來る。後より庄六、才六、雲助にて息杖を持ち、やかま

しく云ひながら出る。花道にて

藤藏　これはしたり、お百姓達、所不自由の旅梵論字を、いかつがましく何とさつしやる。

才六　何とするもすさまじいわい。杉坂の下り口で、乾かしたあつた子供の小袖、なんでキヨロ／＼手をさつかけた。

庄六　おいら二人が駕籠に乘せた、旅人が忘れて置いたあの着物、紋所があるに依つて、取つて返すは知れた事。取られたらおいらが科。二人が身晴れに庄屋どのへ、引摺つて行く。

藤藏　ハテサテ、小袖についた紋所、ちつと見覺えのある紋所にゆゑ、立ち寄つて見たのは、此方の麁相。幾重にも料簡さつしやい。

二人　イヤ、料簡しないぞ／＼。

ト やかましく云ひながら本舞臺へ來る。ト下座よりお熊、藥罐を提げ出て、三人を見て

くま　これは騒がしい、何事ぢや。才六、庄六、見れば旅の虚無僧どのを捉へて、やかましう何云ふのぢや。

才六　斧右衛門の阿母か。

庄六　婆樣、捨てゝ置かつしやいな。

くま　イヽヤイノ、爰でガヤ／＼云うたら惡い。虚無僧どのも、どこへなりと行かしやれいの。

ト ふつと天蓋の內を覗き

ヤア、お前は。

藤藏　毛谷村のお熊婆

くま　春風藤藏さまぢやござりませぬか。

藤藏　京極內匠どのゝ乳母お熊。ハテ、よい所で逢ひ申した。

ト 天蓋を取る。庄六、才六、藤藏を見て

二人　ムウ、そんなら虚無僧どのは

くま　この婆が知る人ぢやわいの。

二人　それでは、こなたが隱まうて置く、彼のお人の。

くま　コレ……滅多な事を。

ト 押へる。合ひ方になり、思ひ入れあつて

誰れが聞いても一大事、わいら二人は日頃から、この婆があの事を、云ひつけて置く此方の懷。また彼のお人を敵と尋ねる奴があらばと、まさかの時の目代にして置く犬同然。春風さまもこの形は、和子を尋ねてござつたか。

藤藏　如何にもこの通り、內匠どのより密かの狀通。

ト頭陀袋より手紙を出して讀む。この時、後へ斧右衞門、出かけ聞いて居る。藤藏、手紙を開き

「兼ねて某々敵と附け狙ひ申し候ふ一味齋が倅官次郎、お雪、母諸とも小栗栖に於て、返り討に致し申し候へば、この上は九州へ立越え、仕官の望み、もし又變名の事も計り難く候ふまゝ、その段お心得下され候ふ、猶また官次郎が倅、並びに中間繁藏、見附け次第お討取りなさるべく候ふ、委細は貴面に申し談じ候ふ、月日、春風藤藏どのへ、京極内匠。」

ト讀んで卷き納め、頭陀袋へ入れ脇へ置く。

くま　サア、その返り討にした事も、和子の話しで聞きました。兼ね〴〵彼のお人の、心をかけてござる八重垣流の陰陽の卷き物、ちつとした心當があつて、これも追ッつけ手に入れて進ぜる筈。シタガ、それもいろ〳〵と内證の操り。何の中でも世の中は兎角……これ次第、有りつきが極りさへすると、ずつしり着腹。春風さま、お前もさう思うて下さりませ。

ト此うち斧右衞門、ソツと藤藏が頭陀袋の中より、件の一通を出し、ソツと取り、また後に聞いて居る。

庄六　おいら二人が婆樣に賴まれて、もし胡散な奴があれば、人知れず疊んでしまへと、毎日〳〵頑張るも、矢ッ張り譬への地獄の沙汰。

才六　そこで今も世を忍ぶ旅虛無僧。こいつはなんでも敵討らしいと、子供の小袖から附け込んだ今の仕儀。

くま　なんぢやあらうと、吉岡一家は、見當り次第殺すが近道。

トこのせりふを聞いて、斧右衞門、顫へ〳〵下座へ入る。

藤藏　それはさうと今來る道で、駕籠に附いてあつた子供の小袖紋所は、菊の葉に四つ目結ひ。慥かに吉岡が紋所。ハテ、合點のゆかぬ。

ト才六、懷より子役の小袖を出し

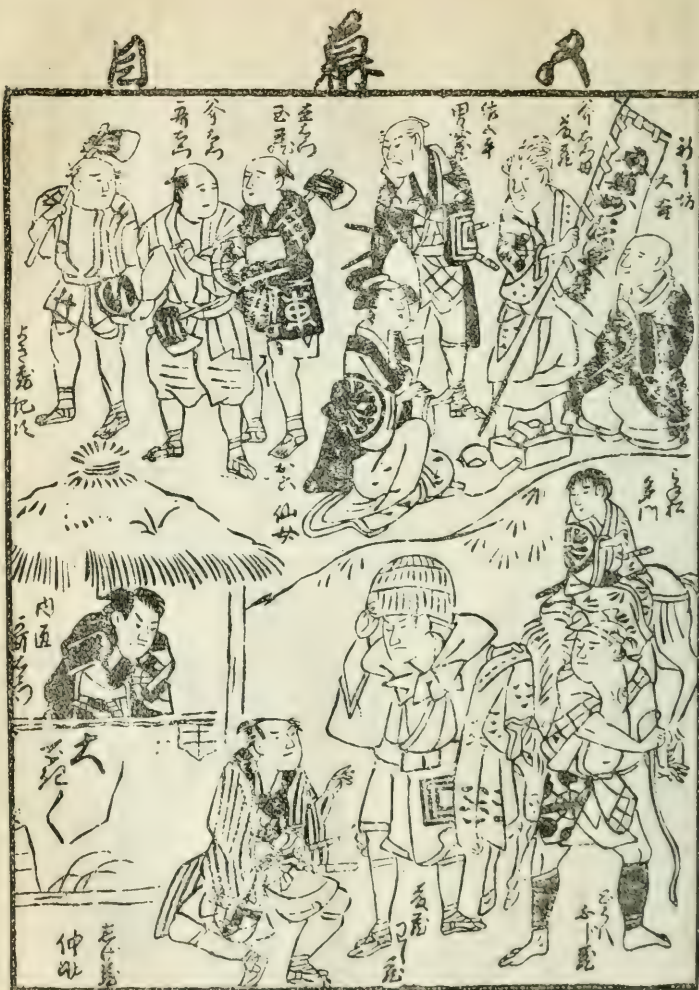
才六　こりや先刻、七つばかりの男の子を連れた奴めが、駕籠に殘したこの小袖。

庄六　取りに來るであらうと、駕籠に引ッ掛けて置いたのも、それを種にしてじぶくる積り。

ト藤藏、小袖を取つて

藤藏　ムツ、なんでも覺えの紋所。奴と云ふは吉岡が家來の繁藏。連れて行つたは官次郎が子倅。

くま　それならわいら頑張つて。

二人　見附け次第に知らせませう。
藤藏　何は格別、身共は早々先生に。
くま　イヤ、晝の間は……コレ
　ト囁く。藤藏、呑み込む。
藤藏　ムウ、すりやあの內に。
　ト辻堂へ思ひ入れ。
くま　人目があれば、日が暮れたら。
藤藏　成る程尤も。
くま　二人ともに、わしと一緒に。
二人　サア、行かつしやりませ。
　ト唄になり、時の鐘になり、お熊、藤藏、庄六、才六、思ひ入れあつて、下座へ入る。と矢張り合ひ方、時の鐘にて、向うより繁藏、旅奴の拵らへにて、荷物を割り掛け、峯松、これも旅形、おしよぼからげにて、繁藏に手を引かれ出る。花道にて
峯松　コレ繁藏、足が痛うて步かれぬ。馬でも駕籠でも乘せてたも。
繁藏　お道理でござります。長の道中、誠に山坂、思へばよう溫なしうおひろひなされまする。さりとては賢い坊樣ではある。
峯松　溫なしうして步む程に、お父樣のござる所へ、早う連れて行てくれいよ。
繁藏　イヤモウ、お連れ申さいでなりませうか。此やうにお步きなされまするも、マア、二日か三日の事、さう致しまするると、親仁樣が、ヤレ坊か峯松か、よう來た溫なしうなつたと、大抵お褒めなされる事ぢやござりませぬ。
峯松　そんならもう二つ寢々すると、親仁樣にお目にかゝるかや。
繁藏　ネイ〳〵、左樣でござります。お前樣の待ち兼ねより、この奴めが心はいらだて。又お父樣も今日は來居るか、明日は來るかと、さぞかしお待ちなされるでがなござりませう。いたいけなお前樣を手放して、置かつしやる親御達の心の內、思ひやつて思はず淚が。
　ト峯松を見て、ヂツと思ひ入れ。
ヤレ〳〵、なんの役にも立たぬ事で、思はぬ淚。ハ、、ハ、、イヤ、あそこに馬が繫いでござります。ドレ〳〵、あの馬を取つて乘せませう程に、あそこまで御辛抱なされませ。
　ト始終合ひ方、時の鐘にて、本舞臺へ來る。
峯松　繁藏、この馬に坊が乘るのかや。

初演の繪番附

ト馬の側へ寄るを留めて

繁藏　アヽモシ、危なうござります。いま奴めが乘せます

る…　併し、馬士も爰には居らぬが。

ト尋ねるこなし。下座より洞八、出て

洞八　エヽ、あのお六めはどこへ逃げたか。もう内へ歸つ

たか。

ト繁藏、洞八を見て

繁藏　オヽ、見ればこの馬方さうな。先の村までこの馬を

借りたいが、靜かに追うてくれまいか。

洞八　ムウ、この馬を借りたいと云はつしやりますか。わ

しや駄荷は附けませぬ、仕立て馬同然で、ちつと錢が餘

計でごんすが。

繁藏　イヤ、その事は大事ない。この小さいが道の疲れ。

おらが乘るのではないわい。

ト洞八、峯松をヂロ／＼見て

洞八　ハテナ、外に連れと云ふもなし、親子連れのやうに

も見えぬ。奴樣、お前はどこからどこまで乘ります。

繁藏　ハテ、そりや道々も話される事。先を急げば心が急

く。早々乘せてくりやれ。

洞八　オヽ、坊樣が退屈でござりませう。サア／＼、乘ら

つしやりませ。

ト洞八、峯松を抱き上げ、馬に乘せる所へ、下座より

庄六、才六、出て囁き合ひ

庄六　奴どの、先刻乘つた駕籠の者だ。

二人　酒手をやつてもらひたい。

ト兩方へ引挾む。

繁藏　ムウ、見ればわいらは最前の雲助。アヽ、なにか、駕

籠の中へ殘して置いた、坊樣の着る物持つて來たと云ふ

のか。

才六　イヽヤ、そんな事はおいらは知らない。酒手を下さ

いと云ふ事よ。

繁藏　なんと申す。

庄六　雲助が酒手をねだるはお定まり。いさくさなしにズ

ツシリと

二人　早く酒手を寄越しやれな。

繁藏　足弱連れと附け込んで、コリヤ、うぬら強請るのだ

な。

二人　知れた事だ。

繁藏　なにを。

トきつとなる。洞八、繁藏を留めて

洞八　アヽ、モシ〳〵、奴樣、氣の短かい、どうしたもの
でござります。マア〳〵、待たしやりませ〳〵。
ト繁藏を留めて、二人を宥め、こちらへ來て
コリヤ、わいらも大概人を見て物を云へ。どうしたもの
だ。
庄六　コレサ洞八、お主は何にも知るまいが……コレ。
ト囁き
ナ、ソレ、合點か。
ト洞八、呑み込み
洞八　ムウ、そんならアノ、お熊婆が平常話しの
ト繁藏へ思ひ入れ。
才六　サア、それだに依つて酒手の無心よ。
洞八　ムウ、それではおれも駄賃が張るわえ。
庄六　馬士雲助は相互ひ。ナア洞八。
洞八　オヽ、サ、キリ〳〵酒手を
三人　置いて行きやれ。
ト繁藏を取卷く。
繁藏　さてはわいらは、物取りだな。
洞八　知れた事だ。路銀のありたけ出してしまへ。
繁藏　ムヽ、ハヽヽヽ、長の道中脚かぎりに、そんな強請
りを喰ふのぢやアない。もう馬も駕籠も借りない。
才六　イヤ、斯う強請りかゝつたからは、只は通さぬ、こ
の海道。子伜を連れた長の旅、吉岡とやらが奴であらう。
洞八　四の五のと面倒な。二人ながら合點か。この馬はお
れが。
ト手綱を取つて引いて行かうとする。繁藏、洞八を留
める。庄六、才六、縫ひぐるみにて繁藏に打つてかゝ
る。ごつちやの立廻りに、洞八、花道まで馬を引いて
行かうとする。繁藏、洞八を引き戻す。此うち馬は米
松を乘せて、花道へノロリ〳〵と行く。
洞八　あの餓鬼めから。
ト行くを繁藏、引き戻して拔打ちに洞八を一刀切る。
洞八アッと倒れる。此うち馬は揚げ幕の方へ歩いて行
く。繁藏、行かうとするを、庄六、才六、やるまいと
する立廻り、此うち
米松　繁藏やアい〳〵。
ト振り返つてあせり呼ぶ。これに構はず馬は米松を乘
せたる儘、揚げ幕へ入る。舞臺の三人よろしく立廻り
あつて、キッとなり
繁藏　こりや最前よりの樣子と云ひ、わいらは慥かに頼ま

れたな。
才六　知れた事だワ。子悴を連れた折助め、打ち殺せと
二人　頼まれたワ。
繁藏　ムウ、してその頼んだ奴は何者だ。
トきつとなる。
藤藏　その頼み手は春風藤藏さまだ。見忘れはせまいな。
ト時の鐘になり、稲村の蔭より出て、天蓋を取る。繁藏、見て
繁藏　ヤア、うぬは京極内匠が門弟。汝が爰に徘徊するからは、敵内匠も當國に、足を留めるに違ひない。引ッ縛つて官次郎さまへの手土産だワ。
藤藏　ハヽヽ、その官次郎も内匠どのが、小栗栖で返り討にしてしまつたワ。
繁藏　ヤヽヽ、すりや御主人官次郎さまも。チエヽ。
藤藏　取殘されの一文奴め。子悴ぐるめ殺してしまへと、内匠どのゝ云ひつけだワ。
庄六　うぬらを殺して褒美の分け口、細言吐かさず。
二人　くたばつてしまへ。
繁藏　敵の片割れ春風藤藏、うぬから先へ首にして、主人へ手向ける、覺悟なせ……と云ふうちも峯松さまが。
ト向うへ心やりの思ひ入れ。
藤藏　面倒な。ソリヤ。
ト禪のツトメ烈しく、この時、洞八も起き上がり、繁藏、四人を相手に切り結び、薄手を負ひ、トヾ洞八、庄六、才六を切り倒す。この立廻りよろしく、藤藏、すかさず切り込むと、立廻りにて、繁藏、一刀切る。これにて藤藏、タヂ／＼となる。繁藏もそこへ摚と居て、刀を杖にホッと思ひ入れ。この時ト座より
佐五　オヽ、最前乘つた馬が爰に居た筈。莨入れを忘れた。
ト云ひ／＼出て來て、繁藏に行き當る。繁藏、ハッと立ち上がつて
繁藏　うぬも同類。
ト切つてかゝるを、突き廻し、顔見合せ
佐五　ヤア、おぬしは中間の繁藏。この體は。
繁藏　そちや若黨の佐五平。
ト佐五平、思ひ入れあつて
佐五　こりや手負ひし樣子。口論か。
ト洞八が死骸を見て
ヤア、馬士を。
繁藏　オヽ、其奴が馬に峯松さまが、お乘りなされてこの

道を、たつたお一人。エヽ、氣遣はしい。
佐五　ナニ、峯松さまが。
ト思ひ入れあつて、向うを見て
氣遣はしやんた。後追ッついて。
ト花道へかゝる。
繁藏　待むぞ佐五平。
佐五　合點だ〳〵。
ト云ひ〳〵、後へも心を殘して、向うへ走り入る。繁藏、思ひ入れあつて
繁藏　ヤレ嬉しや。
ト又そこへへたつて、向うを見送る。この時、藤藏、起き上がつて、繁藏に切つてかゝる。繁藏、心得立直つて、兩人キッと見得になり、合ひ方、蛙の聲、窓蓋ドろし暗くなる。兩人よろしく立廻りあつて、トゞ組み合ひ、藤藏、繁藏を抱へ、タヂ〳〵と、辻堂の傍へ押しつけると、内より白刃の切先出て、兩人を一時にグッと刺し通す。兩人アッと苦しみ、前へ出て、バッタリと倒れる、ト時の鐘、凄みの合ひ方になり、内匠、白刃を持ち、扉を開き、グッと出て、時の鐘靜かに撞く。内匠、白刃を納め、二人が死骸をとつくりと見、藤藏が死骸を引起し、我が着る物と着替へさせ、側に落ちてある天蓋、尺八を取上げ
と云ふこなし。よろしくあつて、
内匠　此奴が死骸を……ムウ。
ト足にて蹴返す。これにて繁藏、よろぼひ起き直り、内匠を見附けて
繁藏　ヤヽ、敵京極。
ト起き上がるを、エヽと蹴倒し、咽喉笛をグッと踏む。チョンと木の頭にて、窓蓋明ける。内匠、空を見て
内匠　ムウ、日和になるわえ。
トこれをキザミ。　ひやうし幕

六　幕　目　毛谷村斧右衛門内の場

役名――轟傳五右衛門。貴田孫兵衛。吉岡一子、峯松。若黨、佐五平。お六母、お熊。坊主、新了。杣、杢右衛門。同、與喜藏。毛谷村のお六。杣、斧右衛門實ハ與五郎。京極内匠。

本舞臺、三間の間、藁葺きの軒口。向う赤壁納戸口、上の方へ寄せて、一間折り廻しの小座敷。これに反古貼り障子。正面の方は、荒菰二枚吊つてある。田舍家のかゝり、好き所に門口、下の大柱に松の立ち木を見せ、この外に馬部屋、その脇に藪疊、すべて藁葺きの平舞臺、誂らへの通りよろしく、豐前の國毛谷村貧家の模樣にて　幕の内より、眞中に莚屏風を立て、この内に、お熊、以前の母親の形にて、手桶を枕にして、反古團扇を持ち、晝寢して居る。門口に、傳五右衞門、淺黃頭巾、木綿やつし、手甲、股引、藁苞を脊負ひ、柄杓を腰に差したる伊勢詣りの形にて、菅笠を持ち、報謝を乞うて居る。在郷唄にて、幕明く。

傳五　お賴み申します／＼……これはどうだ。ハイ、お伊勢さまへ參宮する者でござります。草鞋錢を下さりませ。ハイ、伊勢詣りに御報謝。

ト大きく云ふ。お熊、モヂ／＼と目を覺まし

くま　なんぢや、アタやかましい。今の先刻戾つて、トロトロうまう晝寐の最中を、氣魂しう起してなんぢやいの。こなたの足で參宮するを、おれが知つた事か。通らしやれ／＼。

傳五　これは御免なされませ。お晝寐の邪魔をしましたは、報謝が欲しいばかりでなく、ちつと物が尋ねたうござります。

くま　エヽ、面倒な。なんぢや。ちやつ／＼と云はつしやれ。

傳五　ハイ／＼、左樣なら許さつしやれませ。

ト内へ入り

卒爾ながら、爰の内に、與五郎どのと申す人が、お世話になつて居られますでござりませう。

くま　イヤ、知らぬわいの。こちの内は、この毛谷村で貧乏こそ暮らせ、親代々から人も知つた杣斧右衞門と云ひまする。與五郎とやらは知らぬわいの。

傳五　ハテナア、この村の入口で尋ねましたれば、山端に付いた一軒家、門口に松のある内で、その斧右衞門さんの所で尋ねて見ろと云はれました。

くま　サイノ、斧右衞門の家は此方ぢやが、與五郎とやら覺えはない。アタ面倒な。通らつしやれ／＼。

傳五　でも愛想が好いお婆さん。御報謝に一服たべませう。火を一つ貸して下さりませ。

くま　樣々な面倒云ふ男ぢや。よい〳〵。一服のます代りに、此方の内の末繁昌、わしが息災延命を、お伊勢さまへ拜んで下されや。

ト鋸屑を火活けにした田舍莨盆を出す。傳五右衞門、莨を吸ひつけながら

傳五　さて正直な人だ。轉んでも只は起きまいの。

くま　ハテ知れた事。この位に氣を付けにやア、辛い浮世が渡られぬわいの。ホヽヽ。

ト兩人こなしにて笑ふ。また在鄕唄になり、花道より、お六、以前の形にて、以前の森の馬の口綱を取り、引いて出て來る。峯松、矢張り以前の儘、この馬に乘りながら出て來て

峯松　コレ小母、わしをどこへ連れて行く。繁藏を尋ねてくれいやい。

ト後先を見廻し、ウロ〳〵する。お六、馬の口を留め

ろく　エヽ、なんぢや、最前から小母々々と、橫柄な子ではある程にの。コレ、この馬は此方の馬で、斧右衞門どのが今朝引いて、駄賃取りに行てゞあつたに、自體マアこなさんを、誰れがこの馬に乘せて、斧右衞門どんはどうしたのぢやぞいなう。

峯松　イヤ知らぬ。おりや繁藏に逢ひたい。繁藏が所へ連れて行てくれいやい。

ろく　サア、よい〳〵。マア、なんでも此方の内へ連れてさへ行たら、斧右衞門どのに問うて、譯も知れやうし、こなさんの連れも尋ねて見えるであらう。マア〳〵、此方の内へごんせ〳〵。

ト矢張り在鄕唄にて、お六、口綱を取り、この馬を引いて、門口へ來て

母さん、いま戻りました。斧右衞門どのは戻つてかいなア。

ト門口明ける。お熊、これを見て

くま　お六ぢやないか。わりやなんで、馬を引いて戻つた。

ろく　サイナア、橫田堤にこの子を乘せて拋つてあつたさかい、引いては來たが、そんならまだ、斧右衞門どのは戻らぬかいなア。

くま　なんの戻らう。馬さへ拋つて置く、かいしよなしめが、どこに野良かわいて居るやら知れた事か。

ろく　ても面妖な。彦助後家の所にぢやないか……アヽ、儘よ、マア〳〵、こなさんも下りて、連れのお方を待ちなさんせ。

ト峯松を抱き下ろし、荷鞍を取つて、門口へ直し、この馬を下の部屋へ追ひ込んで繋ぐ。此うち、峯松、ウロウロと門口を入る。お熊、これを見て

くま　なんぢや〳〵。この餓鬼はどこからうせて、どこの子ぢや。

峯松　イヤ、おりや旅の者ぢや。繁藏に見はぐれて、難儀する程に、早う逢はせてくれいやい。

トうろ〳〵する。傳五右衛門も不思議さうにこれを見て

傳五　ムウ、見れば小さの旅姿。繁藏に逢ひたいと云はつしやるは。

くま　伊勢詣りどの、こなた、その餓鬼知つて居るか。

傳五　これはしたり、通り一遍の伊勢詣り、どうしてわしか知りませう。

くま　イヤモウ、今日はなんぢややら、伊勢詣りやら迷ひ子やら、どうで盗人の手引きでもしさうな。合點のゆかぬ、けないどが見えた事ぢや。

ト此うち、お六、表を片付け、内へ入り

ろく　母さん、見なさんせ、只さへ旅は辛いとやら、心細いものぢやさうにござんす。年端も行かぬ旅の空、連れ衆と云ふは親御さんか、兄弟衆かは知らぬが、この子を一人馬に乗せて、捨てゝ行つたのでもあるまい。どうで尋ねて見えやう程に、此方の内でちつとのうち、足を休めてやりなんせいなア。

くま　何を阿房め、一かたけでも喰ひ倒されりや、誰れが損のゆく事ぢや。自體おのれが親を非に見て、我まゝが過ぎるに依つて、いろ〳〵な事を仕出すがな。

ろく　モシ、母さん、わしたが勿體ない、いつどのやうな我まゝ云うて、お前の心に背いたぞいな。

くま　吐かすない。おれが氣に背かぬものが、今の斧右衛門、ありやなんぢや。七年以前に、どこの牛の骨やら馬の骨やら、この村へうせた風來者。いつの間におのれが乳繰つたが、死にかかつて居る親仁どんをたらし込んで、この家へ入り聟。それから程なう親仁どのも死なれる。マア、何がなしに親の名前、斧右衛門と云ふ名を付けて、われと女夫にしては置くものゝ、三年後の大患らひから、健忘とやら云ふ埒もない腑抜けになつた今の斧右衛門、その癖にびな〳〵、女さへ見りやどこ愛なしに入り込んで、惡性さらす斧右衛門。われも又ちつと悋氣なとせい。阿房臭い、マア、あのやうな、おれが氣にも喰はぬ極道

を聟に入れて、それでもおのれは孝行なか。親の氣に背かぬとは、なんで親に背かぬのぢや。

ろく　コレイナア、母さん、そりやわたしが悪いに依つて、常からあやまつて居るぢやござんせぬか。斧右衞門どののかいしよのないは、病の業なりや、なんとせうぞ。その代りに、わたしが二人前、山も畑も稼ぐわいなア。

くま　病でもなんでも、夜泊り日泊り、悪性は見ん事一人前ぢや。それに又わりや、なんで女房の役に悋氣せぬぞ。

ろく　サア、それも云ふ時には云ふ。随分悋氣もするわいなア。知らぬお方も聞いてぢやに、いろ／＼な事云はしやんすがな。

くま　なんの、誰れに聞かせたとて、迷ひのない穀潰し……イヤ、ほんに、おれも今日は、ちつと斧右衞門に用があつて、それで氣に喰はぬ戻りともない内へ戻つて居るに、極道者め、まだ戻り居らぬの。

ト向うを見て小言を云ふ。お六は始終、傳五右衞門へ氣の毒なるこなし。傳五右衞門、つく／＼樣子を聞いて、

傳五　イヤモウ、遠慮のないが親子の仲で、孝行さへさつしやれば、大神宮さまが守らしやります。時に、今の話しを聞けば聞く程、わしが頼まれた國元の言傳。モシ、お内儀さん、お前の御亭主の斧右衞門どのと云ふは、もと與五郎どのと云つたお人ではござりませぬか。

ろく　アイ、成る程、與五郎どのと云ふは、こちの人の以前の名。それを御存じのお前さんは。

傳五　イヤ、なんでもない伊勢詣り。國から狀を言傳かり、與五郎どのへお目にかゝり、内證で直ぐに渡してくれろと頼まれて來たが、わしも旅がけ。お内儀のこなさんへ渡してさへ置けば、間違ふ事もござるまい。その與五郎どのへ、この狀を進ぜて下さりませ。

ト懷中の紙入れより、文一通出して渡す。お六、不思議さうに取つて

ろく　與五郎どのへ、くらより……エヽ、こりや一家樂でござりますかいなア。

傳五　されば、その譯は知らぬが、内證で密かに屆けてくれろと、國元から頼まれました。

くま　ソレ見居れな。内證で國元から、アタ鈍臭い文ではある。アノぬけ／＼とした斧右衞門め、大方國の女房の文でがなあらうぞ。

ろく　サア、よいわいなア。樣子はこの文渡せば知れる。

ト帶の間へ挾み
斧右衞門どのゝ戻りまで、この子もさぞや飢じうあらう。
サア、奧へ來て飯上がれや。
ト峯松の手を引く。
くま　コリヤ、味噌鹽の減る事を、構はずと抛つて置かいでな。
傳五　ほんに、伊勢詣りも腹の加減。どうで報謝も下さるまい。隣村を修行して、戻りに寄りませう。
くま　勝手にさつしやれ。
傳五　左樣ならばお內儀どの。
ろく　文は慥かに預かりました。
傳五　ドレ、木賃だけ稼いで來ようか。
ろく　サア、迷子さん、奧へござれ。
ト峯松の手を引き、暖簾口へ入る。
トてんつゝ。お六、峯松の手を引き、暖簾口へ入る。この唄を
傳五右衞門、こなしあつて、花道へかゝる。この唄を借りて、花道より、喜田孫兵衞、半合羽、旅出立ち、町人の形にて、壹本差し、股引、草鞋、三度笠をかぶり、柳行李と風呂敷包みを割りがけにして、莨をのみながら、出て來り。
孫兵　オヽ、あの松が斯うだに依つて……大方爰であらう。

さてハヤ故郷忘じ難しとは云ふが、十四五年振りで生れ在所。大坂の繁華の土地から來ては、どれがどれやら一向判つたものではない。
ト云ひ〳〵、行き違ひに傳五右衞門が顏を見て
ヤアモシ、あなたは。
傳五　ハイ、一人旅の伊勢詣り。草鞋錢の報謝下さりませ。
ト柄杓を突きつける。孫兵衞、ギヨツとして
孫兵　ムウ、成る程、報謝進ぜませう。
トはやみちより錢を出し
笠の印も播州飾磨。
ト不思議さうに錢を遣る。傳五右門、これを請けて、
ツイと花道へ入る。孫兵衞、後見送りながら
確かにあれは飾磨の御家中……エヽ、儘よ。久し振りにて母のお顏、息災な姉御の狀便り、互ひの無事な顏を見て、
ドレ、喜ばせませうかい。
ト合ひ方にて、門口へ來て
オヽ、爰ぢや〳〵、以前の替らぬ松の目印。モシ、母者人、喜田孫兵衞でござりまする。
ト門口を明けて內へ入る。此うち、お熊、苧をうみながら

くま　孫兵衛とは誰れぢや……オヽ、息子の斧松かい。ヤレヤレ、よう來たなア。大きうなつて、サア／＼、遠慮なしに上がれ／＼。

ト ほた／＼喜ぶこなし。孫兵衛、草鞋を脱ぎ、お熊が側へ來て

孫兵　先づお前にも御機嫌よう、取分けて姉貴にも、御息災で斧右衛門どのと、睦ましうお暮しの樣子。狀使りに承はり、先づおめでたう存じまする。

くま　サイノ、めでたいはめでたいが、此方の聟の斧右衛門めは、無頼漢の上に、健忘とやら云ふ阿房臭い病人で、それは／＼、世話の燒ける事いの。

孫兵　マヤ、その事も承はつて居ります。さて私しも、小さいから大坂へ參りまして、年期奉公勤めましたお庇に、仕合せ致して。只今では、親方の跡式を貰ひ受け、喜田孫兵衛と申しまして、弓矢は勿論、竹刀しない武藝一式、御稽古の御用承はりました、西國九州のお大名樣方へ、お出入りを仰せつけられ、この度も當國小倉のお屋敷へ、御用で下りましたるところ、さる御大身樣のお頼みで、めでたいお話しがあつて參じました。

くま　それは耳寄りな。どうした譯で。

孫兵　イヤ、別の儀でもござりませぬ。御病氣ぢやと仰しやる斧右衛門どのゝ身の出世、姉貴に喜ばせませうと存じまして。

くま　ハテナウ、あの無頼漢の病みほうけが、なんの役に立つもので。

孫兵　サア、只今でこそ病身なれ、以前の樣子を承はれば。

ト 云はうとして

イヤ、それよりは、お前樣に喜ばせまする。これも出世の筋、外でもござりませぬ、こなさんが以前乳を上げさつしやれた、佐々木文山さまの御子息、京極内匠さま、只今では浪人さつしやれて、こなさんの所に匿まうて置かつしやる噂。

くま　コレ／＼、斧松、イヤ孫兵衛、わが身は久し振りで親の所へ來て、そりや何を云ふのぢや。尤もわが身を產んだ時の乳で、佐々木文山さまへ御奉公に出て、おれが乳で育て上げたお子は、成る程、京極内匠どのと云うて劍術の名人になられたけなが、その後は浪人して、播州にもござらぬ噂。なんぼ乳を上げた乳母ぢやと云うて、成人した人に一生付き添うては居まいし、内匠どのゝ行

くへを、どうしておれが知らうぞいの。

孫兵　イヤ、左様ではござりませうが、小倉で様子を承はりますれば、今は實父の苗字に改め、佐々木岸柳とやら名を替へ、小倉のお屋敷に奉公の有り付き、出世の望みござるとの噂。

くま　サイノ、おりや京極内匠どのへこそ乳も上げたれ、育てもしたれ、岸柳とやらおりや知らぬ。

孫兵　ムウ。すりやこなた岸柳どのを。

くま　なんの由縁で知るもので、岸柳は元より、久しう逢はぬ内匠どの、どこにござるか。おりや知らぬぞ。

孫兵　すりや、どうあつてもこなたは。

くま　近付きでなけりや、知る人でもない。知らぬ〳〵知らぬわいやい。

ト煙管にて、煙盆を叩き立つて、ツンとする。

孫兵　ハテナア。

ト思ひ入れ。てんつゝになり、花道より、新了、以前の坊主の形にて、春風藤藏が死骸を戸板に乘せ、杢右衛門、與喜藏、以前の袖の形にて、これを持ち、後より、京極内匠、旅虚無僧、以前の森の藤藏が形に着替へて出て、門口に窺ふ。新了、杢右衛門、與喜藏、戸板の死骸を内へ持ち込み。

新了　斧右衛門の婆樣、サア〳〵、大事ぢや〳〵。

杢右　えらい事が出來申した。

與喜　こなたが歸り召されて後、妙見堂の御浪人が、果し合つてか打ち合つてか。

新了　見なさろ、顔までこないに血みどろちんがい、切り殺されて居やりました。

杢右　この間中こなさんが、娘御に隱して世話さしやつた志しがいとしさ、知らせに來た。

與喜　ナウ、斧右衛門の婆樣や、こなさんはさぞ悲しかろ。

三人　ア、、氣の毒や。ほうい〳〵。

ト三人すゝり上げて泣く。孫兵衛、思ひ入れ、お熊、悔り立寄つて

くま　ヤア、こりや和子かいな。誰れが殺した。

ト云はうとして、孫兵衛へ思ひ入れ。門口の内匠、尺八を吹き出る。お熊、死骸を改めながら

エ、、時も時、アタ邪魔な尺八、鈍くさい人ぢや。通らしやれ。

ト内匠、ツカ〳〵と内へ入らうとする。お熊、天蓋を

覗き、恟りして
エヽ滅相な。
ト門口へ突き出し
御無用。
ト門口をピッシャリ締め、孫兵衛へ心遣ひの思ひ入れ、孫兵衛もちよつと見て思ひ入れ。内匠、思案して、こなしよろしく下の藪垣の内へ小隱れする。お熊、ホッと思ひ入れあつて、門口を明け
ても滅相な、おれに恟りさせてからに……イヤ、恟りはこの死骸、もう隠しても隠されぬ。こりや、成る程おれが育てた、京極内匠どのぢや。
孫兵　ムウ、なんと。
ト思ひ入れあつて
くま　イヤサ孫兵衛、おれが爲には養ひ和子、こなたの爲には乳兄弟ながら、餘り心の直ぐでない、歪みに歪んだ内匠どの、姉のお六や其方の手前、由ない人を世話すると、思やらうかと恥かしさに、成る程今までは隠して居たが、斯うなられたら是非がない。どんな出世も敵討も、もう諦らめずばなるまいわいの……コレ、坊さん、皆の衆も聞いて下され。惡の報いは皆この通りぢや。吉岡一味齋、吉岡民右衛門とやら云ふ劍術の名人を殺して、播州を立退き、それから方々流浪のうち、樣々の惡事もあつたげなが、乳母を尋ねてござつたいとしさ。どうぞ命に恙ないやうと、匿まふ事は匿まうたが、天命は遁がれぬこの死ざま。ほんにいとしうござるわいの。
ト空泣きをする。
新了　オヽ、尤もだ、道理々々。由縁なら弔らつてやらつしやい。
杢右　こなたへ渡せば、もう懸り合ひは無いと云ふものだ。
與喜　それ〳〵、わしらは歸りませう。後で存分泣かつしやい。
杢右　泪が手向けになりやしよまい。
三人　アヽ、氣の毒や。笑止々々。
ト行かうとするをお熊留めて
くま　アヽ、こなた衆は情ない。これを見捨てゝ歸るかいの。
三人　それぢやと云つて、どう致しませう。
くま　とてもの事に杉坂の三昧へ、埋んで進ぜたい。
新了　これは尤もな婆様の頼み、なんと皆の衆、どうしませう。

杢右　どうと云うたら相仲間、斧右衞門の顏で、もう一杯手傳つてやらずばなるまいかえ。

與喜　それはさうぢやが、コレ、婆樣、斯うしやちこ張つた枝骨は、下ろさゞ棺へは入るまい。

新了　オヽ、杢右衞門のお云やる通り、いつそ峠の谷からころり。

杢右　婆樣もころり、お布施が百。

くま　エヽ、いま／＼しい、緣起の惡い。

三人　それでも施主ぢや。婆樣もころり。

くま　アレ、まだかいの。いま／＼しい。

ト耳を塞ぐ。

新了　ハテサテお布施のお定まり。ころりが否なら二百出すか。

三人　吝い事云はずと、サア／＼、ござれ。

トてんつゝになり、杢右衞門、與喜藏、死骸を舁いて先に立ち、新了、お熊を無理に連れて、皆々よろしく花道へ入る。あと合ひ方にて、孫兵衞、これを見送り

孫兵　アヽ、勿體ないが母者人、こなさんは、まだ惡い心が直らぬの。我が身にも隱す企み事、得知れぬ死骸を幸ひに、京極内匠横死したと、世上に謳はせ、岸柳どのに枕を安く寐さする思案……イヤ、かけ構ひもない人の頭痛、おれが精腹揉むでもない。ドレ、久し振りの姉貴に逢うて、斧右衞門どのゝ病氣の養生、とつくりと相談して見ようか。

ト唄になり、孫兵衞、門口へ心を殘す思ひ入れにて、ツイと奧へ入る。この唄のうち、納戸口より、峯松、走り出て來て

峯松　繁藏やアい／＼。なぜに迎ひに來てくれぬぞ。おりや行きたうても道は知らず、もう日も暮れて、怖いわいなう／＼。

ト門口を見たり、奧を見たり、いろ／＼あつて、泣き伏す。暮れ六ツの鐘、合ひ方になり、奧より、お六、角行燈を提げ出て來て、峯松を見て、ホロリと思ひ入れあつて

ろく　オヽ、迷子さん、爰に又泣いて居なさんすの。コレ、其やうに飯も喰はいで泣いてばかり居なさんしたと云うて、父さんや母さんの所が知れる筈でもあるまいし……とは云へ、いとしや、道理ぢやなう。連れにはぐれて旅の空、西も東も知らぬ所に、心細いは道理ぢや／＼。さうしてマア、なんの爲に年端も行かいで旅。他國へ手放

して出した親御さんも、よく〳〵な事でがなあらう。ほんにいぢらしい、酷い目を見る事ではあるわいの。

ト ぢつと泣く。

エヽ、阿房らしい。餘りお前が泣かさんすゆゑ、かけ構はぬわたしまでも、泣かされて貰ひ泪。コレ、グチヤグチヤと泣いて居ずと、小母が云ふ事聞きなされや。そのマアはぐれた連れと云ふは、お前の爲にはなんで、さうして父さんや母さんのお國はどこで、お名はなんと云ひまするぞ。

峯松 イヤ知らぬ。父樣は知らぬが、母樣はこの中に。

ト 首に掛けたる守り袋を出す。お六、不思議さうに取つて、この中より、小さき守り表具を取出して、押開き

ろく オヽ、こりやなんぢや。戒名のやうな事が書いてあるが。

峯松 アヽ、淸凉院大利富仙劍居士、榮昌院劍壽成山居士、それがわしが祖父樣ぢや。

ろく エヽ、なんぢや、このお二人がお前の祖父さんで、さうしてこちらの戒名は。

峯松 麗香院芳春大姉、こりやわしが母樣ぢや。

ろく エヽ聞えた。そんなら母さんや祖父さまの爲に、西國でも打ちなさんすか。廻國にでも出たと云ふやうな事かいの。

峯松 イヤ、知らぬ〳〵、おりや尋ねる人があつて、それで繁藏を連れて、方々を歩くのぢや。

ろく エヽ、なんの事ぢや。一つも樣子は解らぬがなア。

ト 投げ首して當惑の思ひ入れ。また時の鐘、合ひ方になり、花道より、佐五平、以前の旅奴の形にて、菅笠を持ち、出て來て

佐五 エヽ、コレ、もう日は暮れる。旅籠屋はなし、どうぞ爰らで尋ねて見たいものぢや。

ト 云ひ〳〵門口へ來て

モシ、ちとお賴み申します。なんと此あたりに、泊り宿はござりますまいか。

ト 門口を叩く。お六、これを聞いて

ろく ハイ、お泊りなら、もう一里程明神山の麓へお出でなさると、なんぼも好いのかござりまする。

佐五 ハアヽ、まだ一里程行くのかな。困つたものだ。今日は一日氣を揉んだ所爲か、がつかりして、もう一足も否だ〳〵。モシ、御無心ながら、茶を一つ、莨の火を貸

して下さりませ。

ト門口を明け、内へ入る。峯松が顔をつく〴〵見て

ヤア、お前は峯松さまぢやござりませぬか。

ト惘り思ひ入れあつて、峯松が側へ寄る。お六もこれを見て、こなしあつて

ろく　エヽ、そんならば、このお子の、お前がお連れでござりまするか。

峯松　イヤ〳〵知らぬ。あのやうなべいは、おれは知らぬ知らぬ。

ト頭を振る。

ろく　エヽ、なんの事ぢや。すつきり合點がゆかぬ程にの。

佐五　オヽ、成る程、合點がゆきますまい。峯松さまが私しを、知らぬと仰しやるも御尤も。あのお子を爰までお供した奴めは、繁藏と云つて強勢もの。ちと仔細あつて散り〴〵に、御主人方のお供をして、お國を立退いたその後は、云ふに云はれぬ悲しい事、切ない事も辛抱して繁藏に逢ひたいと、今日晝頃どう云ふ仔細か口論仕出し、相手を仕留めて、繁藏めも杉坂で、敢へなく殺されました。あのお子は慥か馬に乘せて、先へ逃がした様子ゆゑ、お怪我があつてはなるまいと、方々尋ねて日は暮れる、やう〳〵この村へ辿り付いて、宿屋を尋ねうと來て見たれば、峯松さまの御無事なお顔。まだお見捨てない神佛のお庇か。お過ぎなされた御兩親、お祖父樣方の影身に添ひ、守つてござるか、有り難い。エヽ、忝ない〳〵。これで安堵いたしました。

ト汗を拭きながら話す。この時、お六、心得ぬ思ひ入れにて

ろく　モシ〳〵、なんと云ひなさんす。そんならこのお子のお供した、繁藏さんとやらが口論して、仕留めなさんしたとやら云ふ、その相手はえ。

佐五　サア、なんでも通り過りの喧嘩と見えて、一人は胡散な旅虚無僧。もう一人の相手は、そのお子を乘せたる馬方どのを、一番にすつぱり仕留めました。

ろく　エヽ、エヽ、そんなら、この子を乘せたる馬方も、喧嘩の相手で切られたとは、そりや、どこでいなア〳〵。

ト惘りして、佐五平が胸倉を取り、振り廻して聞く。

佐五平、ウロ〳〵こなしあつて

佐五　ハテ、いま云つた杉坂の峠で、いとしや馬士どのも殺されました。

ろく　ヤア／＼、そんなら斧右衞門どのは。
ト佐五平を突き放し、門口を明けて行かうとする。この時、下の藪垣より、内匠、以前の形にて出て
内匠　行き暮れた修行者、一夜の報謝に預りたい。
ト立ち塞がる。この以前より、孫兵衞、奥より煙草盆を提げ出て來て、始終を聞いて居て
孫兵　姉者人、待たつしやい。
ろく　イヤ、杉坂へ夫の樣子。
孫兵　サア、杉坂の喧嘩に殺された馬士どのゝ噂、形恰格とつくり聞いて、思案があらう。マア、急かずとも樣子をとくと。
ろく　その馬方の年頃は。
佐五　ア、成る程、その馬方は、四十餘り、中脊に太つた頑丈者。
ろく　さうして着類、身の廻りは。
佐五　破れ襦袢に細帶、締めて見るから凄い惡鬼株。どうで物取りでござらうわサ。
ろく　オゝ嬉しや、それで此方の注文に合はぬが仕合せ。鶴龜々々、ほんに恟りしたわいな。
トこなし。内匠もこなしあつて

内匠　「急がずば濡れまじものを旅人の、後より晴るゝ野路の村雨」太田道灌よく讀んだ。歌の心も今の驚ろき。後より晴れて先づ重疊。一宿の報謝邪魔ながら、御芳志にあづかりませうかい。
孫兵　ムヽ、ハヽヽヽヽ、見れば贋僧の似せ虚無僧。辯舌に人は惑はせど、本手は吹かぬ紛れ者。
内匠　ナニ、似せ者の贋僧とは。
孫兵　ハテ、云はつしやるな。誠往來本來の修行者ならば、庄屋或ひはお役人へ、斷わり立て、一宿あるが宗門の掟、殊さら見れば一人旅、女子と侮り無理無法に、權威で宿を借りさつしやるか。
内匠　イヤサ、その儀は。
孫兵　町人でこそあれ貴田孫兵衞、それ程の事は知つて居る。國の掟に宗門の掟。なんとでごんす、梵論字どの。
内匠　ナニサマナア、我殺無禮は本山の戒め、と斯う申しても行き暮らして、詮方なさに一夜の御無心。どうぞ簀の子の端なりと、なんと御料簡は付きますまいか。
孫兵　泊めて進ぜう。
内匠　アノ、御料簡下されて。
孫兵　むつをれのした御挨拶。殊勝さに、ナウ姉者人。

ろく　それ〳〵、別に御馳走はならずとも、お泊め申すは
佛へ供養。母さんが叱りもなさんすまい。
内匠　旅は道連れ、世は情、さらば面倒にあづかりませう。
トのさ〳〵内へ入る。佐五平、悔り、峯松を圍ひ
佐五　エ、コレ、どうやら胡散らしい、一度に懲りた旅虚無僧。今夜も相宿になりますかな。
孫兵　コリヤ、見苦しいが離れ座敷へ、御修行者、直ぐにござりませ。
内匠　然らば此まゝ、旅疲れの寛ぎ。宗門の天蓋、許さつしやれ。
佐五　ハテ、どうやら開けば開く程、その音聲。
ト寄らうとするを、孫兵衞、こちらへ引廻して留め
孫兵　サア、音聲は尺八の一手、今宵お宿の報謝返し。
ろく　過ぎ行かしやんした父さんの、菩提の爲にもなれかしと。
内匠　ドリヤ、御回向申さうか。
ト戀慕の合ひ方になり、内匠、尺八を吹きながら、上手の障子の内へ入る。此うち、峯松、お六が膝に凭れてトロ〳〵と眠る。三人、これを見て

ろく　ても小さい子と云ふ者は、旅の辛さも打忘れて、灯がともると、スヤ〳〵心よう、樂なものではないかいな。
孫兵　ほんになう、杉坂で連れ衆も非業の死を致されたとあれば、可哀さうな。今ではほんのこれが孤兒。どこの何國の何人の子か知らねども、見れば氣高い好い子ぢやに、ハテ、不仕合せな生れぢやなア。
佐五　イヤモウ、このお子のお身の上を、お話し申せば長い事。有やうは私しも御主人筋で、お行くへを尋ねよう尋ねようと、今日杉坂でお目にかゝり、間もなく不時の災難ゆゑ、不思議な御縁で此やうに、お世話にあづかるあなた方へ、何をかお隱しませう。
ト云はうとする。
孫兵　イヤ、お身の上、承はつてお爲に好いやら惡いやら、何を申すも他人と他人、壁に耳とやら申す事もあれば。
ろく　それ〳〵、樣子に寄りましては、却つてお宿も致し憎い。人の心は又樣々、殊さら旅の御用心。お國へお歸りなさるまでは、隨分氣を付けて上げなさんせえ。
佐五　サア、それゆゑに私しも、この邊にちと心當り、與五郎どのと申す人を。

ろく　エヽ、そんなればお前方は。
孫兵　ハテ、根を押さぬは壁に耳、今云つた舌も乾かぬに、ても物覺えの惡いお旅人。小さいのを連れて、マア奥へ
佐五　左様なら、お世話になりませうか。
ろく　サア、遠慮なしにそこへ行て、ゆるりと横になりなさんせ。
佐五　ハテ、坊さまの、溫なし寐顔を見るに付け。
ト峯松を抱き上げ、ホロリと思ひ入れあつて
ても、よう似さつしやれた事わいの。親御の事も夢の夢。思へば鈍な浮世だなう。
ト唄になり。佐五平、思ひ入れあつて、峯松を抱き、奥へ入る。あと合ひ方、お六、孫兵衞、殘つて
孫兵　姉者人、斧右衞門どのゝ御病氣は、誠人の申す通り、健忘とやら云ふ、物忘れの病でござりまするか。
ろく　サア、三年跡の煩らひから、どうした事にや物忘れ、山稼ぎは愚か、鋤鍬さへよう持つ事もならないで、所在と云うては海道へ、馬引いて出やしやんすばかり。それも機嫌の惡い日は、それなりに餘所で遊んで居て、ほんに〳〵母さんの手前、わしも術なうてならぬわいの。
孫兵　さう聞きますれば、お前の御苦勞、氣の毒なものでござります。それに付いて、ちと私しがお願ひ。母者人にもお前にも、この孫兵衞とは緣切つて、勘當さつしやれて下さりませ。
ろく　ても思ひがけない、替つた事を云やる。孫兵衞、久し振りで逢うたこの姉や母さんに、勘當が請けたいとは、なんぞ様子のありさうな事。
孫兵　イヤ、様子とて外でもござりませぬ。私しは町人、親方から讓り請けました身代が大切。錢金が惜しうござります。
ろく　ハテナウ、そりや云やらいでも知れてある。殊に其方は御主人から、躾けてもらうた大事の身代。大切に思やるは道理。
孫兵　サア、そこでござります。今日の利を見て錢金を惜しむ商人の、狹い心でさへ大切なは御主人、お主の恩ほど重いものはござりませぬ。
ろく　ムウ、すりやその恩が重いに依つて、母さんやこの姉に勘當せい、血筋も切つてくれいと云ふは。
孫兵　顔は知らねど、京極内匠と云ふお人、母者人の乳で育てたれば、お前やわたしが爲には乳兄弟。そのこなさんに連れ添うて、うか〳〵暮らす斧右衞門どの、その人

の元與五郎の時、勤めて居られた御主人は、吉岡民右衛門さまと云ひませうがな。

ろく ムウ、斧右衛門どのゝ御主人が、吉岡民右衛門さまなれば。

孫兵 隠さつしやりますな、姉者人、民右衛門さまは三年以前、京極内匠が手をかけて、討取つて立退きましたぞや。

ろく ヤ、、なんと。

ト悄り、驚ろいて摺り寄る。

孫兵 サア、町人の利欲に耽る、私しでさへ、主人は大切、その御主人のお身の上を、知つてか知らずか、與五郎どの、病とあれば是非なけれど、以前は八重垣一流の、奥儀も極めた程のお人。有やうはこの度私しも、月本武者之助さまの御意を請けて、頼みに參つた與五郎どの、又いま泊めてやつた虚無僧も、最前母の目顔仕方。お前も矢ッ張り乳兄弟のよしみで、世話もなされてかと、疑はしさに心試し。

ろく イヽヤ知らぬ、なんにも知らぬ。山家住居のその日暮らし。思うても見や。京大坂の人立ち多い繁華とは違うて、世間の噂を誰れ一人、云うて聞かせる者もなければ、乳兄弟の京極内匠どのが、どうしたんであらうやら、民右衛門さまがお討たれなやら、知らなんだ〳〵。知らぬからしては斧右衛門どのゝ病氣、いま宿貸した旅虚無僧、わたしになんの思案があつて。疑ひ請ける覺えはない。知らぬが誠、今の今まで、樣子知らねばうつかりと、受取つて置いた最前のこの文。

ト出して見せる。孫兵衛、取つて

孫兵 與五郎どのへ、くらより……このおくらさまと云ふは、民右衛門さまの奥樣。さすれば折々斧右衛門どのへは、文通あつて、京極内匠を敵の樣子。

ろく 知つてか知らずか夫婦の中に、今にわたしへ打明けて、なんの話しもさしやんせぬ、斧右衛門どのゝ病。

孫兵 そんならこれまで姉者人、お前はなんにも御存じないな。

ろく 過ぎ行かれしやんした父さんを、誓ひに立て、なんにも知らぬ。

孫兵 ムウ、それなれば又思案。私しも今申す通り、武者之助さまの大事のお使ひ、仕負ふせて歸るか歸らぬは、姉者人、お前の心一つ。

ろく 如何にも、云やればこれ程の大事を、女房にも隠し

てござる與五郎どの、母さんゆゑに隔てられ、さうして見れば様子のある、あの病ではあるまいか。

孫兵　思案の付くまで私しも、久し振りで故郷の墓詣り。この間にちよつと親仁様の、お墓へ參つて參じませう。斧右衛門どのゝ戻られ次第、この狀を届けて、何かの様子よう思案して御覽じませ。

ろく　オヽ、さうぢや。わたしが心に嘘つかぬは、父さんが證據。マア、其方はお墓へ、ちやつと參つておぢや。

孫兵　左様いたしませう。ぢやが姉者人、母者人に、必らずこの事を。

ろく　そりや合點ぢやが、この暗いに今宵に限らぬ墓詣り、明日の事にしやらぬか。

孫兵　なにサ、お續きなり、まだ初夜前。ドレ、つい行て參じませう。

ト唄になり、孫兵衛、急がしく一腰を差し、向うへ入る。お六、これを見送り

ろく　てもマア若いに孝行な、忘れもしやらいで墓參り。ほんに大事の父さんは、今日は逮夜であつたもの。何やら彼やらに取紛れ、必らず如才ぢやござんせぬ。父さん叱つて下さんすな。ドレ、この間に御佛壇へ、御燈火でも上げませうか。

ト合ひ方になり、今の文を懷中へ入れ、よろしくあつて、奥へ入る。向う揚げ幕の内にて

くま　何するもので、キリ／＼うせう。

トまた在郷唄になり、花道より、斧右衛門、題目太鼓を持ち、お熊に引摺られ、出て來て

斧右　コレ母者、男の胸倉を捕まへて、こなさん、達引するのかいの。

くま　阿房吐かせ。病みぼうけの癖に野良かわいて、親や女房はなんで養ふ。

斧右　サア、その思案で庄屋どのへ、智恵を借りに行たのぢや。

くま　よい加減な事吐かせ。われには大分用がある。サア、ちやつと戻り居れ。エヽ、腹の立つ、うせ居れやい。

ト唄の切れにて、お熊、無理に斧右衛門を引摺つて來て、門口へ打込み

コリヤお六、やう／＼野良めを見付けて來た。もうこれからは、背戸へ一寸も出したら、おれが聞かぬぞ。

ト小言を云ひ／＼門口を入る。お六、奥より出て

ろく　オヽ、母さん、斧右衛門どの、いま戻りなさんした

かいなア。

斧右　オヽ、戻つた〳〵。ほんに爰はおれが內ぢやなう。內へはどうで戻らうと思うて居たを、慥かあの母者が來て、何やら喚かれたで、とんと忘れた。

くま　お六、アレ、あれを開け。あのやうな性度なしが、どこの國にマア一人とあらうぞ。杉坂から戻りに、彥助後家が所へ寄つて尋ねたれば、其方の斧右衞門どのは、今の先刻まで遊んで居て、庄屋どのゝ娘と連れ立つて去なれたと云ふに依つてな、直ぐに後から行て見たれば。

斧右　オヽ、さうぢや〳〵、それをとんと忘れた。自體あの彥助後家めはな、おれによう馳走しをる。今日も今日とて、茶を飮ますの酒呑めのと云ふに依つてな、酒を呑んで面白う遊んで居るとな……それからどうやらであつた。

ト少し置いて思ひ出し

オヽ、さうぢや、庄屋どのゝ娘御がわせてな、イヤ、待てよ、娘ではなかつた。オヽ、婆樣ぢや。庄屋どのゝ婆樣が來てな……また忘れた。何やらを云ひ付けられたと思うた。

トまた考へ

オヽ、それ〳〵、題目講の人が足らぬと云うて、コレコレ、この太皷ぢや。おりや今まで太皷と遊んで居たのぢやわい。

ろく　エヽ、どぎ〳〵と、なんぢやいなア。如何に病ぢやと云うて、餘りと云へば性度のない。ちつとは又、內に居て、母さんの心の安まるやうに、氣を付けて下さんせいなア。

くま　オヽ、氣が付くであらう。何を云うたとて、このあんだら、その癖にほてくろしい、女子さへ見りや相手になつて、ほんに、あの方には賢いものぢやわいの。

ろく　サア、そりやわたしも常平生、油斷はならぬと思うては居れど、三年跡の大病から、健忘とやら云ふ性度のない、ひよんな病になりなさんして、どうやらするとわたしさへ、餘所のお方と取違へて、しつから物を云うてぢやもの、誰れも相手にはならぬわいな。

くま　サイナウ、其やうに思ふはわが身の慾目。彥助後家がなんの爲に、飯食への酒呑めのと云ふもので。ありやどうやら樣子のある事知つて居る。さうして、まだ庄屋どのゝ題目講も、婆樣が賴んだは嘘ぢや。コレ、おれが行て見たりやの、娘と二人寐そべつて、何やら話して居

初演の繪本番附

た。ナウ斧右衛門。
斧右　されば、どうであつたか、思ひ出して見よう……オ
オ、成る程、娘は何やら、おれに教へてくれと云うた。
くま　それ〳〵お六、娘が教へてくれと云うたといなう。
ト焚き付ける。お六、わざと氣の揉めるこなしにて
ろく　エヽ、なんぢやら、母さんと同じやうに、わたしに
腹立てさせうと思うて。
くま　ハテ、可愛いわが身に添はせて置く斧右衛門、あの
やうな事を見れば、おれぢやと云うて、萬ざら腹が立た
ぬでもない。コリヤ、斧右衛門、あの暗がりにたつた二
人、娘に何を教へて居た。
斧右　サア、それはの。
くま　また忘れたか。よつ思ひ出して云うて聞かせ。
斧右　イヤ、忘りやせぬ、覺えて居る。
くま　覺えてなら、ちやつと云うて聞かせ。
斧右　サア、云ふわいの。思ひ出す間もあるものぢや。
くま　また脇道へこかさうでな。
斧右　サア、云ふわいの〳〵。云ふ〳〵、コレ、よく聞か
しやれや。
ト太鼓にて拍子を取り
彥助後家に習うたを、庄屋の娘に教へてやつた。
くま　ソレ見居れな。今時の阿房に油斷したら、お六、わ
が身は阿房の上を越して、大極上々念の入つた椋の葉磨
きの阿房になるぞよ。
斧右　ハテ、コレ阿母、貴樣、妙な事を云ふの。彥助後家
に習うたと云うては怒り、庄屋の娘に教へたと云うては
怒り。
ト矢張り太鼓をあしらひ
オヽ、さうぢや。折角習うた歌題目、また明日も教へて
やらねばならぬ。とつくりと稽古して置かうわい。
ト懐の鼻紙より、書いた物を大分出して選り分け
こいつは酒屋の書出しよ……畑年貢五升三合五勺、これ
ぢやなかつた。コレ〳〵、爰にも文があるぞ。
ト序幕の狀を出し、見物へ見せ、また書附けを廣げ
オヽ、コレ〳〵……上行諸天の南無妙法。オヽ、これ
ぢや〳〵。
ト書附けを前へ廣げ、太鼓にて拍子を取りながら
南無や妙法蓮華經、されば日蓮大菩薩。
ト書附けを讀み〳〵、歌和讃の模樣。此うち、お熊、
眞をのみながら、お六と顔見合せ

くま　ほんに呆れて物が云はれぬ。
ト斧右衛門が側へ來て
好い加減に阿房盡し居れ。自體おのれに此やうな物持たせて置くからぢや。寄越し居れ。
トそこにある書付けを取つて、寸々に引裂く。
斧右　ア、コレ、そりや大事の文ぢや。
ト取りにかゝるを突き退け
くま　大事の文なら、カウ〳〵〳〵。
ト以前の文も共に引裂いて、斧右衛門へ打ち付ける。お六、思ひ入れ。斧右衛門、モヂ〳〵今の引裂いたを取集め、氣の毒さうに押丸めて居る。お熊、お六へ思ひ入れあつて
コレ、見よお六、自體おのれが悋氣せぬ阿房から起つて斧右衛門めは大體太い奴ぢやない。まだ〳〵あれが懐に何を持つて居やうも知れぬ。サア、出し居れ。コリヤ、斧右衛門、われが常々大事にかけて、肌身放さぬ守り袋に入れてあるは、國の女房の起證であらう。引裂いて捨てる。爰へ出せ。
ト立ちかゝる。
斧右　ア、、なんの滅相な。この守は、こりやわしが大切な。
くま　サア、大切な守、そこへ出せ。
斧右　イ、ヤイノ、起證でも文でもござんせぬ。國で貰うた兵法の許しぢや。
くま　ホ、、、、、こりやをかしい。なんのわれがやうな者に、兵法の許し、誰れが遣らうぞ。隠すな。起證ぢや。そこへ出せ。
トいろ〳〵して付け廻る。斧右衛門、懐を押へて逃げながら
斧右　エ、、いま〳〵しい。
トどつかり下に居て、お熊を留めながら
病はなんの因果やら、嘘つかぬ、おれが虚言となり、三年跡の大病から、こんな愚鈍になつたれど、八重垣流の陰の卷。こりや人手へは渡されぬ。大切な品でござるわいの。
くま　オ、、その陰の卷、おれが貰うた。
ト斧右衛門が懐へ手を入れ、無理に一卷を引出す。これにて、お六、思ひ入れあつて、お熊を突き廻し、一卷を取つて、斧右衛門へ投げてやる。
それを。

トまた寄るを、お六、よろしく立廻りにて、お熊が腕
を捻ち上げる
オイタヽヽヽ、コリヤヤイ、親ぢやが、なんとする。女
子に似合はぬ阿房力、親を捕へて罰當りめ、放し居れや
い。放せいやい。
ト跪く。お六、ヂツと思ひ入れあつて
ろく　母さん、お前に逢はさにやならぬ、虚無僧修行のお
客がある。
くま　ヤ、なんと。
ろく　サ、こればつかりは、お前の氣に叶はにやならぬ。
一夜の宿、なんとよう泊めたでござんせうがな。
ト突き放す。
くま　ハテナウ、其やうな者に夢聊か、近付きはなけれど、
折角其方が泊めたお人。
ろく　それに又、お前があの一卷。
くま　サア、えいわいなう、面倒ながら客人とやらに、逢
うて進ぜう。案内しや。
ろく　マア、お前から。
ト斧右衛門を圍うて思ひ入れ。
くま　遠慮深い子ぢや。サア、一緒に。

ろく　ハテマア、奥へ行きなさんせいなア。
ト唄になり、お熊、思ひ入れあつて、奥へ入る。あと
合ひ方になり、斧右衛門、お六へ氣の毒さうに今の破
れた文を取集め、繼ぎ合せて見て居る。お六、これに
構はず、納戸口より、清紙に包みたる大小を取つて來
て、斧右衛門が側へ寄り
斧右衛門どの、こりやこなさんの魂ひ、よもや忘れてぢ
やあるまいがな。
ト斧右衛門が前に置く。斧右衛門、悄りこなしあつて
斧右　エヽ、魂ひぢや。氣味の惡い。コレ、おりや息災で
死にはせぬがな。
ろく　サア、息災なお前のこの魂ひ、昔に返るお前の身に
は、討たねばならぬ大切な、お主の敵があらうがな。
斧右　オヽ、さう聞けば、成る程、今日杉坂で、おれが元
の名の與五郎々々と、誰れやらが婦て居つたと思うた。
ろく　ムウ、それなればこなさん、以前の御主人吉岡民右
衛門さまは、京極内匠と云ふ者に討たれ、お國の騷動、
お家の成行き、疾から知つて居やしやんして、今までわ
たしに隱してぢやな。
斧右　イヤ、隱しやせぬ。おりや今日が日まで駄賃の錢、

隠して遣うた事はないぞ。

ろく　エヽ、心までアタさもしい。それをお前になんの問はうぞ。コレ、なんぼ賤しい百姓の、山家の土には育つてもな、世の中の義理も、御主人の事も知つて居る。夫の大事を打明けて、告げ歩きさうな女子ぢやと、疑うて云うても下さんせぬ。あの母さんと一つでないわたしが心は、七年以前女夫になつたその時から、お前、よう知つて居やしやんせうがな。

斧右　オヽ、知つて居る〱。あの胴慾な母者人が、おれを三毛猫かなんぞのやうに、野良め〱と叱つてぢや。それをわが身が蔭へ廻つて……オヽ、どうやら云ふのぢや。とんと忘れた。

ろく　イヽヤ、病の業にもせよ、お主の御恩を忘れては、人と生れた甲斐はない。養ひ飼はれた御主人には、尤も猫でさへも恩は知る。尾は振つて馴れ付く、畜生にも、劣つたこなたは人でなし、民右衛門さまはお師匠なり、お主様なり、御家來の與五郎の昔を忘れては、畜生よりはまだ劣つた。と云うても蛙に水とやら、ようマヂ〱と人中へ、この顔が逢はされうと思ひなさんすか。

斧右　それぢやと云うて、どうせうぞ。

トもじ〱する。お六、斧右衛門を引寄せ、ヂッとなつて

ろく　エヽ、腑甲斐ない、お前はなア。なんぼ病の業ぢやと云うて、これ程までに恥しめられ、お前、畜生と云はれても腹は立たぬか。口惜しくはないか。なぜ男らしう物云うて、大小立派に元のやうに、古主の御恩、お主の仇、敵討つ心にはなつて下さんせぬぞいなア。

ト取縋つて泣く。

斧右　オヽ、討たう〱。なんの敵の一人や二人、コレ、氣遣ひしやんな。立派に討つて見せるわいの。

ろく　エヽ、すりや心を取り直して、お主大事の忠義の道、昔に返つて下さんすか。

斧右　サア、なんぢやあつた。もう忘れた。エヽ、何やらであつたわえ……オヽ、與五郎の昔々、爺は山へでもないワ……オヽ、敵々、猿が島の敵討であつた。

ろく　サア、その敵の京極内匠、討たいでならぬお前の身の上。折惡い病で、叶はぬまでも討つ心にさへなつてなら、わたしが討たすこの刀。コレ、差しやうも忘れてかいなア。

ト無理に斧右衛門へ大小を差させる。斧右衛門、ウロ

ウロ、兩腰を取らうとして取落し

斧右　エヽ、鈍くさい、重い物ぢや。なんとして〳〵、おりや侍ひにはようならぬ。コレ、堪忍ぢや〳〵。

ト逃げようとするを、お六、やう〳〵に引摺る

ろく　コレマア、下に居なさんせ。これ程合點のゆくやうに云うて聞かすに情ない、お前は元を忘れてか、人の誹りも思はずかいなア。

斧右　サア、おりや始終夢のやうに、胸ばかり躍つて、わが身の云やる事を思ひ出して見ても、行く先を忘れて、とんと合點がゆかぬわいの。

ト手を組み思案する。これまで始終合ひ方にて、花道より、傳五右衞門、戻つて來て、門口に窺ふ。お六も思案のこなしあつて、懷中より以前の文を出し

ろく　斧右衞門どの、この文、覺えがござんせうな。

斧右　イヤ、知らぬ〳〵。餘りせか〳〵氣が逆上して、コレ、おりや病になりさうな。もう堪忍ぢや〳〵。

トまた逃げようとするを

ろく　與五郎待ちや。

斧右　エヽ、又呼ぶかい。オッと待つた。

ト下に居る。

ろく　イヤ、斧右衞門どの、意見云うたはわたしぢやない。昔の御主人、お前のお主、おくらさまとやらのこのお文。

ト封を切らうとする。

傳五　オヽ、その使ひは傳五右衞門、一別以來、姿は替れど古主の由緣、見忘れはせまい。

ト藁苞を提げ、ツカ〳〵と内へ入る。

ろく　ヤヽ、お前は最前の。

傳五　その狀屆けた伊勢詣り、文言具さに讀むに及ばず、出雲八重垣一流の達人、德を隱して諸葛に習ひ、土民となつてこの村に、蟄居の樣子密かに聞き、此方にも密かの頼みあつて、參宮人と姿を替へ、與五郎が在所尋ねに參つた。

斧右　さう仰しやつればお懷かしい。あなたは慥か……ハイ、どなた樣でござりました。

傳五　この體なれば見忘れも理り。某は播州吉岡民右衞門の妻女、お倉が弟、轟傳五右衞門。

ト藁苞より、大小を出して、しやんと差し

姿を替へしは旅中の用心。斯く名乘り合へば、昔の與五郎、手練も昔に劣りはせまい。頼みの仔細はその一通。

御内證、共々聞入れておくりやれ。

ろく　サア、それゆゑに最前より、割つ口説いつわたしが意見。何を申すも三年以前、大病の後のこの病、夫の心の腑甲斐なさ、お目にかゝるも面目ない、お恥かしう存じまする。

傳五　ムウ、すりや、武術も病ゆゑに。

斧右　ハイ、山の芋なら庄屋どのゝ山に、好いのがいくらもござりまする。さうしてお前様は、どこやらからお出でなされましたな。

トうろ／＼する。傳五右衞門、斧右衞門が顏をつくづく見て

傳五　卽座に忘るゝ病の根元。ハテ、健忘であつたよなア。

ト思案の思ひ入れ。お六、面目なき思ひ入れにて、斧右衞門が袖を引き、いろ／＼して焦る。斧右衞門、我が膝を叩いたり、抓つたり、いろ／＼考へて見て

斧右　オヽ、思ひ出した。お倉さまの御兄弟、傳五右衞門さま、ようお出でなされました。

ト畏まつて辭儀する。傳五右衞門、チツと思案の思ひ入れあつて

傳五　天をも地をも計るべし、只計られぬは人の心、不忠の與五郎、覺悟いたせ。

ト拔打ちに切り付ける。お六、恟り、斧右衞門を引退け、傳五右衞門を突廻して、立廻り。傳五右衞門、又かゝるを、お六、側なる大小を取つて、鞘ながらあしらふ。立廻りのうち、斧右衞門、ワアッと上の方へ飛び退き

斧右　ヤア、人殺し／＼。

ト慄へながら、奥へ逃げて入る。傳五右衞門、お六、立廻りよろしくキッととまり

傳五　樣子を試せば云ひ甲斐なき、與五郎が病に引替へて、ハテ、甲斐々々しき女子が振舞ひ。そちや手向ひを致すよな。

ろく　イヽヤか弱き夫を庇ふ、女子の智惠の只一筋、お手向ひぢやない、このお刀、マア／＼、納めて下さりませ。

傳五　如何にも詮なき女子を相手。この場は免す。イザ、引きやれ。

ろく　イヤ、お前から。

傳五　實に尤も。われには致さぬ。イザ。

ろく　イザ。

兩人　イザ／＼／＼。

ト傳五右衛門、刀を引いて鞘へ納める。お六、ホッとこなしあつて

ろく　オヽ、嬉しや、怪我もなうて、あの臆病な與五郎どの、昔の心の百分一、役に立つぢやござりませぬ。

傳五　イヤ、卑下なすも、所存あつて臆病未練か。何にもせよ、奥へ踏ん込み今一度。

ろく　そりやあなたより私しが、樣子をとくと試した上。

傳五　此方の望み、書中の返事。

ろく　後方までに、わたしがキッと。

傳五　請合ふ魂ひ、ハレ天晴れ。この毛谷村に男優り、力量勝れしお六とは、こなたの事であつたよな。

ろく　ナニ、譯もない、山家の武骨。

傳五　それが即ち剛毅朴訥。

ろく　只正直を、わたしが取り得。

傳五　心措きなき今宵の宿り。

ろく　ドレ、御案内いたしませう。

ト唄になり、兩人よろしく、お六、以前の二腰を引ツ抱へ、傳五右衛門、これに付いて、刀を提げ、奥へ入ろ、あと合ひ方にて、直ぐに奥より、斧右衛門、逃げて出ろ。お熊、これを追ひかけて出て

くま　コリヤヤイ、斧右衛門、待ち居れい

斧右　オットショ、おれを呼ぶは誰れぢや。

くま　阿房め、おれぢや。母ぢやわやい。

斧右　オヽ、お六の阿母、ようござんしたの。

くま　アレ、まだ阿房盡し居る。

斧右　さうして、なんぞ用かいの。

くま　オヽ、用がある、下に居をれ。

斧右　オッと下に居た。コレ、せか〳〵云はしやるな。また忘れるぞや。

くま　役に立たずの健忘病み、疾に追ひ出さうと思うて居たが、可哀さうにお六めが、目へ入れても痛うないやうに、大事がる此方の聟どのぢや。少々の事は料簡するワ。その代りにコレ、最前の物寄越せ。

斧右　最前の物おりや知らぬ。それを覺えて居る位なら、立派な奉公しますわいの。

くま　こりや尤もぢや。そんなら云はう。われが大事がる、この守ぢや。

ト斧右衛門が懐の一卷を引出す。斧右衛門悔り、その手を留め

斧右　アヽ、滅相な〳〵、これ遣つて堪るものか。こりや

おれが身にも命にも替へられぬ、肌身離さぬ大事の卷物。

くま　サア、よいわい、貰ひはせぬ、ちよつと貸せ。

斧右　否ぢや〳〵。貸す事もならぬ。

くま　ならにや、おのれ仕様があるが、母や女房を養ふ事さへならぬおのれを、いつまで置いて何にせうぞ。

斧右　エヽ、胴慾な、こなたはなう。

くま　なんでおれが胴慾だ。

斧右　そんなら云ふぞや。

くま　吐かしをれ。

斧右　もう斯うなつたら一期の瀨戸。

トよろしき合ひ方にて、斧右衞門、キッとなる。

コレ、云ふまいとは思へど、わしが健忘のこの病も、元の企みはこなたの業。

くま　ヤ、なんと。

斧右　こなたはなう。

ト合ひ方。

三年後の煩らひに、手足の筋を斷ち切られ、五體叶はぬおれが體。コレ、知るまいと思はつしやるか。その時は前後茫然と、辨まへた事もなかつたが、後にて思へば、播州飾磨のあたりにて、八重垣流の達人、一味齋民右衞門の兩人を、討つて立退いた京極內匠は、こなたの乳で育つた奴。この與五郎を失へと、密かの內通。その時に、なぜ一思ひに殺しては下さらぬ。生中娘の緣を思ひ、筋を斷たれて役に立たず、生き甲斐のないこの體。健忘と僞はつたも、何卒一度養生して、手練なしたる師匠の御恩、送らうものと思ひの外、日に增し手足の惱みは募る。神佛にも見放され、武運に盡きたと諦めて、成る程望みのこの一卷、こなさんの手へ渡しませう。その代りには一つの願ひ、どうぞ聞入れて下さりませ。

くま　ムウ、すりや、おれが和子の爲に、劍術手練のわれが體、不具にしたを知つて居るか。大病のうち一思ひに殺してしまふは易けれど、流石娘が戀聟どの、お六めに嘆きをかけまい爲、それに又おれ、願ひとは。

斧右　どうぞ仰しやつて下さりませ。

くま　そりや何を。

斧右　當時小倉へ仕官を望む、佐々木岸柳と云ふ者こそ、京極內匠でござりませう。

くま　イヤ、そんな事は、おれは知らぬ。

斧右　知らぬとあればこの一卷、渡せる事もなりませぬ。

くまでも洒落臭い事云ふな。打ち殺しても取らにやならぬ。とは云へそれも面倒なり、可愛い娘に連れ添ふ人。いゝワ、正直に云うて聞かす。成る程、佐々木岸流と云ふは。

ト云はうとする。この時、蒟垂れの内より、抜刀を突き出し、お熊を。ポンと切り倒す。斧右衛門、これはト立ちかゝるを、直ぐに一太刀浴びせながら、襟髪取つて、蒟垂の内へ引ッ込む。早揚らへにて内匠、一卷を口に銜へ、抜き刀にて、悠々と出る。吹替への斧右衛門、裏向きに取縋るを、蒞屏風の内へ蹴倒し、一卷を取つてニッコリと思ひ入れ。この時、向うバタ〳〵にて、貴田孫兵衛、戻つて來る。内匠、これにて抜き刀を納め、天蓋にて顔を隠し、門口へ出て、孫兵衛と行き違ひ、内匠、一散に花道へ入る。此うち時の鐘、合ひ方にて、奥より傳五右衛門先に峯松が手を引き、お六、佐五平、これに付き出て來て

傳五　杉坂の騒動餘所事に、すりや、この忰がその守、肌身にかけて所持すると。

トこれにて、孫兵衛、門口に様子を窺うて居る。

佐五　ハイ、成る程、不思議な所に泊り合せ、傳五右衛門さまのお目にかゝりまするも、このお子様のお仕合せ。守に入れて掛けてござる御戒名は、即ちお祖父様方お母様、この佐五平めが證據でござります。

傳五　ハテ、存じがけもない。すりや、其方は一味齋の子息、佐々木官次郎が忰、民右衛門の娘お照が腹に出生せし、峯松であつたか。ヤレ懷かしい、娘孫の對面。

ト引寄せて、ヂッと顔を見る。

峯松　アイ、わしが名は峯松。そんなら伯父様、お前はわしが父様や母様の、行くへをよう知つてござるかや。

傳五　オヽ、知つて居る。不便や其方は様子を知らるな。その兩人も返り討。

ろく　モシ、此やうにまで御一門の、お仕合せの悪い悲しいお便り。せめて此方の斧右衛門どのが、昔の與五郎で御家來の時のやうに、お力にもなられる仕儀ならば。

傳五　サヽ、それゆゑに拙者が旅行。最前の文、京都よりくれ〴〵拙者へ、與五郎の身の上、例へ助太刀叶はずとも、八重垣流の陰の一卷、峯松へ與へておくりやるやう、早急ながら頼み申す。

斧右　チエ、口惜しい。その一卷、曲者に奪ひ取られたわやい。

ろく　ヤア、その聲は斧右衞門どの。
　ト孫兵衞も悔り、お六と共に走せ寄つて、莚屛風を引き取る、此うちに斧右衞門、痛手の形にて、苦しんで居る。孫兵衞、お熊が死骸を見付け
孫兵　ヤ、、何者の仕業にや母者人までを。オ、、早絶切れしか、是非もない。
　ト取縋つて思ひ入れ。お六、斧右衞門を介抱して
ろく　コレ、斧右衞門どの、思ひも寄らぬこの深手。樣子はどうして。相手は誰れぢや。
斧右　八重垣流の一卷、渡せよとある母の難題。顏知らぬ敵の京極內匠、變名の樣子尋ねんと思ひの外に、何者やら母を害なし、一卷をも奪ひ取られて、この深手。
孫兵　ヤ、、すりや途中に行き合ひし、もしもや宵の修行者め。
佐五　一卷望むも敵の依賴。
傳五　これも京極內匠が業か。
ろく　モシ、斧右衞門どの、すりやお前は、敵の姓名替へたる樣子。
斧右　知つたは最前、引裂き捨てたるその一通が、敵の密書。物云はせてくれるな。痛手の苦痛。

　トのり返るを、傳五右衞門、腰なる三尺手拭にて、斧右衞門が疵口をしつかと卷き
傳五　コリヤ、腑甲斐ない、氣を慥かに。
孫兵　引裂き捨てし文字の片端、その密書とは、トゞどこに。
　ト孫兵衞、佐五平、三人して選り分け
佐五　畑年貢五升三合、永錢六拾九文……エ、、こんな物ぢやあるまい。
　トまた選り分け
ろく　兼ねて某を敵と付け狙ひ申し候ふ。
孫兵　オ、、それぢや〳〵。
　ト取つて
敵と付け狙ひ申し候ふ……サア〳〵、後が見えぬ〳〵。
　トまた掻き探し
それより本間六郎の、越知の館へ入り給ひ、南無妙法蓮華經……エ、、こりや法華の歎和讃ぢや。
佐五　卯月八日は吉日よ、神さげ虫を成敗ぞする。
孫兵　エ、、それでもないワ。
　トまた焦れながら掻き探し
一味齋が倅官次郎……オ、、これぢや。

ト皺を延して、押廣げ

一味齋が悴官次郎、民右衛門が娘お雪、母諸とも小栗栖に於て、返り討に致し候へば。

傳五　それ〳〵、また後が見えぬ〳〵。

ト掻き探し

ナニ〳〵、この上は九州へ立越え、仕官の望み、もし又變名の事も計り難く候ふまゝ、その段お心得なし下され。

ろく　猶また官次郎が悴並びに繁藏、見付け次第お討取りなさるべく候ふ、以上、月日。

孫兵　春風藤藏どのへ。京極内匠。

傳五　すりや内匠めは改名して、仕官を望むその密書。

斧右　これにて思ひ合すれば、當國小倉の立花家へ、手筋を求めて奉公望む、佐々木岸柳と云ふ曲者こそ、正しく敵の京極内匠。

傳五　當所に在る事知つたる上は、猶豫ならざる敵討。

ろく　そのお力にと思し召す、與五郎どのゝ身の成果て。

佐五　吉岡一家の根を斷つて

孫兵　枝葉を枯らす敵の手段。

傳五　頑是なくとも峯松聞け。おのれ不敵の京極内匠。

トきつと云ふ。斧右衛門、これにて、眼を見開き

斧右　峯松さまへ助太刀は、主從三世のこの與五郎。

皆々　ヤ、なと。

斧右　イヤサ、女房お六はどこに。

ろく　アイ〳〵、いとしや深手の弱り。モウコレ、わたしが見えぬかいなア。

斧右　未練な、嘆くな、みな約束。七年以前其方と夫婦になりしその時より

ろく　敎へ置かれし流儀の一手。

斧右　今の曲者、内匠ならば

ろく　親と夫の仇敵。

斧右　思へば無念のこの深手。魂は冥途へ赴くとも、魄は女房が五臟へ分け入り

ろく　おのれ京極。討たいで置かうか。

トきつと思ひ入れ。この時、後へ惡者一人、柴垣より窺ひ出で

惡者　さうはさせない。先づ餓鬼を

ト峯松へかゝるを、孫兵衛、キッと引付け

孫兵　とは云へ敵は微塵流。

佐五　心元ない女の働らき。

傳五　試す仕様は。

ト　お六へ切り付けるを、突き廻して、有り合ふ石臼を取つてちよつと立廻り。傳五右衛門が刀を石臼にて見事に押へ

ろく　これでは敵が討たれませうか。

孫兵　油断大敵。

ト　惡者を突きやる。其まゝお六へかゝるを、傳五右衛門が刀を跳ね退け、惡者を見事に投げる。皆々これを見て

三人　出來た。

ト　木の頭。

ろく　夫の形見。

ト　惡者を大地へ踏み込む。斧右衛門、ニッコリ落入る皆々キツと思ひ入れ。

ひやうし幕

七　幕　目

月本屋敷の場

役名――月本武者之助。轟傳五右衛門。貴田孫兵衛。石川重之進。奴、筆内。絹川彌三郎。下部、鐵平。同、九平次實ハ友平。腰元、若葉。月本妻、お才。吉岡娘、お園。斧右衛門女房、お六。官次郎一子、峯松。若黨、佐五平。佐々木岸柳實ハ京極内匠。

本舞臺、三間の間、平舞臺、見附け屋敷塀、正面廂續きの稽古場。これに木劍竹刀掛け並らべ、軒口に蓬、菖蒲を挿し、上の方塀の後に幟吹き流がしを建て、すべて月本武者之助、劍術稽古場の模様よろしく、幕の内より彌三郎、着附け麻裃にて、誂らへの高札を持ち、奥へ行かうとして居る。重之進、筆内、着附け馬乗り袴にて、立ちかゝつて居る。お才、衣裳、裲襠。若葉、腰元の形にてこれに附き添ひ、眞中に双方を留めて居る。舞のかゝりにて幕明く。

重筆　絹川彌三郎どの、その高札お渡しなされ。

彌三　イヤ、この高札は大殿の御直筆、猥りに手ざしは狼藉至極。

さい　殊には夫武者之助が、武藝を賞美のこの文言。

彌三　御城下は元より、他國にまで、人も知つたるこの高札。

若葉　重之進さま、筆内さま、何ゆゑ聊爾なされまする。

重之　何ゆゑとは知れた事。その高札に記しある、月本武者之助に打勝つ者あらば、知行祿高高祿宛て行ひ、國の師範となされべきこの文言。
筆内　隣國他國も照り輝く、月本流の廣言を、佐々木岸柳と御前の立合に、打倒れた武者之助どの。
重之　先生の恥は我れ〳〵の恥辱と、押隱しても惡事千里我れ〳〵が鼻がひしやげたと云ふもの。
筆内　恥かき次手にその高札、岸柳どのへ持つて行き、干鱈代りの印の手土產。その高札を弟子入りの進物。
重筆　絹川どの、此方へ渡し召され。
彌三　イヤ、どうあつてもこの高札、其方へは渡されぬ。
さい　爭ふものは中に立ち、そりや私しがお預かり申しませう。
若葉　憚りながら、こりや奧樣、左やうなさるがよろしうございませう。
重之　イヤ、今までは先生の御內寶でも、流儀を替へる氣になれば。
筆内　女の差出る場所ではない。サア、彌三郎どの、その高札。
彌三　見事欲しくば眞劍づく、打ち放して持つて行きやれ。
重筆　面白い。刀にかけて持つて行く。
彌三　何を小癪な。
ト詰め寄る。奧にて
傳五　待つた。いづれも。先づ〳〵お扣へ下されい。
ト皷の調べになり、下座より傳五右衞門、着附け麻上下にて出る。皆々傳五右衞門を見て
さい　これは轟傳五右衞門どの。
彌三　我れ〳〵がこの場の爭ひ。
重筆　委細を知つて止め召さるか。
傳五　如何にも樣子承つたが、その高札を取捨てんとは殿への不忠。
皆々　なんとお云やる。
ト傳五右衞門、彌三郎が持つたる高札を取り
傳五　ハテ、この書面は當主の御城主、御直筆にてこの如く、月本に打勝ちたる者あらばと、武術を御自慢あつたる文言。それを此まゝ取捨てなば、武藝未熟の月本を、多年扶持せし小倉の領主は、愚盲なるとて世の嘲り、忽ち人に觸れ流すも同然。それゆゑ轟傳五右衞門、お止め申したのでござる。

彌三　ムウ、轟氏の仰せも一理。左やうでござればその高札、兎も角も貴殿の詞に附いて。

重内　一圖に爭ふ、我れ〳〵も麁忽。

筆内　この場の事は追つての沙汰。

さい　取分け今日は端午の節句。アレ、あの通り、幟の數々。

彌三　武家繁昌の時津風、靡き隨ふ吹き流し。

傳五　殿の仁德、何事も疎かには、思ひ召されぬがようござる。

ト向うより「佐々木岸柳さまお入り」と呼ぶ。

皆々　ナニ、佐々木岸柳どの、入來とは。

彌三　岸柳どのゝ入來とあれば、拙者は奧にて、月本氏の歸宅を相待ち、何かの對談。

傳五　然らば彌三郎どの。

彌三　轟どの、後刻御意得ませう。

ト合ひ方になり、彌三郎刀を提げ、奧へ入る。また「岸柳さまお入り」と呼び、太皷謠になり、花道より岸柳、長髮の形にて出て來る。後より鐵平、菖蒲革、足輕拵らへにて出て來て

岸柳　潛龍既に地中を放れ、宇佐八幡へ御代參の役目を蒙むり、佐々木岸柳、その儀に附いて月本氏へ、面談が致したい。未だ下城いたされぬかな。

さい　夫武者之助は、未だ下城いたしませねど、御用とあらば御遠慮なう。

傳五　拙者は他門。播州飾間の藩中、月本どのに內談あつて相待つ折から、岸柳どのには幸ひの御入來。

重之　何は兎もあれ岸柳どの。

筆内　先づ〳〵これへ

皆々　お通り下されませう。

岸柳　然らばいづれも。許し召されい。

ト矢張り太皷謠の切れにて、岸柳、鐵平を連れ、本舞臺へ來て、上の方へ通り、傳五右衛門お才若葉、附いて眞中に住ひ、その次に重之進筆内、鐵平扣へる。傳五右衛門、こなしあつて

傳五　ア、誠に一國に並びなき、八重垣流の武術の達人、月本武者之助どのに、なんの苦もなく打勝ちし岸柳どの、大方は近くに聚樂の御所より、お召しでござらう。近頃お羨ましい儀でござる。

鐵平　そりや仰しやらすと知れた事。月本に勝ちし者あらばと、高札を建て置かれしところ、鞍馬山の僧正坊も、

閉口させるおらがお旦那、岸柳さまが顯はれ出て、八重垣流は散り骨灰。微塵流には及びもない事。

岸柳　コリヤ〳〵、鐵平、そりや何を申す。月本氏の御内寶・門弟中もこれに列座。ツカ〳〵と麁忽千萬。イヤナニ、播州のお客人、殿より高知を賜はれば、武士が武藝の自慢には及ばぬ。月本に勝つ者あらばなど〻、あの高札、今となつては塵芥、捨つべらずの札も同然、落書き無用、辛い味噌はよしにさつしやるが、へ、、ようござるてなア。

筆内　今に始めぬ岸柳どの〻お詞、奧床しい御流儀でござれば。

重之　我れ〳〵ども、以來微塵流に傾きまするでござらう。

岸柳　アイヤ〳〵、それでは却つて岸柳が迷惑。この儀は自他とも御容赦下され。ハテ、豐前の國に名譽の達人、月本氏のお弟子をば、掻き取るやうで近頃氣の毒。日本國の劍術者は、皆岸柳が門弟同然なれば、改めて仰せらる〻にも及ばぬ儀でござる。鐵平々々。

さい　岸柳さまへ申し上げまする。今日これへお入りの事は、兼れ〳〵夫武者之助、申し付け置きましたれば、菖蒲の九献、何はなくとも、ナウ若葉。

若葉　畏まりましてござりまする。御馳走は奧のお廣間にて、岸柳どのには、先づ暫らく。

重之　ナニサマ、お手柄あつた岸柳どの〻お杯。

筆内　我れ〳〵もあやかりたう存じまする。

岸柳　イヤモ、御馳走は勝手御無用、月本氏の歸宅まで、奧でゆるりと寛ろぎ申さう。

ト立たうとする。

傳五　イヤ、それは餘り一興。いま暫らく、これにてお物語りしたい。いづれも、次手がましうござれど、この傳五右衛門、岸柳どのへ改めまして、御覽に入れる一腰がござるが、御面倒ながら、お目利なされては下さるまいか。

岸柳　ムウ、貴殿のお差し料でござるか。但し又、お求めなさるお刀かな。

傳五　アイヤ、新たに求めし白鞘物。何卒お目利なされ下されい。

岸柳　まだお差し料でなくば、岸柳目利いたして進ぜう。

傳五　それは近頃、忝なう存ずる。

岸柳　して、その刀、御持參でござるか。

傳五　如何にも、家來に持たせ、召連れましてござる。中間佐五平、申し付けたる一腰、持參いたせ。

ト下座にて

佐五　ハア、。

ト合ひ方になり、佐五平、前幕の形にて、紺看板、一本差し、刀の箱を持ち出で、傳五右衞門が前に置き、鐵平の脇に扣へる。

傳五　中心を清めの水を持て。

佐五　ハッ。

ト下の方の手桶、柄杓を持つて出る。鐵平も岸柳が側へ來る。傳五右衞門、刀の箱を岸柳が前へ直す。

重之　後學の爲、我れ〳〵も。

筆内　岸柳どのゝ刀のお目利。

ト立ちかゝる。

岸柳　すべて刀は劍相が第一、あながち切れ味には依らぬもの。彼の世俗に申す、水もたまらぬと申す例へ、お聞かせ申さう。ドレ。

ト佐五平柄杓を取る。手桶の水を汲んで持ち、鐵平、刀の箱を明けさうにする時、フッと佐五平と顏見合はせる。佐五平、岸柳をヂッと見て

佐五　ヤア〳〵。

ト大きに愕り、持ちたる水を、鐵平が頭へ掛ける。鐵平驚ろき、ズッとこちらへ來て膽を潰したる思ひ入れ。傳五右衞門、佐五平を見てこなし、

各々へ對し無禮至極。如何いたしたのぢや。

鐵平　おれが體を頭から、水浸しにしやアがつた。

佐五　イヤサ、その水浸しで、思ひ出しても冷やりする。

モシ、傳五右衞門さま。

ト傳五右衞門を引ッ張り出し

アレ、あの人が親旦那を始め、誰れも彼れも殺した奴でござりまする。

傳五　なんと申す。

ト岸柳思ひ入れ。

鐵平　ヤイ〳〵此奴、氣が狂つたか。寢呆けたか。何を吐かすのだ。

さい　岸柳さまを見るや否、愕りして今の詞。傳五右衞門さま、これには何か、樣子のありさうな事でござりまする。

重之　出附けぬ場所へ出たゆゑに、大方場うての愕りか。

筆内　晝寢の夢を起されて、寢呆けて居るも知れませぬ。

ト傳五右衛門、始終心を附けて思ひ入れ。岸柳、佐五平を見て

岸柳　傳五右衛門どの、あの下部は、其許の御家來か。

傳五　アイヤ、成る程、遠類どもの召使ひ。折ふし今日、拙者方へ借り受けました、家來でござりまする。岸柳どのにはあの中間を、もしや御存じはござりませぬか。

岸柳　イヽヤ、存ぜぬ、知りませぬ。岸柳、當地へ仕官いたしたは、やう〳〵先月。他國の拙者があの中間、知らうやうはござらぬて。

ト此うち佐五平、岸柳が顔を怖々見て

佐五　違ひなし、矢ツ張りそれぢや。エヽ〳〵、ほんにおのれはなア。

傳五　コリヤ〳〵、そりや何を申す。あなたは誰れあらう一國の御師範、佐々木岸柳のぢや。

佐五　イヽヤ、そんな名ぢやない、京極内匠ぢや。

傳五　なんと。

ト岸柳、ギックリして、さあらぬ思ひ入れ。

佐五　内匠も内匠、悪だくみの骨頂と云ふ奴でござりまする。

岸柳　轟氏……イヤサ、傳五右衛門どの、拙者耳にはさへませねど、あの中間めがこの岸柳を、人違ひで悔り致した様子。こりや斯う致さう。世には似た顔の人もあれば、とくと拙者をお見せなされて、彼れめに得心さするがようござる。

傳五　イカサマ、こりや御尤もの仰せ。陽虎に似たる孔子さへ、人の疑ひはあると承る。コリヤ、佐五平、其方慥かに覺えあらば……イヤサ、覺え違ひの疑ひ晴らし、岸柳どのゝお目通り致せ。

鐵平　コリヤヤイ、おらがお旦那を、とつくりと見覺えて置け。キヨロ〳〵とした事を吐かすと、此奴、料簡しないぞ。

岸柳　ドレ、そな者、それへズツと出い。怖い事はない。

ト傳五右衛門、佐五平を連れて、前へ押し出る。佐五平、おづ〳〵前へ出て、岸柳を見て、傳五右衛門が方へこなし。

岸柳　コリヤ、下郎よ、何か今、其方が申した、なんとやら云ふ奴が、身に似て居ると申すか。

トぢつと顔を見せる。

佐五　イヤサ、似たのではない。

岸柳　覺え違ひか。

佐五「矢張りこなたぢや。
岸柳　なんと申す。
　トきつと云ふ、佐五平、おど／＼して
佐五　こなたぢや／＼／＼。
　ト傳五右衞門に取りつきながら云ふ。
鐵平　ヤイ／＼、無性にこなたぢや／＼／＼と吐かすが、なんの事だ
佐五　イヤサ……モシ、コレ、傳五右衞門さま、アレ、彼奴が敵京極内匠めでござりまする。内匠ぢや／＼／＼、こなたぢや／＼／＼。
岸柳　コリヤ、下郎よ。氣を靜めて、とつくりと見ろ。
　ト傳五右衞門、また佐五平を前へ押しやる。佐五平岸柳をヂツと見詰める。
　なんと身共が……イヤサ、身共ではあるまいがな。
　トぐつと睨めつける。佐五平「エ、」と口惜しがる思ひ入れ
　ハ、、、傳五右衞門どの、下々と申す者は、とり所もないもの。コリヤ、そな者、よく聞けよ。身共は佐々木岸柳と云ふ、一國の師範。月本武者之助さへ打ちのめした身共。鬼神でも手ざしは出來ぬ。及ばぬ事だ程に、われもさう思つて、今のうちに頭でも剃りこぼつて、千ケ寺にでもなつたがよい。
傳五　佐五平、岸柳どのは、しかと其方が覺え……イヤサ、覺え違ひか。
岸柳　覺え違ひでもあらうがな。
佐五　サア、さうぢやさうにござりまする。
鐵平　お旦那に慮外吐かした、その代りに、この鐵平が。
　ト拔きかける。傳五右衞門、突き廻して佐五平を下手へ圍ふ。
　岸柳どのに教へられた、奴が手の内。
　ト佐五平を目當に、手裏劍を打つ。佐五平、身をかはす。傳五右衞門、扇にて打ち落し
傳五　イヤ、先生の教へ方は天晴れ。
佐五　なんぼう安い命でも、まだ手裏劍づらでは殺されまい。
傳五　こりや、佐五平が申す通りぢや。
佐五　マア、この小柄は、其方へ返上……エイ。
　ト後向きに打つ眞似をする。鐵平、摑んだ心に、握り拳を出し
鐵平　ドツコイ、滅多に油斷はせぬわい。

ト思ひ入れ。

佐五　イヤ、うろたへまい。手裏劍はまだ爰にある。

ト小柄を出して見せる。鐵平、手を見て

鐵平　エヽ、いま／＼しい。

トこなし。八ツの時計鳴る。

さい　最早時計も八ツの刻限。

重筆　武者之助どのゝ御歸宅でござらう。

岸柳　刀の目利は又後して。無益な事で思はぬ隙入り。傳五右衛門どの。

さい　マア、何事も暫らく奥で、夫の歸宅いたすまで。

岸柳　相待ち申さう。鐵平も身と一緒。

鐵平　畏まりました。

重筆　我れ／＼どもも、御酒のお相手。

さい　御案内申しや。

若葉　イザ、岸柳さま。

岸柳　傳五右衛門どの。

傳五　拙者は後より。

トちよつと佐五平、思ひ入れあつて

皆々　後刻御意得ませう。

ト唄になり、腰元先に岸柳、鐵平、重之進、筆内付き添ひ、下座へ入る、あと合ひ方。傳五右衛門、お才、佐五平殘り。こなし。傳五右衛門、件の刀箱を取上げ

傳五　吉岡が若黨佐五平、岸柳が面、とくと見覺え居るか。

佐五　親旦那を始め官次郎さま、お雪さまをも返り討したあの大惡人、この國に足を停めるは幸ひ、あなた樣の御推擧、月本さまのお情にて、旦那方の修羅の御無念を。

さい　すりや、夫武者之助どのが、心にかけての事なれば、氣遣ひな事はなけれど、岸柳が實名は、いよ／＼噂に聞き及ぶ

佐五　京極内匠に、違ひござりませぬ。

傳五　さすれば兼ねて聞き及ぶ、八重垣流の一卷を。

佐五　彼奴が慥かに持つて居れば

傳五　首尾よく身共が取返し。

瀧野　やがて本望。

佐五　お主の敵。

傳五　コリヤ。

ト押へる。チョン／＼にて道具廻る。

本舞臺、三間の間、向う金襖。上の方、塗り骨の障子屋體。下の方、立ち木。人の登るやうにして、こ

その　の柴垣、いつもの所に枝折り門、手水鉢、すべて月本の屋敷、奥の間のかゝり、琴唄にて道具とまる。
ト奥よりお園、振り袖、娘の形にて、鏡立てに鏡を載せ、持つて出る。後より若葉、櫛箱持ち、出て來る。
弾き流しの合ひ方。お園、鏡立てを下に置き

その　若葉どの、お才さまは、そこへ行くと仰しやつたかいの。

若葉　最前お風呂を召したによつて、お髪をお直し遊ばすであらうと思ふわいな。

その　そんならマア、この鏡立ても、お櫛箱も爰へ直して。
ト二重舞臺の上に置き
それに何やらお客があると云うて、お廣間を掃除して居たぢやないかないア。

若葉　サイナア、御代參のお使者とやらで、佐々木岸柳どのがお入りなさるといなア、

その　それなら今日この屋敷へ、佐々木岸柳どのが、お出でなされるとかえ。
ト思ひ入れ。

若葉　もう追ツゝけ、お入りであらうかいの。

ト向う揚げ幕にて

九平　ヤイ〳〵女め、どこ〳〵行く。下がり居らぬか。

ろく　ハイ〳〵、どうぞお通しなされて下さりませ。
トてんつゝになり、向うよりお六、以前の形にて、麻社杯一本差しの峯松が手を引き、後より九平次、足輕の形にて、杖を突き出て來る。

九平　コリヤヤイ、門番のおれに斷わりもなく、ツカ〳〵とわれは、どこへ行く、もうお庭先だが、下がり居らぬか。

ろく　どうぞお通しなされて下さりませ
ト云ひながら、お六、峯松が手を引き、本舞臺へ來る
お園、若葉、これを見て。

若葉　御門番の九平次どの、アタ騒がしい、何事ぢやぞいの。

その　さうして、見れば小さいを連れた若い女中、月本どののお屋敷と知つて、尋ねてござつたのかいな。

ろく　ハイ、成る程、月本どのゝお屋敷へ、わざ〳〵參りました者でござりまする。

九平　それならば猶の事だ。お旦那は、まだお歸りではないわい。

ろく 左やうならば、旦那樣は、まだお下がりではござりませぬかいな。
九平 お下がりでないから、マア、てまへが爰を下がるがよい。
峯松 小母樣。そんなら又、在所へ戻るのかや。
ろく イヽヤイノ、なんの在所へ戻つてよいものかいの。
九平 ハテサテ、早く下がらぬか、下がれ〳〵
ト やかましく云ふ。向う揚げ幕の内にて「旦那のお歸り」と呼ぶ。
圍若 アレ、旦那樣のお歸りぢやわいの。
ト また向うにて「お歸り」と呼び、唄になり、花道より武者之助、着附け上下、退出がけの形、若黨一人箙の梅の兜人形を持ち出て來る。後より孫兵衛、着附け袴羽織、町人の拵らへにて出て來る。お六、おづおづと峯松が手を引き、九平次やかましう云ひながら追ひたてる。花道よき所にて行き合ひ
武者 ムウ、見れば女の小兒を連れ。何か樣子のあるべき事。九平次。マヽ、扣へい、
九平 ヘエヽ。
ト 九平次、本舞臺へ、お六峯松を連れて戻る。武者之助、孫兵衛、本舞臺へ來て、孫兵衛は上の方、武者之助は二重に上がり、若葉、人形を武者之助が側へ直す
圍若 旦那樣、只今お歸りなされましてござりまするか、
ト 茶莨盆を運ぶ。
孫兵 武者之助どの、今日はおめでたう存じまする。
武者 ムウ、お出入りの町人、貴田孫兵衛、叮嚀に家中のお禮か。
孫兵 ヘイ、御家中へ端午のお禮を、相賴みまして、あなた樣のお歸りを相待ち。
武者 それは忝ない、マヽ、ゆるりとしやれ〳〵。
その旦那樣の、孫兵衛どのを御同道遊ばしましたは。
武者 いま聞きやる通り、節句の禮に參つたとの事。馳走しやれ〳〵。
孫兵 アイヤ、まだ旦那には、お話しもござりますれば。御馳走は御免下さりませ。
武者 コリヤ九平次、して、その小兒を連れ立ちたる女は、この武者之助に用事あると申すか。
九平 何か樣子は存じませぬが、ツカ〳〵とお庭先へ通り、只今の仕儀でござりまする。
武者 ムウ、ナニサマ、願ひ有りげに見える。追ツつけ呼

び出し、承るであらう。先づそれまで、其方が部屋にでも待たして置け。ソレ若葉、案内いたせ。

九平　ヘイ〳〵、畏まりました。サア、女のかみさん、旦那が待たしてお置きと仰つしやる。おらが部屋で待ち合せなさい。

若葉　サア、女中さん、ござんせ。

ろく　左やうならば、ちつとの間、お前のお部屋へ參じまして。

九平　その子に晝寢でもさせるがよい。ヤレ〳〵、可愛らしい子ではあるわい。

ト合ひ方になり、お六、峯松を連れ、九平次若葉これに附いて、上の方へ入る。

ト下座より彌三郎出て

彌三　武者之助どの、只今御退出でござるか。お歸りを相待ち申した。

武者　絹川彌三郎どの、拙者が歸りをお待ちなされたとわな。

彌三　八重垣流の達人と呼ばれし月本武者之助、貴殿は武士でござらぬぞ。

武者　ムウ、藪から棒の下世話の詞、云はせて置くは法外千萬、武者之助を武士でないとは。

彌三　くど〳〵申すに及ばぬ仔細。これに居る腰元のお園は、吉岡一味齋が弟娘でござらうがな。

ト　お園、思ひ入れ。

イヤサ、この度殿より高知を賜はり、立身なしたる佐々木岸柳こそ、誠は播州飾磨の浪人、京極内匠どの、御前に於て彼の岸柳、其許を物の見事に打ち据ゑたれば、天晴れの達人なりと、一國の取沙汰、既に以て明日の御代參も、岸柳に仰せつけられましたぞや。

武者　それがなんと致した。武者之助より岸柳が、拔群業が達したゆゑ、勝負ぢやもの、負けませいでは。

彌三　イヤサ、さうでない。御前の勝負に打負けしを無念に思ひ、一味齋が一家に腰押して、敵を討たうなんどとなりや、疫病の神で敵討、御前の意趣を晴らせる卑怯者と、密かに取沙汰いたしますぞや。

武者　ハテ、沙汰があつたらなんと致さう。武者之助が心に、左やうな卑怯未練がなければ、豐前一國が寄り集まつて、耳の側で申さうが、ちつとも恥辱には存じませぬ、

彌三　今宵岸柳が、この屋敷へ參るゆゑ、手引して討たせ

る所存と、岸柳に附き添ふ門弟は、手具脛引いて待つて居るぞや。

武者　例へ門弟が一つになつて、岸柳に一味し、武者之助が屋敷へ押寄せたりとも、やみ／＼殺されるやうな武者之助ではない、お案じなされな。

彌三　すりや、いよ／＼その心底に違ひござらぬか。

武者　御念に及ばぬ儀でござる。

彌三　フム、拙者とても大殿より、密かに仰せを蒙むりしとは云へど、播州にて紛失の、武宗皇帝が詩の色紙、詮議をゆだね、取り得しも、敵の變名探らん爲。斯程に心を砕く拙者が心底。貴殿の胸が定まらねば、殿の内意は打明かされぬ。

武者　岸柳は只今同席の朋輩、私しの意趣は殿への畏れ。

彌三　すりや、討取る所存はござらぬか。

武者　兎角命が大切サ。

彌三　それでは殿のお目鑑の曇り。

武者　月本武者之助は武士、氣遣ひ召さるな。

彌三　拙者も安堵いたすやう、武者之助、とくと御思案なされて下されい。

ト唄になり、彌三郎、思ひ入れあつて上の方障子屋體へ入る。あと合ひ方、孫兵衛、おその、思ひ入れ。武者之助、こなしあつて

武者　さて、これからはお出入りの町人、貴田孫兵衛、武者之助に何の用事とは、

孫兵　憚り多き町人の孫兵衛、改めて武者之助どのへお願ひ、

武者　ナニ、願ひとは。

ト合ひ方になり、柴垣の蔭よりお六、峯松を連れ出かけ、切り戸の外に佇み、窺ふ。孫兵衛、以前の兜人形を取つて

孫兵　そのお願ひと申しまするは、この人形。

ト武者之助が前へ直す、

武者　この人形を願ひとは、ムウ。

ト思案のうち

孫兵　梶原源太の箙の梅、手柄は二度の駈けとやら、譽を顯はす勝色のお願ひ、御思案なされて下さりませ。

武者　ムウ、この武者之助が御前の立合ひ、再度殿へ願ひを上げ、又の試合を願へと云ふのか。

孫兵　サア、その二度の驅けを岸柳と。

武者　イ、ヤ願はぬ。

初演の繪番附

孫兵　なんと仰せられまする。
武者　岸柳と再度の試合を進め、打ち据ゑさせて御前を乞ひ受け、吉岡一家に敵討の、願ひをさせんと云ふ貴田孫兵衞、これなるお関と申し合はせ、知らず顔にて身が屋敷へ、願ひに參つたのであらう。
孫関　エヽ。
ト兩人、思ひ入れ。
武者　切り戸の外に扣へ居る、小兒を連れし願ひの女も、岸柳を討たせくれよと云ふ、願ひであらうな。
ト　お六、切り戸を明け、峯松を連れ、ズッと入る。
ろく　御推量の通り、敵討のお願ひでござりまする。
孫兵　姉者人、最前お目にかゝりましたれど、樣子もあらんと差扣へ、いま打明けてお前にも、心は替らぬこの場のお願ひ。
その　そんなら常々孫兵衞どのゝ、お話しで承りましたお六さま。お目にかゝるは今日が初めて。尤も私しは幼ない時、惡者の爲に拐かされ、あそこや爰に流浪の後樣子を聞いて、月本さまへ、便り求めし御奉公に參りましたも、何卒首尾よう本望を。
ろく　夫は八重垣一流の、奥儀を極めし身ながらも、叶はぬ病に劍の難。儘ならぬ身を悔み死。後に見捨てゝ參りましたも、一方ならぬ仇敵。
武者　イカサマ、一味齋が弟娘、父の敵を討たん爲、某を頼み、身が方へ腰元奉公。よりよりく嗜む長刀小太刀千辛萬苦、忠孝の表は立つても、お六兄弟三人ともに、心が違うた。
三人　ナニ、私しどもの心が違ひましたとは。
武者　ムウ。
ト有り合ふ鏡を取つて
白雲宵て黑しと云ふ。世に斯程重寶な物はない。コリヤお六どの、鏡を見よ。同じ鐵にても、表は磨くに依つて光る。諸色萬相を寫し、裏は研がざるによつて影も映らぬ。人も丁度此やうなもので、おのれおのれが一心に、砥石で、磨き負ふせば、コレこの如く、鏡となつて神明の御簾にかけられ、和光同塵の塵に交はり、善惡殊に隔てなく、慈悲正直の頭に宿り、善は善、惡は惡と、鏡の面に顯はれなば、政道にも及ばず。恐らくこの日本に、惡人は二人もあるまい。そこを覆ひ隱すは和光の塵。面は人に似たれども、内心はどのやうな心があらうも知れぬ。なんとお六、孫兵衞、さうではないか。

ろく　そんなら、わたしにお疑ひがござんして。
武者　イヤ、其方ばかりでない、孫兵衞、其方にも、譬へを以て云ひ聞かさう。コリヤ兄弟、イヤサ、こりや鏡立てぢや。俗に取つて云はゞ人間の兄弟も同然。一方缺けても立ち難ない。こりや斯うすれば、コレ、轉ける。斯うすれば立つて居る。兄弟心を合せ、正直の神の鏡、神の頭に宿り、親孝行の惠みに依り、首尾よう敵を討ち負ふせば、末の世までの譽なれども、容易く討たるゝ岸柳でない。これ神明の加護を受け、兄弟心を一致にして、立てば立つこの鏡立て……コレ、斯うすれば、これが最屓の引き倒しと云ふ。一つになつて倒れるも同然。この鏡に映る顏容、善人の顏を直ぐに映し、惡人の面も歪みなく……「眞如とは心もなくて流石また、水の底にも消えぬともし火」……なんと兩人、武者之助が一言は、ひしと應へたであらう。
　トきつと云ふ。お六、孫兵衞、ツカ／＼と武者之助が側へ寄つて
ろく　二人が心をお疑ひなさるゝ武者之助のお詞。
孫兵　善も映れば惡も映るとは、二人が胸が映りまする。
武者　ハヽア、映るは／＼。怒つて向へば怒つて見え、笑へば笑ふこの鏡。胸の鏡を打ち割らば、二人ともに生きては居られまい。見事死んで見せうかよ。
ろく　夫の遺言、お主の仇。
孫兵　それに繫がるこの孫兵衞、命を惜しんで敵討の願ひがなりませうか。
ろく　そりや武者之助さまの、お詞とも覺えませぬ。
武者　腰元そのが親の敵と、狙ふ佐々木岸柳が、乳母と云ふは其方達、二人が母であらう。
六孫　エ、。
　ト悄り思ひ入れ。
武者　イヤサ、二人一緒の願ひと云へど、心は別々。岸柳を敵と附け狙ふ此お園、身が屋敷より暇取り、父兄弟の岸柳の爲に、密かに刺し殺してがなしまはうと云ふ、其方達二人が心であらうが。
孫兵　モシ、武者之助どの、そりやあなた樣の仰せなれど、岸柳を育てし私しの乳母、末に到つて敵の乳兄弟にならうかとて、親の血筋を切られませうか。
ろく　その母までもやみ／＼と、非道の刃に果敢ない最期。これ程知れた兄弟を、矢ツ張り岸柳が由緣の者とは。
孫六　エヽ、お情なうござりまする。

武者　イヤサ、吉岡一類は流儀の同門と云ふ、膠漆の交はり。たま〳〵一味齋が娘に請合うた、敵を討たしてくれうと約束した詞は金鐵。やわか違はうやう筈はない。京極内匠、變名してこの國へ入込みしと聞き、より〳〵心をつけしところに、この程德入寺の門前にて、某を賴み老母を育くむ浪人の、活計と僞はり、この武者之助に御前の立合、打負けてくれよとの賴み。武士に似合はぬ卑怯な奴と思へども、この國に足を停めさせ、これなるお園に本望遂げさせうと思ふばかりに、月本武者之助ともあらう者が、侍ひの恥を捨て、恥辱をかいて殿の御前、諸家中の面前、滿座の中で岸柳づれに打たれたわやい。斯程まで、心を碎くも、流儀の祖たる一味齋が、本望を遂げさせたいばつかりぢやわい。その上いつぞや岸柳が母と僞はりしは、其方が母であらうがな。さすれば疑ひないとも云はれぬ。それになんぞや似つこらしく、賴みありげな訴訟して、お園を連れて行かんとは、オ、さうかと云ひさうな、武者之助ぢやと思ふかやい。

　トきつと云ふ。お六、孫兵衞、思ひ入れあつて

六孫　さうぢや。

　ト死なうとする。峯松、お六に取縋り

峰松　小母樣、なんで死ぬるのぢや。

武者　コリヤ待て。兩人、なんで死ぬる。

ろく　よしない母の縁により、夫の遺言を背くといひ

孫兵　お疑ひを受けたれば。

武者　イヤ、いま死ぬるは、いよ〳〵云ひ譯なさに死ぬるぢやな。

六孫　お情ない、その疑ひを晴らさう爲に。

　トまた死なうとする。

武者　コリヤヤイ、死んで云ひ譯が立つか。屍が物云うた例しはないがや。サ、さうでなくば、親と一つでないと云ふ

ろく　明りを立ていと仰しやるか。

孫兵　すりや、敵の乳兄弟と云ふ、お疑ひが晴れますれば。

武者　助太刀の願ひ、聞き屆けてやらう。

　ト合ひ方。有り合ふ人形を取つて

一旦後れを取りし身の、梶原源太も生田の森に二度の駈け。八重垣流の二つの卷き物、取り得ぬうちは吉岡の、家名の恥辱、それを雪ぐは其方達兄弟。

孫兵　すりや、紛失の印可の二卷。

六孫　取戻せと仰せられまするか。
武者　如何にも。お六とやら、其方は陰の卷の印可、民右衛門より受け繼ぎし、吉岡與五郎が妻でないか。
、トお園、最前より始終俯向いて居て
その　武者之助さまの厚いお詞、二人の衆へのお疑ひも、八重垣流の印可の卷、何卒首尾よう、取戻したその上では、吉岡兩家の敵討、どうぞ願ひの本望を。
武者　云ふまでもない、討たしてやる。
その　エヽ、有り難うござります。最前聞けば、佐々木岸柳、疾よりこれに武者之助さまの、お下がりを待ち、奥座敷に居るを幸ひ、近寄つて
武者　名乘り合うても本望は叶はぬ。
その　とは又、なぜでござりまする。
武者　明日殿の御代參、大切なる役目なれば、殿へ對して畏れであらう。
その　すりや、岸柳が役目も終り
六孫　二つの秘書も取返さば。
武者　この武者之助が推擧して、敵岸柳、討たしてやらう。
その　そのお詞に違ひなう。
武者　ハテ、武士の詞は金鐵ぢやわい。

三人　エヽ、有り難うござりまする。
武者　ドリヤ、岸柳へ役目の傳達。馳走の用意申し附けうか。
ト唄になり、武者之助、こなしあつて刀を提げ、奥へ入る。あと合ひ方。お園、お六、孫兵衛、峯松殘つて顏見合せ
孫兵　武者之助さまの今のお詞では、八重垣流の印可の卷、取返さぬ其うちは
ろく　お主の敵、夫の遺言、助太刀叶はぬのみならず、御代參とあれば手出しはならねど、その一卷を岸柳が、所持して居るに疑ひない。
その　今日この屋敷へ來たこそ幸ひ、手段を以て一卷を。
トこの時、奥より傳五右衞門出て
傳五　「捨てゝ行く親慕ふ子の哀れ如何に、世に立ちかねて音こそ流るれ。」
三人　ヤ、あなたは傳五右衞門どの。
傳五　峯松が爲には母方の内緣。矢竹に思へど仕官の身は、助太刀とても叶はねば、月本氏へ萬事を任せ、峯松が父官次郎の妹、お園どのには又格別、御親父一味徒の敵、舍兄の仇、峯松が爲には祖父親の敵、千辛萬苦を忍びて

も、首尾よう本意を遂げ召されい。
そのエヽ、成る程今まで隔てし血筋の名乘り。峯松、ちやつと爰へおぢや。
ト峯松お園の側へ行き
峯松　伯母樣、おりやこの人形が欲しい。
そのオヽ、人形もやる程に、わしが云ふ事よう大人しうするのぢやぞ。
峯松　アイ、大人しうするわいの。
ト傳五右衞門これをヂッと見て
傳五　ハテ、爭はれぬ血筋の親しみ。
孫兵　見るにつけても京極内匠。
ろく　このお子の爲には、父樣母樣、兩家の祖父樣身一つに、緣をしがらむ仇敵。
傳五　その助太刀と賴むは誓ひ、與五郎か遺言、古主の爲。
ろく　心は矢竹に存じましても、女子の事なり、肝心の二つの卷き物手に入らねば
傳五　それも手段は致してある。日頃の念願、今宵の瀨戸。
孫兵　及ばずながら拙者めも、下世話に申す膝とも相談。
園六　何かは奧で。

傳五　サヽ、先づ來やれ。
ト唄になる。皆々よろしく、こなしあつて傳五右衞門先に、お園、峯松が手を引き、お六、孫兵衞、これに附いて奧へ入ると、太皷の調べになり、柴垣の蔭より鐵平、頰冠りにて出て、あたりを窺ひ
鐵平　最前女めが連れてうせたる、七つばかりの子忰め、彼奴も慥かに吉岡の、身寄りの奴等。生けては置いては岸柳どのゝ寐覺めに障る。お心安めに、折を見合せ、オオさうだ。
ト奧を窺ふ思ひ入れ。向うバタ〳〵にて、菖蒲革の侍ひ壹人、狀箱を持ち、走り出て來る。これにて鐵平、小隱れする。侍ひ、切り戶の側へ來て
侍ひ　御家老中より御內意の御狀、絹川彌三郎どのへ、密かにお取次下されい。
トこれにて奧より彌三郎、お才、出て來て
彌三　家老中より內意の書狀とは。
さい　彌三郎どの、氣遣ひな事ぢやござりませぬか。
ト侍ひ、狀箱出す。彌三郎、狀を開き、鐵平、小蔭に聞いて居る。
彌三　ナニ〳〵「月本武者之助、岸柳に打負け候ふ上は、

八重垣の祖流、劍術師範の役目を除き申すべく候ふ、併しながら、八重垣流陰陽の卷相揃ひ、進献これあり候はば、猶この上一國の師範たるべき旨仰せ出され候ふ間、急き八重垣の兩卷差上げられ、然るべく候ふ」…ムウ、すりや八重垣の陰陽の卷、差上げたる者、永く一國の師範たる上、聚樂の御所へお召しあるべきとの事か。ムウ。

ト思案する。

さい　すりや、八重垣の印可の卷を、御家老中へ差上げる者が、聚樂御所へのお召しにて、一國の師範との事でござりまするか。

彌三　八重垣流の印可の卷は、吉岡兩家より武術鍛練の門弟へ授け與へし陰陽の卷。その一卷のうち、他より殿へ献上なさば。

さい　餘人の功に夫の御恥辱。それのみならず、吉岡一家の仇討も。

彌三　コレ。

ト押へる。鐵平、これを聞き、思ひ入れ。

何事も拙者が所存あれば、先刻其許へお預け申せし寶の色紙。

さい　アイ、そりや最前上段に、飾り置きましてござりまする。

彌三　某これへ歸るまで、お預け申し、これより直ぐに御老中へ罷り越し、先づ一旦の事を述べ、他より一卷差上げぬうち、御前の首尾お請合ひ申す。

さい　左やうならば、彌三郎さま。

彌三　直さま御殿へ。侍ひ衆、ござれ。

ト唄になり、彌三郎先に侍ひ附いて向うへ入る。お才奥へ入る。鐵平、小蔭より出て

鐵平　ムウ。そんなら八重垣流の一卷を差上げた者を、聚樂の御所へ召される今の文通。ドレ、ちつとも早く岸柳どのへ、知らせたいものだ。

ト奥パタ／＼にて、下座より九平次、色紙の箱を持ち出るを、若葉後より

若葉　御門番の九平次どの、御上段に飾りある、大切なその色紙の箱、どこへ持つて行かしやんす。

九平　見咎められたら百年目だ。何もかも云つて聞かせよう。岸柳さまに云ひ附けられ、盗み取つたこの色紙、おれが出世の綱にするワ。

若葉　イ、ヤさう聞いては遣る事ならぬ。此方へ渡しや。

ト右の箱へ手をかける。立廻り。鐵平後より若葉を切

る。若葉「アツ」と倒れる。

九平　鐵平、さては何かの樣子を。

鐵平　氣遣ひするな。大事を聞いた女めは、なんの苦もなく、一刀に。もう息の根を止めたワ。

ト若葉が死骸を柴垣の蔭へ蹴込む。合ひ方になり、上の障子屋體を明け、岸柳出て

岸柳　出かした兩人。その品をこれへ。

九平　ハツ。

ト右の箱を岸柳へ渡す。岸柳取つて

これで元々へ又戻つた、寶の色紙。

ト懷中して

樣子を聞けば、八重垣流の陰陽の兩卷、聚樂の御所に懸望の噂。殊には今宵月本が、吉岡一家の奴輩へ、腰押しする所存か。善惡を糺すそれまでは、我が懷中に持つて居られぬ二品の卷き物。

ト懷より出し

陰陽二つを兩人へ、今の働らき見る上は、暫らくの間預ける間、懷中してゐて氣取られるな。

ト兩人へ渡す。

兩人　畏まりました。

九平　性根を見込んで大事の品。

鐵平　しつかりと預かりました。

岸柳　コリヤ。

ト兩人囁く。

兩人　心得ました。

岸柳　行け。

鐵九　ハツ。

ト兩人、左右へ忍ぶ。岸柳、思ひ入れあつて

岸柳　これでよし〳〵。

ト合ひ方になり、奧より武者之助出て來て

武者　これは〳〵岸柳どの、先刻より御入來、失禮御免下されい。

岸柳　武者之助どの、今日は端午の嘉節、御同慶に存じまする。明日は殿の御代參。尤も拵らへ萬端、先格の作法をも問ひ合せ致さうと、やう〳〵御前を下がりましてござる。

武者　御新參ではござれとも、殿には殊さら御意に入つてござる共許。元來當家御譜代でなければ、仰せつけられぬ御代參。御大慶にござる。イヤ、お羨やましう存じまする。

岸柳　イヤ、誰れあらう御家中に於て、御指南なさる月本武者之助を、御前に於て、打つて〳〵打ちのめした事なれば、こりやその筈の事。兎角修行が第一でござる。ムヽハヽヽヽ。
武者　何がさて其許に續きまする程の者、一國に覺えござらぬて。
岸柳　して、明日の格式は、殿の御代參でござれば、引き馬挾み箱、對の道具を持たせませうか。
武者　例年拙者相勤めましたは、それにも及びませねど、初めての貴殿なれば、それがよろしうござりませう。
岸柳　ア、〳〵、初めてなれば猶以つて、物事華麗に仕らう。
武者　まだ御傳達のお話しもござる。マヽ、ゆるりとござりませ。コリヤ、誰ぞお茶菓盆を持たぬかい。
園峰　ハア、。
ト合ひ方になり、奥よりお園、菓盆。峯松、茶臺に茶を持ち出る。
武者　ソレ、お客人へお茶のお給仕。
トお園、峯松、岸柳へ茶菓盆を出し、チッと思ひ入れ。
武者　お茶上げたら、次へ下がれ。

岸柳　武者之助どの、この女は何か、貴殿の召仕はるゝ女か。
武者　不束者でござる。御免下されい。
岸柳　あの小児はな。
武者　矢張り側近く召仕ひまするて。
ト岸柳、兩人を見て、思ひ入れあつて
岸柳　ムウ、なか〳〵兩人とも發明さうな面つき。ヤイ、コリヤ、身共は佐々木岸柳と云ふ、月本武者之助を打ち据ゑた劍術の達人ぢや程に、よう覺えて居い。
その　ハイ、日頃から逢ひたい見たいと思うて居る岸柳どのゝお顏、覺えいでなりませうか……ナウ峯松。
峯松　アイ、此やうに嬉しい事はござりませぬ。
ト兩人、思ひ入れ。この時切り戸の外へ佐五平、上の障子屋體へお六出て窺ふ。武者之助、ちよつと見て
武者　コリヤ〳〵、不調法千萬な。お茶の給仕を致したらば、下へ下がつてチッと扣へい。ハテサテ、外から差出まいぞ。イヤサ、失禮千萬な。
トお園、峯松、いろ〳〵思ひ入れ。お六、佐五平、こなしあつて扣へる。
岸柳　イヤ、武者之助どの、最前から見請けまするところ

彼れら二人は萬ざら町人百姓の悴とも覺えませぬが、定めし彼れらは。

武者　アイヤ、成る程、御賢察の通り、吉岡一味齋が娘、吉岡民右衞門が孫。

岸柳　さうでござらう。その吉岡兩人は、京極内匠とやら申す者に殺されたとやら申すが、その親の敵を附け覘ふ爲に奉公するか。コリヤヤイ、その一味齋民右衞門も、マア相應に手練した劍術者ぢや。それでさへ手もなく殺されたでないか。なんのわれ達の分際で、及ばぬ事ぢや。叶はぬ事ぢや。この岸柳を敵なぞと……イヤサ、丁度この岸柳を、親の敵と覘ふやうなもので、大佛の腹を蟻よりはまだ及ばぬ事ぢや。それを又、外から腰押しして、討たさう〳〵とする奴もあるさうな。ム、、、ハ、、、世には馬鹿ほど澤山なものはござらぬてな。

武者　イカサマ、左やうでござる。先づ丁度㗖へて申さうならば、彼れらが祖父親の敵が、先づ岸柳どのでござらうならば、そりや仰せの通り、及ばぬ事。併し、その腰押しとやら致す奴も、餘程覺えのある奴と見えまする。どこの何國の奴でござるか。腰押す奴の顏が見たいものでござるて。

岸柳　なんの、口ばかりでござらう……イヤ、その腰と申せば、まさかの時は腰腰も立たぬでござらう……イヤ、肩が支へてか、のだるうござる。武者之助どの、免さつしやれ。

ト横になる。

武者　サ、御ゆるりとなされ。コリヤ、園よ、枕を持て。

岸柳　ア、イヤ〳〵、お構ひ下されな〳〵。

ト お園、枕を持つて來て

その　ハイ、お枕上げませう。

岸柳　オ、出かした。コリヤ、小僧よ、とてもの事に、ちと腰を撫でてくれい。

ト お園、峯松、思ひ入れ。

武者　ソレ、お腰を撫でゝ上げぬか。コリヤ、どう致したものぢや。

ト顏にて叱ろ。お園、峯松に敎へ、峯松、岸柳が腰を揉む。

岸柳　エ、、しか〳〵と擦り居れ。

ト峯松を蹴飛ばす。お六、佐五平、思ひ入れ。

武者　コリヤ、不調法な、どう致したものぢや。なぜしかじかと岸柳どのを……イヤサ、御機嫌を背く。ハテサ

テ、大切なお客人。この武者之助だに手を置くは、明日殿の御代參。大手ざしはならぬ。合點が行たか。心得たか。

トお六、佐五平へかけて叱る。これにてお六、障子を引立て、佐五平、柴垣へ押へる。岸柳こなしあつて、お園に目を附け

岸柳　コリヤ、そな女、火入れに火がない。早く持て。

トお園、火入れを取りに行くを、岸柳、煙管にてお園が額を打つ。これにて疵附く。お園、チッと思ひ入れ

ハ、、、。コリヤ、わいらは親の敵を覘ふと云ふではないか。ソレ、其やうに身共に疵を付けられるやうな事で敵討がなるものか。コリヤ、斯うせい。その腰押しの後楯どのに、よく頼んで兵法を教へてもらへ。ア、、不便な奴等ではある、

トせゝら笑ふ。峯松、後より

峯松　岸柳やらぬ

ト切りつけるを岸柳、枕にて受けとめる。

岸柳　へ、、此奴、味をやるワ。ハ、ア、何か、今あの女郎を打つたに依つて、それで身共をやらぬと切りつけたか。ハテ、しをらしい、愛い奴ぢや〳〵。そんな事で、なか〳〵人が切られはせぬわい。

ト峯松を二重舞臺より蹴落す。お園、口惜しき思ひ入れ。

コリヤ、わいら、まだ手の内が堅い。誠の兵法と云ふものは、マア、手の内が第一。

ト煙管にて右の枕を叩き割り

コレ、斯う云ふ手の内でなけりや、役に立たぬ。なんとよう覺えて置け。

ト武者之助が前へ投げるを、武者之助、扇にて打ち落し

武者　ハ、、、辻放下々々々。イヤ、只今の枕のお手際を見まするに、この間城下の窓下へ參つて、豆と德利を空へ投げまして、脇差にて、切りまする、丁度岸柳どのゝお手の内と、辻放下と同じ事で、なか〳〵眞劍のお手の內覺束ない。併し、又以前の如く、御浪人なされた時の要心に、豆と德利の辻放下のお嗜みも、こりや至極御尤もでござる。ム、、、ハ、、、、。

ト合ひ方。扇にて煽ぐ。岸柳ムッとして羽織を脱ぎ、下げ緒を襷に突ッ立ち上がり、刀を武者之助へ突き付け

岸柳　月本どの、イヤサ、武者之助、おてまへ、この岸柳が手の内を、豆を切る辻放下と云つたが、その辻放下になぜ負けた。イヤサ、なんで打ちのめされた。さほど岸柳を蔑みなす程ならば、いま抜き放した一刀の下、潜らるゝ手練があるか。サア、潜つて見やれ、トゞどうだ、

トきつとなつて思ひ入れ。武者之助、こなしあつて

武者　イヤ、天晴れ八相無敵の神妙剣、油断なき岸柳どの、構へ畏れ入つてござる。如何にもその下、潜りませう、

その　ア、申し、それでは。

ト心遣ひのこなし、

武者　ハテ、苦しうない、大事ない。振り上げし太刀の下こそ地獄なれ、爰が即ち鍛錬修行、武者之助その刀を、もしや潜り損なひましたならば、

岸柳　知れた事、先ッ二つ、

武者　アノ、拙者をば。

岸柳　如何にも。

武者　岸柳どの、そりやこなた人外ぢやぞや……ハテ、この武者之助は侍ひ。何事も口外せねばとて、人もなげなるその广言。おのれを知らずして人を蔑みなし、傍若無人に某を、打ち捨てんなんどとは、法外とや云はん。

トじり／＼と云ひながらツイと潜り

武者　サア潜りましたが、如何でござる。

岸柳　さては身共を騙かつたな。

武者　と云うて騙すが臨機應變、其方の油斷大敵と云ふもの。ハ、、、、。

岸柳　ムウウ。

ト思ひ入れあつて

さう云やいつそ。

ト切りつけるを武者之助、扇にてあしらふ立廻りよろしく、岸柳が刀を打ち落し、直ぐにその刀を、岸柳が胸元へ差しつけ

武者　身動き致すと、命が無いぞ。

ト時の太鼓になり、花道より大勢供同勢の形にて、岸柳が紋付けたる箱提灯を持ち、バラ／＼出て、切り戸の際にて

岸柳どのゝお迎ひ。

トこれにて武者之助、拔き刀を下に置き

武者　八ツの太鼓は御代參の刻限。イザ御用意。

ト岸柳、物云はずに悠々と支度取繕ろひ、拔き刀を鞘へ納め

岸柳　武者之助どの、大切なる殿の御代參、首尾よく相勤めて後、今宵の、お禮はキッと致さう。

ト思ひ入れあつて平舞臺へ下りる。

武五　イヤモ、大きに不馳走、送りませうか。

岸柳　アイヤ、それには及ばぬ。

武者　岸柳どの。

岸柳　武者之助どの。

トあたりへ心を配り

お暇申す。

ト唄になり、岸柳、提灯を先に同勢を連れ、悠々と花道へ入る。峯松、お園、これを見送り、武者之助よろしく兩人を額にて押へる。下座よりお六、孫兵衞、切り戸の脇より佐五平出て

三人　お園さま、

その　お六どの、孫兵衞どの。

六佐　さぞ口惜しうござりませう。

孫兵　眼前敵に出合ひながら

ろく　手ざしのならぬ殿樣の御代參。

その　父上の敵、兄の仇、見遁がすのみか、最前よりの狼藉、我まゝ、チッと堪える心の內、推量して下さりませ。

佐五　御道理千萬、御尤も。まさかの時はと、私しも、忍びの鍔元五六寸、仕留めてお目にかけたものを、殘念な事を致しました。

武者　氣遣ひ致すな。敵は身共が討たしてやる。

四人　エ。なんと御意なされまする。

武者　御代參の役目相濟むまでは、殿への畏れ、歸り詣での路次に待ち受け、勝負の場所は、灘嶋の濱邊。

皆々　すりや、我れ〳〵に敵討を

佐五　エヽ、有り難い〳〵、そこでこそ佐五平めも、無念殘念今日まで、嗜なんで置いた手並の助太刀、私しがお供いたしませう。

武者　イヽヤ、餘人の助太刀叶はぬ。本意の勝負は峯松、お園、お六は夫與五郎が、遺言守つて母の仇。

ろく　それもあなたのお情ゆゑ、與五郎どのもさぞ喜び。

孫兵　とは云へ兼ねて紛失の、八重垣流の二つの卷。

傳五　その大切なる印可の卷、傳五右衞門が進上申す。

ト奧より傳五右衞門、二つの卷き物を三方に乘せ、九平次附いて出て來て

取返したる下部が働らき。疾より入込む仔細を申せ。

九平　憚りながら月本どの、拙者も元は、播州にて、轟どのゝ譜代の家來、友平と申す歩行中間。岸柳めに一杯喰はせたは、誠の色紙もお才さま、これへ御持參なされませ。

ト奥よりお才、色紙の箱を携へ、若葉後より白木の臺に、大小二腰を載せたる持ち出て來て

さい　若葉ゝ無事に、誠の色紙、首尾よう敵岸柳へ。
若葉　似せ物渡せし皆手段。
傳五　傳五右衞門はこれより直ぐに、本國播磨へ立歸り、本意の趣き、飾間家へ、急ぎ言上仕らん。
さい　二人の女中へ自らが、祝ふ皐月の菖蒲帷子。
六園　エヽ、有り難うござりまする。

ト後へ忍びの惡者出て

忍び　樣子は聞いた。女め、うぬを。

ト お園へかゝる。突き廻し、お六、見事に取つて投げ起き上がる所を峯松、拔討ちに忍びを切り倒す。

武者　天晴れ手の內。
その　オヽ、出かしやつた〲。
孫兵　褒美はこの人形。
傳五　勝色見せる箙の梅。
皆々　やがて吉左右。
武者　待つて居やれサ。

ト皆々よろしく。

ひやうし幕

大詰　灘島敵討の場

役名――月本武者之助。轟傳五右衞門。石川重之進。奴、筆內。奴、鐵平。下部佐五平。一子、峯松。吉岡娘、お園。毛谷村のお六、佐々木岸柳實ハ京極內匠。

本舞臺、正面、三間の間、板松に浪幕。遠見の景色にてよろしく、その前に敵討の大矢來、左右の大柱松の立ち樹。これに誂らへの陣太鼓、双方に吊つてあり、すべて豐前の國小倉鄕沖、灘島のかゝりにて、幕の內より眞中に乘り物を舁き据ゑ、以前の同勢殘らず箱提灯を照らし、乘り物の左右に重之進、筆內、鐵平、附き添ひ、浪の音、鷄の聲にて幕明く、

重之　岸柳どのには、今朝宇佐八幡へ御代參、首尾よう相

初演の繪番附

済み、おめでたう存じまする。

筆内　最早鷄鳴、夜も明け放れましたれば、暫らくこれにて、御爵散、お乗り物これへ、

皆々　ハ、、、、、。

　ト乗り物を下ろし、この中より岸柳、刀を提げ出で

岸柳　これはいづれも、見送りの役目、御苦勞。夜前月本めが某へ對し、存外の我まゝ。何かにつけ後日の仇となるべき彼奴が振舞ひ。歸宅の上にて一思案。こりや、事を謀らずばなるまい。

　ト悠々と思ひ入れあつて、挾み箱に腰をかける。時の太鼓になり、花道より峯松、先にお園、お六、いづれも白出立ち、襷鉢巻、敵討の形。これに佐五平、以前の刀箱を持ち出て來る

四人　敵岸柳、そこ動くな。

　ト岸柳、ヂロリと見て

岸柳　此奴等は、なんと申す。

その　卑怯なり岸柳、以前は播州京極内匠、今の名は佐々木岸柳。

ろく　これまで積る恨みの數々。御主人の仇、夫の敵。

峯松　祖父様の仇、父様母様の敵。

三人　覺悟極めて、名乗つた〱。

岸柳　ハ、、、並べ立てたる敵呼ばゝり。例へわいらが敵にもせよ、この岸柳は殿の代參、只今勝負は叶はぬわい。

佐五　イヽヤ、御免の敵討、飾磨どのより下されたる、免許の扇、即ちこれに、

　ト刀の箱より以前の幕の扇を出す。

岸柳　それも他門の指圖に受けぬ。

　ト蹴飛ばす。向う揚げ幕にて

武者　待つた。當家のお墨附、武者之助、持參仕らう。

　ト鼓の合ひ方になり、傳五右衛門、武者之助、麻上下、折れたる弓杖に許し文を携へて出る。

傳五　飾間家の檢使として、斯く云ふ轟傳五右衛門、疾より當地へ發向なしたワ。

岸柳　さては月本おてまへが、吉岡一家の肩を持つて。

武者　愚かや岸柳。汝が積惡、一々殿へ言上なし、手段を以て取戻せし、八重垣流の印可の二卷、疾より殿へ献上いたした。

岸柳　ナニ、八重垣流の二つの巻き物。

鐵平　その仔細。おれが云つて聞かさう。

岸柳　ヤア、わりや身が家來の鐵平め、さては汝も。
鐵平　月本どのゝ云ひ附けで、奴になつたはあの巻き物。首尾よう此方へ奪くらう爲、鐵平といつた敵役も、今は眞面目な實事師。ヨイヤマカシヨトサ。
　ト奴疊を思ひ入れにて取ると、青坊主。十德、醫者の形になる。
重之　我れ〳〵とても兼ねてより、月本どのゝ云ひ附けで。
筆内　一味と見せたに皆僞はり。
鐵平　最早遁がれぬ
皆々　岸柳覺悟。
　ト取巻く。岸柳、キツとなつて
岸柳　さてはうぬ等が計略にて、この岸柳を騙かりしな。よし〳〵、これも天運順環、我れこそ播州飾間に於て吉岡一味齋民右衛門を討つて立退き、官次郎お雪を始め、一々返り討にぶツ放したは、斯く云ふ佐々木岸柳だワ。
皆々　さてこそなア。
武者　斯く名乘り合ふ上からは、互ひに恥ある敵討、左右の太鼓に掛引の、合圖守つて立合ひ召され。
重之　イザ岸柳、支度おしやれ。
　トまた時の太鼓になり、重之進、筆内、廣蓋に白裝束を載せ、岸柳へ着替へさせる。これにて皆々、捨ぜりふにて、佐五平三方に、土器、手桶柄杓を添へ、眞中へ直し、杯の模樣あつて、峯松は小太刀、お園は長刀お六は鎖り鎌を構へ、よろしく住ひ
その　多年の恨み佐々木岸柳、其方が討つて立退きたる、一味齋が娘の園
峯松　官次郎が悴吉岡峯松
ろく　夫與五郎どのゝ名代、古主へ助太刀、毛谷村お六。
三人　イザ尋常に、勝負いたせ。
岸柳　何奴も此奴も返り討だ。
皆々　イザ〳〵〳〵。
　ト土器を打ちつけ、これより誂らへの鳴り物にて、四人よろしく敵討のタテ、太鼓のかけ引き。佐五平、双方へ水を飲ませる。醫者、脈を見る事、捨ぜりふにてよろしく仰せ合はされ、鳴り物替つて面白き立廻り、存分にあつて、トヾお園峯松、お六、立ちかゝつて岸柳を切り伏せ、仕留める。
武者　出來た。天晴れ手柄々々
先づ今日はこれぎり。

ト めでたく打出し。

ひやうし幕

敵討相合袴（終り）

比應永治世

萬歳諷連歌吟聲其風流
秋鶯涼竹春風吹和今様
橘櫓幕八千代重足利榮

名にしおはゞいざ言問はん敵の隠れ家其庵崎の孤家に女主の獨住は我思ふ人を待つ戀の便儚なき朝顔の籬にちやつと都鳥の面影きらりと洩ろる桂男が曇りなき身の敵の悪名深き心のありやなしやいつか濁りも隅田川原に夜を打明けし鐘淺草

敵討綛鴈的

全部九巻

初演の繪番附表紙

敵討怨鴈的

序幕　高雄山の場

役名――信田氏太郎。揚屋、利兵衛。侍ひ、良助。腰元。野分。傾城、松島。醫者、山井養仙。三好岩次郎。腰元、お袖。宮本丹下。山伏、奇妙院。花園息女、千草姫。浮島甚七郎。同下部、大助。

本舞臺、正面高欄へかけて、奥深に一面の山、この谷間爰かしこに紅葉の立ち木、日覆より同じ吊り枝にて、舞臺一ぱい眞赤く紅葉の景色、凡て都高雄山神護寺の紅葉最中の模樣、木の間々々に茶店を調へ、床机に毛氈を掛け並べ、爰に松島、傾城の拵らへ。置き手拭前垂れにて、上の茶屋に小萩、尾花、野分同じく置き手拭、赤前垂れ、茶屋女の拵らへ、紅葉見の仕出しを留めて居る。この見得、さてん／＼にて幕明く。

ト矢張りさてん／＼にて、東西より表の方打ち交り、いろ／＼思ひ附きの紅葉見物の仕出し行き違ひに皆々留める。野分、仕出しを捉へ、腰つきのをかしみな事よろしく、この旅人に打交り、向うより良助、利兵衛旅人の形、手甲、脚絆、風呂敷包みを割りがけにして菅笠を着て出て來る。皆々以前の如く、引き留めるを振り切つて行く。よい程にて笠脱げる。松島、兩人を見て

松島　ヤア、お前は御殿の良助さん。ても。思ひがけない

女三　そのお姿はえ。

良助　なんと旅人と見せて、一杯手を取る趣向は、今日の秀逸。きついものか／＼。

利兵　オツと、味噌を上げまい／＼。その作者は輕少ながら、三文字屋の利兵衛でえす。

皆々　道理こそ、きついものであつたわいなア。

利兵　今日は若殿樣の御趣向で、この高雄山の紅葉狩、花魁達を茶屋女に仕立て、お茶の接待があると聞いたゆゑ、そこで良助と云ひ合せ、旅人姿で落を取る積りよ。

ト此うち小萩、尾花、茶を酌んで來る。

小萩　サア、お茶をあがれいな。

ト兩方より利兵衞へ出す。

良助　ヤイ〳〵、此奴等は味方見苦しい。うぬ等の親方へばかり茶を出さずと、おれにも一つ飲ましやアがれ。

野分　エヽ、忙しない。お前にはわつちが上げるわいなア。

ト嫌らしきこなしにて、床几へ寄り添ふ。

良助　エヽ、氣味の惡い。あんまり側へ寄りやアがるな。

野分　お前、冷して上がるのかい。

良助　おきやアがれ。

ト突きのめす拍子に、良助、茶碗を取落す。野分、股へ茶かゝりしこなしにて、飛び上がり

野分　オヽアツヽヽオヤ〳〵、とんだ所を火傷したわいなア。

トをかしきこなし。

皆々　ホヽヽ。

ト笑ふ。てんつゝになり、向うより氏太郎、若殿の拵らへよろしく、衣裳の上へ上ッ張り出して、四つ手駕籠を舁いて出る。養仙、醫者の拵らへ、駕籠舁きの上ッ張り、向う鉢卷にて、後棒を舁き出て來る。この駕籠にお袖、腰元の形にて、乘つて出て來る。後より岩次郎、上下衣裳、股立ちにて、附いて出る。

氏太　ヤツサ。

養仙　コレワサ。

ト掛け聲ばかりにて、無器用に駕籠を舁き、二足三足歩いて

氏太　サア〳〵、杖ぢや〳〵。

ト駕籠を立てる。

養仙　これはしたり、また杖でござりまするか。マア〳〵もそつとおやりなされませぬか。

氏太　イヤ〳〵、この山道へかゝると、一倍肩が痛いやら足が痛うて、モウ〳〵、一足も歩かれぬわいの。

岩次　イカサマ、これは左樣でござりませう。養仙さま、マア〳〵お扣へなされい。

養仙　それだと云つて、清瀧から爰まで、いくらあるものか。一丁三肩と云ふがお定まりだが、三肩や四肩と云ふ事があるものか。凡そ六七百も杖をしたであらう。

氏太　ハテ、さう云はずと、休んでくれ〳〵。

養仙　これは又かい。とんだ棒組みを取つたぞ。

ト駕籠を立てる。

岩次　若殿樣には御遊興とは申しながら、餘りなるお行蹟でござりまする。

氏太　又そんな事云ひ居るかいやい。斯うしつけぬ事をすが一興ぢや。

養仙　モシ、そんな無駄なしに、約束の立場までヤッつけませう。

氏太　さうせい〳〵。

養仙　ヤッサ。

氏太　コレワサ。

トやう〳〵舞臺へ舁いて來る。皆々立ちかゝつて

松島　若殿さん、養仙さんも

女三　遲うござんしたなア。

氏太　ヤレ〳〵、辛どやの〳〵。

皆々　さぞお暑うござんせう。

ト皆々寄つて、氏太郎を煽ぐ。

良助　ヤア、若殿樣が施行駕籠の駕籠舁きとは

利兵　この趣向にぶッちめられたわえ。

そて　そんなら、もう下りても大事ござりませぬかえ。

氏太　大事ないとも〳〵。

養仙　サア、爰へ出なされ〳〵。

ト垂れをあげる。お袖、駕籠より出る。

良助　若殿樣の駕籠舁き、乘り手を誰れかと思へば、アノ堅藏の浮島甚太夫どのゝ腰元お袖とやら。

利兵　今度の思ひ附きの中へ、岩次郎さまの時代めいた其お姿。

良助　あんまり氣がきかないぢやないか。

岩次　斯く我れ〳〵が出立ちましたは、浮島どのゝお指圖にて、若殿樣のお迎ひに、參上いたしてござる。

そて　それに合點の參りませぬは、私しら二人で、清瀧の川の川端へ參りまするど、若殿樣がお出で遊ばして、何ぢやあらうとこの駕籠へ乘れと、無理無體に乘せて、ほんにモウ、氣術なうてなりませなんだわいなア。

野分　そりやその筈の事いなア。あのやうな肩の揃はぬ駕籠に乘ると、得手はおいどの皮を摺剝くものぢやわいな。

女皆　エヽ、何云ふのぢやぞいなア。ホヽヽヽ。

良助　イヤ、養仙さま、お役目御苦勞に存ずる。

養仙　これは〳〵御挨拶でござる。主命とは申しながら、お手醫者の山井養仙とも云はれ、四枚肩にも乘りたき身

が、せめてあんぼつでもある事か、四つ手駕籠を舁くと
は、ア、、儘ならぬ世の中でござるて。ハ、、。
野分　さう仰しやつても養仙さんは、駕籠舁きの下地があ
ると見えるわいなア、
小萩　ほんに若殿様は、さぞお肩が痛みまするでござりま
せうわいなア。
尾花　ほんに、變つた今日の御趣向。私しらは、とんと合
點がゆかぬわいなア。
利兵　そりやア合點がゆくまい。一體この譯と云ふは
女三　どうぢやえ。
利兵　おれにも知れない。
女三　エ、、なんぢやぞいなア。
ト突きのめす。
良助　成る程、様子を知らにやア合點がゆくまい。今日の
御趣向と云ふは、この度大内より東山へ、新たに連歌の
御殿造營に就き、普請奉行は此方の御主人、信田左京太
夫さま。そこで堂上見習ひの爲とあつて、若殿様を御同
道にての都入り。
養仙　御惣領の事なれば、京上りを幸ひに、したい事は仕
次第に、その寛濶を御覽なされて、花園家の戀聟、殿
下のお仲人にてお支度。姫君と御縁邊の取結び、頼みと
して此方より遣はさるゝは、お家の重器都鳥の香爐。
氏太　コリヤ／＼養仙、そりや何を申すのぢや。折角面白
う忘れて居たものを、また祝言の事を云ひ出し居るかい
ハテ、不粋な奴の。
ト お袖、こなし
そで　左様なら、若殿様には、千草姫さまと御縁談の儀は。
氏太　七里けつぱい、否やの／＼。この度の御用。首尾よ
く相勤るは、信田家の譽れ、殊に堂上方と内縁を結ぶは
願ふに幸ひを老臣どもの勸め。聞くもうるさく、ア、、
どうぞ姫が方から愛想を盡かして、變替へるやうにと、
人の誹りも構はず、太夫を連れて、毎日々々の物見遊山
今日は磯島が思ひ附きで、この高雄山で接待の茶振舞ひ
太夫が斯う前垂れ姿で出た所は、どうも云へぬ／＼。こ
れから爰で酒にせにやならぬ。誰ぞ銚子を持て／＼。
女皆　サア、御酒になつたわいなア。
養仙　心得たりと云ふ儘に、銚子押取り。
利兵　てんつてん／＼。
ト口三味線にて養仙、利兵衛、銚子杯を持ち、氏太
郎の方へ行かうとする。岩次郎、ツカ／＼と寄つて、

岩次　利兵衛を引き退け、養仙を支へて
養仙さま、待たつしやれ。

養仙　こりやアなぜ留めさつしやる。

岩次　お留め申すは若殿樣のお爲。生得溫和なるお生れつき、善惡の友に依ると、大殿樣のお目鏡にて、お側に置かるゝ三好岩次郎、殊に甚太夫どのゝ御內意を以て、お迎ひに參つたからは、邪が非でもお館へお供する。邪魔になるから支へましたが、拙者めが誤まりかな。

養仙　サア、そりやア。

岩次　但し、この場の樣子を甚太夫どのへ、お屆け申さうかな。

養仙　サアそれは。

トうぢ／＼する。

良助　コレ／＼、岩次郎どの、甚太夫々々々々と、餘り甚太夫風を吹かせないがようござる。貴樣こそ、さる端午の御祝儀の折柄、鴆毒の入つた粽を、知らぬ顏にて若殿へ配膳召された、その事露顯して、既に切腹にも及ぶべき所を、甚太夫どのゝ口鋒で、貴樣の越度を脇へこかした恩義もあれど、身共等は甚太夫どのゝ恩義に預かつた事はござらねば、餘り甚太夫々々々々と云はつしやるな。殊に氏太郎さまは大きい大名だ。これしきの御遊興、誰れに遠慮、誰れに憚る事がござらう。

養仙　左樣々々、誠に氏は爭はれぬものでござる。根がこの岩次郎は、お館へ御用達しの町人でござる。只今お取立てにあづかり、大小は手挾めども、生れ落ちるから利喰ひに迷ひ、僅かの御遊興を算盤にかけて、大層な事のやうに存じて居るでござらう。

利兵　成る程、厘毛爭ふお心からは、左樣でござりませう。シタガ、此やうなお方ばかりでは、私しどもの商賣は、上がつたものでござりまする。

三人　ハヽヽ。

岩次　なにを。

ト思ひ入れ。お袖、留める。氏太郎、氣色を變へて

氏太　ヤイ／＼、身が遊興を妨げる奴。目通り叶はぬ、立つてうせう。

良助　御前の御意だ。岩次郎、お立ちやれ。

トかゝる。立廻りあつて

岩次　イヽヤ、立ちますまい。二度諫めて身退くとは、毛唐人の痴言。大殿樣のお下知を受けたからは、一寸でも放るゝ事は罷りならぬワ。誰れだと思ふ、ア、つがもな

い。

氏太　重ね〳〵の雜言過言。只一刀に。

ト刀を持つて立ちかゝる。岩次郎、思ひ入れ。お袖、氏太郎をしつかと留める。女形皆々心遣ひのこなし。

そで　マア〳〵、お待ち遊ばしませ。大殿樣のお目鏡にてお側に附け置かるゝ岩次郎さまお手討ちあらば、一旦のお怒りは晴れませうが、大殿樣へお敵對も同然でござりまするぞえ。

ト これにて氏太郎、こなしあつて

氏太　エヽ、命冥加な素丁稚めが。

ト納まる。

岩次　大殿樣のお詞を、お用ひあるお心のあるからは、今一度。

ト寄らうとする。

そで　ア、モシ。

ト合ひ方。

水の出花の若殿樣、强ひて柵する時は、却つてせきを破るとやら。その身は泥に溺れても、濁りに染まぬ蓮葉の…サア、例へ濁りに染まるとも、君のお側を離れずに、ナ、御合點が參りましたか。

岩次　ムウ、泥に溺れて蓮葉の、例へ濁りに染まるとも。

ト皆々の方へ思ひ入れあつて

如何にも承知いたしてござる。

そで　そんなら若殿樣のお心任せに。

岩次　お伽いたすでござらう。

氏太　すりや岩次郎、何事に依らず、身が詞を背かず、意見がましい事を申す事はならぬぞ。

岩次　ハツ。

氏太　キツとならぬぞ。

岩次　畏まつてござりまする。

氏太　あれ見い。其方がこましやくれた事を申したゆゑ、太夫を始め皆が悄げて居るわえ。サア〳〵、大事ない、これへ來や〳〵。

松島　アイ〳〵、大殿樣よりのお迎ひと云ふ事ぢやに依つて、廓はあゝしたものかと、思ひなさんすも恥かしさに默つてゐましたが、もうそこへ行ても大事ないかえ。

氏太　大事ないとも〳〵。これからは、誰れが意見せうとも、大名に生れたからは、したい事は仕次第ぢやぞ。

養仙　左樣々々、その仕次第の次手に、斯う並んだ色達の

うち、どれぞ一人取つて〆めたいものでござりまする。
良助　これは又、養仙さまが、怪しからぬ事を願ひ召されたわえ。ハヽヽ。
氏太　イヤ、氣に入りの養仙が願ひ。誰れなりとも勝手にせいせい。
養仙　勝手とは有り難いわえ。
松島　アヽコレ、滅多な事をなされまするな。
そで　わたし等はナア、皆さん。
女皆　否ぢやわいなア。
養仙　例へ否と云はうが、應と云はうが、お許しの出た上は。
利兵　オツと待つたり、その否應を云はさぬ、よい思ひ附きがござりまする。
皆々　思ひ附きとは、どうぢやどうぢや。
利兵　サア、その思ひ附きは、古めかしい事ながら、先づ養仙さまへ、めんない千鳥をかけて。
皆々　めんない千鳥をかけて。
利兵　誰れなりとも。
皆々　誰れなりとも。
利兵　捉へた者を。
皆々　捉へた者を。
利兵　否應なしは、どうでござります。
氏太　こいつは出かし居つた。サアサア、目隱しを始めい始めい。
ト皆々寄つて、養仙へ手拭にて、目隱しをする。
養仙　誰れなりと捉へ次第、抱いて寢るぞ。
氏太　皆油斷をせまいぞ。
皆々　合點ぢやわいなア。
ト駒鳥の合ひ方になり手の鳴る方へ方へ。
養仙　捉まへて抱いて寢よ。
トいろいろ追ひ廻す。トヾ皆々逃げて、山影へ入る。養仙、野分を捉へる。
コリヤ、占めたぞ占めた。
ト手を取つて引き寄せる。野分、嫌らしきこなし。
この手のやわやわぽちやぽちやした事わえ。ちよつと手附けに。
ト引き寄せて、口を吸ふ。野分、嬉しきこなし。
アヽ、待つてくれくれ。
ト顔をしかめ

君は大分鹽辛い口だの。
野分　そりやその筈いなア。先刻樂屋のおかち〳〵を食べたわいな。
養仙　ヤア。
　ト手拭を取り、顏を見て
エヽ、いま〳〵しい。
　ト突きのめし、唾を吐きかけて、ツイと奧へ入る。
野分　コレイナア、養仙さんイなア。早うようしておくれんかいなア。
　ト後追うて下座へ入る。てんつゝになり、向うより丹下、衣裳の上に駕籠舁きの上ッ張りをして、息杖を擔ぎ、出て來る。後より奇妙院、山伏の形にて、輪袈裟を掛け、じん〳〵端折り、香爐の箱を包み、脊負つて出て來る。
奇妙　モシ〳〵、丹下さま、こりやマアどうして下さりまするな。
丹下　サア、よいワ、承知だ〳〵。
奇妙　イヤ、ようはないぞよ。アイ、ようはござりませぬモシ、丹下さま。
丹下　ハテ、やかましく云はずと、おれと一緒に來やれサ。
奇妙　來いと仰しやれば、どこまでも行くぢやて。
　ト云ひ〳〵、兩人舞臺へ來る。奧より氏太郎先に養仙、良助、利兵衞、松島、小萩、尾花、野分、出て來る。
氏太　イヤモウ、今の目隱しは大笑ひであつた。
松島　ほんに養仙さんが、いたづらばかりしてぢやに依つて
女皆　よい氣味であつたわいなア。
養仙　なんのよい氣味な事があるものか。これ程幾人もある中に、選りに選つて。エヽ、いま〳〵しい。
　ト丹下の方へ野分を突きのめす。
丹下　これは〳〵若殿樣には、何か御機嫌の體でござりまするな。
氏太　宮城丹下、其方も施行駕籠にあつたな。
丹下　左樣でござりまする。斯やうな形になりまするも、御前の御遊興、何を申すも主と病、片棒を見失ひまして、やう〳〵只今歸りましてござりまする、
養仙　イヤモウ、丹下どの、おてまへがござらぬゆゑ、若殿を片棒に致して、大きに難儀いたしましたて。

女三　ほんに丹下さん、お前のお出でを待ち兼ねたわいなア。

丹下　待ち兼ねたもすさまじい。どう云ふ事か、兎角女には嫌はれる事ぢや。

利兵　それと申すも丹下さまは、餘り金銀を可愛がつて、大事になさるからの事でござりまする。

丹下　何を吐かす。金銀の放れがよければこそ、思ひ附いた杯投げの趣向。良助どの、用意はようござるか。

良助　よい段か、杯の五六千も拵らへ、その杯をこの山の絶頂から麓へ、深山颪と撒きちらし、當つた者は、その杯で呑みかけ山の

女三　時鳥は古いぞえ。

利兵　よく半疊を打込む奴等だ。

養仙　その杯の一枚々々に、お家の御定紋を附け、手に入れた者は金銀と引替へ。風に任せてちんちり紅葉の土器投げではない、杯投げの御趣向。

丹下　これと云ふも、始末第一の浮島甚太夫が手前、御遠慮ゆゑ、我れ〳〵が枕を砕いた杯の、金切りとはどうでござりまする。

氏太　こりや丹下めが、出かし居つたわえ。

ト奇妙院、丹下が側へ来て

奇妙　モシ、丹下さま、こちらの金は、どうして下さりまするな。

丹下　オヽ、サ、承知々々。

養仙　イヤ、丹下どの、あれは何者でござる。

丹丹　イヤ、この者は。

ト氣の毒になるこなし。

奇妙　モシ、何もさう隠す事はござりませぬ……ヘイ、愚僧は奇妙院と申す修験者でござる。丹下さま、マア、下に居てもらひませう。

ト丹下を引据ゑ

コレ、こなさんに用立てた千兩の金と云ふは、大峯への納め金。どうぞ暫らくのうち用立てろ、その代りには大切な、家の寶を其方へ預け置くと、コレ〳〵。

ト風呂敷包みより、都鳥の香爐の箱を出す。氏太郎、見て、皆々と顔見合せ、こなし。

この代物、其方では大事な物でもあらうが、わしが方では、なんの役に立たぬ物だ。質物は戻します程に、サア、貸し金を算用してもらひませう。サア、算用さつしやい算用さつしやい。

ト香爐の箱を投げつける。

氏太　コレ〳〵、丹下、あの山伏が質に取つたと云ふは、大切な家の寶。ありやマア、どう云ふ譯ぢやぞいの〳〵。

ト側へ寄つて、心ならぬこなし。

丹下　サア、斯く露顯の上は是非に及ばぬ。あなた樣の御遊興、廓の入用千金餘り。吝嗇第一の甚太夫なれば、詮方盡きて、お家の重寶、都鳥の香爐を預け、金子千兩、あの者に取替へさせ、廓の入用何かの支拂ひ、仕つたのでござりまする。

氏太　ホイ。

ト當惑のこなし。

奇妙　コレ、貸した金を濟まさにやア、こなさん達は騙りだよ。イヤ、盗人だよ。

養仙　默りやがれ。此奴は云はせて置けば、つわり〳〵と、あなたをどなたと思ふ。お大名に向つて、盗人騙りとは憎くいづく入め。

良助　その頤を切り下げるぞ。

ト反りを打ち、思ひ入れ。

奇妙　なんぢやい〳〵。がたくり棒をひねくり廻して、貴樣達はおれを切るか。こりや面白い。サア、切りなさい爰か……但しは爰か。いつそ爰か。

ト尻を捲つて、突きつけ

どこでもお望み次第、切つて赤くなけりやア錢は取らない。サア、切れ〳〵。エヽ、そんなこけ嚇しで行く御出家樣ぢやないわえ。斯うお神輿を据ゑるからは、その分ぢやア濟まさない。其方で切らねばこの通りを、記録所へ持ち出して、何もかもぶちまけてしまふ。何奴も此奴も待つて居やアがれ。

ト行かうとする。皆々心遣ひのこなし。丹下、奇妙院を引き廻し、思ひ入れ。

オヽ、痛い〳〵。金は戻さず、こりやアおれを殺す氣だな人殺しだ〳〵。

ト大聲を立てる。

丹下　やかましい。金を渡してくれう。

奇妙　こりやア有り難い。サア、金を受取らうかい。

丹下　如何にも只今渡してくれう。利兵衞、その杯をこれへ。

利兵　畏まりました。

ト三方の杯を持つて來る。

丹下　ソレ、金子受取れ。

ト奇妙院が前へ置く。合點のゆかぬ思ひ入れにて
奇妙　こりやモシなんだ、道具市の競り物を見るやうに、杯を突きつけて、大枚の千金の金とは。
丹下　杯は世の常なれど、一枚々々の切り金を以て、信田家の御定紋を書かせたれば、即ち殿の御判も同然。
奇妙　ムウ。そんならこの杯は。
養仙　大を十兩小を五兩と定め、當つた者は金を引替へ。
良助　金役所へ持參すれば、何時でも金になるその杯。
奇妙　エヽ、さてはこの大きいのが十兩。こりやアひりこまの思ひつきだ。よいワ、慥かに受取りました。
丹下　金濟んだからは、この質物は此方へ受取る。
ト氏太郎へ渡す。氏太郎、受取り押戴き
氏太　ヤレ〳〵、これで少しは安堵した。
小萩　わたしらも大抵苦勞であつたわいなア。
尾花　何が知らぬが、こりやきつう、座が滅入つて來たわいなア。
野分　これから文覺堂のお假家で、飲み直さうぢやアないかえ。
氏太　こりやよからう。サア、酒にせい〳〵。
奇妙　酒とは面白い。愚僧もその杯を、戴き山の法螺の貝と出ようわえ。
養仙　こいつ法螺の貝とは、酒癖が惡いと見えるわえ。
利兵　とは又なぜな。
養仙　ぶう〳〵吐かすであらう。
皆々　ハヽヽヽ。
氏太　飲めや唄へや一寸先は闇の夜。
皆々　サア〳〵。
ト踊り地になり、皆々踊り唄うて入る。この踊り地にて、向うより大助、奴の形、竹に火繩をつけ、煙草のみながら出て來て
大助　エヽ、何か賑やかに騷ぎ居るな。但しあれが若殿樣の御遊興かも知れない。どうぞ密かにお目見得がしたいものだが。
ト云ひ〳〵、舞臺へ來る。此うち奧よりお袖出て來て
そで　ヤア、大助どの、ござんしたかいなア。
大助　これはお腰元のお袖どのでござるか。
そで　ようマア來て下さんしたなア。
大助　イヤ、ようは來ぬで。大旦那甚太夫さまより御内意の分あつて、若殿樣へ火急の御用。大方奧山のお假家にお出でなさるであらう。ドレ〳〵。

ト行かうとするを、留めて

そで　イヽエ、どつちへもやる事はならぬわいなア。

大助　ムウ、どつちへもやらぬとは、そりや、どなたからの云ひ附けで。

そで　アノお腰元の袖が云ひつけで。

大助　ハテ、平たく出たな。よいワ、さう云ふ事なら、先づこの床几へ、斯う腰をかけるぢや。

ト床几へ腰をかける。合ひ方。お袖も側へ腰をかけて

そで　モシ大助さん、お前とわたしは何ぢやえ。

大助　ハテ知れた事、こな様はお手廻りのお腰元。わしは折助サ。

そで　サア、表向きはさうなれど、內證はお前の女房。

ト恥かしさうに云ふ。大助もこなしあつて

大助　イカサマナア、おれが妹のお作は、おぬしが兄貴の大八が女房。おれは又、大八が妹のおぬしと、斯う云ふ仲。互ひに他人ならざる聟小舅。算用サラリと濟んであるて。

そで　イヽエ、濟まぬわいなア。

大助　濟まぬと云うて、何が濟まぬ。

そで　サイナア、同じ朋輩でも、わたしが兄さん大八どのは、お前の妹御のお作さんと、お暇を願うて、世間晴う、女夫ぢやと云はれ、仲よう添うて居やしやんすを見るにつけ、わたしや羨やましいと思うて居るけれど、お前の方には、深う云ひ交したと云ふやうな、女中さんがあらうがな。

大助　此奴、ちよつぼりと當つて見をるな。シタガ、おれが妹は生れ附いて不器量ゆゑ、その身にうんじ果て、尼法師にもならうと思うて居つたところ、おぬしの兄貴の大八は、ア、深切な男ぢや、眉目のよいばかりが女ではない、心立てが肝心なれば、女房にくれいと達ての望み、何が妹が喜ぶまい事か、早速に極まつた談合。その恩もあれば、親旦那へお願ひ申して、おぬしを女房とは思へども、サア、おれが身には、ちつと據ない譯があつて……マア、この事は、とつくと話して聞かす折もあらう。何を云ふも緣と月日ぢや。辛抱して、マア待ちやいの。

そで　サイナア、その月日を待つうちに、どのやうな障りが出來やうやら知れもせぬものを。それぢやに依つて、どうぞ一日も早う、お暇を願うて下さんせいなア。

大助　ハテ、堪え性のない。よく物を合點して見たがよい。親旦那には大切なるこの度の御用。その中へ搗てゝ加へて、お腰元のお袖どのを、わしが女房に下さいと、云はれさうなものか。

そで　サア、それはさうなれど。

トうぢ／＼こなし。

大助　よう物を合點して見たがよい。

そで　サア、さう云はしやんすと、みんなお前のが尤もぢやわいなア。

大助　サア、それぢやに依つて、緣と月日を待てと云ふのぢや。この度の御用も片附き、お國元へ親旦那のお供して歸つたならば、お情深い若旦那、甚七さままでお願ひ申して、首尾ようお暇を貰うた上では、兼ねての約束。

そで　さう云ふ事なら落ちついたわいなア。

大助　合點がいたか。

そで　合點は合點ぢやが、また其やうに云うて騙すのではないかえ。

ト此うち下座より奇妙院、銚子杯を持つて出て來り、二人が様子を見て、上の方床几へ腰をかけて、餘念なく見惚れて居る。

大助　ハテ、疑ひ深い。例へ楊貴妃虞氏君を、砂糖漬けにして來ても、おぬしに見替へる心はない。コリヤ、女房ども。

そで　エ。

大助　女房と云ふが腹が立つか。

そで　サア、そんならアノ大助さん……ではない。こちの人。

ト奇妙院、酒を飲みながら、兩人の話しを聞きたきこなし。

大助　晩には忍んで、互ひにしつぽり。

そで　聞き殘した話しも聞かうし

大助　今日の山道で草臥れたところを、何がなしに。

トお袖を引き寄せる。奇妙院、夢中になり、無性に酒を飲む。

そで　コレ、人が見るわいなア。

ト云ひ／＼寄り添ふ。奇妙院、後にて兩人がする通りこなし。

大助　見たら大事か。爰な畜生め。

そで　そんなら、斯うしようわいなア。

ト抱きつく。

大助　エヽ、可愛い奴の。
ト抱きしめる。奇妙院、夢中になり、腰掛けより下へ落ちろ。ウンと目を廻す。兩人驚ろき
ヤア、山伏が目を廻したワ〳〵。
ト兩人ウヂ〳〵して、茶桶の水を飲ませ
コレ〳〵、山伏どの〳〵。
そで　山伏さんいなア。
ト奇妙院、やう〳〵心附きたるこなし、兩人を突き退け、キッとこなし。
奇妙　ハテ心得ぬ。いま男女戀愛の體を見ると、忽ち魂ひを天上へ吊り上げ、正氣を失うたと思ひしが、瀧壺の元より、さもやんごとなき奴の聲にて、申し、山伏々々と呼ぶやうに思うたが、ハアハテ、訝かしやなア。
ト鳴神のやうに云ふ。
大助　コレサ、いま呼び生けたはわしサ。
奇妙　ヤア。
ト大助を見て
おのれは今うせた奴めだな。そんならあの女を……エヽいま〳〵しい。こりや、所を變へて飲まにやアならぬ、
ト銚子杯を下の床几へ持つて行て、呟きながら酒を飲む。下座より氏太郎、丹下、養仙、良助、出て來る
これにて大助、お袖に隱れいと云ふこなし。
氏太　もう飲めぬ〳〵。
皆々　ハテ、もう一獻ようござりませう。
ト大助、氏太郎を見て
大助　若殿樣でござりまするか。
ト平伏する。
氏太　そちや浮島が下部大助とやら、また迎ひに參つたか。
大助　イヤ、お迎ひではござりませぬ。御內意あつて、密かに參りましてござりまする。
皆々　何か內意とは。
大助　この度、連歌の御殿御造營に就き、御上京の折柄花園家の姫君と御緣邊の取組み、御家督評定極まり、今日中に御祝言を取計らはんと、一家中の評議極まりましてござりまする。
氏太　ムウ、なんと申す。一家中の者どもが、無理に祝言せいと申すか。
大助　その儀につき、主人甚太夫名代として甚七、姫のお供いたし、追ッつけこれへ登山の由。この旨お知らせ申

さんと、斯くの仕合せでござりまする。
氏太　サア〳〵、婚禮が急になつて來たワ。
トうろ〳〵して
丹下、どうしたものであらうな。
丹下　どうと申して、御祝言をなされては、お心を掛けられたる松島が、得心は致しますまい。
養仙　殊に花園家の姫君は、鼻そげやら猪口やら、見ぬ商ひは出來ぬと申すもの。
大助　そこを存じて下郎めが一思案。此方からは嫌はぬ顏で、緣の切れる思案が、ありさうなものでござりますぞえ。
氏太　イカサマ、こりや思案所ぢやわい。
養仙　醫者とも談合と云へば、よい配劑がありさうなものぢやが。
ト皆々案ずることなし。
大助　イヤ、よい思案が出ましたわいの。
皆々　よい思案が出たか〳〵。
ト皆々大助を取卷く。
こりや斯うしてはどうでござりませう。今日姫君のお越しを待ち受け、若殿でもない若殿樣を拵らへますぢや。

皆々　若殿樣の吹替へとは、面白い〳〵。
大助　ところで、姫君は御祝言を待ち兼ねてお出でなさるるに依つて、似せ物の若殿を突きつけ、戀し床しい溜め溜めを。
皆々　溜め〳〵を。
大助　仰しやつてひつたりと、抱きつく所を、誠の若殿樣が不義者見つけたと、それから文句を附けて、緣さへ切ればよいと申すもの。この趣向はどうでござりませうな。
氏太　こりや妙計〳〵。
良助　天晴れお智惠者め。出來た〳〵。
丹下　時に、差當つて若殿の吹替へには、誰れであらうな。
皆々　イカサマ、誰れがよからうなア。
トあたりを見廻し
養仙　幸ひ〳〵、若殿の代りには、あの山伏はどうでござらうな。
ト大助、見て
大助　こりや出來ました。どうで御家中の内では、後がむづかしい。幸ひのあの山伏。

丹下　然らば若殿の衣服を、早う〳〵。
良助　心得てござる。
ト廣蓋に衣裳を載せ、持つて來る。
丹下　コリヤ、奇妙院、ちよつとこれへ〳〵。
ト招く。
奇妙　又なんぞ儲け口でござりまするかな。
ト云はうとして、氏太郎を見て、口を押へる。
丹下　イヤ、其方にちと頼みたい事がある。なんと聞いてはくれまいか。
奇妙　イヤモウ、御酒のお相手なら、御免なされませ。
丹下　イヤ、外に頼みたい事がある。その仔細と云ふは、この衣裳を着して、若殿氏太郎さまと云ふ、大名にはなつてはくれまいか。
奇妙　そりやマア、なんの科で、大名になるのでござりまするな。
丹下　樣子は追ッつけこの所へ、花園家の息女千草姫と云うて、十六七の女が來るワ。
奇妙　サア、參りまするワ。
丹下　ところで、其方が若殿になつて、その姫を捉へて云ふには、我れこそ信田氏太郎ぢやと、ちよぼくさ云ひ廻して。
奇妙　云ひ廻して。
丹下　サア、その後は、どうなりとしたがよい。
奇妙　そんなら、その十六七な美しい姫が來るワ。ところで愚僧が若殿樣になつて、このべんぺらを引ッ張つて、その姫を捉へて、ちよぼくさ云うて、そして、どうなりとしても大事ござりませぬか。
丹下　そりや其方の心任せ。高で姫君に疵さへつけば、此方はよいぢや。
甃仙　隨分首尾よう致したら、褒美の金は望み次第ぢや。何は格別、そのお小袖を。
皆々　合點ぢや〳〵。
ト皆々立ちかゝつて、奇妙院に小袖、羽織、ほうろく頭巾を着せる。
丹下　コレ、奇妙院、必らずぬかるまいぞ。
奇妙　お氣遣ひなされまするな。うま事して金儲け。こりや、まんが直つて來たわえ。
氏太　なか〳〵話しの出來る修驗者だわえ。
大助　この上の手段は、萬事文覺堂で。
氏太　皆の者。

皆　若殿樣には

皆々　先づ入らせられませう。

ト唄になり、氏太郎、先に皆々入る。丹下、奇妙院、殘る。あと合ひ方。

奇妙　丹下さま。

丹下　コリヤ。

ト思ひ入れ。

奇妙　兼ねてお賴みの通り、御旅館へ入込み、若殿御武運長久と僞はり、しいたの密法を以て、十か九つ成就なしたる、呪詛の行法事滿てず、浮島甚太夫に氣取られ、尻こそばゆく、大きに骨折り損を致しました。

丹下　それにも又、手段もあらうが、最前若殿へ渡した都鳥の香爐は。

奇妙　あれは眞赤な似せ物。誠の香爐は、疾に蘆島傳藏さまへ、お渡し申して置きました。

丹下　そりやよい手廻しであつた。この上は寄つてかゝつて、馬鹿殿に仕立て、今日の杯投げも、世間へ奢りを知らせる手段の一つ。その杯を金役所へ持參すれば、金子と引替へ。殊に花園家の姬君の輿入れ、その云ひ號けの姬に疵を附くれば、科に科を重ねると云ふもの。首尾よく行つたら、褒美は望み次第。

奇妙　よし〳〵、占めたものだ。

丹下　兎角心がゝりは、去年歸りし千原十左衞門。此奴、善とも惡とも分らぬ面魂ひ。さるに依つて蘆島どの、文意にて、甚太夫と仲を違はせ、辯舌を以つて兩人を不和になしたれば、蘆島どのゝ思し召しの通り、同士討ちあるは必定。それにつき、兼ねて諜し合せ置きたる、河州富岡山の浪人、高宮玄蕃方へ遣はす密書。この使ひは奇妙院、其方を賴む。大切なる用向き、必らず見咎められぬやうに致せ。

ト密書を出して渡す。奇妙院、取つて

奇妙　心得ましてござります。これも首尾ようやッつけたら、只ではござりますまいな。

丹下　ハテ、慾張つた奴だ。

奇妙　ハテ、極める事は、よう極めるがようござります。

丹下　然らば萬事ぬかるまいぞ。

奇妙　心得ました。

丹下　奇妙院。

奇妙　丹下さま。

丹下　吉左右待つて居るぞ。
ト唄になり、丹下、下座へ入る。奇妙院、こなしあつて

奇妙　この杯を金役所へ持つて行けば、金と引替へ。この密書も首尾よく屆ければ、只は通さない。うまい／＼……うまいと云やア、もうその十六七は來さうなものだが。
ト下座にてバタ／＼人音する。

そりやこそ、そろ／＼ござるさうなわえ。
トこなし。合ひ方になり、松島、殿さん／＼と呼んで出て、奇妙院に突きあたり、奇妙院、ちやつと羽織をかぶる。松島、奇妙院の形を見て

松島　ヤア、お前は殿さん。
ト奇妙院、頷く。

ツツトモウ、なぜに其やうに顔を隱すのぢやぞいなア。コレイナア、何やかや話したい事がござんす。殿さん、コレイナア、この羽織を取らしやんせいなア。
ト羽織を取りにかゝる。奇妙院、身を反向け、頭を振る。

なんの事ぢやぞいなア。人に物を思はすやうに、オ、憎。
ト太股を抓る。奇妙院、アイタ……と逃げるはずみに羽織脱げる。松島、驚ろき

ヤア、お前は。
ト逃げうとするを捉へて

奇妙　ドッコイ／＼、さてはそもじが、彼の今の十六七ぢやな。大事ない、怖い事はない。初めての事ならば、おれがよいやうにあしらうてやる。
ト引き寄せて、抱きつく。

松島　エヽ、嫌らしい。否ぢや／＼。

奇妙　否でも應でも、これがどうなるものか。
トいろ／＼追ひ廻し、帶を解かうとする。

松島　エヽコレ、惡い事しやんな。アレエ／＼。

奇妙　やかましい。帶を解いて肌と肌とを合さねば、寢たやうにない仲ぢやもの。
ト豐後節を語り

マア、この帶を解いて。
ト手をかける。

松島　否ぢやわいなう。

奇妙　否とは云はさぬ。

トいろ〳〵追ひ廻すを、奇妙院。捉へ、無理やりに帯を解き、いろ〳〵あり、この前より向う揚げ幕より、甚七、上下衣裳にて出て來る。後より女乗り物吊らせ若黨附き添ひ出て來る。舞臺兩人はこれを知らずに居る。甚七、よき所へスツと行き、兩人が帯を捉へ

甚七　不義者動くな。

妙奇　ヤア。

ト悔りする。

甚七　兩人が不義、浮島甚七が見屆けた。お假家に誰れも居やらぬか。いづれも立合ひ召されい

ト奥より氏太郎、丹下、養仙、良助、利兵衛、岩次郎出て來り

岩次　不義者とは何者でござりまする。

氏太　不義の女は離縁するぞ。

丹下　不義者の千草姫、勅定の縁もこれきり〳〵。

岩次　コレ〳〵、丹下どの、聊爾な事を云ひやるな。

養仙　イヽヤ、云つても大事ない。姫君は不義者だ〳〵。

甚七　姫君の密通とは、そりやなんの痴言。花園家の御息女千草姫さまには、お乗り物にてお供いたした。岩次郎これへ。

岩次　ハツ。

ト乗り物の戸を開け

姫君樣には、イザこれへ。

ト合ひ方になり、千草姫、走り出て、氏太郎に取りつく。

千草　殿さん、お懐かしうござりましたわいなう。

氏太　ヤア、こりやどうぢや。

丹下　して、不義者とは

皆々　何者でござるな。

甚七　不義者と申したは、その傾城。

皆々　ヤア。

甚七　姫君に見替へて寵愛の女、若殿のお目を掠め、賣僧坊主と不義密通。科はその身に覺えあらうが。

松島　サア、皆さんのお頼みで。

ト云ふを甚七、押へて

甚七　なんと。

松島　アイ、わたしや不義者ぢや〳〵わいなア。

丹下　エヽ、すりや姫君と松島を取違へて

ト皆々と顔見合せ、こなしあつて、奇妙院を見て

皆々　イケ馬鹿々々しい。

ト奇妙院を睨める。

奇妙　十六七の注文を合したが、八卦の表が違うたかな。

岩次　すりや、この山伏と松島太夫が。ハテナア。

松島　モシ山伏さん、斯うなるからは是非に及ばぬ。早う名乘つて下さんせいな。

甚七　なんと、不義密通と、女が口から自分の白狀。

岩次　サア、眞直ぐに吐かすまいか。

奇妙　自身の白狀でも、雷の白狀でも、此方には覺えはない。知らぬ／＼知りませぬ。

甚七　存ぜぬ者が、この帶はどうして解けた。

奇妙　サアそれは。

トうろ／＼する。

松島　コレイナア、そりや卑怯でござんす。二世三世と云ひ交したぢやござんせんか。斯うなつたらわたしや覺悟は極めて居る。お前も早う、ツィ首切られて下さんせいなア。

奇妙　滅相な。おりや何にも知りもせぬものを。

養仙　なんの事か、合點がゆかない。

甚七　サア、不義の相方、尋常にそれへ直れ。

奇妙　サアそれは。

甚七　踏みつけて括しあげうか。

兩人　サアそれは。

甚七　サア。

奇妙　サア。

兩人　サア／＼／＼。

甚七　なんとぢや。

ト思ひ入れ。

奇妙　こりや堪らぬ。

ト逃げるを、岩次郎、首筋取つて

岩次　動きやアがるな。

甚七　此奴を棒縛りにして逆磔にかけい。

岩次　畏まつてござる。

ト立ちかゝる。足輕縛り上げる。懷中より杯、バラバラと落ちる。

奇妙　ア、／＼、斯うなつたら何もかも白狀いたしませう。この賴み手と云ふは、そこにござる丹下さま。

ト云はうとする。

丹下　コリヤ、血迷うたるか。何を吐かす。

奇妙　でもお前が。

丹下　コリヤ／＼、身は知らぬぞ／＼。何も云ふな。吐か

すまいぞ。
ト氏太郎、ツカ〳〵と寄つて、松島を切らうとする。
甚七、ちよつと留めて
甚七　イヤ、松島太夫が不心底、御立腹は御尤もなれど、誠少なき君傾城。
氏太　なんと。
甚七　お手討とは餘り御短慮。先づ〳〵お扣へあられませう。
氏太　エヽ、命冥加な。
ト納まる。松島、こなし。千草姬、思ひ入れあつて、手早く懐劍にて自害せうとする。岩次郎、留めて
岩次　こりや何ゆゑの御生害でござりまするぞ。
千草　何ゆゑとは、傾城に見替へられた自ら。お側で死ぬるが本望。留めずと殺してたもいなう。
岩次　御生害あつて、お願ひが叶ひまするか。
千草　サアそれは。
岩次　先づ〳〵お待ちなされませう。
甚七　若殿様には姬君と、御祝言あられまするか。
氏太　サアそれは。
甚七　御祝言あらば御代長久。

氏太　ぢやと云うて。
甚七　御承知なくばお家御斷絶。
氏太　サア。
兩人　サア〳〵〳〵。
生七　なんとでござりまする。
トお袖、後へ出かゝり、聞いて居る。
氏太　マア〳〵待つてくれ。其やうにセカ〳〵云うてくれな。丹下、こりやマアなんとせう。
丹下　なんと云うて、マア、ウムと仰しやるがようござりまする。
氏太　そんならマア、ウムぢや。
甚七　お出かしなされました。然らば姬君と。
そで　その計らひは、私しが致しませう。
ト合ひ方になり、落ちてある杯を三方に載せ、千草姬が前に置く。
氏太　ヤア、そちや浮島が腰元袖。
皆々　これは。
そで　お家の御紋を蒔繪のお杯は、取りも直さず三々九度を固めの御音物。
千草　エヽ、お嬉しう存じまする。

ト千草姫、戴いて納める。

氏太　すりや大助が、最前の計らひも。

そで　若旦那甚七さまのお指圖と、大助どのが、先づ斯う斯うと事を分けての賴みゆゑ、女子は女子同士と、ツイちよぼくさと、お傾城に呑み込ませて計らひしゆゑ、御祝言も首尾よう調ひ、お家御長久

岩次　千秋萬歲

甚七　おめでたう存じまする。

良助　なんの事だ。とんと譯が知れない。

奇妙　ハテ、どこも似た事がある。此方も無茶だ。

松島　殿さんのお爲とある事ゆゑ、斯うはしたものゝ、殿さん、未來は見捨てゝ下さりまするな。さらばでござんす。

ト自害せうとする。利兵衛、慌てゝ留め

利兵　コリヤ、早まるまい。おぬしを殺してつまるものか。

松島　親方さん、留めずと殺して下さんせいなア。

甚七　コリヤ〳〵、親方とやら、その女には尋ね問ふべき仔細もあれば、事落着までは其方へ預けたぞ。

利兵　畏まりました。御用の節は何時でも、連れて上がりまするでござりませう。

奇妙　して私しの身の上は。

甚七　助け憎い奴なれど、お家に免じて命は助ける。其ままにして裏門より追ッ拂へ。

足輕　ハツ。

ト立ちかゝる。

利兵　松島、おぢや。

ト時の太鼓にて、松島、先に小萩、尾花、野分、利兵衛、後より奇妙院、足輕附いて皆々下座へ入る。と向うより足輕一人、走り出て來て

足輕　申し上げまする。

丹下　慌たゞしい何事ぢや。

足輕　ハツ、御普請成就につき、明日御檢分として、勅使のお入りでござりまする。

甚七　ナニ、御連歌の御殿御普請成就につき、明日御檢分として勅使のお入りとな、……イヤ、若殿樣、お家の重寶都島の香爐は、いづれにござります　な。

氏太　氣遣ひしやるな。家の寶は肌身離さず。

ト香爐の箱を出して、甚七へ渡す。

甚七　ドレ。

初演の繪番附

ト取つて押戴き、箱の蓋を取つて見て
ア、、これは。
トきつと思ひ入れ。

皆々　甚七どの、お寶は如何いたしましたな。
ト立ちかゝる。甚七、香爐の蓋をして

甚七　イヤ、お寶に相違ござらぬ。
三人　アノそれが。
甚七　如何にも。
ト丹下、養仙、こなし

丹養　ハテナア。
甚七　浮島甚七、慥かに守護いたすでござらう。
岩次　若殿様には、急ぎ勅使の御前へ、お越しあられませう。
氏太　成る程、さうせずばなるまいかいの。
甚七　姫君様には、先づ〳〵。
ト千草姫をお袖、乘り物へ乘せる。
岩次郎どのには大事の警護。

岩次　心得でござる。
皆々　して、甚七どのには。
甚七　お寶持參、拙者はお後より。

氏太　そんなら甚七。
甚七　若殿様、お立ち。
皆々　ハ、ア。
岩次　お乘り物立てい。
皆々　ハア、。
ト行列三重になり、氏太郎、先に丹下、良助、養仙、後より乘り物、これに足輕附き添ひ、ト、岩次郎、殿りして、皆々向うへ入る。甚七、こなしあつて、香爐の箱を出し、向うをキッと見る。お袖、心遣ひのこなしにて

そで　イヤモシ若旦那様、最前よりの御様子と云ひ、どうも合點が參りませぬが、そのお寶が、何とぞ致しましたかえ。
甚七　如何にも、この都鳥の香爐は、眞赤いな似せ物ぢやわやい。
そで　エ、。
甚七　只今それを詮議いたさば、却つて毛を吹いて疵とやら。お家の大事と心一つに、取納めるこの器。側から根を押す丹下始め、いづれこの盗人は外ではないわえ。
そで　そんならお寶の盗賊は。

甚七　大概それとは知れてあれど、證據なければ迂濶に口外は致されぬ。

そで　それでは。

甚七　ハテ。

ト囁く。

そで　そんならアノ、大助どのと申し合せて

甚七　先づ山伏が詮議の糸口。

そで　首尾よう詮議を致したら

甚七　其方達二人が日頃の願ひ。

そで　エヽ。

甚七　ハテ、この甚七も、木竹ではないわいやい。

そで　エヽ、有り難うござりまする。

ト甚七、こなしあつて

甚七　家來供せい。

ト唄になり、甚七、侍ひを連れ向うへ入る。お袖、後を見送り

そで　エヽ、有り難うござりまする。行儀正しいやうでもお心のさばけた若旦那樣、大助どのと二人の譯を御存じあつて、木竹でないと仰しやるからは、わたしが爲には結ぶの神。この樣子も大助どのへ。さうぢや。

ト行かうとする後へ、最前より奇妙院、出かゝり居て

奇妙　ドツコイ〳〵。占めた〳〵。

ト後より抱きしめる。

そで　エヽ、誰れぢやぞいの。

ト奇妙院を見て

ヤア、こなさんは先刻の山伏どの、アヽ嫌らしい。爰放しやいの。

奇妙　イヽヤ、放さぬ〳〵。有やうは先刻奴めと、いちやつきやつて居たを見ると、エヽ、彼奴をなアと、お堀へ下りた鴨を見るやうに、脇で氣ばつかり揉んで、どこもかも、ときつ〳〵としやき張り返つて居たものを、どう爰が放されるものか。

そで　エヽ、惡い事ばつかり。

ト無理に振り放す拍子に、奇妙院、懷中より以前の密書を落す。お袖、取上げ

「高宮玄蕃どのへ、薩島傳藏。」

ト封を切る。奇妙院、驚ろき

奇妙　それを。

ト取りにかゝる。支へる立廻り、トド兩方引ッ張り、

互ひに破ろまいと、これをいとふ立廻りよろしく、大
助、支度出來次第、よき程に奴にて出て、後よりこの
狀を、中より引ッたくる。

そで　ヤア、大助どの。

大助　詮議の手がゝり見附けた上は、若旦那へこの旨早う
お知らせ申せ。

そで　合點でござんす。

大助　早う〳〵。

ト早三重にて、お袖、向うへ走り入る。

奇妙　ヤア、野郎め、大切なるその書翰、此方へ渡せ。

大助　小積な事を。詮議の手がゝり。おのれぐるみに繩を
打つ。腕廻せ。

奇妙　おのれ渡せ。

大助　繩かゝれ。

兩人　ドッコイ。

ト好みの鳴り物になり、兩人この狀を枷に激しき立廻
りあつて、トド眞中より兩方へ引裂く。立廻りにて
奇妙院、大助をちよつと當て向うへ一散に走り入る。
大助、タヂ〳〵して、フト手に殘りし密書の半分を見
て、口の中にて讀みて

大助　こりや密書。

ト後に惡者一人、窺ひ居て、この時「それを」とかゝ
る。見事に投げ退け、密書を口に咬へ、尻をからげる。
これをキッカケに、　ひやうし。幕。

二幕目

東山若王寺の場
糺の森闇討の場

役名——月岡中納言秋里卿。浮島甚太夫。同下部
大八。同、大助。浮島甚七郎。お部屋、お民の方。
伯母、おきよ。萩本要人。片山軍治。甚太夫妾、
おるい。薩島傳藏。千原十左衞門。

本舞臺、三間の間、見付け金屛風、信田家定紋附き
の幕を打ち、上の方、七つ道具を飾り、すべて洛東
連歌普請番所の體。爰にお民の方、妾の拵らへ、二
重舞臺に直り居る。要人、軍治、上下衣裳にて、平
舞臺に扣へ居る。この見得、八ッの時の太皷にて幕
明く。

要人　最早未の上刻。お部屋様には御旅館へ入らせられ、然るべう存じまする。

軍治　先刻より若殿由松君のお使ひ、再度に及び罷りありまする。

たみ　いやとよ、自らもさは思へども、今日は連歌の御殿成就の由。千原十左衞門を以て、大内記録所へ奏聞いたせしとある。滯りなく御普請出來の事なれば、分けて仔細はあるまじけれど、お見屆けの勅使お入りの上、願はにやならぬ信田の跡目。それゆゑに奏聞の様子を聞くまでは、旅館へも歸られませぬわいの。

要人　御尤もなるお部屋様のお詞。併し、奏聞の刻限は今朝辰の刻。最早十左衞門どのにも歸られさうなものでござりまする。

軍治　イカサマ、御家老の浮島氏と云ひ、薩島氏にも最早普請の場所を、お引きなされさうなものでござる。

ト此うち向うバタ〳〵にて、菖蒲革の侍ひ走り出て

侍ひ　申し上げまする。今日千原十左衞門どの、大内奏聞のお使者、首尾よく相濟み、御家老中御同道にて、只今これへお歸りでござりまする。

たみ　それ待ち兼ねた。早うと云へ。

侍ひ　畏まりました。

ト引返し、向うへ走り入る。これをキッカケに太鼓謡になり、向うより十左衞門、上下衣裳、次に甚太夫、老年の家老の拵らへ、同じく衣裳上下、次に傳藏、同じく衣裳麻上下にて出て來り、花道にとまる。

要人　これは〳〵千原十左衞門どの、浮島甚太夫どの。

軍治　薩島傳藏どの、先刻よりお部屋様のお待ち兼ね。

兩人　イザ先づあれへ、お通りなされませう。

十左　イザ甚太夫どの。

甚太　先づ其許から。

十左　傳藏どの。

傳藏　先づ〳〵。

十左　然らばお先へ。

ト右鳴り物の切れにて、各々舞臺へ來る。甚太夫、上の方、その次に十左衞門、下の方傳藏、その後へ要人軍治、扣へる。鳴り物打上げる。

甚太　お部屋様には疾よりお入りと承りまする。さぞ御退屈にござりませう。

たみ　今日御普請成就の由、大内へ奏聞の使者は千原十左衞門、相勤められし由。大儀に思ひまするわいの。

十左　これは〳〵結構なるお詞。身不肖の某ながら、今日の役目首尾よく相勤め罷り歸りましてござりまする。即ち後刻御内見のお勅使、入らせらるゝとの儀でござる。

たみ　それは重疊、喜びまする。先づ以てこの度の御普請成就せしは、役目を蒙むる信田家の面目。さぞ殿にもお喜びでござらう。これも偏へに何れもの出精、殊に甚太夫どのには老體と云ひ、疲れもさぞと推量しましたわいの。

甚太　仰せの如く老體の氣力薄く、この度の御用勤むべき悴甚七召連れ、上京いたすではござれども、若年と申し、晩年の心ばかり。傳藏どの、年寄りましてござる。

ハ、、、。

傳藏　イヤ〳〵、御癇症に相見えまする。それは格別、後刻お勅使お入りとあれば、饗應のお能申し附けずばなりますまい。

十左　成る程、その儀も委細承知罷りありまする。直ぐにこれより直々に、申し附けますでもござりませう。

傳藏　それは一入御苦勞千萬。イカサマ、貴殿事は當家御譜代とは申せども、一旦仕落ちあつて御親父もろとも、久々浪人召されしところ、これなる甚太夫どの御推擧に依つて、當家へ御歸參相叶ひ、新地百石のお取立て。一管子流の管鎗を以て、大殿へ御師範。イカサマ、一藝はその身の寶と、まだ一年も經たざるうち、する〳〵と三百石の立身。一家中に於て、誰れ羨まぬものはござらぬぞや。

十左　これは御挨拶でござる。ナニサマ、貴所の仰せの通り、聊かの仔細ござつて、親左近もろとも浪人仕り、漂泊のうち、親どもは歿り、老目の母一人さへ、心に任せぬ朝夕のいたつき。まだしも武運に盡きざるゆゑか、當春歸參仰せつけられ、鎗術を以て殿への御師範。これ以て莫大の御厚恩。武士の冥加と、斯樣な有り難い儀はござりませぬ。

たみ　自らとても元が湯殿の御奉公。當時はお部屋と傳かるゝも、これ全く出松さまと云ふお胤を儲けしゆゑ。これにつけても御本腹の氏太郎さまを以て、御家督願ひを上げるが順當ながら、何を云うても愚かしいお生れつき、追ッつけお勅使のお入りあらば、内々御家督の願ひ、申し入れねばなるまいが、何を云うても國の守の、御器量があるのないのと、一家中の取沙汰も、氣の毒なものぢや

わいの。
十左　サヽ、それと申すも若殿氏太郎さまには、御幼少より教へが悪しいからの儀でござる。兎角人と申すものは、育て柄が肝心でござる。
甚太　イヤ／＼十左衛門どの、この甚太夫は若殿氏太郎さまの附き人。育て柄が悪しいとは、某に云はつしやるのか。
十左　これはお氣に障りましたかな。
甚太　障りました。ずんと障つた。十左衛門、貴様、恩と云ふ事を知つて居さつしやるか。
十左　ハヽヽ、凡そ性ある者、恩を知らぬと申す者はござるまい。それにまた甚太夫どのには、如何なる事をお尋ねなさるゝな。
甚太　サヽヽ、それ程恩を知つて居さつしやる其許が、假初めながらこの甚太夫が、越度になるべき今の一言、後先の容赦もなく云はつしやるは、全く恩義を知らつしやらぬと申すところ。さほどまた恩義を忘れ、この甚太夫に遺恨あらば、差つけて直に云はつしやるがようござる。浮島甚太夫、承らうワ。
十左　千原十左衛門は武士でござる。何に依らず申す事があれば、遠慮は致さぬ。育て柄が悪いに依つて悪いと申したが、それがどうぞ致してござるか。
甚太　千疋の鼻缺け猿が眞猿を笑ふと、恩を忘れ、剩さへ佞辯を以て、御前に諂らふ内股武士。誠侍ひの作法は知るまい。
十左　吝嗇第一、文盲の性根を以て、萬事を計らふ。これを彼の俗に申す、臭いもの身知らずとやら。馬鹿者の鏡でござる。
甚太　そりや誰れが。
十左　其許が。
甚太　何がどうした。
　ト刀押取り、キッとなる。
傳藏　イヤ／＼甚太夫どの、先づ暫らく。こりや御兩所とも何事でござる。お互ひに粗略なきが即ち殿への御奉公殊に十左衛門どのは、御親父より昵懇とござれば、旁々以て外ならぬお間柄。それに何ぞや私しの宿意を以て、日頃の昵懇破斷。それでは第一殿への不忠。お役柄にもお似合ひなされぬと、サア、一家中の取沙汰、十指の指す十目の見る所でござる。身不肖ながら薩島傳藏が御挨拶申す。甚太夫どの、十左衛門どの、お聞き届けなされて

下されうか。なんの足しでもない事を。ム、、、。ハハ
ハ、。
トこなし。
たみ　それ〱、つい假初めの云ひ違ひから、よい仲の詞爭ひ。何事もこれぎりに、ナウ、二人の者。
十左　これは〱、傳藏どのと申し、殊にはお部屋樣のお扱ひ、なか〱惡しうは承りませぬ。イヤモウ、高で拙者が存じ寄りを申して見たばかり、さのみ企んだ儀でもござりませぬ。
甚太　某とても此事、堪え性のないと申すは老の一徹。
十左　よしない事を甚太夫どの。
甚太　十左衞門どの。
十左　お互ひに。
兩人　ム、、ハ、、。
トこの時、向うバタ〱にて、侍ひ一人走り出で
侍ひ　ハツ、申し上げまする。追ッつけ勅使お入りとの、お先觸れでござりまする。
ト云ひ捨て引ッ返す、
十左　然らば拙者饗應萬端、申し附けるでござりませう。
たみ　イカサマ、萬事手遲れのないやうに。

傳藏　然らば十左衞門どの、御苦勞ながら。
甚太　要人、軍治の御兩所、お勅使お出迎ひ萬端、用意いたされてよからう。
要軍　畏まつてござりまする。
十左　お部屋樣にはお勅使お入りまで、暫時御休息あつて然るべう存じ奉りまする。
たみ　成る程、さう致しませう。イザ、傳藏どのも御一緒に。
傳藏　某も萬事の手當、お供仕りませう。甚太夫どの。
甚太　先づ〱。
傳藏　後刻御意得ませう。
ト唄になり、お民の方、傳藏、附き添ひ奥へ入る。十左衞門、要人、軍治、下座へ入る。甚太夫、殘り、思ひ入れあつて。
甚太　親左近には似ても似つかぬ十左衞門が心底。ハテ、どうであらうな。
トきつと手を組み、思案のこなし。この時、向うにて
侍二　下がり居らうな〱。
ト合ひ方になり、向うよりおきよ、やつし着流し、手

甲、脚絆、菅笠を持つて出て來る。
きよ　ハイ〳〵、御免なされませ〳〵。
侍ひ　下がり居らう〳〵。
ト双方此せりふ云ひながら、舞臺へ來る。
甚太　コリヤ〳〵、騒がしい、何事ぢや〳〵。
侍ひ　ハツ、何かお願ひの筋あると申し、推してお假家へ通りまするゆゑ、斯くの仕合せでござりまする。
甚太　イカサマ、何願ひかは知らねども、この所は大切なるお假家。して、其方は何者ぢや。
きよ　ハイ、私しは丹州笹山の者でござりまする。即ち浮島甚太夫さまと申す御家老様へ、お願ひがあつて參つた者でござりまする。
甚太　なんと云ふ。浮島甚太夫に願ひの者とな。
きよ　左様でござりまする。
甚太　ハテナア、即ち甚太夫は身共ぢやが、願ひの筋とあれば、聞いて遣はさう、コリヤ〳〵、其方どもは扣へて居れ。
傍二　畏まつてござりまする。
ト足輕引ッ返し、向うへ入る。
甚太　して、其方が願ひの筋とは、何事ぢや。

きよ　ハイ、その願ひと申しまするは、即ちこれに詳しく認めてござりまする。
ト懐中より一書を出し、甚太夫へ渡す。
甚太　ナニ、この一書に認めしとな。
きよ　左様でござりまする。
ト甚太夫、眼鏡を出し、一書を讀む。
甚太　ムウ、さては其方は、家來大助の親元の者ぢやな。
きよ　左様でござりまする。
甚太　何か大助が、親大病につき、名跡が立てたいゆゑ、暇をくれいと願ひぢやな。
きよ　ハイ、左様でござりまする。譯を申せば長い事、兎角大助は百姓業を嫌ひ、武家奉公。所にこの度、親の大病、外に兄弟とてもござりませぬゆゑ、大助がお暇を願ひ申し受け、名跡が立てたいと、一家中が談合の上、わざわざお願ひに上がりましてござりまする。
甚太　如何にも、武家百姓の差別はあれども、いづれ名跡が立たぬとあれば、據なき願ひの筋、聞き屆けて遣はさう。
きよ　エヽ、有り難うござりまする。
甚太　併し、此方も只今は取込みなれば、何事もまた後程

先づそれまでは、いづれへなりとも扣へて居れ。

きよ　畏まりましてござりまする。兎角よろしうお願ひ申しまする。

ト合ひ方になり、おきよ、下座へ入る。甚太夫殘り、思ひ入れあつて。

甚太　據なき彼れが願ひ。これにつけても、萬事申しつけ置きたる大助、最早立歸りさうなもの。何にもせよ、安心ならざる彼れが便り……さうぢや。

ト刀を提げ、向うへ行かうとする。この時、奥より傳藏、出かけ

傳藏　アイヤ甚太夫どの、ちよと御意得たう存ずる。

ト甚太夫、こなしあつて坐り

甚太　傳藏どの、して、その御用は。

傳藏　別儀でござらぬ。折入つて貴殿へお話し申したい―儀がござる。

甚太　して、その儀とは。

傳藏　國家のお爲でござる。

甚太　ナニ、國家のお爲とは。

傳藏　サア、その國家のお爲と申す仔細は。

トちよつと思ひ入れあつて

イヤ、迂闊には申されぬ。某口外いたした上に、御承引あらば仔細はなけれども、萬一御承知なきとあつては、薩島傳藏、身の上でござる。ぢやに依つて、御誓言立つた上、お話し申したうござる。

甚太　すりや、誓言を見た上で。

傳藏　如何にも。

ト甚太夫、思ひ入れあつて

甚太　何事に依らず、國家のお爲とござれば、聞捨てには相成らぬ。

ト思ひ入れあつて、小柄にて金打して

斯くの通り。

傳藏　先づ以て祝着に存ずる。只今も申すお家お國のお爲と申すは、この度願ひ出でまする、信田家相續の儀でござる。御家督立つべき氏太郎さまは、あの如くの生ひ立ち。その上この度の御上京に、晝夜を分たぬ傾城狂ひ。拙者も御意見の爲、一兩度も參つて見ましたが、イヤモウ、高なしの大騷ぎ。あのお身持ちでは、なか〳〵一國の政道は思ひも依らぬ。そこへ付け込み十左衞門が先刻の如く、イヤ育て柄が惡いの、生ひ立ちが愚かしいのと、さま〴〵に云ひなす心底。何とも一圓合點參らぬ。

爰が貴殿との談合。あの方の胸に一物、事を計らぬその先に、此方より氏太郎さまを御隱居なし、お家の跡目はお部屋腹に出生ありし、由松どのを以て一國を納めてしまへば、彼奴が手段の先を缺くと申すもの。

甚太　默らつしやい。

傳藏　御幼少とは云ひながら、聰明と申し、殊に大殿の御愛子の由松どの、跡目に立つれば殿にも御滿足。

甚太　默らつしやい。

傳藏　さすればお部屋のお喜びと云ひ、某が存じ寄りも相立つ道理。

甚太　默れ。

傳藏　この上其許さへ御承知なれば、直ぐにお勅使へ内々の願ひを申し上げ、萬事首尾よく調へば、一家中の喜びと申すもの。なんと左樣ぢやござらぬか。

ト此せりふをたぐりかけて云ふ。この時甚太夫、キッとなつて

甚太　ヤア、默り召されい。お家お國の爲とあるゆゑ、聞いて居れば、取り所もない狂人のうわ言、傳藏どの、よい加減に馬鹿を盡さつしやれ。

傳藏　然らば貴殿には御不承知でござるか。

甚太　すべて善惡の道を分けるを相談と申す。惡も惡、横しま非道と見え透いてある貴殿の相談。年能り寄つたれども浮島甚太夫、その道へは得參るまい。

傳藏　ムウ。すりや是非とも御家督は氏太郎さまとな。

甚太　現在の血脈を捨て、素性知れざる成り上がりの者の腹を借りたる由松どのを以て、家國を立てうとは、そりやお抑へのない時の事。當時御本腹の氏太郎さま、れいれいとしてあるうちは、いつかな叶はぬ。跡目の相談。餘人が聞いたら爲にならぬぞ。

トすつと立つて行かうとする。鐺を抑へ

傳藏　待たつしやい。一大事を口外させ、大殿へ訴人召さるか。

甚太　氣遣ひ召さるな、武士の金打、反古には致さぬ。

傳藏　その一言、忘れさつしやるな。

甚太　浮島甚太夫は武士でござる。

ト扇にて刀を叩く。このキッカケにチャンと、唄になり、こなしあつて、向うへ入る。傳藏見送り、思ひ入れあつて

傳藏　こりやこの手では行かぬぞえ。

トきつと手を組み、思案のこなし。お民の方、奥より

出かけて

たみ　傳藏どの。

傳藏　お部屋樣、すりや只今の樣子を。

たみ　殘らず聞きました。金打の上なれば、滅多に他言はあるまいと思へども、もしこの事を漏らされては一大事もう手延びにはなるまいぞえ。

傳藏　やうござる。この手で行かずば、これでやらうと、盜ませ置いた信田家の重寶、都鳥の香爐。

たみ　すりや都鳥の香爐を。

傳藏　首尾よく盜ませ、コレ。

ト懷中より香爐を出し

この度跡目願ひに用ひるこの香爐、第一これがなければ家督願ひ申し出る事思ひも寄らず、その上香爐紛失の科は、若殿氏太郎どの、卽ち若殿の越度は甚太夫が越度となる。若殿を助けうと思へば、差詰め甚太夫が命を捨てにやなるまい。いづれ一方は自滅させる王手飛車手、落ちついてござれ〱。

たみ　それ聞いて先づは安堵、今改めて云ふではなければども、自らは江戸麹町邊に、僅かなる町家の娘。大殿鎌倉在番の折柄、お前のお世話でお湯殿に召し出され、大殿の腰を打ち拔き、內證はお前との忍び合ひ。三月四月と經つうちに、お前の胤を身に宿せしを、幸ひ殿のお胤と僞はつて、産み落せしあの由松。その僞はりがこの身の立身。ツイずる〱とお部屋となり、表向きはどうさつしやれ、斯うさつしやれの家來あしらひ。心の內では傳藏さま、大事の〱旦那どのと、思うて居ますわいの。

トこなし。

傳藏　何を申すも互ひの大望。首尾よく由松を跡目に立つれば、奧州一國は某が心の儘。

たみ　兼ねて氏太郎をなきものにせんと、內意を明かせし養仙に申しつけ、毒藥を粽に仕込み、當五月端午の節、首尾よう謀り負ふせたもの、手飼ひの狆の毒味に依つてこの企ても空しくなる。

傳藏　これ全く、お側に附き添ふ甚太夫が計らひ。何かにつけて邪魔になるあの老ぼれめ。手短かに自滅させる手段は斯う。

ト囁く。

たみ　天晴れ妙計。

傳藏　何事も今宵のうち。

たみ　片附け次第に、密かに旅館へ、こちの人。

傳藏　トちよつと寄り添ふ。
　ハテ、そこどころではござらぬわいの。
　ト下がり羽になる。
最早お勅使のお入りの刻限。
たみ　勅使設けは當所の寺院。
傳藏　甚太夫は、直ぐに自滅。
たみ　此方はめでたい夫婦の固め。
傳藏　色外に顯はれては互ひの身の上。
たみ　それぢやと云うて。
　トまた寄り添ふを、ちやつと隔て
傳藏　先づ入らせられませう。
　ト禮儀を正す。お民の方、辛氣なるこなし、この見得
　下がり羽にて、道具廻る。
　本舞臺、三間の間、二重舞臺。正面大きなる衝立。
　前通り半簾を掛け、すべて洛東若王寺玄關の體。正
　面に秋里卿、冠、裝束、勅使の形にて、床几にか
　かり、平舞臺眞中に甚太夫、上の方十左衞門、下の
　方軍治、甚太夫に詰めかけて居る。要人、下の方に
　扣へ、この見得、右の鳴り物にて、道具納まる。

軍治　甚太夫どの、尋常に繩かゝり召されい。
甚太　イヤ、事の實否を糺すまで、繩かゝる事罷りなら
ぬ。
十左　この期に及ひ、事の實否とは何の實否。糺すに及ば
ぬ、知れてある寶の紛失。未練云はずと繩かゝり召され
い。
軍治　甚太夫、かゝり召されい。
　ト立ちかゝる。
秋里　方々待つた。
要人　お勅使の御意、扣へ召されい。
軍治　ハツ。
　ト扣へる。
秋里　この度、足利義景へ下りし、連歌の御殿造營の勅命
奉行を勤める信田左衞門太夫、その大儀にめで、花園家
と縁を組み、家督相續、たせとある宣命。卽ち今日御殿
成就いたし候へば、信田家の重寶、都鳥の香爐一覽に入
れ、家督願ひ致す筈のところ、計らざる寶の紛失、差當
つて一家中の當惑。さこそと推量いたして居る。
甚太　御賢察の程、畏れ入りましてござりまする。
　ト此うちお民の方、下座より出かけ

たみ　イヽヤ、畏れ入つたとばかりでは事濟まぬ。寶紛失の誤りは氏太郎どの、その若殿の越度は直ぐに甚太夫どの、こなたの越度。それとも云ひ譯あらば、氏太郎さまをこれへ呼び寄せ、お勅使の前で潔白を立てるがよい。軍治、氏太郎どのを、これへ伴はつしやれ。

軍治　畏まつてござりまする。

ト行かうとする。この時傳藏、向うよりツカ〳〵と出て

傳藏　軍治、お待ちやれ。

軍治　イヽヤ、詮議ある若殿、勅使のお目通りで。

傳藏　面縛いたすには及ばぬ。

軍治　ナニ、及ばぬとはな。

傳藏　伴うてよくば身が伴ふ。扣へて居やれ。

軍治　ハツ。

ト扣へる。傳藏、直ぐに舞臺へ通り

傳藏　當家の臣下、薩島傳藏、お勅使のお目通り、御免下し置かれませう。

たみ　イヤ〳〵傳藏どの、善惡分くるお勅使の面前、氏太郎どの連れさせるを、なぜ留めさつしやるぞ。

傳藏　さればの儀でござる。大切なる當家の重寶に心をかける奴。これ正しく若殿の御家督を妨げんとなす佞人の仕業。荒立つるは變の基サ。

要人　すりや、寶の盜賊は、この場に於て。

傳藏　だん〳〵相分るでござらう。

要人　ハテナア。

トこなし。

たみ　浮世の義理に絡まれて、云ふまいとは思へども、若殿氏太郎さまには父御に代り、大切な役目を蒙りながら、傾城狂ひに身持ち放埓。それゆゑに勅諚の緣組みを嫌ひ、晝夜分たぬ島原通ひ。マア、こればかりでも大內のお咎め。家督の願ひはなりますまい。なんと甚太夫どの、これにも云ひ譯の筋がござるか。

甚太　忝なくも勅命下りし花園家の御緣邊、內々御祝言は調ひました。

たみ　すりやアノ、祝言の杯は。

甚太　如何にも。

傳藏　サア、その杯は奢りの第一、高雄山の絕頂より、土器投げに傚らへて、撒きちらせし杯は、お袖判に等しき殿の御定紋。即ちこれを以て金銀に引替へんと、そくたく代りに趣向の杯。斯程の奢りを餘所に見なし、

打捨て置かるゝ貴殿の心底、如何にしても呑み込めぬ。

要人　イヽヤ、その杯の御趣向は、全く若殿の思し召しでござらぬ。高雄山御遊興は皆、傳藏どの、其許のお勸めでござる。

傳藏　何がどうした。

要人　慥かな證據は、其許にも共々嶋原へ通はれし事、某とても存じ居る。

傳藏　ハヽヽ。某一兩度嶋原へ立遯えしは、火を以て火を制する若殿への諫言。いろ／＼と存ずれども、根強う仕込んだ若殿の放埓。

たみ　その上、差當りし寶紛失。お勅使への申し譯。

甚太　その申し譯の筋につき、手がゝりになるべき一條。申しつけし家來大助、最早立歸るでござらう。

軍治　家來の大助、如何いたした。

たみ　寶紛失の云ひ譯あるか。

傳藏　勅使の御前、猶豫はなるまい。

たみ　云ひ譯あるか。

軍治　繩かゝるか。

傳藏　サア。

たみ　サア。

四人　サア／＼／＼。

傳藏　返答おしやれ、ドヾどうだ。

ト詰め寄る。甚太夫、當惑のこなし。此うち十左衛門思ひ入れあつて扣へ居る。向うバタ／＼にて、大助、口幕の密書の破れを持つて、息を切つて驅せつけ

大助　親旦那、これにお出でなされまするか。

甚太　大助、待ち兼ねた。様子はなんと／＼。

ト急いで云ふ、大助、息を呑んで

大助　親旦那、チエヽ、口惜しうござりまする。

ト無念のこなし。

甚太　すりや、手がゝりは取り得なんだか。

大助　仰せに從ひ高雄山、後へ廻つて窺ふところ、思うた壺へ出ツくはし、曲者が所持せし密書は詮議の糸口、有無を云はず取りにかゝる。彼れもしれ者、揉み合ふうち油斷へ付け込み脾腹の當て身。その隙に無念や曲者を、取逃がしましてござりまする。

甚太　すりや手がゝりの曲者を。ホイ。

トこなし。傳藏もこなし。

大助　併しながら、まだしも手に殘りし密書の片割れ。持ち歸りましてござりまする。

甚太　それ、屈竟の品。急いで讀み上げい。
大助　ハッ。
　トあたりを見廻し、こなしあつて
どなたも御免下さりませう。
　ト平舞臺の眞中へ直り
「兼ねて申し合せし通り、この度足利家より拜領の普請金三千兩、高雄山再興と傚らへ、杯の手段にて右の金子殘らず、手に入れ申し候ふ、猶信田家跡目の儀も、後より御左右申すべく候ふ。」
　ト讀み終り
宛名はなけれど、この手蹟は。
　ト甚太夫へ見せる。甚太夫、取つて
甚太　正しくこりやコレ。
　ト傳藏、思ひ入れギックリ。十左衞門、傳藏に目を附け、この時スッと出て、大助が持つたる一書を、寸々に引き裂く。各々こなし、甚太夫、傳藏へ思ひ入れ。
　大助、驚ろき
大助　十左衞、さま、コリヤ、大切なる密書を。
十左　讀むに及ばぬ。
甚太　ナニ、讀むに及ばぬとは。

十左　私慾を以て三千兩の御普請金、こもう致した當人は、明白に知れてある。
　ト傳藏、こなし
甚太　ナニ、科人が知れてあるとは。
十左　外でもない、拙者でござる。
甚太　ヤヽ、なんと。
十左　若殿へ放埓を勸め込み、それを云ひ立て、三千兩の金子、こもう致した科人は、千原十左衞門でござる。京地逗留のうち、嶋原へフト通ひ初め、若殿を囮に晝夜分たぬ廓のほだへも、根を尋ぬれば戀でござる。退引きならぬ證據の一書が出た上は、是非に及ばぬ白狀に及ぶ、懺悔さゝら。思ひ廻せば我れながら、いかい痴け。ハ、ハ、ハテ、面目次第もない。
　トこなし
甚太　ムウ。
　ト思ひ入れ。お民の方、軍治もこなし。傳藏、落ちつきこなし、よろしくあつて
傳藏　ハテ、思ひも寄らぬ金子の科人。流石の白狀、驚ろき入つた。十左衞門どの、何も申さぬ。イヤサ、何を云ふも心の外の廓通ひ。ハテ、戀は曲者ぢやなア。

トこなし。各々もよろしくあつて、大助、こなしあつて、キツと詰め寄り
大助　十左衞門さま、イヤサ、十左衞門どの。餘人は格別其許ばかりは、主人の事仇に思はつしやる筈はねえ筈でござる。そりや一旦知行に放れ、浪人さつしやつたは、やう〳〵昨日今日。まだほとぼりも覺めぬうち、御主人の越度になると知りながら、非義非道の騙り同然、香爐の行くへも外ぢやアあるまい。晴れ次手に何もかも、ぶちまけておしまひなされい。
十左　ハヽヽ、三千兩の金子遣ひなくせしは、色に耽りし心の外。香爐の紛失は甚太夫どのゝ誤まり。この十左衞門の存じた事か。馬鹿な奴の。
大助　知つたか知らぬか、三寸繩に引ツ括つて、云はせて見せうワ。
　　ト立ちかゝる。
甚太　大助待て。
大助　イヤ、大切な寶の詮議。
甚太　ハテ、お勅使の御前で、立ち騷いで見苦しい。扣へて居らう。
大助　ぢやと申して。
甚太　ハテ、尾籠千萬。
大助　チエヽ、コレ、詮議がしたいわい〳〵。
　ト腕を搖り、ヂツと扣へる。十左衞門、空嘯いて居る。傳藏、思ひ入れ。甚太夫も思ひ入れあつて
甚太　親左近には似ても似つかぬ非義非道。それとは知らず歸參させしが、今での後悔。この甚太夫が眼鏡も曇つたわえ。
傳藏　なんと甚太夫どの、斯樣な者があらうと存じ、先刻申した、彼の金子もうの科人は相分つても、一旦若殿の放埒は、後へ返らぬ事なりや、跡目願ひもなりますまい。なんと御合點が參りましたか。
甚太　顏を犯して諫言を奉るとも、猥りに君の非を上げずとは義者の金言。邪非道の曲り道へ引き入れうと致しても、一心狂はぬ甚太夫。信田の跡目は氏太郎どのより外にはない。
傳藏　すりや、如何やうに申しても。
甚太　他言すまじき金打は致したれども、大國の大事に及はゞ、事に依つたらお部屋を始め、御邊の企みも。
傳藏　ヤ。
甚太　サ、何事も某が心任せ。雲行きに依つて、幾人科

人が出來やうも知れぬ、かけ替へのない一つの命、隨分用心いたすがよい。

傳藏　ムウ。

　ト こなし。

たみ　して、家督の願ひに用ふべき寶の在所は。

甚太　天地を穿つて詮議仕出し、國家を無事に納めて見せう。

軍治　して、その目當は。

大助　外までもない、十左衞門どのに繩打つて。

　ト かゝる。軍治、隔て

軍治　イヽヤ、寶紛失の誤まりは甚太夫どの、繩打つて詮議なすワ。

大助　ハヽヽ、十左衞門どのに惡事の馴れ合ひ。同じ穴の古狐。化けの皮を顯はして見せるワ。

軍治　慮外な下郎、扣へて居れ。

大助　何を小癪な。

　ト 双方こなし。

十左　役にも立たぬこの場の裁斷。金子の行くへは拙者でござると、名乘つて出る十左衞門は潔白。家督の願ひの今となつて、寶を盜まれて狼狽眼。最早叶はぬ事だと諦らめて、武士らしく腹切つて云ひ譯さつしやい。

甚太　ハヽヽ、年罷り寄つたれども、信田のお家の存亡に係る甚太夫が一命、白い黑いの分らぬうち、滅多に腹はえゝ切るまい。

軍治　然らば身共が繩打つて。

　ト 立ちかゝるを、大助、引き廻して

大助　イヽヤ、詮議の目當は十左衞門。

　ト 立ちかゝる。軍治、隔て

軍治　慮外な下郎め。

大助　なにを。

　ト 双方立廻つて、キッと見得。

秋里　方々靜まれ。

三人　ハッ。

　ト 納まる。

秋里　罪の疑はしきを輕く計らふは聖賢の政道。家督定めの期に及び、計らざるこの場の珍事。身の誤まりを名乘る十左衞門、縛しめに及ばずとも、よも逃げ隱れも致すまい。また甚太夫は寶紛失、盜まれしは越度ながら、再び寶詮議仕出しなば、自然と晴るゝその身の潔白。善惡の分るまでは、甚太夫は十左衞門に預け、また十左衞門

は甚太夫に預ける間、互ひに心を附け合うて、無事を計らふ國家の納まり。兩人とも心得たか。

十甚　委細承知仕つてござりまする。

傳藏　して、寶上覽の儀は。

秋里　今日は內見ばかり、再び寶手に入りし上、改めて家督願ひ。

たみ　ハテ、お慈悲深い大內のお裁き。傳藏どの、こりやマア、どうせうと思はつしやる。

傳藏　ハテ、どうと云つたら、見え透いてあるお家の成行き。なるやうになるでござらう。

甚太　惡の報いは車の輪。立廻る因果を待つてお居やれ。

十左　善は善、惡は惡と、晴れ諦らむる天の明鏡。お寶の紛失も

甚太　放埒の誤まりも

十左　一心の塗り砥にかけて

甚太　蛇の目を灰汁で洗つたやうに、黑白分る詮議の一條。

十左　見事御邊が。

甚太　其方が。

兩人　糺して見せう。

ト双方キツとなる。秋里、隔て

秋里　何は兎もあれ、普請成就とあれば一見なさん。

傳藏　御案內仕りませう。

ト秋里卿、立ち上がり、思ひ入れあつて

秋里　甚太夫、計らざる今日の仕儀、さぞ當惑。さりながら、その盜賊も外ではあるまい。正しく當家に……イヤサ、當家に住ふ古鼠の仕業。この詮議、荒立てゝは、却つて猫を嚙むの災ひあつて、寶の行くへも失ふ道理。何事も心靜かに詮議が肝要。

甚太　委細畏まり奉つてござりまする。この上ながら天機よろしく。

秋里　その儀は秋里が、よきに計らはん。

甚太　有り難うござりまする。イザ、お勅使樣には新殿へ。

秋里　方々案內。

皆々　先づ入らせられませう。

ト下がり羽になり、この一件殘らず、正面の襖へ入る
大助、甚太夫、殘る。あと合ひ方。

大助　親旦那樣、十左衞門を始め、馴れ合ひの佞人輩、寶の行くへも大方は、それと見え透いてありながら、なぜ

御詮議はなされませぬな。

甚太　さればサ、身もそれに心附かざるにはあらねども、これぞと云ふ證據なければ、迂濶の詮議なり難く、千々に心を苦しめ居るわやい。

大助　して、お寶の出ませぬ時は。

甚太　山川の谷間にかゝるとちからも、身を捨てゝこそ浮かむ瀬もあれ。

大助　ムウ。

ト思ひ入れあつて

さうだ。

ト一腰に手をかけ、拔かうとする。

甚太　大助待て。そちや何ゆゑに切腹いたす。

大助　詮議の手がゝり曲者を、取逃がした申し譯に。

甚太　相果てゝ寶が出るか。

大助　なんと。

甚太　死ぬるばかりを忠義とは云はぬぞよ。

大助　して又、只今の歌の心は。

甚太　駈落ち致せ。

大助　ヤア、なんと御意なさるゝ。

甚太　ソレ、披見いたせ。

ト最前の願書を出す。大助、取上げ見て

大助　こりや國元の親ども病氣につき、跡目を立てんと、お暇の願ひの文體。

甚太　如何にも。其方一旦國へ立歸り、親の家名相續いたすがよい。

大助　すりや拙者めに。

甚太　燈臺元暗し、其方が家に附き添ひ、寶の詮議はいつかなるまい。他家にあつて詮議いたさば、忠義の一つ親への孝心。

大助　すりや下郎めに。

甚太　暇はくれぬ。

大助　然らば此まゝ。

甚太　駈落ち致せ。

大助　すりや、御承知の上。

甚太　ハテ、駈落ち致す下郎めに、守り手の隙はないわえ。

ト唄になり、思ひ入れあつて、甚太夫、奥へ入る。大助、あと見送り

大助　如何に御主人のお詞とは云ひながら、差當りし御難儀、餘所に見なしてノメ〳〵と、國へ歸れば不忠の汚名

とは云ひながら燈臺下暗し、他家にて寶の詮議いたせよ
とある理の當然。いづれの道にも忠義の立つ、よい思案
がありさうなものぢやなア。
　卜きつと思案のこなし。これをキッカケに、奥にて
〽然るにこの石橋と申すは、人間の渡せる橋にあらず、
おのれと出現して渡せる石の橋なれば、石橋とは名づけ
たり。
ありや勅使饗應のお能。人間業で渡り難き石橋も、一心
さへ据つたならば、遂には至る文殊の淨土。一旦本國へ
立歸り、親の先途を見屆け、他國にあつて寶の詮議いた
せとある今のお詞。こりや、どうあつても、駈落ちせず
ばなるまいわいの。
　卜此うち、おきよ出かけて
きよ　その駈落ちの迎ひに來ましたわいの。
大助　ヤア、こなたは伯母御。
きよ　お情深いお主様の、お許しの出た上は。
大助　如何にも、親旦那の情の駈落ち。人の見ぬ間に。
きよ　用意よくば、サア早う。
　卜各々身拵らへして、行かうとする。此うち奴二人、
出て

奴一　大助待て、駈落ちはさせまいわえ。
大助　何がどうした。
奴二　故郷へ歸す祝ひの餞、振り廻して歸すのだ。
大助　ハヽヽ。こりや忝い志し、水祝ひ受けずには行
かれまい。伯母御には、四條河原に待つてござれ。
きよ　合點ぢや〳〵。必らずともに怪我せぬやうに。
大助　氣遣ひせずと、早う〳〵。
きよ　合點ぢや。
　卜向うへ入る。
大助　サア、邪魔は拂つた。これからは、沸え湯でも冷水
でも、勝手次第に受けてやらうワ。
奴二　オヽサ、縁起を祝ふお寺の用水。われが爲には末期
の水。觀念しろ。
大助　何を小癪な。
奴一　面倒な。ぶツちめろ。
奴二　合點だ。
　卜かゝる。キッと見得。石橋髮洗ひの合方にて、三人
石橋の立廻り、花々しくあつて、卜ヾ三人「ドッコイ」
と、見得よろしく、道具廻る。

本舞臺、一面高塀、眞中に當寺の表門。右鳴り物殘りあり、暮れ六ッの鐘にて、道具納まる。

ト直ぐに門の内より中間二人、甚太夫の紋附けたる箱提灯を灯し出る。後より甚太夫、要人、矢張り上下にて出て來る。この外供廻り、鎗、挾み箱大勢附き添ひ出る。

要人　最早これより御歸宅でござりますか。

甚太　如何にも。お勅使下加茂へお立寄りと承り、内々申し上げたき儀もござれば、これより衣服を改め、加茂へ立越え、萬事の手番ひ。私宅まで同道仕らう。

要人　左樣仕りませう。イザお先へ。

甚太　然らば御免。

ト兩人向うへ行きかゝる。此うち門内より十左衞門、着流し、大小の形にて、出かけ居て

十太　甚太夫どの、暫らくお待ち下されい。

トずつと前へ出る。

甚太　なんぞ用がござるか。

十左　甚太夫どの、イカサマ、惡い事はせまいものでござる。若殿を唆り上げ、ほだへ過ぎたる廓通ひ。樂しみは苦の元とやら。三千兩こもうの事、露顯に及びし上は、十左衞門、武士の交りはなりませぬ、なりや、差詰め出奔いたすより外はござらぬ。併し、差當り金子の貯へとてもござらぬ。近頃申し兼ねてはござるが、貞家の正銘ちと引き合ひますまいが、この一腰を以て金子千兩、恩借仕りたい。

ト刀を出す。甚太夫、十左衞門を尻目にかけ、思ひ入れあつて

甚太　餘程の遲參。イザ參らう。

トまた行きにかゝる。十左衞門、留めて

十左　甚太夫どの、只今申せし拙者の頼み、是非、どうござつても

甚太　聞き屆けてくれいと云ふのか。

十左　如何にも。

甚太　求めて遣はさう。

十左　忝ない。

ト件の刀を差出す。甚太夫、受取り、手早く引き抜き胸打ちにリウ〳〵と打つ。十左衞門、その手を取つて

甚太夫、こりやなんとするのだ。

甚太　なんとするとは、玆な人外めが。

トこれより木魚入り、誂らへの合ひ方になり、此うち

後の門より、傳藏、着流しにて出かけて居る。十左衛門、思ひ入れあつて、ドッカリ下に居る。甚太夫、こなし

十左衛門、御身、恩と云ふ事、よもや忘れはしまい。先刻も申す如く、御身の父左近とは格別の昵懇。聊かの誤まりに依つて一旦の浪人、漂泊のうち大病に取合ひ、とても存命なり難き期を極め、何卒倅十左衛門歸參の推擧を頼み入ると、今際に重き筆を取り、我れに送りし末期の一書。その心底もだし難く、殿の御前を申しなし、再び興す千原の名跡。一管子流の奧儀を極め、殿へ奉る鎗術の師範。尤もその身の秀藝とは雖も、先知に歸り、れい／＼と致し居るは、身共が執成しぢやぞよ。尤も歸參いたして餘日はなけれど、江戸表に母を殘し、屋敷へ引取る所存もなく、剰さへ惡所狂ひに、非道の金は遣ふと云へど、母へ貢ぎの實氣もなく、無道を以て身を立てんとする大馬鹿者。推擧いたせし殿への云ひ譯。今ぶち放す奴なれども

ト思ひ入れあつて、氣を替へ、拔き身を十左衛門が前へ投げ出す。

イザ、參りませう。

ト唄になり、こなしあつて、要人、附き添ひ、悠々と向うへ入る。十左衛門、始終さし俯向き、ヂッと手を組み、思案のこなし。やう／＼と向うをキッと見て、投げたる刀を取上げ無念のこなし。この時、傳藏、出て

傳藏　十左衛門どの、無念でござらう、口惜しからう。

十左　傳藏どの、すりや、先刻からの一部始終。

傳藏　殘らず承つた貴殿の胸中。薩島傳藏、推察いたして居る。先刻某が金子のこもう、既に露顯に及ぶところ、身に引請けし貴殿の心底。近頃以て祝着に存ずる。云はねど聞かねど其許にも、我が大望の片腕と、一人頼もしく存じ罷りある。いよ／＼其許、合體召さるゝ所存でござるか。

ト十左衛門、思ひ入れあつて

十左　如何にも。毒喰はゞ皿、千原十左衛門、今日只今より其許へ一味同心。

傳藏　ムウ、すりや、いよ／＼。

ト思ひ入れあつて

サア、十左衛門どの、討たつしやい。

十左　なんと。

初演當時の

繪本番附

傳藏　何につけても邪魔になるあの老ぼれ。殊に只今の遺恨と云ひ、討ち捨てねば其許の武士が立つまい。但し、こなたには討たつしやらぬか。

ト詰めかけて云ふ。十左衛門、手を組み、チッと思案のこなし。傳藏、十左衛門が顏をちよつと見て

十左衛門どの、返答ないは討たぬ所存か、後れたか。

トまた詰めかけて云ふ。十左衛門、矢張り思案のこなし。傳藏、よろしくあつて

ムウ。

トきつと思ひ入れ。此うち門よりお民の方、出かけ

たみ　傳藏どの、殘らず樣子は聞きました。もう手延びにはなりますまい。

傳藏　如何にも、一大事を聞かせし甚太夫、もう生けちやア置かれぬ。

ト身拵らへして

さうだ。

ト行かうとする。十左衛門、居ながら、傳藏が鐺を扣へ

十左　傳藏どの、待つた。

傳藏　待てとは。

十左　老年とは云へど浮島甚太夫、神影流の達人、其許一人では心元ない。

傳藏　なにサ、高が老ぼれ、やつて見せうワ。

十左　すりや、どうあつても。

傳藏　彼れが旅宿は二條高倉、加茂の社へ立越える、道は一筋、糺河原の木影に待ち受け。さうだ。

ト凛々しく尻引ツからげ、向うへ走り入る。

十左　南無三。

ト云はうとして、氣を替へる。

たみ　十左衛門どの、どうぞこなたも。

十左　お氣遣ひござらぬ。ソレ。

ト同じく尻引ツからげ、行かんとする。ちよつと思案して

して、都鳥の香爐は。

たみ　傳藏が所持して居るわいの。

十左　すりや、いよ〳〵。

たみ　加勢を頼む。

十左　心得ました。

たみ　ちつとも早う。

十左　合點だ。

ト早三重にて、凛々しく向うへ入る。お民の方、これを見送る。この見得、ゴン／＼の送りにて、道具廻る。

本舞臺、三間の間、奥深に松の並木、よき所へ曇りたる月出で、すべて洛東紅の森の景色。捨て鐘、雨車にて、道具とまる。

ト向うバタ／＼にて、傳藏、東の花道より、着流し、ピッタリ雨に濡れながら、尻を端折り、頬冠りして、ツカ／＼と走り出て來りて一息つき、袖袂など絞る事よろしくあつて、向うをキッと見渡し、思ひ入れあつて、目釘を濕し、正面の小藪へ忍ぶ。此うち始終時の鐘、本雨降る。誂らへの合ひ方になり、向うより中間二人、甚太夫が紋の附きたる箱提灯を灯し、赤合羽、供笠にて出る。後より甚太夫、衣裳、麻上下の上へ長合羽を着し、高足駄、紅葉傘にて出る。侍ひ二人にて、その外鎗、挾み箱、傘、草履取り、各々供笠、赤合羽にて附き添ひ出て、花道よき所にて

侍ひ　一くさり強くは降つてござれども、先刻よりちと小降りになりましてござりまする。

甚太　イカサマ、少しは晴れたと見えて、月の光も朧氣に、秋ながら春の夜の面影。殊に所も紅の森。曇りながらも葉越の月は、また惡くもないてなア。

ト四方を見渡し、觀相のこなしあつて、靜々本舞臺へ來る。よき所にて、傳藏、木影よりツッと出て、有無を云はせず、提灯を切り落す。これにて皆々狼藉者と逃げて入る。甚太夫、心得、傘にてあしらふ。始終時の鐘、本雨にて、兩人立廻りいろ／＼あつて、トヾ傳藏、甚太夫を一太刀切る。アッと倒れながらあしらふこなし。此うちに傳藏、右の腕を切らるゝ事あり、疊みかけて切り込み、肩先より大地へ貫く。この時、向うバタ／＼にて十左衛門、走り出て來り、この體を見るより駈け寄り、透かして見て

十左　傳藏どのか。

傳藏　何者だ。

トきつとなる。

十左　十左衛門でござる。して甚太夫は。

傳藏　老ぼれと思ひの外、餘程骨を折らせ居つた。右の腕に一ケ所の手疵は受けたれど、どうやら斯うやら。

ト十左衛門、ギックリ思ひ入れあつて

十左　仕留めさつしやつたか。
傳藏　大方息は止まつた。
十左　すりや、いよ／＼……ハテ、よく仕留めさつしやつたの。
　トはつと思ひ入れあつて、死骸を改め、氣を替へ
甚太夫、十左衛門が恨みの刃、受取れ。
　ト止めを刺す。此うちに傳藏、手拭にて、右の腕を巻き、刀を鞘に納める。
サア、傳藏どの、甚太夫が闇討ちの相手は、斯く云ふ十左衛門。其許には旅宿へ歸り、何事も知らず顔にて、御合點でござるか。
傳藏　すりや、闇討ちの相手は貴殿とな。
十左　左様なくては、其許の大望の妨げ。某は一旦京地を立退き、時節を窺ひ、忍び／＼に文通を以て計らひ申さん。
傳藏　尤もの一言。併し、其許とても、この手疵にて立歸り、不審立てゝは一大事。先づ一旦屋敷へ歸り、湯治願ひを申し立て、所を去つて、忍び／＼に療養生。
十左　イカサマ、それも御尤も。して、都鳥の香爐は、如何召された。

傳藏　大切な香爐、人知れぬ方へ忍ばせてござる。
十左　大望の思ひ立ちも、畢竟その一品あつての事。必らずともに粗略なきやう。
傳藏　その儀に於ては、氣遣ひござらぬ。
十左　それ聞いて安堵いたした。して、其許療養生の隱れ家は。
傳藏　されば、表向きは湯治と披露し、金瘡保養の隱れ家は……幸ひ、江戸淺草に、少し所緣もござれば、一先づそれへ立越え、療養生いたさん。して、御自分は。
十左　拙者志すは西國。いづれ自分の有りつきを求め、早速書通を以てお知らせ申さん。とても事に江戸表の所、詳しくお書きつけ下されい。
傳藏　尤も。
　ト十左衛門、懐中より矢立を出す。傳藏、これにて鼻紙へ書き認め
即ち江戸の所書き。
　ト渡す。十左衛門、取つて
十左　江戸淺草伊豫屋治兵衛。
　ト讀み
其許には夜明けぬうち、一時も早う。

傳藏　左様仕らう。

トちよつと思ひ入れあつて、甚太夫が刀を拾ひ

こりやコレ甚太夫が祕藏の、日頃望み居つた長光の正銘

忝ない。

ト我が刀を捨て、件の刀を腰に帶し

然らば身共はお別れ申す。十左衛門どの。

十左　傳藏どの。

傳藏　さらば。

ト三重にて向うへ走り入る。始終時の鐘、忍び三重、虫の聲。十左衛門、これを見送り、思ひ入れあつて、死骸の肩衣を取つて、この裏へ一書を認め、正面の松の木に掛ける。また雨降つて來る。これにて落ち散つたる赤合羽を着て、向うへ入らうとする。矢張り時の鐘にて、向うより中間大八、赤合羽、供笠にて、甚太夫が紋附きの箱提灯を灯し出る。後よりおるい、甚太夫の姿にて、衣裳、合羽、高足駄、傘にて出る。十左衛門、これに構はず、供笠にて面を隠し、双方行き合ひ、十左衛門、構はず揚げ幕へ入る。兩人見返りながら、本舞臺へ來る。と東の花道より甚七、半合羽、大小、足駄、傘にて、これも出て何心なく舞臺へ來る。

大八、フト死骸を見附け、怪しき體にて

大助　おるいさま、暫らくお待ちなされませ。怪しからぬ血と云ひ、手負ひと見えて倒れて居ります る。

ろい　ナニ、手負ひとな。改めて見や。

大八　畏まりました。

ト大八、提灯つきつけ、死骸を見て、愕りして

ヤア、こりや親旦那甚太夫さまでござります る。

ト驚ろく。

甚七　ナニ親人とな。

ろい　ヤア。

ト双方慌て駈け寄つて

甚七　如何にも、こりや親人。

ろい　はや縡は切れたか。

兩人　ハア、、。

ト泣く。

大八　こりや正しく意趣切りと相見えまする。何者の仕業にや、せめて敵の手がゝりなりとも。

トいろ〳〵あたりを見て、件の肩衣を見て、提灯を差しつけ

ナニ〳〵「浮島甚太夫事、意趣これあるに依つて、只今

この所にて討つて捨つるものなり、相手首尾よく仕留めし上は、死骸に跨り切腹とも存ずれども、老年の母一人齢幾程もあるまじく、先途を見屆けし上、尋常に勝負を遂ぐべきものなり、今月今宵、浮島甚七どの、千原十左衞門これを殘す。」

ト讀み終ろ。

ろい　すりや、闇討ちの相手と云ふは

甚七　千原十左衞門で

三人　あつたよなア。

大八　いま擂れ違ひしは、正しく千原十左衞門。

甚七　遠くは行くまい。

ろい　甚七さま。

甚七　おるいどの。

大八　さうだ。

ト三人一時に合羽を脫ぐ。これをキツカケに拍子。

幕

三　幕　目

庵崎隱れ家の場

役名——十左衞門妾、お君。弟子、おきの。醫者橋場新寮。百姓、作兵衞、萬屋長右衞門。金貸し沸湯の嘉兵衞。十左衞門母、貢。千原十左衞門。

本舞臺、九尺の二重舞臺、大和葺きの片蓋屋根。正面、赤壁納戸口。上の方、折り廻し低き中二階。よき所に塗り板の名札。いつもの所に鳥居、柱の門口下の方崩れ垣、朝顏の盛り、すべて庵崎借寮の體。藪の内より二重の上、新寮、醫者にて藥合して居る。次に作兵衞、百姓にて、煙草のみ居る。門口に供の若い衆扣へ居る。下舞臺に嘉兵衞、木綿やつし、着流しの形にて、大胡座を搔いて居る。この見得、所作のチラシの鳴り物にて、幕明く。

嘉兵　妹はどこへ行つた。なぜ爰へ出ない。サア、妹、出ろ、キリ〳〵。

ト大聲にて云ふ。

作兵　嘉兵衞どの、最前から云うて居やつしやるは、定めて晝飯の催促であらうが、今日は妹御のお君どのは、回向院へ開帳參りされた。そこでわしが留守番に雇はれて來て居るのぢや。なんぼうこなたがお君どのゝ兄御でも、留守の內はおれが儘に飯食はせては云ひ譯がない。

ひだるくとも、お君さまの歸らるゝまで、辛抱さつしやれいサ。
嘉兵　大べら坊の、どつんぱうめ。用がなくて向島まで、晝飯食ひに來るものか。内には病人の婆ア一人に、聾の親仁、何云つたとて埒は明くまい。なんでも妹の歸るまで、爰を動きやアしねえのだ。
作兵　これは又、聞分けのない。おれが飯なら食はせませうわいなう。
嘉兵　べら坊め、飯を食ふと云ひはせぬわえ。
作兵　アレ、まだしつこい。
嘉兵　うぬがしつこいわえ。
　トせり合ふ。
新祭　さて〳〵、これは氣の毒千萬な。病人もある事ぢや。二人とも靜かに云はつしやるがよい、いま亭主の云はつしやる通り、主のお君どのは留守さうにござる、大仰に云はずとも、用があらば靜かにして、待たしやるがようござゝ。
嘉兵　おきやがれ。妹の内なりやアおれが内も同然だワ。なんでもこれから横に寢て待つのだ。聾め、枕でも出しやがれ。

　トどつさりと仰向きに寢る。ト出の唄になり、向うよりお君、衣裳、抱へ帶。おきの、振り袖衣裳、抱へ帶娘の形にて、日傘を相合ひにて、本舞臺へ來り、直ぐに内へ入り
きみ　いま歸りましてござんす。
作兵　オヽ、今でござつたか。
きみ　これは新祭さま、御苦勞にござりまする。
新祭　お留守の内にお見舞ひ申した。
きみ　それは御苦勞に存じまする。わたしも、お開帳へ參る事はござりましたれど、どうも内か案じられまして、勿體ない、お開帳もそこ〳〵に、拜んで歸りましてござりまする。
作兵　それ〳〵、あの人込みでは、際の入つたは尤もでござる。
きみ　如何にわたしが心が急くと云つて、おきのさん、お前、辛どかつたでござんせうなア。
きの　ナンノイナア、わたしや辛どうはござんせぬわいなア。
　トこの時お君、嘉兵衞を見て
きみ　誰れぢや思うたら、兄さんぢやござんせんかいなア。

お前は何して居やしやんすぞいなア。
嘉兵　何をして居るものだ。てまへの歸るを待つて居るのだ。
きみ　そりや、なんぞ用があつてかえ。
嘉兵　知れた事だ。用がなくつて待つて居やうか。マア、その用と云ふは外でもない、さる大盡が、われを妾にしたいと云うて頼まるゝ。そこでマア、見ぬ商ひはならぬと思ひ、その大盡を武藏屋に待たして置いた。ちよいと顔でも直して、支度してくれろ〱。
きみ　ホヽヽ、兄さんとした事が、壁に馬を乘りかけたやうに、手かけぢやの妾ぢやのと、なんぞ獨り身の者ぢやあるまいし、れつきとした男のある者を、アタ無遠慮な嗜なんだようござんすわいなア。
嘉兵　ハヽア、われが男々と、御大層に云ふは、十左衞門の事か。
きみ　それ程、主の事を知つて居ながら。
嘉兵　さいやい、その十左衞門が事は、よく知り拔いて居て云ふのだ。なぜと云へ、全體わりやア十左衞門が世話になると云つて、なんぞてまへが爲になる事があるか。抑々われが屋敷を下がつて、少々の金から衣類まで、ズツシリと持つて居たを、あの十左衞門のならずにかゝつて、チヤアフウと無くしたぢやアねえか。ところにこの春、歸參が叶つたと云つて、國へ歸つた時、あの奧に煩らつて居る婆アを殘して、ヤレ迎ひを寄越すの、ヤレ金を送るのと、口先で云つたばかり、今に於て沙汰のねえは、こりやアてつきり永々の浪人のうち、養つてもらつた飯代の代りに、あの婆アを質に置かせん才覺で、大方踏んでしまふと云ふ、三番叟せりふであらう。なんの事はない、コリヤわれ、男妾を置いて、一杯かゝれた話しだワ。そこでその損を埋めさせうと思つて、彼の大盡を連れ逹つて來たのは。兄弟思ひ、惡く聞いたら逆罰がござらうぞよ。
　ト此うちお君、取りあへぬこなしにて
きみ　新藏さま、母樣の今日の樣子は、どんな事でござりまする。
新藏　イヤ〱、お氣遣ひはなさるな。昨日よりは餘程よくござりまする。この調子で行けば、もうお氣遣ひなさるに及びませぬ。
きみ　それはマア、お嬉しう存じまする。
嘉兵　コリヤ〱、おれにばつかり物云はして。コリヤ、

どうするのぢや。
きみ　どうと云うて、わたしや、そんな話し聞きたうござんせぬわいなア。
嘉兵　聞きともなうても、おれが云ひかゝりだ。どこまでも云ひ拔くのだワ。
きみ　そりやお前の口ぢやに依つて、なんぼなと云はしやんせいなア。
嘉兵　オヽ、云うて／＼云ひ拔くのだ。
きみ　ほんに、今日はおきのさんの決ひ日だに、いろ／＼の邪魔入つてから、アタ辛氣らしい。
きの　なんのマア、わたしや明日でも大事ござんせぬわいな。
きみ　そんなら、どうぞ明日にして下さんせ。
嘉兵　イヤ、明日まで待つちやア居られぬ。いま直ぐに連れて來るワ。

ト此うち新寮、藥を合せ

新寮　今日は加減を致したれば、煎じ詰めずと、さわ／＼としたところを上げなされい。
きみ　畏まりましてござりまする。
嘉兵　畏まつた。そんならお主は得心だの。

新寮　どうで御老病でござれば、急に全快とは參らぬ。氣長う養生なさらねばなりませぬ。
きみ　そりや、よう合點して居りまする。
嘉兵　ハテ、てまへさへ合點すれば、こちらは何時でも得心ぢや。そんなら早う連れて來よう。妹、よいか。
きみ　エヽ、どうなと勝手にさしやんせいなア。
嘉兵　オツと占めた。ドリヤ、連れて來ようか。

ト唄になり、向うへ入る。

作兵　ハテ、飯も食はずに、いそ／＼として去なれた。
きみ　ほんに、たつた二人、物云うてアタ騒々しい。さぞおやかましうござりませう。
新寮　なんの／＼、左樣にもござらぬぢや。騒がしいと云やア、お前の御商賣も、脇目から見れば、至極面白うござるが、指南なさるゝ身では、さぞうるさうもござりませう。
きみ　左樣でござりまする。初めの時分は、騒々しうも存じましたが、今では大分馴れまして、其やうにもござりませぬ。今日は休みでござりますゆゑ、ようござりまする。稽古日にはお構ひ申しませいで、お氣の毒に存じまする。

新寮　イヤ〳〵、さうでござらぬ。何を申すも御商賣が肝心でござる。その娘御も御門弟でござるかの。
きみ　左樣でござりまする。
新寮　同じ藝を仕附けると云うても、唄淨瑠璃と違うて、亂舞を敎へると云ふ、親御達は奥床しい。定めて御大家へ出す思し召しでござらうな。
きみ　大方左樣でござりませう。併し、お大名へ上がるは身分の爲にはようござりますれど、どう致しても窮屈でつい病の出るものでござりまする。
新寮　左やう〳〵、其許にもお大名へ出てござつたれど、病身ゆゑお下がりなされたとの事。兎角命あつての御奉公でござるてな。
きみ　左樣でござりまする。わたしもお屋敷を下がりまして、淋しいこの脇崎へ引ッ込みまして、僅か十人十五人の弟子衆を取つて、稽古いたして居りますれど、氣はヤッと樂になりまする。
作兵　コレ〳〵お娘御、こなたは今朝行きしなに、おれに預けて行かしやつた、この呂風敷包み、まだ預けて置くのか。
きの　ほんに、忘れて居りましてござんす。お世話でござんした。こちへ下さんせいなア。
作兵　イヤ〳〵。中は見はしませぬ。包みの儘返しまする。
　ト包みを出す。
きみ　おきのさん、なんでござんすえ。
きの　アイ、こりや皷でござんすがな。どうでお師匠さんに打ち込んでもらへと云うて、母さんが頼んで行かれましてござんすわいなア。
きみ　アイ〳〵、合點でござんす。
　ト中より皷を出して
ほんに、こりやよい皷でござんすわいなア。さうぢや、お前の浚ひは、何やらでござんしたなア。
きの　アイ、「自然居士」と「關寺小町」でござんす。
きみ　オヽ、それ〳〵、そんなら浚ひは明日の事。マア、遊んで去なしやんせいなア。
きの　アイ、また後に參じますわいなア。
新寮　拙者もお暇申しませう。
きみ　これはマア、お茶さへも上げませぬ。御苦勞に存じますする。
新寮　また明日お見舞ひ申しませう。

作兵　もうおれが役もよからう。去にませうなう。

きの　そんならお師匠様。

新寮　お暇申さう。

きみ　ようお出でなされました。

　ト唄になり、新寮、家来附き添ひ、おきの、作兵衛、附いて、この一件向うへ入る。お君、殘り、こなしあつて

ほんに今朝から内を出て居たので、お飯の拵らへが遲うなつた。お藥も上げたし、マア、何よりは御病氣を見舞うて來うか。

　ト唄になり、お君、奧へ入る。この唄をかり、向うより嘉兵衞、後より長右衞門、年輩なるよい衆の拵らへ衣裳、羽織にて出て來る。花道よき所にとまり

長右　成る程、嘉兵衞、貴様は噂に聞いた程あつて、怪しからぬ鎌足公ぢやの。畏れ入つた〳〵。

嘉兵　モシ、旦那さんえ、そんな事は、とんとわたしには解らぬ句でござりまする。

長右　ハテ、なんの事とは野暮な男ではある。貴様いま武藏で鯉の汁を食ひ、替へて食つたぢやねえか。そこで貴様を鎌足公と云うた心は、大食漢と云ふ心だ。

嘉兵　ハヽヽ、こりや旦那、三十年程前の洒落だね。今時にそんな洒落は、洗濯しても、さつぱりと通らねえ。併し、今日は旦那のお祝ひで、大醉ひに醉ひました。

長右　イヤモウ、貴様の云つた事がほんの事なら、武藏位の奢りは一日に十度でもサ。

嘉兵　そりやア有り難い。

長右　時に、彼の事を、早く埒明けてくれないか。

嘉兵　ハテ、お前もせつかちな。その埒を明けて置いたに依つて、お供いたしたのぢやござりませぬか。

長右　サイノ、おれが此やうに氣を急くのは、もう明くか明くかと、待つて居るうち、だん〳〵に人が込んで、サア門が明いたところで、肝心の御本尊を拜まずに歸るやつサ。

嘉兵　ハテ、お前も勿體ない。イヤ、勿體ないと云やア、お前の望みの通り、わしが妹を抱かすワ。その時に約束の物を忘れちやア冥加が惡い。罰が當るが、ようござりまするか。

長右　ハテ、一旦おれがよいと云うたら、違はす事ぢやアねえ。しかも五十兩、爰に持つて居るよ。

　ト懷中の財布を見せる。

嘉兵　イヤモウ、それさへ見て置きやア、ようござります る。わたしが知らせまするまで、暫らく門に待つて居て 下さりませ。

長右　呑み込んだ〳〵、サア、ちつとも早う、見たい見た い。

嘉兵　左様なら、斯うお出でなされませ。

ト兩人、本舞臺へ來り、長右衞門、表に扣へ、嘉兵衞 表の戸を開け、内へ入らうとする。長右衞門、ちよつ と袖を扣へて

長右　コレ、嘉兵衞、云はぬ事は聞えねえ。おらア見かけ より餘ツ程近がつへぢや。必らず長う待たせめえよ。

嘉兵　ハテ、つい埒を明けますわな。

長右　遲いと忽ち病氣になるよ。

嘉兵　ハテ、ようござりまする。

ト双方同じ事を繰り返して云ひ〳〵、嘉兵衞、内に入 り

妹、連れて來たぞ。お君はどこに居る。お君〳〵。

きみ　アイ〳〵。

ト奥よりお君、藥鍋と茶碗を持つて、出て來り 大きな聲で誰れさんかと思うたら、兄さん、又ござんし たかいなア。

嘉兵　また來たか。また來いでは。われが勝手にせいと云 うたに依つて、彼の大盡を連れて來たわえ。

きみ　そりやマア、何を云ふのでござんすぞいなア。人に 得心もさせず、わたしや、そんな事は、否でござんすぞ え。

嘉兵　でも、われが勝手にせいと云うたぢやアないか。

きみ　サア、それは否ぢやと云ふ事でござんすわいなア。

嘉兵　イヤ、それは拔けさせぬ。

ト喚く。

長右　嘉兵衞、ちよつと來や〳〵。

ト門口から手招く。

嘉兵　旦那さんでござりまするか。

長右　嘉兵衞、嗜なまつせえ。なんでござりますとは、あ んまり貴様も氣が長いぜえ。大概人を待たすと云つても、 程のあるものだわな。なんぼう所柄と云つて、とんだ武 藏屋ぢやアあるめえし、斯う待たせる事もねえぢやアね えか。

嘉兵　ハテ、戀なら釣られるが當り前ぢやアござりませぬ か。いま直ぐに埒が明きます、どうで初日と云ふものは、

道具や仕掛けで、ちつと暮が長いものでござりまする。お前も通り者のやうにもねえ。勘辨するがいゝわな。

ト長右衛門、横手を打つて

長右　シタリ、こりや尤もだ。さう云ふ事なら辛抱せう。其うちにも、ちつと早いがよいよ。

嘉兵　ハて、仕掛けさへよけりやア、道具知らせを致しまする。イカサマ、頭取と云ふ者も、心遣ひな者ぢやぞ。

ト云ひながら、また内へ入り。

サア　妹、返事はどうだ。

きみ　否でござんす。

嘉兵　ナニ否だ。

きみ　アイ、否でござんす。例へ着類をなくさうが、男妾を置かうとも、みんなわたしが小さいから、お屋敷へ上がつて、辛抱して、拵らへたわたしが物。ちつとは又わたしぢやと云うて、樂しみがなうて、なんとせうぞいなア。

嘉兵　イヤ、さうはなるまい。現在われが爲には、親代りの兄のおれだワ。なりや、親の氣に入らねえ男を持たす事は、マア、ならねえ。さう思つてゐろ。

長右　嘉兵衛々々々。

嘉兵　ハイ／＼、今そこへ參りまする。

長右　ちよつと逢ひたい／＼。

嘉兵　こりやア又、大事の所で呼ばるゝ事だ。

ト云ひながら表へ出て

モシ、なんでござりまする。

長右　なんでとは、いま聞いて居りやア、男を持たす事はならぬと云つたが、それぢやア約束が違ふぢやないか。

嘉兵　こりや悪い合點。お前の外に男と云つては、男猫でも持たす事はならぬと云つたのでござりまする。

ト長右衛門、横手を打つて

長右　ハ、ア、さうか。

嘉兵　なんと、ようござりませうが。

長右　奇妙々々。

嘉兵　知れた事を呼ばつしやる。

ト呟き／＼、また内へ入り

サア　妹、これからは又、おれも親甲斐を云ふ程に、さう思うてくれろ。

きみ　云はしやんせ／＼。なんぼお前が親甲斐を云はしやんしても、緣づくの事ばつかりは、親の儘にもなるものぢやござんせぬわいなア。

嘉兵　所をおれがして見せうワ。
長右　嘉兵衞々々々。
嘉兵　ハイ〳〵、もうそこへ參りまする。
長右　隙は取らせまい。ちよつとだ〳〵。
嘉兵　これは又、情ない事だぞ。
　ト云ひながら表へ出る。
長右　コレ嘉兵衞、いま聞いて居りやア、さうはさすまいと貴樣が云つたが、甚だ氣障ぢや。させうと云つて、連れて來て、させまいとはどうだ。
嘉兵　これはまた情ない。妹が手前勝手を云ふに依つてさうはさせまいと云うたのでござりまする。
長右　ヘヽア、さうか。
嘉兵　とんとお前にかゝつて、肝心のせりふの山になると腰を折られる。
　ト云ひながら、また内へ入り
サア妹、おれもキッと料簡がある。いつまでも埒の明かない事を云つて居やうより、緣づくには係はらねえ。あの居候ふの老ぼれをまくし出し、あの代りにおれを養へ。なんと、こればかりは否とは云はれめえ。われがえずば、おれがまくし出してやらうワ。
　ト立ち上がるを、お君、留めて
きみ　マア、コレ、滅相な。そんな事してよいものでござんすかいなア。
嘉兵　サア、それが否なら應と云つて、おれが云ふ旦那にかゝるか。
きみ　サア、それは。
嘉兵　まくし出さうか。
きみ　サア。
嘉兵　旦那にかゝるか。
きみ　サア。
嘉兵　返事はどうだ。と斯う力んぢやアものがない。何事も得心づくで、物事丸く行きさへすりやア、おれは喜びハテ、高で表向きはお主が、ウンとさへ云つてくれりやア、餘ッぽどおれも理窟のよい事がある。肝心の二つ枕一つの夜着とは、お主の胸にある事だわサ。コリヤ、應と云つてくれ〳〵。コレ、これだワ〳〵。
　ト手を合せ拜む。
きみ　そんなら、なんと云はしやんす。ツイ表向きさへ得心すりや、よいのでござんかえ。
嘉兵　シイ〳〵、コリヤ、大きな聲をしまい。その通りそ

の通り。

きみ　そんならキッとさうぢやぞえ。

嘉兵　サア、それでよい〳〵。そんならお主は、得心ぢやの。

きみ　サア、いま云ふ通りなら、マア、得心でござんすわいなア。

嘉兵　キッとよいな。

きみ　表向きばかりぢやぞえ。

嘉兵　マア〳〵、そんなものぢや。

長右　嘉兵衞々々々。ちよつと逢ひたい〳〵。

嘉兵　アレ〳〵、表にはずみ切つて居る。妹、よいかな。

きみ　マア〳〵、ぢやぞえ。

嘉兵　シイ〳〵。大きな聲だ。

ト表へ出る。

長右　嘉兵衞、如何に初日の幕ぢやと云つて、甚だおれは待ち遠な。こりやア貴様、どうするのだ。

嘉兵　ハテ忙しない。いま知らせの木を入れる所でござりまする。

ト長右衞門、手を打つて

長右　ハヽア、さうか。そんならもう幕が明くか。

嘉兵　サア、こちらへお入りなされませ。

長右　ヤレ、嬉しや〳〵。

ト内へ入らうとして、外よりお君をちよつと見て、俄に衣紋を直しなど、いろ〳〵あつて、内へ入り

こりやア綺麗なお住居だの。そしてたんだ、お淸、お吉、おきさ、おきの。ハテ、澤山な弟子だの。

ト云ひ〳〵、お君と座を隔て坐り

これはお初にお目にかゝりやす。

トきいた風なるこなし。お君、顏を反け、煙草のんで居る。長右衞門、接穗なく、ウヂ〳〵として

コレ、嘉兵衞や〳〵。なんと、杯でも出さんかいの。

ト嘉兵衞も氣の毒なるこなし。

嘉兵　今日は廻し方が江戸へ出ましたに依つて。

トうぢ〳〵して

コレサ妹、御挨拶を申してくれないか。

トいろ〳〵あせるこなし。お君、あちら向いて、煙草のんで居る。

長右　嘉兵衞、貴様、何事もよいと云つたが、こりや、どうやら約束が違つたやうた。

嘉兵　サア、見識の高い世界へ行つて見なさい、大抵こん

なものだ。
長右　でも貴様、挨拶ぐらゐはしさうなものだ。
嘉兵　左樣サ、挨拶は今もう出ますする。もう挨拶の支度が出來たか、ちよつと見て參りませう。お前、ちつとの間そちらを向いて居て下さりませ。
長右　斯うかの。
　ト長右衞門、門口の方を向く。嘉兵衞、お君が側へ來て、どうぞ物を云つてくれいと云ふ仕方をして、手を合せて拜む。
きみ　アタ嫌らしい。わたしや、そんな事は否ぢやわいなア。
　ト云ふを打ち消し
嘉兵　エヘン〳〵……なんぢや、そんな事は恥かしい。なんの挨拶が恥かしい事があるものか。ハテ、初心な奴ではある。
　ト云ひながら、どうぞ挨拶してくれいと云ふ事、いろいろ仕方にして居る。お君、不請々々に
きみ　誰れも頼みもせぬに、ようござんしたなア。
　ト矢張り顏を反けて居る。
長右　ヤア、有り難い。時に嘉兵衞、斯うせうか。マア、爰をお片附けの、ちつとあちらへと云ふ幕にせうぢやアねえか。
嘉兵　アノ、もうかえ、
長右　ハテ、藝者のねえ座敷に、長う居られるものぢやアねえわな。
嘉兵　ハヽヽ、こりやとんだ床急ぎだ。
長右　時に、どうぞ先生のおまんまは、後へ廻してもらひたい。おれもモウ、手水には行かねえ。サア、あちらへ行かうか。
　ト立ち上がる。嘉兵衞、困つたるこなし
嘉兵　こりや怪しからぬせつかちぢや。奧へ行つて待つてござりませ。今わたしが連れて參りまする。時に例のが早う申し受けたうござりまする。
長右　例のとは、エヽ、約束の勤めの事か。そりやア床へ廻つてからの事にせう。
嘉兵　そんなら旦那。
長右　嘉兵衞も來や。
嘉兵　ドレ、御案内申しませう。
　ト唄になり、嘉兵衞、先に長右衞門、附いて奧へ入る。お君、殘る。合ひ方

きみ　ほんに兄弟は他人の始まりと、如何に兄の高下ぢやとて、面白さうに手かけぢやの妾ぢやのと、ようマア、あのやうに無理が云はれた事ではある。アヽ、兄さんにかゝつて、大事のお藥煎じる事を、とんと忘れて居た程にの。ドレ、お藥を仕掛けようか。

〽おきそむる露の情もなんぢややら、さぞ庵崎が憎らしい。

トこの文句にて藥を仕掛け、七輪にかけ、團扇にて煽ぎながら

今の母さんの御病氣につけても、思ひ出すは死なしやんした父さん母さん。もう今年が丁度七年。月日の經つは早いものぢやなア。わしがお屋敷を下がり、この庵崎に暮らすうち、ふとした縁で十左衞門さまに馴れ染め、力と思うて暮らすうち、再び歸參が叶ふと云うて、本國へ行かしやんたは、この春二月。わしを眞實女房と思うてなりやこそ、大事の〳〵母さんを預けて行かしやんした後での御病氣。おのれやれ、一度本腹させまして、どうぞ夫に譽められやうと、思うて暮らす女房の心を思ひやり、せめて文の便りなりとしてくれたがよいものを、今になんの便りもないは、もしや病氣ではあるまいかと、世帶の事は苦にもならねど、世の中に人を待つ程、苦勞なものはないわいなア……ほんに人を待つと云や、このマア湯のたゝぬ事わいなア。アタ辛氣らしい。同じやうに、この湯までが、人に待たしくさる事ではあるぞ。

〽人の心は隅田川、變りやすさよ夢の世に、結ぶ縁を待乳山。

トこの文句にて、中の湯沸え立つ心にて、藥袋を入れるなどよろしく、よき程に時の鐘を打ち込む。右の獨吟をかりて、向うより十左衞門、衣裳、袴、大小の形、深編笠にて出て來り、花道よき所にとまり、四方を見渡し、こなしあつて

十左　秋風渡河上、船艫驚浪波、行雁落孤月。角田河原に日は暮れぬとも、宿やまにまし關屋の里。見え渡る庵崎の秋景。ハテ、盡きせぬ眺めぢやよなア。

ト四方を見渡し、靜々と本舞臺へ來り、門口をガラリと明け

お君、無事で居つたか。

トお君、これを知らずに、矢張り七輪の下を煽ぎながら

きみ　イヽエ、今わたしや大事の用をして居るわいなア。

また邪魔にござんしたかいな。
十左　お君、身共ぢや。十左衞門ぢや。
　トこれにて、お君、振り返り、十左衞門を見て
きみ　ヤア、お前は旦那さん、ようマア戻つて下さんしたなア。
十左　其方も無事で重疊。
きみ　お前さんもお達者で。
十左　オヽ、めでたい〳〵。
きみ　ほんに、こりやマア夢ではないか。今も今とてお噂を申して居た所でござんすわいなア。此やうなマア、嬉しい事があらうか。あんまり嬉しうて、わたしや
　トちよつと涙を拂ひ
ようマア戻つて下さんしたなア。
　トよろしくこなし。
十左　イヤモウ、某もちつとも早う參らうと思ひ、大きに氣が急いた。茶を一つたもれ。
きみ　アイ〳〵。
　トいそ〳〵立ち、件の藥を茶碗につぎ、持つて來り
アイ、お上がりなさんせ。
　ト差出す。十左衞門、取つて飮まんとして

十左　こりや藥ぢやないか。
きみ　ほんに、そりや藥でござんす。わたしとした事が、あんまりの嬉しさに麁相な事ばかり。けれうお前なりやこそよけれ、もし餘所の人なら、大抵氣の毒な事ではござんせん。堪忍して下さんせえ。
十左　イヤ〳〵、苦しうない〳〵。がこの藥は、誰れが服む藥ぢや。
きみ　アイ、母さんのお藥でござんす。
十左　ヤヽ、なんと云ふ。母人には御病氣か。
きみ　アイ、お前の國へ立たしやんした後、この四月頃からの事でござんすわいなア。
十左　ムウ。すりや餘程の長病。して、只今の御樣子はどうぢや〳〵。
きみ　アイ、この頃は大分よい方でござんす。
十左　それは重疊。御病中とあれば、取分け心勞であつたであらう。過分々々。
きみ　なんの苦勞にござんせう。早う母さんを御本腹させまして、迎ひが來たらお國へ行て、早うお前に逢ふものと、そればつかりを樂しみに、御介抱申して居りましたわいなア。

十左　イヤモウ、存ぜぬ事とて文通も致さず、其方の手前も面目ない。免してくりやれ〳〵。

きみ　アイ、お前の音信のなかつた事ばかりは、キッと恨んで居りましたわいなア。

十左　さうあらう〳〵、この儀ばかりは、どのやうに恨まれても、十左衞門一言もない。何は兎もあれ、母人にお目にかゝりたいものぢやが。

きみ　最前から、スヤ〳〵とお休みなされてござんすわいなア。

十左　然らば御病床へ參るも如何。お目覺めるまで相待たう。

　トこの時、障子屋體の内にて

貢　絕えて久しい十左衞門の聲。それへ行て逢ひませうわいの。

　ト合ひ方になり、上の屋體の障子を明け、貢、白髮婆の拵らへ、病ひ鉢卷、やつしの形にて、靜々と出て來る。お君、手を取り、介抱して、よき所に坐らせる。十左衞門、兩手を突き、こなしあつて

十左　先づ持ちまして母人には、久々にての御對面、御病中とは申しながら、さのみ相變らざるお顏色。十左衞門如何ばかりか、喜ばしう存じ奉りまする。

貢　先づは其方にも變りなき體、なんぼうか嬉しうござる。さうしてマア、以前の浪々の時分とは、顏の色も艶々と、あのマア肥滿しやつた事わいなう。嫁女、其方はなんと思やるぞ。

きみ　イヤモウ、わたしが目には猶の事。長い旅路のやつれもなう、どう見ても矢ッ張り好い殿御でござりますわいなア。

貢　オヽ、さうとも〳〵。こればつかりは、母が自慢でござるわいの。ホヽヽヽ。その上、今までの浪人と違うて、古主へ歸參しやつたれば、れつきとした信田の家中、馬にも乘れば鎗も突かす。なんと嫁女、其方も嬉しうござらうが。

きみ　嬉しい段ぢやござりませぬ。とんとわたしや、元日のやうな心持ちでござりまするわいなア。ほんに、元日と云や、久し振りのお杯、出しませうぢやござりませぬかいな。

貢　オヽ、よく氣が附きました。祝うて杯事。早う出して下されいなう。

きみ　アイ〳〵。

ト立たうとする。
十左　イヤ君、暫らく待ちやれ。
きみ　なぜでござりまするえ。
十左　今日某立歸りしは、母人へ申し上げねばならぬ一儀あるゆゑ、わざ〳〵の出府。
貢　十左衛門、云はねばならぬと聞いては氣にかゝる。早う聞かして下されいのう。
十左　お尋ねなくても、申し上げねばならぬ一儀。一通りお聞き下されませう。當春古主信田のお家へ歸參仕り、先知に歸り、再び千原の名跡引起せしも、これ全く浮島甚太夫の厚恩。然るに當月初めつ方、京都糺の森に於て甚太夫には人手にかゝり、横死いたされましてござる。
ト貢、恟りして
貢　ヤ、、なんと、甚太夫どのには横死なされしとな。
十左　さるに依りまして某も、ちと存ずる仔細もござれば、殿へ長のお暇願ひ、出國仕つてござりまする。
きみ　ムウ。そんなら又、いつまでも、内に居て下さんすかいなア。エヽ、嬉しい〳〵。なんぼう御歸參が叶うても、常住別れて暮らさうより、矢ッ張り一つに居りまするが、嬉しいぢやござりませぬかいなア。モシ母さん。

ト貢、こなし。十左衛門、思ひ入れ。お君、手持ち無沙汰にモヂ〳〵して
とサア、思うても見たり、また思はずも見たり、なんぢやら、どき〳〵とした事ではあるぞ。
トこなし。貢、思ひ入れあつて
貢　悴十左衛門。
十左　ハッ〳〵。
貢　出立の用意は調ひましたか。
十左　ヤ。なんと仰せられまする。
貢　この度古主へ歸參叶ひしは、全く甚太夫どのゝ執成しゆゑ。その大恩ある甚太夫どの、闇討ちに討たれさつしやれたとあれば、子息甚七どのゝ力となり、敵を討たねば武士が立つまい。ぢやに依つて、敵討の用意はよいかと云ふ事いなう。
ト十左衛門、ギックリ息を呑む。
妾が夫左近どの、その以前は信田家の譜代、甚太夫どのとも列座せし身なれども、假初めの讒に依つて、長の浪人、なんぼう口惜しく思はれ、死ぬる今際に甚太夫どのへ歸參の願ひ、昔のよしみ捨ても置かず、御前を執成し下されし、武士の情、なりや、甚太夫どのは過ぎ行かれ

し父御を敬ひ、御子息甚七どのは我が身とも慈しみ、この度の大恩忘るゝは、武士ではないと、くれ〴〵も云ひ聞かした事、よもや忘れはしやるまい。その教訓を守つて居やればこそ、年來の望み叶ひ、折角歸參した信田のお家を、暇願うて歸りやつたは、甚七どのと共々に、敵を討つ所存と母が推量。なんと違ひはあるまいがの。

ト此せりふのうち、十左衞門、一つ〳〵息を呑むこなしあつて

十左　如何にも御推察の通り、相違ござりませぬ。

ト思ひ入れ。

貢　オヽ、さうであろ〳〵。それでこそ誠の武士、流石行かれし左近どのゝ胤ほどあつて、出かしやつた〳〵。して、その敵の假名實名、いづくの誰れと、知れてあるか。

ト十左衞門、ギツクリして

十左　イヤ、その敵は。

トつかへる。

きみ　ほんにマア、憎らしい。どこの奴でござんすぞいなア。

貢　イヤ〳〵、闇討ちとあれば、面體いとふ卑怯者の仕業。なんとして相手は知れまい。

十左　仰せの如く、例へ敵は不分明にもせよ、天理に背く仇敵。尋ね求めて十左衞門も、甚七どのが力となり、首尾よく討たせてお目にかけませう。

トこなし。

貢　オヽ、頼もしい〳〵。イヤ、まだ云ふぢやないが、例へ敵は何者にもせよ、恐らく其方の助太刀なら、よも討ち得ぬと云ふ事は、あるまい〳〵。

きみ　アイ、さうでござんすとも。なんぼう世界が廣うても、主より強い侍ひは、滅多にある事ぢやござんすまいわいなア。

十左　何は兎もあれ、出立に心も急きますれば、母人にもイザ、御用意なされて然るべう存じまする。

貢　なんと云やる。この母にも用意せよとか。

きみ　ヤ、そりや何を云ふのでござんすぞいなア。

十左　ハテ知れた事。行く先知れざる長の旅路、いつ歸るやら知れざるに、母を預け、其方に苦勞をかけるも如何と思ひ、母のお供いたすのぢや。

きみ　モシ、こちの人、國から歸參の便りあらば、母さんを預かりませう、浪人なさるゝなら、母さん連れて行か

しやんせと云ひさうな、わたしぢやと思うて下さんすかえ。
十左　や、なんと。
きみ　そりやお前、聞えませぬ。侍ひの道を守り、敵を尋ねる長の旅に出やしやんす事ならば、猶以て母さんを、なぜ預けて置いて行ては下さんせぬ。そりや聞えぬ〱、聞えませぬわいなア。
ト泣いて云ふ。
十左　ヤア、女の身として、詞を返す慮外者。
きみ　イエ〱、これぱつかりは、なんぼう慮外でも大事ござんせぬ。云はにやなりませぬ。
十左　まだ〱詞を返すか。
貢　イヤ〱、十左衛門、マア待ちや。嫁女、詞爭ひさつしやるには及ばぬ。例へ十左衛門が、なんと云やらうとも、滅多に出て行く事ぢやござらぬわいなう。
きみ　ソレ見やしやんせな。
十左　イヤ〱それでは。
貢　アレ、まだいの。唐土の王凌が母は、劍に伏して我が子を諫めし例しもあり、それ程にはあらずとも、妾も千原左近が妻。我が子の愛に溺れ、不覺を取らす心はない。病後と云ひ、齢とても七旬に及びし、母あると思ふは却つて不覺。國を出る時家を忘れ、家を出る時妻子を忘るゝ武士の本文。首尾よう敵の首を取り、草葉の蔭の甚太夫どのへ手向けてたも。可哀さうに嫁ぢやとて、なんと一人殘されう。サヽ、聞き分けて出立しや。
十左　仰せ一々、御尤もにはござれども、いづれお供仕らねば、十左衛門、心が濟みませぬ。
きみ　アレ又、あんな事を。
ト貢、思ひ入れあつて
貢　十左衛門、この鼓打つて見や。
ト有り合ふ鼓を十左衛門が前へ置く。
十左　ナニ、この鼓を打つて見よとはな。
貢　非義非道に人を殺し、立退きしは人の皮着た畜生侍ひ、取りも直さずその鼓の、裏と表の皮に例へし表裏の侍ひ、母を伴ひ、一心が亂れては、打たれぬ鼓。これを打たんと思ふ時は、一心不亂に胴を据ゑ、恩と義理とを搦ひ交ぜの、調べをかけて打つ時は、末代武名を輝かす音を出すまいものでもない。
十左　すりや母人には。
貢　これに殘り、妙音の便りを聞くを樂しみ。首尾よく

討ち取りなば、その時こそはめでたう逢はう。
十左　もし又、鼓を打ち得ぬ時は。
貢　恩と義理と武士道、三つ地に缺けし忰は持たぬ。
十左　然らばこれが名殘りになり
きみ　調べに二つに縁を結ぶか。
貢　善惡ともに其方の心に。
十左　すりや、どうあつても。
貢　マ、とつくりと思案をしや。
ト唄になり、思ひ入れあつて、障子屋體へ入る。あと合ひ方。十左衞門、ヂッと手を組み、思案のこなし。
お君もよろしくあつて
きみ　ほんに、思ひ廻せば世の中とは、儘にならぬものぢやなア。折角久し振りでお顏を見ると思へば、また直ぐに旅立ち。殊に敵討とあれば、切ツつはツつをさしやんすのでござんせう。それをマア安心さうに、母樣を連れまして行かうか、サア、只今出立いたすのと、ほんの男の心と云ふものは、別なものぢやなア。其やうな身勝手ばかり云ふが男でもござんすまい。ちつとは又、女房の心にもなつて、二夜さと三夜さは、ハテ、ゆつくりとしてくれたがよい……イヤサ、久し振りでの積る話しをしてくれたと云うて、まんざら罰も當るまいぢやござんせぬかいなア。
トちつと凭れかゝる。
十左　左樣な機嫌ぢやないわい。
ト身をひねる。この拍子にお君、ベッタリ横に轉けながら
きみ　こちや左樣な機嫌ぢやわいなア。
ト媚るこなし。十左衞門これに構はず思案のこなし。
お君、つく〴〵顏を見て
どうやら、お顏の色も惡し、どこぞ惡うござんすかえ。
エ、。
ト云へど十左衞門、構はず思案して居る。
モシイナア、なぜ物を云はしやんせぬぞいなア。但し、なんぞ苦になる事があるかえ。云うて聞かせて下さんせいなア。わたしやいつそ、苦勞でござんすわいなア。
トいろ〳〵拵へるこなし。十左衞門、キッと思ひ入れあつて
十左　如何にもこの十左衞門、屈托があるのサ。
きみ　サア、その屈托はどんな事でござんす。どうぞ聞かして下さんせいなア。

十左　サア、その屈托と云ふは、母人が謎の鼓、十左衛門が手で打たれぬゆゑ。

きみ　この鼓を打てと云はしやんした、母さんの心は、敵を討てとかけさしやんした謎。その敵がお前の手で討たれぬとはえ。

十左　サア、身が手で討たれぬと云ふ、その仔細。

　ト あたりを見て、思ひ入れあつて

君、何を隠さう、甚太夫どのを討つて立退いた、敵と云ふは、この十左衛門ぢやわやい。

きみ　エヽ。

　ト 大きに驚ろく。

十左　サヽ、ぢやに依つて、我が手で打たれぬこの鼓。

きみ　そんならお前が殺さしやんしたのでござんすかいなア。

　ト 云ふを消して

十左　實盛が弓手へ廻り、草摺りを疊み上げて。

　ト 膝を叩きながら、鼓をあしらひ、紛らすこなしあつて

聲が高い、靜かに云へ。

　ト こなし。お君もこなしあつて

きみ　そりやマア、ひよんな事して下さんしたなア。

　ト ぢつと泣く。十左衛門、思ひ入れあつて

十左　斯く明らさまに申し聞かさば、其方が心では、非義非道とも思はうが、これ皆殿の仰せを受け、甚太夫どのと云ひ合せ。證據は即ち殿のこの一書。

　ト 懐中より錦の袋に入りし一書を出し

披見しやれ。

　ト 渡す。お君、取つて披き見る。合ひ方

きみ　「國に盗人家に鼠、日夜に募り遂に寶の紛失、この詮議荒立つる時は、却つて家の存亡に係はる大事、これに依つて其方、忠節を抽んで、甚太夫と心を合せ、彼の曲者を詮議いたすに於ては、先知の上所地五百石を與へ、都合千石を以て家老格に申しつくるものなり、浮島甚太夫承つて如件、千原十左衛門へ、信田右衛門大輔」……そんなら何事も甚太夫さまとやらの云ひ合せでござんしたかいなア。

十左　如何にも。それゆゑにこそ甚太夫どのと、密かに申し合せ、お部屋お民どのと薩島傳藏、この兩人を怪しみわざと甚太夫どのと不和の體になし、その上、傳藏が私慾をこの身に引受け、忍び見てまんまと兩人へ取入り、

寶の在所尋ね出さんと思ふうち、甚太夫を討つて捨てよと、傳藏が惡心、とあつて討たれぬお家の忠臣、討たねば傳藏心をゆるさず、とつおいつ思案のうちに、甚太夫を討つて捨てんと駈け出す傳藏、南無三と後を慕ひ、駈けつけ見れば情なや、はや甚太夫どのには九死一生。ハヽア、死なしたり殘念や、おのれ傳藏、甚太夫どのゝ敵、眞ッ二つとは思へども、いま彼奴を討ち取つては、末代寶の行くへは知れず、二つには後に殘りし悴甚七、さぞ本意なく思はんものと、心一つに所存を極め、再び寶を奪ひ返し、その時こそ誠の敵は傳藏なりと、甚七に申し聞かせ、首尾よく敵討させるが、草葉の蔭の甚太夫どのへ、せめてもの申し譯と、心の内に云ひ譯なし、廣大慈悲の恩義を受けし、甚太夫どのゝ死骸に跨り、是非に及ばず止めの一刀、刺し通せしその時は、五體は鼎の油に煮られ、四十四の骨々にも、碎くるやうにあつたわやい。猶も傳藏が惡事を引受け、意趣切りの相手は十左衛門なりと、一書を殘し立退きしは、いよ〳〵傳藏に心をゆるさせん爲ばかり、凡そこの仔細明かせしは、其方ならでは外にない。然らば甚七が、我が在所を知らん爲に母を人質になし苦しめんは必定。さあれば某母への不孝、何卒寶の詮議仕出すまでは、夫人も共に[illegible]を隱し、我が存念の達したし。頼みと云ふは爰の所。其方が實心にほだされ、あの如く、この所を立退く心底更にない。さるに依つて母の心の變るやうに、如何にも我れに惡口なし、離縁さへ致しくれなば、某が滿足。君、頼みと云ふは、この通りぢやわやい。

ト理解を解いて云ふ。此うちお君、思ひ入れあつて

きみ　段々の樣子、よう云うて下さんした。それ程までに事を分けてのお頼み、背くではなけれども、縁切る事ばかりは

十左　不得心か。

きみ　どうぞ堪忍して下さんせいなア。

ト泣く。

十左　すりや、如何やうに申しても。

ト云へどもお君、チッと泣いて居る。十左衛門、思ひ入れあり、キッと思案を極めしこなしにて、身繕ろひして、スッと表へ出ようとする。お君、十左衛門が袂を扣へて

きみ　待たしやんせ。こりやお前、どこへござんす。

十左　某が頼み、聞き入れざる其方なりや、孝の道が相

立たぬゆゑ、所を去つて切腹するのサ。
ト また行かうとするを留めて
きみ そりや又お前、短氣でござんす。
十左 然らば夫婦の縁切る心か。
きみ サアそれはな
十左 但し腹切つて相果てうか。
きみ サそれは。
十左 縁を切るか。
きみ サア。
十左 サア。
兩人 サア〳〵〳〵。
きみ そんならどうでも。
十左 離縁いたすか。
ト お君、ギックリとなり。
きみ ハヽヽ、。
ト 泣き落す。
十右 コリヤ。
ト 押へて
風にしぼめる枯木の力も折れて
ト 奥を窺ひ、よろしくあつて
得心いたしてくれるか。
きみ それも母さんへの表向き。必らず共に心の縁は。
十左 切りはせぬ。
きみ エヽ、嬉しうござんす。
ト 抱きつき泣く。この時、奥にて
嘉兵 ようござりまする。私しが連れて參りまする。
ト 云ひながら出て來る。十左衞門、お君を突き放して
十左 君、いよ〳〵其方は離縁したぞ。
ト きつと云ふ。お君、矢ッ張り泣いて居る。
嘉兵 なんぢや、妹を離縁する、十左衞門どの、いよいよ貴樣、縁切つたの。
十左 如何にも縁は切り申した。
嘉兵 ヤレ、それは忝ない。それ聞いて夜が明けたやうだ。この春國へ行く時は、追ッつけ母を迎ひの時、貴樣は侍ひにして連れて行く、樂しんで居いと云つたが、この世の暇乞ひ。サア、それから梨の礫も打たばこそ、あの病人の婆を突きつけ置いて、よう今頃ぬつくりと歸つて來たなア。大方またしくじつて、旦那居候ふと云ふ積りであらうが、もう今度はおれがさせねえ。コレ、貴樣、大小の差しやうを敎へてくれねえか。イヤサ、いつ侍ひ

にしてくれるのだ。來年か來々年か、アノ嬰な大べら坊め。
　ト滅多に力む。十左衛門、素知らぬこなし。
きみ　コレ兄さん、お前もマア其やうに、云はずとようござんすわいな。
嘉兵　云はずとよいとは、コリヤ、矢ツ張り噓つきの肩を持つのか。
きみ　なんのマア、さうぢやござんせぬけれどな、あれ程に云はれても、ヂッと默つて居やしやんすは、腰拔けでござんずわいなア。
　ト思ひ切つていふ。
嘉兵　アノ、われが目からも腰拔けと見えりやア、連れ添ふ心はあるめえな。
きみ　そりや知れた事いなア。飽きて〳〵、飽き果てたに依つて、フッツリと思ひ切つたわいなア。
　トこなし。
嘉兵　いよ〳〵それに違ひなくば、おれが先刻云つた事を承知であらうな。
きみ　サア、その事はな。
嘉兵　否と云やア、矢ツ張り心が殘つて居るのか。
きみ　なんのマア、さうでなくば得心か。
嘉兵　サア、どうなりとするわいなア。
きみ　マア、どうなりとするわいなア。
嘉兵　占めたぞ〳〵。それ聞いて落ちついた……モシ、旦那旦那、ちよつとお出でなされませ。
　ト呼ぶ。奥より長右衛門、出て
長右　今度はほんとによいのか。
嘉兵　よいの惡いのと云ふやうな事ぢやアねえ。大極上々無類上なし、飛び切りの上首尾でござりまする。
長右　そりやア有り難い。
嘉兵　ところで、彼の品はどうでござりまする。
長右　そりや隨分渡しもせうが、まだ肝心の事も濟まぬうちに、これを手離す事はマア不承知だ。それともあちらの縁が切れたと云ふ、慥かな事でも見た上なら。
嘉兵　ようござりまする。
　ト思ひ入れあつて、十左衛門が側へ來て
　十左衛門どの、ちつと貴樣に無心がある。
十左　離緣の一札が欲しいと云ふか。
嘉兵　違ひないの滿が直らう。さう事ができばきと埒が明きやア云ひ分はない。

ト云ひ〳〵立つて、硯に紙を持つて來て、十左衞門にあてがふ。十左衞門、物を云はず、筆を取りサラ〳〵と認め渡す。嘉兵衞、受取り

有り難え〳〵。妹、これでてまへも心が濟まうが。

ト見せる。お君、顏を反け

きみ　アイ、それでわたしや落ちついたわなア。

ト淚を隱す。

嘉兵　左樣なら旦那へ、これを差上げ、彼の物と取替へに致さうではござりませぬか。

長右　イカサマ、斯う云ふ慥かな書き物がありやア、マア、安堵がなると云ふもの。さあらば約束の五十兩。

ト渡す。

嘉兵　エヽ、忝ない。

ト一札と取替へる。お君、直ぐに金財布を引き取る。

妹、こりや何をする。

きみ　何するとはえ。こりやわたしに下さんした金ぢやないかえ。

嘉兵　ヤ。

きみ　ナアモシ。

長右　オヽ、それ〳〵、お主にやつた五十兩サ。

きみ　サア、それぢやに依つて、こりやわたしが金でござんすわいな。

嘉兵　それぢやアおれは、無駄骨と云ふものだわな。

長右　コレサ〳〵嘉兵衞、らッちもない事云ひ出して、お君が機嫌を損なうてもらつては、詰らねえ話しだ。お主へ骨折り代は、爰にある〳〵。

嘉兵　必らずそれを忘れめえよ。時に十左衞門どの、妹を離緣の上は、あの婆アどのを連れて去んでもらはにやアならねえ。サア、ちつとも早う埒を明けてえ。妹、てまへもちつと物を云はねえか。

きみ　なんのお前、斯う緣切るからは、あの母さんも一緒に行かしやんせいで、なんとせうぞいなア。

トこなし。

十左　如何にも〳〵。コレ、長々の介抱、忘れは置かぬ。斯う離緣いたす上は、今日只今、母は身共がお供いたして罷り歸る。

きみ　そんならどうでも。

ト云はんとするを、十左衞門、顏にて押へる。お君、チッと氣を變へ

サア、どうでお前が連れて行かしやんせにや、お前、侍

ひが立つまいわいなア。

ト こなし。

長右　イヤモウ、遣り手婆アでさへうるさい。兎角年寄りは邪魔になる。とつとゝまくし出してしまふがよい。

嘉兵　左様サ、埒が明かざア引摺り出しませう。

ト 立ち上がる。この時、貢、旅支度にて出かけ

貢　イヤ、引き出すに及ばぬ。悴十左衛門もろとも、出て行きまする。サア、十左衛門、ちつとも早う。

十左　すりや、御承知下され、お立退き下されまするとな。エ、、忝ない

貢　イヤモウ、斯うなる上は、立退かいでなんとしませう。最前からの様子、残らず聞きました。町人風情に悪口せられ、ヂッと堪忍して居やる大丈夫。それでこそ誠の侍ひ。それに引替へ嫁女の心底、日頃の孝行貞節に、打つて變りし今日の仕儀。さう云ふこなたの心と知らず、今度の大病、惜しからぬ命とは、思ひながらも實心の介抱、仇にせまいと氣を取り直し、養生したが今での後悔。現在こなた衆兄弟して、大事の〳〵悴が武士、よう捨てさせて下されたなう。嬉しうござる、忝ない。これを思へばその時に、いつそ死んでしまうたら、今の無念はあるまいもの。死に遅れて口惜しいわいなう。

ト 泣いて云ふ。十左衛門、こなし。お君もよろしくあつて

きみ　そのお恨みは、御尤もでござんすけれど、これには深い

ト 云はうとする。十左衛門、コリヤと顔にて押へる。お君、氣を變へ

イヤサ、深い淺いは世の中の、日毎に變る人心。飛鳥川に譬へし諺。ついこれ程の事さへ辨まへないとは、ほんに笑止なお方さんではあるわいなア。ホ、、。

ト 笑ひにて涙を隠す。貢、キッとなつて

貢　エ、、聞けば聞く程、恨めしい、と云うたとて、なんの今さら返らぬ繰り事。見違へたは此方の麁相。流石は町家に生ひ立ち、慾に迷ふは浮世の慣ひ。とは云ふものゝ、思へば〳〵、見下げ果てた心ぢやのう。

ト きつと顔を見る。お君、顔を反け、涙を隠す。十左衛門、引取り

十左　アイヤ〳〵、人畜生の女めに、御教訓は却つて御病氣の障り。何事も仰せられずと、この場は此まゝ。

貢　成る程、何を云うても空吹く風。もう云ひますまい。

サア、十左衛門、行きませう。
トこなし。お君もよろしくある。
嘉兵 なんと、思惑通りサラリと埒が明きまして、落ちつかしやりませうな。
長右 イヤモウ、落ちついた段ぢやアねえ。とてもの事に本落ちつきに落ちつきたいな。
嘉兵 ドレ、床を廻して上げませう。
ト合ひ方になり、兩人、障子屋體へ入る。十左衛門、思ひ入れあつて
十左 君、今こそ母のお供して立歸る。これも偏へに其方が得心いたしてくれたゆゑ……イヤサ、これも偏へに母人の、御得心下されしゆゑ。思へば〱忝ない。十左衛門、過分に思ふぞよ、嬉しいぞや。
ト心にて思ひ入れこなしあつて、お君の胸倉を取り、引きつけて
不貞心の其方へ禮は重ねて。緣と時節を待つて居らう。
ト突き放す。此うち嘉兵衛、長右衛門、障子を明けて窺うて居る。お君もよろしくあつて
きみ なんの今さら卑怯らしい。例へ又、禮にござんせうと儘よ、わたしや一つも怖うもなんともないぞえ。云ふ事があるなら、どうぞ早う……イヤサ、勝手に云ひにござんせいなア。ア、阿房らしい。
ト件の財布を十左衛門へ投げつける。十左衛門、取上げ
十左 これは。
きみ まだ病中の母さん、もしや途中で。
十左 すりや、この金子を。
きみ イヤサ、病を救ふ紫金錠。
ト十左衛門、ホロリとなる。
貫 十左衛門、今のは何ぢや。
十左 イヤ、母人のお藥。
貫 慥かにそれは。
ト出ようとする。
十左 ハテ、折角首尾よう出したものを、コレ、なんにも云はずと
ト包みを取上げ
浪風ともに靜をとゞめ給ふかと、涙を流し夕しでの。
ト謠にて紛らすこなし。直ぐに地へ取り
途へ神かけて變らじと、契りし事も定めなや、實にや別れよりまさりて惜しき命かな、君に再び逢はんとぞ思ふ。

トお君、鼓を打ちながら、十左衞門へ名殘りを惜しむこなし。此うち十左衞門、貢、先に、靜々花道へかゝる。文句の留めに

藤兵　モシ、あの態を御覽じませ。

長右　ハヽヽ。

ト笑ふ。お君、思はずツカ〳〵と、門口の際へ行き

きみ　コレ、必らず戾つて…下さんすな。

トこれにて十左衞門、振り返る。貢、十左衞門を引き廻して

貢　未練な事を。

トきつと云ふ。十左衞門、氣を變へ、顏を反ける。お君、ワッと泣かうとして、淚を呑み込む。双方、一時の思ひ入れにて、チョンと拍子木の頭を入れる。

〽見る目も哀れなりけり〳〵。

トこの文句にて、お君、泣き落す、よろしく拍子。

ひやうし幕

ト幕の外、三重にて、貢、十左衞門、思ひ入れあつて向うへ入る。シヤギリ。

四幕目　伊勢古市の場

役名――傾城、稻木 實ハ大八女房おさく。傾城、竹川 實ハ腰元お袖。藝者、おまさ。仲野、千野。藝者、おつる。傾城、宮川。髮結ひ、長七。若い者、喜助。男藝者、紙子伊八。若い者、新八。船頭、次郞吉。中間、八助。藤原兵馬、象潟喜三次。

本舞臺、見附け五間の間、女郞屋表格子を裏を見せ臺の物、三ッ鉢の下がり、取散らしてあり、禿もみぢ、木綿やつし、紅細帶にて、腰かけ居る。長七、髮結ひにて、盥を用し髮結つて居る。禿みどり、平常着の形にて、立ちかゝり見てゐる。いつもの下座、内證の心にて、新八、若者にて、塗り板の玉を本帳へ寫し居る。喜助、料理番にて、肴屋の盤臺の魚を打かきにて選り分けて居る。すべて伊勢古市の女郞屋の朝の模樣、二上りの騷がしき唄にて、幕明く。

新八　コレ、喜ス公、大概にして、茶屋を集めて來さつしやれ。もう四ッ過ぎだよ。

喜助　今朝一遍廻つたが、晝過ぎと云ふ事サ。

新八　それぢやア勘定が片付かない。今日は瀧吉の兵馬さまがお仕舞ひで、外に御一座があつて、稻木さまがお名指しだが、花魁方の御一座に、廻りの女郎衆にはをかしいぢやないかえ。

喜助　でも、何か御趣向があると云はしつた。兵馬さまの思ひ付きなら、どうで碌な事ぢやアあるまい。

新八　シタガ、あの稻木さんの見世つきは、剛氣で見立ては利くが、とんと馴染になる客がねえ、そこで座敷持ちから引下ろされて、局女郎とはなつたれど、それでも矢ッ張り氣の强い奴サ。

喜助　イヤ、又あれで足が揃つて見やうものなら、ぶッさらひだが、何分跛足と來ちやアあやまるのサ。

肴屋　モシエ、足があつてぶッさらひとは、どうか新場の蛸のやうだね。

喜助　それでも脇の評判では、剛氣に手があるとサ。

新八　手のある代りに、足が短かい奴サ。

皆々　嘘はない。ハヽヽヽ。

ト矢張り騷ぎの合ひ方にて、銘々捨ぜりふ云ひながら奥へ入る。もみぢ、髪を弄りながら奥へ入る。新八、殘り居ると、千野、仲居の拵らへにて、奥より出かけ

千野　これサ、お前さん方は、大概におひんなしんか。今日は瀧吉の客人の仕舞ひだよ。早く湯へお入りなんして、掃除をさせまし。みどり、竹川さんが呼ばつしやるよ。

みど　アイ〱。

ト奥へ行かうとする。直ぐに奥より、竹川、寢卷の形にて、上草履を穿き、バタ〱出て來り

竹川　これサみどりや、先刻云つた物を早く取つて來や。

みど　アイ〱。

ト正面の格子へ行き

向うの人、筆楊枝と袖の梅を持つて來なんしよ。

新八　そりやこそ、竹川さんの酒も久しいものだぞ。

千野　ほんに、花魁、もちつと御酒の加減をなさるゝがようございまする。

竹川　それぢやと云うて、なんぼう座敷ばかりでも、あの兵馬さんの勸めで、調子が合して居らるゝものかいなア。

新八　ハテ、それもこの暴風のうちばかり、今にも追風が吹いて御覽じろ。お前がどうぞ逢はしてくれと仰しやつても、船が出てからは、逢ふ事はなりませぬよ。

竹川　アイ、隨分逢はぬ方がようござんす。今日の仕舞ひ

も嫌で〳〵ならぬ程に、どうぞわしが賴んだ通りに、して下さんせいなア。

千野　それも合點して居れど、此方から客人を突き出しては、內證の耳へ入れても惡うござんす。そこでわたしが宮川さんに、とつくりと云ひ付けてな。

　ト ちよつと囁く。

竹川　そんなら、それを誤まりにして。

千野　ア、コレ申し。

　ト 新八を敎へ顏にて、呑み込ませる。合點かえ。

竹川　ちつとそれで落ちついたわいなア。

　ト この時、向うより、狀配り出て來て

狀配　ハイ、竹川さん、御狀を參りました。

新八　アイ、どちからぢやの。

狀配　ハイ、桑名からでござりまする。

　ト 狀を出す。新八、取つて

新八　千束屋御內竹川さま、浮島內御存じより。花魁、こりや變な所から來ましたね。

竹川　コレイナ、こりやわたしが身寄りから、來た文でござんすわいなア。

新八　道理こそ、變な所から來たと思つた。

狀配　お返事が出來ましたなら、一六が出日でござりまする。

新八　こりやお世話。休んでござりませ。

狀配　ハイ〳〵。

　ト 暖簾口へ入る。向うにて

傾城　サア〳〵、ござんせ〳〵。

　ト 矢張り騷ぎにて、向うより、兵馬、田舍侍ひの拵へよろしく、逃げて出るを、新造二人、引ッ張つて出る。後より、八助、中間の形にて、これを支へながら出て來る。

兵馬　これサ、放し居らぬか〳〵。

新造　イエ〳〵、見付けたからは、逃がしはしいせんよ。

兵馬　これサ、外聞の惡い、放せ〳〵。

八助　ハテ、聞分けのない女郎だわえ。旦那が脇へござらうとも、賣り物買ひ物、何も斯う云ふ目に合はせる事はねえ筈だが。

新造　アイサ、髮さへお切らせなんすりや、その後は構ひはしいせん、

同　坊さんになつて、どつちへなと行かしやんせいな。

兵馬　なんだ。身を坊主にすると云ふか。
八助　云はせて置けば不届き千萬、聊爾いたすと免さぬぞ。
ト此せりふ云ひながら、兩人、八助も引ッ張り舞臺へ來る。
新造　申し、兵馬さんを、お連れ申しいんした。
千野　直ぐに二階へお連れ申しなんし。
兵馬　これサ、千野、お主までがさう云つてくれる事もねえぢやねえか。
千野　マア、何事も後の事。二階へお出でなさんせいなア。
皆々　サア〳〵、お出でなんし〳〵。
ト兵馬を引ッ張つて上がる。八助、支へながら付き添ひ上がる。この時、騷ぎ唄はつきりと、向うより、喜三次、田舍侍ひの拵らへ、羽織、大小、藁草履を穿き出て來る。後より、伊八、男藝者の形。後より、次郎吉、船頭の形にて付いて、出て來て、花道の中程にて
次郎　モシ〳〵旦那、あれが即ち千束屋でござりまする。
喜三　なんと申す。もうその傾城屋へ參つたか。
ト衣紋を直し
サア〳〵、先づはお先へ〳〵。
ト伊八と入れ替らうとする。

伊八　これは大盡樣、どうでござりまする。サア〳〵。お出でなされませ〳〵。
喜三　イヤ〳〵、滅多にお出でなさられぬ。
兩人　そりや又、なぜでござりまする。
喜三　先刻お話し申した通り、當所不案内の身共なれば。
伊八　それはお氣遣ひなされますな。及ばずながら紙子伊八が、お側に居るからは、あなたにこれ程でも引けを取らせます事ではござりませぬ。
喜三　それは千萬忝ない。この度灘吉丸の大廻し、同船いたしたは、信田家の家中楠原兵馬と申す奴。阿州表へ罷り下る由、懇意に語らひましてござるが、彼れめ主從いたして、某を遠國者と存じ、金銀をひけらかし、その上今日は、某をこの古市へ同道の致して、遊君どもの中へ押し出し、笑ひ者に致して恥辱を與へんと企み居るとの事。あれなる船頭の者が内通いたしてござれど、身共恥かしながら遊里と申しては、國元では元宮八丁目などで飯盛を、一兩度求めましたばかり、傾城と申しては、一向無茶でござるて。
次郎　アレ、聞かつしやりまし。あの通り正直なお方を、いとしなげにこの古市へお連れ申して、どんぶりと深味

へ嵌めて、往生づくめに金を遣はさうと、主從しての目算、憎さも憎しと、わしがお爲ごかしに、八めを騙かして置いたが、どうでわしが手ではゆかないから、ソツと旦那へ吹き込むと、お前をお頼み申したは、彼方の企みの裏を掻いてやる積りだが、あんまり金も遣はぬところが肝心ぢや。そこを好くお頼み申してくれ〳〵。

伊八　そりやハヤ、金を遣つたら、どんな事でもならうが、そこを遣はずには、ちと魂膽がむづかしい。シタガ、それも相方の女郎衆に、よく吹き込んだら、どうか斯うか狂言がありさうなものだが、マア、旦那のお相方は、誰れにしたものであらう。

ト考へる。

次郎　それも慥か、稲木さんを出すと云ふ事でござりやした。

伊八　アノ稲木さんか。餘ッぼど引かつしやるが、旦那は御承知かの。

喜三　引くとは、三味の事でござるか。それは一段とようござる。

次郎　イエ〳〵、三味ではござりませぬ。跛足でござりまする。

喜三　ヤア。

ト惘りして

初めて傾城を求めるに、跛足とや。

伊八　サ、少し引かれますればこそ、籬へ踏みこすんでござりますが、正面の衆より氣の強い、どうか手のありさうな女郎衆でござりまする。

喜三　イヤ又、跛足の上に手が長うては、好い見世物でござる。ハヽヽヽ。

伊八　左樣なら、斯うお出でなされませ。

ト矢張り騷ぎにて、下の方へ入る。上の暖簾口より出て來り、新八、二階より下りて來て

新八　これは入らつしやりましたか。紙子さん、次郎どんお早かつたな。

次郎　兵馬さんは、もうお出でなされたかえ。

新八　その兵馬さんで、座敷は亂こくだ。どうでお前方が口をきかずば濟みますまい。

喜三　そんなら、兵馬どのは先へ見えたか。

伊八　左樣さうにござりまする。

新八　マア〳〵、奥座敷へお出でなされませ。

ト新八、先に皆々行かうとする。喜三次、立戻り、草

履を懐中して上がろ。

三人　サア〳〵、お出でなされませ。

ト騒ぎにて、皆々二階へ上がる。この騒ぎをかりて、向うより、藝者おまき、おつる、藝者の形。駒下駄にて、出て來る。後より、若い衆、三味線箱を持ち、付いて出て來る。奥にて手を打つ。

千野　アイ〳〵、みどりや、お手が鳴るよ。

ト云ひ〳〵出て、兩人を見て

まささん、つるさん、遲かつたな。

兩人　千野、おやかましうござんせう。

千野　サア〳〵、お客さんは疾にお出でたわいなア。早うして。

つる　アイ〳〵。

ト懐中より鏡を出し、ちよつと顔を直し

まささん、顔を直してお出でんか。

まさ　わたしやモウ、これで置かうわいな。

千野　まささんは、木地でも美しいから。

まさ　エヽ、又あんな悪口を。

ト奥にて、手を打つ。

千野　アイ〳〵、サ、皆さん、お出でいな。

ト騒ぎにて、皆々二階へ上がる。チヨン〳〵にて、この道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の大座敷、中連子、東西の見切り障子花道を廊下に見たる好みの形、爰に兵馬。古き新造の振り袖を着て、つくれんと床柱に寄りかゝり居る。その側に、八助、手を組んで居る。方々にて手を叩く。禿の返事など賑かに、この見得にて、騒ぎ唄にて道具納まる。

兵馬　エヽ、人の心も知らいで、面白さうに騒ぎくさる。エヽ、いま〳〵しい。

八助　モシお旦那、こりやマア、詰まらぬものになりましたわえ。

兵馬　さればサ、せめて着物でも着せて置けば、塀を乘り越しても逃げやうが、晝日中これぢやア逃げられない。

ト奥にて、手を打つ。

もみ　アイ〳〵。

トもみぢ出て來て

お呼びなんしたかえ。

兵馬　コレ、もみぢや、好い子だ。銚子を持つて來やれ來

やれ。
もみ　そんな事は知りんせんに。
　トついと奥へ入る。
兵馬　エヽ、いま〳〵しい餓鬼どもだ。ツン〳〵としやアがるワ。
八助　コレ、表座敷へ吸ひ物が出るわえ。エヽ、何か、大鉢を持つて行き居る。
　ト伸び上がり〳〵見る。
兵馬　コレ八助、さう數へ立てるな。咽喉がぐび〳〵してならぬわえ。どんぶりと嵌めやうと思つた喜三は次嵌まらず
八助　此方が飛んだ罠にかゝると云ふは
兵馬　これがほんの、人を呪はゞ穴二つ。
八助　お旦那。
兵馬　八助。
八助　アヽ、儘ならぬ
兩人　浮世ぢやなア。
　ト兩人、しいなりとなる。奥にて
千野　サア〳〵、此方へちとお出でなさんせいな。
喜三　イヤ、どこでも大事ない〳〵。

兵馬　あの聲は。
八助　喜三次どのでござりまする。
　ト兩人ドギ〳〵して、隱れ所に困り、隅に立てゝある屏風の蔭へ兩人隱れる。合ひ方にて、喜三次、次郎吉、おつる、おまさ、千野、燭臺を灯して、持つて出て來り
まさ　サア〳〵、爰は晴れ〳〵として、ようござんすわいなア。
つる　爰で一つお上がりなさんせいな。
喜三　ハテサテ、揚屋と云ふ所は、聞いたよりは騷がしい所ぢや。遊興にはならいで、氣上りがしてなるものではない。これをマア面白いとて、大切な金銀を遣ひ捨てると云ふは。
　ト云はうとする。次郎吉、咳にて紛らし、喜三次が袖を引く。喜三次、呑み込み
なか〳〵サワ〳〵して面白い事ぢや。
　ト笑ひに紛らす。
次郎　全體、おらが大盡樣は、濶な事がお好きだ。つるさん、まささん、なんぞ面白い事をお頼みだ。
つる　わつちらは面白い事は存じんせん。

まさ　お氣に入らずと付合つて、聞いておくんなんしよ。

次郎　こりや不調法を申しました。御免なさい〳〵。

喜三　コリヤ、次郎、そんな粗雜な詫びの仕樣があるものか。惡い事があるなら、手を突け〳〵。

千野　エヽ、お前さん、なんでござりますぞいなア。まじにお受けなされまして、をかしいお方ぢやわいなア。

まさ　オヽ、笑止。

千野　これサ、さう笑止ぶらずと、なんぞ早うお彈きなんし。

ト兩人、なんなりと騷ぎを彈く。喜三次、これに浮かれて扇にて拍子を取り、思はず不用器に褒める事などよろしく、次郎吉、氣の毒のこなし。

千野　紙子さん、今日はきついまじだね。これで一つ上げんせう。

ト茶碗を出す。

伊八　イヤ、この間は禁酒だ。

千野　お前の禁酒は、近いと云ふ字かえ。

伊八　噓はねえ。お前の思ひざしだ。一つ呑みやせう。

次郎　畜生め。ドレ、おれが酌をせう。

ト奧より、新八、臺の物を持つて出て、眞中へ直し

新八　旦那、只今は有り難うござります。

ト喜三次、臺の物を見て、頭を掻き、ウロ〳〵して居る。

ちの　モシ、新八どんが御祝儀のお禮に參りましたわいなア。

喜三　エヽ、妓夫か。サア〳〵、これへ來やれ〳〵。

新八　ハイ〳〵。

ト躙り寄る。

まさ　妓夫とは、どうか氣味が惡いわいなア。

新八　そりや、氣味の惡い筈だ。

つる　なぜにえ。

新八　芝居の幽靈の出る時は、ぎうどろ〳〵。

ト幽靈の眞似する。

皆々　ホヽヽヽ。

ト笑ふ。合ひ方になり。暖簾口より、傾城宮川、同じく松坂、先に、竹川、禿兩人、銘々鋏を持ち出て來る。喜三次、これを見て、悄りして、こなし。

宮川　どなたもお許しなんしよ。

ト座敷を見廻し

松坂　花魁、爰にでもござんせぬわいなア。

千野　どこぞに隠れてゞもあらうわいな。
ト これにて、兵馬、八助こなし。
まさ　花魁、なんでござりまませえ。
竹川　兵馬ざんを尋ねるのぢやわいなア。
千野　あの形でどこへ行かれるものかいな。もちつと捨て置いたがようござりますわいな。
ト おまさ、煙草を付けて
まさ　花魁、マア一服おあがりなされませ。
ト これにて、竹川、下に居る。喜三次、伊八が方を見い〳〵、居住ひを直す。
伊八　花魁、この間はお目にかゝりませぬ。
竹川　紙子さん、をかしうおすね。
ト 喜三次、次郎吉が袖を引く。
喜三　あれが稲木どのか。
ト 次郎吉、頭を振る。
竹川　千野、あなたは。
千野　兵さんのお連れでござりますわいなア。
喜三　イヤ、連れと申せば連れ。船がゝりの連れで、あの仁は阿州まで参る事。身共は又、伊勢へ参宮いたせば、幸ひと同道いたしたのでござる。

竹川　して、お前さんのお國わえ。
喜三　身共は羽州の者でござる。
竹川　羽州とはえ。
ト 合點のゆかぬこなし。
喜三　ハテ、出羽の國サ。
竹川　エヽ、そんならあなたは、出羽のお方かえ。
伊八　ナア〳〵、花魁が大分根を掘つてぢやわいの。
竹川　出羽の國ならちつと。
ト 思ひ入れ。
伊八　イヤ、こりや、味な風が吹いて参りましたわえ。
ト 喜三次を煽てる。喜三次、恥かしきこなし。兵馬、八助、ムツとこなし。
竹川　千野、主は誰れさんぢや。
千野　稲木さんがお名指しぢやわいな。
竹川　稲木さんなら、後にお話があるぞえ。
伊八　オツと祕すべし〳〵。この事を兵馬さんがお聞きなされたなら、これ〳〵でござりませうぞえ。
ト 角の生えるこなし。
竹川　エヽ、モウ、兵馬さんの事を云ひ出しても下さんすな。
まさ　ほんに、花魁のお客ぢやが、あのやうな好かぬお方

もないものぢやわいなア。

つる　アノ、わたしらを捉へて、いろ〳〵な嫌らしい事ばつかり云うてぢやわいなア。

宮川　それぢやに依つて、わたしらが名代に出るのは、責められに行く心ぢやわいなア。

千野　その癖、來ると床を廻せ〳〵と、あのやうな床急ぎな客人もないものぢやわいなア。

喜三　イヤモウ、あのお方の話し、見ると聞くとは大きな相違、ござる。この間船中の徒然に、遊里の話し承つてござるが、兵馬どのがこの廓へ參られると、傾城達が取卷いて、ようお出でたの、こちらへお出でと引摺り引ッ張り、女護の島へ業平が吹き流されたやうぢやのと、物語りでござつたが、只今のお話しでは、大きな相違でござるな。

ト兵馬、八助、頭を掻き、苦々しきこなし。

竹川　オヽ、辛氣。兵さんがそんな話ししてかいなア。

喜三　イヤモウ、鳥なき里の蝙蝠で、味噌は上げ次第でござるて。

皆々　エヽ、憎らしい。

松坂　花魁、早う坊さんにしてしまひなさんせいなア。

ト兵馬これを聞き逃げうとする。八助、逃げては惡いと引留める。この物音を聞き

竹川　ヤア、屏風の蔭に誰れやら居るぞえ。

皆々　オヽ、怖。

千野　新八どん、早く見ておくれ。

新八　大方猫でござりませう。

ト新八、何心なく、屏風を退ける。兵馬、八助、逃げ廻る。

皆々　ヤア、兵馬さんでござりますか。

女皆　兵さんぢやわいわいなア。

ト皆々鋏を持つて追ひかけ、此うち、喜三次、ウロウロして居る。兵馬、追ひ詰められ詮方なく、喜三次が股倉へ首を突ッ込み隱れる。喜三次、これを圍つて

喜三　いづれも、早まるまいぞ。

皆々　イエ〳〵、早う出して下さんせ。坊さんにせにやアなりんせん〳〵。

ト口々に云ふ、八助、心遣ひあつて

八助　喜三次さま、何分お頼み申しまする〳〵。

喜三　なんぢや、坊主にするとは。

ト合點のゆかぬこなし。

竹川　アイ、惡性したお方は、どなたでも坊さんにするのサ。

皆々　廓の法でござんすわいなア。

喜三　法とあれば、達てとも申されまい。

八助　ア丶、モシ〳〵、それでは旦那が。

ト心遣ひのこなし。

喜三　ハテ、是非もない。兵馬どの〳〵、マア〳〵、これへお越しなされい。

ト股倉から出す。

兵馬　喜三次どの、面目次第もござらぬ。

竹川　サア〳〵、皆さん、合點かえ。

ト皆々立ちかゝつて、兵馬を坊主にせうとする。八助、支へるを、突き退け〳〵

皆々　早う坊さんにして上げるのぢやわいなア。

ト口々に云ふ。

千野　待たしやんせ〳〵。さう口々に云はずと、ちつと靜かになさんせいなア。

皆々　それでも兵馬さんが逃げてぢやわいな。

千野　ハテ、逃げなさんしたとて、あの姿にてどこへ行かれうものかいなア。どうで氣まづい客人ぢやから、花魁も、もうお心はござんすまいなア。

竹川　なんの、モウ、腹が立つて〳〵ならぬわいな。

兵馬　コリヤ〳〵、千野、馴染み甲斐に、爰へ來て詫び言してくれ〳〵。

千野　サア、挨拶はしんせうが、その替りに夜具でもしてお上げなさんせにや、挨拶はなりんせんが、御承知でござんせうな。

兵馬　ナニ、夜具を。

ト惘りする。

八助　そりやアとんだ事だ。

千野　それがならずばなア。

ト皆々へ思ひ入れ。

皆々　早く坊さんにするがよいわいなア。

ト立ちかゝる。

兵馬　ア丶、コレ〳〵、待つてくれ〳〵。エ丶、云ふに云はれぬこの身の災難。

八助　深味へ嵌めようと思つた者は、高見の見物。

ト喜三次が方へもこなし。

兵馬　どうするものか。夜具を拵らへてやらう。

千野　イエ〳〵、さうばかりでは挨拶なりんせん。これが

外の客人なら、茶屋を呼ばして談合をもしませうが、船がゝりのお客さんは、右と左でなければどうも。

兵馬　おやと云うて、只今これに持ち合さねば。

八助　モシ〳〵。

　ト喜三次へ思ひ入れ。

兵馬　成る程〳〵……喜三次どの、ちよつとお目にかゝりたい。

喜三　アノ拙者に…　何御用でござるな。

兵馬　お聞きの仕合せ。なんと暫らくのうち、お請合ひなされては下さるまいか。

八助　あなたがウンと仰しやれば、ツイこの場が済む儀でござりまする。

兵馬　恥を捨てゝ貴公へお頼み、侍ひ一人お助けなさるゝと思し召し

八助　誠にお願ひ申しまする。

喜三　これは迷惑千萬な儀でござる。して、その夜具の入用と申すは、如何程でござる。

伊八　ハイ、内端に見積りましても、五十ばかりかゝりませう。

喜三　ナニ、五十。先づ一兩の口は、拔けると云ふものだな。

伊八　イヽエ、五十とは、五十兩の事でござりまする。

喜三　ナニ、五十兩。

　ト驚ろく。

伊八　數初めの御祝儀、何やかで、大概六七拾兩はかゝりませう。

喜三　それを身共が請合ふのぢやな。

八助　モシ〳〵、船中で御覽なされた通り、旦那の用金、引當もござりますれば、船へ歸りますまでの所を。

喜三　成る程、船中でひけらし召された金子を見ては居れども、何分兵馬どのには、よく噓を云ふお人だから、請合ひます事は

　ト兩人、手を合せ拜み居る。

然らば、是非がござらぬ。請合つて進ぜませうが、船へ歸られなば、相違なく金子渡さうと云ふ、證據の一品、お預けなされい。

兵馬　如何にも。御承知さへ下さる事ならば、なんなりとお預け申さう。と云うて差當り、お預け申す品もござらぬ。

喜三　然らば此方も、證人にはえゝ立ち申すまい。

兵馬　これサ〳〵、氣の短かい。いま思案いたして居る所でござる。コリヤ〳〵八助、差當つて何をお預け申さう。

八助　されば、例へ主從が眞裸になりましても、五十兩の形には屆きますまい。何なりともお旦那、お大切なる品を、お預け申しなさるゝやうござりまする。

兵馬　如何にも、大切なる品と申せば、身が印形の入れたるこの紙入れ。これをお預け申さう。どうぞこれで、御承知なされて下さるまいか。

ト紙入を出す。

喜三　すりや、印形の入れたるこの紙入れを預かりくれいとな。

兵馬　手を合しまする〳〵。

喜三　なんと致さう、是非がござらぬ。その品を渡されい。

兵馬　すりや、お請合ひ下さるゝか。エヽ、忝ない。八助、お禮を申せ〳〵。

八助　エヽ、有り難うござりまする。

ト紙入れを渡す。喜三次、紙入れを懷中して

喜三　各々達、いま聞かるゝ通り、身不肖ながら夜具の代金、身共がお請合ひ申すから、料簡いたして下されい。

千野　イヤモウ、あなたがお請合ひなさるゝ事ならば、ナア、皆さん。

皆々　どうなりと致しませうわいの。

喜三　先づ以て忝ない……然らば御酒一つお上がりなされい。

兵馬　これは忝ない。どうぞ早う一杯お呑ましなされ。八助も一つ呑め〳〵。

八助　エヽ、有り難い。

ト兩人、無性に酒を呑み

エヽ、これで少し人心地が致しました。

喜三　時に兵馬どのゝ騷動で、此方の事は誰れ一人申し出しても下さらぬが、なんと、この傾城は、なぜ見えませぬの。

千野　ほんに、これは不調法。全體花魁方の御一座に、廻り女郎さんは惡からうと云うたけれど。

竹川　サア、稻木さんと一座するを、こちで嫌ではせぬけれど、慰みに見ようと、お洒落なお方が。

ト兵馬を見て

新八どんも、好く聞き糺して、煙草盆を引いたがよいわいなア。

喜三　イヤ〳〵、その不都合な傾城でも、一夜妻と申すか

らは、身共が女房、稲木どのとやらを、早う呼んで參れ
參れ。
次郎　ハイ〳〵、畏まりました。
ト向うへ走り入る。
兵馬　なんと、埒の明かぬ女郎ぢやないか。
八助　ハテ、そりや埒の明かない筈でござりまする。彼の
噂の長し短しで歩くから、どうで手間が取れるでござり
ませう。
甚三　ハテ、先生方はかけ構ひのない、身共が女郎の棚卸
しを致さるゝではある。畢竟、女郎も長し短かし、此方
の大小も長し短かし。こりやコレ同氣相求むると申すも
の、餘り御苦勞に致されぬがようござるて。
伊八　こりやア、旦那が御尤もでござりまする。新公が參
りましたれば、もう見えませう。なんと、まささん、つ
るさん、稲木さんの出のキツカケの唄を頼みやす。
千野　こりや、ようござんせうわいな。
兩人　合點でござんすわいなア。
ト三味線を取り上げると、下座にて、いつもの出の唄
になる。
伊八　濱村屋。

トこの唄をかりて、稲木、好みの衣裳、裲襠、局女郎
の形よろしく、ちんばをくろめるこなしにて、花道よ
り出て來る。後より、新八付き添ひながら
新八　稲木さん、お前が遲いと云つて、一座大白け。客人
には極められ、大汗をかいて迎ひに參りやしたが、正直
お前の廻し方にやアなるまいものぢやない。サア、早く
歩きない。
稲木　それはマア、氣の毒でござんす。堪忍して下さんせ
え。
新八　サア〳〵、早くお出でなされませ。
ト矢張り右の唄にて、稲木、本舞臺へ來る。
新八　ハイ、花魁のお出でござりまする。
竹川　稲木さん、ござんしたかいなア。
稲木　竹川さん、さぞ遲かつたでござんせうな。
つる　お早うござりましたわいなア。
兵馬　イヤモウ、これが早かつたのか知らねえが、此方ど
もは最前から、長うなり短かうなり、待ち切つて居つた。
八助　モシ旦那、その長うなり短かうなりは、差合ひでご
ざりまする。
トわざと稲木へ掛けて云ふ。

兵馬　八助、長い短かいが差合ひとは、そりや誰れに差合ひだ。
ト恍けしこなし。
八助　ソレ申し、女で大小を差す人でござりまする。
ト跛足の眞似をして云ふ。
兵馬　イカサマ、こりや氣が付かなんだ。ハヽヽ。
ト始終、稻木へかけて云ふ。
喜三　又しても〱、其許方には、拙者が相方の世話ばかり致さるゝが、但し今晩の揚げ代は、其許達がお賄ひ下さるゝかな。
兵馬　なにサ、貴殿の女郎の揚げ代、手前が出して詰まるものでござるか。
喜三　左様ならば、拙者が金銀を出して買ひ求めたるお女郎だから、此方任せになされて遣はされい。イヤナニ、お傾城、今晩一夜、其許を求めましたは、卽ち拙者でござる。一應御挨拶がなくては安心いたさぬ。どうぞ御挨拶を賴み申す。
稻木　ほんに、最前から、御挨拶も致しませなんだ。免しておくれなんせえ。
喜三　イヤモウ、その御一言で事は相濟み申す。なんと、持ち合せた杯、一つ呑んでは下さるまいか。
稻木　アイ、お戴きませう。
ト杯を取り上げる。千野、酌する。
まさ　モシ、ちとお戴き申したうござりまする。
稻木　アイ、そりやあんまり憚りにござんす。
まさ　何を仰しやるやら。また間違つてわたしどもは、お近付きにおなり申しませんに依つて、それでお杯を
つる　お戴き申したうござりまする。
伊八　こりや、お二人ながら、あんまりまんがちであらう。わたしらも稻木さんに、初めての御一座。どうぞわたしから先へ、お杯を戴きたうござりまする。
稻木　これは皆さんの御挨拶。なんのわたしが女郎らしい女郎でもある事か、まだしもこの間までは、どうやら斯うやら、皆さんの座並に並んで居たれども、何を云うても身は不束なり、その上お客の氣取りさへ、どうして好いやら悪いやら、所謂手管も覺束ない、不器用者ゆゑ、たうとう局へ引下ろされ、今の身の上。竹川さんは常々から、心安うしておくれゆゑ、氣も措かれねど、歷々の醫者さん方と、一座の座敷へ出た事のないわたし。どうぞ今度から、もし花魁方と一座の座敷なら、よいやうに

執成し云うて、出ぬやうに御挨拶お頼み申しますぞえ。

伊八　これは又、怪しからぬ卑下のなされやう。そりやなんでござりまする。

稲木　お前方のやうなお方さんばかりなればよいけれど、人の心はさま〴〵あつて、ツイ悪洒落なお客さん、又は歴々滿座のその中へ、わたしのやうな恥かしい身分の者を呼び出して、樂しむお方があるものでござんす。それで譯のお頼み。同じ苦界をしながらも、好い座敷へ必らず呼んで下さるな。

ト泣く。各々こなし。

喜三　成る程、先刻から一部始終、承はつて推察いたした。左様な事と知つたら、何しに呼びに遣はすもの。併しながら、何も苦勞に思はるゝ事はない。今宵の客は身共でござれば、外より慮外がましき事申す者がござらば身が許さぬ。某も今宵は、既に其許のやうな目に遭はうと致したゆゑ、身につまされて一入氣の毒千萬。誠にそこが苦界とやら申す所でござらうから、心で心を取り直し、煩らはぬやうに勤めさつしやれ。さて〳〵いとしいお傾城どのではあるわい。

トこなし。

兵馬　なんと八助、こりや遊びに參つたではなく、談議參りのやうぢやねえか。

八助　左様サ。併し、談議に致しては、金貳朱の冥加錢とは、高いものでござりまする。

新八　イカサマ、こりや御尤もでござりまする。とんだ女郎衆を出して、却つてお氣の毒千萬。その代り、爰は一番座を引立て、女郎さん方、藝者衆も打込んで、川崎踊りばどうでござりませう。

兵馬　こりやよからう。まして承り及んだ古市の川崎音頭。

八助　彼の先生も打込んで、大踊りとは面白からう。

兵馬　サア〳〵、始めて見ろ〳〵。

新八　畏まりました。

トこの時、若い衆、千束やと記したる團子提灯を一面に吊し、皆々も手傳ふ。

新八　サア、竹川どんも稲木さんも、藝者衆も入れ交りに踊るのぢや〳〵。

竹川　新八さんゝした事が、面白さうに、いろ〳〵の事を云ひ出して、こちやそんな事は知らぬわいの。

新八　ハテ、知つても知らいでも、この里の勤めなされり

や、伊勢踊と云うて、踊りなさるが當り前。それが嫌ならこの里で、苦界せぬがよいぢやござりませぬか。

八助　こりや、否應は云はれまい。

新八　馬鹿々々云はずと、そつこでせい。

ト地は下座に取る。

〽夕べ〳〵の枕を問へば、嫌な客衆の油が沁みて、好いた男の移り香が、どこへ行たやら神風が、吹いて戻すか眞實の、結ぶの神と云ふわいな。

皆々　ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト右の文句殘らず立つて踊る。喜三次ばかり莨のんで居る。稻木、モヂ〳〵して居る。兵馬、八助、踊らせいと仕方する。

新八　サア、稻木さん、お前も立つて踊りなされい。

稻木　どうぞわたしばかりは、堪忍して下さんせいな。

新八　堪忍せいも虫のいゝ。座敷持ちの竹川さんでも、あの通り嫌とは云はさぬ里の慣ひ。えゝ踊らすば敎へて上げよう。

ト稻木を無理に引立て、後より兩手を持ち添へ

ヨイ〳〵ヨイヤサ。

ト振りをさせる。

〽朝々の噂を聞けば、惚れた客衆に夜かみ慕うて、憎い烏が忙しなう、啼いて別れて明日の夜を、待てば辛氣な賴みなや、晴れぬ心が聞かしたや。

ト始終この文句を繰り返し、これに合せて、次郎吉始め女形皆々、くる〳〵と廻りながら踊つて居る。新八、稻木を踊らせ、文句の切れにて、稻木を兵馬の方へ突き飛ばす。稻木、バツタリとこける。兵馬、また引立て踊らせ、文句の切れにて

皆々　ヨイ〳〵ヨヤサ。

ト突き飛ばす。八助、また稻木を引立て、前の通り踊らせ、好き所にて

皆々　ヨイ〳〵ヨヤサ。

ト突き飛ばす。稻木が懷中より紙包みの饅頭バラ〳〵と落ちる。稻木、ハツと驚ろき取らうとする。兵馬、稻木を引退け

兵馬　待て〳〵。花魁の懷から、饅頭が落つこちた。

皆々　ヤア。

新八　これは又、外聞の惡い。誰れが落しました。

兵馬　花魁の懷から落ちたのサ。

八助　なにサ、そこに居さつしやる、値の高い花魁の事

よ。

新八　エヽ、稲木さんでござりますかえ。これは又、稲木さん、どうしたものでござります。お前、外聞と云ふ事を知らずでござりまするか。

兵馬　新八、さう云やるな。こりやアてつきり、お茶を引いた時、欠伸の口へ、ひよいと投げ込む欠伸薬でがなあらう。

八助　左やう〳〵、その口へ投げ込んだ時、誰れぞ外から物を云ふと、ちやつと例の物を兩方の頰へ隱して、猿と云ふ面で、なんでおすえ、オヤ馬鹿らしいも氣が強いぢやァござりませぬか。

新八　イヤサ、瘡はかいても恥をかゝねえ、その御誓願でござりまする。

兵馬　ハヽヽヽ。

ト此うち、稲木、赤面して差俯向き居る。喜三次、こなしあつて、矢張り莨のんで居る。立役女形殘らず、氣の毒なるこなし。竹川、思ひ入れあつて、稲木が側へ寄り

竹川　ほんに、こりや可愛らしいおまんでござんす。わたしにも一つ下さんせい。コレ〳〵、みどり、其方にも一つ貰うてやる程に、そこで食べやいの。

ト饅頭をやる。みどり、手に持ち、モヂ〳〵して居る。

竹川　コレイナウ、なぜ其方は食べやらぬ。エヽ、こりや何か、爰で食べるが恥かしいに依つて、それで、えゝ食べやらぬのか。初心らしい。さう云ふ心では、なんとして好い女郎衆にやえゝなりやせまい。わしは又、このおまんが大抵好きぢやござんせぬ。どうぞわたしに下さんせえ。

つる　ほんに、竹川さんが好きぢや仰しやるとは、わたしもおまんが好きでござんす。一つお貰ひ申しておくれいなア。

まさ　お前よりわたしが好きでござんす。一つお貰ひ申しておくれいなア。

千野　なんと云はしやんす。お前方もおまんが好きでござんすかえ。そんなら一つ貰うて上げよう。殘りはみんなわたしが貰ふぞえ。

ト饅頭を取上げる。稲木、その手をヂッと取り

稲木　憂き川竹の苦界の身と、つい一口に云ひなせど、皆それ〴〵の位あつて、太夫は太夫の心入れ、下を憐れむ

心の高さ、竹川さんの御深切、この場をくるめて下さんすお志し、嬉しうござんす。それに連れて皆さんまでわたしに恥を掻かせまいと、いろ〳〵との情のお詞。さらさら仇には思ひませぬ。忝ならござんすわいなア。

ト泣く。皆々こなし。

まさ　なんのマア、さう云ふ譯ではござんせぬ。わたしらも好きぢやに依つて、それで下さんせと云うたのでござんす。

竹川　さうでござんすとも。一體稲木さんは、大抵内證のお子達を、可愛がつてぢやござんせん。それで、このおまんも、内證のお子にしなさんすのでござんせうなア。

まさ　ほんに、さうでござんせうわいなア。

稲木　イヽエ、そりやお盛り物でござんす。

竹川　なんと云はしやんす。

稲木　今宵はお果て遊ばした、親旦那様の一周忌のお逮夜。

竹川　ほんにさうでござんす。思へば丁度去年の今月。ようマア奇特に心が付きましたなア。

稲木　なんのいなア。どうぞ香花の手向けもと、心に思へど儘ならぬ、局女郎の淺ましい、鏡の上に戒名を、入れて朝夕身じまひの、その度々に御回向を、申すがせめてこの世から、あの世にござる御主人へ、心ばかりの宮仕へ、手向けの花は上げもせず、紅白粉に粧うて、花を飾ると云ふ名ばかり、手向けの水はやう〳〵と、嗽ひ茶碗の化粧の水。夜見世の鈴に驚いて、僅に照らす御燈火は、角行燈の相合に、鏡持つ手の手暗がり。さながら珠數も持たれねば、心の内の念佛に、合せど合はぬ清掻の、音色の戀に引替へて、これは無情の水てうし、流れを人の身の上の、味氣ない今の苦勞。皆さん、推量なされて下さんせいなア。

ト泣く。竹川も泣いて居る。皆々こなし。喜三次、始終思ひ入れあつて

喜三　世の中の人には添うて見よ、馬には乘つたと云ふでもない。はるか下様の武家奉公、いたせし者の女房と相見える。定めしその身を苦界に沈めしは、主人夫の路用の爲。イヤサ、路用の餘計もあらば、身請けいたしてくれたいものなれど、何を申すも主命に依つて、當所太神宮へ代參の某なれば心に任せぬ。さほど實心ある者を、なぜ女には生れた事。そもじが男の身であらば、よい侍ひにもなるべきもの。ハテ、惜しいものを……落して來

たなア。ハヽヽヽ。兵馬どのには、さぞ御退屈でござらう、座敷を替へて飲み直し申さう。

兵馬　イヤモウ、折角飲んだ酒が、どこへやら消えてしまひました。怪しからぬ御一座を致す事ではある。

八助　コリヤ〳〵、藝者ども、わいらも共々、泣き面をせずと洒落ねえか。

伊八　イヤモウ、なんぼ商賣盡くでも、稲木さんのお話しを聞いては、さつぱりと洒落る心はござりませぬ。私しども、精出して、稲木さんの身請けの手傳ひなど致したうござりまする。

八助　大べら坊め、云へば云ふ程座が滅入つて、なる事ぢやねえ。新八、早く座敷を替へねえか。

新八　畏まりました。サア、皆さん、これから下の大座敷に致しませう。

喜三　サア、稲木とやら、こなたには話しもある。氣を取り直して一つ飲んで、苦を忘るもよからうぞや。

稲木　竹川さん、お前まで泣いて居ずと、マア、座敷へ行かしやんせいなア。

竹川　そんなら、稲木さん。

稲木　アイマア、先へ行て下さんせいな。

竹川　待つて居るぞえ。

喜三　イザ、兵馬どの。

兵馬　御一緒に參らう。

皆々　サア、お出でなされませ。

ト騒ぎになり、この一件、殘らず奥へ入る。稲木、一人殘る。あと合ひ方。

稲木　ほんに、浮世の人の心はさま〳〵ぢやなア。意地の惡い人もたんとあれど、今宵見えたあのお客人、馴染でもない者に、いろ〳〵と情らしいお詞。これを思へば、却つて色氣のないがましかいな。とは云ふものの、つくづく我が身を思うて見れば、五つの年に不具となり、人交はりさへならぬこの身を、女房に持つて下さんした、夫大八どゝの深切。嫁入りしてから今日が日まで、面倒見て下さんしたは、丁度七年。ところに去年の秋、御主人甚太夫さまには、都に於て千原十左衛門にお討たれ遊ばし、その事お國へ知らすと其まゝ、奥様には直ぐに泣き死。やう〳〵敵討の願ひ叶うて、御子息甚七さま御出立の折柄、夫大八どの、敵討のお供叶ひ、せめて路用の足しにもと、あのお袖さんと云ひ、不具なこの身をやうやうと、僅かな價に沈めしも、お主へ立つる忠節と、夫

を思ふ女の道、立つて身賣りはしたれども、さぞ人さんの噂にも、あんな不具で勤めするとは、厚かましい女郎ぢやと、笑ひ誹りはいとはねど、長の年月大八どのが、男に生れた器量もない、不具を女房に持つて居ると、人に誹られ笑はれて、居さんしたであらうと思へば、今更ながら夫の手前、面目ないやら恥かしいやら、どうマア顏が合されう。大八どの、堪忍して下さんせ。料簡して下さんせいなア。

ト大泣き。此せりふのうち、竹川、出かけ

竹川　おさくさん、まだ爰に居やしやんすかいなア。そしてお前は、また泣いて居やしやんすかいなア。

稻木　サイナア、今も今とて腑甲斐ない、不具なこの身をつく〴〵と、思ひ廻して、それで泣いて居たわいなア。

竹川　ほんにお前にも似合はぬ、愚痴な事ばつかり。モウモウ、そんな事は思はずとも、氣を取り直して、お前に見せる物がござんわいなア。

稻木　わたしに見せる物とはえ。

竹川　アイ、これでござんす。

ト最前飛脚の持つて來た手紙を出し

最前飛脚が持つて來たわいなア。

ト渡す。稻木、取つて

稻木　「勢州古市千束屋御内竹川どのへ、浮島内にて御存じ、道中桑名宿より」……こりや夫大八どのから來た文ではござんせぬかえ。

竹川　サア、さうでござんす。早う見たうは思うたけれど最前からの仕儀ぢやに依つて、間がなかつた。サア〳〵早う讀んで見やしやんせいなア。

稻木　アイ、そんなら。

トあたりを見廻し、兩人して軒の燈籠を殘らず消して廻り、一つ殘して、竹川、持つて出る。稻木、封を切り

「わざ〳〵途中ながら一筆しめし參らせ候ふ、いよ〳〵その地二人とも無事に暮らす事やと案じ參らせ候ふ、我れら事當夏より、北國邊を相尋ね、若旦那には先頃江戸表へ出府なされ、我れら事能登海道を罷り下り、今夕桑名に一宿いたし候ふまゝ、久々にて無事を尋ね、其方にても手がゝりの筋もこれあり候はゞ、早速江戸淺草伊豫屋治兵衞方まで書狀お出し下さるべく候ふ、其うち天運に叶ひ、此方本意を遂げ候はゞ、その沙汰日本に隱れあるまじく、互ひの吉左右待つまでに候ふ。」

竹川　そんなら兄さんは、江戸の方へ行かしやんすかいなア。
稲木　御主人甚七さまと云ひ、それに繋がる夫まで、一歳餘りの憂き苦勞。定めし路用の貯へも、御不自由であらうわいの。
竹川　ほんに、この身が儘ならば、帶紐解いて金調へ、せめてお主や兄さんの、御苦勞を助けうもの。
稲木　あるに甲斐ない不具の身の上。
竹川　おさくさん。
稲木　思へば金が
兩人　欲しいなア。
ト こなし。この前より、喜三次、奥より出かけ聞いて居る。
喜三　その金貸してくれう。
稲木　あなたは今宵のお客さん。
竹川　金をわたしに遣らうとはえ。
喜三　この紙入れこそ身が請合つた、五十兩の質物。
兩人　そんならこれが。
喜三　おてまへの夜具の代金。明けて云はねど紙入れの、内や床しき。
兩人　エヽ。
喜三　イヤサ、今宵某をもてなしの、鸚鵡返しのその一品。それとは云はぬ色酒に、醉うて我れらは醉うたわい。
ト 障子を締める。このキッカケに唄になり、兩人思ひ入れあつて
稲木　様子ありげなこの紙入れ。
竹川　マア、明けて見やしやんせいな。
ト 稲木、明けにかゝる。奥より、千野出て
ちの　竹川さん、下の座敷は藝者衆ばつかりで、客人がやかましう云うてぢやござんせん。ちよつと顔出して下さんせいなア。
稲木　さう云ふ事なら、お前は先へ行て下さんせ。こりやわたしが受取つて、とつくりと見て置かうわいな。
竹川　そんなら、稲木さん。
ちの　サア、ござんせいなア。
ト 唄になり、竹川、千野、付き添つて奥へ入る。稲木、殘る。
稲木　この紙入れは、兵馬とやらの紙入れとある。何にもせよ、これには様子が。

ト紙入れを明ける。內より一包み出る。

阿州御家中富岡玄蕃さまへ、奥州信田家宮本丹下より…

…この宮本丹下と云ふ人は、聞き及んだお國の家中。もしや敵の

トあたりを窺ひ、封押切り

「先達て御通達の通り、千原十左衞門儀、いよ〳〵御家中にありつかれる由。」

ト讀みさし。

さてこそ敵の手がゝり。

トこの時、兵馬、出る。

兵馬　その一通は、正しく身共が。

トこれにて、稻木、惆り。件の提灯の火を吹き消し、ソロ〳〵逃げようとする。兵馬、探り寄つて、しつかと捉へ

兵馬　待て、女め。その一通、此方へ渡せ。

稻木　ムウ、そんならこの一通は、お前のでござんすかえ。

兵馬　知れた事だワ。

稻木　さう聞いては猶以て、返すまいわいなア。

兵馬　ナニ、その一通を返すまいとは。

稻木　ちつと此方に入用のこの一通。殘らず讀んでしまふまで、滅多に返してよいものかいなア。

兵馬　大切なるその一通。滅多に渡して詰まるものか。此方へ渡せ。

稻木　イヽヤ、ならぬ。

兵馬　イヽヤ、渡せ。

稻木　ならぬ。

兵馬　面倒な。

ト立廻りになる。よき所へ、八助、走り出て、稻木へ取つてかゝる。この立廻りのうち、稻木、兵馬が脇差を拔き、ヒラリと見せる。これにて、兩人、惆りしてひろむ。この隙に、稻木、一通を持つて逃げて入る。これを知らずに兩人探り寄つて

兵馬　八助か。

八助　お旦那。

兵馬　すりや、女めは。

八助　逃げ失せました。

兵馬　南無三、來やれ。

ト兩人追ひかけて奥へ入る。始終右の鳴り物、この時奥より

大勢　喧嘩だ〱。

ト次郎吉、おまき、おつる、宮川、みどり、もみぢ、その外若い衆、思ひ付きの仕出し、方々より走り出て來り、東西の花道へ逃げて入る。この模樣、暫くあつて、好き程にチョン〱にて、この道具左右へ引いて取る。破風を引上げ、東西の柱、ヂリ〱とセリ上がる。

本舞臺、六間の間、一面の中庭、いろ〱の樹木を据ゑ、好き所に、振り好き松の立ち木、この枝に誂らへの燈籠吊しあり、舞臺前、下の方に、井戸。奥深く飛石のあしらひ、正面を折り廻し、九尺の屋體組み、本椽付き、手水鉢、手拭かけ、誂らへの駒下駄直しあり、爰に、稻木、件の密書を口に啣へ、拔刀にて椽側に立ち、兵馬、八助、双方別れて見得。この模樣、鳴り物、バタ〱にて、道具一面に押し出す。

兵馬　サア、不具め、その一通を渡すまいか、

八助　渡さずば命がないぞ。

稻木　例へこの身は殺されても、敵の手がゝり證據の一通滅多に渡してよいものか。

兵馬　さう吐かしやア、ぶち殺しても取返す、覺悟ひろげ。

八助　サア、

稻木　サア、

兩人　サア〱、

ト双方取りにかゝる、稻木、切り拂ひ、ちよつと立廻り、稻木、双方へ目を配りながら立廻りにて、兵馬へ庭下駄を片し打ちつけ、片し取上げ、片足に穿き、手拭を引裂き、これにて、下駄を結び付け、一通を懷中して

稻木　サア、これからは千人力、ならば手柄に、取返して見やしんせ。

トすつと立ち身、これをキッカケに誂らへの鳴り物にて、新八、加はり、三人を相手に大タテ、いろ〱あり、好き程に、兵馬、一通を引出し、逃げ出す、稻木それを取りにかゝる。この一通段々に虎の子渡しになり、八助、一通を持つて逃げ出す、この時、喜三次、出合ひ頭に立廻り、一通を引ッたくり、ポンと切り倒す。稻木、兵馬を切り倒し、懷中へ手を差込み

稲木　こでや、今の一通は。

喜三　敵の手がゝり。手に入つたぞ。

稲木　あなたは今宵のお客様、

喜三　推量に違はず、浮島家の家來、大八が女房、忠節の程見届けた、某こそ甚太夫どのへ由縁のある、象潟喜三次。

稲木　すりや、奥様の弟御の

喜三　コリヤ、何も云ふな、敵の手がゝり。

ト一通を投げ付ける。

兵八　その一通を、

ト兩方より、稲木、喜三次にかゝる。立廻りにて

兩人　敵の荷擔人、

ト双方見事に切り倒す、この時、竹川、走り出て

竹川　エヽ、そんなら人殺しは、おさくさん、

ト云ふな

喜三　コリヤ。

ト押へる。

新八　うぬ、人殺し。

ト稲木へかゝる、ポンと切る。仕掛けにて、新八の首井桁へシヤンと載る。喜三次、吊り燈籠を切つて落す

双方一時の見得よろしく。　　　　　　幕

五幕目

鳴立澤の場

花水橋の場

役名——薩島傳藏、山伏、奇妙院、飛脚、郷助。小道具屋、善右衛門。甚太夫妾、おるい。浮島下部大八。同、大助。浮島甚七郎、

本舞臺、正面、藁葺きの二重、竹縁、石摺りの腰貼り、眞中に納戸口、更紗の暖簾を掛け、上の方少し後へ寄せて、一間の障子屋體、この前通り萩の生垣、これに夕顔からみ、廂へかけて一面に夕顔咲いて居る。よき所に好みの手水鉢、下草見合ひ、下の方同じく生垣、いつもの所に枝折り戸、すべて鳴立澤閑居の體裁におるい、風雅なる好みの形、駒下駄にて木鋏を持ち、生垣を作つて居る。大八、木綿やつしの形にて、二重舞臺に浴衣を莫蓙に包み、これを踏んで居る。この見得、靜かなる唄にて幕明く。

大八　モシ、おるいさま、私しが手が明きますれば、さつぱりと作り上げまする。お前のお手で下ろさるゝには及びませぬ程に、さうなされてお置きなされませ。

るい　サイナウ、賤が伏屋の軒の妻、主は誰れとも夕顔の思ひ作らふ生垣も、矢ッ張りこれが樂しみぢやわいなう。そして、見ればそりやマア、なんぢやぞいなう。

大八　これは餘りお浴衣がしをれてゆゑ、洗濯を致して、十文が糊を附けましたれば、なんの事はない、上下のやうに、しやき張り返つて居りますゆゑ、霧を吹いて引きのしを致すのでござりまする。

るい　ほんに、何から何まで氣を附けて、男手業に洗ひ濯ぎ。いかい辛苦をしやるなう。

大八　御勿體ないお詞でござりまする。お前樣こそ御存じござりますまいが、親太右衞門より御恩を受けしお主樣のお爲、洗ひ濯ぎはまだな事、飯炊き用人使ひ番、また或る時はお風呂の加減、違はぬやうに女房ども〻、下郎めが二人前の御奉公。イヤモウ、どうしてなりとも斯うしてなりとも、敵の行くへを尋ね出し、御本望遂げさしまし、めでたう御歸國遊ばさるゝやうにと、明け暮れ神佛を祈り居りまする。併し、お案じなされまするな。あなたの御貞節、甚七さまの御孝心、神佛も受納あつて、やわか知れぬと申す儀はござりますまい。お心強う思し召しませ。

るい　成る程、云はしやんす通り、朝夕神佛へお願ひ申すも、生さぬ仲の甚七どの始め、其方の身の上、我が身の息災、二つには敵十左衞門が、無事に暮らして居るやうにと、お願ひ申して居るわいの。

大八　イヤモウ、それが肝心でござりまする……イヤ、肝心と申せば、彼れこれもう七ッでござりませう。そろそろと、お役目におかゝりなされませぬか。

るい　それ〳〵、黄昏までは大事の勤め。ドリヤ、身拵へして、お客を待たうわいの。

大八　ドリヤ、私しも釜の下でも焚きつけませうか。

ト唄になり、大八、洗濯物を抱へ、奥へ入る。おるい殘り、鏡臺を出して、髪をかきつける。向うより奇妙院、發端の山伏にて、小風呂敷を脊負ひ、輪袈裟を掛け、草鞋にて、法螺貝を持ち出で來り、門口へ來て

奇妙　當日は寅の日毘沙門天、御信仰には。

ト口から出次第な事を云ひながら、貝を吹き立てる。

るい　いま手が寒がつて居る程に、通つて下さんせいな。

トこれに構はず、矢張り貝を吹き立てる。

エヽ、聞分けのない山伏どのぢや。通りや〳〵。

ト呟きながら、鏡臺を片附ける。

奇妙　通れなら通りませう。

ト內へ入り

モシ、報謝宿をさつしやるは、これかな。

ろい　イエ、此方ではござんせぬわいなア。

奇妙　ハテナ、この鴫立澤で、旅籠屋仲間を離れてのぐれ宿、しかも夕顏の咲いて居る內ぢやと聞いたが。

ト方々見廻し

なんでも爰ぢや〳〵。

トこなし。腰をかける。

ろい　ナンノイナア、此方は旅籠屋ではござんせぬ。尤も行き暮れて、御難儀なさるお方が、お賴みなされば、お泊め申す事もあれど。

奇妙　そんなら、わしも行き暮れた。なんと今宵一夜泊めては下さるまいか。

ろい　そりやモウ、易い事ではござんすが、修行者衆は氣の毒ながら

奇妙　泊められぬか。ハテ、困つたものだわえ。そんならちつと、爰を貸して下さりませ。一服のんで參りませう。

ト腰をかけ、煙草のみ〳〵、おろいに見惚れるこなし。

ろい　コレ、山伏どの、こなさんは、どこまでござんすのか知らぬが、もう日が暮れるぞえ。

ト早く歸したきこなし。

奇妙　イヤ、日が暮れうが夜が明けうが、大事ないのサ。どうで今夜は野宿と安心極めたから、ゆるりと休んで行きませう。

ろい　お前、滅相な。この邊で野宿がなるものかいな。

奇妙　そりや、なぜえ。

ろい　お前は知らしやんすまいが、この邊は狼が澤山なその上に追剝が出るでな。

ト何がな嚇して、歸したき思ひ入れ。

奇妙　それはよい事を聞きましたわえ。願ふに幸ひぢや。わしは斯う見えても、誠は武者修行の者でござる。

ろい　エヽ、アノ、お前が。

奇妙　人の難儀いたすを、聞捨てにはなりませぬ。猪でも狼でも、愚僧が退治して進ぜませう。それはマア、ど

こへ出ますな。
　トこれを聞き、おろい、奇妙院に目を附ける。
ろい　ムウ、武者修行と云はしやんすからは、そんならお
　前は。
奇妙　さう思はれて、のり地を語るではないが、義經奥州
　下りに倣つて、斯く山伏と姿をやつし、國々を經巡りま
　する。ハテ、世に怖いものもないものでござる。
　ト仔細らしく云ふ。
ろい　成る程、さう云はしやんすりや。
　ト奇妙院に目を附け
　只の山伏どのとも見えず、武者修行と仰しやるは……見
　苦しけれど大事なくば、お泊りなさんせいなア。
奇妙　そんなら泊めて下さるか。
ろい　お泊め申しませいではいなア。
奇妙　それは忝ない。爰の内では侍ひが好きぢやと云ふ
　事は、兼ねて聞き及んだで、これから又、今宵お禮に、
　わしが手柄を致した、強いお話しを致さう。
ろい　それは後に、ゆるりと承りませう。マア〱、足
　でもお洗ひなさんせいなア。
　ト急に慇懃に云ふ。

奇妙　そんなら、お世話になりませうか。
　ト草鞋を解く。
ろい　コレ〱、お泊りがあるよ。
大八　アイ〱。
　ト盥を持つて出る。
　これはお客様、ようお泊りなされました。
　ト盥を出しながら、奇妙院を見て
　モシ、お客と云ふは、この山伏どのかえ。
　ト不承知のこなし。
ろい　サア、武者修行のお方ぢやといなう。
大八　へゝ、あなたかえ。エゝ、ようお泊りなされまし
　たなア。
奇妙　コリヤ〱、若者、推參な。山伏ぢやと思うて、麁
　末に致すな。武者修行者だぞ。
大八　ハイ〱、畏まりました。海道筋の本旅籠屋と違ひ
　マア、お宿いたしませず、お風呂も立て、お脊も流し、
　足の草臥れ按摩鍼、お酒のお相手、お膳の給仕、武者修
　行と仰しやるからは、闘の組打ち死活の法、生かす殺す
　のお相手に、、手前の主、何から何まで念入つて、その
　上旅籠も此方から、お客へ拂ふがしにせの旅籠屋。鳴立

澤の灣り江に、棲めば都の下り上り、お泊りなされて御損のない、お宿元への話しの種。なんと新手な旅籠屋でござりませうが。

奇妙　でも、よく廻る。口のよい事盡し。その上に旅籠代も此方へ勘定して、闇の組打ち死活の法の相手は、あの御亭主とは、これがほんの、牡丹餅で叩かれるのだ。

ろい　サア／＼、こちらへお出でなさんせいなア。

奇妙　冷え物でござい。御免なされ。

トおろいが脇へ坐る。おろい、大八に奥へ行けと云ふこなし、大八、呑み込み、そこらを片附ける振りにて暖簾口へ入る。おろい、こなしあつて、奇妙院の側へにじり寄り

ろい　お前、先に仰しやるには、野宿したの、武者修行だのと仰しやつたが、定めしこれまで、怖い事にもお會ひなさんしたであらうな。

奇妙　會つた段か。先づみこし入道、一つ目小僧、また或る時は幽靈。

ト嚇かすやうに云ふ。

ろい　オヽ、氣味の悪い。

ト奇妙院の側へにじり寄る。奇妙院、思はず嬉しきこなし。

奇妙　占めたぞ／＼。

ろい　ムウ、占めたと仰しやるは、その化け物を、みんな退治なさんしたかえ。

奇妙　サア、わしが大概退治してしまうたから、今では箱根からあつちにも、化け物は切れ物でござるて。

ろい　それはマア、きついお手柄でござんすな。

奇妙　これからは又、外の物を、ちつと退治せねばならぬて。

トおろいが手を取つて引き寄せる。

ろい　ア、モシ。

ト聲が大きいと云ふこなしあつて、奥へ心遣ひして、硯を引き寄せ、書いて見せる。奇妙院、これを見て

奇妙　なんぢや、わたしやお前がいとしいけれど、お前の心が知れぬに依つて。

ト小聲にて讀み

ハテサテ、なんの知れぬ事があるぞいの。エヽ、竹なら割つて見せたいわえ／＼。

ろい　ア、コレ、又かいな。

ト書いて見せる。

奇妙　なんぢや。大きい聲で云ふと、奥へ聞えるわいな。
……呑み込んだ〳〵。

ト奇妙院、筆を取り、書いて見せろ。おろい、先達て手に入りし肩衣と引合せ見ろ。奇妙院、これを知らず

なんと、この通りぢやが、どうだな〳〵。

トしなだろゝ。おろい、右の肩衣と同筆でないと云ふこなし。

ろい　こりやコレ、似ても似つかぬ。
奇妙　何とぞ致したかな。

トおろい、こなし。

ろい　イヤサ、なんでも似つかぬお前の心。嘘ぢやと云ふ事いな。

ト大八に聞かす心にて云ひ、奇妙院が書いたる紙を丸めて抛ろ。大八、出かけて呑み込むこなし。

奇妙　ハテ、きめ細かに疑ふ人ぢや。それで心が解けずば寐てとつくりと話しませう。

トひつたりと抱きつく。大八、ツカ〳〵と出て、奇妙院を引き退け

大八　間男見附けた。

ト眞中へ坐ろ。奇妙院、悧りして

奇妙　ヤア、間男とは。

トぶろ〳〵顫へろ。

大八　うぬ、主のある女を捉へて、大それた事をひろいだ。
奇妙　ヤア、そんなら、あの女には。
大八　オヽ、その主と云ふは、おれだ。
奇妙　ヤア。
大八　武者修行もすさまじい。キリ〳〵うしやアがれ。
奇妙　そんなら、もう泊める事はならぬか。
大八　知れた事だ。キリ〳〵出てうしやアがれ。

ト首筋を取つて、表へ抛り出す。奇妙院、腰を抱へ、やう〳〵起き上がり

奇妙　酷ひ目に合せ居つたなア。如何に旅籠屋の戀ぢやと云うて、とめてとまらぬ色の道とは、ハテ、よく云つたせうがにやア。

トしを〳〵と花道へ入ろ。

ろい　なんとマア、をかしい山伏ぢやないかいなア。
大八　イヤ、初めから役に立たぬ奴と存じましたて。
ろい　それでも山伏姿とやつし、誠は武者修行ぢやと云う

たに依つて。

大八　さう云ふお目利では埒が明きませぬ。私しがちつとお代り申しませう。

ろい　そんなら、わしもその間、甚七どのへの文を認めようわいの。

大八　左様がようござりまする。

ろい　そんなら大八、氣を附けてたも。

大八　畏まりました。

ト唄になり、おろい、奥へ入る。

ドリヤ、おれも立ち番と出ようか。

ト表の柱に凭れかゝる。この唄をかりて、向うより郷助、旗持ちの拵らへ。股引、三尺、手拭、三度笠をかむり、スタ／＼出て來る。大八、これを見て、花道へ出迎ひ

お侍ひ様、お泊りならお宿いたしませう。

ト郷助、大八を見て、こなしあつて、笠傾け

郷助　爰は所も名にし負ふ、鴫立澤の秋の暮れ、心なき身も哀れを知り、宿をせんとは面白い。

大八　お泊りならば、サア／＼、入らつしやりませ。

郷助　イヤ待て。この海道は物騒と、聞いて合點の一人旅得こそはかさじ、出直せ／＼。

ト大八、おれではゆかぬと云ふこなしにて、納戸へ向ひ

大八　モシ／＼。

ト呼ぶ。これにておろい、出て來る。

ろい　なんぢやぞいなう。

ト郷助、おろいを見て、見惚れて居る。此うち、おろいに出て泊めろと仕方する。おろい、大八に泊りかと仕方する。大八、おろいを無理に表へ出す。郷助を見て、會釋して

ろい　お侍ひ様、人里遠き離れ家に、女子主のわたし一人、せめて一夜の心便り、大事なくば、お泊りなされて下さりませ。

ト郷助、これにて和らぎしこなしにて

郷助　さてはそもじが、この家の主とな。

ろい　アイ、左様でござりますわいなア。女子一人のこの宿、どうぞお力になつて下さんせいなア。

トおろい、振りをする。

郷助　すりや、身共に一宿いたし、力になつてくれいとな。

ろい　不束なわたしゆゑ、お心に入らぬかは存じませねど。
　トこなし。
鄕助　ア、コレ、時つけ同然な急ぎの用事なれども、ア、儘よ。難儀を見捨て行くも、武士の本意を背く道理。然らばそれへ參る。
　トずつと內へ入る。大八はこれにて、ソツと奧へ入る鄕助、あたりを見廻し、大八も居ぬゆゑ、グニヤ〳〵となり
鄕助　ア、女中、ちと拙者、其許へお賴みがござる。
ろい　ハイ、お賴みとは、どのやうな事でござりますえ。
鄕助　餘り早急にござるゆゑ、近頃申し兼ねてござる。
ろい　アノマア、仰しやる事わいなア。斯うお宿いたしますからは、御遠慮はござりませぬ。なんなりと仰しやりませいなア。
鄕助　イヤ、小ツ恥かしい事ながら、身共、生れついて近づかへでござるゆゑ、何とやら。
　トうぢ〳〵云ふ。
ろい　エ、、なんでござりまするかえ。夕飯があがりたいと仰しやりますかえ。

鄕助　マア、そこらあたりの事でござるて。
ろい　左樣なら、ツイ拵らへて上げませうに、はんに御遠慮深いお方ぢやわいなア。
鄕助　ア、コレ〳〵、その食べたいと申しまするは、身共ではござらぬて。
　トおろい、あたりを見て
ろい　そりや、どなたでござりまするえ。
鄕助　イヤ、身共が悴でござるて。
ろい　エ、。
　ト合點のゆかぬこなし。
鄕助　面目ないが悴めが、最前より食べたがつて〳〵せがみ居りまする。どうぞお茶漬なりと。
　ト抱きつく。おろい、こなしあつて
ろい　サ、、そりやどうなりと致しますけれど、まだマア日も暮れぬうちから。
鄕助　イヤ〳〵、元來悴は食べたがりまするゆゑ、ついチヨコ〳〵と。
　ト抱きつく。
ろい　そりやあなた、あんまり浮氣にござりまする。お前のお心さへ見たならば、今でもしつぽり寐ますわいな

ア。
郷助　イヤモウ、その一言で猶以て、堪えられぬ。サア、何なりとお心の濟むやうに、致さう〳〵。
るい　そのお心なら、誓紙を書いて下さんせ。
郷助　イヤモウ、何なりとも、書きます〳〵。
トはずみ切つたるこなし。おるい、此うち硯を引き寄せ
るい　サア、一筆書いて下さりませ。
郷助　書け〳〵と云はつしやるは、何事かと存じたら、筆取る事でござるか……して、なんと書きませうな。
トおるい、郷助に凭れながら
るい　一つ、其方とのと夫婦の契約いたし候ふところ實正なり。
ト書く。
もしこの事違へ候はゞ、六十餘州の神々の、お罰を蒙むり申すべく候ふ、依つて起證文件の如し。
ト仰せ書きに書かせる。此うち一つ〳〵、おるい、凭れながら肩衣に引合せ見る。こなたに大八、出かゝり聞いて居る。
こりや、雪に烏の風情ぢやなア。

ト大八に掛けて云ふ。大八、呑み込むこなし。郷助、有頂天になつて
郷助　それでよくば、もう寐よう〳〵。
ト引き寄せる。大八、ツカ〳〵と寄つて、郷助を引き退け、突き飛ばし
大八　間男見附けた。
郷助　ヤア、わりや、あの女性の定まる夫か。
大八　知れた事だ。
郷助　道理こそ、うま過ぎたと思つた。
大八　うぬ、よくも〳〵主ある女を捉へて、その面でちよちよけまちよけを。
郷助　イヤ、まだ仕らぬて。
大八　仕つてつまるものか。キリ〳〵出てうしやアがれ。
ト表へ抛り出す。やう〳〵起き上がつて
郷助　コリヤ、若いの、その面とはあんまりぢやがな。彼の鉢の木の文句にも、どうやら時のはすみでは、鼻そげでも猪口でも、油斷がならぬと書いたでないか。ア、、此やうな事を云つて聞かしても馬の耳へ經、なんの役に立たぬ事ぢや。シタガ、後のへるものではなし。
ト恨めしさうに、大八を見る。

大八　エヽ、面倒な。キリ〳〵うせずば、お定まりの七兩二分、ふんだくるぞよ。

鄕助　ヤア、なんと云ふ。爰でも七兩二分か。ハテ、爰は片田舍だから、ちつとは相場が狂ひさうなものだが、いづくの浦でも七兩二分ぢやよなア。

大八　やかましい。首代は料簡してやる程に、キリ〳〵うしやアがれ。

鄕助　ハイ〳〵、うせます〳〵。ア、コレ、金ならたつた七兩二分で、可愛い女子を見遁がして戻るのか。エヽ、金が欲しいなア。

大八　エヽ、まだうしやアがらないか。重ねて置いて四つにせうか。

鄕助　サア、それは。

大八　どうだ。

鄕助　この返答に行きくれて佇み……

ト迭りを語りながら向うへ入ろ。合ひ方。

大八　なんと御覽なされませ。人品骨柄まんざらでもない、大概注文の合うた侍ひと存じ、引入れますれば、イヤハヤ、取り所もない、呆れた奴でござりまする。

ろい　さればいなう、あられもない留め女かなんぞのやうに、日毎々々に身嗜なみ。夕日になれば門に立ち、年頃恰好似合ひの人と見れば、滅多にお宿を致しませうと、濡れから仕掛けてじやらくらと、心に思はぬ戯むれも、起證誓紙に筆を取らせ、いつぞや其方が渡したる、この肩衣を引き合せ、少しも手蹟が似たならば、それから取り入り刀の詮議。敵の手筋を求めんと、これ程心を盡せども、今に敵の手寄らねば、また所を變へて詮議せねばならぬわいの。

大八　イヤサマ、この所へ參りましても、早三ケ月參り、思案し變へずばなりますまい……イヤ、先刻受取り置きました、甚七さまよりの御書翰。とんと失念いたしました。イザ、御披見なされませう。

ト懷中より一通を出して渡す。おろい、披き見て

ろい　ナニ〳〵「彼の者追ひ〳〵承り合せ候ふところ、いよ〳〵其あたりを徘徊いたし候ふ由承り及び候ふ、我れ等も支度いたし、明日その地へ罷り越し申し候ふ、必らず〳〵御油斷あるまじく候ふ」……すりや、矢ツ張り此あたりを。

大八　それでは矢ツ張り、爰は動かれませぬわいの。

ト暮れ六ツの鐘鳴る。

もう暮れさうにござりまする。
ろい　其方はちよつと行燈をつけてたも。
大八　畏まりました。
　ト行燈を灯し
もう今日は宿りもござりますまい。ドリヤ、お夜食の支度にかゝりませうか。
　ト唄になり、大八、奥へ入る。おろい、殘りこなしあつて
ろい　せめて大八が手助けに、表の締りをして置かうわいなう。
　ト合ひ方、時の鐘。おろい、そこらを片附ける。向うより傳藏、木綿の上ッ張り、手甲、脚絆、草鞋にて、風呂敷包みを脊負ひ、一腰を脊へ筒に仕込み、天蓋をかむり、旅虚無僧の拵らへよろしく出て來りて、花道よき所にて
傳藏　秋雨漸く晴れて、落日西山を望む。秋の日足の心なう、暮れにし爰も鴫立澤、夕淋しき一つ家の、扉を漏るる灯火の、影を賴みの今宵の旅宿。さうだ〳〵。
　ト矢張り合ひ方、時の鐘にて、靜々と舞臺へ來る。
主のお方に物申したい。お賴み申す〳〵。

　ト内にて
ろい　ハイ〳〵、どなたでござりまする。
　ト云ひ〳〵門口へ出て
どなたぢや、此方へお入りなされませいな。
傳藏　イヤ、行き暮れたる旅の梵論字、一夜の宿が御無心申したうござる。
ろい　それはマア、御難儀にござりませう。見苦しうはござりますれど、大事なくば、お泊りなされませいなア。
傳藏　それは近頃忝ない。併しながら、見受けましたるところが、女儀お一人と相見えまする。左樣ござつては御無心申すも何とやら。
ろい　これは又、お堅い事を仰しやりまする。例へ女主ぢやて、假にもあなたは御修行の
傳藏　出家沙門の境に入りしぼろの修行者。
ろい　その笛竹の色香はあれど
傳藏　心は墨の袖をはき
ろい　賤が伏屋の軒漏る月に
傳藏　夢を結ぶも
ろい　他生の御緣。
傳藏　然らばお女中。

ろい　マア、お入りなされませ。

傳藏　御免下されい。

ト内へ入り、天蓋を取る。おろい、傳藏が人相に心をつけ、こなし、いろ〳〵あつて

ろい　お草鞋を解きませうかえ。

傳藏　イヤ〳〵、お構ひ下されな。

ト云ひながら草鞋を解く。

ろい　これは又、御遠慮深い。此やうにお宿申しまするも、大抵の御縁ぢやござりませぬわいなア。

傳藏　イカサマ、ついに見ず知らずの拙者と其許。

ろい　一つ襖の長枕。

傳藏　ヤ。

ろい　イヤサ、長夜の徒然、お伽いたしませうわいなア。

傳藏　それは近頃過分に存ずる。

ろい　そんならあなたは、わたしがお伽申しても、大事ござんせぬかえ。

傳藏　されば、どうでござらうやら。

トぢらすこなし。

ろい　エヽ、ツントモウ、辛氣な事ではあるぞ。

トぢつと寄り添ふこなしある。この時大八、奥より茶臺に茶碗載せ持ち出て、咳拂ひする。おろい、恟りして

誰れかと思うて、恟りしたわいの。

大八　これは御免なされませ。お客樣、お茶をあげませう。

ト傳藏へ茶を差出す。双方顔見合せ

ヤア、あなたは。

傳藏　浮島が下部大八。

大八　傳藏さま。

傳藏　ハテ、變つた所で

大八　お目にかゝりましたなア。

ろい　大八、そんなら、あなたを知つて居やるか。

トこなし。

大八　存じて居る段ではござりませぬ。拙者が古主、甚太夫さまとは同じ御家中、薩島傳藏さまと申すお方でござりまする。

ろい　すりや、あなたが。ハテナウ。

トこなし。

傳藏　甚太夫どのには、計らざる横死を遂げられ、其方とてさぞ愁傷いたしたであらう。して、敵十左衞門が行

くへは相知れたか。
大八　さればでござりまする。いろ〳〵と相尋ねましてござれど、行く〳〵相知れぬゆゑ、若旦那甚七どのにも、他國に於て主取りを致さるゝ存じ寄りにて、我れ〳〵へも長の暇が出ましてござるゆゑ、致し方なく、二度の主人に仕へ居りまするやうにござりまする。
傳藏　ムウ。すりや、二度の主取り致し、當家に居るとな。
大八　左樣でござりまする。
傳藏　ハテ、二度の主取りぢやよなア。
　ト思ひ入れ。
何にもせよ、不思議の宿り。
大八　何はなくとも御酒一獻、差上げたうござりまする。
ろい　ほんに、よう心がつきました。早う出してたもいなう。
大八　畏まりましてござりまする。
　ト德利を振つて見て
南無三、こりや詰まらねえ。
　ト銚子を明け
マア、これをお上げ下されい。ツイ一走り行て參りまする。左樣なら傳藏さま。
傳藏　それは大儀。
ろい　早う戻つてたもや。
大八　畏まりました。
　ト德利を提げて、表へ出ようとして
おるいさま。私しめが參つた後で、何事もなア、お心一ぱい御馳走を。御合點でござりますか。
　ト思ひ入れ。おるいも思ひ入れあつて
ろい　よう合點して居るわいなう。
大八　然らば、おるいさま。
ろい　早う歸りや。
大八　ツイ行て參りまする。
　ト唄になり、思ひ入れあつて、大八、向うへ入る。
ろい　もう大分夜が更けたさうで、冷やかになつて來たわいなア。
　ト云ひ〳〵、銚子、杯を持つて來て
何は無くとも、一つあがらぬかえ。
　ト傳藏が肩へ寄り添ふ。
傳藏　先づ〳〵、御酒は後の事に致さう。
ろい　ハテ、もう誰れに遠慮はござりませぬ。
傳藏　イヤ〳〵、男女席を同じうせずとやら。マア〳〵、

大八が戻りし上にて。

ろい　エヽ、そりやなんの事でござりますぞいな。其やうな事を仰しやらずと、一つあがれいなア。

ト杯を突きつけ、こなし。

傳藏　然らば一つ下されうか。

ト杯を取りあげる。

ろい　わたしが酌でも大事なくば。

傳藏　オトヽ、これは強い酌の。

ろい　お前、御酒を上がらぬかえ。

傳藏　大の下戸サ。

ろい　そんなら、わしが助けて上げるわいの。

トその杯を取り上げる。トその手を押へ

傳藏　おるいどの、天晴れ貞女でござる。

ろい　エヽ。

傳藏　お隠しあるな。兼ねて承り及びたる甚太夫どのゝ思ひ者、おるいどの、斯く色に事寄せ、多くの旅人を引き入れ、敵の手がゝり尋ね問はんとは、天晴れ／＼。

トおるい、こなしあつて

ろい　何を仰しやるやら、わたしやそんな者ではござんせぬわいなア。

傳藏　すりや其許は。

ろい　甚太夫さんとやら、近付きでもないもの。

傳藏　ハテナア。

トこなし。

ろい　よし又、わたしが甚太夫さんに縁があつてからが、手かけとやら、これが本妻と云ふ事なら貞女を立て、敵の行くへ詮議しまいものでもごんざせぬが、高で手かけ妾の遊びもの、いらざる苦勞しようよりも、身の片附きを拵らへるが、當世ぢやござんせぬかいなア。

ト傳藏、こなしあつて

傳藏　イカサマ、こりやそこもあるわえ。

ろい　サア、それぢやに依つて、わたしや誘ふ水あらばでござんすわいなア。

傳藏　誘ふ水もあらば

ろい　おゝやわいなア。

ト傳藏が手をグツと握る。傳藏もこなし。此うち向うより善右衛門、道具屋の拵らへ、袋入りの刀を差し、下駄、傘、小提灯を提げて出て來り、直ぐに門口へ來て

善右　お頼み申しまする。

ト門口を叩く。兩人恟りして

ろい　アイ〳〵。

トこれにて傳藏は、ちやつと上の方を向き、素知らぬ顔にて、煙草をのんで居る。おろい、門口へ出て

誰れでござんすぞいなア。

善右　イヤ、道具屋の善右衛門でござりまする。

ろい　オヽ、ようござんしたなア、サア。此方へ入らしやんせいなア。

善右　左樣なら御免なされませ。

ト内へ入り、よき所に坐り

イヤモシ、早速ながら夜中に參りましたは、兼ねてあなたがお頼みなされました、御註文の合うた代物が出ましたゆゑ、持つて參りましてござりまする。

ろい　それは御苦勞でござんしたなア。

善右　イヤモウ、商賣づくでござりますれば、苦勞にもござりませぬ。マア、代物を御覽じませ。

ト此うち大八、スタ〳〵戻り、門口にて内の樣子を窺うて居る。

どうぞお氣に入ればよいが。

ト袋入りの刀を出す。おろい、取つて刀を出し、とくと見て

ろい　ムウ、鍔は南蠻、縁頭は物數寄した拵らへ、こりや正しく尋ね求める備前長光。

ト傳藏、ギツクリ思ひ入れ。

善右　お氣に入りましたかな。

トおろい、思ひ入れあつて、氣を替へ

ろい　成る程、氣に入りましたが、善右衛門さん、この刀は、どれから出ましたのでござんす。

善右　ハイ、その出所は、さる御浪人でござりまする。

ろい　して、その浪人の名は。

善右　ハイ、その御浪人は。

ト此せりふにて、善右衛門、フト傳藏を見て

ヤア、あなたは。

ト云はうとする。傳藏、顔にて押へる。

サア、その出所は。

トもぢ〳〵する。始終傳藏、顔にて押へる。

アヽ、何とやら申しました。

トこなし。おろいもこなしあつて

ろい　すりや、この浪人の名苗字は。

善右　存じませぬ。承りますれば、その浪人は、これを

賣り拂つて、その金を路用になされて、どつちへやら行かれましてござりまする。

トこれにて傳藏、落ちつくこなし。この時大八、門口をサッと明け、内へ入り

大八　イヽヤ、そんなどちぐちした云ひ譯、この大八は聞いては居ない。サア、刀の出所、眞直ぐに吐かすまいか。

るい　オヽ大八、よい所へ戻つてたもつたなう。

大八　お氣遣ひなされますな。最前からの一部始終、殘らず承りました。元來その刀は、御主人甚太夫さま御最期の場所より紛失、なりや、主人を討つて立退いたる賣り主。もう斯うなつたからには、どこまでも聞かにや置かぬ。サア、浪人の名は十左衞門と云つたか、但し同心の者か。さつぱりと云つてしまへ。

善右　ムウ、すりや、なんと云はつしやる。お前方の御主人を討つて立退いた者が、この刀の持ち主とな。

るい　サア、それぢやに依つて、兼ねて望みしこの刀、この手筋から敵の行くへ、知らん爲でござんすわいなア、

善右　すりや、いよ／＼この持ち主が、お前方の敵とな。ホイ。

ト當惑のこなし。傳藏、空嘯いて居る。善右衞門、キツと思ひ入れ。

大八　サア、善右衞門、有やうに云つてしまへ。

善右　イヽエ、存じませぬ。

大八　なんと。

善右　とんと存じませぬ。

大八　すりや、どうあつても。

善右　ハテ、知らぬと云つたら、どこまでも、アイ、存じませぬぞ。

大八　よいワ、達て知らぬと云やア、この薪ざつぱで、ぶつてぶつてうちのめしても、云はして見せう。

ト立ちかゝる。

善右　ハヽヽヽ、なんぼぶたれるが苦しいとて、知らぬ事が、どう云はるゝものでござりまする。疑ひ晴らしに、サア、どうなりとなされませい。

ト體を突きつける。

大八　よい覺悟だ、達て云はずば、斯うして。

ト一つ打つ。傳藏、こなし。

なんと云はぬか。

善右　イヽヤ知らぬ。

大八　知らずばカウ、
　トまた喚はす。
死太い奴の、いつそ、カウ〳〵。
ト続け打ちに打ち据ゑる。善右衛門、苦しさ隠して、
チツと堪える。傳藏、始終思ひ入れあつて、この時ス
ツと立つて、大八が手を一つかと留めて
傳藏　大八待て。
大八　こりや傳藏さま。なぜお留めなされますな。
傳藏　餘り詮議が手緩いゆゑ。
大八　ヤ、なんと。
傳藏　最前より、これに見て居るに、町人ながら世の常な
らぬ面魂ひ、なか〳〵一通りでは吐かすまい……ヤイ、
町人め、わりや悪い料簡だぞよ。眞直ぐに吐かさずば、
立ち所に絶命なさんも不便に思ひ、留めてくれたは某
が情。云うても云はす、云はいでも云はさにやアならぬ
サア、眞直ぐに、その賣り主を吐かすまいか。
　トこなしにて云ふ。
善右　ハテ、お侍ひにはいらざるお世話。商賣づくのこの
難儀。御浪人なされても武士は武士、活計に迫つて魂ひ
を賣らつしやるが、見目でもあるまい。責苦に遭ふが苦
しいとて、その賣り主を云ふやうな、善右衛門ぢやと思
はしやりますか。例へこの場で死すればとて、現在主人
の、イヤサ、現在苛責の責苦に遭ふとも、云はぬと云つ
たら云ひませぬ。アイ。
　ト傳藏へこなしあつて云ふ。傳藏もこなし。
ろい　あれ聞いたか大八。知つても知らぬ、刀の賣り主、
なか〳〵一應では云ふまいわいの。
大八　所を拙者が腕限り。
　ト立ちかゝる。
傳藏　大八待て。そりや血氣の一圖と云ふもの。斯様な奴
には、仁を以て問ひ落せば。眞直ぐには吐かすまいもの
でもない。
大八　すりや、仁を以て
傳藏　この場の詮議。
大八　刀の出所。
ろい　敵の行くへ。
傳藏　云はせて見せう。
大八　すりやあなた様か。
傳藏　暫時身共が預かりたい、
大八　イヤ、その儀は。

ろい　ハテ、あれ程に仰しやる事。この場は此まゝ、お預け申すも詮議の一つ。

大八　でも。（

ろい　マア奥へ。

傳藏　追ッつけ吉左右。

大ろ　待つて居りまする。

ト唄になり、大八、おろい、奥へ入る。直ぐに合ひ方善右衛門、走り寄つて、傳藏を捉へ

善右　モシ若旦那、マア／＼、下にござりませ。

ト無理に引据ゑ

エヽ、こなたはなう。十年以前お暇を願うて、親里へ立歸り、町人となりし若黨の善助。先頃久し振りでお目にかゝりしところ、この刀を賣つてくれいとあり。定めて里通ひの放埒で、國を出さつしやつたのであらう、折を見合せお詫び申したら、御歸參の叶はぬ事もあるまいと、思うて居たが、今の話しを聞いては、お前、人を殺めて立退かしやりましたの。

傳藏　コリヤ。やかましい。

ト思ひ入れ。

善右　イヤ／＼、さうであらう／＼。さう云ふ大膽なこな樣とも知らず、當時凌ぎの奉公稼ぎ、身の廻りの足しにもと、頼ましつたこの刀、見ればお家の重代と云ふでもなし、望む人があるを幸ひに、持つて來たところが、今の仕合せ。例へぶち殺されても、こな樣の難儀になるぢやに依つて、云ひませぬ。併しながら、敵と狙ふこの家の内へ、便つてござつたこなたの心は、エヽ、聞えた、こりや騙し寄つて返り討にする氣ぢやな。そりや卑怯おや／＼。勿論武士の上には、義に望んでは打ち放す事もござらうが、なぜ尋常に討つとて討たるゝとも、名乘り合つて勝負はさつしやりませぬ。廣い世界を狭う身を持つて、逃げ隠れさつしやるは、薩島の名跡を穢すと云ふもの。それ程までに命が惜しいか。エヽ、こなた樣はなう。

トたくりかけて云ふ。傳藏、これに構はず、衣紋を直し、ズッと表へ出ようとする。善右衛門、ちよつと押へ

善右　若旦那、こりや、いよ／＼こな樣は、逃げ隠れする心ぢやの。

傳藏　身に大望を抱く傳藏。敵討位の小事に、命を果さうか。大べら坊め。

ト善右衛門、思ひ入れあつて

善右　ムウ、大望をと云はつしやるは、さては聞き及ぶ信田家の重寶、都鳥の香爐、先達てより紛失とある。すりや、その香爐は。

ト云はんとするを、引き廻して

傳藏　コリヤ、役にも立たね猿智惠で、感を附けたる寶の行くへ。生けて置いたら、どんな事を口走らうも知れぬ馬鹿者、可哀や生けては置かれぬわえ。

善右　すりや、こなたの一大事、他言せうとの疑はつしやるのかえ。エヽ、こなたの心に引比べ、主恩を忘れさうな、善助ぢやと思はしやりますか。

傳藏　口さがなきは下郎の常だ。

善右　ムウ、尤も。

ト傳藏が前へ、ドッカリと直り

サア、さつぱりと殺さつしやりませ。

傳藏　ヤア、なんと。

善右　後日にもしもこなたの惡事、外より漏れてもこの善助が、口走つたと思はれては、この身の汚名。ぢやに依つて、爰でさつぱりと手にかけさつしやれ。

ト體を突きつける。傳藏、こなしあつて

傳藏　よい覺悟だ。今ぶッ放す。覺悟なせ。

ト刀を拔く。

善右　南無阿彌陀佛。

ト首さしのべる。傳藏、刀を振り上げる。

傳藏　今が最期だ。觀念なせ。

善右　サア。

傳藏　南無阿彌。

ト振り上げる事二三度あり、キッと思ひ入れあつて、刀をシャンと納める。

善右　若旦那、なぜ切らつしやりませぬ。

傳藏　昔のよしみ、助けてくれた。

善右　すりや、後で口走らうとも。

傳藏　大鵬なんぞ燕雀の囀り耳にかけんや。我が本望を遂しなば、重ねて逢はう。

ト構はず向うへ行きにかゝる。善右衛門、思ひ入れあつて

善右　若旦那、待つた。

傳藏　なんぞ用があるか。

善右　この場を立退くこな樣へ、善助が餞別。

ト件の刀を腹へ突き立てる。

傳藏　そちや、何ゆゑに相果てる。
善右　一旦助けると云はつしやつた、こなたの仁心にめで、腹切つて死ぬるは、枕を高う寢させたいばつかり。
傳藏　ヤ、なんと。
善右　下郎は口のさがなき者と云はしつた一言、尤もに思ふゆゑ、こなたへ進ぜるこの命。心殘らず一時も早う落ちのびて下されいなう。
傳藏　出かした善助。流石は武士に仕へし健氣の切腹。過分に思ふ。喜ばしいぞよ。
善右　エヽ、忝ない。その一言がこの身の引導。未來の土產。
傳藏　成佛得脫。
善右　南無阿陀陀佛。
ト引き廻し、バッタリと倒れる。傳藏、ちよつと愁ひのこなしあり、これをキッカケに鐘鳴る。傳藏、キッとなつて
傳藏　さうだ。
ト三重にて向うへ走り入る。この時おろい、大八、走り出て、善右衞門が死骸を見て
大八　こりやコレ、善右衞門が腹切つて死んだ體。
ろい　その上傳藏が、この場に居ぬは樣子ぞあらん。
大八　程は行くまい。追ッかけて。
トこの時、鄕助、表へ忍び出て
鄕助　さうはさせねえ。
ト立ち塞がる。大八、立廻り。
大八　コレ、構はずと、あなたはお先へ。
ろい　さうして其方は。
大八　爰片附けて追ッつき參る。
ろい　落ちつく所は
大八　花水橋。
ろい　大八。
大八　ござれ。
ろい　ソレ。
ト時の鐘、早三重にて、おろい、向うへ走り入る。あと大八、鄕助を相手に立廻りあつて、トヾ見事に取つて押へる。この見得、時の鐘、バタ〳〵にて、道具廻る。

本舞臺、正面黑幕、左右松の大樹、爰かしこに稻村を据ゑ、上の方へ寄せて、花水橋の欄干を奥深に見

せ、一面に生ひ茂りたる葭にて見切り、日覆より月、すべて、大磯花水橋夜の景色なり、虫の聲、時の鐘にて、道具とまる。

ト向うよりおろい、一腰かい込み、バタ／＼にて、走り出て來る。後より奇妙院、以前の形にて頬冠りなして、附いて出て來る。

ろい　正しく傳藏はこの道筋。まだ爰へは見えぬか。

ト　あたりを見廻し

何にもせよ、大八に花水橋で落ち合ふ約束。さうぢや。

ト奇妙院、後より附けて

奇妙　オツと待つたり。ハテ、早い足だ。

ろい　ヤア、其方は先刻の山伏どの。

奇妙　よくひどい目に遭はせたな。その意趣返しに仕掛けたところ、思ひがけない其方から、据ゑ膳とは有り難いと、後を追ッかけつけて來た。送り狼に一口食はせておくれいなア。

ト抱きつく

ろい　エヽ、嫌らしい。何しやるぞいの。

ト振り切る。

奇妙　何をするものか。おツ轉ばすのサ。

トまた取りつくを、突き退け

ろい　ムウ、女子一人と侮つて、聊爾しやると手は見せぬぞ。

ト身構へ、キツと思ひ入れ。

奇妙　さ、怖や。お前に切らるゝとは、わつちが本望だサア、切りな／＼。

ト云ひ／＼側へ寄り、刀を取らうとする思ひ入れ。

ろい　イヤ、さうはなるまいわいの。

ト抜き放す。

奇妙　滅多な事をしやアがるな。危ないワ／＼。

ト云ひ／＼、橋の袂の開帳札を取り

どうでおれが自由にはなるまい。叩き挫いて抱いて寢る。女め、觀念。

ト打つてかゝる。立廻りにて、しつかと留め

ろい　イヤ、さうはなるまいわいの。

トまた打つてかゝる。

奇妙　ところをカウ。

トまた打つてかゝる。

兩人　ドツコイ。

トこれより賑やかなる鳴り物入り、烈しき立廻り、尤

もこの立廻りのうち、月の出入りよろしく、忍び三重になり、おるい、刀打ち落され。危ふく受け太刀になる。向うより大助、旅奴の形にて、脚絆、草鞋、一本差しにて、出て來り

大助　最前の雨で、上辷りがして歩かれるものではない。

ト云ひ〳〵舞臺へ來て、この物音に驚ろき、身構へして窺ふ。舞臺はこれを知らず

るい　サア、曲者め、そこ退くまいか。

ト大助、透かし見て

大助　さう云ふお聲は、おるいさまではござりませぬか。

るい　ヤア、大助かいの。

大助　何にも致せ。

ト奇妙院を引き退け、顔を見て

ヤア、おのれはいつぞや高雄山にて、出ツくはした山伏めだな。

奇妙　わりや、その時の奴めだな。

大助　うぬに逢はう〳〵と。

奇妙　おれは逢ふまい〳〵と思つた。

大助　ハテ、よい所で

奇妙　惡い所で

兩人　逢つたなア。

ト思ひ入れ。

大助　これからは、うぬを引ッ括つて詮議する。腕廻せ。

奇妙　觀念。

ト落ちてある刀を、手早く取つて、大助に切りつける。大助も拔き合せ、切り結ぶ。おるい、心遣ひのこなし。よきキッカケに、日覆の月に雲かゝる。これより忍び三重、暗闇の仕組みよろしく、三人危ふい事いろ〳〵あつて、奇妙院、叶はず花道の方へ這つて逃げる。大助、滅多毆りに、奇妙院が尻を、毆り切りに切りつける。これにて奇妙院、アッと倒れる。大助、奇妙院を引きつけ

大助　おるいさま〳〵。

るい　ヤア〳〵。

ト聲をしるべに探り寄る。

大助　お氣遣ひなされますな。狼藉者は仕留めました。

るい　オヽ、出かしやつた〳〵。

ト大助、止めを刺さうとする。後ろの稻村より白刃を突き出し、大助が脾腹をかけて、グッと貫く。これにて大助、ウンと反る。おるい、驚ろき

るい　大助、どうしやつたぞいの〳〵。
ト探り寄る。
大助　アヽ、寄るまい〳〵。
ト苦しきこなし。
エヽ、残念や。聲をもかけず騙し討とは、卑怯者めが。
るい　ヤア、其方は手を負やつたか。オヽ。
ト驚ろく。
大助　例へ深手は負うたりとも、此まゝで置かうか。
トよろめきながら、立たうとする。稲村の内より存分挟る。これにて大助、いろ〳〵苦しみ、ムウと轉ける。稲村より傳藏、以前の形にて、抜き身を引ッ提げ、窺ひ出る。おるい、大助が呻く聲にて、探り寄らうとして、傳藏に探り當り、恟りして
るい　曲者。
ト寄らうとする。突き退ける立廻りのうち、おるいをちよつと當てる。おるい、ウンと倒れる。傳藏、探り寄りて大助が上へ跨り、止めを刺し、又おるいに止めを刺す心にて、おるいを探り、上へ跨り、止めを刺さうとする。向うバタ〳〵にて、人音する。これにて傳藏、稲村の影へ隠れる。向うより大八、走り出て
大八　ハテ、怪しからぬ胸騒ぎだが、おるいさまは、先へお出でなされたか。まだ後か。
ト云ひ〳〵、おるいが體に躓き
ヤア、これは。
ト見て
さてこそ、おるいさまだ〳〵。
トいろ〳〵介抱して、呼び生ける。
おるいさま、お心が附きましたか。
トおるい、大八を見て
るい　大八、遲かつた〳〵わいの。
大八　遲かつたとは、すりや、傳藏がこの所へ參りましたか。
るい　イヤ〳〵、誰れとも知れず、大助は殺されたわいの。
大八　ニヽ。
ト驚ろく、
るい　可哀い事をしたわいなう。
ト死骸に取りつき泣く。大八、死骸に取りつき
大八　エヽ、コレ、今一足早くば、やみ〳〵と殺すまいもの。
トこの時奇妙院、よろめきながら

奇妙　奴め觀念。

　ト切つてかゝるを、かい潜り取つて押へ

大八　エヽ、殘念なア。

　ト止めを刺す。この見得、ジヤン／＼にて道具廻る。

　本舞臺、正面黑幕、高土手、眞中に樋の口、上の方大樹の柳、一面に枝垂れて居る。すべて花木橋裏手、正覺寺樋の口のかゝり、虫の聲、一つ鉦にて、道具納まる。

　ト暫らくあつて、バツタリと音する。ト本神樂になり、正面の樋の口より、傳藏、頰冠り、抜き身を引ツ提げ窺ひ出て、刀を納め、袖袂を絞り、それより花道の方へ行かうとして、人の來るこなしにて隱れる。向うより甚七、旅虛無僧の形よろしく、手甲、股引、筒袋に仕込みを差し、風呂敷包みを脊負ひ、天蓋をかむり、出て來る。花道の中程にて、バツタリと行き合ひ、兩人こなしあつて、舞臺へ押し戻す。兩人よろしくこなしあつて、トヾ傳藏、甚七が右の腕を一太刀切る。傳藏、上より浴せかける。甚七、開き、ウンと詰め寄る傳藏、トン／＼／＼と後へ下がり、刀を構へる。暗闇のこなしあつてよろしく、拍子。　幕

六　幕　目　　　藏前伊豫屋の場

役名——薩島傳藏。片山軍治。番頭。儀兵衞。下人、與助。下女、おさん。伊勢屋娘、お糸。虛無僧、左市實ハ浮島甚七郎。いさみ、惡酒の勘。同、ねじふじの松、同。毒虫の八、足輕、元右衞門。三好岩次郎。娘、お幾。伊豫屋治兵衞。

　本舞臺、三間の間、赤銅柱、二階、觀音開きの、土藏造り、蹴込み、細戶を入れ、向う赤壁、納戶口、下の方、帳箪笥、前に大帳を掛け、硯その外品々帳面を並べあり、上の方、好き所に、三方に芋團子神酒德利を供へ、大きなる竹の花活けに薄を活け、右は名月の飾り物よろしく、正面に神棚、下の方の入り口、路地の心にて切り戶建てあり、西の柱外中格子、すべて淺草米問屋、表がゝりの體。幕の內より儀兵衞、番頭の拵らへよろしく、やつし羽織にて、

ト手代を相手に碁を打つて居る。下人與助、丁稚の[illegible]
らへ、若い者と二人、下人の若い衆三人、表に鞠を
蹴つて居る、この見得、曲搔の鳴り物にて、幕明く。

與助　アリヤア。

ト鞠を蹴る。

手代　ハアリ。

ト蹴返す。

與助　コレ、貴様は一向なものだぜ、さう蹴ちやア、ゆく
もんぢやアねえ。

若者　また與助が味噌を上げるワ。今度は此方から蹴るワ。
貴様、受けて見さつし。アリヤア。

與助　ハアリ。

ト蹴つてやらうして、ドツサリこける。

若者　ハヽヽヽ、態は。

與助　何がをかしい事がある。

若者　でも、今の態はなんだ。

與助　ありやア怪我だワ。

若者　態は。

與助　エヽ、いま／＼しい。

ト鞠を蹴なげ、此うち、儀兵衛、騒々しいと云ふこな
しにて、小言を云ひながら表へ出て

儀兵　毎日々々下手の鞠、よさねえか。

ト云ひ／＼出る。この時、與助が蹴たる鞠、出合ひ頭
に儀兵衛が額へ當る。儀兵衛、額を抱へて

アイタ……、こりやア何をしやアがる。

若衆　ソリヤこそ、番頭さんだワ。

與助　番頭さんでも旦那さんでも、どうするもんだ、怪我
だワ。

儀兵　なんだ、怪我だ。おのれ、怪我だと云うて、番頭の
顏へ鞠を蹴當てゝも大事ねえか。全體われらは、蹴得も
しねえで、蹴りやア人に當てる事はねえ。これ、見やア
がれ。アリヤ。

ト仔細らしく、蹴ようとして又ドツサリこける。

與助　ハヽヽヽ、態は。

儀兵　うぬ、笑やアがるな。

與助　でも、をかしいもの。

儀兵　をかしくば、われ蹴つて見ろ。

ト與助に鞠を蹴やる。

與助　蹴つて見せるワ、

ト蹴返す。

儀兵　蹴つて見ろ。

トまた蹴る。

與助　蹴つて見せるワ。

トこれより、双方鞠を蹴合ふうち、互ひに顔へ氣を付け、トヾ鞠を蹴潰すなど、いろ／＼をかし味あつて、互ひに蹴合ひながら、この人数切り戸の内へ入る。ト出の唄になり、向うより、伊豫屋娘お幾、振り袖やつし、着流し、富家の娘の拵らへよろしく、伊勢屋の娘お糸、これも近所の娘にて、同斷の形、後より、おさん、下女にて、双紙包みを持つて、出て來り、皆々本舞臺へ來り

いと　お幾さん、お休みえ。

ト行かうとする。

いく　お糸さん。マア、遊んで行きいなア。

いと　それでも師匠さんの所へ遲ひが行くと、悪うござんすわいなア。

いく　そんなら、わたしの所から、誰れなりとお前の内へさう云うてやるわいなア。

さん　マア、お入りなされませいなア。

ト云うて居る。この時、切り戸より、件の鞠、ポンと飛んで、三人の眞中へ落ちる。

皆々　オヽ、怖。

ト兩人、内へ逃げて入る。引續いて、與助、儀兵衞、鞠を追はへ、走り出て來り、與助、鞠を取つて、内へ駈け込む。儀兵衞また追はへ、内へ入る。

儀兵　與助め、その鞠を寄越しやアがらねえか。

いく　コレ儀兵衞、騒々しい、恟りするわいの。

儀兵　イヤモウ、お前さんは手習ひの師匠さんへお出でなされ、旦那は王子詣りの留主、與助めが高なしに狂ひ居るゆゑ、呵つて居るのでござりまする。

與助　よく嘘を吐く番頭さんではある。てまへも鞠を蹴そくなつて。

儀兵　何を吐かしやアがる。

ト睨み付ける。

イヤ、モウ／＼、旦那代りに呵りもせにやアならず、帳面も改めねばならず、ヤレ／＼、番頭も大抵ではないぞ。

トちらすこなしにて、仔細らしく帳場へ直る。

いと　ほんに、與助どのは、叱られて怖いかして、小さうなつて居やんすわいなア。

與助　お糸さん、又そんな事を云ひなさると、おりや云ふ事があるよ。
いと　云ふ事があるとは、何がいなア。
與助　何がとは、あのお孃さん、お糸さんはな、お前の好きな此方の裏店に居やんす左市さんと、昨夜たつた二人してゞあつたぞえ。
いく　與助、そりやほんの事かいなう。
與助　ほんの事どころぢやアねえ。しかもね、お糸さんが申し左市さん、明日の晩にしておくれと云ひなすつたを聞いて居た〳〵。
いと　コレ與助どの、そりやア何を云ふのぢやぞいの。
與助　何を云ふもすさまじい。あれほど左市さんとして居ながら。
いく　そりやアモウ大抵の事ぢやない。お糸さん、お前、左市さんと何をさしやんしたえ。
いと　イヽエ、なんにもしやせんわいなア。
與助　嘘々、したぞ〳〵。
いく　そりやマア何をいなア。
與助　尺八の稽古を、
いく　エヽ、なんの事ぢやぞいの。

與助　なんの事とは嘘ぢやなし、左市さんは虚無僧に出やんすに依つて、尺八が上手なり、そこでお糸さんが尺八の稽古、又こちのお孃さんは、左市さんに戀慕流しを…
…唄口しめして待つてれば。
ト淨瑠璃語りながら、儀兵衛が側へ行く。
儀兵　エヽ、騒々しい、何を吐かしやアがる。さつぱり勘定がなるものぢやねえワ。御新造は去年亡くなつてしまはつしやる。旦那どのは生れ付いて温和なに依つて、さつぱりと内の事は構はつしやらず、その上今日は王子詣りの留主と云ひ、おれが取締りをせねば、伊豫屋の身代が立たないと、寐ても覺めても忠義に凝つて居るこの儀兵衛。觀音の朝詣りも、いつか止めてしまつたが、鼻の先の回向院の開帳へも今に參らず、勿論町の燈籠さへ、二三年見た事がねえ。なんと、これ程に斯うして、家をちよつとでも明けぬやうに、奉公大事と勤めて居る番頭でも、お孃樣のお氣に入らぬさうぢや。
トお幾にかけて云ふこなし。お幾、聞かぬこなしにて
いく　ほんに、このお父さんは、遲い事ではあるぞ。
さん　左樣でござりまする。きつうお手間が取れまする。
儀兵　與助、道までお迎ひに行つて來い。

與助　イヽエ、わしや行くめえ。
儀兵　なぜ行くまいだ。
與助　ハテ、今日は待宵と云つて、人を待つは當り前だ。
儀兵　此奴がく、人を茶にしやアがるな。
與助　ナニ、茶にやアしねえ。熱くさせて、お飯を喰ふよ。
儀兵　その頰桁を。
　ト立ちかゝる。
與助　ソリヤ、番頭さんの茶が熱くなつた。
　ト逃げ廻る。儀兵衞、追はへる。おさん、取支へる。この時、下座の切り戸より、左市事甚七郎、着流し、一本差しの形にて出かける。與助、この後へ屈む。左市、儀兵衞を留めて
左市　番頭さん、こりや何事でござりまする。
儀兵　左市どのか。
いく　左市さん。ようお出でたなア。
　ト喜ぶこなし。
儀兵　貴樣、修行に出ねえのか。
左市　左樣でござりまする。五六日は右の腕を痛めまして、竹が持てませぬ。それで修行には出ぬやうにござりまする。
いく　申し左市さん、たつた今、お前の話しをして居たわいなア。さうしてな、お幾さんが、お前の事を何やら、きつう氣にかけて居てゞあつたわえ。
左市　これはく、どなたかと存じましたら、伊勢屋のお娘御のお糸さん、美しう髮を結ひなさつたの。
いく　左市さん、お前、お糸さんの髮が、それ程美しいかえ。
　ト左市、思ひ入れあつて
左市　イエサ、さのみそれ程にはござりませねど。
いく　イエく、きつうお氣に入つたさうにござんすわいなア。
左市　これは迷惑千萬な。
いく　アイ、どうでわたしが云ふ事は、迷惑にござんせうなア。
　トこなし。左市、氣の毒なるこなし。
左市　申しお幾さん、あなたの袖が綻びてござりますぞえ。
いく　綻びて居やうと、構うておくれないなア。
左市　ハイく。
儀兵　ハイ、さうでござりまする。お孃樣、必らず構うて

おもらひなされますな。又と云つても構やアがると、この番頭がきかねえぞ。此方のお嬢さんの綻びは、外に縫ひ手があるのだよ。

與助　さうさね。番頭さんの針は肝に堪えるね。

儀兵　また口を聞きやアがるか。

與助　ソリヤ、又お茶が沸きさうだ。

ト後へ引込む。

左市　どうやら番頭さんの浪も荒し、お暇申しませう。ちとお遊びにお出でなされませ。

儀兵　なんだ、お嬢さんに遊びに來い。イヤ、さうはなるめえ。ちよつとお出でなされませ。

トお幾を、こちらへ連れて來て

全體マア、地主のお娘御が、店借りの者とお心安うなされましては、コレ、先づ、旦那が地獄遊びをなさるやうなもので、釣合ひませぬは不縁の元と、忠臣藏にも書いてあるぢやござりませぬか。

ト無性にしやべて居る。お幾、これに構はず、左市が側へ來る。儀兵衛、これを知らずに

お前さんは誰れあらう、この淺草でも人に知られた、伊豫屋治兵衛さまのお娘御ぢやござりませぬか。先づ聟を取らうなら、第一讀書き算用、利口發明で、至つて人物の好い、マアちよつと譬へて見やうなら、この儀兵衛と云ふ男でなくちやア。

ト云ひながら、振り返り見る。お幾が居ぬゆゑ愕りして、左市を引退け、ムッとして

左市どの、貴樣、全體、何しに來たのだ。

左市　ハイ、私しは旦那のお留主見舞ひに參りましてござります。

儀兵　なんだ、留主見舞ひに來た。誰れが來てくれろと云つた。何もそんなに來ることはねえ。なぜと云つて見さつしやい。先づ此方の裏店へ來て、僅か一月か二月の間に、店賃は元より不勘定なその上に、米から薪から味噌醬油に至るまで、此方の内から取替へてあれど、今に勘定はしやアしめえが。それにツカ／＼と留主見舞ひどころかえ。此方の内に用はない、キリ／＼と歸つてもらはう。

左市　ハイ／＼、左樣なら歸りますでござりませう。

トおづ／＼立たうとする。

いく　イエ／＼、左市さんには用がある。去なしまするはならぬわいなう。

儀兵　お嬢さん、妙な事を云ひなさるな。あちらからこそ、

ヤレ米が切れた、ソレ味噌が切れたと用があらうが、此方から用はあらう筈がない。サア／＼、歸つてもらはう。

左市　ハイ／＼。

いく　イヽエ、歸し申す事はならぬわいなう。

儀兵　イヤ／＼、歸つた／＼。

左市　ハイ／＼。

いく　ならぬ／＼。

儀兵　去ね／＼。

左市　ハイ／＼。

いく　ならぬ／＼。

儀兵　コレ、お孃さん、お前、そりやあんまり厚かましいと云ふものでござりますぞえ。

いく　大事ない、構やんないなう。

儀兵　サア、こりや大變となつて來た。娘の腰を据ゑるは、せうからの灸ばかりだかと思へば、こりやアとんだ事にまで腰が据つた。さうお前が云ひなさりやア、わたしも又云ひがゝりだから、達て歸るまいと云やア、これで叩き出してくれませう。

ト箒を構へる。

與助　こりや又、あんまり荒々しい。一番留めた。

ト留める。

儀兵　エヽ、邪魔をしやアがるな。

ト突き飛ばす。通り神樂になり、與助、いろ／＼邪魔をする。治兵衞、與助を追ひ廻す。この鳴り物にて、向うより、治兵衞、着流し、一本差し、羽織の包みを下人に持たせ、菅笠、藁草履、誂らへの王子土産いろいろ持つて出て來る。直ぐに本舞臺へ來て、内へ入る。與助、表へ逃げて出て、治兵衞が後へ隱れる。儀兵衞、出合ひ頭に治兵衞に箒を振り上げる。

治兵　儀兵衞、こりやなんの眞似ぢや。

ト儀兵衞、恟りして

儀兵　サア、こりやアノ、ナニ、オヽ、それ／＼、お留主の内に蜘蛛の巣を取らうと存じまして。

治兵　ハヽヽ、お鬚の塵ではなくて、親方の顏の蜘蛛の巣取りとは、精を出す番頭ぢやなア。

儀兵　イエ、左樣にもござりませぬ。

與助　ちつとさうもござるまい。

ト力むこなし、

いく　お父さん、お早うござんしたなア。

さん　お濯ぎの湯を取りませうかえ。

治兵　イヤ〳〵、見付けまで駕籠に乘つたに依つて、足は綺麗だ。併し、今日は草臥れた。
左市　これはお早ぅ御下向なされましてござりまする。
治兵　オヽ、誰れかと思へば左市どのか。近所の娘達と云ひ、よう遊びに來て下されたの。
いと　先刻にから遊んで居りまする。
左市　今日は天氣がようござりまして、一入お慰みでござりませう。
治兵　イヤモウ、隙な時分でも、内へ氣が急くと、さのみ慰みにもらぬのサ。
儀兵　左樣でござりまする。肝心の人が家に居ぬと、笑ふやら、抓るやら。叩くやら。狂ふやら、痴話るやら、拗ねるやら、なんの事はない、淺草に地獄屋が出來たやうにござりまする。
與助　ハテ、おつう妬きかけるな。
治兵　イヤ、隨分内の賑やかながよい。おりや淋しい事はきつい嫌ひぢや。何は兎もあれ土產をやらう。權助、その土產を爰へ寄越せ。
權助　ハイ〳〵。
　ト件の土產物を治兵衛に渡す。

治兵　マア、娘にはこの狐の石橋、常から近所で伊豫屋の娘は、濱松屋に生寫しぢや、路考々々と噂をするゆゑ、そこで石橋は路考が家の所作事なり、即ち王子に縁もありと、わが身に當つたこの土產。どうぞ稻荷の御利生で、好い縁を結ぶの紙細工、大切にしやれ〳〵、
　ト お幾、取つて
いく　アイ〳〵、そんならアノ稻荷さんの御利生で、思ふ殿御と緣を結ぶのでござんすかいなア。
治兵　なんと嬉しからうが。
いく　アイ。大抵嬉しい事ぢやござんせぬわいなア、
　ト左市へこなしあつて喜ぶ。
治兵　時に、伊勢屋のお娘へは……オヽ、コレ〳〵、狐の宵、ちつと不釣合だが、いつまでも娘と仲よう、毎日々々遊びに來て、顏見せと云ふ地口だが、どうだ〳〵。
　ト お糸にやる。
いと　こりや有り難うござんす。
治兵　左市どのへはこの鳥刺し。空飛ぶ鳥の所定めず、例へ行くへは知れずとも、時節を窺ふ其うちに、木の枝へとまり定めし所ろを見付け、狙ひすまして討取ると……イヤサ、刺いて取るとは、こなさんの渡世の虚無僧に寄す

る竹の緣。これもちと附會か知らぬが、緣起祝うた心ばかり。

ト思ひ入れあつて遣る。左市、何心なく

左市　有り難うござりまする。

儀兵　時に、私しへも、なんぞお土產がありさうなものでござりまずる。

治兵　儀兵衞、其方にも遣らうが、われには、いま流行の、猫ぢや〳〵。

ト出す。

儀兵　私しには猫とは、どうした譯でござりまする。

治兵　その猫の因緣は、日頃篤實な顏をして居つても、鼠を取る猫爪を隱すと云ふ、主の目を拔き、どんな事をするか油斷のならぬ猫の一物、依つて一名を泥棒猫とも云ふ。その惡名を請けまいと思はど、隨分ともに精を出し忠義と云ふ汗を絞りの浴衣を着て、下駄穿かば杖を突くと云ふ、危なげのない、これ用心、とつくりと考へて、奉公に精を出しやれと云ふ事ぢや。

儀兵　こりや王子土產ではなくて、私しへの御意見。猫ならば猫らしく、片隅へ屈んで居りませう。にやんの事やら譯が知れねえ。

トむつとして、こちらへ來る。

與助　こちらへも、なんぞ欲しいものぢやなア。

治兵　オヽ、與助か。われにも遣らう。われは兎角毒にも藥にもならぬと云ふ心で、麥こがし。なんと好い土產であらうがな。

與助　紙細工より口へ入るだけ、萬更でもないやつだ。

治兵　ハテ、意地の穢ない奴ではある。さんにも分けてやらうぞ。

與助　ホイ、紙細工なら分けられまいもの。

トこちらへ來る。

左市　時に最前から、長話しを致してござりまする。もうお暇申しませう。

いく　マア、お遊びなされませいなア。

いと　わたしらもお暇申ませうわいなア。

いく　なぜにいなア。

いと　また明日、參じるわいなア。

左市　さぞ今日はお草臥れでござりませう。お休みなされませ。

治兵　晩に又話しにござりませ。

左市　有り難のござりまする。

いく　さん、お糸さんを送つて上げや。
さん　畏まりました。
いく　ようお出でたえ。
　ト唄になり、左市、元の切り戸口へ入る。お糸おさん付き添ひ向うへ入る。與助、儀兵衛、權助、奥へ入る。お幾、左市が後を見送つて居る。
治兵　ヤレ／＼、今日は思ひの外草臥れた。その上、狹い駕籠に屈んで居た所爲か、肩がメリ／＼云ふ程つかへ切つた。娘、ちつと叩いてくりや。
　ト云へど、お幾、矢張り切り戸口の方を見て居る。
娘、オイ／＼、ヤ、コレ娘。
　ト大きな聲にて云ふ。お幾、これにて心付き
いく　アイ、なんでござんすぞいなア。
治兵　精一杯おれに物を云はして置いて、アイなんでござんすか。おれもとんと合點がゆかぬ。どうやら急にソワソワと。
いく　エヽ。
　トこなし。
治兵　イヤサ、急に相談のしたい事もある。マア、肩を叩いてたも。

いく　アイ／＼。
　ト後へ廻り、治兵衛が肩を叩きながら
モシ父さん、わたしもお前に相談がござんすわいなア。
治兵　なんと云やる。おれにも相談があると云ふのか。
いく　アイ。
治兵　ハテナウ、そんならわが身の相談から云う見てや。
いく　イヽエ、マア、お前から云はしやんせいなア。
治兵　おれが相談と云ふは、別の事でもない。娘、お主をお屋敷へ嫁入りさせたいと云ふ事よ。
いく　エヽ。
　ト悄りする。
治兵　サヽ、これにはちつと樣子があつての事。そのお屋敷と云ふも、この江戸ではない、さる國屋敷だ。なんと嫌ではあるまい。
　トお幾、俯向いて居る。治兵衛、思ひ入れあつて
ムウ、物を云やらぬは不承知か。
いく　アイ。
　ト俯向いて居る。
治兵　よし／＼、嫌な物を無理にやらうとも云ふまい。マア、嫌なら嫌でよいワ。時に、お主の相談と云ふは。

いく　サア、わたしが相談は。
治兵　相談は。
いく　アノナ。
治兵　アノナ。
いく　わたしや、金がたんと欲しうござんすわいなア。
治兵　なんぢや、金がたんと欲しい。そりやアおれも欲しい。ハヽヽ、長者富に飽かずと云うて、あるが上にも欲しいは金。そして、どれ程欲しいぞ。
いく　サア、どれ程ぢや知らぬが、たんと欲しいわいなア。
治兵　どれ程ぢや知らぬが、たんと欲しい。ハテナア。
　ト思ひ入れあつて
イカサマ、本國を出で、所々方々と尋ね廻る年月も、最早一歳、貯へも。
　ト始終切り戸の方へ心意氣あつて
成る程、お主も又、自分の氣に入つた小袖から、櫛笄も欲しい時分。尤も〳〵。
　ト思ひ入れあつて、前提げより、小粒をバラ〳〵と二十兩ばかり出し、鼻紙に包み
幸ひ爰に二十兩ばかり、これでよくば取つて置きや。また足らねば後から遣らう。

　トお幾、取つて
いく　エヽ、そんならこれを下さんすかえ。
治兵　遠慮なしに、なんなりと買ひたい物を買や。
いく　アイ〳〵、嬉しうござんす。そんならモウ、この金は、わたしが金でござんすなア。
治兵　てまへに遣つたのよ。
いく　アイ〳〵、そんならちつとも早う。
　ト切り戸の方へ行かうとして、ちやつと氣を替へ
こちや大丸を呼びにやらう。
　トこなし。治兵衛も思ひ入れあつて
治兵　それ〳〵、兎角呉服物は現金がよい。ドリヤ・奥へ行て暮れるまで、一寢入りせうか。
いく　お御足を擦りませうかえ。
治兵　ハテ、現金懸値なしぢやなう。
　ト唄になり、思ひ入れあつて、奥へ入る。お幾、殘り、いろ〳〵嬉しきこなしあつて
いく　エヽ、父さん、嬉しうござんす。左市さんが何やら急に金がいると、さんが云つたに依つて、それでお前に嘘云うて、貰うたのでござんす。どうぞ早う。
　ト針箱より巾着を出し、金を入れ、切り戸口へ行かう

とする。内にて

儀兵　お孃さん〳〵、旦那がお呼びなされますする。お孃さんお孃さん。

ト忙しく呼ぶ。

いく　エヽ、意地の悪い。あの儀兵衛に見付られたら、また左市さんを苛めくざるであらう。どうぞこれを見付けられぬやうに。

ト隠したき思ひ入れ。此うち、儀兵衛、奥より出かけ、この體を見て、また内へ入る。矢張り呼んで居る。お幾、いろ〳〵あつて、ト、針箱へ金を入れる。儀兵衛、ちよつとこれを見て、又ちよつと隠れて呼ぶ。

いく　エヽ、忙しないヽ、いま行くわいの。

ト合ひ方になり、奥へ入る。引違へて儀兵衛ソツと出かけ、件の金を取出し、神棚より緣起の百兩包みを下し、巾着の内へ入れ、また元の所へ入れ、右の金を改め見て

儀兵　小粒で二十兩ばかり。先づこれでこの間買うた、兵庫屋の畜生め、裏馴染と出かけて高麗藏。女郎が中車し、直さま月見の物日を菊之丞と云へば、此方の娘は濱村屋に生寫し、どうぞたつた一度なりと、本望が遂げたいとは思へども、あの左市の野郎めが、はや先陣をして居る様子。エヽコレ、磨墨と云ふ名馬を持ちながら、乗り負けて口惜しいわい〳〵。どうぞしてあの野郎めを、奥州の敵、江戸で討つと云ふ仕樣がありさうなものだが。

ト ちよつと思案して、算盤を取つて来り

あるぞ〳〵。手もなくあの左市めは、此方の大切のお娘を瞞かして居りますと、旦那へもくを割つて、店を立たさせるワ。

ト算盤を置き

ところで、後へ廻つてお娘を無理に口説き落すワ……差詰め花聟はこの儀兵衛。先づ勘定はサラリと合つた。

ト算盤を置きながら、獨り感心して居る。この時、内にて

與助　番頭さん〳〵。

ト呼ぶ。

儀兵　オヽ〳〵、そこへ行くぞ〳〵。

ト慌て、件の金をちよつと懐へ入れ、行かうとする。合ひ方、バラ〳〵と落ちる。儀兵衛、慌て拾ひ集める。此うち、與助、頻りに呼び立てる。儀兵衛、返事しながら金を拾ひ、紙に包み、これより、隠し所に困り、

與助　いろ〳〵あつて、トド薄の水を明け、この中へ金を入れ、ソツと上より薄を挿し、元の所へ恭々しく直しにかゝる。與助、ソツと出て

與助　コレ、番頭さん。

ト耳の端にて云ふ。儀兵衛、愕り、花瓶をかたさうとして、ちよつと押へ

儀兵　べら坊め、人を聾かなんぞのやうに、愕りさしやがる。勝手づくの事。花活けまでが愕りして轉けやうとする。

與助　なにサ、お前、あんまりウツカリひよんとして居たからの事サ。旦那が呼んでた。早く奥へ行きなさい。その花活けは、わしが直して置かう。

ト寄らうとするを突き飛ばし

儀兵　寄りやアがるな。うぬにこの花活けを直させて詰まるものか。

與助　そりやなぜだえ。

儀兵　ハテ、なぜと云ふ事があるものか。勿體ない。全體こんな事は番頭の役だ。わいらが構ふものぢやねえぞ。おれに構はずと、キリ〳〵奥へうしやアがれ。

與助　うせるわえ。マア、おれよりお前うせなせえ。

儀兵　マア、われから行けよ。

與助　お前からサ。

儀兵　此奴、うるさい奴だ。そんなら二人一緒に行かうか。

與助　そりやアよからう。サア、一緒に行きやんしよ。

ト兩人手を引き合ひ

儀兵　ひい。

與助　ふう。

儀兵　みい。

ト此せりふを云ひながら、兩人、納戸口へ入ると、唄になり、向うより、傳藏、黒羽二重、着流し、朱鞘の大小、百日鬘、深編笠にて、靜々と出る。後より、軍治、乞食の形にて、付いて出て

軍治　申し、一錢お遣りなされて下さりませ。お助けなされて下さりませ。

ト云ひ〳〵出て、傳藏、花道よき所にとまり、

傳藏　片山軍治。

軍治　傳藏さま。

ト傳藏あたりを見て

傳藏　某が當所の伊豫屋治兵衛が方に忍び居るを、存じて參つたか。

軍治　左樣でござりまする。國元は去年の騷動より、日々に贋の詮議嚴しく、もうこの頃では、あなたも十左衞門どのと馴れ合ひの惡事と、一家中の噂ゆゑ、お部屋樣には逐電なされ、私しも氣味が惡さに國を出奔。貴殿も當分は、マア、お歸りなされぬがようござりまする。して貴殿には、いよ／＼この家に御逗留でござりまするか。

傳藏　去秋京都の騷動にて手疵を受け、保養の爲め本國奧州へも立歸らず、直さま當所へ立越し、伊豫屋治兵衞方に居つたるところ、次第に重る彼の手疵。さるに依つて當夏の頃より近國の温泉へ入湯なし、今日この伊豫屋へ、四月振りにて熱海よりの歸りがけサ。

軍治　すりや、その時の手疵、今に御全快なされませぬか。

傳藏　如何にも。この金瘡忽ち治する妙藥、兼ねて調へ所持なせども、何を云つても今一種の藥味手に入らず、それゆゑに困り居るて。

軍治　そりや、兼ねて仰せられました、巳の年月揃うたる男子の血汐ではござりませぬか。

傳藏　如何にも、それゆゑ長々この家に居つて、手に入らざるその血汐。さるに依つて、一旦當地を立退く所存。併し、その退くについては幸ひ其方に頼みたき一儀。コリヤ。

ト囁く。

軍治　すりや、この家の娘を引ッかたげて。

傳藏　兼ねて身共が執心の女。合圖を待ち受け、合點か。

軍治　心得ました。して私しは。

傳藏　この家に忍び、某が合圖を待ちやれ。

軍治　合點でござりまする。

傳藏　然らば身に從ひ、斯う來やれ。

ト舞臺へ來る。ト向うより、飛脚一人、出て來り

飛脚　ちと物が尋ねたうござりまする。この邊で伊豫屋治兵衞どのと申すは、どれでござりまする。

傳藏　その伊豫屋は即ちこれでござる。して、其方は何方よりの飛脚だ。

飛脚　私しは阿州の家中、望月勘解由方よりの飛脚でござりまする。伊豫屋に、奧州信田の家中、薩島傳藏さまへ御状を持參仕つてござりまする。

傳藏　ムウ。即ち薩島傳藏は身共なるが、阿波の家中望月勘解由とは、ついに存ぜぬ姓名。何にもせよ、身が名を記せし書面とあれば。

ト受取り、封押切り、口の内にて讀み終つて

こりやコレ千原十左衛門、阿州へ有りつき、變名なして望月勘解由。兼て契約の通り、身を相助くるこの文體、さこそあらん。途中なれば返書は致さぬ。追ッつけ某尋ね参るであらうと、申してくりやれ。

飛脚　畏まりましてござりまする。

傳藏　飛脚大儀。

ト飛脚、向うへ引返す。傳藏、一書を懐中して

幸ひ當所を立退くよき便り。いよ〳〵以て今宵を過さぬ彼の手段、心得たか。

軍治　合點でござりまする。

傳藏　忍べ。

ト唄になり、軍治、門口の天水桶の蔭へ忍ぶ。傳藏、思ひ入れあつて、上の方の障子屋體へ入る。この唄をかりて、向うより、乘り物一挺、駕籠脇に、元右衛門、年輩なる侍ひ、袴、羽織、大小にて付き出る。後より、挾み箱一荷、中間に擔がせ、舞臺へ來り

元右　頼みませう〳〵。

ト與助出て

與助　勸化なら宗旨が違つた。通らつせえ〳〵。

ト云ひ〳〵元右衛門を見る。

元右　イヤ〳〵、左樣な者ではござらぬ。治兵衛どの在宿なら御意得たい。

ト與助、元右衛門を、つく〴〵見て

與助　南無三、こりやア例のだな。斯う押しかけられたら、ちつとでも貸さにやアなるまい。マア、此方へお入りなされませ。

ト此うち、元右衛門、乘り物へ向ひ

元右　案内いたしてござる。

ト乘り物の戸を開くと、内より、岩次郎、振り袖、着流し、大小にて出て、與助を見て

岩次　與助、久しく逢はぬが、變る事もなかつたか。

與助　ヤア、誰れかと思つたら坊さんだよ。オヽ、坊さんだ〳〵……モシ、旦那え、お嬢さん、坊さんがお歸りなされました。旦那々々。

ト呼ぶ。此うち、岩次郎、元右衛門付き添ひ内へ入ると、奥より、治兵衛、お幾、付き添ひ出て

治兵　岩次郎か。久しや〳〵。よく來やつたなう。サヽ、爰へ來や〳〵。

岩次　お父樣、姉上樣、先づ以ちまして御機嫌よう、大悦至極に存じ奉ります。

ト慇懃に手をつかへ云ふ。

いく　ほんに岩次郎、ようマア達者で戻つておぢやつたなう。

治兵　オヽ、其方も無事で、めでたい〳〵。お供の衆、これは御苦勞でござりまする。與助よ、ソレ、お茶でも上げぬかやい。男どもよ、お莨盆持つて來いやい。ヤレヤレ、よくマア來やつたなう。

ト喜ぶ。與助、元右衛門へ茶を持つて來る。いろ〳〵あり、岩次郎、好き所へ直る。

元右　イヤ〳〵、お構ひ下されますな。

治兵　何は格別、今日其方の來やつたは、殿は御參觀のお供と云ふやうな事か。

いく　大方そんな事であらうわいなア。岩次郎、さうかいなう。

ト此うち、岩次郎、チッと俯向き居る。

元右　イヤ〳〵、全く左樣な儀ではござりませぬ。岩次郎どのには、お暇が出ましてござりまする。

治兵　ナニ、殿よりお暇が出ましたとな。

ト思案のうち、傳藏、障子より窺ひ居る。

いく　コレ岩次郎、お暇が出たとは、そりやマア、どう云ふ譯で。御機嫌に違つた樣子は、どうぢや〳〵。どうぢやいなう。

ト云へども、岩次郎、矢張り俯向き居る。治兵衛、思案して居る。お幾、オロ〳〵して居る。元右衛門、氣の毒なるこなしにて、

元右　何ともはや氣の毒千萬、詳しき儀は直にお聞き下されい。相違なく岩次郎どのお渡し申す上は、拙者は直さま立歸りまする。イヤナニ、岩次郎どの、道々も申す通り、何かの儀、滯りなく御親父へお話しなさるがようござる。御緣もござらば又重ねて。いづれも、おさらばでござりまする。

ト合ひ方になり、中間召連れ、向うへ入る。皆々こなしあつて

治兵　岩次郎、其方も最早十二歳。例へ町人の悴にも致せ、殿の御前へ出でしは十歳の年、なりや、武家の式作法辨まへぬではよもあるまい。何仕落ちあつてお暇が出たぞ。サア、仔細はどうぢや〳〵。

岩次　申し上げるも面目ない。仔細一通りお聞き下されませう。一昨年信田家へお出入りの由緣を以て、若殿氏太郎さま付きのお側小姓に召され、忠勤日夜怠りなく、

相勤め居りましたるところ、昨年夏五月端午の節、何心なく若殿へ差上げたる粽、若殿御秘藏の犬に下し置かれしところ、立ち所に血を吐き死したるは、正しく毒藥。御運強き若殿氏太郎さま、御身に御別條なけれども、差當つてその日の當番、御前へ出でし私しの越度となり、直ぐに切腹にも極まりしところ、御家老浮島甚太夫さま、私しの全く存ぜざる趣き、御申開き下され、命助かりし大恩、甚太夫さまを命の親と存ずるうち、去年都、紀河原に於て、闇討にお遭ひなされ、敢へない御最期。その上お家には、都鳥の香爐紛失。それゆゑ御家督の願ひも叶はず、佞人の仕業にて、御放埓を申し立て、氏太郎さまには押籠めの御身の上。お民と申すお部屋腹に、御出生の由松さまを、お扣へと評定一決仕り、お寶出次第御家督の願ひこれある筈。然るに私し、氏太郎さま御隱居遊ばされしゆゑ、大殿樣より二代のお扣へ由松さまへ付けさせられ、出勤前に變らず、相勤め居りましたるところ、先頃七夕の嘉儀申し上げし節、由松さまの仰せらるゝは、其方儀は、さる端午の折から、兄氏太郎どのへ毒藥を差上げ、不思議に申し譯は立ちたれども、氏太郎どのには遂に押籠めの御身の上。さあれば其方は不吉者暇をやるとの御一言。この身に取つては末代の汚名、その場を立去り腹切らうとは存じながら、左樣いたしては全く若殿への面當ての切腹と云はれん、これ又主人へ不忠と存じ、一旦の死は止まりましてはござれども、人々の手前面目なく、それゆゑ當所へ罷り歸りましたは、とてもお國に於て切腹ならざる身の上なれば、未練ながら一度故郷へ立歸り、お父樣姉上樣にもお暇乞ひを致し、潔よう腹切つて相果てまするこの身の覺悟。思ひ廻せば私しは、巳の年巳の月巳の日巳の刻の誕生ゆゑ、慈愛薄く、憎まるゝとの事。この身の不運、武家奉公をする身には、高名手柄をお話し申すこそ本意なれ、申し上ぐるも面目ないこの身の云ひ譯。お父樣、姉上樣、私しが口惜しさ、御推量なされて下さりませ。

　トじつと泣く。これにて、傳藏、障子をたてる。お幾、泣いて居る。治兵衞、よろしくあつて

治兵　悴、出かした。よく歸つた。侍ひと云ふ者は、只一言に依つても命を捨つるは間々ある事。殊に不吉者と云はれては、心外でなうてなんとせう、尤もぢや〳〵が、爰の所をよく聞けよ。現在わが身の親の、おれは先祖からの町人、其方を武士にしたいと、御奉公に上げたは、

おれが誤まり。矢ッ張り川立ちは川で果つるが浮世の順道。町人は町人で朽ち果つるが身分相應。わが身に株ぐるみ後式譲り、お幾を外へ片付けるとて、まんざら五ヶ所十ヶ所の地面のないと云ふ身代でもない。ソウ〳〵、これが勿怪の幸ひ。必らず埒もない侍ひ氣を出さぬがよい。ソレ、娘、岩次郎を奥へ連れて行て、なんぞ馳走してたもいなう。

いく　アイ〳〵、合點でござんす。只今お父さんの云ひなさる通り、侍ひと云ふものは大抵怖いものぢやないげな。それよりは矢ッ張り内に居て、其方が父さんの代りをしやると、わしはアノ左市さんと、イヤサ、わしは大抵力になつて、よい事ぢやない。ナア、お父さん。

治兵　それ〳〵、イヤモウ、家内は兎角人の殖えるほどめでたい事はない。サヽ、氣を取り直して奥へ行きや。

岩次　左樣ならば、お父樣、後刻お目にかゝりませう。

いく　お父さん、あのマア岩次郎の、堅苦しい事わいなア。

ト唄になり、お幾、岩次郎を連れて與助付き添ひ奥へ入る。治兵衞、殘り、思ひ入れあつて

治兵　三年以前信田のお家へ、御奉公に上げし忰岩次郎、身に覺えない災難とは云ひながら、一旦死罪に極まりしを、助け下されしは御家老甚太夫どのゝ御厚恩。ところに當時の若殿、不吉者と仰せられしゆゑ、無念と思ひ身退きし、忰は町人の胤ながら、武家の水が身に染みし侍ひの魂ひ。殊にお家の寶の紛失と云ひ、甚太夫さまも闇討にお果てなされしと、先達て噂に聞く。これも皆佞人輩が仕業であらう。その佞人が大方それと。

ト思ひ入れあつて

ア、儘よ。おれが苦勞にする事はない。それよりは元帳のせいらくでもせうか。

ト合ひ方になり、帳面を改めにかゝる。向うより、惡酒の勘、ねじふじの松、毒虫の八、やつし、單帶、皆皆勇みの拵らへよろしく、捨ぜりふワヤ〳〵云ひながら出て來り

三人　旦那え。お許しなさい〳〵。

ト云ひながら内へ入る。治兵衞、帳面を扣へながら、ちよつと見て

治兵　藏出しなら今日はねえ。明日早く來てもらはう。

ト帳面を改め見る。

勘　これサ、わつちらア藏出しに來たのぢやアねえよ。顏を立てゝもらはうと思つて、それで來やした。

三人　旦那、顔を立てゝくんなんし〳〵。

ト三人、大胡座で云ふ。治兵衞、これに搆はず、帳面を繰りしまひ、莨盆を持ち、よき所へ直り

治兵　なんだ、先刻から聞いて居れば、後も先も云はず、立つてくれろ〳〵と、そりやアなんの事だ。

勘　その立てゝくんなさいと云ふ事は、コレ八よ、われから云はねえか。

八　ナニ、おれでなくとも解る事だ。松よ、てまへ云へ。

松　又おれに云へか。旦那、高が斯うでごんす。爰のお孃さんに、さるお侍ひが大の所望と云ふ奴よ。

八　ところで、その二本棒が、直には云ひ憎いとやらで、わつちらにその譯を云つてくれろと頼んだのだ。

勘　わしらも相應に顔を賣つて居るもんだから、云ひ出して嫌だと云はれちやア、天井だから、善くも惡くも、聞いてもらはにやならねえのサ。

松　サア、わしらが面を立て、爰の娘をくれて寄越すか。

八　但しおいらに天井見せるか。

勘　旦那、返事は

三人　どうしてくんなさる。

ト此うち、治兵衞、思ひ入れあつて

治兵　如何にも、もう彼れこれと時分の來た娘。どうで一度は嫁らさにやアならぬ、と云うて肝心の一生を任せる男が、通なやら不粹なやら、それが知れいでは相談になり憎い。

三人　そんなら、その先の人さへ云やア。

治兵　ハテ、なるならぬは緣づく。マア、相談はしても見る氣サ。

三人　アノ、そんならわしらが面を立て。

治兵　さうサ。

三人　こりやアちと話せるわい。

治兵　サア、その欲しがる人と云ふは。

三人　その先の人と云ふは。

傳藏　外でもない、身共だ。

ト合ひ方になり、傳藏、靜々と出て、眞中へドッサリ直る。

治兵　ヤア、お前は傳藏どの。

傳藏　一兩月は疎遠の治兵衞、無事で重疊。

三人　お侍ひ樣、お前に頼まれ最前から。

傳藏　殘らず樣子は聞いて居つた。大儀であつた。扣へて居やれ。

三人　アイ〳〵。

　ト皆々後へ扣へ居る。治兵衛、思ひ入れ。傳藏、こなしあつて

傳藏　治兵衛、其方事は主人のお家へお出入りの町人。然るに某、殿の内意を仰せ付けられ、去秋當所へ立越したるところ、金瘡の病再發に依り、當家に數日逗留のうち、娘お幾の艶色に迷ひ、妻にくれよと申せしかど、娘幾が病中でござるの、イヤ月が惡いの日が惡いのと、子供童を騙す如く、よくもこの傳藏を馬鹿に致したなア。某、直々に申しては、返答に困るであらうと思ひ、これなる若い衆どもを語らひ、幾を貰ひ受けさせしも、一旦望みかゝつた武士の意地。サア、治兵衛、娘お幾を妻にくれるか。嫌と云はゞ此方も一分別。善とも惡とも返答しやれ。ド、どうだ。

　トこなし。治兵衛、思ひ入れあつて

治兵　傳藏どの、元來あなた樣には、信田家に於てお歷々その御大身のあなた樣が、去秋殿樣の御用で、この江戸へお出でなされ、御病氣とあつて御逗留のうち、一僕召されたと申すでもなく、又お國元より御病氣見舞ひのお手紙一本參つた事もござりませぬ。これ以て合點のゆかぬと存じ居りましたところ、當夏熱海へ湯治に行くと仰しやつて、出て行かしやりましたは五月上旬、二十日經つても一月經つてもお歸りないは、こりやてつきり御全快なされて、直ぐにお國へお歸りなされたであらうと存じて居りましたところ、四ケ月振りで又今日、歸つてござらつしやれたは、未だ本國へは歸らつしやらぬと見えまする。その上、お前のその形を見さつしやりませ。悉皆追剝のお頭と云ひさうな、頭つきなら形恰好、なんの事はない、高麗藏が定九郎と云ふ注文。それで信田家の御大身と云はれますか。よし私しが得心して、娘を上げませうと申したとて、なんと娘が、女房になりますと云ひさうなものでござりますか。マア、とつくりと鏡と談合さつしやるがようござりまする。

　トこなし。傳藏、思ひ入れあつて

傳藏　治兵衛、傳藏がさんげさゝら、よく云つた、忝ない。藤島傳藏、禮を云ふワ。

　トきらりと刀を拔き放し、治兵衛が目先へ突きつける。治兵衛、こなし。傳藏、思ひ入れあつて

善にもせよ惡にもせよ、一旦舌三寸より切つて放したる傳藏が一言は武士の命。矢元へ歸らぬ。娘幾を是非貰ひ

切ると云ふ結納の生肴、再び鞘へ納まるやう、勘辨して
返答しやれ。

治兵　ハヽヽ、なんぼ素町人の治兵衞でも、お武家樣を相手にして、一年中渡世いたす私し。白刃が怖さに娘を上げませうとは、えゝ申すまい。

傳藏　すりや、一命を失つても。

治兵　ハテ、娘が一生を任す大事の夫。嫌な男が持たされませうか。人間僅か五十年、死に來たこの浮世。彼れこれと帳面を消しかゝつて居る私し。娘ゆゑならこの命、惜しいとは存じませぬ。サア、切るなりと突くなりと、勝手次第になされませ。

ト體を突付けこなし。傳藏も思ひ入れあつて、二三度刀を差しつける事よろしくあつて、刀をシヤンと鞘に納め、スツと奧へ行かうとする。治兵衞、鐺を取つて

傳藏どの、こりやどこへお出でなされますか。

傳藏　知れた事だワ。幾を連れ歸り、抱いて寢るワ。

治兵　娘幾を連れて歸らつしやる、内がござりまするか。

傳藏　ヤ、なんと。

治兵　云はねど知れた天竺浪人、女房のしがくより、身の置き所のしがくが肝心。申し、大小差して軒下には寢られませぬぞえ。

傳藏　ヤ。

治兵　マア、とつくりと思案をなされませ。

ト唄になり、思ひ入れあつて、奧へ入る。傳藏、殘り、キツと思ひ入れ。

勘　申し旦那、どうやら雲行きが

三人　變つて參りましたわえ。

ト傳藏、これに構はず、思ひ入れあつて

傳藏　いま彼奴が一言では、我が身の上を何もかも氣取つた樣子。なりや思案仕替へずばなるまいわえ。

ト手を組み、思案のこなし。この時、表の天水桶の蔭より、軍治、出かけ

軍治　傳藏さま、何かの樣子承りました。お前の身の上、本國へ訴人されては、むづかしうなりませう。マア、何よりは都鳥の香爐を。

傳藏　コリヤ、聲が高い。何事も某が一分別。最前十左衞門よりの書面と云ひ、是非當所に足は留められぬ。さりながら一工夫、枕を割らにやアならぬわえ。

トこの時、治兵衞、後より出かけ、ソツと窺ひ、聞いて居る。

軍治　マア、それよりは彼のお話しの、金瘡の妙藥、いま一種の血汐の工面、なされますが肝心でござりまする。
傳藏　如何にも、その良藥も調へる時節到來。先刻この家へ立歸りし岩次郎、巳の年月揃ひしある。如何にも致してこの血汐を取り、秘藥に合し、酒に交せて服すれば、忽ち治する金瘡の妙藥。
軍治　それこそ幸ひ。何ゆゑ手短かに刺し殺し、血汐をお取りなされませぬ。
傳藏　されば、刺し殺すはいと易けれど、年度揃ひし當人、おのれと覺悟を極めし上、死したる血汐でなけりや功能なしとある。それゆゑ心を碎き罷り在るが、その工風も某が胸にある。我が金瘡さへ全快いたさば、本國へ立歸り、由松どのを以て家督、首尾よく行かばわれとても、一かどの武士に取立てくれう程に、我が武運長久を祈るがよい。
三人　そりやア忝ない。して、わしらは。
傳藏　まだ頼みたい事がある。先づ今日の骨折り代。
　ト金の包みを投げ出す。
三人　こりやア有り難い
軍治　して、貴殿は。
傳藏　深更に及び、中仙道を罷り上る。軍治、其方はあの者どもを語らひ、この近邊に忍び居つて
　トまた囁き
心得たか。
軍治　合點でござりまする。
傳藏　必らずぬかるな。
三人　そんなら、わしらは。
傳藏　コリヤ。
　ト顏にて押へる。このキッカケ、唄になり、軍治、三人、連れ立ち向うへ入る。傳藏、殘り思ひ入れあつて
巳の年月日時揃ひしこの家の悴、幼な心に無念を抱き、立歸つたる物語り、そこへ付け込み事を計り、おのれと自滅さゝば、仙家の良藥得たるも同然。二年越しの金瘡も、今月今宵全快なすべき時節到來。首尾よく計り負ふせるまでは、例へ五年が十年でも、滅多にこの家は動かれぬわえ。
　トどつかりと二重の眞中に座す。この見得、誂らへの合ひ方、暮れ六ツの鐘にて、道具廻る。
本舞臺、三間の間、平舞臺、向う赤壁納戸口、襖、

押入れ、この前に古き机に位牌を直し、燒き物の筒にいろ〳〵花立てあり、好き所に虚無僧の天蓋尺八などかけ、本水流し、竈、釜直しあり、初めの下座口の切り戸に西になり、舞臺井戸を据ゑ、すべて前の世話場、裏店の體。爰に左市、着流しにて、本を讀んで居る。この見得、矢張り時の鐘、合ひ方にて、道具靜かに納まる。

左市　さても兄弟の人々は、更け行く夜半を待ち兼ねて、十郎云ひけるは、いざやこの隙に幼少より習ひし事を、文に書いて曾我へ參らせん、然るべしとて兄弟文を書きける、我れ五つや三つの年より父を討れにし事、忘るゝ隙なくて、七ツ九ツと申せしに、月の夜に出て雲井の雁を見て父を戀ひ

ト讀みさし、思ひ入れあつて

イカサマ、この曾我の兄弟は、三つや五つにて父を討たれ、さま〴〵の辛苦に無念の月日を送り、遂に敵祐經を討ち果せしとある。その時の喜びは、どのやうにあつたであらう。これを思へばこの身とても、父を討たれ、その仇敵を討たんものと、心を砕きし年月も、最早一歲。この頃花水橋に於て、家來大助、人手にかゝつて敢へない最期。これ正しく敵十左衞門が餘類の曲者。引ッ捕つて詮議と思ひの外、却つて右の腕に受けたる手疵。保養なさねば、まさかの時の用にも立たず。ハテ、なんとしたものであらうな。

ト思案する事あつて

イヤ〳〵、この上は氣を煩らうてはならぬ。この頃討たれし家來大助が、一七日のうちと云ひ、御燈火でも上げて、親人にお目にかゝらうか。

めりやす〽思ひきや、夢の浮世に見る夢か、浮世の夢に憂き事を、見るが浮世の慣ひにて。

トこの文句にて、左市、火打ち箱を出し、火を打ちにかゝり、右の腕の痛みにて、火の打ちつけぬこなし。この時、西の切り戸口より、與助、伊豫屋と記したる弓張りを灯し、後より、お幾、路次下駄を穿き、さし足にて出る。與助灯を隱し居る。お幾、左市が火の付かぬを見て、與助に囁く。與助、心得、前垂れをかむり、袖にて提灯を覆ひ、ツッと机の御燈火を灯し、また行燈を灯し、元の所へ戻る。左市、此うち、いろいろしても火の付かぬゆゑ、火打ちを捨て

何を云うても、この金瘡にて、火さへ打てる事ちやない。

なんぼう苦にせまいと思うても、とてもこれではまさかの
ト云ひながら、ちよつとこの時、御燈火の灯りしに心付き
ヤア、こりやいつの間にやら、御燈火が灯つてある。ハテ、どうした事であらう。
ト云ひながらこちらを向き、行燈を見て
こりや行燈も灯つてある。ハテ、不思議もあればあるものぢやなア。
ト思ひ入れあつて
さては親人の事、束の間も忘れざる孝心。天道我れを憐れみ給ひ、おのづと照らせし御燈火なるか。エヽ、有り難い。
トこなしあつて、位牌に向ひ
劍當院新涼大士。俗名浮島甚太夫さま、さぞ御無念にござりませう。追ッつけ敵十左衞門が首を取り、妄執を晴させませう。又二つには家來大助、冥途の奉公怠りなく、出離生死頓生菩提、南無阿彌陀佛々々々々々々。
ト回向あつて
さて、時に今日は、まだ一度も料具を供へず。どうぞ焚いて上げたいものぢや。
めりやす〽ありし昔は弓張りの、月越え日越え一歳を、數へて暮らす身の行くへ。
トこの文句にて、手桶を提げ、井戸の元へ來り、釣瓶にて水を汲みにかゝる。右の手叶はぬゆゑ、汲み上がらぬこなしあつて、釣瓶を捨て、こちらへ來て
水さへも汲まるゝ事ぢやない。エヽ、腹の立つ事ではある。
めりやす〽水の流れに比べて見れば、どちらが深い淺ましや、その日あしたの煙さへ、細き色音の竹の露。
ト左市、困りしこなし。これを見て、お幾、水汲みにかゝる。これも汲まれぬこなし。與助、いろ〳〵教ふるこなし。これにて、お幾、やう〳〵水を汲み上げ、與助、介錯して、手桶を好き所へ直し、ツッとこちらへ來て居る。左市これを知らず、よき所にて、手桶を見付け
ヤア、たつた今まで一雫も、水のなかつたこの桶に、なみなみと水のあるは。ムウ、この所へ店借りして、來たはやう〳〵と後の月。今日まで不思議はなかつたが、最前の燈火と云ひ、いま又この水の汲んであると云ひ、ハ

ハア、こりやこの裏に居るわえ。表は地主どの、裏方と云や此方一軒。兩隣りは地主の土藏、こりやいよ／＼狸めが居るに極まつたわえ。イヤ／＼、不自由なおれぢやに依つて、氣を利かして手傳うてくれるものを、狸めと云うては、大きに腹鼓を立てるであらう。こりや機嫌を取つて手傳うてもらふがよい。さうぢや／＼。イヤナニ、たぬどのや、今晩は段々とのお世話、忝ない。とてもの事に飯も炊いてもらひたいが、イヤ待てよ。肝心の米があつたか知らん。

ト壁にかけたる袋より、桶へ本米を明けて

あるぞ／＼。これも修行のお庇。新米やら古米やら、珍らしい御膳を差上げまする、とは云ふものゝ、水さへ汲まれぬこの腕で、とても米磨ぐ事はあるまい。イヤ／＼、こりや矢ツ張り明日、地主のおさんどのを頼んで、磨いてもらはう。時に、とんと打忘れて居た。昨夜は蚊で一目も寢なんだ。今のうちに紙帳を繕ろつて置かにや、また今宵も夜通しをせにやならぬ。さうぢや。

めりやす〽登り詰めては今更に、なんと心の置き所、なぜに浮世が夢ならば、仇し思ひの覺めぬものかは。

ト押入れより紙帳を出し、四隅へ吊り、飯粒にてつゞくりにかゝる。この文句のうち、お幾に與助襷をかけさせて水を汲んで渡す。お幾、米を磨ぎにかゝり、意氣地なきこなし。與助、いろ／＼敎へてさせる。よき程に釜の下を焚き付け、洗うた釜へ明け、お幾に水加減を敎へる。お幾よろしくあつて、よき程に、左市、お幾を見て

ヤア、あなたはお幾さまぢやござりませぬか。イヤ待てよ、お幾さんぢや、與助どのぢやと、思はして置いて、側へ寄つたら、とんだ一つ目で睨むのか。その手は喰はぬぞ。

ト與助、着物を頭へかむり

與助　モ、ンガア。

ト大きな聲で云ふ。

いく　アレ。

ト慟りして、ちやつと左市に獅嚙み付く。左市も慟りして

左市　モシ、お前、本當のお幾さんでござりますかえ。

いく　左市さん、何云はしやんすぞいなア。

左市　何云はしやんすぢやござりませぬ。最前から不思議な事だらけで、氣味が惡い最中、それでどうやらお前樣

る。も、たぬどのぢやあるまいかと、氣味が惡うござります

いく　エヽ、氣味の惡い事云はしやんすないなア。

與助　左市さん、その化け物の正體、最前からの不思議は、皆お孃さんでござりまする。

左市　エヽ、最前から火を灯したも、水汲んだも、皆あなたでござりますか。

いく　アイ、與助に敎へてもらうて、したのでござんすわいなア。

左市　ハヽア、それで讀めた。わたしは又、たぬどの、洒落おやと存じて居りましてござりまする。これは〳〵大事のお孃さんに、あられもない事させまして、旦那に知れましたら、大抵わたしが叱られる事ぢやござりませぬ。

いく　なんのいなア。わたしはお飯焚いたり、水汲んたりする事は、面白うござんすわいなア。

左市　イエ〳〵、なんぼう面白うても、重ねてはよしになされませ。

いく　そんなら、わたしのした事は、お前、お孃でござんすかえ。

左市　なんのマア、左樣ではござりませねど。

いく　イエ〳〵、大方お嬢なのでござりませう。さう云ふ事なら、昨夜さんに上げたもの、よもや見ては下さんすまいなア。

左市　昨夜の物とは、エヽ、これでござりましたか。

ト鼻紙の間より文を出して

お幾さん。段々のお志し、忘れは置かぬ、嬉しうござりますが、何やかやたんとお世話になり、旦那の手前、猥らな事がござりましては、どうも濟みませぬ。どうぞこの事ばかりは、御免なされて下さりませ。

ト文を戻す。

いく　そんなら、わたしがやうな者ぢやに依つて。

左市　左樣ではござりませぬが、私しの爲には、あなた樣は、あんまり結構過ぎて、釣合はぬ緣ぢやと申すのでござりまする。

いく　なんのマア、それでも常々父さんの云うての事には、めん〳〵の好いたお方があるなら、例へどこの誰れさんでも、勝手次第惚れいてゝ。

左市　アノ、父御が。

いく　アイ。

左市　それは結構な父御樣でござりますなア。

與助　お孃さん、其方の相談は出來兼ねるさうだが、此方の飯は、出來たぞ〱。

左市　それは御大儀。ドレ、佛樣へ供へませう。

いく　イエ〱、わたしが供へるわいなア。

ト與助、釜より飯を佛器に盛る。お幾、机の上へ供へる。

左市　これは有り難うござりまする。

與助　時にわしは、もう用が無いに依つて、歸りますぞえ。

ト思ひ入れあつて、押入れより、木綿蒲團と枕を出し、今一つ足らぬと云ふこなし。火打ち箱の炭を打明け、これに紙を當て、思ひ入れあつて、殘らず紙帳の內へ入れる。

ちとお片付けに致しませう。あちらへ入らつしやりませ。

いく　與助、何云やるぞいなう。

與助　何云ふぢやない。其方の相談は極まるから、左市さんお前も、ソレ、お孃さんではない、火打ち箱の枕を割らんせ。

ト常の合ひ方になり、元の切り戶口へ入る。左市、こなし。お幾、思ひ入れあつて

いく　申し左市さん、これ取つて置いて下さんせいなア。

ト最前の巾着を出す。左市、ちよつと手に取り

左市　こりや、金ではござりませぬか。

いく　何か急に金がいると、さんが話し、それで持つて來たのでござんすわいなア。

左市　忝なうござりまする。シタガ、斯樣なものを申し請けましては、猶更どうも濟みませぬ。

いく　そんなら、矢ッ張りわたしが申す事を。

左市　サア、今も申しまする通り、地主樣の娘御と、素性も知れぬ裏店の私し風情。

いく　その素性の知れぬあなたが、最前の御回向に、浮島甚太夫さまとはえ。

左市　すりや、親どもが俗名を。

いく　とつくりとお聞き申した上からは、噂に聞いた御子息、浮島甚七さまでござんせうがな。

トこれを聞いて、左市キッと思ひ入れ。

左市　成る程、お返事いたしませう。

いく　そんなら眞實。

左市　お志し、仇には致しませぬ。

いく　エヽ、嬉しうござりまする。

ト寄り添ふ。この時、切り戶の內にて

儀兵　お孃さん〳〵、お孃さんは、どこにござりまする。
　ト呼ぶ。兩人悑りして
左市　ありや、慥かに番頭どのゝ聲。
いく　また意地の惡い、呼びくさるは。
左市　モシ、爰へ來られては、お互ひに惡うござりまする。
いく　どうぞ仕樣はないかいなア。
左市　幸ひの紙帳の內。暫らくあの中へ。
いく　大事ないかえ。
左市　もう斯うなつたら、せうことがござりませぬ。サア
　サア、早う〳〵。
いく　アイ〳〵。
　ト嬉しさうにお幾、紙帳の內へ入らうとして
　左市さん、こりやどうして入るのでござんすぞいなア。
左市　ツイ入るのでござりまする。
いく　それでも、根ッから勝手が知れもせぬもの。
左市　これは又、なんの勝手が知れぬものでござりますか。
　ツイ入れて上げませう。
　ト左市、紙帳の中へ先に入り、お幾が手を取る。お幾、
　嬉しさうに共に入る。引返して儀兵衞、切り戸口より
　出て

儀兵　このお孃さんは、どこへござつた事ぢや知らん。こ
　りや、てつきり左市めが所へござつたに違ひねえ。
　ト內を見廻し
　こりや、左市めも居らぬ。ハテ業腹な。
　ト引返しさうにして、ちよつと思案し
　イヤ待て暫し。お娘が見えぬに、左市が居らぬと云ふは、
　これ思案の付け所だわえ。と云うてこの狹い內に隱れさ
　うな所もなし。ハテ面妖な。
　トあたりを見廻し
　ヤア〳〵、主も居らぬに、この家の內、俄かにカサ〳〵
　と、その音正しく紙を揉むにさも似たるは、ハテ心惡い
　事ぢやなア、
　ト此うち、件の紙帳を見附け
　ハヽア、これだな〳〵。
　トそろ〳〵と紙帳の側により內を窺ひ
　なんでも怪しいこの紙帳。
　ト引捲りにかゝろ。この時、與助、走り出て、儀兵衞
　を留めて
與助　番頭さん〳〵。急用ぢや。
　ト大きな聲にて云ふ。儀兵衞、悑りして

儀兵　何吐かしやアがる。急用どころか、大事が出來たわえ。
與助　それでも旦那が、月見の供物を飾れと云うてござる。
儀兵　それをおれが知つた事か。その位な事は、うぬしやアがれ。
與助　オツとよし。番頭さん、わしが飾つたら、團子も芋も跡は貰ふよ。
儀兵　エヽ、どうなりとしやアがれ。
與助　團子ばかりぢやアねえ。薄もおれが貰ふよ。
儀兵　勝手にしやアがれ。
與助　オツと占めたもんだ。
ト行かうとする。儀兵衞、フト花活けの金を思ひ出して與助を留め
儀兵　待て。團子は遣らうが、薄は遣らねえ。
與助　それでも今お前、勝手にしろと云つたではないか。
儀兵　サア、さうは云つたが、あの薄は遣らねえ。
與助　そんなら、お前、飾りに行きなせえ。
儀兵　ハテ、今は行かれぬと云ふに。
與助　そんなら、おれが供へて來ようか。
儀兵　ハテ、おれが供へるワ。
與助　そんなら、サア來なさえ。
儀兵　サア、それは。
與助　サア
儀兵　サア〳〵。
與助　エヽ、いま〳〵しい。
ト焦れて與助を毆り倒す。これをキツカケに、時の鐘にて、道具廻る。
本舞臺、九尺の二重屋體、西正面の廻り緣。上の方、一間の屋體、少し小高く、これも正面西の廻り緣、九尺舞臺より少し後へ飾り付け、世話襖、兩方屋體の間、三尺の橋をかけ、大名竹の植ゑ物。東西の落ち間、萩垣、いつもの所に切り戸口、下の方、九尺の屋體に丸行燈を灯し、岩次郎、袴、着流しにて、チツと俯向いて居る。傳藏、この後に立ち窺ひ居る。治兵衞、上の方の屋體の障子を明け、窺つて居る。この見得、誂らへの合ひ方にて道具納まる。
ト岩次郎、思ひ入れあて
岩次　かゝる時さこそ命の惜しかめ、兼ねて亡き身と思ひ

知りせば……我れ不肖の身を以て、一旦御大家に仕へると雖も、遂に若殿樣のお氣に違ひ、恥辱を受けて立歸りしは、この身ばかりか殿樣まで、人の誹りを受けさせる道理。殊に殿樣は、元の町人になつて、この跡式を納めよと、お慈みは厚けれども、此まゝ長らへ居るならば朋輩衆の噂にも、流石町人の子ぢや恥知らず、生き長らへる未練者、卑怯者と笑はれんも口惜しい。父樣のお詞背くは、不孝なれども、とても生きては居られぬ身の上。モウ〳〵、父樣、親に先立つ不孝の罪、お免しなされて下さりませ。とは云ひながら、死んだ後で、さぞ父樣のお嘆き、姉上樣も力なう思はつしやるであらう。命惜しいぢやなけれども、それを思へば、死にともない〳〵わいなう。

ト泣く。儀兵衛、思ひ入れ。この時、傳藏、後へ出かけ

傳藏　イヤ、生きて居ちやア武士が立つまい。

ト好き所へ出る。岩次郎、見て

岩次　あなたは薩島傳藏さま。

傳藏　岩次郎どの、こなた、殿より暇が出たか。

岩次　すりや私しが身の上を。

傳藏　詳しく承つた。ハテ氣の毒千萬。

岩次　理の當然とは申しながら、不吉者の名を取りし口惜しさ、御推量下さりませ。

傳藏　尤もでござる。道理でござる。某も先刻より、御親父に委細承り、御親子の胸中察し入り、思はず落涙いたしてござる。餘り笑止に存ずるゆゑ、某本國へ立歸る節、御同道仕り、再勤の首尾取繕ろつて進ぜたしとは存ずれども、由松君は信田家のお抑へ。一旦不吉者と仰せられし御一言は、汗の如く再び返らぬ一國の綸言。且はこの後、若殿に御不例でもあらば、いよ〳〵其許は不吉者の汚名、末代までも削られまい、と云つて武士を止め、町人となつて存命さつしやれば、事の仔細はなけれども、未練者の笑ひ誹り、これとても堪え忍んでは居られまい。彼の古人の名言にも、死ぬべき時に死せざれば、死にまさる恥ありとは、いま其許の身の上でござらう。こりや、どうござつても、死なしやれずば武士が立つまい。

ト理解を說いて云ふ。岩次郎、つく〴〵と覺悟極はめしこなしにて

岩次　傳藏さま、この家に於て相果てましても、父樣の御

難儀にはなりませぬかな。
傳藏　なんの〳〵、例へ又、難儀にならうとも、某がよきに計らひ進ぜるわサ。
岩次　エヽ、忝ない。左樣ならば何事も、よろしくお願ひ申しまする。
傳藏　氣遣ひあるな。後見苦しくなきやうに、介錯して進ぜませう。
岩次　然らばよろしく。
傳藏　サヽ、一刻も早く。
ト草笛入りの合ひ方になり、岩次郎、座を占め、肌を脫ぎかけ、切腹の用意よろしくある。治兵衛もよろしくこなし。傳藏、悠々と莨をのみ、空嘯いて居る。岩次郎、用意調ひ、思ひ入れあつて
岩次　思ひ廻せば武夫の、お馬先の討死をもなす事か。
傳藏　不慮の汚名にその身を果す、これも因緣。只この上は最期を淸う。
岩次　云ふにや及ぶ。
ト脇差を腹へ突ッ込む。治兵衛、こなし。傳藏ニツコリと笑ひながら
傳藏　オヽ、出かされた。健氣な切腹。遺言があらば心置きなく。
岩次　父樣、姉樣の事、萬事よろしく。
傳藏　承知いたした。
岩次　エヽ、忝ない。
ト云ひながら引き廻し、いろ〳〵苦しきこなし。傳藏、とくと見屆け
傳藏　笛を搔かつせえ。
トこれにて、岩次郎、笛を搔き、バッタリとこけろ。治兵衛、よろしくあつて、障子を締める。傳藏、笑を含みながら、死骸を後へ蹴返し、行燈をかき、疵口改め、臟腑を摑み出し、有り合ふ碁笥へ絞り込み、こなしあつて
年來尋ぬる巳の年揃ひし生血、忝ない。いま一味の良藥、酒を以て服すれば忽ち全快。ハレ、心地よやなア。
トこなし。時の鐘、鳴ると向うより、軍治、走り出て來り、戸口より內を窺ひ
軍治　傳藏さま。
傳藏　コリヤ。
ト押へ、行燈を吹き消す。軍治、內へ入る。小聲になり

軍治　して、首尾は。

傳藏　大極上々吉。望みの一藥手に入る上は、酒を整へ全快なさん。其方はこの品を持つて、この家を去り、神田邊にて、然るべき酒屋を見て、酒を調へ待つて居やれ。

軍治　心得ました。

ト此せりふのうち、治兵衞、中二階より、ソロ／＼降りて、兩人が眞中へ入り窺ふ。傳藏、これを知らず、懐中の紙入れより調合の一藥を出す。この時、最前の密書を落す。

傳藏　軍治、彼の一品に調合の秘藥、相添へ渡す。受取れ。

ト恭笥とも藥の包みを差出す。治兵衞、心得、鼻紙を折り、吹替へ、ソツと出す。軍治、これを受取る。治兵衞、傳藏が出す藥を中にて、ソツと受取る。

傳藏　軍治、受取つたか。

軍治　しつかり受取りました。

ト治兵衞、安堵して納戸口へ入る。

申し、まだ外に、云はねばならぬ大事がござりまする。

傳藏　大事とは。

軍治　サア、その大事とは。

トちよつと囁く。傳藏、ギツクリ。

傳藏　なんと云ふ。この家の裏に甚七が、店借り致して居ると云ふは。

軍治　最前の奴らが話し。年恰好から人相まで、ちつとも相違ござりませぬ。

ト傳藏、思ひ入れあつて

傳藏　親の敵は十左衞門と心得居れば、氣遣ふ事はなけれども、生け置いちやア心がゝり。次手に彼奴もぶッ放して……とは云へ肝心の利腕の金瘡。よい／＼。然らば身共は、その秘藥酒を調へ用ひて參らう。其うちに甚七が、實否をとつくりと相糺せ。

軍治　心得ました。

傳藏　全快次第立歸り、いよ／＼甚七に極まらば、たつた一討ち。

軍治　そんならこの品は。

傳藏　某、直ぐに持つて參らう。

ト軍治、また探り寄り

傳藏　サア、お受取りなされませ。

ト傳藏、取つて

傳藏　慥かに受取つた。必らず萬事ぬからぬやう。

軍治　ござりますか。

初演當時の

繪本番附

傳藏　さらばだ。

ト時の鐘、早三重にて、傳藏、件の碁笥持つて向うへ走り入る。軍治、思ひ入れあつて、表の格子の脇へ忍ぶ。と與より、治兵衞、手燭を灯し、ソッと出て、岩次郎が死骸を見、泣かうとして、あたりを窺ひ見る。この時、落せし密書を見附け、拾ひ上げ、懷中して、いま一つ碁笥を取つて、血汐を絞り込まんとする。下座にて、バタ〳〵人音するゆゑ、死骸を抱き、納戸へ入る。と直ぐに切り戸口より、儀兵衞、左市を引立て出る。後より、お幾、與助も付き添ひ出て來り

左市　コリヤ、番頭どの、なんとさつしやる。

儀兵　なんとは知れた事だワ。大事の〳〵お娘御を、うぬが内へ引込んで、なぜ居つた。イヤサ、この番頭さんに一應の挨拶なしに、なぜ初物を喰うたと云ふ事だワ。又そればかりぢやアねえ。われが懷から落したこの巾着、ズッシリ重いは、慥かに金、これ程金があるなら、勘定もひろがず、一摑みの米を貰うて、露命を繋ぐうぬが、大枚のこの金、持つて居やう筈がねえワ。これは盗んだ物だな。イヤサ、矢尻切りに歩きやアがるのだな。それだに依つて、泥坊の詮議をするのだワ。

左市　コレ〳〵、粗相云はつしやるな。その金はちと様子あつて。

儀兵　その様子と云ふは怪しい。

ト云ひ〳〵巾着より、金を出して

ヤア〳〵、こりやアなんだ。金は金だが、封の切れねえ士の小判だ。

トいろ〳〵振り廻し見せる。お幾、左市も悔りしていく

ほんに、その金は。

儀兵　封の切れねえ金であらうがな。

ト兩人に見せる。

左市　ほんにこりやア士の小判。

儀兵　似せ遣ひの左市め。この通り、うぬを番所へそびいて行つて詮議する。サア、うしやアがれ。

ト引立てにかゝる。お幾、いろ〳〵焦る。與助も中へ入り留める。儀兵衞、與助を蹴飛ばし、左市を引立てんとする。よき所へ、治兵衞、銚子杯を持ち出て

治兵　儀兵衞待て。

儀兵　でも左市めは、似せ金遣ひの大盗人ぢやに依つて。

治兵　イヤ、盗人ではない。

儀兵　とは又どうして。

治兵　例へ似せ金であらうが、士の金でも遣はぬうちは我が物。それを捉へて似せ金遣ひと、大仰に云ひなすは、あんまり機轉が利き過ぎる。

儀兵　ぢやと申して。

治兵　ハテ、待てと申すに。

儀兵　ヘイ。

ト抑へる。

治兵　左市どの、ちとこなさんに無心がある。

左市　アノ私しに。

治兵　如何にも。無心と云ふは外でもない。娘幾を女房に、持つてやつて下さるまいか。

左市　ヤ、なんと仰しやりまする。

治兵　定めて氣に入りますまいが、どうぞ緣を結んで下さるまいかと云ふ事。

ト於幾、思ひがけなく喜ぶこなし。儀兵衛、恟りする。與助、儀兵衛を見て、腹を抱へ笑ふこなし。

左市　成る程、有り難いお詞ではござれども、この事ばかりは。

治兵　なり憎いと云はつしやりまするか。

左市　イヤ、強ち嫌と申すではござりませねど。

トぐち〳〵云ふ。

與助　申し旦那え。左市さんの今の口振りでは、萬更でもござりますまい。

いく　それ〳〵、左市さんも得心なり、また父さんも得心なり、お二人ながら得心なら、わしらは疾から、ナウ與助。

與助　得心とも〳〵、得心に實が入り過ぎて、ひいわりと赤くなつて、大抵旨さうな南瓜ぢやアねえ。ナア番頭さん。

儀兵　大べら坊め。

與助　ハヽア、めでたうなりかゝつて居る胴中に、どこやらに腹を立てるべら坊がある。ナア、お孃さん。

いく　サイナウ、そんな奴らは一つも構ふ事はない。此方はめでたい。めでたい同志が、めでたい事をするが、よいぢやないかえ。ナア、左市さん。

左市　サア、私しもめでたい仲間に、漏れるもどうやら。

治兵　すりや、得心して下さるか。

左市　ハテマア、左樣な事さうにござりまする。

いく　ソレ、得心ぢやといなア〳〵。

ト無性に喜ぶ。儀兵衛、無性に腹立てる。

治兵　マア〱、それ聞いてわしも落ちついた。
　ト喜ぶこなし。儀兵衛、ツカ〱と出て、治兵衛が前へ直り
儀兵　モシ旦那、十七年振りで嵯峨の開帳を、珍らしがつて當る筈。神武この方、話しも聞かぬ奇妙稀代妙不思議珍事珍説新らしい新物聞きますわい。あらう事かあるまい事か、報謝米でその日を送る、あの左市を聟に取つても、大事ござりませぬか。
　ト猛りかけて云ふ。治兵衛、これも構はず、持つて出でたる杯と、飾りある月見の薄を眞中へ持つて出て、儀兵衛、これを見て大きに驚ろき、息を詰めて、花活けを見て居る。
治兵　善は急げぢや、得心の上は、先づ表向きは後へ廻して、内々の杯事。武藏の武藏を忘れなと、江戸中擧つて月に供へる、この薄は追ッつけ日を選み、表向きの取結びに、世間廣う夫婦の廣めをすると云ふ、武藏野の縁起を祝ふ假の島臺。サヽ、娘、呑みや〱。
　ト月に供へし神酒を注ぐ。お幾、一つ受けて呑み、杯を下に置く。
治兵　イザ聟どの、娘が杯、一つ呑んで下され。

左市　左樣ならば。
　ト杯を取上げる。治兵衛件の銚子を取つて
治兵　めでたい杯、いつはならずと、是非一つ。
　ト注ぐ。左市、何心なく呑み乾す。
千秋萬歳、めでたい〱。
儀兵　祝言が濟んだらあやかる爲、嶋臺は此方へ。
　ト花活けを取りにかゝる。與助、留めて
與助　番頭さん、こりやア何をするのだ。
儀兵　何するとは、この薄はおれが貰つて置くのだ。
與助　さうはならない。疾にわしが貰ふと云つたは、爰の事だワ。
儀兵　おきやアがれ。これを遣つて詰まるものか。
　ト取らうとする。與助、又取りにかゝる。双方引き合ひ、花活けをバッタリこかす。中より最前の小粒出る。
與助　こりや、中から金が出たワ。
儀兵　南無三それを。
　ト取りにかゝる。治兵衛、儀兵衛を突き廻し、手早く拾ひ上げ
治兵　こりやコレ小粒で二十兩。
儀兵　それを。

トかゝるを取つて押へる。與助、心得

與助　ソレ、繩。

ト細引を出す。治兵衛、ぐる〳〵巻きに縛り

治兵　此奴はまだ詮議がある。此まゝ土藏へぶち込んで置け。

與助　心得ました。

ト儀兵衛を酷く引立てる。

儀兵　アイタゝゝゝ、こりや又あんまり

與助　針の療治。

儀兵　おきやアがれ。

ト唄になり、與助、儀兵衛を引立て納戸口へ入る。治兵衛、切り戸を締め、思ひ入れあつて、左市を上座へ直し、羽織を着て、禮儀を改め、下へ下がる。左市、不思議なる思ひ入れ。

左市　イヤ〳〵、治兵衛どの、お娘御に添ひますれば、私しは聟、その舅のあなた樣が、何ゆゑに私しを

治兵　疎かにならぬと申すは、悴が大恩受けましたる、奥州信田家の御家中、浮島甚太夫さまの御子息、甚七郎さま。

左市　イヤ、全く以て私しは。

治兵　成る程、御大望ある御身なれば、迂濶にお明かしなされぬも御尤も。私しは當所に於て、信田のお家へお出入りの町人。折々御本國へも罷り下り、御親父樣にはお目にかゝり、あなたこそ御存知はござりますまいが、私しはよう存じて居りまする。ところに悴岩次郎、先達て若殿のお側小姓に召され居りましたるところ、昨年五月端午の折柄、身に覺えなき災難にて、既に死罪に遭ふべきところ、父御甚太夫さまのお情にて、命助かりしと悴が物語り。然るに甚太夫さまは、さる秋京都に於て闇討にお遭ひなされしとの事。さすれば必定あなた樣には、仇討の爲に御出國なされての御流浪。その御大望ある御身にて、肝心の利腕が叶はぬとの噂を聞き、何卒悴が御恩報じ、その金瘡の御全快させましたいばつかりに、お進め申した今宵の祝言。あなた樣の金瘡、正しく御本腹でござりませうがな。

左市　ナニ、拙者が金瘡本腹とは。

ト右の腕を少し働らかし、自由になるゆゑ、不思議なることなし。有り合ふ竹の花活けを拔打ちに切る。

誠に、計らず腕の自由になるは。

治兵　酒で用ゆる金瘡の妙藥。

左市　して、その妙藥は。
治兵　娘、岩次郎は死んだわやい。
　　ト ほろりと泣く。お幾、悄りして
いく　そりやマア、なんとしてまアござんすわいなア。
治兵　故郷へ歸りし恥辱を思ひ、武士も及ばぬ健氣の切腹。
いく　エヽ、それ程お前知つて居ながら、なぜ留めては下さんせなんだぞいなア。
治兵　ハテ、現在悴が腹切るのを、留めぬ心は彼の妙藥、巳の年度揃ひし男子の生血を以て用ゆる妙藥、これを一度服する時に、忽ち金瘡全快と、おのれが療治に傳藏が、悴を役に立てる所存。障子の蔭で窺へば、最期を勸むる切腹の催促、ヂッと堪えて聞いて居たも、あなた樣を本服させたいばつかり。案に違はず傳藏が、悴が五臟の血汐を絞り、祕藥を共に持たせやるを、首尾よく此方へ取り得しも、全くあなたの武運の强さ。藥になるとは知りもせず、腹切つて死したる悴。たつた一言出かしたと、褒めてやつて下さりませいなう。
　　ト 泣く。左市、淚を拂ひ、こなしあつて
左市　一度助けし親人の恩義を思ひ、死を以て恩を報ぜし岩次郎どのゝ義死。治兵衞どのゝ實義、なんとお禮を申さうやら、詞に盡させぬ御親子の志し。斯く金瘡治する上からは、一時も早く敵討の出立。
治兵　待つた、甚七どの。敵十左衞門が在所、慥かにそれと知つてござりまするか。
左市　イヤ、その儀は。
治兵　二世と結びし夫へ引手。ソレ、娘、早う。
　　ト 最前拾ひし一通を渡す。お幾、取つて
いく　わたしが引手のこの一品。
　　ト 出す。左市、取つて披き見て
左市　こりやコレ敵十左衞門、望月勘解由と變名なし、阿州の家中に有り付き、傳藏への知らせの密書。すりや傳藏は敵へ一味。併しながら、勝手知れざる阿州の城中。
治兵　その手引は卽ち娘、由緣を求め入り込ませ、實否を糺す貞女の一つ。
いく　父さん、わたしや早うその阿州とやらへ、奉公に行きたうござんすわいなア。
治兵　出かした娘。夫と一緒に發足の、路用は幸ひ、ソレ。
　　ト 件の金を渡す。
いく　嬉しうござんす。

トこの前より、軍治、表に立聞きして
軍治　様子は聞いた。甚七、われを。
ト切つてかゝる。左市、立廻つて、取つて押へ
左市　小癪な事を。
トまた切つてかゝる。立廻りのうち、向うより、傳藏、バタ／＼と走り出て、これもヂツと表に窺ふ。左市、軍治を引据ゑる
治兵　して、その者は。
左市　敵へ一味の片山軍治。
治兵　門出の血祭り。
左市　合點ぢや。
ト切り戸の外へ投げ出す。傳藏、心得。
傳藏　甚七觀念。
ト拔打ちに軍治を見事に切り倒す。
左市　正しく傳藏。
ト出ようとする。治兵衞、引廻して隔てる。
傳藏　南無三、うぬを。
ト切り入らんとする。治兵衞、手早く切り戸をピッシヤリ締め
治兵　危ない事の。

トこなし、皆々よろしく　ひやうし幕

大詰　阿波本國敵討の場

役名——藤島傳藏。浮島甚七郎。甚太夫妻、おるい。家來、大八。富岡玄蕃。岩城平馬。浦辻兵藏。岡崎文彌。奴、波平。同、磯平。同、岩平。同、仲平。伊豫屋娘、お幾。望月勘解由實ハ千原十左衞門。

本舞臺、三間の間、張り塀。正面に門を取りつけ、勘解由、上下、衣裳。玄蕃、上下、衣裳にて、兩人とも挾み箱に腰をかけ居る。波平、磯平、奴にて扣へ居る。沖平、岩平、同じく奴にて立ち、下の方に大八、着流し、一本差し。菖蒲革の侍ひ四人、これを取卷いて居る。時の太鼓にて幕明く。

奴皆　推しての願ひ、叶はぬぞ。
大八　私しが願ひ、お聞濟みなきうちは、爰一寸も動きはしませぬぞ。

波平　此奴が

皆々　慮外な奴の。

勘解　願ひとあれば、聞捨てにもなるまい。苦しうない、皆扣へて居い。

皆々　ハア。

玄蕃　何事か只管の願ひ。勘解由どの、聞き届けて遣はされたらようござらう。

勘解　拙者もさう存じたゆゑ、留めてござる。何願ひか、聞き届けて遣はさう。それへ出い。

大八　有り難うござりまする。

ト大八、おづ／＼出て、勘解由が向うへ蹲ばふ。勘解由、見て

勘解　ヤ、其方は浮島甚太夫が家來、大八ではないか。

大八　千原十左衞門さま、御機嫌ようお出で遊ばされますか。

玄蕃　さては貴殿、御存じの者でござるか。

勘解　左樣でござる。某先主に仕へましたる朋輩、浮島甚太夫の下部でござる。

玄蕃　ハテナ。

勘解　して、身共への願ひとは。

大八　外の儀でもござりませぬ。主人甚太夫、都紀の森にて横死仕りまして、その後は亂騷ぎ、皆散り／＼になりまして、私しは暇が出まして途方に暮れ、何方へなりと片附きたいと、江戸へ下り承りますれ……、主人の敵……日頃お堅くろしい十左衞門さま、都で出國なされてより、阿州の萩塚內膳正さまの御家中におなりなされて、只今にてはお名も變り、望月勘解由さまと申します由。どうぞお目にかゝりたく、はる／＼お館よりお下がりを見請けまして、御奉公が致したい念願。何卒お召使ひなされて下されませうならば、有り難うござりまする。

勘解　すりや、都を立退きし某を、所々方々と尋ね、某に奉公仕りたいと申すか。

大八　左樣でござりまする。

勘解　ハテ、變つた願ひぢやなア。

玄蕃　コレヤイ、その願ひばかりは、叶ふまいと思ふ。

大八　なんとお云ひなされまする。

玄蕃　勘解由どのには、殿へお暇を願ひ、阿波の國を出國おしやれば、家來どころか。それゆゑこの願ひは叶ふまいと云ふ事よ。

波平　お旦那の御意の通り、勘解由さまは、新參の身を以て、譯もないに暇の願ひ。殿は元より一家中、愛想づかし。暇の願ひも大方極つた。
磯平　望月の名跡も差上げて、元の本阿彌になるこの浪人。知らない事とは云ひながら、お暇をお願ひなさるゝその所へ
沖平　奉公がしたいとは、天徳寺冠つて川へ入るやうなものだ。
岩平　叶はぬ事と諦めて
沖平　早くどこぞへ
兩人　かッ走れ。
大八　成る程、仲間内とは云ひながら、御深切忝ないが、さうはしますまいっ
四人　そりやなぜ。
大八　京三界を經廻つて、阿波の國まで歩くのは、よい主取りをしたいからだワ。例へ浪人なされても、お一人ではお出でなされまい。そこが運づく。御出國なされても、どこまでもお慕ひ申す心サ。
波平　どう云へば斯う云ふとも、叶はぬ事サ。
皆々　キリ〳〵立ちやれな。

大八　なんだ。
　ト大八、キッと思ひ入れ。
勘解　抱へてくれう。
大八　エ。
勘解　餘人は格別、横死なしたる浮島が下部、出所が面白い。抱へてくれう。
大八　お抱へなされて下さりまするか。
勘解　如何にも。
大八　エヽ、有り難うござりまする。
玄蕃　勘解由どの、去年中より無祿で勤仕おしやり、まだ一ヶ年も經たぬうち、なぜ又お暇を願ひ召さるゝ。
勘解　某、浪人仕り、國々遍歴の志しゆゑ、阿州より讃州へ越えんと存ぜし折柄、大殿内膳正さまへお目見得いたし、一つ二つ閑談申し上げしところ、達て給仕つかまつれと、頻りに御催促もだし難く、一つの功を立てるまでは、無祿と此方より願ひを立て、勤めるは何時なりとお暇を願ふ心。それゆゑ今年まで、何の御用に立ちし事もなく、幸ひとのお暇願ひ。さればお暇を願ひし折柄、母の病死、今日忌明けゆゑ、百日振りにて殿へお目見得仕り、大殿の御意には、暇を願ひし其方なれば、申しつ

くる内意あり、この儀首尾よく勤めし上は、兎も角も願ひに任せんとの仰せ。承知仕りしと申し上げし上からは、出國の儀は來年でござらうやら、只今に成就いたさうやら、延引と存するゆゑ、暫らく足を留めずばなりますまい。

玄蕃　そんなら殿よりお暇も出ず、御浪人の願ひも叶はぬとな。

大八　そんなら下部めがお願ひは。

勘解　いよ／＼聞き屆けて遣はさう。わりや、しかと奉公いたすか。

大八　望んで參つた御主人なれば、御奉公いたしませいで。

波平　武家の奉公人は、何よりも柔術が口元。ちよつと手並を。

　ト云ふを玄蕃、留めて

玄蕃　コリヤ、波平、抱へようとあれば、最早勘解由どのの家來、麁相いたすな。扣へて居らう。

波平　ネイ。

勘解　玄蕃どのには途中のお出合ひ。下宅へござつて御酒一獻。

玄蕃　御馳走になりませうか。

勘解　新參者を長家へ連れ行け。

皆々　畏まりましてござりまする。

玄蕃　然らば勘解由どの。

勘解　先づ、ござりませう。

　ト唄になり、玄蕃、波平、磯平、侍ひ、門の内へ入る。大八、岩平、沖平、殘る。

大八　マア、これで落ちついた。これからは朋輩の事、お屋敷のお勝手をよく敎へて下され。

沖平　隨分敎へてやらう。併し、お屋敷の格式で、奴仲間の振舞ひがあるよ。

大八　そりやアいくら程いるか。

岩平　おらが朋輩八人の中へ、酒が一斗五升、豆腐が五丁、唐辛子が二升ばかりサ。

沖平　まだ出錢が五貫出るワ。

大八　それは廉い仲間入りだ。爰に錢が二百ある。

　ト出して

　マア、仲間入りの手付けに渡して置かう。

　ト岩平取つて

岩平　必らず後を忘れまいぞ。

大八　それを忘れてよいものか。時に、お屋敷に薩島傳藏と云ふ人が、逗留して居られますか。

沖平　なんと云ふか知らぬが、この頃逗留の客人があるよ。

岩平　慥かにあれは、京で朋輩でもあらう。

大八　そんなら、いよ〳〵。
ト思ひ入れ。

兩人　どうした。

大八　お長屋へ連れて行て下され。

兩人　サア、來やれ。
ト岩平、沖平、大八、花道へ入る。この道具ぶん廻す。

本舞臺、三間の間、離れ座敷。下の方、菊の花壇、飛び石、手水鉢。上の方、枝折り戸、誂らへの燈籠。爰に傳藏、浪人者の形、結構なる褥の上に、脇足にかゝり、見臺に歌書を乘せ、結構なる莨盆にて煙草のみ居る。文彌、兵藤、平馬、麻上下にて、銚子、結構なる蒔繪の膳を持ち、扣へ居る、琴唄にて道具とまる。

傳藏　花は盛りに月は隈なきをのみ見るものかは。たれこめて春の行くへ知らぬも猶哀れ深し。

平馬　麁菜ながら、夕御膳を召上がられませい。

傳藏　イヤ〳〵、構うて下さるな。日々の待遇、給仕は結局氣が詰まり申す。

文彌　主人勘解由、御殿へ上がられまして留守中。手拔きのないようにと、申しつけてござりまする。

兵藤　御大切なるお客人、麁略いたしては、却つて此方の御迷惑でござりまする。

傳藏　主勘解由どのには、少しの好誼あつて、當殿へ推擧せんと、わざ〳〵飛脚の到來ゆゑ、參つてござるが、未だ御前よりお召出しござらねば、心ならず逗留いたす。

平馬　御飯がお早うござりますなら

三人　御酒一獻召上がられませう。

傳藏　ハテしつこい。左樣然らばで酒が飲めるものか。却つて馳走ではなうて、結局氣が詰まる。心任せにする程に、次へ立ちやれ〳〵。

平馬　只今にても主人戻りましては、我れ〳〵が無禮のやうに

三人　お叱りを受けまする。

傳藏　その申し譯は身共が致す。早々行きやれ〳〵。

文彌　左樣ならば仰せに任せ

傳藏　後刻御意得ませう。

ト合ひ方になり、三人、奥へ入る。傳藏、あたりを見て

いつぞや糺の森で甚太夫と渡り合ひ、受け損じて左の手疵、人目を包み疵養生。巳の年揃ひし男子の生血に、秘藥を合せ服む時は、即時に癒る稀代の妙藥。年月揃ひし三好岩次郎に切腹させ、折角取り得し妙藥を、伊豫屋治兵衞に掏り替へられ、思ひがけない甚七が疵平癒。併し血汐が手に入りしゆゑ、斯く全癒するからは、猶豫はならぬ我が大望。一味同心の十左衞門、この阿州へ立越え、萩塚へありつき、招きに依つて、幸ひ内膳どのへ取入つて、信田の跡目は由松君と、宮本丹下と心を合せ、盜み取つたる都鳥の

ト懷中より出して

この香爐、これさへ此方に持つて居れば、信田の跡目は直ぐの事。浮島が敵討ち思ひも寄らず。我れ所持するを存じて居るは、この家の主十左衞門。同腹中とは云ひながら、大事は大事、我が身の罪科引請けて、無二の味方と思へども、香爐を所持するは危ないもの。この家に逗留するうち

ト傳藏、あたりを見て、庭の石燈籠を見て

この離れ座敷は我が居間同然。あの燈籠の火袋。それそれ。

ト傳藏、庭下駄を穿き、庭へ下り、火袋へ錦の袱紗に包みし香爐を隱し、よしと云ふ思ひ入れ。下座より玄蕃、先に波平、磯平、出て來り

玄蕃　傳藏どの、それにお居やつたか。

傳藏　ヤ、おてまへは。

玄蕃　お見知りないは御尤も。萩塚の用人富岡玄蕃、某事は宮本丹下と、伯父甥のよしみござれば、兼ねて其許の一味合體。

ト云ふを打消し

傳藏　コリヤ。して、あの者どもは。

玄蕃　氣遣ひあるな。二人の下部も同腹中でござる。

波平　ハツ、拙者事は玄蕃が草履取り、波平と申しまして、いつぞや都の騷動の折柄、萩塚のお袖判手に入れし樣子、宮本丹下さままで、お飛脚に參りし奴めでござります。

磯平　この磯平も、丹下さまの御家來。由松君のお跡目の事にて、蟄居なされしお民の方のお仰せには、一味なせし

千原十左衛門、阿州へ參り、望月勘解由と變名なし、萩塚の舘にあるからは、出國なせし蘆島傳藏、あの地へ招くは兼ねての約諾。

波平　磯平、波平、兩人ともに心を合せ、蔭ながら守護せよとの

兩人　お民の方の仰せつけでござりまする。

傳藏　心を合せしとは云ひながら、便りなき傳藏を思はれて、お民の方の心遣ひ。この成行きでは信田の跡目は覺束ない。

玄蕃　餘り心遣ひ致さるゝな、傳藏どの。この阿州へ足を留めらるゝ上からは、宮本丹下とは伯父甥のこの玄蕃。兼ねて萩塚のお袖判、盗み置きし上からは、金子調達思ひの儘。足利家へ取入らば、信田の跡目は由松君へ仰せつけらるゝは知れた事。その時こそは今の無念を昔語り。勘解由が方にござらずとも、外に思案がござらうがや。

波平　左樣々々。一味と見えても、底意知れざる望月勘解由。

磯平　この家になりともお出でなされては、あなたのお爲になりますまい。

傳藏　成る程、萩塚家へ推擧して、有りつかせんと度々の文通。誠と心得來て見れば、今日の明日のと時日を延ばすは、一物ある十左衛門。殊に甚太夫が家來と知つて、大八を召抱へ

磯平　この家に置くは危ないもの。

玄蕃　何かにつけて、心の知れない望月勘解由。いつその事に。

ト切つてしまへと云ふこなし。

傳藏　ムウ。

ト呑み込む。

玄蕃　敵の荷擔人。先づあの大八からおッ片附けろ。

兩人　畏まりました。

波平　して、主の勘解由は。

傳藏　某少しの計略あれば、手を濡らさずに今宵のうちに。

兩人　あなた樣が。

ト向う揚げ幕にて「旦那のお歸り」と呼ぶ。

傳藏　ナニ、勘解由が戻るとや。

ト傳藏、玄蕃に奥へ行けと云ふ思ひ入れ。波平、磯平へ目くばせする。三人頷く。唄になり、玄蕃は奥、波平、磯平、臆病口へ入る。花道より勘解由、羽織、衣

裳、大八、供をして出て來り、直ぐに舞臺へ來り

勘解　用事あらば呼ぶ程に、行け〳〵。

大八　ネイ。

ト大八、枝折り戸の內を見たき思ひ入れ。傳藏、燈籠に心を附けて見て居る。

勘解　早う行かぬか。

大八　ネイ〳〵。

ト大八、心を殘し、臆病口へ入る。勘解由、枝折り戸を明け、內へ入る。

傳藏　こりや、勘解由どの、いつの間に、

勘解　先程歸宅いたしてござるが。召仕ひの取極めにて私用繁く、今日は訪れも致さぬ、さぞ御退屈でござらう。秋の千種でも詠ぜられて、心を慰め召さるゝがようござる。

傳藏　誠に、いづくも同じ秋の夕暮れ、隱遁とは申せども、露に色ます菊の花壇、草でさへ日の惠み、雨露の情深ければ、同じ根分けも甲乙はある慣ひ、人の身は猶の事、同家中の千原、薩島、互ひに家出いたしてござれど、おてまへはこの阿州へござつて、無祿なれども一廉のお暮らし。この傳藏は浪人の、活計に迫るその折柄、萩塚內膳どのへ推擧あるとの、度々の文通、夜を日に繼いで參つたところが、云ひ分なしの馳走奔走、今更思へば江戸に居つて、麁食の方が遙かましであつたと、故鄕の空を眺めて居申した。

勘解　イヤモ、そりや御尤も。某事もおてまへに、お別れ申してこの阿州へ參り、萩塚どのゝ懇望にて、勤仕は致せども、御知行を受けませぬは、おてまへの兵術を申し立て、それを功に給仕いたさんと、殿へも先達て申し上げ、殊の外お喜びにて、直ぐにもお呼び出しあるべきところ、母の喪ゆゑ是非なく延引、今日久々にてお目見得の折柄、申し出しござれば、急に仰せつけられし內意の御諚、これさへ首尾よく致せば、早速お身の有りつきは請合ひ申す。暫らくは心置きなく、落ちついてござらしやるがよい。其許と手前の仲、心遣ひは、そりや隔てがあると申すもの。マア〳〵、遠慮は捨て、內同然に我まゝをお云やるがようござる。

ト兩人、下に居る。

無祿の內は殿より、お附け人ばかり召使ひ居れば、思ふやうにお世話もなり申さぬ。留守中粗略いたすなと申しつけ置くに、お構ひ申さぬと見えた。文彌、兵藤、それ

に居るか。

傳藏　イヤ／＼、最前より手拔きなき造作、却つて氣詰まりゆゑ、無理に奥へやり申した。捨て置かれい。其許と斯樣にお話し申すが、何より御馳走。殿へ御推擧の延引も、もしや變心もござらうかと、疑ひ申すは落人の慣ひ必らずお氣にさへられるな。

勘解　イヤモウ、誰れも浪人いたせば狐疑は有うち。古主信田氏太郎どの、お身持ち柔弱も、連歌殿造營の納借金の事も、存じの上にて歸參いたせしは、由松君を代りに立てんと、互ひの心が一致ゆゑ、何も彼も身に引請けて出國いたせし十左衞門、例へ他家へ住みませうが、變ずる所存は少しもござらぬ。紛失と申し立てし都鳥の香爐さへ、おてまへが隱し居らるゝならば、信田の跡目は叶はぬ道理、定めし香爐は御所持でござらうな。

傳藏　その都鳥の香爐は、なんでござる、浪人の身で持ち歩き、人目にかゝらば結局妨げと、さる人に預け置き申した。

勘解　アノ、都鳥の香爐を。

傳藏　如何にも。

勘解　まだ疑ひ召さるゝ其許の御所存、承るは此方の麁相。マア、香爐の事は打捨て、御酒でも參るがようござる。幸ひ爰に銚子杯。

ト勘解由、銚子、杯を取上げ

御前で御酒を頂戴いたしたれど、氣が張つて居れば、思ひの儘にも食べられず、先づ毒味して。

ト勘解由、手酌にて飲み

例への通り、我が家藥の金瘡、心遣ふ事がなうて、たべる酒は格別になり申す。さしませう。

ト傳藏へさす。

傳藏　先刻より數杯下されてござる。

勘解　然らば。

ト勘解由また飲んで

イヤ傳藏どの、いつぞや糺の森にて手疵負はれ、きつう御難儀と承りましたが、早速平癒いたしてござるか。

傳藏　聞かれい、妙藥もあればあるもの。巳の年の年月日時揃ひし、男子の生血を以て合はする妙藥、酒にて服めば忽ち癒ゆる大妙藥。

勘解　それがお手に入りましたか。

傳藏　類稀れなるその秘藥、伊豫屋治兵衛に盜まれてござるなれども、生血は澤山持ちしゆゑ、又ぞろ調合をし、

見らるゝ通りに癒えました。
勘解　ハテ、稀代の妙藥もあればあるものでござりまするな……イヤ、お押へをたべました。今度は否應云はれまい。
ト勘解由、杯をさす。
傳藏　イヤ、酒は御免なされい。
勘解　そんなら酒は。
傳磯　欲しうござらぬ。否でござる。
勘解　日頃御好物の御酒が否とあるは、どこぞ惡うはござらぬか。大方お心の結ぼれ。ドレ、ちつとお肩を。
ト勘解由、後へ廻り、傳藏が肩をひねりに出る。
傳藏　措かれい、勘解由どの。阿り諛らふお鬚の塵、心にもなき馳走たつぺい。都鳥の香爐を取戻さん手段であらうがな。
勘解　ハヽヽ、信田へ心を運ぶ某が、足利よりの納借金こもう致したと、身に引請けませうか。大殿のお部屋お民の方と、おてまへの仲、疾より存じ居る事なれば、歸參を幸ひ甚太夫と共々、詮議し拔いて國賊の、根を絶やすは明白なれど、日頃より腹惡しき浮島甚太夫、何卒越度あれかしと、思ふに幸ひおてまへの企て、一味同心の印に、甚太夫を手にかけしも、十左衞門と云ひ觸らし、愛妾の縁まで切つて、信義を盡す某を、疑ひ召さるゝ傳藏どの、近頃お情なう存ずる。
傳藏　さほど心を盡すおてまへが、甚太夫か下部大八を、何ゆゑ抱へ召された。
勘解　敵の末は根を絶つて葉を枯らす。行くへを求めても生け置かれぬ大八が、便り來りしは彼れが不運。荒立てては事の破れ、家來となれば無禮の手討ち、波風立てぬおてまへの爲サ。
傳藏　流石は千原十左衞門どの、心底見えた、忝なうござる。
勘解　愁ひを拂ふ玉帚の、氣の結ぼれた時は杯。サア〳〵一つ〳〵。
傳藏　最前より持ち越し酒、今に醒め申さぬ。
勘解　手前も殿の御前で、頂戴の氣詰まり酒、我まゝ酒に引き出して、殊の外たべ醉ひました。斯う云ふ時は薄茶でござる。コリヤ、茶を持てよ。
いく　畏まりました。
ト唄になり、奧よりお幾、衣裳、着流しにて、袱紗に樂の茶碗を載せ、持つて出て

ハイ、お茶あげませう。

ト差出す。傳藏、お幾を見て、恟りして

傳藏　ヤア、其方はお幾ではないか。

いく　傳藏さま、久しうござりまするな。

ト逃げようとする。

傳藏　待て〳〵。どうしてお主は爰へ來たぞ。

いく　御奉公に參じましてござんす。

傳藏　ハテ、奉公に。

いく　左樣でござりまする。

傳藏　ハテナア。

ト思ひ入れ。勘解由、合點のゆかぬこなし。

勘解　ムウ、そんなら傳藏どのはお近付きか。

傳藏　近付きの段ではござらぬ。江戸表で伊豫屋治兵衞が娘、おてまへも御存じの通り、同居いたし居つたゆゑ、存じて居る段ではござらぬが。

ト　お幾、思ひ入れ。

イヤ、岩次郎が姉とは違ひます。同町に居つたゆゑ、近付きは近付きでござるが、思ひがけないこの所で、不思議に廻り阿波の國まで、奉公に來ると云ふは、これも緣であらうが、後で案じる者が。

ト云ふをお幾、打消し

いく　エ、モシ、なんの事でござりますぞいなア。

傳藏　ナニ、左市が事を、勘解由どのには御存じない。知つて居るのは傳藏ばかり。いつその事に打明けて。

いく　アヽ、コレイナア。

傳藏　そんなら、云ひますまい〳〵。

ト傳藏、お幾が側へ寄り添ふ。勘解由、見て

勘解　ちとお心がほごれましたかな。

傳藏　いづくの果も女と云ふものは、愛嬌を持つたものでござる……イヤ〳〵、滅多な事は申されぬ。內證もない男世帶、腰元奉公でもござるまい……ハア、さては。

勘解　お恥かしながら。

傳藏　おてかけかな。

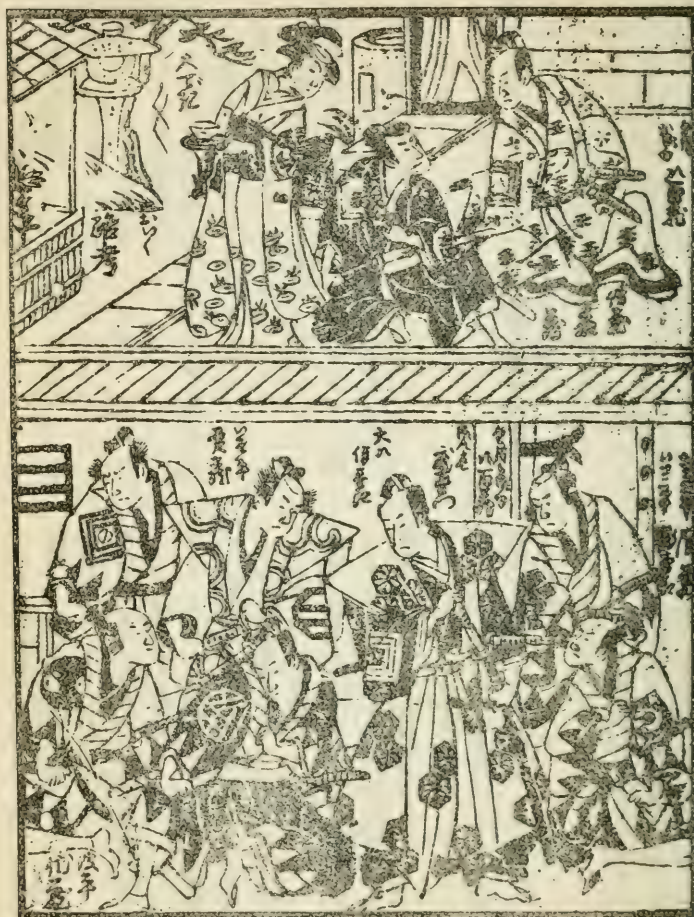
ト　お幾、なんのマアと云ふこなし。勘解由、これを押へ

勘解　ハヽヽヽ。

傳藏　そりやお樂しみでござるな、

ト　きつと云ふ。

勘解　イヤモウ、男鰥と申すものは、不自由な勝ち。侍ひどもはいくらあつても、床の上げ下ろしは猶の事、小袖

を疊むも不調法、どんと生男では參らぬもの、と申して
女房のない內へ、腰元は參らず、出入りの町人より、世
話いたしてくれました、てかけでござる。
いく　なんのマア、私しがてかけ
勘解　ハテ、何も傳藏どのに隱す事はない。てかけに違ひ
ないわサ。母の忌のうちは、寢所へ錠を卸ろし、目見得
いたした日より今日まで一所寢は致さぬ、ほんの名ばか
りのてかけでござる。
傳藏　それは近頃不用なもの。斯う致さう、今宵はこの傳
藏が、伽にお借り申さう。
勘解　外ならぬ其許の事、なんなりとも否とは申さぬが、
今日母の百ヶ日の忌明けなれば、今宵は御容赦。大抵御
推量下されい。
傳藏　さう云はるゝは尤も。自體このお幾は、彼れが親ど
もに打明けて貰ひ受け、約束破談になりしは、外に云ひ
交した
いく　アヽ、コレイナア、なんの事でござんすぞいな。
傳藏　譯を聞かれたら、おてまへの身の爲になりますま
い。
勘解　例へ譯がござらうとも、あつて過ぎた事なれば、只
今にては身が思ひ者。
傳藏　てかけなら傳藏が貰ひましたぞ。コレ〳〵、今宵は
おれと抱かれて寢ろ。
いく　そりやお前、あんまり御無體でござりまするぞいな
ア。
勘解　こりや否と云はれぬ大事な稀れ人。この勘解由に從
ふとも、傳藏どのに靡くとも、そりや其方の心にある事。
いく　どうマアなんと。
兩人　返事はなるまい。
いく　サア、その御返事は。
兩人　どうぢや。
ト　お幾、こなしあつて、花壇の菊の花を一本手折り、
合ひ方。
お二人さんへ御返事は、これぢやわいなア、
ト差出す。
勘解　菊の異名は百夜草、百夜通へと云ふ事か。
傳藏　千年の秋を廻り來つて、菊の杯する心か。
いく　イヽエイナア、昔話しで聞きやんした、こりや陸奥
の契り草。
勘解　陸奥の國に兄弟の者あり、國を離散のその時に、別

初演の繪番附

れを悲しみ、庭の白菊二つに分け
傳藏　契り草とて秘藏なし、戀しき時はこの菊を
いく　互ひにお眺めなさんせいなア。
兩人　すりや、この場の返事は。
いく　後程お目にかゝりませう。
ト唄になり、お幾、こなしあつて奧へ入る。傳藏、引續いて行かうとする。
勘解　こりや傳藏どの、どれへ行かるゝ。
傳藏　お幾が返事を聞き糺しますワ。
勘解　ハテ性急な。某とくと云ひ聞かせ、おてまへに隨はせまする。マア〱、爰でゆつくりとなされい。
ト引据ゑる。下の方にて
波平　うしやアがれ〱。
大八　どうさつしやる〱。
波平　どうも斯うも云ふ事はない。お旦那の前で詫び言をしやアがれ。
磯平　波平。小言云はずと、引摺つて行きやれ。
波平　合點だ。
ト引摺つて出て
兩人　下に居やアがれ。

ト兩人、大八を引据ゑる。
勘解　ヤイ〱、下部ども、稀れ人の庭先へ尾籠千萬、何事ぢや。
波平　これなる下部が、主人玄蕃が持ち鎗を、足下にかけましてござりまする。
磯平　不調法と咎めましたれど、麁相でないと云ひ募りますゆゑ、主人の目通りでお詫びさせませうと存しまして、これまで召連れましたのでごわります。
ト傳藏、大八を見て、悄り。
傳藏　ヤア、わりや甚太夫が下部大八だな。
大八　大磯以來傳藏さま、異な所でお目にかゝりました。
傳藏　すりや、最前噂のあつた
勘解　只今にては身が召仕でござる。
磯平　主人玄蕃は、あれへ
兩人　參りましてごわりまするな。
ト奧にて
玄蕃　聞いた〱、
ト奧より玄蕃、押取り刀にて來り
勘解由どの、お客人もろともにこれにござつたか。御酒を振舞はうと云はれたゆゑ、最前より奧にお待ち申して

居りました。
勘解　據なき私用ゆゑ、失禮の段は御免下されい。玄蕃どの、この客人は。
玄蕃　イヤ／＼、先刻お近付きになりました。コリヤヤイ、兩人、その下部は勘解由どのゝ下部でないか。
磯平　左様でごわがます。あなたのお持ち鎗を、足下にかけました無禮者。
波平　それゆゑ、これへ召連れまして
兩人　ごわりまする。
大八　ハヽヽヽ、お主達は目が見えないか。其方の麁相で足許へぶち返した持ち鎗を、飛び越える間もなく土足にかけたは、行き合ひの兩方怪我と云ふもの。なんでおれがあやまるものか。
磯平　此奴は新參の癖に、イケ情の剛い奴め。
波平　鎗を土足にかけたは無禮でござると、すてつぺんを大地にねぢ込み、詫び言を
兩人　しやアがれ。
大八　打返したのは其方の麁相、あやまつてよい筋なら、おぬし達あやまりやれ。この大八は、どこまでもあやまる事は否だ。

波平　否で濟まうか。
兩人　慮外な奴め。
玄蕃　兩人、其奴を遁がすな。
兩人　畏まりました。
　ト立ちかゝる。
　動きやアがるな。
大八　身に誤まりのない下郎、動けと云つても動きやアしない。ヂタバタ騷がつしやるな。
兩人　なにを。
　ト兩人、大八に詰め寄つて居る。
玄蕃　武士の格式を知らない無法者に、云つたところが馬の耳に風……勘解由どの、其許の御家來、無禮働らいたと申すを、知らぬ顏でお居やるは、出國召さるゝ料簡ゆゑ、朋輩の禮儀もお構ひなされぬと見えた。御知行取つて居らるゝなら、致しやうもござれど、無祿のおてまへゆゑ、申し分も扣へて居るぞ。
勘解　イヤ／＼、その御遠慮には及び申さぬ。今日まで無祿で勤仕いたしたは、存じ寄りござつての事でござる。然るに只今より知行を戴き、仕官いなすやうにと、殿より直の仰せゆゑ、異儀なくお請け致したる御内意の嚴命。

玄蕃　して、そのお役目は、なんでござる。
勘解　隠密の事ゆゑ、只今まで口外いたさぬが、大殿のお
袖判紛失。
玄蕃　ヤ、なんと。
ト玄蕃、傳藏と顔見合せ、思ひ入れ。
勘解　盗賊さへ相知れなば、袖判の行くへ知るゝは治定。
知行を請けてその盗賊、今日中に詮議なし、出國願ひは
追つての事と、打つて變つたる御難題。是非なく御知行
頂戴いたしてござる。
玄蕃　知行取るとあるからは、朋輩の無禮、草履で下郎を
打ちのめせ。
兩人　ハア……無禮の成敗、斯うしてくれるワ。
ト兩人かゝるを、大八、支へろ。
大八　われが打つうち、相手が遊んで居るものか。馬鹿つ
くすな。
ト兩人を突き飛ばし、刀に反りを打つて、身構へする。
これにて兩人扣へる。
傳藏　大八、われは打たれずばなるまい。
大八　なんと。
傳藏　其方が古主甚太夫、紀の森にて横死をなし、途方に
暮れてこの阿州へ、彷つて來たのは敵討か。
大八　全く持ちまして、
傳藏　例へ爰に敵があつても
ト傳藏、勘解由に目を附け
家來となりや主殺し。ナ、ソレ、家來の越度は主人の越
度、無禮いたせと勘解由どのが、云ひつけ召されたか。
大八　サア、その儀は。
傳藏　よもや云ひつけはさつしやるまい。汝が無禮は勘解
由どのゝ無禮になるぞよ。
大八　ムウ、
ト思ひ入れ、
傳藏　打つて〳〵、打ち据ゑろ。
兩人　心得ました。
ト立ちかゝり
カウ〳〵、
ト兩人打つて
波平　なんと大八、これ程打たれても、手も足も出されま
いが。サア、兩手が遊んで居るか。手出しはならない
か。イケ業晒しめ。
ト蹴飛ばす。

磯平　手向ひしないは腰抜け同然、新參者の手始めに、足腰も立つまい程、この磯平が擦つてやるべい。以後の見せしめ、斯うするワ。

ト磯平、踏み倒す。

波平　この波平が斯うするワ。

兩人　カウ〳〵〳〵〳〵。

ト兩人、存分に打ち据ゑる。

爰な大腰抜けめ。

ト大八、無念の思ひ入れにて、玄蕃の方をキッと見る。

玄蕃　なんだ、その面は。目に角をぶッ立て、ぎめがま。すりや、勘解由どのにとばしりがかゝる。いま無禮ひろいだ慮外者、どなた樣でも何奴でも、口出しはなるまいなるまい。とても の事に、うつけ者の印を附けてくれべい。

ト有り合ふ火入れを打ちつける。眉間へ當り、血汐流れる。大八、思ひ入れあつて

大八　こりや額を。

玄蕃　打つたが口惜しいか。

ト大八、ヂッとして居る。

兩人　ハ、、、、よい見せ物ぢや。

ト大八、ウンと思ひ入れ。

玄蕃　傳藏どの、見られい。不便な態でござらぬか。

傳藏　ヤイ大八、先主甚太夫が仇を報はんと、火の中へ入つても、ヂッと無念を堪ゆるは、どうでも敵が討ちたいか。

大八　こりや傳藏さまのお詞とも存じませぬ。青面を殘して我れなりと、お明かしなされしその所へ、ナニ大八が御奉公に參りませう。香爐戾らぬ其うちは、本望遂げぬ浮島に、愛想が盡きて二度の主取り。例へ一日半日でも、勘解由さまの御家來なれば、主人の無禮と承りましては、御主人が大切、そのみ無念とも存じませぬ。

傳藏　それを無念と思はずば、この傳藏が一療治。

ト傳藏、立ちかゝらうとする。勘解由、留める。

勘解　こりや、何召さるゝ。

傳藏　玄蕃どのへ無禮働らく下郎め、其許に成り代り、ぶッ放しますワ。

勘解　イヤ、それには及びませぬ。

傳藏　して、どうおしやる。

勘解　どうと申して、暇くれます。大八、其方には暇を遣はしたぞ。

大八　エヽ。
　ト大八、悄り
アノお暇を。
勘解　知れた事、玄蕃どのに無禮働らきし憎くい下郎め、申し譯には目通りに於て暇をやりまする。コリヤ、今よりしては主でない、家來でないぞ。勝手にそこ立つてうせう。
大八　如何にもお暇申し受けませう。
　ト大八、有り合ふ手拭にて、眉間の疵を卷き、鯉口を濕し、眞中へ出で
サア、これからは主なしの風來者、何奴此奴の容赦はないぞ。奴めら、そこへ出やァがれ。
波平　此奴、奴めらとは
兩人　なんの痴言。
大八　眉間へ受けた手疵の禮だ。
兩人　なんと。
大八　眉間の疵に十倍增し、どてッ腹へ風穴だぞ。兩人ともに覺悟をしろ。
　ト兩人、悄りして
兩人　モシ、お旦那、なんとしませう〳〵。

玄蕃　主なしの暴れ者、片附けてしまへ〳〵。
兩人　心得ました。
　ト兩人かゝるを、烈しき立廻り、トヾ下座へ逃げて入る。玄蕃、ツカ〳〵と寄るを、大八、目先へ拔き身を突きつける。
大八　ヂタバタお騷ぎなさると、咽喉笛へお見舞ひ申しまするぞ。
　ト立ちかゝる傳藏を勘解由、支へ
玄蕃　憎い下郎め、その廣言を。
　ト玄蕃、拔きかける。ちよつと立廻り。傳藏、立ちかゝる、勘解由、支へる。玄蕃、立廻りに懷中より狀を落す。大八、取上げ
大八　「富岡玄蕃どのへ、宮本丹下。」
玄蕃　それを。
　トかゝる玄蕃へ刀を差しつけ、密書を勘解由へ差出す。
　勘解由、拔き
勘解　「飛札を以つて啓上仕り候ふ、薩島氏御大望に一味同心の旨承知仕り候ふ、阿州萩塚の袖判
　ト傳藏、悄り、玄蕃、大八、立廻り。
密かに相盗み、掛け屋の金子送り下さるべき由、別條な

き印を見屆け、追つて密書を以てお知らせ申し上ぐべく候ふ、以上、月日、富岡玄蕃どの、宮本丹下。」

ト玄蕃、大八を突き退け、勘解由にかゝらうとする。この時下座より、文彌、平馬、兵藤、鐵砲を持つて走り出て、玄蕃を取卷く。

三人　動くな。

ト玄蕃、愕りして

玄蕃　こりやどうだ。

三人　大殿より御内意ありし、お袖判の盜賊、早速相解りましてござりまする。

勘解　さてはお身達は。

三人　兼ねての附き人。

文彌　勘解由どのにはお暇願ひ、一つの功さへ立てば、お聞濟みもあらんと、上意ありし詮議の役目。

平馬　夜中に隱れ出國あらんかと、附き添ひありし岩城平馬。

兵藤　浦辻兵藤。

文彌　岡崎文彌、我れ／＼見屆けし上、殿へ對して

三人　天晴れの御奉公。

玄蕃　いんにや、どんな證據が上がらうとも、この玄蕃は覺えないぞ。

勘解　ヤア、覺えないとは横道者、密書の宛名は富岡玄蕃、丹下とは伯父甥の仲、論は無益、御前へ連れ行き、糺明召されい。

三人　心得ました。

勘解　この上ともに、御前よろしく。

三人　承知いたした、立ちませい。

玄蕃　供をしろ、

ト三重になり、文彌、先に立ち、玄蕃、鐵砲にて取卷き、ヂリ／＼と揚げ幕へ入る。

大八　サア、これからは傳藏どの、宮本丹下はこなたの一味、いつぞや大磯鴫立澤の於て、道具屋善右衞門が賣らんと致せし、長光の刀は旦那の差し料、仔細ぞあらんと思ひしうち、大助が横死と云ひ、この家にござるは敵の荷擔人、香爐の在所は定めしおてまへ、尋常に白狀なされい。

傳藏　云はせて置けば存外なる下郎め、出國なしたは氏太郎どのゝ身持ち惰弱、三度諫めて身退くは臣下の慣ひ、大助がくたばつたは猶の事、紛失なせし香爐を、この傳藏が知るものか、白痴者め。

勘解　殊に甚太夫を手にかけしは某と、書面を殘し置いたる上からは、寶も取らば勝負は治定。かけ構ひなき客人へ、手出しすれば爲にならぬぞ。

大八　サ、敵は知れたあなたなれども、香爐は慥かに傳藏どのか。

ト駈け寄る。傳藏、拔きかける。勘解由、支へて、刀の尻にて、ちよつと當てる。大八、ウンと倒れる。

傳藏　こりや大八を。

勘解　口さがなきは下司の常。お袖判の盜賊知れし上は、これを功の貴殿の有りつき、相濟むまでは手出しはさゝぬ。

傳藏　でも。

ト立ちかゝるを留めて

勘解　ハテ、敵は知れたこの勘解由。斯やうな小事にお構ひなく、先づ／＼奧へ。

傳藏　命冥加な。

勘解　ハテ、斯うござらつしやりませう。

ト唄になり、勘解由、先に傳藏、奧へ入る。引き違へて下座よりお幾、茶臺を持つて出て來り

いく　今日も暮れ行く黃昏時。最前の返事は、マアどうしたらよからうぞ。思ひも寄らぬ傳藏さま、この家にお出でなさるゝとは、ほんに夢見たやうな事ぢやわいの。最前逢うたその時に、弟岩次郎が事云ひ出さんして、また思ひ出す涙の種。いとしい事をしたわいなア。父さんの云ひつけとは云ひながら、悲しい內を振り捨て、海山越えてこの阿波へ、手引きの爲の下女奉公と、思ひの外の勘解由さまが、てかけぢや程に、今宵は閨の伽せいと、退引きならぬ詞詰め。手引きするのは丁度よけれど、もしさう聞かしやんしたら、腹立てさんすであらうし、エエモウ、こちの人も德島に殘らんせずと、一つ所の此方へ奉公に來やんすりや、此やうな話しもなるのになア。こりやマア、どうしたらよからうぞ。

ト思案して

それ／＼、つい德島へ行て、こちの人に聞いて來う。それ／＼。

ト行きにかゝり、立戾り

行かうにも道は知れず、どうしたらよからうぞいの。

トお幾、バツタリと下に居る。大八、心附き、起き上がり

大八　おのれ傳藏。

ト大八、キッと云ふ。お幾、悧り

いく　オヽ怖。

ト大八、心附き

大八　さては奧へ同道なせしか。エヽコレ、案內は知れず……オヽ幸ひの女中、奧の內へ、案內賴む〳〵。

いく　そりやマア、なんの事ぢやぞいなう。

ト大八、お幾をよく〳〵見て

大八　お前は治兵衞さまのお娘御、お幾さまではござらぬか。

いく　アイ。イヽエ。

大八　樣子御存じないゆゑ、お隱しなさるは無理でない。あなたのお連合ひ甚七さまの御家來、大八でござります。

いく　エヽ。イエ〳〵、合點のゆかぬ奴さんぢやわいなア。

ト始終茶臺を、いろ〳〵癖にして居る。

大八　お疑ひは御尤も。行くへ知れざる敵の詮議。主從別れ〳〵、お旦那のてかけ、都にござつたおるいさまも、鳴立澤の佗び住ひ、旦那の差し料長光の刀、善右衞門が所持せしを、泊り合せし薩島傳藏、談合ながら善右衞門を自滅させ、行くへも知れぬは敵の荷擔人、後を追はへて花水橋、朋輩の大助が橫死は慥かに返り討。女房や妹は憂き勤め、敵の爲とは云ひながら、なんたる因果の身の上と、思ふ折から十左衞門は、望月勘解由と變名して當所に居る由、女房の知らせ、若旦那へ申さんと、江戶へ參つて樣子を聞けば、伊豫屋治兵衞どのゝ娘御と祝言なされ、我れに先立ち、德島へお出でと聞いて、おるいさまをお連れ、若旦那のお目にかゝり、承りますれば、女房お幾を手引きの爲、望月屋敷へ入れ置きしが、淺はかなるは女の常。汝は未だ知らぬを幸ひ、それとなしの樣子を糺せと、仰せを受けて參つて見れば、勘解由と云ふは十左衞門、てかけにしたいとあるこそ幸ひ、早う心にお隨ひなされませ。

いく　成る程、其方の云やるところは、道理のやうな事ぢやけれど、初手からてかけと云ふ事なら、なんのこの屋敷へ御奉公に來るものぞ。なんぼ手引きぢやと云うて、甚七さまより外の殿御に肌觸るゝ事は、こちや否々。どうぞてかけとやらにならずに、手引きするやうな思案して下さんせいなア。

大八　なんぼお若いとて、聞分けがない。あなたはこの家

へ手引きにお出でなされたではござりませぬか。
いく　さうぢやけれど、香爐の手に入らぬ内は、手引きしても詮ない事ぢやわいの。
大八　お氣遣ひなされまするな。香爐を隱せし人は、この大八が詮議いたす。閨の伽に事寄せて、手引きなさるゝ御所存ならば、身で身のならぬこの場の樣子。もし顯はれては猶豫はならぬ。ちつとも早くお旦那へ。さうだ。
ト行かうとする。お幾、留め
いく　待ちや〳〵。成る程、夫の爲になる事なら、十左衞門に身を任せ、手引きしようが、もし甚七さんが腹立ちやあるまいかや。
大八　なんの腹立どころか、お喜びでござりませう。何かに敏き望月勘解由、用心も女儀のお身では、解け易い敵の手引き。併し、迂濶に仕損じては、本望達せぬその上に、若旦那は一生埋れ木になりまするぞ。
いく　ようそりや合點して居るわいの。
大八　そのお心なら我れらも安堵。寶は慥かに傳藏。
ト立ちかゝるを、引き留め
いく　コレイナウ、寶詮議の日が暮れる。今宵過さぬ
ト囁く。

大八　すりや、御兩所を同道して。
いく　わしが知らせるそれまでは、必らず色にも出しやんすな。
大八　心得ました。お前樣は、ちつとも早う。
いく　お茶の通ひに事よせて、奥の樣子を。それ〳〵。
ト行きかゝる。大八、油斷を見すまし、石を拾ひ上げ
大八　エイ。
ト礫を打つ。お幾、持つたる茶臺にて、打ち落す。
いく　危ない事の。
大八　天晴れ手の内。
いく　ホヽヽヽ。こりや羽子の追ひ羽子で、平常手馴れた事ぢやわいの。
大八　習ふよりは馴れ易き、今宵一夜さ
いく　この家に止まり
大八　みわたし嫁子を遣り羽子板。
ト大八、鞘とも脇差拔いて、裾を拂ふ。お幾、ヒラリと飛び退く。
入込む心で
いく　武藝も少しは
大八　それでは安堵。

いく　わしが操も。
大八　モシ……おてかけのお幾さま。
いく　新参の奴どの。
大八　お前は奥へ。
いく　早う行て來やんせう。
　ト唄になり、お幾、思ひ入れあつて、奥へ入る。大八あと見送り
大八　伊豫屋の娘と思ひの外、驚ろき入つたるお幾さま。三つ子に習うて淺瀬の道。寳の詮議は後での事。先づ差當る敵の手引き。ちつとも早くお旦那へ。さうだ。
　ト行きにかゝる。最前より波平、磯平、出かゝり居て
磯平　大八動くな。
　ト兩人取卷く。
大八　誰れかと思へば先刻の奴等だな。
波平　お民の方の仰せを受け、この家を守る傳藏どのゝお附き人。
磯平　殊に敵の荷擔人と、跡方もなき僞はり言。聞き捨てられぬ磯平が、眉間の疵のさし汐時。
波平　なみ〳〵ならぬ波平が、はや手に合ひし向う疵、帆はかけさせない

兩人　覺悟しろ。
大八　所も阿波の鳴戸灘、疾に切れたる命綱。敵の船へ乘り合ひなら、共に錨を沈めるが、この場の血祭り、覺悟しろ。
兩人　ところを。
　ト立廻り
三人　ドッコイ。
　ト下座へ取り、三人、白囃子のやうなる賑やかなる立の鳴物になり、三人、面白き立廻りあつて、トゞ兩人を井戸の中へ切り込む。
大八　幸先もよし、時を延ばさず、ちつとも早くお旦那へ。さうだ。
　ト時の鐘にて大八、一散に花道へ入る。バタ〳〵にて、奥よりお幾、傳藏、出て來る。合ひ方。
傳藏　ヤイ〳〵、わりやアなぜ逃げるのだ。
いく　傳藏さん、どうぞ免して下さんせいなア。
傳藏　免せとは情ない。よく〳〵に思へばこそ、所の若い者まで頼んで貰ひ引き。熟談しないその上に、治兵衛にはあらを云はれ、左市と杯した上は、所詮叶はぬ我が戀と諦らめて、江戸を離れたこの阿波で、廻り逢ふとは深

い縁。色よい返事が聞きたいわい。

いく　せうどもないこのわしを、色を替へ品を替へて、さほどまで、思うて下さんすは嬉しいけれど

傳藏　左市に義理が立たぬと云ふか。

いく　エ。

傳藏　義理が立たざア、なぜてかけ奉公に來た。

いく　なんのわたしが、てかけとやらに。

傳藏　云ふなく\。左市と云ふは浮島甚太夫が忰甚七。この家の主望月勘解由、誠は信田の家中千原十左衞門、甚七が爲には正しく親の敵。ア、聞えた。さては手引きをして、討たさう爲に入込んだな。

いく　アヽモシ、なんのマアわたしが。

傳藏　手引きでないものが、男ばかりのこの屋敷へ、何しに來た。てかけならばどこまでも、勘解由に異議なく貰うて見せうか。あれ程深い甚七に、別れて來たは、問ふに及ばず敵の手引き。なんと違ひはあるまいが。

いく　モシ。

　トお幾、あたりを見て

さう御存じの上からは、何をお隱し申しませう。この家の主勘解由さんこそ、十左衞門さまと聞きしゆゑ、海山隔てゝこの阿波へ來やんしたは、治定を糺したその上に寶さへ戻るなら、手引きするのでござんすわいなア。

傳藏　そりやアさうありさうなもの。併し、手前のあづまへなく、寶の手に入るそれまでは、生死の知れない人の命。例へ寶が戻らずとも、眼前敵と知りながら、討たぬは第一舅へ不孝。手引きするまでもなく、閨房へ忍んで刺し殺せ。

いく　サア、わたしもさうは思へども、常に閨房は錠卸ろし、殊に女子の一人身で、どうマア敵が

傳藏　討たせてやらう。

いく　エ、なんとえ。

傳藏　討たせてやらうワ。女房になるか。

いく　サア、それはな。

傳藏　否なら敵の手引きだと、十左衞門へ打明けうか。

いく　モシ、必らずそれを云うて下さんすなえ。

傳藏　そんなら心に隨ふか。

いく　わたしが義理さへ立つ事ならば。

傳藏　ハテ、十左衞門さへ手にかければ、甚七へは義理立つ道理。

いく　そんなら本望遂げる上は。

傳藏　帶紐解いて抱かれて寢るか。
いく　アイナア。
傳藏　そりや噓であらう。
いく　なんの〳〵誓文。お前の女房にならうわいなア。
傳藏　いよ〳〵さう云ふ心なら、末は女夫の固めの印。
ト傳藏、鍵を投げてやる。お幾、取上げ
いく　この鍵は。
傳藏　それこそ勘解由が閨の鍵。
いく　これさへあれば日頃の本望。
傳藏　首尾ようこれで。
ト傳藏、刀を差出す。お幾、取つて
いく　ハツ。
ト押戴く。これをキッカケに、この道具ぶん廻す。元の幕明きの門になる。時の鐘にて、四ツの拍子木を打つ。ト花道よりおろい、白裝束、鉢卷にて、龕燈提灯を持ち、甚七、同じ形にて、龕燈を持つて、大八供して出て來り
大八　御兩所樣、あれが勘解由の屋敷でござりまする。
甚七　糺の森にて父上の橫死より、この年月の憂き艱難。
ろい　わたしとてもその通り、都にてお情受けし殿さんに、いつか敵が討ちたいと、思ひし念が屆いたやら、廻り逢うたる甚七さん。不思議に手に入る長光は、殿のお形見、敵の證據。
甚七　例へお尋戻らずとも、よも安穩で置くべきか。おるいさまもその通り、例へ夫は定めずとも、父の御敵の事なれば、矢ツ張り夫の敵討。腹はからねど甚七が母、必らず後れを取らるゝな。
ろい　嬉しうござんす、甚七さま。お幾さまの手引きにて
甚七　年來願ひし一期の本望。いそふれ大八。
大八　ヤレ、お急きなされますな。手引きあれば籠中の鳥。今宵はとても遁がれぬ敵。大八が居るからは、マア、嬉んでござりませう。
甚七　猶豫して遲れを取るな。
大八　暫らくお待ち下されい。
ト大八、兩人を忍ばせ、門を叩き
賴みます〳〵。
番人　何者だ〳〵。
ト門を叩く、内より
大八　御用人小山伴之丞より、望月勘解由さまへ公用の書

狀。直々に差上げたうござる。お頼み申す〳〵。

ト門を開き、番人出て

番人　伴之丞どのゝ御家來々々々、どれにござる。伴之丞どのゝ御家來々々々。

トうろ〳〵する所を大八、踏み倒し、半繩をかけ、猿轡をはめ、目くばせする。おろい甚七、門の内へ入る。大八、縄附きを引ッ立て入る。矢張り時の鐘、銅鑼にて、元の屋體になり、勘解由、上下にて、座して居る、雲上なる合ひ方になる。

勘解　直ぐに登城と思ひしが、秋の夜長もはや亥の上刻。多用の身には短かう覺える。大殿より仰せつけられし、紛失なせしお袖判を、富岡玄蕃が計らひと、盗賊直ちに顯はれて、今の主には功立てど、先主信田氏太郎さまへは、道立たざる不忠の臣。

ト最前よりおろい、甚七、お幾、大八、垣の内より窺ふ。

いつぞや糺の森にて、甚太夫を刺し殺し

ト甚七、駈け寄らうとするを、兩人支へる。

書面を殘し、敵と云ふは我れなりと、名乘るも計略のその一つ。紛失なせし都鳥の香爐、行くへ知れざる其うちは、信田の跡目は猶の事、敵討の勝負は叶はぬ。甚太夫が悴甚七、さぞ無念に思うてあらう。逐電なせし薩島傳藏を、當國へ呼び寄せしも、定めて香爐を隱し持つかと、それとはなしに詮議すれども、これぞと云ふ證據はなし、寶の詮議のその爲に、御判戻りしを功となし、出國願ひをせんと思へど、心がゝりは薩島傳藏。慥かに彼れが業ならん。それとはなしに寶の詮議。ハテ、どうがな。

ト思案する。兩の方欄間へ半月、絹張りの月を引き出す。勘解由、見て

時刻も亥中と云ひながら、いと物凄き月魄ぢやなア。

トこれにて、ちよつと影をする。薄ドロ〳〵にて光明輝く。ト日覆よりトヒョ〳〵にて、都鳥數多舞ひ下がる。勘解由、キッと見て

ハテ心得ぬ。燈籠に聲あつて、光明空へなびくと其まゝ、都鳥直ちに舞ひ下り、哀情の律に合はする。鷗はこれ陰鳥、二十日亥中の月の影、燈籠の月影と、影合體なして友を呼ぶ。日頃尋ぬる信田の重寶、いざ事問はん都鳥の香爐は、あの燈籠に秘めあるか。アラ〳〵、喜ばしやなア。

ト勘解由、庭へ飛び下り、燈籠の內より、錦の袋を取
出し、開き見て

さてこそ年頃心を盡せし、甚太夫と云ひ合せ、傳藏に一
味同心、阿波の國まで呼び寄せし、謀議にやす／＼手に
入りし都鳥の香爐。有り難やなア。

ト後へ甚七、お幾、おろい、大八、最前より出かゝり
居て

甚七　ナニ、香爐が
三人　手に入りしとや。
甚七　問ふに及ばず、父の死骸に書面を殘せし十左衞門どの。
大八　香爐手に入る上からは
ろい　名乘り合せて
四人　勝負／＼。
勘解　ヤレ聲高し、人や聞く。香爐手に入る上からは、今宵に限る我が一命。元の起りは薩島傳藏、信田の家督を横領せんず企みゆゑ、甚太夫と心を合せ、三千兩の納借金も、我がこもうと心にもなき一味同心、心を碎きし甲斐もなく、甚太夫を討ち捨てんと駈け出す傳藏、過ちさせじと駈けつけ見れば、はや甚太夫は必死の體。是非に及ばず止めの刀、討ち果せしは十左衞門と、書を殘し置きたるは、寶を無事に取らん爲。千々の心を碎いたわやい。
甚七　すりや、父を討ちしは傳藏でありしよなア。
勘解　甚太夫が差し料、長光の刀を奪ひ取つたが慥かな證據。
甚七　さうとは知らず、今まで狙ひし念晴れて
大八　誠の敵は薩島傳藏。
ろい　鳴立澤で逢うたれど、見逭がし置きしは今でも後悔。披露目はせねど夫の敵。
いく　わたしが爲にも舅の敵。
大八　主人の仇なり、香爐の盜賊。
甚七　一方ならぬ
三人　薩島傳藏。
勘解　コリヤ、聲が高い。

ト皆々思ひ入れ。時の鐘にて、道具ぶん廻す。

本舞臺、一面の庭の景色。傳藏、立ち身にて道具納
まる。

ト傳藏、舞臺へ下りて、あたりを窺ひ

傳藏　兼ねてお民の方と心を合せ、信田の家を横領せんと

思ふに幸ひ跡目の論議。我れは本國へ引き退き、足利の納借金も、氏太郎が業なりと、こもうなせしはまさかに用金、企みし事も水の泡。併し、都鳥の香爐の戻らぬ上へは、信田の跡目は思ひも寄らず。まだしも十左衞門は片腕と、招きを幸ひ遙々來た甲斐もなく、時日を延ばすは一物ある十左衞門。生け置いては謀議の妨げ。お幾を閨へ忍ばせしが、女の業には覺束ない。忍び寄つて只一討ち。

トあたりを見て

ソレ。

ト傳藏、下座へ行きにかゝる。甚七、お幾、ツカ〳〵と出て詰め寄る。傳藏、ヂリ〳〵と取つて返し、花道の方へ行きにかゝる。下よりおるい、大八、出て來る。四人、傳藏を中に詰め寄る。

誰れかと思へば浮島甚七、家來大八、おるい、お幾もろともに、この傳藏を、なんとするのだ。

甚七　なんとするとは横道者。いつぞや都糺の森にて、父を討つて立退きし薩島傳藏。

いく　舅の敵。

るい　夫の仇。

大八　主人の怨敵。

甚七　名乘り合せて

四人　勝負々々。

傳藏　ヤア、小ざかしき勝負呼はり。大望あるゆゑ世を忍ぶこの傳藏、甚太夫を手にかけしは我れなりと、書面を殘せし上からは、敵と云ふはこの家の主。傳藏は知らないぞ。

るい　知らぬとは云はれまい。夫の差し料長光の刀、賣らんと致せし善右衞門、自滅させたのみか、大助を討たしやんしたもこなたであらう。

四人　尋常に、名乘つた〳〵。

傳藏　敵と云ふは十左衞門、傳藏は知らないぞ。殊に紛失の香爐が戻らぬうちは、それも叶はぬ。名乘つて聞かす事はないわえ。

勘解　ヤア、待たれよ傳藏どの。いつまで隱し召さるゝぞ。これ見よ香爐は手に入つた。

ト勘解由、香爐を持つて出て來る。

傳藏　ナニ、香爐が手に入つたとは。

勘解　某とても兼ねての覺悟。香爐手に入る上からは、手段と云へど敵の片割れ、腹搔き切つて甚太夫へ手向ひの

云ひ譯。敵は讃島傳藏、家の寶戻りし上は、この世の本望、死出の道連れ、尋常に名乘つた〳〵。

傳藏　賴みに思ひし十左衞門が變心。なくて叶はぬ都鳥の香爐、戻りし上は是非に及ばぬ、敵と云ふは我れなりと名乘つたところが勝負はなるまい。

勘解　とは又なぜ。

傳藏　當所の殿へ屆けもなく、私しの敵討は、人殺しも同然。例へ本望遂げたりとも、氏太郎が越度となり、足利の權威にて、國郡を沒收され、主人の五器を提げさせるか。

勘解　差當る理の當然。

甚七　さは云へ敵を其まゝに。

傳藏　差置かれすば勝負をせうか。

皆々　サアそれは。

傳藏　主人の體へ繩を附けるか。

皆々　サアそれは。

皆々　サア〳〵〳〵。

傳藏　なんと勝負はなるまいが。

甚七　待ちに待つたる父の仇。

ろい　殿よりお許しなきうちは。

いく　討つ事は叶はぬか。

四人　エヽ、口惜しい。

　ト四人思ひ入れ。奥にて

玄蕃　敵討は御赦免なるぞ。待つた〳〵。

　ト玄蕃、高股立ちにて、免許狀を持ち出て來る。平馬、文彌、兵藤、高股立ちにて、走り出て來る。

大殿萩塚內膳正領地に於て、敵討いたせ　とある免許狀。

　ト差出す。傳藏、恟りして

傳藏　ヤア、わりやア袖判を盜み取つたる富岡玄蕃。

玄蕃　大殿の袖判を盜み取り、掛け屋に金子を送ると云ひしは、汝を阿波へ釣り寄せん十左衞門どのゝ計らひ。出國願はれけれども、一つの功の立たざるうちは、暇叶はぬお家の掟。袖判の盜賊と、露顯の上は御前へ出で、先づ斯う〳〵と申し上げ、殿にも勘解由が義心の程感ずるに餘りあり、袖判盜みし科も赦し、一つの功を立つたる勘解由。出國願ひも御許容あり、甚七が孝心にめで、當地に於て敵討相許すとの免許狀。

三人　受取り召されい。

　ト勘解由に渡す。勘解由、押戴き

十左　何から何まで、拔け目なき殿の御厚情。寶手に入るその上は、切腹とは兼ねての覺悟。それゆゑ御知行貪らず、碌々勤仕も仕らず、出國願ひはこの場に切腹。息あるうちに甚七が、不倶戴天の敵討、檢分のうちは御赦免下されませう……皆々喜べ。敵討は御赦免なるぞ。

甚七　ナニ、敵討

四人　御赦免とや。

いく　家の譽れ。

大八　主人の冥加。

皆々　有り難うござりまする。

傳藏　さては玄蕃も十左衞門もろとも、一味と見せしは都鳥の、香爐を取戻さん手段でありしよな。さうとは知らずこの阿波まで、よくも我れを釣り寄せたな。この場に於てくど〳〵云ふは未練の至り。勝負してくれうが、見ん事討つか。

皆々　云ふにや及ぶ。

傳藏　小癪な事を。

玄蕃　いづれも支度。

皆々　ハツ。

ト城の櫓の太鼓を打つ。チヨン〳〵にて、正面の道具を引く。打拔きの障子屋體、中庭奧座敷の景色。皆々支度にかゝる。平馬、文彌、兵藤、三方に茶碗四つ、水を汲み、眞中へ直す。菖蒲革の羽織の侍ひ四人、棒にて固め、傳藏、上の方。甚七、おろい、お幾、下へ住ふ。大八、手を振つて行きにかゝる。

平馬　助太刀は叶はぬぞ。

ト足輕、棒にて支へる。

大八　助太刀は叶ひませぬか。

侍四　扣へて居らう。

ト大八、無念のこなし。玄蕃、上の方、十左衞門、眞中へ床几にかゝる。懷中より都鳥の香爐を出して

勘解　手段とは云ひながら、甚太夫を刺し殺したる敵の片割れ。本意を見屆け、切腹は兼ねての覺悟。心を亂さず勝負しやれ。死後の思ひ出、これにて見物。

玄蕃　用意よくば、立合ひ召されい。

ト皆々平伏して、立ち上がり

傳藏　斯うなつちやア破れかぶれ。お民の方と心を合せ、氏太郎に放埒を勸め、足利の納借金三千兩のこもうなしたは、まさかの時の用金。お民の方に出生の男子を、信田の跡目と極めしを、甚太夫が口一つで、日頃の大望水

初演の繪番附

の泡、消えざるうちにと手にかけて、日頃心にかけし長光の刀、奪ひ取つて立退き、花水橋で大助を、返り討になしたのは、斯く云ふ薩島傳藏だワ。

皆々 さてこそ。

甚七 其方が討つて立退きし、浮島甚太夫が悴、同苗甚七郎。

いく 甚七が女房いく。

ろい 甚太夫が妾るい。形見に殘せしこの長光。

甚七 親の敵。

いく 舅の仇。

るい 夫の敵。

甚七 薩島傳藏。

三人 覺悟せい。

傳藏 並べて置いて返り討だぞ。

四人 イザ。

傳藏 イザ。

ト誂らへの鳴り物。四人、一度に茶碗を取上げ、水一口呑み、茶碗を投げるを合圖に、四人一度に、鎬を削る立廻りあつて、大八、度々差出る事あつて、トゞ女危ふくなるところを、勘解由、傳藏を一太刀切つて、返す刀に我が腹へ突き立てる。三人、傳藏を切り倒し

甚七 年來の仇敵。

三人 思ひ知つたか。

大八 出來た〳〵。

ト大八、喜ぶこなし。勘解由、苦しみながら

勘解 天晴れ手柄、出かした〳〵。敵討相濟む上は、今こそ渡す都鳥の香爐。

ト勘解由、香爐を差出す。

甚七 ヤア、十左衛門どの。

四人 早まつた御最期ぢやなア。

勘解 腹掻き切るは兼ねての覺悟。存念迷はず、先立つ甚太夫に廻り逢ひ、お家の榮えを喜ぶが、この身の上の佛果菩提。こま言云はずと、香爐受取り召されい。

ト甚七、寶取つて

甚七 この香爐ゆゑに憂き艱難。有り難やなア。

玄蕃 香爐戻る上からは、信田の跡目は氏太郎さま。

三人 さはさりながら。

勘解 めでたい〳〵。

ト岩平、沖平、出て

岩沖 香爐を渡せ。

ト甚七へかゝる。大八、拔打ちに、兩人が首を打ち落す。

勘解　いづれもさらば。先づ今日はこれぎり

トめでたく打出し。

敵討躵鷹的（終り）

解説

渥美清太郎

江戸にも昔から仇討狂言はあつたが、可成り原始的なもが多く、別に狂言の中へ一派を立てる程の特色は無かつた。それが、寛政の末から文化文政へかけて、急に發達したのは、看客の嗜好が變つた爲もあるが、一つは寛政度の松平定信の政治から、安永天明度に全盛を極めた洒落本や黄表紙が衰ろへ、これに代つて稗史や草双紙に、仇討物が勢力を得て來たので、その刺戟にも依る所が多い。その仇討狂言も文化へ入ると、立派に江戸らしい形式が定まつたが、初めのうちは、仇討狂言では本場である、京坂の狂言を輸入、もしくは改作して上演してゐた。本巻收錄の四篇のうち、二篇まで京坂種を選んだのは、その系統を示したかつたからである。

繪本合法衢（ゑほんがつぽふがつじ）

文化七年五月、市村座に書き卸した四世鶴屋南北の作でこの期の仇討狂言の代表作であるばかりでなく、數ある南北の脚本の中でも、正に傑作の部に屬する。

合邦ヶ辻の仇討は、明暦二年九月の出來事であつたが、それから五年目の萬治三年の春には、大坂の荒木與次兵衞座で、既にこの事實を脚色して上演した。仇討の場所は加賀の柳ヶ瀨であつたのを、芝居では攝州合邦ヶ辻に直した。勿論その筋を憚つたのである。その後、讀本なぞで傳はつたが、この「繪本合法衢」が脚色されて、この狂言に一定され、非常に流行つて、最近まで上演を絕たなかつた尤も大坂には「敵討譽兩街」といふ同材の狂言があつて、京坂では割合に數多く上演され、また後に江戸でも三世櫻田治助が「讐兩人合法」を作つたが、これは「敵討高砂松」即ち研辰の書き直しであつた。この敵討の狂言は、先づこの脚本が首位を占めてゐると云つても差支へなからう。

「繪本合法衢」の成功は、幸四郎三津五郎半四郎といふ、當時の三頭目が集まつた人氣の所爲もあらうが、中にも幸四郎が大學之助と太平次で、お家世話兩樣の惡黨振りを、思ひ切つて發揮したのが評判の的であつた。誠にこの二役は幸四郎が生涯の當り役で、家の藝と稱へられ、のち七代目團十郎が受けついで、その型通りに度々演じ、同じく好評を博したのであつた。

初演の役割は左の通り。

多賀太守俊行。高橋瀬左衞門（ニヤク助高屋高助）左枝大學之助。立場の太平次（ニヤク五世松本幸四郎）道具屋後家おりよ（尾上松緑）小島林平（七世市川團十郎）道具屋娘お龜（市川團之助）道具屋與兵衞。女非人。うんざりお松（ニヤク尾上松助）笹山官兵衞。百姓、佐五右衞門（ニヤク澤村四郎五郎）松田幸兵衞。升法印（ニヤク市川門三郎）中間、八内。番頭、傳三（ニヤク嵐新平）太平次、女房おみち（小佐川七藏）福屋仲居、お縫（澤村田之助）佐五右衞門女房、おわた。道具屋下女、おみよ（ニヤク岩井春之助）下部、曾平（花井才三郎）松浦玄蕃。非人、ごま八（ニヤク市川宗三郎）三度の與五七（松本小次郎）關口多九郎（坂東鶴十郎）彌十郎妻、皐月。孫七女房、お米（ニヤク五世岩井半四郎）問屋人足、與五郎 假名孫七。高橋彌十郎後ニ修行者合法（ニヤク三世坂東三津五郎）

男券盟立願（をとこむすびちかひのりふぐわん）

寛政十二年四月　市村座に上演したものであるが、實は寛政九年五月、大坂角の芝居で當りを取つた、近松徳三作の「淺草靈驗記」を、ソックリ借用した脚本だといつてもよろしい。この狂言は「細川の血達摩」の傳說を脚色したもので、尾上龜三郎が大川友右衞門、芳澤いろはが印南數馬を勤めて好評であつた。これを彦三郎にあて丶移し植えたものであるが、原作は傳說通りの人名であるのを、將軍の膝元だけに遠慮したものであらう、大高主殿、印南志津摩等と役名を改め、江戸向きの若干の改作を施し、且「吉原の場」を全然新作して据ゑたもので、この時の立作者は近松門喬であつた。傳說は脚色しても、友右衞門が猛火中に切腹して、ご御朱印を腹中に納めるといふ件は、江戸時代の劇場が昔から火を忌む慣習あつたが爲に除き、主殿は存命で志津摩の助太刀する筋に改め、御朱印の件は白坂甚平が返り討にあふ場に、その佛を見せたのみであつた。男色といふ筋が非常に珍らしくて、江戸でも非常な大當りを占めた。

江戸の初演の役割は左の通りであつた。

仁木主計頭。白坂文次。印南十内（ニヤク荻野伊三郎）白坂甚平（市川荒五郎）飛脚、赤介（嵐他藏）百姓、庄三（尾上榮三郎）細川勝次郎（市山七藏）傾城、夏菊。井筒屋おさよ。（ニヤク瀬川雄次郎）奴慾助。込山左司馬。（ニヤク松本國五郎）妹、おみつ。新造、岸の戸（ニヤク瀬川菊之助）治作女房、おさえ。多門正與方、重波（ニヤク小佐川常世）文次女房、おきの。新造、岸里（ニヤク瀬川菊三郎）井筒屋喜三郎（坂東鶴十郎）田

上丈八。頓兵衛女房、おつや。福田金兵衛（三ヤク澤村淀五郎）細川左衛門正恭。乳母、おきよ。綾瀬數右衛門（三ヤク尾上雷助）百姓、治作實ハ宮城傳助（嵐雛助）熊本勘解由（坂田熊十郎）道具屋萬七（嵐豐藏）横山外記。横山大藏（二ヤク嵐三八）印南志津摩。十内妻、おたみ後ニ傾城大岸（二ヤク三世瀬川菊之丞）大高主殿。仁木多門正（二ヤク坂東彦三郎）

この狂言は、嘉永元年に三世櫻田治助が增補し、高木折右衛門の筋を搦交ぜ「高木折右武實錄」として再演した。これには主殿が細川家の爲に琵琶湖で横山大藏を切つて逹磨の一軸を取返したが、捕手に取卷かれて逃げられず、切腹して一軸を腹中に納め、亡靈となつて主君に手渡しするといふ、傳說の俤を見せた筋があり、主殿が「望月」を舞ふ所作の場面もあり、大詰に高木折右衛門が志津摩の助太刀して仇を討たせるといふ連絡になつてゐた。主殿と折右衛門は四世中村歌右衛門が勤めたが、これが好評で明治まで殘つた。併し、講談から脚色した「蔦模樣血染御書」が出て、友右衛門が火中の死を見せ、左團次が當りを得てから、原作は忘れられてしまつた。

敵討相合袴

「繪本合法衢」と全く同じの、文化七年五月に、これは中村座に上演したもので、兩座で仇討狂言の競爭になり、此方は當時日の出の三世中村歌右衛門が、主役を勤めたのであつたが、評判は市村座の手に歸し、當座は不入であつた。併し、狂言の評判はよかつた。作者は二世瀬川如皐で院本の「彥山權現誓助劍」へ、宮本武勇傳を加へた、趣向は別に珍奇ではないが、主人公の京極内匠の慘忍無類の性格が、頗るよく書けてゐるので、その點が好評であつた。殊に「小栗栖の場」の幕切れで、八人殺した述懷の臺詞は大評判になり、後には龜山仇討にまで取入れられた程であつた。

初演の役割は左の通り。

京極内匠。杣斧右衛門（二ヤク三世中村歌右衛門）吉岡民右衛門。若黨、佐五平（二ヤク市川男女藏）木村鳴戸之助（市川傳藏）奴、紫藏（中村仲助）飾間彌生之助（中村七三郎）民右衛門娘お照（瀬川龜三郎）腰元、おりく。毛谷村のお六（二ヤク瀬川仙女）飾間大内藏太夫。貴田孫兵衛（二ヤク二世關三十郎）絹川彌三郎（市山七藏）水の谷辨庵（市川辨藏）門脇義平（澤村熊藏）鬼

柳屯(澤村治之助)閻雲左司馬(坂東大五郎)民右衛門女房お倉(市川おの江)斧右衛門母、おくま。鞠屋與六(ニヤク中村東藏)春風藤藏(市川鶯藏)月本妻、お才(市川瀧之助)一子峯松(瀬川多門)佐々木官次郎。轟傳五右衛門(ニヤク澤村源之助)民右衛門娘、お雪。一味齋娘、お園(ニヤク四世瀬川路考)吉岡一味齋。月本武者之助(ニヤク坂東彦三郎)

この狂言は再演を見ずに廢れてしまつた。

敵討躵鴈的（かたきうちねらひのがんまと）

寛政十二年十月九日、江戸淺草天王橋で仇討があつた。討つたのは仙臺の封内、名取郡根岸村の商人、善助の子の貫藏といふ者で、討たれたのは藏前の札差、伊勢屋幾次郎の手代喜兵衛で、貫藏は母の仇を報じたのであつた。これが評判になつたので、翌享和元年七月市村座で、この仇討を當込んで「敵討躵鴈的」を出し、伊豫屋治兵衛だの岩次郎だのお幾だの儀兵衛だのといふ役名を使つて暗示したのであるが、實はこれも創作ではなく、寛政三年三月、大坂中の芝居で、近松德三が「敵討非人の實錄」といふ「襤褸錦」の書替へを仕組んだ、この芝居が火事で燒けたので、北の新地の芝居へ其まゝ引越し、「敵討郡山染」と改めて興行した、その狂言を借りて來て、立作者の近松門喬が江戸向きに改作し、信田小太郎の世界に切りかへたに過ぎぬのである。併し、同じ門喬の同じ改作でも「盟立願」に比べると、餘程力を入れて筆を加へたらしく、台詞は勿論、筋も場割も、全く江戸の看客の趣味に向くやうに叮嚀に書き改めてある。興行は大當りで、殊に「伊豫屋」の場が大受けであつた。この場は後にいろ〳〵と改作された位である。

役割は左の通りであつた。

伊豫屋娘、お幾。古市の女郎、稲木 實ハ大八女房おさく。十左衛門妾、お君(三ヤク三世瀬川菊之丞)薩島傳藏。象潟喜三治(ニヤク市川高麗藏)浮島甚七郎。同下部、大助。(ニヤク三世坂東三津五郎)お民の方。中間、八助。伊豫屋手代、儀兵衛(三ヤク嵐冠十郎)船頭、次郎吉。奴、磯平(ニヤク市の川貫藏)揚屋才兵衛。百姓、作兵衛(ニヤク坂田時藏)紙子伊八(市川萬藏)醫者、橋場新養(澤村元右衛門)千草姫。弟子、おきよ(ニヤク嵐松之丞)伯母、おきよ。仲居、千野(ニヤク姉川菊八)三好岩次郎(七世市川團十郎)信田氏太郎(嵐新平)楠原兵馬。萬屋長右衛門(ニヤク松本國五郎)山伏、奇妙院(中島勘左衛門)片山軍藏。奴、波平(ニヤク嵐他藏)下人、與助。萩本要人(ニヤク市山七藏)宮本丹下

(坂田熊十郎)傾城、松島。伊勢屋娘、お糸。藝者、おまさ(三ヤク瀬川雄次郎)月岡中納言秋里卿。小道具屋善右衛門(二ヤク山科四郎十郎)傾城、竹川實ハ腰元お袖(瀬川菊之助)甚太夫妾、おるい(岩井喜代太郎)沸湯の嘉兵衞。宮岡玄蕃(二ヤク藤川武左衛門)浮島甚太夫。同下部、大八。十左衛門母、貢(三ヤク荻野伊三郎)千原十左衛門。伊豫屋治兵衞(二ヤク市川八百藏)

考證、カタリ、挿繪役割等に關して、例の通り山形の秋葉芳美氏から多大の御援助を受けた。玆に記して厚意を謝す。

解　説　(終り)

編纂校訂責任
渥美清太郎
鈴木　侃

日本戲曲全集・第廿卷
化政度仇討狂言篇・第十回配本

編纂者檢印

昭和四年四月五日印刷
昭和四年四月八日發行　（非賣品）

編纂者　渥美清太郎
發行者　和田利彦
印刷者　高見靖雄
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目八番地
發行所　春陽堂
電話日本橋 五一。六四一 三七八八
振替東京一六一七

製版所　新倉東文堂

（神田區・松下町・七番地・明治印刷株式會社印刷）